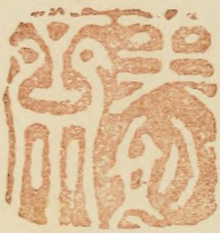
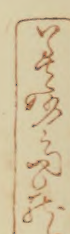

美妙斎










美妙斎

美妙選集

（下巻）

柳田泉
鹽田良平　編
小泉苳三



立命館出版部

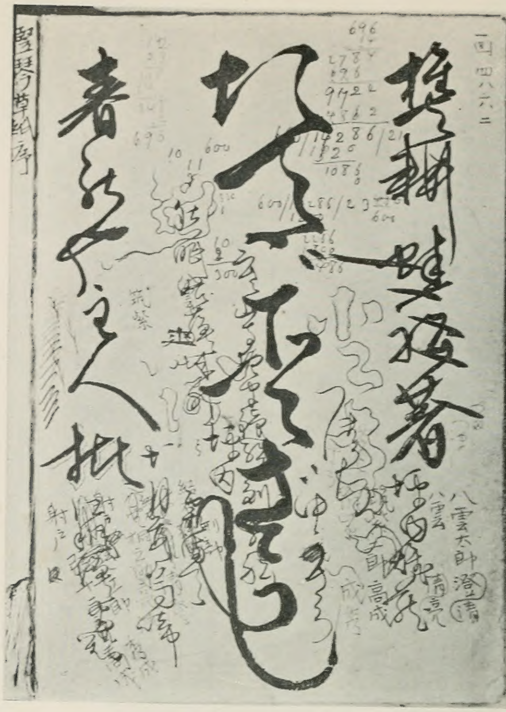
本文校訂　塩田良平　柳田泉
　　　　　小泉苳三　仲賢禮
校正責任　丹羽琢也



美妙（四歳）と父吉雄

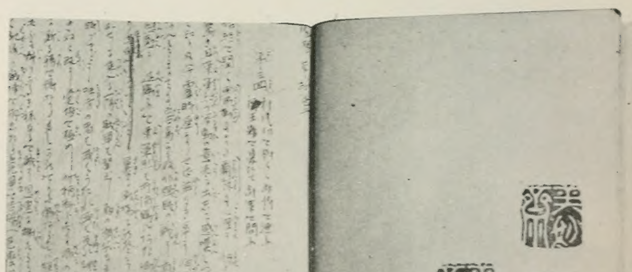


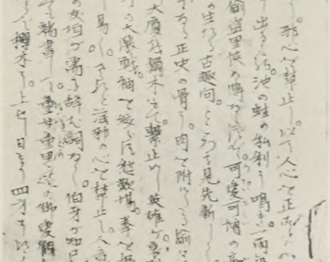
美妙（九歳）祖母



堅琴草紙

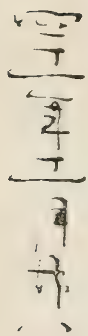
（立命館大學藏）

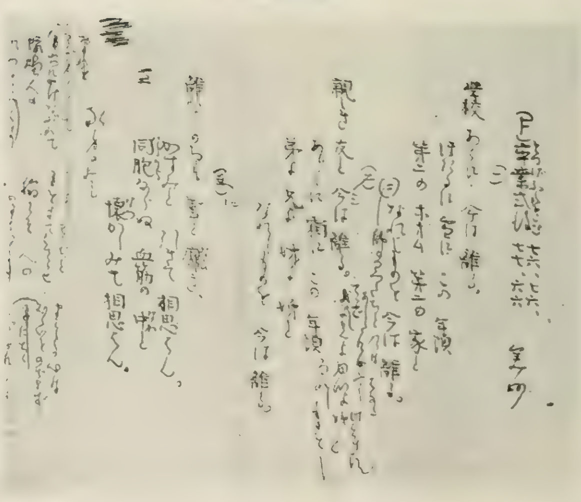




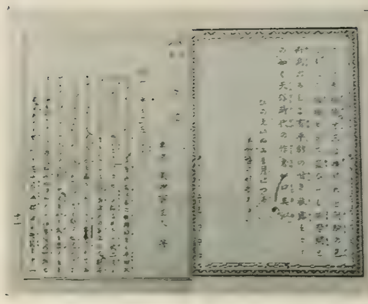


美妙（四十一歳）





美妙筆蹟（立命館大學藏）

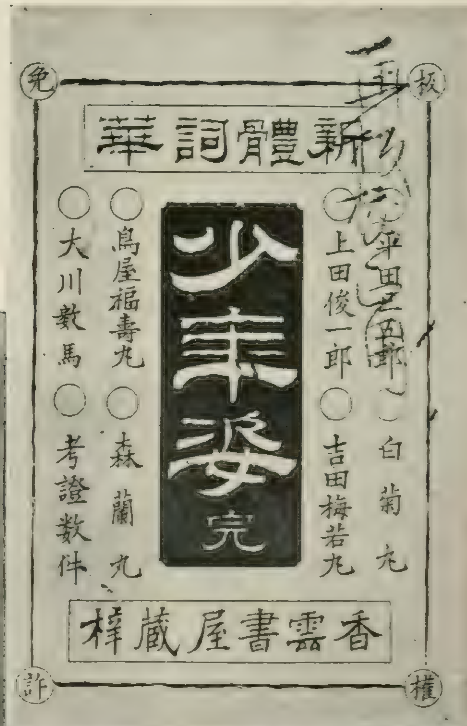


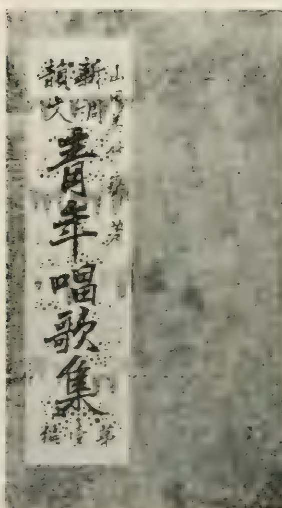
少年姿

（美妙再版校正用書入本 立命館大學藏）



稲舟





青年唱歌集

（美妙校訂書入本 立命館大學藏）

美妙選集

美妙選集總目次

上巻

下巻

美妙選集　下巻

初期小説集

韻文集

稻舟集

美妙小傳

鹽田良平

山田美妙は本名武太郎、南部藩士山田吉雄の長男である。慶應四年（後改元して明治元年となつた）七月八日神田柳町に生れた。

彼と時を同じうして生れた者に北村透谷、内田魯庵、德富蘆花があり、彼より、一歳早く世に出でたる者に夏目漱石正岡子規、幸田露伴、齋藤緑雨、尾崎紅葉、石橋思案等が居た。

三歳の時芝神明前に轉居し、八歳の時、市立烏森學校に入り、更に公立巴學校に轉校し、一方林鶴梁に漢學を學んだ。十二歳巴學校を卒學し、翌年第二中學校今の一中に入學した。この間英語、詩文をそれぞれ鮫島武之助、石川鴻齋に學んだが、十六歳の時病に冒されて遂に卒業試驗を受けず退學してしまつた。しかし、非常に學を好んだらしい。翌十七年には大學豫備門に入學した。間もなく家は再び神田に戻り、通學に便な坊城邸内に居住した。

元來美妙の父は武人であり、維新後地方警部長として各所に歴任した。且故あつて妻子と別居してゐたので、美妙の母はその養母（即ち美妙には義祖母）と共に住んだ。從つて幼より父の愛を知らずして育つたのであつた。

美妙の學業は別に拔群といふ程ではなかつたらしい。しかし、幼より文學を好み、漢籍より和文更に近世小說へと順次趣味がうつり、一方西洋文學なども讀みふけるやうになつた。中學時分には見様見眞似で小說なども作つて同級

生に見せたらしい。この文學熱が豫備門に入るに及んで始めて順當に燃え上つたと認められる。そして、その契期にかの硯友社の成立が大いに役立つたのであつた。

元來硯友社の中心人物尾崎紅葉と彼とは幼年時代からの友達で、德ちやん武ちやんと呼び合ふ仲であり、一時ではあるが、中學を同じうし、且豫備門で又顏があつたのであるから、氣心が知れてゐる所へ、互に小說好きであることが判つたので、忽ち意氣投合してしまつた。そこへ石橋思案、丸岡九華等の學友が加はつて、文學史上に殘るあの硯友社といふ文學結社が十八年に出來たのであつた。その中心は彼と紅葉とで、「我樂多文庫」といふ機關雜誌も最初はこの二人が各自の草稿を淸書して綴じた廻覽雜誌であつた。

此廻覽誌時代には彼は「樵耕蛙船」と號した。その處女作は「竪琴草紙」といつて英國のアルフレッド大王の傳記を書いたものであるが、此當時は馬琴の影響がかなりあつて宛然讀み本句調の作であり、且彼自身も二世馬琴と僭稱した事がある。

文學をやる事は父が反對であつたらしく、「我樂多文庫」も父に內密であつた。十九年「美少年錄」に似せて、韻文調の「新體詞華少年姿」を出した時始めて父に發見されたが、此時には父も諦らめたらしく、遂に默許したといふ。

此時分は未だ手習ひ時代であつた。紅葉と二人で三馬や一九の中本を讀み合ひ、或は名句を寫しては諳記してゐた。二人の仲は極く親密で紅葉は一時美妙の家へ寄寓したこともある。この紅葉と他に丸岡九華と三人で十九年八月「新體詞選」を發行した。當時旣に大學派の詩集として、外山、井上、矢田部の「新體詩抄」が出て居り、それに反抗しようとした野心的な氣持もあつたらしい。紅葉は遂に新體詩界に乘り出さなかつたが、美妙はこの「新體詞選」をきつかけにして韻文界にも乘り出して行つた。かの有名な「敵は幾萬ありとても總て烏合の衆なるぞ」(戰景大和魂)は、此集

に收められた美妙の作である。

この十九年は、彼にとつては多事ある歳であつた。十一月には大學豫備門を退學してしまつた。一說には敎師と爭つた結果だとあるが、實際は豫備門の課程が面倒くさゝなつたらしい。この月彼は「嘲戒小說天狗」を「我樂多文庫」に載せた。この頃は此雜誌は既に印刷に附せられてをり、多少一般的になつてゐたが、特にこの美妙の「小說天狗」に至つて文體上の改革運動の第一步として文學史上に意義を有して來た。（解題參照）今迄の文學靑年のてすさびから若干進步したものになつたのであつた。

翌年六月彼は文科大學に入學願を出して拒絕された。これは美妙としては豫備門の中途退學の主旨と矛盾してゐるが、一方未だ學問を全然棄て切れなかつた現れと見ることも出來る。紅葉や思案等は勿論無事に大學へ入學してゐる。

しかしながら、この大學へ入れなかつたといふ事は、結果としては美妙の態度を紅葉等よりも、もつと早く決定させ從つて美妙をして文壇乘出の積極的態度をとらしめたのであつた。當時既に文運は勃興し、「小說神髓」「書生氣質」は發行されてゐた。然るに文界の實際活動家は戯作者あがりか然らずんば所謂政論家であつた。靑年が野心的にならざるを得ない時であつた。

時に豫備門時代の級友に、神保磐次、中川小十郞氏があり、文化開發は先づ女性の向上にありとして、成美社を興し、雜誌「以良都女」を發行することになつた。雜誌「我樂多文庫」で美妙の文名を知つて居た彼等は、玆に於いて「以良都女」の小說欄を美妙の爲に開放して新小說を求めることになつた。言文一致の意圖を明白に表白した寫實的な小說「風琴調一節」といふのが、二十年七月、その創刊號より揭載された。「我樂多文庫」も「以良都女」も勿論讀者の範圍は狹かつたし、微々たる存在ではあつたが、しかし豫備門生徒とか大學生とかがやつてゐる雜誌といふ事は、當時と

しては識者の眼を惹くには充分であつた。かくして、言文一致小說家、文體革新家としての美妙は僚友尾崎紅葉より遙かにジャアナリスティクな存在となり世に認められ出した。有名な「武藏野」が「讀賣新聞」に連載され出したのは、之より間もなく十一月のことである。

この當時に至つて、彼は樵耕蛙船の雅號を棄て、二世馬琴も廢し、美妙齋美妙、或は美妙齋乃至單に美妙の號を用ゐるやうになつた。美妙の華やかな文壇的活躍はこの二十年後半から開け始めた。

翌年彼は中川小十郎氏を通じて山縣悌三郎氏と知り、その主宰する「學海指針」に彼の抱懷する主張「言文一致論概略」を書き、理論家としての一面を現し、更に反言文一致論者と應酬した。この年、「我樂多文庫」も一大改良が行はれ、體裁內容も擴張され、一般に發賣されるやうになつた。美妙も勿論執筆して活氣づいた雜誌になつた。しかし、美妙の執筆は永くは續かなかつた。文壇の流行兒たらんとしつゝある彼には、この搖籃雜誌以外に餘りにも多くの舞臺が待ち構へてゐた。自然彼は稽古場を看却しがちになり、「文庫」への執筆はとだえ勝ちになつた。殊に、十月「以良都女」の同人が關係してゐた金港堂が小說雜誌「都の花」を發刊し、美妙がその主筆に相當する位置を與へられ、毎號執筆するやうになつてから、彼の「文庫」への休稿は益〻甚しく、遂にはそれが紅葉の感情を惡化させるやうになつてしまつた。竹馬の友であつた紅葉との感情の疎隔は、もとより右のみが原因ではなく、例へばさきに述べた美妙の義祖母が非常に勝氣で美妙の進退を束縛したらしい。どちらかと謂へば戲作者風の所のある紅葉などを餘り好かなかつたらしい。時には紅葉に毒舌などを浴せもした。從つて、紅葉も彼の家には餘り行かなくなつた。元來出不精の美妙は中坂の硯友社にも訪れる事も尠いし、自然さうした狀態が二人の氣持をちぐはぐにさせたのであらう。殊に紅葉から見れば一種の競爭者であるだけに、餘計に相手の行動に神經質ならざるを得ないのであらう。美妙の方でも自然硯

友社と遠のき氣不味くなり、紅葉も何か不滿を感じつゝ、さしもの仲好しも遂に袂を分つてしまつた。

しかし、當時文壇の新駒屋といはれさす手ひく手數多美妙にとつては、舊友と白眼視し合ふといふ事も、忙しさと得意さとの爲にさして悲劇とは感じられなかつたのであらう。

「夏木立」を出版し、「都の花」に「花草」を連載し、翌二十二年一月雜誌「國民之友」の新年附錄に「胡蝶」を發表するに及んで、山田美妙の名は當時一流の大家春の屋、竹の屋すら壓倒するに至つた。そして、この頃は經濟的にも惠まれ神田平永町に新築家屋に移り住んだ。是は父が別居してゐる妻卽ち美妙の母の爲に買ひ與へた家であるが、勿論美妙もそれに足し前をしてゐる。

「以良都女」も在來は婦人のあらゆる文化的方面への進出を問題とした雜誌であつたが、賣行の面白からざる爲、美妙が總て引受けて、編輯事務所を自家にうつし、純粹の婦人文藝雜誌に改めた。

美妙の名が喧傳されると共に、その文章は美妙調として有名になつた。一種の臭味のある文章ではあるが、言文一致體として二葉亭のそれと共に文體史上忘るべからざる功績を殘してゐる。殊に、書きだしの一字さげ、コムマ、ピリオドの一劃あけ、各種の記號の用ゐ方、その中には必ずしも美妙の創意ならざるものもあるが、主として彼によつて擴められ、現在までその形式を存してゐるのである。

又、小說の構想上にも彼は在來の小說技巧を破り、めでたし／＼式の勸懲讀み本式結末を排して寫實の作風を築き上げた。殊に、悲劇小說は彼の先鞭といつてよい。紅葉の「二人比丘尼色懺悔」が「淚を主眼とす」と卷頭にうたつてゐるが、この悲劇的構想は、既に歷史小說の形式に於いて美妙の「武藏野」が踏んでゐるのである。

美妙の小說は結局馬琴風のモラルから一生拔けきらなかつたのであるが、美妙の初期の小說にはこの反馬琴的な意

圖が働いてゐた點で意義があつた。美妙の後期の作品が、量も多く力作も多いのに拘らず、文學史的意義が少いのはこの反馬琴的な意圖が次第に薄れて、著しく封建的なモラルトオンが滲み出した、卽ち嘗て排撃した馬琴にまで後退したからであつた。

しかし、それは後の問題として、文體と構想とに一革新を與へた彼は一方韻文界にも手を染め、「以良都女」を開放して、讀者より新詩體を募集し、自身でも、本誌、「國民之友」其他新聞雜誌に寄稿發表し、是を詩と呼ぶを不當とし自ら唱歌と名附け、時には自作に音譜などを附して發表したりした。後、彼の作及「以良都女」所載の同人作を集めて「靑年唱歌集」二編を發刊してゐる。

彼はその言文一致說から更に文法論に旋廻して、日本俗語文法論を發表し、或は日本韻文論を發表し、學者としての片鱗も示してゐる。殊に、その方面の優れた業績は二十五年から二十六年へかけての「日本大辭書」十卷である。是は單語の音調を規定した點に於いて國語學史上注目すべき研究であり、當時小說、詩、戲曲等あらゆる方面に活躍しながら、その餘力を以てかゝる尨大なる著述を僅か二十五六歲の白面靑年が成しとげたことは、現在から見ても實に驚嘆に價するばかりである。

しかしながら、結局かくの如く各方面へ勢力を分散させた事は、天才のよくする處とはいへ、遂に結果からいへば總てが未完成で放置されたといふ事である。

最も華々しく打ち出た小說界に於いて、二十二年「いちご姬」、二十三年「敎師三昧」「白玉蘭」等では、佳評を得たが他には未完物續出し、內容的には革新的意氣薄れて、マンネリズムに陷り、次第にスラムプ狀態となり、二十三年には「都の花」の主幹位置を去り、二十四年には「以良都女」を廢刊し、陣門次第に寂寥を感ずるに至つた。

當時尾崎紅葉は「二人女房」(二十四年)「三人妻」(二十四年)を發表し、勢威文壇に上り、硯友社の舊友達もそれ〲小說界に地步を占めて來た。時に劇界は未だ舊套になづみ、革新的氣運は起つてゐたけれども要するに活歷其他の微温的變化に過ぎなかつた。美妙が眼をつけて新脚本樹立を志したのは、其意味に於いては聰明だつたが、かくして想を凝して作り上げたのが「村上義光」(二十七年)であつたが、是は不幸にして何等の反響も呼ばなかつた。

彼は、この作の爲に一年劇場に身を潜めて實際を研究したと稱したが、事實それは研究、考證であつて、その結果は、たゞ舊劇形式の正確なる表現だけであつて內容的には何等創意性のないものであつた。嘗てその小說が果した如く、新しい時代に訴へるものを持たなかつた。スラムプを脫しようとしての試みだつただけに此失敗は彼にかなり精神的物質的の打擊を與へたらしい。

二十五、二十六年の美妙のカレンダアが殆んど白紙であるのは、この脚本製作に關する基礎的知識の習得と前述の大辭書編纂に使用されたからであつた。この間に「改進新聞」「國民新聞」等に入社してゐるが、何れは半歲乃至一年位で退社し、二十六年六月には、思出多き「都の花」も遂に廢刊の運命に立ち至つてゐる。

二十七年九月、彼は神田の家を賣却し、小石川區久堅町に移つた。美妙の悲劇は此歲から兆し始めてゐる。その端は坪內逍遙との確執に發した。美妙が脚本界に乘り出さんとするや、當然劇界の人物と交際するやうになつたのであるが、殊に依田學海、長田秋濤、坪內逍遙等と演劇改良を論じ合つた。それが、當時新聞其他で問題とする處となり彼等によつて演劇改良會が組織されたといふニュースなどが出たので、逍遙はそれを否定した。要するに話をし合つただけで、そんな意圖的なものではないといふのである。それに對して美妙等は、今更彼がさういふ打消しをするのは卑怯だといふ意味を洩した。この矛盾は恐らく雙方の食ひ違ひより生じ、又鳴物入りの好きな美妙とその反對の逍

遙との性格的差異からにもよるのであらうが、是が逍遙をして美妙の性格を誤解せしめる有力なる感情的原因となつた。

是より先、美妙は淺草觀音裏に薄茶屋を石井留といふ愛人に經營させ、日々通つてゐた。日記によれば二十四年秋からである。世に謂ふ妾として月定額のものを與へてゐたらしい。是をスキャンダルとして二十七年に至つて萬朝報が報道したのである。それは美妙にとつて必ずしも致命的なものではなかつた。家庭に嚴格且無理解なる義祖母を有し、その絶對權力の下に彼は服從せざるを得ないやうに育てられて來た。今や世間的には知名の作家となり、しかも硯友社の舊友の如き「あそび」に慣れざる彼にとつては、街の女石井留女は唯一の慰安であつたかも知れなかつたのだ。從つて、或は萬朝の記事に對しても沈默の抗辯があり得たのかも知れなかつたのであるが、彼は、この記事に對して少しも留女に對する愛情を示さずして、留女に近づくことは小說をつくる方便なりといふ辯明を紙上に發表した。それは少くとも糊塗であり、男らしさに缺如してゐると謂へない事はなかつた。坪內逍遙の美妙に對する反感は茲に於いて爆發してしまつた。

「文學者は實驗を名として不義を行ふ權利ありや」(二十七年十二月「早稻田文學」)と謂ふ題目の下に、彼の態度が假借なく峻烈に攻撃された。筆者は早稻田文學記者とあり、勿論逍遙である。反感が手傳つてゐるだけに論調が苛烈だつた。是が美妙の作家的地位をかなり脅やかしたことは疑を容れない。

書肆博文館は、明治二十八年を期して大躍進を遂げんとして、雜誌「太陽」「文藝倶樂部」等を、その正月から發行し美妙もその執筆者の一人であつたが、遂に「太陽」への執筆は此事件によつて拒絕された。當時の大橋新太郎の美妙宛書簡によれば、「早稻田文學」の記事に對する辯解文を出さない限りは、高級雜誌への寄稿は賴まぬといふ意味のもの

がある。たゞ美妙は遂に脚本集も此館より出版し、其他因縁も淺くないので、「文藝倶樂部」の寄稿今は掲載された。

其他、此事件そのものは重視しなくても、是によつて一般の美妙觀にある偏見が加へられるやうになつたことは止むを得なかつた。殊に美妙の在來の作品にはかなり慘酷不快の事件を題材にしたもの多く、從つて美妙は冷酷なる作家なりといふ非難もなくはなかつたので、それと是とが結びつけられて、美妙即ち涙なき不德なる作家といふ先入觀が一般に擴まらうとさへしたのであつた。

然るに、前述の「文藝倶樂部」に美妙が載せた作品が非常に好評を得た。殊に「阿千代」(解題參照)などはその最なるものであつた。美妙にも愛ありといふ評判、美妙復活せりといふ噂が各誌に報ぜられるやうになつた。かくして、彼は却つて雨降つて地固まるといふ諺の如く、「阿千代」がスキャンダルを反證する如き形となつて、一般の同情を惹き次々に佳作を發表するやうになつた。明治二十八年は彼にとつては恐く二十一二年頃よりも得意であつたかも知れない。殊に別項の閨秀作家田澤稻舟との戀愛が進展して同年末結婚するに及んで、美妙の一生も玆に於いて安定したかの如き觀を呈した。翌年二月には二人の合作と稱せられる「峯の殘月」が發表され、前途は洋々たるものであつた。

しかしながら、もし盃と唇との間にすら不幸の餘地ありとせば、新婚の彼等はまさにその一例であつた。稻舟が嫁して美妙の家に入るに及んで、忽ち美妙の義祖母との衝突を餘儀なくせられてしまつた。嘗て、美妙をその友達から遠ざけた彼女は、次に彼からその新妻を奪ふ役割を果した。美妙も當時かなり苦しんだらしい。稻舟を近くの家に移して別居したりしたが、此時既に彼女は病み、且彼女の故鄕鶴岡より母が上京するに及んで二人は遂に永遠に別離してしまつた。結婚後四ケ月二十九年の春の事であつた。

故鄕に歸つた稻舟は暫く靜養を續けたが、遂に九月病篤じて二十三歲を一期として散つてしまつた。病名は急性肺

炎と傳へられてゐる。この稍舟の急死が山形より東京に傳はり、しかも彼女が悶々の餘り毒藥を仰いで自殺したといふ噂が擴まつた。稍舟が睡眠劑を服用してゐたことは事實らしい。恐らくこの睡眠劑服用が訛傳を生む原因となつたのであらう。しかしながら、この結果は豫期せざる致命傷を美妙に與へたのであつた。是によつて美妙は、女性を弄ぶ不德漢として都下の二三新聞より激烈なる攻撃をうけた。最早彼の辯解を許さざる痛烈なものであつた。文壇の筆調は俄然として改まり、嘗ての同情者が矛を倒にする者が多くなり、一時は完全に彼は失墜してしまつたのであつた。

この後彼は轉々と居を移してゐる。二十九年末本郷千駄木町へ、翌年正月東片町へ、秋には市內を退いて王子村に逼塞するに至つた。この年、「新小說」「國民の友」「文藝倶樂部」等に書いてゐるが、遂に問題にされず、三十一年から數ケ年殆んど作家としては空白時代が始まつた。明白に沈淪時代であつた。

そして青年時代までは比較的身體も虛弱であつたが、二十歲を越してから强健となり、酒なども相當に嗜む樣になつて居たので、此時代になるとわが憂悶をやらんが爲に極度の大酒をしたらしい。かなり健康を害したりした。「やまと」「國民」などに入社もしたが永續きがしなかつた。飛影の號を用ゐて姿勢を立て直し、大勢を挽回しようとしたのもこの當時である。

時に米西戰爭あり、戰局はアジアに移動してフィリッピン獨立問題にまで發展し、三十一年には獨立軍の志士マリアノ・ポンセ來朝し、翌年八月米軍マニラ占領、十二月米西戰爭は終局を告げたが、と同時にアギナルド一派がフィリッピンの米國に隷屬するを好まずして反旗を飜した。これより曩、美妙は山縣悌三郎氏を通じてマリアノ・ポンセを知り且獨立軍に大いに同情した。失意拓落彼自身の運命から推して、又その同情心も一入高つたものであらう。時に

自由を論じ、時にラファイエットを以て任じてゐたといふ。しかし、結局この事は一時的昂奮に終つた。是は美妙の本質ではなくて、半ば山縣氏の感化や彼自身の境遇から變化せしめられたからであらう。三十四五年はその熱狂時代であり、著書「アギナルド」二篇(三十五年)はその慷慨の結晶したものである。

この間に美妙は舊友尾崎紅葉と奇しい會合をしてゐる。三十四年二月の事で、中學時代の舊友が米國より歸朝して「うきよ」と名付ける雜誌を刊行しようとして、紅葉と美妙とを招いた譯である。訣別以來十歳にして二人は會つて種々相談したらしい。しかし、結局この事業は二人の舊情を暖めるに役立つただけで遂に仕事としては刊行に至らない内に延期されてしまつた。そして、この年九月、痛飮度なき結果として美妙が腦充血で卒倒してから、共に相談することも出來ず、美妙の健康が殆んど恢復した時は、今度は紅葉がたゝず、遂に三度相見ること難く紅葉は三十六年秋他界へ旅立つてしまつた。

三十六年正月から美妙は人民新聞社に入社した。内訌してゐる憤懣をやる爲に自身刺戟的な生活を愛し、或は軍事探偵を庇護し、或は前述の如く革命的熱情に、わが憂愁を忘れようとした事があつたが、結局とゞの詰りはもとの小說に復歸するより外はなかつた。

初期に書いてゐた「武藏野」や「いちご姬」の如き歷史小說體のものを書くやうになり、殊にその主人公に悲運なる人物を配した。「佐々木盛綱」を始め「小宰相」「平重衡」等の歷史小說の主人公は殆んど滅び行く人々である。

是等は殆んど靑木嵩山堂から出版された。尙此外に滑稽小說等も書いてゐるが、是は成功しなかつた。歷史小說も圓熟してはゐるが、さして評判になつたものはなかつた。此當時の生活的保證は、人民新聞社、後には嵩山堂書肆によつてであつた。

倘、彼は又々居を瀧の川村へ移してゐたが、三十八年三月別居中の祖母が肺炎で死んだので母が來り住むことになつた。

是より曩彼は沈淪時代に結婚した。現未亡人カネ氏がその相手である。美妙も前例にこりたと見えて、結婚後祖母及び母に一軒家を借りて同居させ、自分等は別に住んだ。旭彦、照彦、勝彦、八重子と順次に擧げた。この義祖母、恐らく彼にとつてはあらゆる意味で終生忘れられなかつたであらう。この勝氣な祖母をあの世に送つてから、美妙の生活は平安なものになつた。そして間もなく、即ち三十八年七月彼は青木嵩山堂と大辭典編纂の契約を交した。これが、美妙の末年の生活を保證する大きな仕事となつた。この辭典は一種の百科辭彙であるが、從來にない大規模のものであつただけに成立までにはかなり經緯があつたらしい。

爾後美妙の一日はこの仕事で消費された。朝八時から夜一時まで殆んど机の前に坐りづめの日が續いた。一枚約三十錢位の見當で、三十九、四十年まで續き、四十一年七月遂に完成した。この間、勿論歴史小說、滑稽小說或は宗教小說に手を染めてゐたわけであるが、最早昔日の聲名なく文壇圏外に放置されてゐる狀態であつた。もつとも美妙としては、寧ろ辭典編纂の方がふさはしい仕事であつたかも知れない。

四十一年九月、彼は再び東京に戻り駒込上富士前へ轉居した。四十二年は平靜な年であつた。生活は勿論豐ではなかつたが、温良な母と貞淑な妻と三男一女に圍まれたよき家長であつた彼は、餘裕ある每に子供をつれて散策するよき父となつてゐた。過去の盛名に比して今は及ぶべくもなく世間的にはうらぶれた彼ではあつたが、その生活は平和であつた。この年長編「平重衡」が出た。是はやゝ好評であつた。しかし文壇は既に自然主義全盛を語つてゐる。前年舊友川上眉山は時運に抗しかねて死へ急ぎ、又此年二葉亭四迷は印度洋上に死して、舊人凋落の觀深かつた。

翌四十三年六月彼は咽喉部糜爛を發見し、その治療に怠りなかつたが、九月遂に頸腺癌腫と惡化した。越えて十月二十四日夕刻、遂に彼は母、妻、三男一女にまもられて、世を去つたのである。都下の新聞は一齊に其死を報ずると共に、始めて眼が覺めた如く彼の文勳をたゝへた。

翌々日、紅葉の大名行列の如きに比して、これは佗しいほそ〴〵とした一列が染井に向つた。文壇關係者として参列したものは、石橋思案、丸岡九華、柳川春葉、竹内桂舟氏等であつた。森鷗外は代拜者を送つて鄭重に弔つたといふ。

當時の新聞は左の如く報じてゐる。

花一盛人亦一盛一頃世に時めきし明治文壇の耆宿山田美妙齋の末路こそ更に哀れなるものにてありき、昨廿六日午後二時秋さびたる染井墓地の一角に於て執行はれたる葬儀は會する者實に廿數名一同寄に面を蔽ふて故人のありし其昔を偲ぶなりき。（東京日日新聞）

病革まつた時病床に馳せつけた思案に、美妙は稲舟のこと硯友社との疎隔のこと等を語つて「これでやつと安心した」と家人に語つたといふ。思案は美妙の晩年のよき友であつた。原稿賣込みの斡旋、「美妙叢書」の發行等、すべて思案の友情によるものであつた。

美妙の座右の吟として左の如き數句がある。

日も月も　天も地も　宇も宙も
歳月も　火も水も
何もかも　いそがず休まず　忍びて默す
あゝ人も學ばん　（三十八年一月試筆）

彼の絶筆として「文鳥苦しげな聲」といふのが日記にかきつけられてゐる、といふ事を嘗て書いたことがある。その文鳥は、病める主人の看護の爲に家人が顧みるのを忘れて死に赴かせたものであつた。彼は病床でその死を知つたのであらう。臨終に近い亂れた筆蹟ではあるが、打ふるふ手でそつと書きつけたこの小鳥への挽歌は、彼の千萬言の辯解よりも雄辯に彼自身を語るものではなからうか。

不德漢といはれた美妙が筆に止めた此世に對する最後の關心は、この可憐なる小鳥への悼みと同情とであつたといふ事を特筆してこの美妙小傳を擱筆しよう。

昨今美妙に關する研究が漸く盛んに、その作品の價値も次第に問題にされるやうになつた。喜ぶべき事といはねばならない。

遺族として、未亡人カネ氏及び三男勝彦氏は遠く大連に、二男照彦氏は京都に、長男旭彦氏の遺子武彦氏は東京にそれぞれ健在である。

時事·世話小說集

（二）

嗚呼廣丙號

今茲、明治三十年二月、英照皇太后陛下の大葬にあたり筆を携へて京都に滯留中、はからずも一夕わが旅館中村樓で最も面白い友を得た、すなはち現在帝國軍艦秋津洲に乘り組みの士官海軍少尉藤木定吉氏で。

藤木氏まだ少壯で、よく語り又よく飮む、而も一見故舊の如く、談笑の間さらに城府を設けず、洒洒落落として包藏することは無いなど、帝國の海軍軍人として備さに敬愛すべき態度を備へた。

此度は大葬儀仗の海兵を携へて入京されたので、その間は滯在する、その時分を好機會として互ひに訪ひおとづれたところで、はからずも一夕の快談彼の收容軍艦廣丙號が臺灣の海峽で沈沒した事實に及んだ。

しかも此藤木氏その時、その遭難の時、廣丙の乘り組みであつた事とて、實況の說明一々目に見るやうである。

しかも此藤木氏をはじめとして艦內の各員ことごとく協心一致して、生命を忘れ、死運を思はず、海員として盡くすべき義務をよく盡くして、天晴日本男兒の特色、世界萬國に向かつて誇るに足るべき所を充分にあらはした事、人間として淚無くては聞くにさへ忍びぬ悲壯の事實、聞く身の骨も疼くやうで。

ひるがへつて帝國の人民が此沈沒に對して抱く感情はと云へば、嗚呼これまた痛恨のいたりである、幾分過言かは知らぬが、ほとんど此沈沒を以て隣國の飢饉か、對岸の火事ぐらゐに視る、海員の苦心、その悲壯の事實などは丸で思はず、はなはだしいのに至ッては、折角の收容軍艦を沈沒させたなど、之を以て船員の怠慢などに歸し、憐れみもしなければ微しもせぬ、その冷淡無情、その局の人に對して汗顏の至りとも何とも。

何としてこの悲壯義烈の事實を世に知らせずに置けるものか、海軍部内の消息が一般の世人に知られぬのが、一つには此無情の原因でもある。戰爭と云へば、鐵馬岩角に蹄を鳴らすなど、陸戰の思想の方へのみ、古來の經歷上、かたむきたがる今日の時世、是に疎いのも是非無いやうなものの、扨すこしは着目を新にして、すこしづつもその眞の消息を聞きたがるやうに爲らなくては。

と思ふにつけて藤木氏に向つて斯う言つた。

「どうかその事實だけは汎く世にも知らせたいと思ふのです。それで無くても陸軍とちがひ、海軍の方はその勞が多くて、その榮は勞をつぐなふにも足らない不可思議の今日、その上に一般の人民が冷淡を極はめて居るやうでは全くです、埋まる瀨は有りませんからな、實に是は文飾でも無く」。

言へば藤木氏微笑した。

「まづ、ま、そんなもンですな。世に御出しくださることは固より望むところです。もつとも海軍部内の雜誌とも云ふべき彼の水交社記事ですな、あれに當時の沈沒の顚末を掲載しては置きましたが、もとより海軍部内でのみ主として見るものですから、とても夫や世間一般に知れわたるどころの話ぢやありませんからな」。

「まツたくです。わたくしも責任を以ツて筆を執ります、どうかそれだけの御かんがへで委しく御はなしを願ひます」と言葉じりを固めれば、

同じく調子に力を込めて、

「それ、それに限るンです。わたくしも亦一切責任をもツて御はなし致しましやうて。そりや勿論御はなしすると云ツても、廣丙號の一士官の一己の見聞と云ふに過ぎンのですからな、或ひは實際自分が遭遇した事でも多少の誤謬などが、萬無いとのみは言ひ切れませんからな、その邊はよろしく御斟酌あツて取捨して聞いていただきたいです、一己の一私見で艦全體に係果を及ぼすやうな事でも困りますのでね」。

此周密で謙讓な言葉はいとど說話に威嚴を添へて、ま

だ本題に入らぬさきからおのづから改まるやうな感情も爲る。席たちまちに肅然となる。

酒一盞をかたむけて、談話はおもむろに始まつた。

「思ひ出しても殘念でならず、また自己の生命を犧牲に供して、死ぬまでもよく働いた下士卒の事など考へ出すと、實にたまりませんのでね。それもな、鐵火たがひに相見え、劍戟共に相酬いるといふやうな、人間と人間との戰爭ならば、たがひに斫つたり斫られたりして多少滿足なるところも有りまさ、そツでしよ」。

「さうですとも、大きに、そこは海軍軍人の苦辛は夫に止まりませんからな。人間同士の戰爭の外、猶また非常な勁敵たる風とか雨とか、白浪とか暗礁とかな、つまり人間以外のものと絕えず戰爭して居るやうなもンですからな」。

「そこなンです。それらの自然の敵と云つたら其力は廣大無邊なンですからな。一刻前までは平穩であつた天氣も忽然暴風雨と變はる事もあり、一時間前まで西なら西へ流れた潮流も不意に變化して了ふ事もあり、また暗礁とか淺瀨とか、その度ごとに絕えず海員が頭腦を惱ませる事はそりや一とほりぢや無いンです。殊に世間の普通人が何も知らず、暗礁や淺瀨に乘り上げたと云ふと、すぐにもう船員の不注意か何ぞのやうに酷評して了ふのは實に無情きはまるので、はなはだ心外の至りですて、だツて貴君無理なンでさ。そりや海圖もありますさ、測量圖もありますさ、しかしそれらが悉く信を置くに足るとは云へンですからな」。

「その邊も有りましよな」。

「有るどころぢやありません。海は廣いです。たまたま測量し當たツた暗礁なり、淺瀨なり、それは圖にも載りますさ、不幸にしてわづかの所で其探檢に洩れた奴はやツぱり水中に依然として潛伏して居るンです、上からは見えんですもの。それのみぢやありません」。

少尉語氣やや銳くなツた。

「のみならずです、測量の濟んだところでも一ケ年前

と一ケ年後と、海底の土盤の狂ひや、沈澱の鬱積などで丸で變化して了ふのは珍らしくないンですからな。現に貴下、コーラルリーフなどな」。

「さよ、さよ、珊瑚礁、あれらも絶えず經營して居ますなア」。

「さうです。たまりませんや、ですから。誰が乘り上げなど爲たいもンですか、一とほり二とほりの注意を加へて居るンぢやありませんとも」。

「なるほど一般はその邊のところを知りません。知らないで攻擊する……」

「ですから憐れむべくもある、また腹も立つンです」。

咄しは一寸小休みした。

「あンたはん、もし御酒いかが」と女中が銚子を差し出した。

「おツと、すこしだ」とすこし注がせて、ぐツと呑み干し、その儘すぐに自分に差して、更に女中をかへりみて、

「美妙君は醉ツても可い、僕は醉ツちや可かん、咄しが出來なくなる」。

「まンだ、可うおすがな。そないに遠慮など爲んと御置きやして」。

「あはは、最負分に澤山注ぐか」。

「さうどす」。

「どうせ金にして取るンだからな」と自分もすこし攪ぜかへすと、

「否や、もう、もう好かん」と笑ひながら睨まれた。

少尉一聲高く笑ふ。

「さツ、これが本文です。まだ醉ひませんからな、醉ふともう咄せなくなりますンで」と又わらツた。

女中は銚子を換へに立つ。

「まづ臺灣でも澎湖列島がわが手に入ツて了ひ、賊徒も大分平らぎ、是から萬事片付かうといふ所で土民からの訴へが有ツたです。澎湖島の陷ちた時、舊の島廳に居た清國の一士官で、林禎順（リンチングチユイン）といふ男（日本の大主計ぐ

らるの官とか)、その男が官金八千兩を竊んで逐電し、今は八罩島で妻妾眷屬打ちそろひ、榮花を極はめて居るとの事で、さて之を捕へるにも風浪が凶惡なため近寄れない。そこで、その邊に居あはせた軍艦卽ち廣丙に頼んで、島司等の一群を便乘させてもらひ島へ行ッて捕拿しやうと云ふ事になッたンです。もッとも此時居合はせた軍艦は廣丙に海內の二艘で、丁度近海警備の任に當たッて居ましたので、まづ廣丙が頼まれたのが廣丙の厄運であッたのです。

さて明治二十八年十二月二十一日午前二時です、いよいよ廣丙も其そもりで汽罐に點火し、七時三十分に至ッて航海の諸準備を一切了り、そこで是まで風浪のはげしいため双錨泊をして居たゆゑ、此に於いて左舷錨を揚げ、やがて八時になつて機關の試運轉を行ひ、「テレグラフ」「スチーアリンゲヤ」などの檢査をしましたが、皆好成績で、すこしの差しつかへも無かッたです。ところへ前述べた便乘者卽ち島司の宮內盛高氏、陸軍士官(憲兵分隊長)二人、憲兵、巡査、通辯の支那人二人合計三十六名の人人が丁度來て乘り組みを了りました。

數日前から烈しかッつた北風が昨日はすこし收ッたやうであッたのが、今日は又強くなッて、浪も亦高くなりましてな、しかも八時二十五分です、更に右舷錨を揚げ左舷を回頭しやうとしたところが、風浪が中中強くて艦首が切りに壓せられ、思ふやうに行かンのです。そこで仕方が無いから、又左舷錨を下して回頭を促がし更に錨を揚げて出かけた、その時が九時でした。それから次第に速力を增して七十廻轉(七哩半)とし、やがて九時四十三分漁翁島の「リシツター」角の燈臺を西北面凡そ三哩ばかりの所に望み、針路を南東四分の一の東に向け、本島と「テーブル」島との間を過ぎ、十時二十五分「テーブル」島の東の端を北二分の一、西八罩島の北の端を正西に見、更に針路を東南東二分の一の東に更へ、十一時四十三分「ロウエル」山を正西一哩四分の一の邊に眺め針路を適宜とし、礁列島東方島の西北端へと向かひまし

た。

風は段段と強く、波は甲板を洗ふまでになり、艦の動くのさへ十七八度になり、風もすこしく西北となりました。それから針路を東に取り、「テーブル」島の東を進んだので實は此風浪を成るべく避けるためでした。やがて十一時四十五分倉島の東南の端から東の方凡そ二哩ばかりの所まで來、その時間ゆゑ食事の用意をして、それぞれの分配も濟み、一同が食卓に就き、例のとほり掌帆長屬が「食事に就けエ」との號令を傳へた、忘れもせぬその、實にその一刹那で今や箸を執らうとする所で、得も言はれぬ非常な物音がごツとんと為たと思ふ、その間艦の進行は同時にぎツと停まつて了つた、「やツ坐礁したツ」との聲が急に起つ。一同すべて箸を捨てた、時は正に十一時五十三分で。

丁度この時一番分隊長永井群吉氏が本直、自分はその副直で、十二時からは當直の士官と交代する所で、そこで、此事實を見ると同時に、自分は航海日誌に「一時五十三分暗礁に乘り上ぐ」と記し付け、直に艦橋から下りて、下甲板の糧食庫に至り、坐礁の場所を見ようとしました。丁度この時艦橋では機關を停め、後退を掛けて居る樣子。ところで其糧食庫ですがな、前部下甲板の第二區劃といふところに在りましたので、最初坐礁したと知ツて自分が駈け付けて來るまでそれや實にほんの何秒時間でも無いンですな、それであツて何うでしよ海水がその糧食庫内に浸入する勢ひと言ツたら大變で、もう貴君三四尺の深さでしてな、下甲板をも浸さうといふ所なンです。おどろきましたなア實に。

艦内から修理する目的は無いンです。もうそりや兵隊どもでも何でもびツくりしましてな、寄つて來て居ますンでな、すぐそれらに命令を與へ、糧食庫の入り口の防水蓋、及び第一第二の二つの防水扉を閉めさせたです。それでも心許無いのですからな、第三區劃に行ツて見ました。ねエ、「チエーンロツカル」だの、石炭庫だの、火藥庫だのを覗いて見ましたが、まづ無難で浸水の模樣も

無いンですな。それからすぐと立ちもどツて、事實を艦長に報告して置きましてな、又下甲板へ來て一生懸命水を防ぎましたです。

一同がみな必死でさ。

艦橋からは「コリションマツト」用意だの、防水扉閉め方だのの號令が下りましてな、みんなそれぞれ手わけをしてな、ポンプで水を汲ひ出す、バケツで掬ひ出す、重いものをば後の方へ片付けて船を浮かせるやうにするなどと云ふ、そりやもう全で氣ちがひでさ。それで情無いてさねエ、ちツとも水は減らんのです。減らんどころか殖へるのみです。見る見る第二區劃を呑で了ひましてな、第三區劃へ遣ツて來ましてな、とうとう貴君、「チエーンロツカル」石炭庫、彈藥庫、みんな水を食ひましてな、下甲板をも浸さうといふンです。

仕方が無いので、後の方の第四防水扉を閉めましてな第二第三の區劃だけを水の占有にさせ、一切のポンプ共全力を共所に集めて水を汲み出さうと決したです。

それから又その前に「レツト」で近傍の深さの測量をもしましてな、又損傷の場所は第二區劃の底で、それゆゑ水が入ツても第二第三この兩區劃だけで濟む、その他は防水扉で防げると考へたもンでしたからな、すぐにそれぞれ防水扉を閉め、機關にて後退全速力を掛けたです。

第二第三區劃だけの浸水ならば沈沒の氣づかひは無いですからな。

ところが、その全速力でも動かんのです船が。その筈です、岩と岩との間にしツかりと挾まツたンですからな。「コリションマツト」の用意も出來て居るンですけれども、さつぱり役に立たンです。殘念とも何とも言ひやうも有りませんでね。

已むを得ず左舷錨を下し、錨鎖を延ばして置き、また艦尾には「ケツチアンコル」を下して船の位置の正しく保つやうにし、もし幸にして艦體が浮き出したなら、すぐに鎖を斷ツて逃げる事にし、もし又不幸にしてその儘難破したなら直に沈沒しないやうな事にすると云ふ、是

だけの準備を爲たです。

いよいよみんな死にものぐるひですからな。

ドンキィポンプ二臺、移動ポンプ二臺で水を拔き、それからバケツだの盥だの、「ウヲツシユタツプ」などでぐんぐんと汲み出したンです。

で、やつぱりいけませんな。

凄まじいとも何とも譬へやうの無い水勢でしてな、どうしても敵はんのです。見る見る糧食庫、石炭庫、彈藥庫などの蓋を押し上げてな、その隙間から奔り出しましてな、下甲板を侵すンです。船は次第に傾きまさ。艦首も段段沈むンです。第二第三兩區劃とも、もう救ふ法は無くなりました。

生命と云ふのは第四區劃です。此處に汽罐が有るンですからな。もし此處をも犯されたなら艦の死命は決するです。だからもう一生懸命で、どうでも此第四區劃だけは助けようと爲たンです。

とても、しかし艦の浮き出す目途は立ちませんのでな、ともかくも、如何なる危難を侵しても、便乘者たる島司の一群をば助けなければならんので――もとよりそれが海員の義務でしてな。で、零時二十分です、ピンネースと第二カツターの二艘を下しましてな、それにまづ島司等三十六人を載せ、生野少尉候補生がその指揮をつかさどり、湧き起つやうな浪の中へ下ろしたです。そりや危いです無難に陸へ達するか何うかは些しも分かりや爲ませんや。けれども危急の際ですからな、ぐづぐづしては居られません、まづ萬一の僥倖を期するといふ覺悟で。

これで義務の一つは濟みましたが、猶また病人とか雇ひ人とか、それらも力のかぎりは助けなけりや爲りませんでな。一方では水を防ぎ、一方では逃がす其用意をする、まるでやツぱり戰爭です。かれこれして一時十五分第一カツクーの用意も出來、そこで準將校、及びその所屬の兵士、軍醫官、主計官、患者、雇ひ人などを併せて乘り込ませ、加茂少尉が其端艇の指揮となツて、これまた覺つかなくも乘り出しました。

此內もう艦首の方は非常に傾むく、巨浪に撲たれる度に艦は岩石にぶつかりあふ、その響きの凄まじさ何とも言ひやうが有りませんでな。

とうとう無殘にも第三防水扉も水に押されて膨れ出しその隙間だの又は壁などにあるリベットの孔、あるひは電話管などから水は迸り出ましてな、生命といふ第四區劃にもそろそろ侵して來るンですたまりませんや。

汽罐が水に犯された日には破裂するかも知れますまい。さうなツたら大變とも何とも、ね。さうでしよ。總がかりです、それですから。叱りつけ、どなり付け、咽喉かぎりの聲を出し、腕かぎりの力を出し、必死で水を防いだ、その騒ぎ、とツても形容はできませんからな。

でやつぱり無效でしてなア。

實に必死で防いだです。で、行けません。見る見る第四區劃も侵されましてな、前部汽罐の底へ水が及び來るンです。

たまりかねて汽罐の火を消し、蒸氣をも洩らしちやつたです、そりや實に一瞬間ですな。すぐと凄うまた後部汽罐も危いです。又仕方無くその火も消しましてな、さア最う斯う爲ツては蒸氣力を用ゐて何うにかする目的は絕えたのでして。この上は最後の用意ただ一つ。一同をして上甲板にあつまる用意をさせました、その時が一時十分です。

それから鉞室、防水蓋、防水扉、ハッチスカイライトなど一切を密閉し、猶その上にターポーリングを掛け、木のところは釘で打ち附け、つとめて海水が下甲板に入らぬやうにし、又一方では銃員受け持ちの書類などを取りまとめ、退去の準備にかかツたです。

そこで備へつけの端艇です、ピンネースと第一及び第二のカツター、此三艘はすでに乘り出したのですから、その後に殘ツてるのはガレー、ギグ、及び傳馬の三艘だけです。とても艦內の殘らずが乘り組めるものでありません。で、まづ機關部員、船匠、鍛冶などを除き、さしあたり艦の最後の處置を行ふのに必要でない直外員だけ

を乘せる事にし、其餘は救助船を待つか、さもなければ行つて歸ツて來る端艇を待つか、その二つの一つに決めそれまでは艦を守ツて防ぐだけは防ぐ事に爲ましてな。

一人でも多く乘せるために、必要書類もしくは秘密書類の外は私物は勿論、官物でも積ませませんでな。

一時二十分に六名の機關兵を乘せて傳馬を出し、一時三十分に秘密海圖必要書類、及兩陛下皇太子殿下の御眞影及び直外員を乘せて、河村少尉が指揮官で、ガレーを出し、やがて一時四十五分に機關官、機關兵を乘せてギグを出しました。

もうこれでいくらかは安心も爲ましたです。そこで人員の殘りを調べると、艦長を加へて總數七十四人、その内で士官五人、准士官二人、下士卒六十六人。嗚呼この七十有四人が最期親密の伴侶です。心は皆一つです。死生たゞ一時です、水を防ぐ一方です。圓材、角材、板などを集め、其邊の戸などを外して筏を組みいざと云ふ時の用意をはじめ出したです。云ふまでも無く風波はますます猛烈で、大魔王が牙を鳴らし顋を張つて喰ひ付くやうな巨浪が容赦なく甲板を打つて來る、道具類は相つきあたり、轉がりまはる、その中を潛り潜つて一心に立ちはたらく水兵の勇氣膽力、壯絶とも快絶とも。見てさい肉も微動するやうです。

嗚呼噫艦の命運の盡きたるところ又意外の攻擊が出ましてな。七十四人の必死の苦心も終に無效の悲運となつた、もう此所で萬事休して了つたです。

此時まで風向と反對に流れて、それがため風と力の平均を保つて居た潮流がな、干潮一變して滿潮となつたためにな、無殘や方向たちまち變はつて、風と同一の方向から艦の横腹を衝き出したです。はや、もう堪まりません。しかも二時十七分俄然として艦は衝かれたまゝ艦尾が左舷の方にまはり、艦首が岩の上から辷つて、艦の位置がまるで變はる――それと云ふ咄嗟の間にバウアンコルを下したので辛く其儘停まつただけ。それもほんのわづかの間。

艦首ますます沈み行く。水は上甲板から下甲板へ瀑布の如く奔り込んで、艦體は非常に傾むくのみでしてな、いよいよもう沈沒の悲しい運命も一刻の前に迫りました。

もう何の方策も無かつたです。一同ことごとく上甲板に集合し、相かへり見て無言です。ひそかに是までに行つた應急處置の至當を得たのを考へて、たゞ心を慰めるのみで、天を仰いで命を待つ。もはや覺悟は付けたです、悠然として烟草を燻らし、笑つて怒濤を見つめるくらゐで。

たちまち艦長の命が下りましてな。一同すぐに後甲板に集まり、肅然として整列しましてな、その足許へは浪さへ來るです。すると喇叭の音が起こる、君が代の吹奏です。それに伴れて、もはや最期といふので、軍艦旗を下げにかかる、一同が皆脱帽して之にむかつて最敬禮を行ひ、はるかに帝都東京の天に向かツて、さすがに此所では涙です。

そこで艦長音頭を取ツて、一同、同音に兩陛下萬歳、帝國萬歳を唱へた、その時の心もちと言ツたらば。

ただ無量の感慨が胸に溢れて、必死を期した時も寸斷寸斷になるばかりで、壯ましく又悲しい萬歳の聲は攻め鼓のやうに聞こえましてな、まづ是が自然の人情でしやうかな。そもそもわが職分に斃れるといふ、天にも地にも愧ぢぬところで、恐怖の念も無ければ悔悟の情も無く笑ツて死なうと心はすでに決して居たのが、今や此萬歳を聞いては妙に情なくなつて來ましてな。

何の辻占かな、その下しかけた軍艦旗がハリヤードの斷れたため、ぴたりと止まつて下なくなりましてな。

その内にも水はますます加はるばかりで、艦は次第次第にかたむき、どうしても甲板上に立てなくなりましたので、一同が是非なく左舷の舷側に移り、リツギング、スタンション、リツチロープ等に凭りかかり、ただ覆沒を待つばかりで居ましたンですな、するといよいよ悲運も迫りました、丁度二時十七分でしたな、さうも今までこらへにこらへて居た艦體もとうとう敵には負けまして

な、右舷の方へと顚覆して、左舷の横腹をあらはしたです。

すぐと一同は這ひ上がつて其横腹へ集まりましたがな、もう早これまでだと云ふンで、いよいよ最期の訣別です。そこで僕がな、自分で音頭を取りましてな、萬歳をまた唱へたです。一聲また二聲、やうやく二回唱へただけでしたな、今や三回目といふところで、そりやもう岡とも山とも比へやうの無い大浪が遣ツて來る、と思ふ間も無いんです、辛く横腹にかじりついた七十四人を一まとめにどウツと洗ツて了ひましてな、とうとう廣丙の艦體も海の底へと沒したです。」

言ひ了つて少尉懷舊の情に堪へず、さしも疾風が渦を捲くばかりの快辯も此所に至ツてややたゆたふ。聞く身さへ憮然となる。

少尉さすがに興は進んで居るので、やがて咄をかたりつづけた。

「坐礁してから何しろ沈むまでは二時間と二十分ばかりは有りまして、それ相應の應急處置は盡したです。が唯殘念であツた事と言ふのは船體の構造がもともと不完全なンでしてな、わが國の手に分捕りしてから後も廣丙のみは艤裝委員さへ定まらず、ろくに修覆も加へずに使用したくらゐの仕儀ですからな、まるで廢艦と言ふのも過言で無いほどです。

防水扉は出來るだけ手ばやく締めたです。けれど、其接合面がいづれも不完全で、止むを得ず、鐵槌などで敲いて接合面を密着するやうにしたですが、やはり不充分ですからな、接合部の護謨線も古びて、それを支那兵がやたらに幾度も、塗り直した痕さへ見えて居るンですから、閉めたツて何の益にも立たず、とても駄目なンです。

何しろ晝飯は誰も食はず、それからそれと逐はれてはたらく、また皿小鉢などの類はすべて微塵に砕けて散る、これらも何うも不便を與へた一つでしてな、意外の經驗で分かりましたがな、水を汲み出すのはバケツや、ウヲシユタブよりも下士以下の糧食配給に用ゐる飯櫃（おはち）でした

な、注意して置く事ですな。

そこで、ピンネース第一及び第二カッターの事ですがな、前御はなし爲るとほり宮內島司等便乘者の一行を乘せて是等の端艇は出發したンでしよ。ところが、風浪の暴いの何のと實に言語に絕するくらゐでしてな、今や沈むか、今や碎けるかと、ほとんど無難の望みも絕えたです。

ですもの艇員一同の苦心と言ツたら一とほりぢや無いンです。自分たちは海員であるからどうでも宜しい、しかし島司等をしてむざむざ魚腹に葬るやうな事が有ツたら帝國海軍末代までの大恥辱だと云ふので、やツぱりいづれも必死です。

しかし風浪は無邊の力で抵抗するです。ともすれば覆へされさうに爲るンです。で、指揮官たる生野少尉候補生は丸でほとんど氣ちがひの如くに爲りましてな、さア兵士どもを叱り飛ばす、怒鳴りつける、聲を涸らしてさわぐ、終には貴下、島司等さへ氣の毒になりましてな、嗚呼そんなに叱りたまふな、何事も命運だこの苦しみを見るに忍びないと、何といかが、それまでに言ツたくらゐでしてな。」

不圖見れば侍坐した女中が手巾で眼を拭ふて居た。

「それでも苦心の甲斐が有りましてな、どうか斯うか島司の一行も無難に上陸は爲たンです。すぐとジャンクを徵發して救助船を出さうと云ふンで、島民を促がしたです。が、何と言ツても承知する者が無いンです、その筈さすがの島民も避易するほどの風浪ですからな。

仕方が無いので、その三艘だけで再救助に歸ツて來た、そのもう僅かといふところで遲かツたです。その時もう艦は橫腹を出した時なので、さツ沈むぞ、全速力だ、ちエすとツと云ふ掛け聲で、ほとんど夢中で漕いで來たです、ですからまづ幾何かを助けたです。あれがもすこし早かツたらばなア。

本艦から二度目に出た三艘の端艇はまだいくらも行かぬ內に本艦の沈沒をば見たんです。けれども船は人で一

杯でしよ、歸ツたところが無效でさ、で、涙を揮ツて行ツて了ツたです、ギグだけは、しかし風浪に堪へませんでな、途中の小島に漂着し、後に倉島（ツアングタオ）から來たジヤンクに助けられたので。

妙ですな、不思議に風浪に强かツたのは傳馬でしてな、さほどの困難も無くツて陸に着したさうです。

これは兎に角最後に殘つた七十四人が眼前に死命をびかへて泰然として心を一致させて更にすこしも亂れなかツたのは實に何ともはや稱讚の辭も無いくらゐでしてな、實際われわれ海軍に從事して居るものすら、よもや是ほどとは思はなかツたですからな。

「その內にも水兵です」と少尉凛然と銳く言ひ放ツたばかりで、見る見る至情の涙を浮かめた。

「實に涙が零れまさ。そりや士官などなら平生そのために衣食して居て、死んだからツてまだ當りまへです、さうぢやありませんか、何と、それを水兵がな貴下、一年か一年半前に募集されて來たばかりのものが。」感あまツてか聲さへふるへた。

「いツかに職分だと言ふにしたところが、じツつに偉いぢやありませんか、上官の命を固く守り、人の危急を助けるためには自分の死ぬのをも厭はんと言ふこの、この凛然たる精神は何と評したら評せましやうかな。艦が沈んでからの後の事實は、すべてこの魂の證明ですからな。

是はその一例です。艦が今や沈まうとしましたところでな、一人の水兵が急に士官を呼びましてな『あツ、もし其處は危いです、此處が可うごさンす』と言ひながら索（なは）を投げて士官を曳き、そ言ツて居る自分はたちまち波に沈んだです、是はたしか四等水兵、藤井福太郎といふ者だと思ひます。

また一例は三等兵曹布施銀藏と言ふ者でな、浪に捲かれて浮きつ沈みつ苦しんで居ながら、はるかに艦長が端艇に助けられたのを見て、うれしくツて堪らんのですな。『やツみンな安心せツ、よころべツ、艦長助かツたぞツ』

と思はず大聲を出したです。しかし此男はピンネースに救はれました。

猶可哀なのは一等兵曹の石原杵藏と言ふ者でしてな、坐礁後僕の命にしたがツて防水器などを監視して居ましてな、それから沈沒したところで、木製のタンクの上に乘りましてな、巧みに波の上に漂ツて居ました。すると端艇がはるかに見えたもンですから、手を揮ツて招いたので、端艇もその傍まで漕ぎ着けますとな、斯う言ふです。『いや、僕は一人だ、かまはん。對方に士官や兵士が澤山居る、あれから先へ、僕は後で』。そのとほり端艇も行ツたです。歸ツて助けようとすると、もうその人は波に拂はれて影も無く、タンクだけが浮いで居たです」。

少尉ますます憮然となる、嗚呼涙無くて誰が聞く。聞く身の眼も思はずうるほふ。

「何ともはや實に評する言葉も有りません。義と言ひましやうか俠と言ひましやうか、利欲などの點は素より無く、ただ一意壯烈義烈の精神に鼓舞されたンですな、どうもどうもおどろき入りました」。

自分もまた斯う言ふくらゐである。何の讃美の語を與へて可いか、その語にさへ實に盡きた。

女中が注いだ酒を無言で双方一度に飲みながら、一二片の肉をも食ふ。眼の底には何處と無く奔騰する波瀾を見るやうで。

「それから貴君がたの御助かりに爲つたのは何ういふ工合でしたな、七十四人のうち大抵は助かりましたかな」。こちらも氣になるので直に聞く。

「大抵どころか半分は死にました」。答辭からして可哀である。

「はツあ、やれやれ、それはなア。さすがの海員でもいけませんでしたかな」。

「どうして何うして激浪ですもの。しかしいろいろの經驗をも得ましたて。浮嚢とか筏とかへ取ツ付いたものは何うか斯うか多くは助かツたですが、何も取ツ付くものも無かつた者は大抵みな殺られて了ひましたな、浪が

激しいンでしよ、どう我慢しても辛抱しても水を飲むです。飲む。吐く又飲む、又吐く、もだえくるしむ、其末は身心惱亂昏迷して、沈んで了ッたです。

筏は用意して置いたですが、一時に波に簸かれたので皆無茶苦茶に爲ツて、幸にして浮かびながら縋り着いたのもあり、それらはすこしぐらゐ游泳を知らなくツても助かツたです。游泳に熟練して居る者でも空しく漂つて居る内には死んぢやツたです。

筏の内で最も波に抵抗して強かツたのはハッチ、スカイライトなどのコーミングが其儘四角な形で流れたのでしよ、之にかじりついた者は大きに困しまなかつたです。

圓材はほとんど可けませんな。之に取ッ付いた者は非常に苦しんだです。何しろ圓材は波を食ふ度ごとにぐるぐる廻轉するのでしよ、のみならず浪の上へは辷りのぼらず、きツと波の中腹を貫いて通るもンで、之に縋ツた者は非常な力で抱き着くのみか、更にその都度共に波を潜ると云ふ苦しみが有るのです。その上にまた圓材は自分の前後の漂流者を波と共に銜く虞も有りましてな。

樽も可けません、ながくは縋りにくいもんでしてな。

沈んでから二三十分にも爲らン内に、もう身體を圓材に卷き着けて、その儘絶命したのも有りますしな、また浮囊の中へ身體を突ッ込み、その內眞倒樣になつて二本の足だけによツきりと波の上へあらはし、その儘死んで了ッたのも有ッたです。

さて僕ですがな、波に拂はれたなり、不幸にも取り附く物が無いンです。まだ、其時は氣が確でしたからな、泳ぎながら洋袴を脱ぎ、力まかせに三十分ほど漂ひましたな。でも、浪に煽られる度ごとに非常に水を飲む、その苦しさ、とうとう眼が昏んで了ひ、ほとんど人事不省に爲ツたです。するとまだ運が有ツたンです、筏の傍へ流れ寄つたと見えるンですなその、筏へ縋り着いて居る一人の水兵にな、ぐツと引き寄せられたので、やツと筏に取ッ着いたです。ですが、身體はもうぐたぐたです、ただ取ッ付いただけで、浪に揺られて凡そ十分餘といふ

ものは全で煽られて居た。そこへ、突然後の方からビンネースが遣ツて來ましてな、やうやく攫み上げられたです。

上げられたまゝ暫時は全く茫然として知覺も無かツたです。やつと些し正氣付いて、四方を見ますとな、二隻のカツターはすでに漕いで行ツて影も無く、やはり前のとほり此ビンネースには生野少尉候補生が前のとほりの艇員をはげまして、陸を指してしきりと漕いで居るンですな、見ると此ピンネースで今助けられたのは一番分隊長永井大尉をはじめとして中島、木村、烏丸の三大尉、渡邊上等兵曹、及び下士官以下十二人でしたがな、みンなもうぐたぐたに疲れ切ツてしまツて、轉がツた儘身うごきも爲んのですな。

二隻のカツターは救へるだけの人を救ツてはやく陸へと向かツたんですから其日の夕刻には倉島、又は八罩島に到着ができたです、ところがピンネースは遠くへまで出て漂流者を捜索して居たもンで、その間に時間も移り、潮の瀬も變はりますしな、又風波も强くなツたでしよ、死力を出して進まうとしても中中自由にならんのです。

それには又いづれも朝飯を食ツただけで、すこしの休息も無く一旦便乘者を陸へ送りすぐ又引かへして力のかぎり漂流者を助けたのですからな、腹は減る腕は萎える、そこで風波はますます暴いのですからな。

そのうちに日も暮れてしまツたです。眞暗で何も見えす、風や浪のすさまじい音を聞くのみで、艇は木の葉のやうに揉まれるです、饑寒こもごも身に迫ツて、まるで地獄の中に居るやうな心もちでしてな。

それで二三時間は同じ事を爲て居ましたな。見ると、はるかの對向に火が燃えてる、是は多分八罩島に上陸した人人が此方の便道のために焚すンでしたらう。さツ又勇氣が出たです。その火を目的に必死と漕ぐ。それでどうです、まるで駄目です。

二時間ばかり漕ぎましたな、船は依然として進まんの

ですな。その內に心ぼそくも其火さへ熄えて了ひましたさ。

浪は絶えず打ち込んでな、幾度も覆りかけまして、どうにも險難でならンです。もう施すべき策も盡きたので一先錨を下して暫時休み、潮の瀬の變はるのを待つ事にしましてな、海水に浸ツたビスケツトを撈き集めて辛うじて口を濡らし、それから死人同樣のわれわれは互ひに擁きあツて身をあたため、その間たがひに搖ぶり起こして睡らンやうにしたです。こんな時、好い感覺で睡るとそれツきり死ぬもンですからな。

漂流中身體不自由のくるしみに堪へず、大體は衣類を捨てたもンでな、上衣一枚の者も居れば襦袢一枚の者も居る、はなはだしいのは赤裸體の者も居たですが、夜風にさらされる其くるしみは又一入で無いのでしてな、成るべくは、救はれた時の事を思ふと、着て居るに限りますな。

十二時ごろに至り、潮流が順に爲りましたので、また八罩島へと向き出したです。かれこれ二時間も爭ひましたがな、やツぱり風波を衝いてはどうしても進めないのでしてな、とうとうあきらめて了ひました。

で、とうとう一夜を明かしましてな朝になツて見るといくらか波もやはらかく爲ツた、そりや可いですが、目的とする八罩島ははるか十餘哩の遠距離にあたツて見え此方の艇は礁列島の北三四哩のところに流されたンですな。どうして疲れ切ツた腕で、とツても十餘哩の遠距離へは行けませんや。また潮流も礁列島へと向かふので、之を利用してとにかく礁列島へ行き、然る後八罩島へ移る事にし、それからやうやくの事で礁列島へ到着したのが午前およそ九時ごろでした。やれまづ安心だと思ふと氣のゆるみでにはかにがツかりして了ひましてな、一人として滿足に歩けるものも有りませんでな。

海岸に漁師の小屋見たやうな物が二つ有ツた、いやどうも是が金殿玉樓なンでしてな、それから草など集めて火を焚いた愉快と言ツたらそれは夫は。

島の土民は一向平氣な顏で、助けてくれやうとも爲ないです。ぐづぐづすると乾して置く衣服を竊まうとしたり、ポツケツトから銀貨を奪はうとしたりするンです。それで物を賣ツてくれと云へば不當な代價を貪ツてな。

そこで食はずには居られませんので、土民と談判――むしろ懇請です――やうやく芋の汁二桶づつ一日に賄はせる事にしたですが、それも一回一圓づつ、しかも前金です、その無情は一同憤慨したですけれど、此方に力が無いので辛くも胸をさするです。

芋の汁と云ツたところが、皮だか何だか闇雲に切り込んで水煮にしたので、しかも竹筵やら塵やら交ツて居ましてな、そりや醋いのです。ところが、それが大牢八珍でな、一同この泥汁を見るや否や、いやはや一つばなしでさ、睡ツたのが目を覺ます、臥てたのが跳ね起きる、身體の利かないのは這ツて來てな、ズボンの無いのもあれば菰をかぶツてるのもある、百鬼夜行の姿で、喉を鳴らして舌鼓を打ツてな、金ぴかの海軍士官も丸でその時は乞食でさ。

土民に對する不虞の警戒のため夜はかはるがはる番兵を出し、二組みに別かれて小屋に入り、小屋の中では火を熾しそのまはりに砂を撒き、一同相擁して互を組んだやうにして睡るといふ仕儀です。

これで二日を過ぐしましたな。一同の嚢中をかきあつめて最初から七圓ほどしか無い、それで一日二圓づつ食料に取られて廿九人の一群が幾日過ぐせるもンですか。

廿四日の朝は土民の奴め芋汁を持ツて來ませんや。仕方無さに殘ツたビスケツトを粥にして食ツたです。これや旨かツたです。

そこで一同評議をして、此島から二哩餘はなれた東島に移ツたです。もう勇氣も恢復してるので卅分ばかりで到着し、それから土民に糧食の事を頼んだところが、打つて變はツて深切です。もツとも今までの島は人家も十戸ばかりしか無かツたですが、その東島の方には數十戸ありましてな土民が互ひに相談して、家を一戸貸してく

れ、それから南京米の粥をこしらへてくれましたさ。南京米だらうが何だらうが米の粥でしよ、遭難以來の御馳走その旨さ、萬歳をとなへた者さへ有りましてな、そりや實にをかしいンです。

十一時ごろ、四五哩の沖にジャンクが一艘見えたもんで、すぐと山の上に人をやツて端艇の軍艦旗を振つて信號させると、先方からも旗で應信した、これを後に聞けば廣丙遭難の始末を知らせるために加藤少尉が安平にこれで行つたのです。

それから一時頃でした、こちらへ向かツてジャンクが見えるのですな。これはビンネースの踪跡が知なくなツたので、その搜索かたがた出て來た譯でして、すぐ信號で双方意味が通じ、たちまち船は岸に來て、やツ無事でよかツたなと、何もわすれて悦び合ふ、その嬉しさと言ふものはな。しかし、誰はどうしたか、いや死んだ、さうか夫はと言ふばかりで、又どうも暗涙を吞みましてな。

ジャンクが小さいので、中島大尉と僕と、それから今一人火傷した機關兵との三人だけが先へ行き、つぶさに艦長にその咄しを爲たのでな、艦長すぐとジャンク二艘を徴發してその夜直に殘りの人を迎へたです。

雜事も有りますが、まづ必要で無いのは省いて、兎に角船員百七十名の中生存したのは百三十三名で、まるで行衛不明となツたのは實に左の三十七名、是が皆殉難の壯士です。

上等兵曹	笹村英助	一等兵曹	高辻喜太郎
二等兵曹	石原杵藏	二等兵曹	坂下竹松
三等兵曹	大西卯太郎	三等兵曹	井上關太郎
三等機關兵	山口平八	一等水兵	中井元助
一等水兵	木村晉吉	一等機關兵	田窪彌太郎
一等機關兵	越智友次郎	一等機關兵	石原長太郎
一等鍛冶	岸本光五郎	一等主厨	秋山平四郎
一等主厨	大原嘉三郎	二等水兵	岩永常太郎
二等水兵	窪田要次郎	二等水兵	德岡榮吉
二等水兵	東山楠吉	二等水兵	谷村庄太郎

二等信號兵　增田勇治　　三等水兵　岩田倉吉
三等水兵　加藤亀作　　三等機關兵　松村元四郎
三等機關兵　柴山鐵次郎　　三等機關兵　線谷常作
三等主厨　貞光富太郎　　四等水兵　永谷房太郎
四等水兵　角谷助次郎　　四等水兵　永田丑之助
四等水兵　大槻粂松　　四等水兵　松島鐵之助
四等水兵　藤井福次郎　　四等機關兵　遠藤初五郎
四等機關兵　中橋玉次郎　　剃　夫　日野久次郎
割　烹　幾田金藏

この內剃夫と割烹との二人は何回と無く逃げろと忠告したのですが、聞かず、危きに臨んで一人のがるるに忍びず、終に覺悟して悲しい最期を遂げたンです。

顚末は要するに右のとほりで、これら殉難の壯士の多數は日淸戰爭以來引きつづき公務に鞅掌し、いまだ恩賞にもあづからずして、此壯烈なる最期と爲ツたンです。

そこで生存者一同合議の末、これら殉難者のために哀悼の碑を建てる事に決しましてな、便乘者よりも寄附金をこひ、たがひに醵金して五百餘圓を得、その一半で石碑を吳の八幡山に建て、一半を遺族の者に贈りました。碑の成りましたのは七月中旬で、吳の鎭守府から軍樂隊の寄附も有り、參拜者も多く、中中盛大の事でした。」

是までが少尉の談話である、事實の壯絕、快絕な事、何として兎角の評が下せやうか。それをば一切讀者の同情にゆづり、謹しんで殉難の英靈に對し、また救助防護等の事蹟に對し、これを筆にして世には出す。幸に讀者の同情を得る事あらば、實に本望のいたりである。

（終）

女装の探偵　前編

其一

夢の夢、いたづらに聞きなした此言葉が哀れわが無二の死友の上と爲らうとは思はなかつた。

自分の平素の希望は富でも無く、名譽でも無く、唯人間第一の義務たり又目的たり又運命たる末期、この時だけ笑つて快く花々しく目を閉ぢたいと思ふのである。病牀に呻吟するよりは一おもひに短銃で撃たれた方がはるかに苦しく無い。と言つて何も奇を好んでわざとらしく死を願ふでも無いが、唯死といふ事は生類にとても逃れられぬところで、おなじ死ぬなら、何か花々しく、帝國のためとか、社會のためとか、すくなくとも Humanity に近いだけの處で、どうか永眠するやうにと思ふ。生前の毀譽もとより心にとめるべき事でも無し、さりとて身後の褒貶また頓着すべきもので無い。唯、今は死ぬといふ斷末魔に至つて一切の煩惱なく悠然として笑つて死ぬればそれが人間無比の勇者だと思ふ。

是を友人に語ると、誰とても冷笑する。言はゞ相手にならぬ。煩惱界の獸めと遂に此方でも冷笑して、次第にあまり口にせぬやうになつた。が、實に天は缺乏を補ふて吝ならず、程無く自分と同氣の友人ができて、自分の說に心から同情を表してくれた、ことし二十九歲になつた矢部道任といふ男で。

二十九歲になつたと言ふのも悲しい、渠はもう此世に亡い人である。しかも其笑つて死にたいと言つて居たのが、毒を服して泣いて、泣いて、泣き死んだ、心を殘さぬどころか心を殘して、煩惱の無いどころか充分煩惱に包まれて。

是からその身の上を書かうとすると、先はや心に浮かぶのはその末期である。死ぬといふその前の日、例のとほり自分の所へ音づれて來て、快く飲食し快く談笑し、いつもの通りにして勇んで歸つて往つたのが永別のそも〳〵はじまりで、翌る朝は病氣危篤との急電、慌てゝ懸けつければはや半死半生、劇毒を服したとか言ふ事で口も利けず、遂に前いふとほり二十九歳を一期として空しく大志を懷いて不歸の人となつた。さりながら今でも耳に殘るやうなのは其末期の言葉で、彼は瘦せがれた手を何のためとも無く殆ど無意識にあげて、而もせきあげて泣きながら、噫、殘念、仁義（Humanity）のために死ぬので無いのが畢生の恨事だ。陛下のために捨てようとした命でもある。淸韓二國のために捨てようとした命でもある。乃至また非律賓の義徒のために捨てようとした命でもある。その目的が、悲しいかな、一つとして遂げず、くるしんで疊の上で狗死にをする、とても死に切れぬ。

この言葉を此世への名殘として終に渠は瞑目した。旣に是だけで凛すなはち矢部は一の血性男兒たる事がわかる。さかのぼつてその過去に就いて見れば、それだけの言葉を殘して死んだゞけの價値もわかる。

その出生は伊豫の松山で、[illegible]母の手に育つて性質はねぢけた方である。漢籍をば土地の何某といふ先生に學んだが、しかもその十九の年で端無くも先生と大喧嘩した、史記の荊軻傳の講義を聞く席上で。

つく〴〵と、矢部は荊軻が死を決して燕丹にたのまれ秦の始皇を刺しに行くといふ心事を想ひやつて、さながら我身の上のやうに感じて、はら〳〵落つる淚をとゞめかね、殊にはその悲壯な易水の歌に一しほ腸をかきむしられるやうに爲つて、我を忘れてその歌を幾度もくりかへした。

「風は蕭々として易水寒し、壯士一たび去つてまた還らず。嗚呼、わが黨の士だ。とても生きて還らぬと承知して、それで勇み進んで行く、實に俠客の模範といふべきものだ。風は蕭々として易水寒しか、壯士一たび去つ

てまた還らずか、嗚呼、風は蕭々として……」
いつまでも休めない。しばらく我慢して居た先生もこらへかねて、
「矢部さん、どうしたンです。後の講義ができません。好い加減にしたら、え、矢部さん」。
耳にも入れで相變はらず風は蕭々とつゞけて居る。ちれ込んで、
「え、矢部さん邪魔になるです、ほかの人の迷惑です。いつ迄やツて居るンですか、御よしなさいと云ふに」。
少しくねぢけた性とてをかしく癪にさはツた。
「先生、ですが是には感ぜずには居られません。えらい俠男兒、われ〳〵の師範です。感じたあまりにはつひ其心事も坐ろに推しはかられて……願はくば私も明治の荊軻となりたいです」。
「明治の荊軻、あの刺客にツ」と先生眼を圓くした。

其　二

「明治の荊軻といふ心で、この命を他のために捧げて死にたいです、刺客もとより願ふところ、願はくば他のため、他のためよりは寧ろ國家のため、國家のためよりは寧ろ皇室の御ためならば人の厭ふ刺客もとより希望です」。
「血氣とは言ひ乍ら、然う名譽心に驅られては困る」と先生些しく冷笑すると、矢部は凄まじい相好になツて奮然として、
「名譽心ですと、先生、あツ先生は然う思ふンですか。怪しからん、それは自家を以て他人を忖度するといふもの、他のため、國家のため、乃至皇室の御ために盡くすのが何で名譽心です。名譽はその成績によつて伴ふもの一片の赤誠は名譽の得失を顧るものでは無いでしやう。嗚呼少年だと是ほどに見くびられるものかなァ」と涙ぐんで獨語にて、

「先生、私に一人の兄とも父とも頼む人が有るのです。至誠熱血の人間で、他のため國家のため、皇室の御ためならば、一身を捧げても苦しくないと始終言つて居るのです」。

先生些しく釣り込まれた。

「ふム何といふ人で」。

「今は離れて東京に居ます、西野文太郎といふ男で、(この頃は西野がまだ刺客とならなかつた前と思しめせ)そりやもう皇室の御ためと言つたら氣ちがひです。人情の輕薄に移り行く世を憤慨し、機も有らば身を殺して目ざましを世に與れて遣らうと言つてるですが。私の希望もまた然うですな。皇室の御ためならば今でも死にたいです」。

「はゝゝ醉興だな」とあざ笑ツた。

「是はしたり皇室の御ために死ぬのが何で醉興です」。

「頼まれもせぬにさ」と猶あざ笑ふ。

矢部怒氣燃ゆるばかりになつた。「驚いた。頼まれなけりや皇室のために盡くさないとの御精神ですか。おどろいた。よしや頼まれずとも、また一言の禮の言葉を受けずとも、日本男子の至尊に對し奉る道と言ふのは一の元氣となつて存在する譯です。頼まれなけりやとは驚いた」。一層語氣を嚴にして、

「先生、と言ふも是ぎりです、改めて私は退學します。日本人の身分としてそんな腐つた腸を持つ禽獸の講義を聞けば耳が汚れる。腐れ儒者の穀つぶし」。つツと席を起ちかける。

「此奴無禮な言を」。

「無禮と思ふほど血が有るか。心事相應の罵詈だ。くされ儒者め」。

共儘出ようとするのを、飛びかゝつて引ツとめ、「待て矢部。師に向かつて無、無禮な。」

「待つてどうする。極惡の不忠もの、大日本の元氣を、待つた序に見せてやらうか。」

同時に拳は先生の頭上に飛ぶ。あまり意外にたぢろく

所を又二つ三つ手早く利かして、身をひるがへして逃げ出して「観念しろ、撲つたのは矢部ぢやない、日本魂が撲つたのだ、日本の元氣が處罰したのだ、大不忠のくされ儒者を」。

言ひすてゝ雲を霞、わが家へ逃げ戻ツた。先生の憤怒もとより治まるべきもので無い。しかも矢部道任その者の繼母には兄に當たるところで、その日の講義はそれぎり廢止になつた、頭から白煙りを噴かせて、詰問のため矢部の家へ行く事になつた。

矢部の繼母も父も丁度在宅して居たところで、一伍一什を聞いて、すぐさま本人を呼び寄せたが、繼母は繼母だけに一言の小言をも言はない、親父が眼鏡ごしに道任を睨めつけて、散々に叱り飛ばすのを氣味のわるいほど大人しく聞いて居たが、やがて小言も一段落付いたらしくなつたところで、そろ／＼口を切り出した。

「小言はそれだけですか」。

冷かし半分の口上に父も一入嚇となつて、

「何と吐かす。もツとまだ聞きたいのか」。

「聞いた處が同じ事ですから聞きますまい。日本男兒の心がけは一意唯むかしからの大和魂を養ふと言ふだけです。それに議論が反對した、言はゞ國賊ですから毆ツたのです。なぐられただけだからまだ仕合はせ、もすこし骨ツぽい人間なら、天に代はつて呼吸の根をとめてやるのです。親緣のよしみの義理でもありましやうが、私に小言を言ふとは更にその意を得ませんです、國賊の肩を持てば同罪は免がれませんからね」。

しばらく父は呆れて居た。

「道任、どうして貴樣はさうねぢけた人間になつたのだ。

言ふ言に事を缺いて國賊よばゝり……」

半ば言はせず「また然うぢやありませんか。皇室の御ために忠を盡くさうと言ふのを、苟しくも子弟を教育する身を以ツて、醉興だと」。

「おとツさん、もう何も仰やいますな」。

と、やがて差し出たのは繼母であつた。

其三

繼母は語を繼いだ。「こんな利口な兒に小言なんぞ仰やるもンぢやございませんよ、何から何まで知り切つてるンですもの。何しろ兄が說得しようと思つたのが心得ちがひなンです。ねエ兄さん、あなたがなまじツか深切ぶツて身のために爲るやうにと爲さるのが間ちがひですわ、人殺しをしようと何を爲ようと、利口な此兒の勝手にして置きやいゝンです、心からどうせ疊の上では死ねますまいからさァ」。

眞綿に針を包んだ言葉はいとゞ心を刺激した。

「たしかに伺ひました、おツかさん、どうせ疊の上では死ねまい、有りがたい、それが私の本望です。ね、國家のため皇室のため一身を野ざらしにする、是ほど嬉しい事は有りません。生まれ出でゝは如何なる義務を社會に對しておのおの持ツて居るかと言ふ事を思はず、一身の苟安を偷んで、食ツて寢て起きてそれから死ぬ、狗同樣の輩はとても噺になりませんや」。

「口が過ぎるぞ」と父が叱り飛ばした。「貴樣どうしても然う强情張るか」。

「張ツて張ツて張りぬきます。獻身的慈善に敵する奴ばらは皆惡魔、死、死命を賭しても爭ひます」。

「氣ちがひめ」。

「あはゝツ、蒼たる彼の旻天、誠忠誰と共にか語らんだ」と鼻唄めかして冷笑する。

牝鷄に晨される父は騎虎のいきほひ、今更その儘に濟まされなく爲ツた。凛として、

「よし、もう何も言はん。父や師の訓戒を肯かんものは家に置くべき道理も無い。どうでも强情張り通すならよし今日限り何處へでも出て行け」。

「うツぷ、どうせ其邊が結局だ」。

「何だと」。

「いや承知しました。それで涙金はいくら下さる」。

父は呆れてしばらく言句も無い。

「下さらんければよろしいです、無代をもツて捨てられませう。塵を捨てるのでさへ錢の出る世の中ですのになア」。

いよ／＼呆れる滿座をぎろ／＼と睥睨して「わるびれず出て行きます。したが一言言ひ殘して置く事といふのは外でもありません、道任はかねての希望を必ずともに貫くです。この腐敗して居る今日の社會に一人一點の明星となるのです」。

誰一人として。返辭もせぬ。

「は、はい、行きます」と起ちかけたが舌うちした、「木偶の坊が揃ひもそろつて、儀式的の取りなしさへ爲ないンだ。嗚呼嗚呼、腐肉、朽木、糞土の牆」。

最後の此一言が一族には聞きおさめであつた。

身支度して、きはめて平氣に、きはめて落ちついて出る事になつた。父は流石に今更心許無く、送り出すとも無し追ひ及んで來て、

「だが是旅費は」。

「いたゞきました」と微笑した。

「誰にツ」。

「あなたの紙入れの中から——用箪笥の。當然の事ゆゑ料らひました。二十圓有りましたが必要だけ、十圓だけを出しました。天地の飛行はもう出來ます。さやうならば御機嫌よく」。

飽くまで父を呆氣に取らせて、飄然として立ち出でた。

秋の末とて淺澤水の枯れ葭あはれに戰いで、影は見えないが五位鷺の遠音そゞろに戀しく、水に離れる浮霧も何處を目的とも無く迷ふやうである。

「叮やツぱり此所も易水だ。荊軻もこんな時に出たんだらうなア。寒いツ!、風は蕭々として易水寒し、壯士一たび去ツてまた還らず。えへツ、愉快だぞいツ」、

其四

東京芝櫻田兼房町の古河といふ下宿屋に矢部がその死

友と頼む西野文太郎が居るとの事に、それのみを心あてに遂々と上京して辛うじて尋ねて見ると、その二三ケ月前とかゝら西野は何處へか轉じてしまつたとの事に賴みの綱も切れはてた。いかんとも仕方無い。すご〳〵として、せめては序にまづ皇居をでも拜まうと、櫻田御門の邊まで來ると、御かゝへ車らしい車夫が二人で咄して居る、何心無く聞くと金玉均といふ言葉が洩れた。

　志士としてかねて慕つて居た名を聞いて、忽ち餘所事でなく思はれ、それと無く立ちどまツて耳を欹てる、とも知らぬか下司の高調子に、

「どうして分かりの好い人だぜ。あれ程だからあれ程の大事を國ではじめたンだ。また直だらうよ、國へ歸るいも。さうさ、今ぢや岩田周作と言ツて居る。身裝から言葉からまるツきり日本人で、そりや己などの車夫などにもよく目を掛けてくれるぜ、ほんとに。一騷動おツぱじめる時には己もあツちに一所に行ツて一六勝負をやツて見てエや」

「また始まるのか一騷動」と一方の車夫は稍目を圓くした。

「そりや聞く迄もねエさ、あの儘でどうして泣き寢入りに爲れるもンか。それにはよ、御前、始終忍びのものが朝鮮から來やがツて殺さうとしてるンだもの」。

「ぢや御前もいつ何時傍杖食ふかも知れねエな。おツかねエな」。

「へゝん、かまふもんか、死んだツて可いンだ、あの人のためなら」。

「强氣に惚れ込んだな」。

「また然うよ、言ふ芽の出るほど好くしてくれるんだもの」。

下司の車夫にも猶是ほどの氣慨が有るかと矢部はつく〴〵感じ入ツた。たちまちに思案を定めてその傍に差し寄ツて「あんまり突然ですが、あなたは金玉均さんの御車夫さんで」。

　相手は些しく怪訝がほで、「はァ」とのみ素氣無く答へ

た。

「うらやましいですなア、好い處に奉公して。私も實ははる〴〵御名を慕ツて來たンです、どうか書生にでも爲りたいと思ツて」。

「傳手が有ツてか」。

「そりや有りません。が、唯一心で」。

「そりや駄目だ。傳手が有ツてせへ容易ぢや無エンだ」。

「何も緣づくですから、どうか助けると思ツて、屆かない迄も御前さんから旦那に然う言ツて見て下さいな」。

「無法な事を言ふぜ。駄目だよ」。

「そこをどうか」。

「だツてもよ、氏も素性も知れねエものをどうして書生にしてくれろと願へるもンかな、つもツても知れそうなもんだ」。

「そりや御尤もですけれど……赤心を察してさへ下されば」。

「察しやうがねエぢやねエか」。

途端、その向ふ側の御待合と記した家から「岩田さんの御家來さん、御かへりですよ」との聲が響いた。

「おツと來た、いつに無い早い御立ちだな。ぢや兄イ暇の時に遊びに來ねエよ」と相手の車夫に捨て臺詞を殘した儘、どツかはと車の方向をなほした。

すはや音に聞えた韓士の志士金玉均氏の風采をゆくりなくも見る事ができるかと矢部は更に角心うれしく、立ちすくんだ儘になる間も無く、女中どもに送り出されて來た其人といふのは成るほど噂に聞いたとほり日本服を着た一個の紳士で、目の覺めるほど綺羅びやかな打扮で微笑を帯びて會釋して、さも身がろく車に乘る。

曳き出されて此處で別かれた以上は素より再び一書生の身をもツて面會する事もできぬのである。よし、思ひ切ツて當たツて見たら、又何とかして運をでも引ツつかめぬ事は有るまい。とばかりの決心はやくつか〳〵と差し寄つて、慇懃に禮をした。

「失禮でございますが、御願ひ申したい事がございまして、どうか御差しつかへの無い時、御邸でゝも一分間ほど申し上げる事を御聞き願ひたうございまして。かいつまんで申せば私は伊豫のもので、つねぐ\志士たらん事を望みますところで史記の荊軻傳を讀んで、非常に感奮いたしまして、終に師と父とに怒られ、放逐される事となり、賴るべき所も無く、つひに豫ねて敬慕する令名の下に身を寄せたいと思ふ計りに、はるぐ\と上京いたしましたので。突然で嘸御信用も爲さいますまい。が赤誠を御察し下されば」とばかりで涙ぐんで居る。

　その涙すこしく玉均を動かした。

其五

　突然とみづから名のりかけて身を寄せさせて呉れと而も往來ばたで、而も昔に聞こえた名士金玉均と知ッて、而も十九歳の一少年の身であッて、賴み入つたゞけでも旣に一奇である、木下藤吉が織田信長に身を寄せたその昔も丁度かうかと思はれて、さすがの玉均だけ稍差しく考へた。

　見れば少年いやしからぬ風采である。志士たらんと望むらしくは見えぬほどやさしげな美少年で、是を女にしたら如何ばかりの男を惱殺するかと思はれる程である。が、怜悧、敢爲の氣象は明きらかに眉宇の間に髣髴として、旣にその初對面の言動でさへ一種の奇骨の有るのをば隱構立てゝ居る。と思ふ儘玉均も無下には之を斥けなかッた。

　「身を寄せたいとは書生にでもなりたいと言ふのですか」と玉均から問ひかけた。

　「はい、どうか身を捨てゝも義俠を行ひたく、憂國の志士たる先生などの明星の光りの下に人間の盡くすべき義務を盡くしたいと思ひますので」

　玉均やゝ感じた顏色で「名は何と言ひますな」。

　「矢部道任」。

　「矢部、矢部」と一二回くり返して、「輕卒にまだ斷言

する事はできんが、折角志して來たといふのを、いはれなく其述ぶる所も聞かずに排斥するにも忍びない。今夜も池上の光明館に居るから、もし叫したいなら彼處へ來なさい」。

矢部はこをどりする程である。はした無さ過ぎると後で氣の付いたほど我知らず頭が下がツて、情にもろい身が又涙さしぐんだ。

・「何ともはや、早速の御承引、いや御禮の申しやうもございません。それでは御差しつかへの無いかぎり今晩にも」。

「はァ宜しい。急ぐから今は此儘」。

輕くうなづくや否や車夫は韋駝天、名ごりをしいやうな其人の影はたちまち見えずなツて了ツた。が何にしても嬉しい。足も地に着かぬばかりである。

「名士、名士、流石は金氏、えらいなァ、人を見る明が有る。少年と見くびりもせず、またみだりに怪しみ怖れもせず。膽だな、あの身體は。さて其處だて、今夜の會見が一大事だ、下手に出て見くびられては萬事休すだ。またどんな試みを行はれるかも知れないが、そこは當座のこちらも度胸だ。水はいかなる隙をも求めて下り、火は如何なる傳手によツても上る、どうしたツて一念だ。どうでも充分に意中を述べて、さきの心を動かさなくては」。

とつおいつ胸更にまた安からぬ。まだ時間も有る事ゆゑその儘二重橋際に到ツてはるかに皇居をば拜したが、さすが今はその夜の事が胸一杯なので、久しく駐まツて拜しても居られなかツた。況んや市中を散歩する氣も無い。すぐと又汽車で大森まで至り、池上の方向を聞き定めて置いて後、また夜の事を考へながら濱邊の方を漫歩した。

二三人漁師の若者が網をつくろひながら何氣なく高咄しをして居る。

「むかしの人は違ツたもンだなァ、さうかなァ、女すがたに化けて居ちや大抵氣ィゆるすからなァ」。

「ゆるさァな、まして美い女と來て居ちや押さへた蟟蚪だ。だからこそ忍び込んで易々と仇もうてたンだ、そりや手も利いてなくツちやいけねエけれど」。

「だが其女に化けた毛野とか云ふのは好い男でもあツたンだなァ、御めへら様なンぢやいくら化けたがツても化けおほせねエ」。

「うツす、御めへらと限ツて手めへの事を拔いたのがづうく\しい」。

「おらなら化けられる」。

「その黒さでか」。

「白粉てへものが有る。資本は目鼻だちと骨細だ、どうだおらなら然だらう」。

「ふざけやがら、骨細と痩ツぽちとは違はい。やせぽちなのを好い氣ンなツて骨細だとよ。また白粉を塗るとよウ。四斗樽で買はなけりや間に合ふめエ」。

皆高く笑ひ出して、あとは他のはなしとなツた。心無い話しも心有ツて迎へられゝば又不思議な材料となるもので、今更の如く矢部は感じた。

「おもしろい、全く然うだ。油斷させて忍ぶには女すがた、こりや奇妙だ。それには此乃公、人も美少年だといふ、こりや時と場合ひに因ツては、他日外國と交戰でも有ツた時、國家のため敵情などを探るのに、大いに化けるべしだなァ。髭は薄いし、體格は痩せて、長は少なし、膚は細し、指も纖し、顏色もおのづから白し、その資格に於いてこりや申し分無しといふもンだ。愉快な事に氣が注いたな。漁師どの、わが師たりだ。よし、又今夜の會見の時、この事をも嘲して見る。うまい、うまい面白いぞ」。

後につひに女装して七年間此男が清韓露の三國に忍び込んだ、その思ひつきの始めは實に單純な此時の一小事に過ぎなかツたのである。

其六

光明館のはなれし室に今風呂から上がツて來たばかり

で丁度訪問の客も無く、女中に背中など拭かせて居る金玉均のところへ、約の如く矢部は來訪したとの取り次ぎが有ツた。

直と承知して呼ご來らせる。いつも來訪する人は韓客で無ければ、日本の要路の人、さも無くば然るべき政客か壯士であるのが、打ツて變はツた美少年の一書生、その瘦身裝はさして好くもない、一種異形の人物と女中怪訝顏である。「席を遠ざけた方がよからうな」と玉均口の裡で獨語して、やがて其意を女中に傳へて席を去らせ矢部には輕く會釋した。

「私の所へ身を寄せたいと言ふ君の心事は大要ききほど聞きましたが、それに就てのくはしい仔細は。」

「その事でございます。或は口が過ぎる所も有りましたら何うか御ゆるし下さる樣に。過刻も申上げました通り願はくば國事に身を盡くす志士となりたいとのみ望みますので。一口に申せば他を拯ふがためにわが身を犧牲に供しても厭はぬ、否むしろ望むのでございます。それを不心得だと父や師に言はれまして、意見衝突の結果終に放逐されましたので」と夫から[illegible]刺傳に感じて師とあらそツて終に家を出た迄の一切を包む所無く述べ立て、

「時を待つために忍ぶならば泥にも荊棘にも潜むを辭しません。さりとて何うせいつか一度は死ぬ命、一の公益になる事で失ふのなら決して辭退しません。國を出る時から常の覺悟は是でございます」。

懷中かいさぐツて補綴の胴卷はづかしげも無く取り出だし、更に中から取り出したのは短刀と藥瓶と一葉の寫眞らしいものである。玉均は唯だ默ツて視る。

「此藥瓶はモルヒネで、御覽の如く是は短刀、死ぬ時の用意は常にそなへてありますので」。

玉均微笑した。

「それが無ければ死ねンのかね」。

不意に一拳膽を突く。が、動ぜぬ。

「死を見る事歸するが如く、いはゆる死に狃れぬといふ、それだけの魂を修養するには常に死に道具を持たん

ければ僞りません。又況んや場合によツては是で人をも刺しますもの」。

相手は默ツて微笑した。

殘る一品うや〳〵しげに取り上げ、一拜して包み紙を去り、更に二重に包んである錦の囊を解けば、中から出るのは畏いあたりの御肖像の一葉である。

つゝしんで其處へ置いて固く兩手を組み、

「草莽の身もとより御側に咫尺する事も叶ひませんに因ツて、さりとて一日も忘れ奉らぬとの心ばかりに勿體無いと存じながら斯くは肌身をはなさぬのです。半夜人しづまツた殘燈の前、御姿をかざり奉ツて禮拜を遂げ、右に利劍、左に死毒、雙方を眺めてつく〴〵と思ひ入る時の壯快な感覺はとても口では盡くせません」。

深くまた感じ來ツたらしく語句やゝよどんで、身ぶるひしたが、金氏の胸へもよほど感じた。

「是が赤心なのでございます、言ふところの頗る奇激なのはみづから知らぬでもありませぬ、毒を銜ふと凡眼に見られるかも知れんとは存じて居りますが、實は實、眞は眞、飾るも、飾らぬも有りませんのです」。

そろ〳〵と元のとほり一切を藏ツて更に携帶した鞄の中から四五十枚の寫眞を出した。

「是御覽くださいまし」。

金氏何心無く取りあげて見れば、是は又何たる事、見たのみで胸わるくなる癩病、梅毒患者などのその殊にはなはだしい姿なのを寫し取ツたものである。一枚として滿足なものは無く、柘榴の如く裂けた口から膿液の流れ出て居るのやら、泥大根を筒切りにしたやうに鼻の切れて居るのやら、鼻の落ちているのやら、毛の脱けあがツているのやら、面の腫みふくれて居るのやら目の腫れふさがツて居るのやら、疼さにたまらず死毒を試みたやうな顏して悶えて居るのやら、二本杖に縋ツて跛引きあるいて居るのやら、凡そ有りとあらゆる、きたならしい、うとましい、醜い、心もちわるい姿を描へてある。

是には金氏さすがに呆れた。半分で見るのを止めて、

さも不快げに、

「是はまたどうしたので」。

矢部はきはめて冷やかに、

「食事の時には茶とし、婦人を思ふ時には厳格な師友とするものです」。

金氏なほ心得かねた顔つきである。

其七

矢部はつく〴〵寫眞を眺め入りながら、

「此見るからは淺ましい寫眞を是までの數に至るまで集め、日常の友とし、師とし、又食事には茶とする其いはれと言ふは外でもございません。私しは神經が過敏です。子供の時からして感じやすく、三食にも不潔な咄しなどを聞くと、もはや食物も咽喉をさがらぬ程でして、みづから身の腑甲斐無さを嘲りました。神經過敏も物と事とに因る、こんな事が忍べないで、どうして大事に對して忍ぶ事ができようか、何も修業、心がけといふは此處だと、それから自分の一番きらふ所の此樣な不潔な痛病梅毒などの患者の寫眞を採り蒐め、故さらに食事の時には茶の如くにして必ず膳の傍に置いて眺めながら胸を据ゑさせました。もとより最初は胸わるさ一とほりで無く顔色も蒼ざめる程でしたが、物は何でも習慣で、一二週のうちには次第に感ぜないやうになり、終には是非とも眺めねば物足りぬ心もちのする迄になりまして、現在の患者を實地に見てさへ、更に不快を感ぜなくなりました。まづは如何なる不潔不愉快でも堪へ忍ぶ事は誓ッて出來る事と思ひます」。

可否は言はぬが金氏は輕くうなづいた。

「それで又婦人を思ふ時に師友とするとか言はれたがそれは。」

問ひかける程好奇心を動かし得たかと矢部もいよ〳〵乘り地に爲ッた。

「婦人をおもふ情慾をそれでみづから抑へるのです。淺ましい姿、世の人にうとまれる彼等梅毒癩病などの患

者と為ツた、その元はと言へば遺傳性のも有りましやうが多くは自ら潔な劣情を抑へる事ができない故であると思へば、國家のためには千金にも代へ難い貴い身に取ッて悚然として怖れざるを得ざる譯で、私としても人間、婦人を懐ふことも有る、その時にはいつでも此寫眞をならべて見ては翻然としてみづから思ひ絶えますのです」。

婦人の點に於いては花にしたしむ蝶のやうな金氏は流石この言葉だけは我身の上を言はれるかのやうで苦笑した。

「そりや無論さうである」とうなづいて、「段々聞けばすこぶる人の意外に出でた着目を有して居られて、僕もはなはだ面白いと思ふ。但し口にするは易く、行ふは難しで、君を疑ふでは無いが、こゝで一回の面會だけで、眞實に君がその決心であるかどうかは猶まだ分からぬ、それが又當然なので。眞實に義士と爲り侠客と爲ツて死なうとの君ならば願ふても無い名士、萬事を相談しても甚だ頼もしく、無論できる丈の御世話をしても苦しくない。が、今はまだ一切引き受けて御世話するといふ所までは至らないから悪しからず。」

「すると御手許に置いて下さる事は叶ひませんので」。

「食客となる事ですか。そりや可い。初對面ではあるが一種の氣骨の有る君と見たによッて、先疑ふ所無く君にかぎッて快く承知しましやう、食ッて居るだけの事ならば」。

打ち返して涙の高まさりする如く矢部の喜悦は極に達した。

「いえ唯それで結構なのでございます。天外の一孤客を更に疑はれず御拯ひくださる御大量には失禮ながら實に敬服いたします。唯是から一の下僕と思し召して何事にても御遠慮無く命ぜられて戴きたうございますので」。

玉均返辭は無く、何事かしばらく深く考へ込んで居たが、卒然として、

「しかし君、教育はどんなもので」。

「どうも餘り……中學の初年のころくらゐの程度で、

まづ廢めまして。その代り柔術や游泳のやうな荒い事はどうか斯うか」と笑ひ出す。

「外見によらんものだな、一見婦人の如くでなァ。特に君に聞きたいのは女禮式、琴、茶、花などは出來ぬかと言ふ事で」。

「それは何うも」と稍おどろく。

「是から大いに稽古して見ないか」。

「何ですかッ」と矢部の聲は我知らず際立ッた。

「琴や茶や、是は奇妙な、それらを是から習へとの御言葉ですか」。

「うム」と金氏は冷やかに。

すこぶる呆れた、「實に奇妙な。志士と爲ッて國事に奔走するのにそんなものを學びましたところが……」

「いやそれだから學ぶのだ」。

其八

國事探偵とも刺客とも爲らうと云ふのに武藝でも修めろと云ふなら兎に角、飛びはなれて琴や花や茶を習へとは此奴さすがは金玉均、あたり前の醋で殺せる代物ならず、いづれ深意の有る事と矢部もその儘だまッて居る。

「それらを學ぶ必要の有る仔細分からんかね。よし、分からんでも可い、分かるべき時も或ひは來る。とにかく僕から君に忠告する、君が志士と爲ッて死なうといふ其目的を遂げるためには夫等を修めて大利益有るのだ。僕の說にしたがふのなら、學費ぐらゐは補助してやる。やりたまへ、學びたまへ、さうして又その內には僕から君に依賴する事も有らうからさ」。

變妙至極とは思ひながら、この場合我意を張る事も非なるを思ッて、矢部も盲從する氣になッた。

「不才でそれらが私に取ッて何の益有るかは知りませんが、いづれ深い關係の有る事とも存じますゆゑ、兎に角仰せに從ひましやう」。

「しかし眞實熱心にやッてくれなければ困るがね」。

「請け合ッた以上は誓ッても」。

「よし、君の事ゆゑ嘘でもあるまい。それならば明日からでも。師とすべき人の心あたりも有るまいね。それに就てはそれら一切に達して居る、えらい婦人が有るが僕からその方へ紹介しやうと思ふ。もとは女官であッて今では民間に下ッて物など敎へて居る一の烈女で、新聞や何かでは頗る不評判だが、どうして其實中々すぐれたものである。異存有るまいね」。

「ございませんとも」。

「さらば是から直に行くさ。いやさ、驚くには及ぶまい、日本の諺にも善は急げと言ふでは無いか。就ては君を此處へ置いても可いが、國のものなどに見られて聊か思はくが有るから、費用はあげる、その人の近所に下宿でもして貰ひたい。委細は紹介狀に書いてその人にも賴むから」。

「御傍に居られぬのは些しく遺憾でございますが」。

「そりや修業する內だけだ」。

硯引き寄せ、何事かおもむろに認めた、およそ三十分ばかりの間、封じをはッて書く宛名を見れば矢部自身もかねてその名を國でも聞いて居た島田絲子といふ一女丈夫であるので、また坐ろに勇み立つばかりに爲ッた。

その紹介狀と共に抛り出した一束の紙幣、それも呉れるのかと潜かに矢部も不思議がる。

「たしか五十圓前後有ッたと思ふ、取りあへず學資として。無くなッたらば又呈げる。さも無ければ島田から一時用立てゝ置くがよし」。

矢部ほとんど呆れた。見ず知らずのものに、而も一書生に五十圓、その度量のほどむしろ凄いほどになッた。おめ／＼と手も出しかねるばかりの心もち。

「思ふところ有るゆゑ當分此所へ尋ねて來ないやうに賴む。をり／＼は島田のところ抔で會はうと思ふ。月に三回位はいつでも訪問する」。

「何とも早恐れ入りました。しかし此金員をいたゞくと言ふのはどうも些……」

「どうも些とは取りにくいといふのか。そんな事を言

ツて居たとて終に無駄遠慮に過ぎんのは決まツて居る。決定は早いがよし、取るべき時には直ちに取るさ。僕も今日終日奔走して疲れた氣味ではやく寐るつもりで、それ故君を除いてその他の訪問の客は一切謝絶させてある位だから、とにかく夫を持ツて早く歸ツて貰ひたい」。

今さら雑談もして居られなくなツて、さりとて又相手の威に撲たれて了ツてつまらぬ世辭など述べても居られぬ。

「左様ならば別段かにかくと申しますまい。只滿腔の感謝をもツて、仰せにしたがひ辭し去ツて、此足ですぐと島田さんのところへ參ります」。

丁寧にその紹介狀と金子とを推しいたゞいて懷中にをさめ、その納め了ツた頃には金氏はや其儘ごろりと横になツて居る。

「言ふまでも無いが先方で承諾した樣子と君が定めた宿とを早速通知してもらひたい」。

「はい、それは最うすぐと。さやうなればば失禮いたします。」

金氏無言でうなづいて居る。

やがて外に立ち出でゝ停車場へと足を向けたが、胸は只もう今夜の事で錯雜を極めて居る。金までくれた、むしろ無法に近いばかりの度量、言はゞ無理に人の肝玉をゑぐらうとする計りの處置ほとんど氣味のわるい程である。

「しかし兎に角本望が叶ツて、志士の仲間入りが出來かけた。今日といふ今日のうれしさは永久忘れられぬものだらう。卑屈きはまる故鄕の腐れ儒者などに對して胸が小氣味よく空いた。見ろ、今に乃公の成功を。鼻を明かせてやる其時がはや目に見えるて」。

其九

矢部が島田絲子を尋ねたのは夜もはや十一時に近い頃であツた、その場所は赤坂の一ツ木なので。

急用かと思へば紹介狀に過ぎなかツたが、文面によツ

て絲子もはじめて其意を領し、取りあへず玄關さきへ矢部を案内させ置いて、更に婢女に言ひつけ、奥まツた西洋づくりの閑室に洋燈など點させ、やがてまた其處へ導びかせた。

ぽツと出の田舎の一書生が如何なる運の神に愛せられてか、天下に名の聞こえた金玉均といひ、また此島田絲子と言ひ、屈指の人二人まで一日に面會しやうとは夫こそ夢のやうであると矢部は我と我身を怪しむばかり、此度はむしろ相手が女丈夫といふので却ツて氣おくれのするやうであツた。

絲子は年の頃四十二三、紬とかいふ織り物の袷に小紋を襲ねて着、黑木綿の紋付の書生羽織を着用して居た。黑木綿の羽織、第一に矢部をおどろかしたのは是だ。

近くへと頻りに呼び寄せ、猶遠慮して遠くへ坐りかけるのを强ひてもと言ふ調子で、

「深夜でもあり、また密々に御咄しする所も有りますから、是非どうか近く御寄りなすツて下さいまし」。

何と無く胸ぎツくりした。言はれる儘その座を近づけると、絲子は紹介狀を更に繰り返して讀んだ。

「委細承知しました。力の叶ふだけ充分に御世話もしますが、しかし金先生の御深意をあなたは御了解ですか。いえ、深意と言ふのは、ね、貴下に女禮式や茶や何かを學べと言はれたことの」。

「それを伺ひましたのです、しかし別に説明して下さらず、分かる時に分かると言はれましたゞけで」。

「御咄しゝても差し支へ有るまいと私は思ひますが、その前充分御決意を聞いて置きたうございます。弓矢八幡と昔の武士なら言ふ位に死を期しても金先生のために盡くしますか、それらを學ぶと言ふも空の事と思はずに。士は己れを知るものゝために死すとか、金先生は此手紙にも有るとほり非常に貴下の氣骨を愛するとの事で、勿論それなればこそ僅か一面識の人に金をも呉れたンですわ。」

「それはもう如何なる事が有りましても、誓約を變す

る事は有りません。御目にかけるだけの事さへ出來るなら、如何なる手段に因ッても赤心を御目に掛けたいと思ひます」と是から其素志、修養などを前に金玉均に咄したとほり又この島田綵子にも物がたると、やはり又大ひに同情を寄せられた。

後に至ッて矢部も思ひあたッた、金玉均が故さらに綵子のところに矢部を紹介した仔細を。金の言ッたとほり綵子は雲の上の事情にも通じ、又一の女丈夫で志士を好む、而も雲の上の御事と言へば死を賭しても忠を盡くさうとの素志は玉均も常から知ッて敬服して居るところで、一書生に似氣なく矢部が忠烈の念を綵子に因ッて激まさせ、その意氣を一入深からしめ、忠は必ずしも直接ならずとも可し間接でも、國家のためならば辭ますして死ぬとの氣概を養はせ、玉均その己れは言ふ迄も無く大望有り、やがて又風雲を叱咤する曉には國家のためと言ふを目的に己れのためにも利用しやうとの心算なのであッた。

何よりも綵子に深く感動を與へたのは矢部が懷中にし奉ッた至尊の御影である。同志の人物、前途多望の青年と思へば餘所ならぬ心もされた。可し、玉均の手紙にあるとほり、力のかぎり聖德の有り難いところなどをも是からゆツくり言ひ聞かせて、次第に其の意氣を鼓舞してやらうと決心して、

「若いに似合はず　至尊の御影を懷中にしたてまつる抔とは感服の至り、まだ〳〵然ういふ人士が有ると思ふと、嬉しくツて涙もこぼれそうですよ。どうぞね其御志しは末永く磨滅しないやうに願ひますよ」。

矢部に於ても綵子を見て一種言ふべからざる愉快な感が有る。此人が嘗ては、又今とても折々は　至尊に咫尺するかと思へば、その人と親しく物がたりする身も亦何と無く幾らか雲の上に近づいた樣な氣もちもして、丁度壁に懸けてある御肖像までも或ひは動くかのやうに見える。

凛然として「忠の一念は磨滅どころか年月を經てます

く加はる計りです。それは唯今空言は述べて居たところが何にもなりません、異日それを證する時も必らず有るに違ひ有りません。夫は兎に角、例の女禮式や何かを學べといふ金先生の御深意は如何なのでございます」。

「いえ、それは今に言ひます。かまやしません、女中どもや何か皆寐かしましたから夜が明けるまでゆツくりと御咄しゝませう」。

腹では矢部すこぶる驚いた。

其十

絲子さながら試驗をでも行ふ如く、「忠を盡くさうと抑もあなたが志しはじめた動機といふのが何れ有りましやう。又皇室に忠を盡くす心もちと言ふのは何ういふものか、あなたは如何です」。

「動機といふのも別段有りません。只何と無く、おのづからです。心もちと云ふは只それも何と無く好いのです。」つくり飾る心も無いゆゑ、無邪氣に答へた。が、强く絲子は感動した。たちまちに涙ぐんで、さも嬉しげに只うなづく。

「それが自然の忠、あゝ頼もしうございまする。日本の人士たるものは其意氣込みが無くては爲らないのですが、それを西洋がる人などは徒らに笑ひますのでね、つひ此程も殘念でたまらない事が有りましてね」。胸の不平を人に告げていくらか休めたい樣子である。

「はゝア、どのやうな事で」。

「御承知でもありましやうが華族がたの令孃を宅へ御幾人もあづかツて私も教育をして居りますが、どうかしてねェ忠君愛國の精神をその令孃がたに極はめて深く備へさせやうといふのが希望で、それ故教育の方針もすべてそのつもりで行ひ、國家の爲ならば、死を期して事にあたる覺悟を、よしや女性とて有たなければ爲らず、その夫をして忠君愛國の事業を爲さしめるのも貴女がたの手の裡に在る、劍に伏して死ぬまでも、日本魂をうしなツては爲らぬと毎でも斯う言ふのです。それを何とまア

悪く聞き做す華族が有るのですよ。御名前は言へませんが、而も侯爵で、何だと言ふと、島田はひどい事を言ツて聞かせる、忠君愛國をわるいと言ふでは無いが、婉しかるべき婦人に劍だ短刀だと劇烈なる事を教へるといふ法が有るものかと言ツて、突然退學させました。私もくやしくてならず、詰問に行きましたの。嗚呼なさけ無い侯爵殿である。皇室の藩屏とも言はれる方、又況んや華族中でも上流に位する御身分、又況んや公卿華族たる御家柄であツて、其御言葉とは何事でございます。似非西洋流の教育を受ける所をも差しとめ遊ばすのが當然でありますのにと、それから侯爵がいろいろ分疏するのをびし／＼說破し、終にあやまらせ、更に又令嬢を頼むと言ふのを一旦は謝絶し、又さうでも無い一人でも忠君愛國の思想を有つ人を養成するのがやはり忠だと思ひ直して、それから又引き受けましたが、何と何うでしやう」。

「嗚呼」と矢部はきはめて深い感歎の聲を我知らず洩らして、感歎の聲は熱涙となツた。

絲子もさすがに涙ぐんで「志士となツて身を御捨てなさる事結構、あなたも然うして御死になさい。高い聲では言はれませんが、日本と朝鮮との關係から何うしても淸國との開戰は避けられませんのでね、急な事でも有りますまいが、それはもう表面にあらはれて居ない。裏面の支度はいろ／＼行ツて居るのです。全く安閑として居るべき時では無いところで、一入あなた抔も頼もしうございます」。

矢部意氣燃えるばかりに爲る。今にも戰爭のはじまるやうな心もちで、さう爲ツたら如此如彼と刹那にいろいろな空想が湧いたところで、料らず思ひ出したのは何か必要の場合には自分など女裝するのに適して居ると今日の晝間大森の濱邊で考へ出した事であツた。

「貴女」と尋はれるやうに言ツて、「飛びはなれた事を申すやうですが、異日必要の有る時には國家のため私は女裝でもして敵情でも探らうかと思ひますが」。

俄然絲子は面色變へた。

「まァあなた然う御かんがへ」。

「はい」。

「あツ、おどろいたツ」。

矢部には更に合點が行かぬ。

其十一

「驚いた」と又絲子は重ねて、「金玉均さんがあなたに其樣な事は言はなかツたでしやう、女裝しろとも何とも。さ、御咄し爲やうと思ツたのはそれで、畢竟先生から私への御たのみもそれなンですよ」。

「えツ」と矢部もまた驚く。「何ですと、夫では金先生が私に女裝させるために貴女へ御たのみに爲ツたンですとえツ」。

「ですよ」と聲をひそめた。金先生はあなたを一目して女裝させて間者に遣ふには倔強と考へて、私にもその意を通じ、よく精神を深く見た上で、その秘密を明かせとの事なンですわ。もう可いから明かします。女禮式や何か習へといふのはそのためです、それから身體のこなしを極めて掛からなければ化け通せられませんからね」。

絲子も機先を制せられた氣がしたが、矢部もまたその感が有る。が。實に、實に、ふるへる程うれしい。おもしろい、且つ金玉均の眼力、絲子の度量、それに又怖いやうで。

「よツく分かりました、一生懸命に修業して芳志に答へます、決して決して倦まず疲れず」。

「しかし女裝の御かんがへが貴下にも御有りでしたのですね。兎に角是からは婦人の態度を學ぶのが何よりでそれ故金先生からも手紙に矢部は女禁制だと言ツて居るが必要次第迷はぬぎかり公然と許して女郎買ひでも何でもさせてくれと此とほり書いてありますよ」と失笑した。

手遊物(おもちや)にされるやうな氣がして、一向に信ぜぬ體、さらば此とほり其文面のところを出されたが、更に讀めない、その筈耶馬臺の詩のやうな秘密な書き方なので。

「あ、さうだ、讀めますまい、秘密書だツけ。それぢ

や先讀まぬとして、まツたく嘘でないのでよ、宜うございますか」と又失笑された、矢部も終に笑ひ出した。
「何から何まで駭くといふのみです」。
「しかし好い口實が有ツて遊べますわ」。
「飛んでも無い御許しが出たものです」。
斯う受けこたへは爲たものゝ、心中々それどころでない。
「いよ〳〵女装のできるやうに爲りましたら、朝鮮へでも參るのでしやうか」。
「私にはよく分かりませんが、是非然うでしやう、事に因ツたら清國の內地へでも、旣にその例が有るのです。金玉均さんの身を狙ふ同國人の曲者が有りましたところ見破られて素早く逃げて、妙に遠くまで行ツたもので、露領の何とか云ふ所へ落ちましたの」。
「浦鹽ですか」。
「いゝえ、覺えにくい名で、忘れました。しかし捨て置けない。すると丁度其地に醜業婦に交ツて居る女の間者が居たもンで、それから人をやツて逐々と密告し、その女の間者が勇んで承諾しましてね、時機を見て刺し殺さうとする內に、あなた殘念にも敵にあざむかれて、あちこち引きまはされ、とう〳〵行方知れずになりましたの。多分殺されたのでしやう」。
「いつ頃ですそれは」。
「つい近い事、去年です。別段にめづらしくも無い事ですけれども可哀さうですわねヱ」。
「醜業婦と一口に言へませんな、えらい烈女ですな。嗚呼婦人でさへ然ういふのが有るのに、思へば思へば故鄕のくされ儒者、ちツ罰あたりな奴」。
「そこでね、矢部さん」と絲子は一段あらたまツて、「事が然う分かツた以上は必らず赤心をもツて貴下も萬事爲さツて下さるのでしやうね。勿體つけるのでも有りませんが、金先生と言へば天下屈指の志士その人に貴下も知られたのですからね。さうすれば明日からでも日々私どもへ通ツて御出でなさい。止宿させてあげるといふ

事は御承知のとほり令嬢がたをのみ御預かり申して居る私どもの事ですから少々不都合ゆゑにね。それから教授の時間は午後四時から二三時間の事としましやう。それでどうか一日も早く」。

言葉途絶えれば我のみ顔に只ひとり夜の寂寞をやぶる時計の刻み、心づいて時刻を見れば、既に二時半を過ぎて居る。

「おゝ大層更けたこと、と言ツて夏でありませんから暁方まではまだ中々。御やすみなさいますかすこし」。

「いえ、どういたして。いツそ今晩から御苦勞でも稽古のはじめを」。

「そりや可いでしよ」と絲子も勇んで、まづ女禮式の教授となツた。

其十二

膽から揉み出した熱心は著しき進歩となり、二月ほどの間に矢部もその修める女禮式をはじめとして、茶、花、琴の三科目に至るまで大方好い加減に熟して來た、丁度朴泳孝と打ち合はせる事が有ツて二三の同志と共に金玉均は二月ほどの間都門を去ツて京都の地に行き、十二月の終りの頃歸ツて來て、島田絲子を音づれた。

何よりも先なのは矢部の身の上で、萬事の修業が大いに進んだといふので玉均も悦んだ。

「何も矢部をして女禮式や茶の教師たらしめるのでもなし、言はゞ方便に過ぎンのですから、程よいところで女裝させて、かねての目的どほり使ツたら可いかと思ふンですがどうでしよな」と金玉均まづ口を切ツた。

絲子もさう言はうと思ツて居た矢先とて、その尾につゞいて、

「御同感でございます。變生男子と言ツても可いくらいの體、それに本人が非常な熱心ですからもう大丈夫でございますよ。此間の夜、そツと人を遠ざけて、婦人の服裝をさせて見ましたところ、大變に似合ひますの。唯まだ困りますのは髮の毛ですわ」。

「なるほど是は困るな。まだ今の儘では附髷とか言ふものも附けられますまいな」。

「できませんね。毛を伸ばしてやう〳〵附髷とするまでに早くも三月は要ります」。

「勿論急ぐでも無いけれども」。

密話の室とて戸口の錠も下ろしてある。外から下女がほと〳〵敲く、起ツて絲子が錠を開ければ、

「矢部さんが御出でになりました」。

「あ、さうかえ、すぐと此所へと」。

下女が引きさがると程無く矢部が入ツて來る。戸はまた前の如く牢く鎖された。

絲子と玉均とに丁寧に禮を施して、やがて矢部は絲子に向かひ、

「御使者により宙を飛ぶ計りの心もちで參邸いたしました。金先生の御歸りをば一日千秋の思ひで御待ち申して居りましたので」我知らず聲が付いて、言ふ物ごしも甚だやさしい。金氏笑みかたむけた。

「妙々、男装の婦人と見える、僕も早く君を見たかッたが、是程よく僞らうとは思はない、島田さんの天晴の薫陶實に大いに感謝すべしだ。ところで、君、矢部、あらためて僕から御咄しする事が有る。」椅子を向けなほした。大方は島田さんからも聞いたから無益なところは言はぬとして、其髪の伸び次第まッたくの女裝して、いよ〳〵吾々のために働らいて貰ひたい。朝鮮の運命次第に因ッては日本も如何なる難境に陷るかも知れんと云ふのは君とても知ッて御出でだらうから、やはり痛痒を共にする吾々のために君が働らくのは君が常にいふ至尊に對し奉る間接の忠義なのだからね」。

御ためごかしと言はゞ言ふ、さりとてそれに違ひないと矢部も心地わるくも無い。

「誓ツてそれは、身を賭しても」。

「もはや君を一味の人と思ふ故にね」。

「ありがたうございます。如何なる事でも力のかぎり」。

「差し當たツて頼みたい事も有るが、その髪の毛の伸びん間は奈何とも仕方が無い。大秘密の事ゆゑ委しくは今言へぬが、兎に角支那へ行ツて貰ひたいので、それだけは今から心得て居てくれたまへ。差しつかへ有るまいね」。

さも嬉しいといふ様子で、「差し支へ有るどころではございません。唯すこし困りますのは支那語で」。

「筆談で間に合ふさ。一寸した會話の書物は吾々の方にあるから島田さんの御手許まで廻附して置かう」。

「それなれば好都合でございます。行く迄に潜心熟讀して置けば……」

金氏何故か微笑した。「深く氣にするにも當たらんよ、大いに支那語を用ゐる必要も無いのだから、主として君を紹介する人は日本語を話す人だから」。

「なるほど在留の日本人で」。

「さうでも無いがね」と又微笑して、「今それは聞かん方が可い、只君がその心得であれば可いのだ、腹が空いた。島田さん、三人で洋食でも食べに行きましやう、ね御一所に、矢部、君も來たまへ」。

三輛の車が命ぜられて、一同何處とも無く出で去ツた。

其十三

大磯の某子爵の別莊の一閑室、もとより夏を旨として造ツた見晴らしの好い處で、今六月とは言ひながら障子殘らず明けはらツて、床柱に身を凭せながら、一美人と物がたりして居る一個の紳士は岩田周作、卽ち亡命の韓客金玉均。

「いくつ位に見えるの」と何やら問ふ。

「さやうでございますね」と美人はしばらく小首を傾げて、「二十二三でゝも」。

「ふム、老けて見えるかの」と深く感じた様子。「が美人だろ」。

「おほゝ、もう御自惚で……申し上げやうと思ツた矢先を挫かれて何とも最う」。

「僕の妾と言ツて怪しみも爲まいな誰も」。

「仰やらずとも誰だツて、直ともう然うと思ひますわ」。

「な、なぜツ」。

「御前さまがあんな美くしい方を打ツ捨ツて置く法が迚も。御評判ぢやございませんか、御婦人の事に御かけ遊ばしては。おツ、何日か可笑しい事がございましたよ伊藤さまが御前さまの御噂を申しあげて」。

「伊藤とは、伯爵か、博文伯か」。

「はァ。艶文に於ては乃公も隨分富んで居るが、亡命して他國へ行ツて居る間には何う有らうか。相應に驅り立てるだらうとは思ふが、しかし金玉均ほど遣れるか何うかまだ解らない。金は兎に角亡命の外人であツて日本の婦人を撫で斬りにする。又よく撫で斬りにされる。と仰やいましてよ。席にいろ／＼な方が御出でゝしたが、皆さま大笑ひで、而も何れも樣皆御前樣の御手の内には敬服であらせられましたよ」。

條に擦り足の音が聞こえて、やがて一人の下婢があらはれた。

「奥さま、さき程の荆子さまが」。

「御見えになツたの」と美人はふり返ツて、更に玉均に向かツて、「御歸りですと」と微笑する。

「どうぞ此處へ」。

「御待ちかねよ」と又にツこりして、「それぢや直御通し申して」。

下婢は心得て去る、間も無く徐ろに入ツて來る一美人。言ふ迄も無い舊の矢部道任、今は間部と僞姓して、名は荆軻に因んで荆子と呼び做す、明治に珍らしい怪物である。

水色セルの單衣に御納戸繻珍の帶、赭熊づくりの反りかへる程の鴨脚がへしで、一見どうしても婦人である。しとやかに、「奥さまどうも先程は。つい遲くなりまして。子爵さまは唯今碁をもう些しで御仕舞ひにならせられるからとの事で、もう程無く御歸りになりましやう」

と言ツて玉均の方をも見た。
「ふム碁か、久しいもンだ。それなら待たう」。
「私は、さやうなれば一寸あちらへ退ツて居りまして」と其奥樣と言はれる美人が、如何なる粹か、粹を利かせる。
「はゝそれでは」と玉均も引きとめない。
「荊、もすこし此方へ」と玉均は矢部を近づけて、「今徒然のあまり今の人に試みて見た、君を眞に婦人と思ツて居るかどうかと」。
「は、如何でしたか」と且微笑し、且前後を見まはして言ふ。
「面白いな、眞の婦人と思ツて居る、その語氣から推しても」。
「眞にでしやうか」。
「眞にだ、今こそ子爵の愛妾ではあるが、以前は藝妓までして來たあの人さへ眞の婦人と思ツて居るくらいなら充分だ。支那や露國へ行けば猶の事わかりはしない」。
「唯そればかり苦心して居ります、馬脚を露はさないやうにと。子爵が御愛妾に實を告げになる事はございますまいな」。
「どうしてそれは。國家の一大事だ。一婦人などにどうして」。
卒然として人の來る氣色、見れば主人の子爵である。
「おツ金先生御待ち遠でした。しかし美人が御相手ですから、あはゝゝ」。
「しかし書にひとしき美人、之を觀るべし、之を弄ぶべからず」。
「偶にはそれが可い、韓國の社稷のため、あはゝゝ」。

其十四

子爵は陸軍少將で、劇烈な帝國主義の人である。座が定まれば餘事は語らず、「此室での咄しならば洩れる氣づかひ無い。何にせ、御打ち合はせ通り直にも矢部君を遣るのですな。兎に角一應の順序として金先生貴公から御

咄し下ださい」。

王均うなづいた。やをら潜める聲の底には一種言ふべからざる凄味も有る。

「矢部、いよ／＼行ツて貰ふのだ、支那へ、君に。ところで最早君の心底も解ツて居るから打ち明けるがね、支那では日本の國防の猶よく備はらんのに乘じ數年を出でずして日本を侵掠するつもりだ。連坐するのは我國朝鮮さ。目にこそ見えね、東洋の危機は一髮に係るといふ位で實に國家のため君が如き志士は珠玉よりも貴い、僕の咄しから此子爵閣下も非常に君に望みを屬して居られて、殊に君の女裝も最早充分によく出來るやうになツたから速かに派遣して任務に當たらせたいと言ふのだ。美事行ツてくれるだらう」。

決然として、「かならずです。一日千秋と待ツて居りました位」。

王均語を繼いだ。「行く先は遼東半島で、有名な牛莊(にうちやん)といふ處でね、其處に日本で言へば鎭臺と言ふべき所に奉職して居る李朴といふ武官が居るその人を尋ねて行くのだ」。

子爵は急に言葉を挿んで、「その李朴は乃公も知ツて居るから金先生と共に乃公からも添書をあげる。そこで同人を尋ねて行く用事といふのは支那で朝鮮や我國に對する軍機がどの邊まで進行して居るかと云ふ事を探るためだ。特別の便宜と言ふのは其李朴と言ふ男は例の袁世凱ね、あれと親友で、又た宋慶といふ將軍には大いに信任されて居て、參謀の格にさへ用ひられて居るといふ點さ」。

矢部やゝ當惑した。相手が敵國(と若し言へるならば)の參謀とも言はれる武官である、其處へ行ツて軍機を探ると言ふ事、まづ手を下さぬ初からして困難は知れて居る、困難は厭はない。只それ重大な使命を完うし得るか何うかそれさへも覺束無い。

「困難と思ふかな」と金は顏色を見て取ツたか笑ひながら言ふ。

「困難と思ひまさァ」と子爵が。

玉均猶聲忍ばせ、「心配したまふな、その李朴といふのは○○人だ」。

「ひえツ、それで支那の武官」。

「化けて忍んで居るのだ」。

矢部は水浴びせられるばかりの心もち。今は言句も出し得ない。

子爵はまた微笑を禁じ得ぬ。「それが我國の遠謀なので他日の戰爭の避くべからざるを知ツて、既に十年も前から志士と言ふべき男を見たてゝ遣ツてあるのだ、李朴も今は純粹の支那人で、もう兒が二人も有るとの事だ。支那に取ツては所謂獅子身中の蟲だが、日本のためには無比の忠士だ」。

矢部のおどろき益々加はる。且は敬服に堪へず、また勇みも添ふ。深く嗟歎の聲を洩らして、

「やれ何うも。ても然樣でございますかなァ。それならば譯も無い……」

「ところが」と子爵はおさへて、「支那の警戒は又非常だ。知らせたいと思ふ秘密が有ツてもうツかりとは信書にしても出せんので、隨分悶えて居るらしい。だから特別な使者を立てるので、又氣を利かして覺られんやう行ツて貰はなければ爲らない。覺られたら死ぬ、此心無くてはならんのだ」。

その後をば玉均が受け取ツた。

「まづ李朴へ近づくには旅宿から使ひに僕の第一の書狀を持たせてやツて兎に角呼び寄せ、來たところで、第二の書狀を見せるのだよ。第二の書狀に秘密の用務の事を書いて置くから、それは是非とも手わたしでなければ危い。それから種々の秘密を聞いたら、及ぶだけの手段を盡くして書き記し、それも亦萬一他に奪はれても解からんやうにとね。豫想すべからざる臨機の處置は素より膽をもツてするのみさ」と一息吐いて珈琲を飲む。

其十五

金玉均は些しく考へて、「或ひは先方の都合で、君をして李朴が更に支那內地、もしくは朝鮮、又は露國へなども入り込むやうに依賴するかも知れんが、今は成るべく手間取らぬやうにし、肝心の用向き、卽ち日韓二國に對する支那の軍機がどの邊まで進行して居るかと云ふ事だけを探ッて、もたらし歸るそれで先充分だ。子爵」と秋子爵の方を見て、「その方が御都合でしよ」。

「まッたくです」と子爵秋少將は點頭いて、「御承知の如く何と無く此頃の形勢が暗におだやかならぬ兆候を示しとる際ですから、兎に角一旦速かに立ち戾ッて報告して貰ひたいです。矢部君、そのつもりでな」。

「何れとも貴命の儘に從ひます。應變の手段は素より只今申す事も出來ませんが、一片國家に盡くす熱情、また知遇に對する感謝、その箭竹心を操として誓ッて效果を收めて歸ります。併し出先の事、或ひは不慮の事が無いとも限らず、もしその樣な場合に遭遇する事がありましたなら、斷言します、唯一の死、死を期して御迷惑にならぬやうに致します。これだけは誓ッて」。

「それであればこそ賴む」と宛も嬉しげに子爵は笑む。「どうせ一戰爭有る。そのため、君、大事な命だぞ。已むを得ん時にこそ死ぬべしだ、慌てゝ失ふは勿體無いさ。表向きの武人は武勳も世に赫くが、君がたの方は然う行かぬ、ところを其樣な利慾や名譽をかへりみず、一片の至誠から軍事探偵と爲ッて外國に行くといふ日本魂は深く敬服するといふ事を乃公は君に餞別として一言する。その代はり君の成功如何によッては乃公からも上聞に達するから」。しみ〴〵として言ふ。

猶色々な秘密の打ち合はせが有ッて後、酒宴になッたが、素より矢部は女裝して居る事ゆゑ、その前とは樣子ががらりと變はッて、飲食する工合ひまでが宛も〳〵しとやかに肅ましい。意味に於ては祖道の宴である。が、秘密を期する事ゆゑ子爵はじめその席に陪する我が愛妾

にさへ其邊を氣ぶりにも見せぬ。

潜かに拵へた手荷物は既に停車場前の茶店に預けてある。子爵の妾などには一寸した用で東京發神戸直行の終列車に乘り込む事に言ひ做して、その夜すぐに出發した。

その夜一夜の矢部の感慨は實に千萬無量であツた。かねての希望がやうやく達して、身は女裝までして國事に盡瘁する事を得るやうに爲り、今や隣國とは言へ、外國たる支那へ渡ツて、而もその軍機の秘密を是から探らうと云ふ、愉快とも名譽とも言ひやうの無い、境遇に立ち至ツたのはそも〳〵夢か將現か。一大事を依托されて無經驗の背に負ふて起つ、而もその任務は兩國の外交に偉大なる關係を有する事と思へば、何と無く空おそろしい心もちもして、同時に又それ程の大事を委托した金玉均の胸懷の宏大無邊なのが、殆ど神靈の活動する如く思はれる。

夜行汽車に美しくて且妙齡な婦人の身を以て乘り込んだものと見えるので、一車中の人やゝ怪しみの眼を以て迎へたが、さすがに美人と見える一德には快く席をも讓られた。婦人らしく見せる身だしなみは此處ぞと思ふので、席は讓ツてくれても故意と男子の方を避けるやうにし、良家の妻女と見える人の側に會釋してしとやかに坐した。

夜行のさびしさ、その人の娘と見える女の兒も既に眠ツてしまツて、妻女ひとり退屈して居た折とて好い噺し相手が出來たと悦ぶ樣子で、妻女の方から言葉をかけた。

「御一人でございますか、嘸御さみしう御座いましやうねェ」。

「はい、急用の出來ましたもので」。

「御遠方でございますか」。

「はい」と言ツたのみで迂濶とは言はず、まづ相手から調べに掛かる。「やはり御遠方で」。

「私どもでございますか。京都まで」。

「おや左樣で。私は神戸まで。女の夜行汽車の一人旅は本當に否でございますわねェ。しますると京都までは

御一所に参られて御蔭さまで私も心細うございません、おほツ」。
「いえ、私も御同様に」。
「あの明日何時頃神戸へは着いたすので御座いますかねエ」と故さらに空とぼけて。
「ほゝゝ私もつい存じませんで――何時とか申しましたが。その癖この街道を只今始めて旅行いたすのでもございせんけれども、婦人と申すものは意氣地の御座いませんもので、いつも御同伴にもたれて居りますもので、ほゝゝ」。
「さようでございますねエ」と嫣然微笑した風情は女も惚々となるほどである。

其十六

身を謹しむので汽車の中でもさながら物思ひでもある様子を粧ツて、成るべく人と口をも利かぬ様にして、あくる日の午後矢部も神戸へ着した。何處が氣に入ツたか例の同車の夫人もしきりに親しい言葉を述べ、京都で別れる時はわざ〳〵其良人の名刺までを呉れて、是非訪れて來てくれとまで言ツた、その名刺を見て又も驚く、その人と言ふのは音に聞こえた非役の軍人で、何を目的とも無し常に日清韓の三國を來往して居る人で、その人と金玉均とは政治上との意味から是また親しく交際する間がらとは矢部も既に玉均から聞いて知ツて居たのである、一驚を喫したが懐かしくもある。我身の上を名乗りたいのも山々ではあるが、辛く控へて、例の僞名たる間部荊子といふ名刺をわたして、飽くまでも一婦人の體で其儘に袂を分かツた。
その夜神戸の一旅店に止宿したが、入浴を勸められても固より應ぜぬ、二月や三月ぐらい身の垢は落とさずともとは豫じめ決心して居る事とて。
內地を離れる迄は一々止宿する旅宿を知らせと玉均にも言ひ附けられて居るので、此夜まづ第一回の電報を大磯秋子僑別莊方金玉均宛にして發し、やがて程無く臥床

に入ると、怪しくも秋子爵の名義で返電が來た。必要も無いと思ふのに返電、さても何事かと胸やゝ轟いて、前後見まはしながら開封して見れば暗號の長文である。急いで暗號表を胴巻きから取り出して、對照して譯し出せば、偖も意外、左の意味が出た。

「女裝男子といふ事が當地(大磯)の刑事巡査に知られその意味行く先の警察部へ打電されたから注意しろ。思ふに高等探偵も尾くであらうし、又調べられるかも知れぬが決して狼狽するな。已むを得ぬ時となツたら乃公が渡した添書を秘密に知事か警務長に見せろ。兎に角大至急內地を離れる樣にしろ」。

さすがの矢部も舌を捲いた。女裝男子と知られたのは警察眼が鋭くては、乃公自分の化け方が拙くてか、但しさばかり拙いとも思はれず、然らば警察眼が一歩を抽くか、何しろ一大戒心を要する事で、兎に角調べなど受けぬ樣に逸早く日本を去らねば爲らぬと、早翌日の出帆が待ち遠で堪らなくなツてその夜は目も合はない。

やがて翌る日と爲ツて無事出帆する事とも爲ツた。只ならば船に乗り込んで一安心すべき處を、一切に戒心を懈らぬ處から船中の人ことごとく探偵のやうに見えて、唯薄氷を踏むやうな心もち、次第に乗り出すに從ツて人情として稍心も落ち着いて、更に又長崎などへ寄港する度毎、またをかしな奴が乗りはせぬかと、見ぬふりして見る眼がいとゞしく鋭くなる。

しかし無事であツた。仁川へ到着して漸く飛行自在の氣もちに爲ツて、且は始めて見る韓土の風物の珍らしさに身長一寸も育ちさうに思はれる。一二時間休息したゞけで別の船に乗り換へてその儘目的地へと急がせる間も一々重要な視察をばゆるかせに爲す、同舟の韓客淸人などの談話の模樣にも解らぬながら耳を傾け、又それらの烟草の喫みぶり、手眞似の仕方に至るまで一々細かく視察したが、兎に角美人の獨旅、日本の名物たる醜業婦としか思はれぬので、色々な事言ツて揄揶はれるだけが、つまりは巧みに化けた効と思へば、煩はしくも無ければ

癪にもさはらぬ。
いよ／＼目的地へ到着して李朴の居るといふ淞河といふ處を尋ね、程近くに在ツた金花坊といふ旅店へ投じ、金玉均と秋子爵とに言ひ附けられた通りの手續きで、直ちに添書を使丁に持たせてやると、半時間ほどで返書が來た。簡單ながら日本文で、
「委細承知仕候今夕八點鐘より光臨可被下萬縷其節御咄可申上候」。
「日本文は可い。八點鐘はやツぱり支那にかぶれて居る。うツかりと書いたのだらうが、其うツかりと云ふ所に着目すべき所が有る。知らず識らず感化を受けるのは誰とても同じ事だが、此所だて、大いに注意すべき所は。或ひは其居る處に慣れていつか飜へすとも無く、志しを萎やすに至る事も是だから有るのだな」と暫らく深く思ひ入ツた。

其十七

李朴の密室に、はや矢部と兩人初對面の口誼も濟んで重要な談となツて居る。李朴もとより日本人、談は小聲の日本語で、
「金玉均先生も嘸かし御辛勞でしよな、僕からも色々通信してあげたいと思ふ事が有るのですが、殊に此頃は政府の取締が嚴重なので——甚だしきに至ツては日本行きの信書は開封する事もありますからな」。
「そのやうに金氏からも秋子爵からも承りました。無論死を期して參りました事ですから、何を伺ツても御迷惑になる樣な事は致しません」。
「あ、さうです。僕一人の迷惑で無く、な、それそのために國籍を脫して支那人となり支那の軍務官に住み込んで居る僕でしよ、國家危急の場合ひ早く露顯して事を破るは此上も無い不利益ですからな」。
危急といふ語は肝にこたへた。

「危急、さはめて危急なのですか」。

「充分危急と言へますな」。李朴は宛も前から然う思ツて居るので、今更驚いて言ふ程の事でないと思ふらしく平氣で居る。

最早見せやうとて用意してある軍機の秘密書類は座右に堆くなツて居る、其一つを取り出して、

「まづ是が重要の件ゆゑ最初に御咄しします。書取りますかな」。

「はい無論」と慌てたやうに手帳を出す。「是御覽なさい、此繪圖、是は二ケ月前に調製して我々の方へも回附して來たのです」と李朴がやをら繰り開く地圖をさし覗けば思ひ設けぬ日本ので、日本而も中部ので。

李朴は一々指點して、「それ此處が敦賀港で此處が金澤鎭台でしよ。それから其反對の方面、其處が名古屋の第三師團で、其傍が武豐の軍港でしよ。是だけの地圖を作るまでの苦心は一方ならなかツたのです。北は若狹の小濱から越後の新潟に至るまでの沿岸、南は志摩の鳥羽港から駿河の淸水港に至るまでの沿岸、是だけの日本々土の所謂中腹を此支那では大いに目掛けて居るのです」。

「目掛けるとは何ういふ事で」。

「ですからな、是此處から斯う中斷して朱線が引いてあるでしよ、此敦賀から反對の名古屋に至るまで」。

「なるほど有ります」。

李朴一層聲をひそめて、「この敦賀名古屋間が日本々土中一番幅の狹いところで、それ故精しく斯う地圖にしたのです。開戰となれば此支那の今の戰略まづ此地點に取ツて掛かるでさ」。

矢部もぎよとした。水浴びせられる氣もちがして、

「狹い、如何にも本土中では此邊が。それでは此處を衝くのですか」。

「さうです。敦賀を破壞し、名古屋を破ツたゞけで日本東西の聯絡は旣に全く絕えるでしよ」。

驚く、驚く、いよ〳〵驚く。

「で、日本を中斷するのですな」。

ませんな。それだけ猶北洋艦隊は勇むので、いざといふ際敦賀名古屋へ向かふつもりに充分爲ツて居ますて。それから憶ひ出したから心得のため言ツて置きますが、やツぱり此の國からも妙に日本を仇敵のやうに思惟して、北洋艦隊は又餘計な昔の元兵が筑紫で破られた其復讐でもするやうな氣ですからな。此一事はよく〳〵君も氣に銘めて、歸ツた上で御存じの軍人なら軍人に御つたへ下さい。何の、何の、日本からも臆病な心を出さす、仇敵と見て戰ふが可いのでさ」と聲やゝ力を加へて來る。

其十八

李朴は嗟嘆しながら語を繼いだ。

「日本の事は殆どもう今と爲ツては私には解りませんが、支那で是ほどに戰爭の準備をして居る事を實際日本で知ツて居てくれますかな、勿論偵察の方法はあらん限り工夫を廻らして有るには有りますけれども。何せ、歸朝なさツたら開戰の準備は着々として行はれて居る、の

「殊に幅の狹い箇所ゆゑ中斷するにも便利です。此所を中斷すさすれば日本の死活は自由であツて、仙臺や大阪に師團が有ツたところが實際どうする事も爲りませんや、鐵道や電信があらうとも。大事ですぜ、此邊の防備が。すでに此地圖に從ツて此間も劉将軍の麾下の兵で演習もして見た位、それには北洋艦隊の意氣込みといふものは又格別ですからな」。

「日本を呑むどころか微塵にする氣です。實戰を經なければ解らんですが、見たのみでは日本艦隊より優勢であり、士官にも有爲の人が多く、洋人も雇ひ入れてあり殊に丁將軍、然様、汝昌氏の威望は非常に重いですからな。それには又聞くところに因れば、日本海軍部内で樞要な地にある人をはじめとして、其自國に同様な物が無いといふので、甚だしく鎭遠と定遠とを怖れて居るさうですて」。

「でも眞逆に」と不興氣に。

「いや確な處から聞いたので、僕は一概に嘘とは信じ

みならず進行して居るといふ事を重大の件として御傳へ下さるやうにな。おツ、然うだ」と手を拍ツて微笑した。

「貴下、海軍の將官中に御存知の人が多くありますか」。

「いや」と些しく恥かしさうに。

「有りませんか」と李朴また笑みを含んで、「御心得までに言ツて置きます、思ひ出したから。實は若し御交際が有る言なら、苦言ながらも一つ忠告していたゞきたいと思ひますので」と阿片入りの烟草をアルコール洋燈で吸ひ付けて、

「おそろしいものですな、此頃では此とほり阿片を喫ふやうに爲りましてな、と言ツても一片忠烈の念のみは矢張り銷磨しませんて」と笑ひながらも凄味が有る。

「何氏への御傳言？」。

「と言ふ程でもありませんがな」と又聲をひそめた。

「惡るい評判が澤山あるやうですな、〇〇とか〇〇などが將官や司令官だから日本も賴もしいものだと丁將軍が然う言ツて居ましたぞ」。

「提督汝昌氏がですか」。

「ぶツ、然うです」と笑ツたが眞面目になツて、

「丁汝昌が何と云つても實際、軍にさへ强ければ。ところが役に立つ人が極めて少ないですな。丁將軍が言ツて居ますぞ、いつでも海戰と爲ツた場合ひ、〇〇が司令官とでも爲ツて出たなら美事日本艦隊を殲滅に歸してくれる、又日本政府も此方の望むとほりに同人をその役目で出すらしいと、斯うまで言ツて居ますぞ」。

聞いては快くも無い。さりながら忠告の言と思へば無念を忍んでその要點を書き記して、更に矢部はあらたまツた。

「委細よく解りました。就て伺ひますが、數年ならずして日本と開戰しようと言ふ此支那の方針は畢竟一二の政治家の策略に出づるものですか、それとも國民一般の意向によツてでも……」

言葉なかばに遮ツて「國民が何を知るもンですか。煎じつめた所を言へば某々大臣」、矢部が心得かねた顏つ

きなので、更に説明を加へる語氣で、

「〇〇〇〇と〇〇〇〇〇と結托して生じた計畫で、それに丁、劉、依、宋などの有力な武將の聲援、中華黨の雷同、小才子等が」、又聲をひそめて、「戰爭して己れの地位を高めやうとの野心それらに因ツてゞす。但しな」と又微笑した、「今の支那人ことゞ〱く日本を侮ツて居る、それだけ面白いです、な、鋭意日本に於て力を貯へれば却ツて戰爭が日本の利益になるかも知れず……」

憤然として、「かもどころでは……」

「全く、全く」と愉快に笑ツて且つうなづき「今年は日本では明治二十……貴下、此頃のやうにこの支那で軍備の進行を急いで居るところを見ると、戰爭は遲くも五六年の內……明治二十八九年頃までには必ず始まりますからな。無論ですとも、朝鮮問題がその導火で。危いですよ金玉均氏の命が今非常に。居ましやう日本に李逸植が、刺客の名人、間者の親玉で、而も多分の手當を貰ツて今日本の何處かの溫泉か何かで遊んで居るさうで」言葉たちまちばたりと絕えた、のは小价が密話室の戸を敲いた音がしたので。

「等片時(少し待て)」と李朴は高聲で言ツて矢部に目くばせし、自ら起ツて戸を開けば小价無言で一封の信書を出す。披見してうなづいて、「拜領……」とそれから何やら簡單に言へば、小价一揖して立ち去ツた、後をまたぴツたり閉ぢて、

「一大急用。すぐに軍務都統のところまで來いとの事です、いえ此僕に。或ひは知れません、貴下の事かも」。

其十九

急用との事で李朴が都統の所へ呼ばれては矢部一人殘ツて居るのも工合ひがわるく、更に明朝の會見を約束して後、わが宿と定めた金花坊へ立ち歸る途すがらも、矢部自身の胸中、偖李朴の妻女などが何のやうに思ツて居るかは殆ど推し測られぬ迄であるだけ、又それだけ探ツても見たくなる程であツた。

疲れて居る事とて其夜はぐツすりと寢て、流石に朝は早く五時頃に覺め、すぐに身支度して李朴の所を音づれたが、腹の中ではまだ相手は寢てゞも居るだらうと思ツて居たのを、早起きて居るといふので大に驚き、更に密話室へ入れられて昨夜一夜まるで寢はせぬと聞いて又驚いた。

又々李朴は聲を潛めて、「どうして寢られるもンですか、君、一大事が有るのですもの。好都合でした、君の來られてあるのが。君の身も、しかし、程無く危くなりますからそのつもりで。行ツて聞くまでは急用といふ故萬一君の身の上かとも思ツたです、がさうでも無かツたから一寸安心しましたが、併し一兩日中には然うで無くもなくなる、今が然うでないからとて決して決して油斷は迚も」。すこぶる亂雜に言ふ。

此人が是ほど亂雜に言ふ所を以て見れば、何さま一大事件が發生したらしい。而も一大事件と言ふ以上は自家に取ツて多くは不利益である事是又知れて居る、問はずとも李朴の方から說き聞かせてくれるのは解ツて居るが扨慌て氣味でむしろ催がさずには居られぬ。

「それは又何事で、いづれ國事でゝも。伺はぬ前から氣になりますな」。

「とツくりと御聞き下さい」と冒頭を置いて眉を顰めて、「金玉均氏の生命が危いです。同氏を刺し殺しにと日本へ行ツて居る李逸植の所から今日急電が來たので、即ちその意味は同氏を殺すに好都合な事が有る、それに就ては中華黨――この支那のですな――その內の有力な人を至急派遣してくれとの事でしてね」。

「都統の所へですか」。

「いや其懇意な中華黨の一人、名ですか、張璞と字を書く、紅子(コングツ)と綽名でよく通じて居る頑固老爺の許へです今日。それで都統が僕へ相談と、言ふより寧ろ命令でな日本の機先を制するには究竟だから一人を派遣する、最も大事件と言ひながら一の亡命の韓人金奴を片付けるだけの事ゆゑ、自分の一存で斷行するつもりで、さしあた

り人を考へて見る處で阿唐が適當だらうと思ふが、其處で君――と言ふのは僕ですよ――君は倭國の事情にも通じて居るから至急萬事の心得を阿唐に授けてくれろとの事でさ」。

「ふム面白いな」と矢部稍落ち着いて微笑すれば李朴も落ち着かされた容子で、

「それだから承知して歸ツたです。その阿唐といふのは綽名で姓は矢張り李、名は之平、此支那の非役軍人で武にも達し、隨分鋭い人物で、李逸植と二人揃ツたら或ひは大事を成しかねません男で、「それから又もう一ケ條」と一入嚴肅に構へ、「金氏を殺して目的を果したらその儘日本に同人を滯在させて、また軍機の秘密を探らせようとの都統の決心です。何しろ書信では危險であるし、是は一まづ君が至急歸朝なさツて金氏に警戒を加へさせるに限ると僕は思ふのです。歸朝して君が報告すべき此國の軍機の秘密は出來るだけ速かに寫し取ツて成るべく早く御歸りなさい。もうそれに越す策無し」。

語り訖ツて汗を拭く、矢部稍考へ込んで居た。

「よく解りました。吾々の耳にその事の入ツたのは天助とも言ふべき事、愉快です。そこで伺ひますが。私が斯くの如く女裝して當地へ入り込んだ事はまだ其筋の注意に上りませんか」。

身を入り込ませて、「まだの樣です」。

「まだなら面白いです」と又身を摺り寄せて、

「先へ出掛けず私は、其李之平といふ人に尾行しましよ」。

「ふムなるほど、大きにな」。

「事に因ツたら寄り近づき交際を求め、欺きもし、臨機の策を施しても――時宜によツては或ひは刺す……」。

首かたむけて、「どうかな、そりや。危險でしよかな」。

「いや注意して行るつもりで――勿論見料らひですとも工合ひよく行けば李逸植とも近づいてその擧動をも探ります。然ういふ事となると愈々私は一刻も早く當地だけ立ち退いて其筋の注意を免かれ置き、出帆の時から夫

と無く同船に乗り組むに限ります」。

李朴もうなづいた。

「強ひて僕から君に命令を施す權利とて無い事ですが唯大事の前の小事、僕は兎に角日本帝國の不利益ともならない樣にして下されば……」

「もとよりですとも」と凛として、「その事は誓ツてゞす。すると又その之平とかいふ男を餘所ながら見知ツて置きたいですがな……」

「丁度好い、寫眞が有る、然樣手許に」。

「上々吉」。

矢部が其奇才を弄する時機は爰に到着したのである。

其二十

其外に矢部が李朴から傳はツた、卽ち支那が日本に對する軍機の種々の秘密は流石に書くを憚る所も有る故、遺憾ながらその方の筆をば省いて、直ちにその後の噺しに移れば、矢部はわが思ふ如く充分に李之平の人體を認識し置いて、それと無く尾行して同船して日本へ歸朝する事と爲ツたが、扨さう爲ツて見れば李之平に寄り近づくのも自ら我身が顧られるやうで容易でない。釜山に寄港し、それから出發する迄は雙方一言をも交へる機會なく、やがて釜山を出發しはじめて、今は躊躇しても居られず、甲板で顔を見合はせたのを機として會釋して嫣然笑ツた。

何が倩美人に笑ひかけられて心わるくも無い。さすがの李之平とても是が男子であらうとも知らぬ。又況んや金玉均を刺す目的で自分が日本へ渡航するのを早く知られて尾行されるとは思はぬ。又況んや其女裝の一美少年は怖るべき企望を持ち、凄まじい熱心を貯へ、驚くべき死毒と利劍とを懷にして彷徨まはる蝮蛇のやうな者とも思はぬ。

笑ひかけられた故李之平も笑ツて會釋と、矢部道任、卽ち僞名の間部莉子は我名刺を取り出し、差出す序に鉛筆で、「船中無聊幸乞筆談」と隨分不細工な文句でわが

意を傳へると、倩も婦人にしては出來過ぎたと言はぬ計り、頗る驚いたらしい素ぶりで、その癖又一入にツこりとして、矢部の鉛筆を借りて、同じ名刺に「一敬領敬請」との返辭を記して見せ、直にわが室へと伴ふた。

「生意氣に上等室だな」と矢部は口の中で呟く。

それからは無論筆談である。但し會話風に書かなければ興味も減るゆゑ、已むを得ず下の如く、

「何方まで御旅行ですか」と矢部から尋ねた。

「日本內地の漫遊で、もつとも日本には友人も許多ありますから不慣ではありますが、たのしみです」と何氣無く答へて、「貴女は又何御用で——御歸國になるのですか、それとも亦」と到底李之平まだ相手を一婦人と見たにした處でもその如何なる種類で又いかなる用向きで行くのやら歸るのやら更に察し得られぬのである。

「大變に取込んだ事が有りまして、どうしても一旦歸らなければ爲りませんために」。心緒錯雜といふ顏色。

「何か御心配事でも」。

「さよです」と書いたが俄に思ひ附いたらしく、

「失禮ながら貴下さまの御身分は」。

「一小官吏です」と輕く應ずる。

「軍事に關係でも」と知ツて居ながら故意と問へば、

「いや文事のつまらぬ職で。何か其方に御懇意の方でも」と相手も隙無く問ひかける。

思ふ坪と言ふ心を色にも示さず、何と無く歎息して、

「いえ、朝鮮の方に御存じの方が御有りですかと存じまして」と意味有りげに答辭を記せば、之平も心稍動く程でも無いが、常では無くなツて、

「朝鮮の何といふ人、いくらか知ツても居ますが」。

但し旨味を含ませてうかとは言はぬ。筆談をさへ宛も思案にくれる樣子で控へて居る。言ふ迄も無く李之平の好奇心は其思はせぶりで唆まされた。

「いづれ上流の人でしよな、軍務に服する人ですか、それとも文事に」と釣り込まれるとは知らずに問ふ。

「上流の地位の方ではございますが、實は欺かれまし

た様な事がございまして非常に口惜しく、先方の了簡次第しツかりとした覺悟をしましやうと存じまして」。

「その人は日本に御出でなので。して又どうした御事情で。及ばずながら何も御緣づく、力に於て叶ふほどならば」と次第に籠中のものと爲る。

「御はづかしい御咄しでございますが、國は違ひましてもつひ不圖した事からその人と夫婦のやうな關係に爲りまして……勿論先方から强ひてと言ふので、決して私の方から望んだのでも無いのを、正室にするから是非と言ふので……」書きかけて筆を止めて潸然となる、その淚はその道を以てして欺かれる李之平の心胸を充分に攪亂した。

「それで契約に背いたのですか」。

無言で絹ハンケチで眼を拭ふ。

「日本へ逃げてゞも行ツたのですか」と筆で書いて示すと同時に李之平その肚の中、「こいつ些しく奇妙だわい、朝鮮の上流の人で日本婦人を妻として又捨てゝ日本へ行く、はてな金玉均ではあるまいかな」。好奇心いよ〳〵進む。

「言はゞ日本の流寓の身となツて居るのです」て之平の胸どきりとする。

「よほど前からですか」。

「はいもう數年の前からでして。本當に人を玩弄にした薄情きはまる詐僞師のやうな男でございます」。

偖こそ金だ玉均だと、欺かれるとは知らず之平は大に心に勇んで、此美人利用するに不思議な好材料と圈套の油の臭氣に喘ぐ。

其二十一

「何と名を言ふ人ですか」と李之平いよ〳〵乘り込んで、「上流の社會の人、殊に日本と關係などの有る朝鮮の人士には私も可なり交際が有るのです。その方の名を伺へば又貴女の御助けになる事も或ひは有らうも知れませんから」。

「有り難うございます」。唯是ばかりが答へであツた、直ちに打ち明かさず、ぢらすのが此際究竟の手段と思ふので。

李之平は二度三度返辭を促した。思ふさまぢらして置いて偖いよ／＼打ち明ける事となる、その刹那の之平の顔つき又は目色がどう變はるか否やを目ざして居るのが此方の坪である。

「金玉均」

唯この三字である。わざと隱して書いて、詫つて衝き付けてはツと見せた時の之平顔色、何さま動いた。まぎらすのは微笑で、それながら流石に曲者、うツかりとは返事をせぬ。李之平は釣り込まれたとは知らず、我と我心から此間部荊子といふ一美人の尋ね行く相手は玉均であらうと推測して、その本音を吹かせるのをのみ目的とし、扨いよ／＼その通り金玉均だと確めたところでは却ツて自分がその知人であるといふ事を荊子に言ふのは安大事であるとも思ふで、茲に至ツて背負投した。

「金氏ですか、玉均氏ですか。なる程上流の人、また當代知名の英才、それで貴女を欺いたやうな不都合をしたのですか」と共問ひ方如何にも眞面目である。

荊子の矢部は口惜しげに、「まるで詐欺師のする樣な事で兎も角も他の事と違ツて婦人の貞操、それを唯玩弄物に……いつそ最う死んだ方が。もう覺悟いたしました、逢ツて一應怨みを述べて、それも亦返辭次第では唯死にません、女の一念でございますもの、叶はぬまでも道づれに」。ひそかに歯ぎしりの音さへ洩れる。

稍呑まれた樣子で之平何とも應ぜぬ。

「婦人の身として如此事を御噺するのを嗤はしたないと思しめしましやうがどうも實に口惜しさに、何もう破れかぶれでございます。自分ながら我儘の肝積もちでさう馬鹿にばかりされて指を啣へて何うしても居られません」。

當たるべからざる氣焔である。その樣にして見せる故李之平も然う思ふ、この女美人ではあるが克ち氣の、む

しろ所謂馬鹿である、いかに口惜しければとて初對面の同船の客に必死の事まで物がたツて好い氣のつもりであるのを見ても程度は知れる。こりや事によツたら此馬鹿を利用して或ひは故さらに煽動し玉均に近づかせて殺させるのも面白い、兎に角によく手なづけて李逸植とも相談し、又その上にどうか爲やうと、十分に乘せられて得々として趣向を定め、それから矢部を自家の藥籠中の物とする氣で、或ひは奬(はげ)まし、或ひは慰めその極總に心中の秘密の一端をも示すに至ツたと言ふのは李逸植といふ男に紹介しようと言ふ迄になツた事である。

　その時李逸植は大阪中の島の旅館花屋に居た。李之平は夫を目的として來た事ゆゑ、船が神戸に果てるや否や餘所目も觸らず、直と汽車で出發してたゞちに宿へと訪ひ音づれたが、色々に言葉をかまへて矢部をも同道した。

　待ち設けて居た事とて逸植さも嬉しげに之平を迎へ、矢部には解からぬ朝鮮語か支那語か、その何れかで何か囁して、たゞちに逸植矢部に向かツて慇懃に禮して、懇意にしてくれとの意を片言まじりの日本語で言ツた、その様子でも大抵わかツた、之平が逸植に此美人は玉均の妾見たやうで、それで是々の關係が始まりかゝツて居ると簡單ながらも言ツて聞かせて、それに逸植も乘り込んだ事と、

　「金氏には賤生も二三回拜晤を遂げた事がございますが、今はつひ疎隔して御無沙汰いたして居ります。貴女は此から金氏の所へ御出でになりますのですか」と逸植笑みを含んで聞く。

　「どうしても參らなければ爲りません事情がございまして――今日も神戸から直行いたさうと存じましたところ、此李先生に御深切な御引きとめを受け、一日ばかりは長途の勞れを休めましようと存じまして」。

　はじめの應答は是だけに過ぎなかツた。

　金玉均を刺すために、それで逸植と相談するためにははる〴〵渡來したほどの事ゆゑ、直(すぐ)に二人は秘密評議を別室に開いた、矢部には吾々にはすこし噺しが有るから暫

時失禮するとの挨拶で。
　此方はその機をねらツて居た。手早くわが鞄から秋子爵の手紙の一通を取り出し、更に注意して鞄をば宿へ預け大阪鎭台附の歩兵大尉奈良何某の私邸を音づれ、子爵の手紙を出して對面を求めた。
　奈良大尉は丁度晩餐に掛かツた時で、子爵の手紙と見て封押し切ツて直に讀み下せば、
「軍事探偵矢部道任、女裝の僞名間部荊子、必要有る際には此手紙持參にて拜晤可相乞候條宜敷御面會被下度勿論御家人にも眞正の婦人の如く御心得させ被下度候」。
　大尉は微笑して直に一間に通させた。隙見した細君、
「どなたですえ、美人ですのね」と眞顔で云ふのも且をかしい。

其二十二

　奈良大尉年久しく軍隊に衣食して居ても明治の今日に女裝の軍事探偵が有ると知ツたのは今始めてゞ、それも秋子爵から云々と矢部を紹介した書面が無かツた事ならば、素より信を置かぬ程である。
　見ればなる程窈窕たる一美人、その楚々たる風采どうしても男子ではない。初對面の口誼も濟めば、さすがに低聲で、
「めづらしい御變身ですなァ、噂にもまだ貴下の事を承はりもしませなんだ」。
「はい」と會釋して前後を見まはし、「秘密に申上げたい事がございまして。實は此姿で支那に參ツて居り、只今急いで歸朝したところでございます。大阪に居る時にもし必要な件が生じたなら、奈良大尉といふを尋ねて御咄しゝろと吩付けられてありますので。ですが密話でございますから、どうぞ筆談、重要なる所だけは筆談に願ひたうございます」。
「承知しました」と直ちに卓上の硯函を開いて紙を展べた。
　矢部は言葉と共に筆をはたらかし、金玉均とか刺客李

之平とかいふ所は一々筆で書いて見せ、つまり次ぎに記す丈の事實を密告した。

此度當地の旅館花屋に居る韓國の間者逸植から支那の中華黨の一人何某といふ者に急電が掛り金玉均を殺す好機會が有るに就ては些しく手を藉りたい故究竟の刺客を至急派遣してくれと言ひ來ツた事、それにつき非役軍人李之平と言ふのが擇ばれて渡來した事、それを矢部も知ツたゆゑわざと李之平と同船して懇意になり、策を弄して今は充分に欺き居り、同じ旅館の花屋に投宿して、李逸植とも懇意になツたといふ事、それから暗殺の評議に相違無いが、別室で二人が直ちに密議に取りかゝり始めたゆゑ一先矢部自分だけは其處を外して、重要な件だけを報告に來たといふ事、凡そ是等を巨細述べ立て、更に改めて、「如何なる手段で暗殺の目的を達するかは存じませんが、何でも乘ずべき好い機會が有るらしく、就ては金氏の御生命が甚だどうも危いと存じますゆゑ、どうか一方また貴下の御手から警察の方へも然るべく御傳へ下さいまして、宜しう手配りある樣御願ひ申します」。

奈良大尉聞く毎に、感じ、感じて居たが、やがて大きく點頭いて、

「思ひあたる所が有ります。花屋の李逸植から變名をもツて暗號の電報を數日前支那へ發したといふ事はその時既に當地警察部の高等探偵が偵知して、その旨上官に報告し、その方から又僕も傳聞しましたが、今思へば其趣きを打電したのですなァ。ところで又思ひ當る事と言ふのは金玉均氏が、もう何でしよ、遠からず一週間ぐらゐの内に當地へ來ると言ふのですからなァ」。

「それでは夫を附け狙ふので、なるほど」。と言ひさして些し考へ、「痴情の一念から私が金氏に危害をでも加へかねまい樣子に是まで見せかけて居り、李之平等も然うかと信じて居る有り樣で、事に因ツたら私をして凶行を行はせようとするかも知れません。もとより容易には心腹を打ち明けは爲ますまいが」。

「容易ぢやありますまいな、婦人と思ツて居るだけ猶

更の事」。

「そこまで探り至りたいのですが」。

「だが、その必要は有りますまい。最早その上は此方で警戒を嚴にさへすればそれで可いのです。何しろ此度の御報告は極めて貴重な御報告ですから僕から早速その向へも知らせます。御安心なさい。だが是から貴下は何方へ御出でに」。

「大磯へ參ツて金先生及び秋子爵に逢ふつもりですが、御願ひ申したい事が茲に一ケ條ございます。彼等刺客の心腹を奥の奥まで探るといふ事は御忠告にしたがツて見合はせますが、其かはり明日一日間は猶彼等と一所に居りますつもり、勿論このとほり女裝いたして居りますが、萬一どうかして當地の警察官に怪しまれでもしましたなら、其時は貴下の方から御苦勞ながらひそかに宜しく事情を述べて御辯明下さる樣……」

「あ、御易い事です。一兩日の内ならまだ甚しく怪まれて引致などされる事は有りますまい。どうです、しかし、御歸朝の事を秋子爵又は金玉均氏へ通知せんでも可いですか。敵と同室ゆゑ花屋からは打電されますまい、僕からでも一寸通知して置きましよか」。

「然樣、大きに。有りがたい御注意でした。さう願へれば眞にどうも。暗號で無くとも宜しうございますから」。

「承知しました」と談は他の方面にかはツた。

其二十三

矢部が擦り拔けて奈良大尉の所へ行ツたとは夢にも思はぬ李逸植と李之平とは密々に議を凝らして居る。

「さういふ事に聞いたので」と李逸植が語り續ける、「願ふても無い好機會、堺の浦で玉均が舟遊びをするといふのは面白い、究竟な者を乘り込ませてその舟を顚覆させ、溺死させる事にしたら、事あるひは成るであらうと思ふ、就ては日本政府の警戒實に嚴しく吾々の輩は迚も近づく事ができず、よし近づき得たにしろ、手を下し得る事は思ひも寄らん、さりとて此好機會を逸するのも

心外千萬なり、と思ふので變はツた斷らしい人の御たすけを必要とする事にもなり、過日の如く打電いたしたのです。尊公ならば心丈夫で觀て居られますが、しかし今御提出の御意見、かの金玉均に死ぬほどの怨恨を含むといふ美人、その者を利用するといふのも一策ですな」。

李之平すこぶる得意げに、「克ち氣で寧ろはしたない婦人と見た眼は違ふまいと思ひます。そこから大いに利用すべき所で、而も金玉均に對して同人が懷く怨恨(うらみ)といふは世に最も怖るべき戀からで、その戀の力ならば如何なる事を爲るか知れませんでな」。

「そこで利用の方法に就て嘸かし最早高案が」。

「卑見二三は御座います。まづ其一は斯うですな、其戀の恨に同情を寄し、婦人を辱かしめて更に憐む心は毛頭も金玉均には無いとさも憎さげに、言はゞ煽動するのですな、さうして煽動してみづから進んで殺さうとの決心にならせる事、是が一つ。其二は斯うです、金玉均といふ男は朝鮮から日本へ間者に來て居るので極はめて心のねぢけた難物で、それで日本のためにはその様な惡徒を殺して了ふ方が可い、巾幗の身を以て國害を除けば如何にも立派であるといふ様に煽動する事、是が一つ。其三は前と全く變はツた策で、劇毒を加へた菓子を製し、然るべく怪しまれぬやう彼の美人をして金玉均の所まで持たして行かしめ、その手に因ツてどうか旨く食(くら)はせるといふ事、是が一つ。先此邊ですな」。

逸植深く感嘆して、「妙、その最後の毒殺は實に奇ですな。その餘の策はすこしく危險で……」

「ですな、賤生もさう思ひます。殺すとなツても纖弱な腕で行ふ事ゆゑ必ずしも成功するとも限りませんからな。毒なら婦人の手を經て大抵大丈夫」。

逸植笑みかたむけたが、叉眉を顰めて、「一先彼の美人をもて其菓子を持たせて大磯へ遣り、試みさせ、もし過ツたとしたところで、やがて玉均が此堺の浦へ來る時更に第二の荒療治を行ふ、と云ふので餘地も多く有り、綽々として寛なる所も有るから可いやうなもの丶、殺こ

の菓子を屆けさせる口實ですな、又それを何うにでもして玉均に食はせる口實ですな」。

「さ、その無いのが弱るのです」。

「されば是は些、な」と手は額に加はり始める。

「吾々からの進物と言へば勿論玉均が食する道理も無し、さればとてその美人に吾々の名を包んで差し出せと吩咐ければ美人その人にも早怪しまれて了ふし」と逸植刻むやうに一人言のやうに呟いて、「うム斯うしたら可いかなッ、毒が有るを知らせて是で殺して遣れと智慧をくれるか」。

之平兎角の返事も無い。

逸植猶一人で呟く。「それには煽動せんければならず煽動するには日本語の達人を……」

「有りますか」。それを重大の條件と思ふだけ、大いに氣にするとの顔つきで之平は逸植を凝視すれば、

「そりや居ます、機敏な男で閔焜といふのだが。すこし思ふ所が有り、且又鹽酸加里などの事を取りしらべるつもりで、難波のある燐寸製造所の職工になッて居ます。勿論日本人のとほり日本服を常に着て居る、是また吾々と志を同じうするので……」

「日本語をも流暢に？」

「ほとんど日本人のとほりです」。

「そりや好都合ではありませんか。その人をしてあの美人がどれ程深く思ひつめて居るかを篤と探らせ……」

「さうですな。その上にて煽動するとも、又他に策をかまへるとも。成るべくは毒と明かさずに食させる方が望ましいですからなァ」。

之平より逸植の方が稍考へは細かくある。さりながら知らぬが佛。他を殺さうと謀つて居る二人の頭上に怖るべき死命がいつか近づいて居る、その死命の統御者は馬鹿と見られた美人の矢部であるとも。

其二十四

奈良大尉の許をその夜矢部が辭し去ッたのは、八時頃

で、人力車に乘らず、まだ宵の賑やかな市中をぶら／＼と歩いて宿へ歸る道すがら何を買ツたかいつしか小包みをさへ携へて來た。

旅宿花屋へ上がるや否や、「皆さんは」と聞けば「御つれさまですか、あの朝鮮と支那との方」と反問して、直に、「御出し中で、此方から可いといふ迄はどなたをも御通し申してくれるなと仰（おつしや）いました」と女中が答へる。

矢部は別に怪しみもせぬ樣子で、「あ、さうでしよ。ですが、荷物置いた先刻の御部屋へだけは通ツても宜しいのでしよ」。

「えゝ、もうそれは御自由で」。

會釋して、もと通された座敷へ通ツた。矢部の鞄が一個、李之平のが二個、李逸植のが三個、もとのとほりに在ツて人は居ぬ。

此時兩李は密議に就ツて別室に籠もり切ツて居たのである。

四邊に眼を配る矢部の相好むしろ怖ろしく、するくツと差し寄ツたのは李之平の鞄で、蝦蟇口から取り出したのは合ひ鍵——手早く蓋を跳ね退けて、又手早く中を掻きまはし大事らしく包んである風呂敷づゝみを拔き取ツて、その跡をもとの通りにつくろひ、更に横の方を捜ツて一斤茶筒ぐらゐな鑵詰をも取り出して、わが持ち歸ツた小包みを開けばそれも同じやうな鑵詰、どういふ事か双方を取り換へ、また手早く錠をおろすや否や、座敷の一隅へ飛び退ツてゆツくりと共拔き出したものを小包にする途端、廊下に人の氣色がする、それと見て取ツた矢部、ぐツと呼吸をつよく呑んで、隔ての障子の開く頃ははやその呑んだ呼吸を大かたゆるく漏らして了ツて、それからは呼吸も最う忙しくない。

「へゝツ御退屈さまで」と顏差し出したのは宿帳を附けに來た男で、「へゝ御面倒さまでも御名前を……御つれ樣のは最う伺ひまして御座います」。「あゝさうですかそれぢやロで言ひますから貴郎共所で書いて下さいな。

東京神田三河町十六番地間部莉子」。

旅行の目的などは素より口から出まかせで、やがて男が書き了ツた時分には自分も小包を絆げをはツて、

「あの番頭さん、ちよいと妾また用が有ツて出掛けますが、ぢきに歸ツてまゐりますよ。だが、此所にある妾の鞄は先刻御預け申したのと一所に此家の御帳場であづかツて置いて下さいな。え、なに人力車は要りません、近いところへ行くので。そして又路は知ツてますから」。

委細を番頭に心得させた儘飄然と立ち出でた。ゆるゆると歩いたのが一二丁やがて辻車に飛び乗ツて、値段かまはずの一散ばしり、何ぞ料らん過刻一旦辭し去ツた奈良大尉の邸の近所まで走らせ、薄暗い辻で下り立ち、車夫の立ち去るのをとツくりと見定めて、やがて奈良大尉の門を敲いた。

下女が取り次ぎに出て來て勿怪な顔、それながら是々と大尉に知らせると、是また意外の心地である。が直に離れた一間へ通し、すぐに出て對面する。

「急に當地を去る決心になりましたから參上いたしました。それも斯ういふ物を得ましたから」。如何にも落ち着き拂ツて其小包を披いて見せる。

取り上げて見て「やツ」とばかり、笑みくづれるほどの相好で、「大變なもンですな、こりや支那人の電信暗號表、今使用してるのでしよな」。

「今現に使用して居るどころではありません……」

「しかし、何處から」。

にツと笑ツて、「偸み出しました、李之平の鞄から」。

「君がツ」。と稍呆れ顔。

「船の中から狙ひに狙ひ來りましたので。刺客一條の事は最早安心として、行きがけの駄賃に狗めの肝を一つ冷やして遣りたうございましてね。その下にまだ面白いものがございます事よ。それ、それ、それです、その人名簿は中華黨やら朝鮮の頑固黨やらと同臭味で氣脈を通じて、それで日本にもぐツて居る其ものどもの名を書いたので、之平が參考のため持ツて參ツたのでございます」。

大尉感に堪へた。

其二十五

大尉心から歎賞(たんしやう)措かず「大變とも便利とも言ふに言はれん物がよく手に、なァ一は支那人の電信暗號表、而も中華黨などが用ひる奴、一は日本に來て居る支那や韓の狗の名簿、而も現在の。妙、々、々。しかし、どうして是を手に」。

「逸植と之平とが例の如く別室で密議最中その鞄を合ひ鍵で――合ひ鍵の無かッたため舟の中では殘念ながら手を下す譯には行きませんでした、私を婦人と侮ッて、李之平が舟の中で何心無く是等を披いて見たのをちらりと私も認めましたもンで」。

「恐ろしい、凄いほど快(はや)い、それは。して又合ひ鍵は?」

「さき程御宅から宿へ歸る時鞄屋で貰ひました、支那鞄の大きさから番號から最初よく記憶して置きましたので」。

大尉は呆れて失笑するまでに爲(な)る。

「驚き入りました實に。えらい、素早い事ですなァ」。

「自分ながら巾着切り……」

「くすッ、結構な巾着切り、國家のため敬愛すべき巾着切り」。

「ぷッ、敬愛すべき巾着切りとは隨分」。

大尉にはかに眞面目になッた。

「人名簿は充分此儘當分役に立ちますが、暗號表は盗まれたと心づけば、すぐ本國へ打電して變へて了ひますから、惜しいですな。いづれ盗まれたとは今夜にも氣が注く、ところで盗難に遇ッたと其筋へ――さァ訴へたところが詰まらんな――訴へれば自分を日本政府へ知られると思ふのが訴へまいな、それとも書類とか名を付けてどうでしよ」。

「大丈夫訴へません。他の金品には目をくれず、そんな物ばかり取りわけて盗んだのでも賊の手心は知れる、

とても訴へたとて出るものでなし、それで訴へれば御說のとほり籔蛇ですもの。只此儘歸らなければ差しあたり私を疑ふのが順序ですが、しかし、錠はちやんとして居る。よもや合ひ鍵で開けたとも眞逆」。

「眞逆、々々。さうですな。面白いわい、こりや嘸おどろくだろな。さうすると君は却ツて逃げん方が」。

「さう行きませんのです」と小聲ではあるが、きツぱりといふ。いよ／＼聲を潛めて、

「盜まれたと氣が付く迄あの二人が無難ならばまだ可いので」。

「無難とは」。

「死にませんければさツ」。　重さ千鈞といふ一語である。

「金氏をねらひ、且つ日本帝國の社稷（しやしよく）に害を及ぼさうと云ふ、彼等憎むべき蛆虫どもですから、序の事に療治の支度をして置きました。事實だけ飾り無く御咄しします。之平といふ男は無上に鮭の鑵づめが好きと見えましてね、舟中で食事の時他の食物が有ツても鮭だけは缺かした事が決して無く、五六個の同じ鑵詰を鞄の中へ仕入れてさへ來ましたのです」。

妙なところへ咄しが飛んだものと言ふやうな、大尉些しく間のぬけた顏。

「夜は大抵十一時頃でなくては寢ませんでしたが妙に必ずその寢る前に例の鮭で火酒（くわしゆ）を飲むのです。今晩とても亦それに違ひ有りません。まづ違ツたら違ツたで可しとしてその手を付けかけた儘鞄の中へ吝嗇くさく仕舞ツてある鑵詰と擦りかへて、實は同じ様な鑵詰を入れて置いて、その舊（もと）のは此とほり持ツて參りました」と小包の中から取り出して見せ、「手品を一つ爲て見ました」。

大尉猶理解しかねた樣子である。

「擦りかへてどう爲（な）さツたので」。

「御わかりに爲りませんか」と微しく笑ツて、「擦りかへた方の中にしたゝか毒を盛りましたので。さ、何、御驚きになる程でも——多分今頃か最すこし遲くか、一

人で食べるか二人で食べるか知りませんが、大抵は行られましよ、毒も毒、亜砒酸ですから」。

大尉ほとんど歎息して、「そりや何せ一大事が起りますなア。ですが、毒を加へるとしても、既に鞄の中にあツたのが口を開けてあツたのでしよ、さうすれば別のと擦りかへるにも及ばず、前の口を開けてあツたのゝ中へ直と毒を入れても可いのでしよ」。やゝ不審顔である。

「それで宜しいのです。けれど咄嗟の間にしなければ爲りません――思ふやうに巧く行きませんや。別物をあらかじめ用意してゆツくりと仕込むに越した事は御座いませんから。況んや口を開けてあツた、その口の開け方など甚しく特殊の所が無い以上は前のと違ツたと心附かれる氣づかひは有りません。何大丈夫、仕損じたところがそれだけです。唯仕損ずれば私の身に疑ひのかゝるのは當前で、先方が活きてゞも居ますれば、私の顔を見おぼえて居て、逢ひでもすれば容赦しますまいといふ夫だけのところです。兎に角事實だけを御咄しいたして置いて、今晩是から急いで直に汽車で上る事にいたします。其筋の方へは宜しく御手心願ひ上げます」。

急ぎながらも咄しは落ち着く。要點をのみつまんで述べて暇を告げ、門出るや否や辻車、とぶが如くに停車場へと走らせた。

其二十六

身輕くその夜矢部が大阪を逃げ出して大磯へ翌日到着し、秋子爵と金玉均と二人揃ツて居る面前で、是までの色々な冒險の物がたりした時の喜ばれ方、感じて聽かれた工合ひ、形容し得らるゝ者でない。支那で李朴が洩らしてくれた軍機は怖ろしいやうでも有り、驚くべき程でもあるが、それよりも玉均をして顔色までも一時變はらせる程にしたのは李之平が李逸植の打電によツて刺客として渡來したとの事であツた。

そこで又矢部が奇智を働らかしてそれらに近づき、秘密の秘密を探ツた上、電信暗號その他を盜んだ上、飽ど

くも二人の生命をまで風前の燈火として逃げ戻ツたといふ、鼠のやうな素早さには二人とも舌を捲いた。

褒稱と感謝と驚愕と、此三つを其日一日子爵も玉均も繰りかへして居るのみで、扨あくる日の大阪新聞の到着を待ツて、花屋に珍事でも起ツたか何うかを香氣に知らうとしては居られぬので、やがて子爵の知人たる大阪のある筋へ向かツて左の意味の暗號電信を發した。

「中の島の花屋にもし珍事あらばその種類の如何を問はず至急電報せよ」。

此掛けた先のある筋といふのも心許せる相手なので。平常ならば奇怪きはまる此やうな電報を奇怪とも思はず出したのである。すると二時間ほど過ぎてたちまち返電、開封すれば兎に角暗號の長文讀まぬ前から胸轟く。子爵は眼鏡取り出すやら、矢部は暗號表を開くやら。やうやくにして譯し出だせば、果然、果然、一珍事――その電文、

「昨夜十二時花屋止宿の韓人李逸稙の室に於て新來の清國人李之平中毒にて卽死……」

「やられたか、とう／＼」と子爵が思はず聲迸らせると、一種物すごい笑顏が玉均と矢部との顏におよぼす。更に譯を進めて行けば、

「罐詰中に亞砒酸有り、但し毒の出所未詳。逸稙は治療し得る見込、言語不明にて一切更に分明ならず。旅宿の證言によりて其夜限り同伴の日本婦人の姿見えざるため共者に嫌疑掛れり。委細郵便」

言ふに言はれぬ一種の心もちで稍しばらくは一同無言である。感懷の殊更に深いのは矢部で、もとより覺悟の上わが手を下して國家のため毒殺したとは思ふものゝ、扨昨日まで翌日をも知らず達者でいきはひよくして居た者が一刹那の間に不歸の客と爲ツたると思へば、その現身の風采が目前に髣髴して、何も氣味わるいといふ程でもないが、又氣味好いといふ程でもない。「いかんなァ是がはじめての殺人犯の故だなァ、膽の練り方が噫まだ足らんなァ」とはひとり胸で繰る所感である。

「うまく行きましたなァ、金先生。いかにも素ばやい手際、乃公や敬服の外有りません」。いかにも厨房から出る體で子爵が。

王均吉笑ひして、「意氣地無く殺されたもンですなァ。して見ると逸植までが食べは食べたので」。

「さよ、序に殺られゝば可かッたのに。吾々が矢部君には此度大いに助けられたのは今改めて言ふ迄でも無いですがな、先生、さし迫ッて矢部君を何處へか逃がしましよかな、それとも此邊へ隱して置きましよかな」。

「されば」と王均首傾けた。

「わたくしが逮捕されるだろとの御心配ですか」と矢部が。

「うム、事が事だから大丈夫だろとは思ふが――でしよ、先生」。

「まづ、さうです矢部、しかし君の決心は？」

「大丈夫でしよ。よしや照驗が付きましたにしろ、そこは夫その、ね、あなた」と微笑すれば、

子爵も笑ッてうなづいた。

その夜は久しぶりで寛ぎたいからとて人の出入を禁じてもらッて奥まツた一間の中、酒肴いろ／＼備へさせて姫御前すがたが高胡座、悠然として前途の程を考へながら且飲み且つ食ふ心地よさ、數月の窮屈只この一夜に去れたやうで特に第一着手の冒險が幸にして失敗せず、王均にも子爵にも敬服され、感謝され大いに面目を施したその愉快また格別である。さりながら又憶ひ出す、憐れむべき彼李之平、敵としては憎くもあれ、清國の志士として是また國家のため死んだと思へば、一片同情の涙といふもの、又灑がずには居られぬとも思ふ。大阪の方に向いて心ばかりの酒を手向けて、涙一滴何と無く古歌を口ずさむ。

　　盃とりて月みるたびにおもふかな
　　　　いつか屍のうへに照るやと

其二十七

李逸植は藥毒不充分のために回復したが、李之平は全で日本へ死にゝ來た樣なもので、空しく不歸の客となツたのみである。これがために今更のやうに又金玉均の身の警戒を嚴にするやうに爲ツて、容易な人には面接せずこれも矢部の庇蔭であると、感謝まことに斜ならず、而も自分がその矢部を最初有爲の人物と認めた眼力も亦普通ではあるまいと窃かに誇る計りである。

しかしその以來矢部の姿は何所にも見えぬ。彼は役の行者が雲を呼び雨を役して天地を自在に飛び行く、それと同じやうに更に分からぬ。よしや國事のためとは言へ李之平を同人が毒殺したらしい嫌疑も有り、ある筋に於てもひそかに蹤跡を偵察したが、まるで烟のやうである。

花と紅葉と二度三度交代して明治いつか廿六年となりて、目にこそ明きらかに見えね、戰爭を含む妖雲は次第に東洋の天地を掩ひ掩ツて來る。金玉均の身の在處も此頃は更に定まらず、今日東京かと思へば、翌日は横濱、また其次ぎの日は大磯といふ樣な工合ひで、その度毎一々尾行する高等探偵の手數是また一とほりで無い。

その十二月の初旬の頃、夜七時過ぎ、二輛の腕車を砂地の中へ轢らせて酒匂の松濤園へ突如として入り來たツた夫婦づれと見える客が有ツた。風體からして賤しからぬので、兎に角一旦二階の廣間へとほして置いて、御逗留ですかと聞けば、どうぞ靜な所をと言ふ。丁度あまた有る貸別莊の中で海に一番近くて母家とは懸隔れた、第何號とかいふ手頃なのが空いて居たので、すぐさま其處へ通し、やがて宿帳に名を署けさせると、男は相も變はらぬ岩田周作、女は同人妾吉田きんとして出した。

言ふまでもなく此吉田きん即ち彼の矢部道任なのである。飄然と何處から舞ひ下がツて來たものか、また何處で金玉均と打合はしたものか、何しろ忽然また大磯附近へあらはれたのである。

吩咐けたゞけの酒肴を運ばせた後、用が有れば呼ぶか

らとて女中を遠ざけながら、更に矢部は玉均の命を受けて、

「しかし姐さん、但もし洪鐘宇と名唱る朝鮮人が旦那を尋ねて御出でゝしたら一寸いつでも御取り次ぎを願ひますよ」。

「かしこまりました。朝鮮の方でございますね」。

「いえね、どの朝鮮の方でもと言ふのぢやありませんの。他の朝鮮の方が來るかも知れませんが、旦那が御目に掛かると仰やるのは差しあたりその洪鐘宇といふ人だけなのですから」。

名を覺えかねるといふ顔つきで、女中はもじ〳〵。

「おほツ、洪鐘宇といふのよ。斯う書くの」と端箋に記して與へて、「そのとほりの名刺を出しましたなら」。

「はゝ、かしこまりました。つひ伺ひつけませんお名前なもンで、おほツ、解りましてございます」。

應答の間金玉均は手酌でひとり切りとあふりつけ、下地すでに有ツたらしい顔が夜目にも色榮える迄乾く、時々は熱い呼吸を吹いて、よほど酩酊の様子である。

「大分御酔ひの様子ですが、込み入つた御咄しは明日にいたしませうか」。

肩ゆるがせて、首を掉ツて「いや〳〵何うして。此頃は最早一刻千金、危急の時期だもの。君に面會するのを待ツてゐたので、突如として面會せんといふ君の飛報に雀躍した。酔ツても何でも國家の爲に氣は慥かだ」と平常とちがツて、すべて朝鮮語ですら〳〵と述べて、「さしつかへ有るまい、解るだろ、朝鮮語で、何しろ先刻停車場で逢ツて、君が韓語に熟したには一驚を喫したよ、もう是からは何かの相談にも好都合だ。さ、一杯、うム君は麥酒だツけな」と蕩け相な笑顔である。

會釋しながら矢部も笑ツて、是また朝鮮語、「わかります。ざツと三年勉强したのですから、さすがの不器用も。まづ練習のつもりで是からは不完全ながら一切朝鮮語で」。

「大いに可し。他の日本人に秘密をも悟られなくて可

いからな」。

其二十八

「そこで嘸かし是まで君が歴遊して居た間に、書狀の通信以外の注意すべき事がいろ〳〵有ッたらうな。出さきから君が島田糸子宛にして出した書信は一々接手したが、唯露國から出したのに一回受け取らなかッたのが有ッた。一々あの通り書信に番號の附けてあるから直に分かる、何でも四號か五號か一回拔けたよ、竊まれたのか知らん、もちろん他人が見た所で分りはしないが」と玉均久し振りの珍らしさに立てつゞけに述べ立てる。

「いや一回ぐらゐでしたならまだ結構なので、西伯利地方など迚も普通の政府の統治を受けて居るとは思はれん位でございます。掏摸や泥坊は珍らしく無い咄しで、郵便の紛失ぐらゐ朝飯前で、それと知りましたから私も露國から出した信書には萬一を慮ッて大祕密の事をば記載せんやうにいたしました」と先それ相應の挨拶をして矢部は更に膝を押し進めた。

「何よりも先に御咄しいたしたいのはあの洪鐘宇といふ男の事でございます。先生はあの男を如何なる人物と思し召します」。

「いかなるとは」。

「いや、如何なる性質の男かと――乃至いかなる所存を抱いて居るかと」。

「さうさなァ」と玉均すこしく考へるらしい樣子である。「別に深く考へもせんけれど……」

「深く御考へにもならん」。と稍失望の顏つきで、

「唯御信用なさッての故ですか」。

「甚しく信用するといふでは無いが」と語氣きはめて曖昧で。「それに就ては君何か思ふ處が有るのか」。玉均に於ては些しく矢部の樣子の尋常ならぬに不審を抱いた氣味である。

「大いに思ふ處が有りますので。ほのかに噂で承はりましたが、先生は大分あの男を御信用になッてゐらせら

れるさうで、一切の秘密をも大抵御打ち明けになッたとか」。

「そんな事を何處で聞いた」。

「朝鮮で。而も頑固派のものから」。

「そりや推測だ」。

「いや左様でございません。たしかに私が聞いたので」。

「だからそれが推測だ。君はたしかに聞いたのだろささう言ッた者が推測して君に言ッたのだ。考へても見るさ、洪は無二の日本黨ぢやないか」。

「と、思しめしますか」。斯う言ッた時の矢部の聲はむしろ稍ふるへて居る。うらめしげに金を見つめて、

「先生そりや、失禮ですが千慮の一失、御心得ちがひと言ふより外ございませんなァ。嗚呼いかさま〳〵噂のとほり、畜生め、よくも先生を籠絡し了ッたなァ」。と聞えよがしの獨語で言ッて、更に又きつとして、

「先生、御ためを思ふがために申し上げるのです、どうぞ御立腹無く御聞き取りを、兎も角も願ひます」。

玉均は無言で居る。

「先生、鐘宇も刺客ですぞ、えッ先生、御一身を附けねらふ怖ろしい奴ですぞ」。

「鐘宇が」。

玉均その言葉に信を措かぬだけ更に驚いた體も無く冷やかに聽いて居る、反問も殆ど儀式的で。

「ですから頑固黨の一味、又李逸植の同志の友、化けに化けぬいて居るのです。逸植と親友であるといふ丈でもその人物は大抵知れて居りませうが、逸植との關係をば御存じでございませう」。

「そりや知ッてる。だが、それだけは、折角だが、君の見込みちがひだ。鐘宇に限ッて決してそんな人物で無し、一意大韓國の獨立を企望し、終に亡命してこの國へ來て本來の畫策に肝膽を碎いて居るのだもの。そりや此僕がたしかに〳〵認めたのだ」と飽くまで信じぬいて居る。

其二十九

金玉均が洪鐘宇を信じて居たのは、評すれば癡といふべき程で、更に換言すれば迷の闇黒裡に陷ツたといふ程である、鐘宇の快辯、その中に而も溫さながら玉の如しといふ情を含んで居る、一種の魔藥とも言ふべき利口をしたゝかに浴せかけられてはよしや、最初は疑ツてもやがて早晩蕩かされてしまふのも强ちに愚とのみは言ひ得られぬ。矢部も後に作者にもつく〴〵語ツた、鐘宇ほど人を瞞す名人は滅多に世間にあるまいと。

飽くまでも玉均は鐘宇を信じて居る語氣なので、矢部は憤慨一とほりでない。どの方面からどう證據を示して反省させて可いかそれさへも迷ふほどである。

「友道を以てされゝば欺かれる、是またいたし方はありません。が、先生よく御考へ下さいまし、鐘宇を私が先生に讒言して遠ざからせる樣にして私に何の利益が有りましやう。是までに親も及ばんほどの御庇保を先生からいたゞき、それがため國家のため、人類博愛の主義のため、目的どほり志士と僞ツて奔走する事を得る私の今日の境界、それに立ち至ツたのは天地間唯一の先生有ツた故と深く感銘して、もとより先生のためには蜉蝣の身を吝しまぬ決心、況んや茲に韓日清三國に亙る紛擾が日一日と內部に於てその度を進め來る今日、先生の御一身の實に千金にも換へられんといふ處で、つまりは失禮ながら先生を思ひ奉る一片の至情からして御氣に入らん事までも申し上げるのです。鐘宇が昵れ易く、したしみ易いといふのがつまり鐘宇の鐘宇たるところで……」

玉均醉眼朦朧として、微笑しながら遮ツた。「いや然うでない。反對だ。昵れ易くも無い、いやむしろ始めの內はしたしみ難いほどで」。

「なるほど。然らばそれは一般の間者の特色であるとしましたならば」。

「あはツ、さう理屈づめにしては困る、そりや君が僕に對する友情は明らかに知ツて居る。怪しい奴だと鐘宇

を疑ツて兎も角も僕に忠告を試るのは感謝する。が僕は僕の信じた處を以て鐘宇をば信用し、心許せる死友として君にも紹介しやうと思ふのさ。何ぼ僕でも一概にさう他人を信じはせん、充分に試みた上で無ければ。況んや風聲鶴唳にも心すべき身と知ツて居るもの」。

情無さゝうに矢部は俯向いて居た。やゝ暫時して見上げた眼にはさも情が激したらしく涙さへ宿ツて居る。それならず語氣は鋭い。

「どうしても然う御信用ならば、更に、如何です、彼洪鐘宇といふ奴は支那の〇〇〇の輩と如何やうの連絡を通じて居る男か、その證據を御目にかけましやう」。

慌てゝ鞄に手をかけるを、「いや」と制して、

「君を欺くために誰かゞ拵へて君の手に入るやうにした證據であるかも知れはせん」。

「いや御見おぼえも有りましやう、閔〇〇と李〇〇との眞正の筆蹟の書狀です」。

「洪鐘宇と往復した書面か」。

「さようです」。

「いつ頃」。

「去年中です」と又更に鞄に手をかけるを、又制めて

「そんなら見ずとも解ツて居る」と思ひきや平氣で居る。

「解ツて居る、解ツて居る。君が一概にさう思ふのは無理も無い。が、どうだ此頃それら、もしくは其黨派の連中と鐘宇が文通でもして居るか」。

「そりや何うか存じません」。

「なぜ探らないのか。まア可いさ、探らんでも。僕も既に知ツて居る、そのはじめ鐘宇は全く君の言ふとほりそれらの奴の手先となツて日本へも渡來したので、それから後つく〴〵宇内の形勢を見て翻然と說を變じ、つまり僕の味方になツたのだ。その譯今明す、とツくり聞きたまへ。

其三十

大いに呂律も回らなくなりながら、玉均は宛も輿に乗する體で、日本酒と麦酒と混ツたのを又一盞ぐツと傾けて、

「まツたく、鐘宇が渡來した當座は純粹なる頑固黨で機よくば壯士でも傭ツて僕を要擊するぐらゐな考がへを持ツて居たのだ。彼は日本を韓國のため更に恃むに足らんと信じて居たのだ。それと言ひながら是まで韓國の事に於ては〇〇でも〇〇でも常に支那から割を食ツて居たらう。一二の人士を除くの外、日本と結托して支那に當たらうと考へを起さんのも無理でないさ。そこで鐘宇もその一人、日本をば見くびり切ツて居て、その自分が夫程に見くびり切ツて居る日本と金玉均や朴泳孝は結托する氣なのは情無い、いよ〳〵然うならば大朝鮮國のための國賊であるから、仕宜に因ツては殺つけてもくれやうと先此決心で渡來したのだ」。

些しく先を越された氣味で、矢部は只だまツて居る。

「ところが日本へ來てがらりと變はツた。まるでその說を變じた。日本を頼む氣になツた。どうして然うなツたと言ふに、國で聞いたより思ひの外、日本の萬般が整頓して居て、是ならば充分に頼める、と斯う思ツたからださうだ。はじめに鐘宇が僕を惡んだのも一個人の金玉均として惡んだので無い、韓國の社稷のためにとて惡んだのである。その一旦迷夢を覺ますべき時となれば、翻然として猛省し、過ちを改むるに憚らず——勇者ぢやないか。それで悔悟してから身は僕の所に投げ出し、いはゆる腸骨そこに揃ゑて、これ迄の自己の意見履歴を包藏する所無く、いろ〳〵の秘密をさへ打ち明かし、もし夫でも疑ふなら如何やうされても苦しくないとまで言ふのだ。曰く支那有るを知らず、只日本有るを知る、日本有るを知らず、只金先生有るを知る、金先生有るを知らず只大朝鮮國有るを知ると、まづ是だ。物を疑ふには程度がある。その程度を飛び越して疑へば、いよ〳〵疑ふ程

際限がない。さうぢやないか」。

「さうでは有りますが……」

「まだ生返辭かな。それには君、まだ鐘宇を見ないからだ。實際の人物をとくと見れば、又想像と大いにちがふ所の有るのは言ふ迄も無いからな。それともまだ君の方に僕の所說を反駁して、僕をして然うなら然うと理解せしむるだけの論據があるのか」。

「それは有りません」。矢部は力無さゝうに言ふ、そも暫らく考へた上の事。

「噂と想像から成り立つ揣摩の說だろ、そんな薄弱な事ではいけん。あたら有爲の人物を」。

矢部はしんみりとした。

「只今私は茲に反駁の論據を有ちません。今仰せのところも亦一應の御道理と考へますから、已むを得ず先默して或ひは然うかと承ッて置きましやう」。

「烹え了れんな」と笑ひ出す。

「火力まだ不充分ゆゑにです」。

矢部は眞面目、しかし玉均ますます笑ふ。

「この火力で不充分なら——あはゝ、此上の火力は何、何かなァ。可し、この上の火力は洪だ、鐘宇だ、洪鐘宇だ、鐘宇を傳と君に紹介して、君の隨意の觀察から實地に同人の眞價を知らしめ、その火力で烹え了らせる、さうだそれが一の手だ」。

恰も可し？果然洪鐘宇が來たとの女中の取り次ぎ、すぐに通せと玉均は勇む、さて矢部は苦い顏。

しづしづと入り來た鐘宇を瞥一瞥する刹那の矢部の眼は抑も如何なる色彩を含んで居たものか、形容し得るものなら形容したいほどである。刺しとほすばかりの視線を注ぐ。

金洪二人とも先一とほりの挨拶したが、その工合、鐘宇が玉均に對するのは同志といふよりは寧ろ主從の樣である。

「鐘宇」と玉均が呼びかけて、「此美婦人卽ち例のさきほど君に噺した彼女。非凡の志士だ。どうぞな、是か

ら相扶けて親交を」。

鐘宇慇懃に禮をした。

其三十一

矢部つく〴〵と洪鐘宇を視たが、如何にも溫和で、その中に凛然とした處がある、たとへば夕陽に映ずる雪のやうで、その微紅を帶びた美しさは何とも言へぬが、偖又何處となく冷やかなる處も見える。

と見えるのが先入主となツての僻眼か。更に最負目を以て見たらば如何、溫にして嚴、その一語は立派な男子の好風采を言ひ盡して居る處で、或ひは眞實そのとほりの人物かと矢部は腹の中で思ふ。

玉均の顏は今は熟柿その儘である。身もすこぶるぐた〳〵に爲ツたらしいのを、さすがに生醉ひ本性たがはず矢部が案外鐘宇を疎むのが氣になるのでそれで辛くも身を支撐ツて二人の樣子いかにと見ようとして居る。

矢部に向ツて鐘宇は莞爾とした。

「くはしくは金大人からも承はりました、女裝して樣々な御苦心をされた事を。當代にめづらしい御擧動、金大人のため、更に之を大きく言へば大日本國のため大朝鮮國のため、失敬ながら此の上もない仁義の御所業、敬服のいたりです。拙者などは御承知の通り亡命の身となツて、幸に仁無量なる日本大政府の御保護を以て殘骸に呼吸通はせて居りますが、さりとて皇上及び故國に對する臣民一片の情、感懷は實に千萬無量です」。

ふム、乙に殺し文句を列べるわいと矢部はその腹では笑ひながら、「いえ、御褒めにあづかツては恐れ入ります。何事も國家のため、只知らぬ他國へ亡命の客と爲ツて御出での御心中は御いたはしいと思ひます」と當り障り無くのみ言ふ。

「金大人から承りましたが、此度は大分各地を御巡りになツたさうで――露國はどの邊まで」。

が、もとより矢部はその要點に對しては更に滿足な答へを與へる心も無い。

「何、唯飛び歩いたばかりです。金先生にも濟まんくらゐ、いはゞ旅費をもらツて漫遊して來たンです。しかし、あなたは李逸植の御親友ですとな」。

迅雷一撃と云ふ塩梅、不意に荒肝ぐツと抉ツてその顔色を見ようとした。

が、少しも變ぜぬ。

「はツ親友でした」。只是だけの答へである。

始めた、そろ／＼捜りを入れるなと玉均見て居て頗るをかしい。些しく背負投を食ツた氣味で、矢部のまごつく様子もいよ／＼可笑しい。

「鐘宇」と呼びかけて「君、さツぱり今夜飲まんな。さ、注がう」と玉均は麥酒の瓶を取ツて中腰になツて注がうとした途端、もはや非常に醉ツてゐる事とて身體は忽ちふら／＼として中心を失ひ杯盤の上へがちりと手をついて横さまに倒れさうになツた拍子に、麥酒の瓶は手を辷る。

「や、大變」と身近ゆゐ鐘宇すぐに瓶を取り上げるうちに、玉均また目の覺めた様に起き復ツたが大いに極りわるさうである。

「あゝ醉ふたと見えるなア。弱くなツたなア酒量が。飲み盡くす天下の酒——といふ意氣が銷磨したかな。いゝや、爲ん。うム、さうだ、注ぐのだツけ。さ、鐘宇、洋盃を出せ」。

「ありがたうございます。手酌で自由に」。

眼をいからせて、「いゝや、いかん。僕が注いでやる。寸志だぞ鐘宇、君に勸む一杯の酒、良宵すべからくまさに談ずべしだ。な、そツだろ。風月いまだ寢ること能す。さ、醉ひ來ツて空山に臥せば、さ、天地すなはち衾枕、さ。そツだろ。鐘宇、なァ矢部。天涯に淪落して居る一孤客、な、鐘宇、感きはまツた時には流石に大丈夫の覺悟でもさて情無いやな。いつは再び慈愛ある、皇上の御顏に接する事が叶ふか、いつは再び故山の土を踏む事が爲るか、いつは再び回天の偉業が成り上がるかと思ふとなァ……」又ぐツとあふりつける。

其三十二

酔ふのは金玉均の一の病ひだと洪鐘宇も矢部も知ツて居る。度はづれに酔ツて随分傍のものを困らせる事も有るのも亦知ツて居る。但し今夜のやうに稍愚痴に傾いた事を陳べ立てるのは些しく珍らしいのである。

しかし酔ツて如何なる本心を洩らすか、管はずに言ふだけ言はせて見るも可いとは洪と矢部といふ二人の揃ひも揃つた、煮ても焼いても食へぬ代物の胸中に期せずして共にもよほした考へである。期せずして又二人はにや〳〵と聞いて居る。

玉均舌なめずりして眉を顰め、ぶウと熱い呼吸を含んで、「實に感慨に堪へられんなア。同志とは言ひながら朴泳孝は果斷に乏しくてさ、兵を擧げようとすれば、どうも一致の勢力を得るらしくも無くさ。と言ツて何時まで斯うして居たところが徒らに路傍の殘肉同様むなしく腐ツて了ふのみだからなア。鐘宇、僕は此程の夜も目が覺めて寝られなくなツた。痴人夢を語る流儀で我ながらをかしいが。皇上を夢に見たてまつツたのだ。忌まはしいでは無いか褻衣を召してさ、蒼ざめた御顔で何處とも知れん處に彳んであらせられた。おどろいて平伏すると潸然と御涙で、朕はもう冥府へ來た冥府で玉均貴様を見やうとは思はなかツたが。汝は頼みに思ふ貴様も終に奸徒の毒刃に罹ツてこの様な處へ來るやうに爲ツたのか、それ見ろ貴様の身體を、まるで身首はなればなれになツて、よく夫で歩くるのと、何とその時實に夢ながらぞツとしたなア、今之を思ひ出しても」と身ぶるひした。

耳を掩はぬ許りの體で、鐘宇は極めてうとましげに、

「あ、不好、々々、不好な、不吉な夢ですなア」。

只一人矢部のみは冷やかに鐘宇を視る。

「不快はそれに止まらんのだ。猶いやな夢だ、それからが」。

「うム」で

「敢て承りたくありませんなア」。

「まづ聴けよ。その内いつしか　皇上の御姿は見えなく僞ツたと思ふと丁度南門のところだね、九重こと〴〵く荒れはてゝ、蜘蛛の巣が一杯なンだ。それ見た丈でも涙が零れるのを、その巣を張ツて居る蜘蛛の大きさと言ツたら無い、雀ぐらい、いゝや笑ふな、夢だもの、それでも蜘蛛が人語を作す。是が今日の獲物ですと言ツて僕に見せたのを何かと思ツてよく見ると獮猴が。その獮猴が蜘蛛より小さい、その顏は僕の妻その儘で、その横腹の皮肉はすツかり剥げて柘榴の裂けたやうで、臓腑と肋骨とが露出して居る、それで淋しくきり〳〵と笑ツて僕のところへ這ツて來るのを見ると、當歳の儘別かれて流石に折々は憶ひ出す僕の女の赤兒姿さ。いやその不氣味言はう樣も無い」。

洪も矢部も悚然として。夢とは言ひながら、忠と愛との二感情が、言はゞ鬱積結晶したやうなものである。一皮を剝けばその裏は涙滿々たるものと思へば鐘宇はどうか矢部も坐ろに同情を動かされて、稍涙ぐむばかりである。

「しかし鐘宇、もう唾して起つべしだな。日本在留の〇〇公使の遲鈍なのが此處で戰爭する日本政府に取ツて非常の好都合だ。就ては君たちだ、是からいよ〳〵大に君たちの力を藉りなければならん。國事を懷ふたびに腹は煮えかへるところでわが腹心の徒たる君たち二人に夢の咄しまでする愉快是また尋常一樣でない、と思ふにつけて無念を呑んで死んだ井雄烈の徒の事も亦目前に髣髴する樣でなア。嗚呼人の命ほどはかない物は無い、今始めて解ツた事でもないが。僕だとて是とて流寓の儘で或ひは終に死ぬかも知れんと思ふと、つまらんてなア。美人でも相手にしなければ叶はないぢやないか。なア矢部江湖に落魄して酒を載せて行く……贏ち得たり青樓薄倖の名……げえツぷ、そぢやないかツ」。

憐むべし玉均の今夜の物がたりは終に讖を成したので其處で怖るべき野心を包藏して冷淡を粧ツて聽いて居る鐘宇の胸はそも〳〵どんな工合ひであツたか。

其三十三

夜は更けてはや十二時になッたが、感慨に腦を刺激されてか、王均更に寐る氣色も無く、寐たい所をば既に通り越して、目は冴えに冴え、氣焔當るべからざる程であるのを只愁然として洪鐘宇は頭を低れて聞いて居る内、扨何に感じたか、たちまち手巾取り出すと思ふ間に横を向いて眼を拭ッた。

それを不思議さうに王均は見て居たが、不圖また麥酒の瓶を取り上げて、中味の無いのに心付き、いよ／＼まだ飲むとの勢で、

「無い。矢部、も、一本抜いてくれ、ふム麥酒」。

「まだ召し上りますか、もう餘程」。

「馬鹿言へ、水同様のものを」。

是非無く抜く。

「おッ美婦人、注いでくれ」。洋盃さし出す手許も早定まらずゆらついて居る。

鐘宇は苦々しい顔で始終の様子をぢッと凝視て、又何を思ッたか噫と歎息の聲を洩らすと同時に、一入儼然とあらたまッた。

「大人、金大人」。聲は微顫を帯びて居る。様子の異常なので、王均醉眼ながらも、ぎろりとさせて。「あ、何」。

「鐘宇熱涙が迸りますッ」。

唯是だけ言ひ放して、顔を掩ふて男泣きに聲を呑む／＼泣き出されて、王均やゝ呆れ顔。

「何、どう、何がどうしたのだ」。

「御わかりに爲りませんか。いよ／＼鐘宇泣かずには。大人、鐘宇が過日何と言ッて大人を諫めましたか、大人の亂酒の事について」。

「や。又か。またそれを始めるか」。

「始めるかでは御座いますまい。過日も既に……」

「解ッた、わかッた、わかッたよ」と快口に言ひなぐッて、「わかッた。が、今夜だけ」。

「未練がましい。さう仰やるだけ實に九腸寸斷するほどで。御機嫌に逆らふか知りませんが、鍾宇敢て申し上げます、座には矢部君だけ、他人は居ず、むしろ矢部君を證人ともして、さ、大人、あへて苦言を。矢部君、どうぞ貴下もとツくりと御聞き下さい。是には拙者も一方ならぬ心配をして居ますのでな」。

更に又改まツて玉均に向かツた。

「大人、言あたらしく言ふ迄でもない御身の上でしよ。大朝鮮國の運命を實に双肩に負ふて立たれるのは誰何方ですか。今何と仰やいました、皇上を夢にも見たてまつり、南門に蜘蛛が巣を張ツた情無い狀をも夢みたと仰せられた。抑々その御口で、大人、いやさ金大人、爛醉泥の如くなる迄酒を飲み得られるものか、得られぬものか、過日も鍾宇が言ひましたろ、大人一人のみの御身體では無い、國のための御身體でもあると。此危急存亡なる韓國の社稷のためすべからく充分なる自愛を要すべき御身體、それをもツて敢て何事、健康を傷るまでの御亂酒、言はうやう無く度を過ぐして――噫、泣きます、鍾宇は泣きます、ひとり金大人の御一身に對してのみでなく、又大朝鮮國のために取ツて。實、實、實に泣きます。嗚呼大人、大人鍾宇をしてどうしても是程迄に泣かせて下さるか」。

深刻きはまる一言、その後は嗚咽である。どう見ても玉均のため、また國家のため至誠を籠めたとしか見えぬ擧動、矢部も流石に心やゝ動いた。

はてな。妙だわい。不思議だわい。どうも肺腑から出たらしい口上、こりや俺の目が違ふか知らん。又己が支那乃至朝鮮に在ツて探りに探ツて、たしかに鍾宇は許すべからざる間者と認定したのも違ふか知らん。金玉均の亂酒はその知人のすべて苦惱する所、而も思ひ切ツて諫める者も無いところで思きや鍾宇が斯うとは。極言して諫める、その言に道理も有る。して見れば眞の志士か知らん。待てよ、しかし或ひは狸かも。では無いかな。化けて居るンではないかな。不思議、實に不思議だ。何し

ろ俺の探ッたところでは何うしても間者らしい證據が立ツて居る。まだ〳〵是だけの擧動だけでは俺の所信を打ち壞る所までは行かない。よしいよ〳〵注意して視るべしだ。千年の古狐は蕃椒ぐらいで尻尾をば出さぬてよ。

とばかり、五里霧中にさまよひ出した。

其三十四

至理を以て責める故か、それとも相手が氣に入りの洪鐘宇である故か、金玉均その眞向の攻撃に腹立てた樣子も無い。俯向いて默して聽いて居たが、鐘宇の最後の一言は深くも胸に浸みたと見えて、はツと爲ツて面をあげた。

「鐘宇、又君は、また泣くのか。おい、鐘宇、泣く程の事かい是が。折角豪飲した宴席に泣くなどと——おいこらどうしたのだ」。

矢部も默しては居られぬ。

「洪君、そりや御尤も。君が金先生の御身のためを思ひ、又朝鮮國の未來の爲を一意に思ふ餘りに先生の亂酒に對し、敢て苦言をすると云ふ事、僕も實に敬服しました。なれども、もし洪君、大丈夫が泣いたとて——泣かずとも事は濟む。さ、さ、さ、つまらん」。

雙手を掉ツて「いゝや、いや、是が一度や二度でないです。それを金大人は……」と口惜しげに。

「さ、それも然うでしよ。が、婦人みた樣に泣いたからとて何も別に……」

「好んで誰が泣きますかッ」と又も深刻な一語を迸らせて、

「矢部君、あなたはまだ御存じありますまい、金大人の生命は終に酒に奪はれると云ふ事を」。

「そりや又始めて聞く。どうしてゞす」。

鐘宇涙は瀧のやうである。

「それを僕からくれ〴〵も申すのです。で肯かれん」。

「ですから、どうして」。

「醫學博士極本先生から親しく僕が聞いたのです。而

もその時も金大人が新橋の花月で豪遊し、夜を徹して痛飲し、全然死人の様に爲ツて了ツた、その翌日です、血を喀かれるのです、大いに驚いてそれから樫本博士を招き、まづ治療して貰ツたですが、その時博士がくれ〴〵も酒と色とを謹しめ、殊に心臓病の兆候があるに因ツて酒は一入節減せられ、さなくば數年を出でずして、落命の悲みに逢ふからと。そりや金大人に博士から直接に訓戒され、僕もその席上に在ツて親しく聽いた、それ、それを、どうです、守られんのです」。慷慨に堪へぬとの様子で、「言ふまでも無く韓國の社稷は金大人の肩一つで實に背負ツて立ツて居るのでしよ。累卵の上に一髪でわづかに千鈞の石を吊ツてあると云ふ有様でしよ。支那でも然うなら日本でも最早密々に軍隊の刀を磨がせて居るのでしよ。かねてからの計畫とほり、指を拈ツて茲で金大人が起つ、すぐと硝煙彈雨でしよ。國家のため、實に東洋の爲如何なる大事な御身體であるか御存じない人でも無くて、それで酒となると性根をとろかされて了はれる、殘、殘念ぢやありま……矢部君、何と思しめす」で

「御もツとも、實に至理です。さうですか、夫ほど迄に言はれて、樫本先生に」。

「天下國家の事を思はれんでしよか」。

狸寢入りか何か知らぬが、玉均いつの間にか快きさうにすや〳〵と寢入ツた體。

「あツ、あれだ」とそれを怨めしげに鐘宇は指して、

「情無い。あ、平氣だ」。

更に訴へる様な調子で、「矢部君、と言ツて何うしても僕は金大人を憎むといふ念になれんのです。駄目だ、相手にならぬ、國家の爲共に謀るべき人でないと幾度か業を湧かせて斷然袂を拂ツて去らうとした事も有りました。が、いつも後髮を曳かれる心もちがしましてな。のみならずです、餘人で無い貴下でもあり且又金大人にも既にその際打ち明けて了ツた事ですから構ひませんが一度はあまりの腑甲斐なさに自分も死ぬ氣で、金大人を刺し殺し、それで一味の朴泳孝氏などをも奬まさうとして

既に手を下しかけた事さへ有りましたです」。

其三十五

流石の矢部も洪鐘宇の巧みな辯に些しく飜弄された氣味で、我を忘れて目を圓くし、

「では、金先生を一度は御殺しなさらうとしたことが……」

「さよ、前後二回です」。

洪鐘宇の此言はいよ／＼の逆の逆手で矢部を探ツた。矢部は纔に、辛うじてわが顏色の變はらうしたのを控へおさへた程である。

「二回といふと、何時と何時とで」。

美事釣り込まれたなと思ふ心を鐘宇は顏の色にも示さす、「今御咄しゝた時とそれから其前はじめて當國へ渡來した時とです。全くは僕が其はじめ當國へ渡來したのは金大人を刺すためで」。

矢部の顏色さツと變はツた。今は變はらせまいと中々制し切れぬのである。

「それでは中華黨などの一人でゝもありましたので」。

「頑固派の殊に頑固なのであツたのです。日本賴むに足らず、大國の支那只賴むべきのみ、此主義で、その時は金大人が極めて憎く、総にそれ〇〇、〇〇〇、それらの指嗾により、充分たしかに金大人を刺すつもりで、今から思へば別人ですな、此國へ渡來しましたのです」。

何さま玉均も然う言ツた。して見ると此洪鐘宇今は志をひるがへして全く金氏の味方と爲り、開化黨の主義の下に立つのであツて、そのはじめが初めゆゑ今も間者かと疑はれるのであるかとおのづと迷ひ入ツて來る。

呼愍れむべし謀らうとして掛けた圖套は却ツて敵に利用されたのである。

玉均は鐘宇を無二の味方と信ずるあまり、近頃に至ツては秘密中の秘密とする矢部の事、すなはち女装させて清韓露此三國を忍び歩きする事まで明かしたので、鐘宇肚では大に驚ろいたが氣振りにも見せず、猶とツくり聽

き取ツてごそかに或る筋の手を經て支那の同志のものに通知したもので、一切は手に取るやう敵に知られ、就ては李之平を殺したものも矢部であるとの事も解り、容易ならぬ事ゆゑその矢部にしては充分注意を怠らず、場合ひに因ツては鐘宇の手で殺してゞも了へとの訓令さへ同志から鐘宇の許に來て居たのである。

情無くも金玉均は此陰險な犬の手玉に取られ切ツて了ツて、初めて大いに疑ツて掛ツた矢部さへもそろ〳〵麻痺されさうに爲ツた。のみか、生命さへ危くなツた。鐘宇からの通知で一切を支那や朝鮮で知られて居て、そも〳〵此度矢部が無事で歸ツて來たと云ふのが殆んど不思議な位である。

況んや鐘宇が玉均に對し、その一身のため國家の爲亂酒をば謹んでと涙を流し聲立てゝ泣いて至理正當の苦言を進めると云ふ事、どう考へても間者とは思へぬ。

說くにその道を以てし、敵の肚に入ツて說き、敵の疑ふ處を畢ツて逆摸に此方から開放して掛かるといふ鐘宇の得意は無殘や遂に矢部をさへ殆ど籠絡しさうになツた。

鐘宇また肅然として、「既往をあらまし御咄しすれば右のとほり、今はもう僕は金大人と生死を偕にせんと誓ひました位で、それ故金大人の身の上の事は實に我身の上の事としか思はれませんでな。ところを身を傷るのを管はず、亂酒などされゝば腹が立つです。あゝ、よく寢なすツたなア」と玉均の方を見て、又時計を見て、「やれ、も、二時、宿で訝しく思ひましよな。寐ますか、些しでも」。

「かまひませんや。とてもの事に語り明かさうぢやありませんか」と思はく有るらしい矢部の返事。

「大きにそれもな」と言ツたが鐘宇また折り返して、

「しかし、僕も眠たくなりました、あまり議論した故か」。言ひ訖らぬ內大欠伸。

「さうですか。御快辯と御熱議とで私は目が冴えました。寐られさうも有りません、私は」で

「では僕だけ御免をかうむツて」と鐘宇せはしく寐支

度する。

其三十六

坐睡の儘熟睡して死人に均しくなツた金玉均に毛氈を輕く着せかけてやツて後、矢部は何さま眠くもないか、その傍に端坐して深く思案に沈み入ツた。次ぎの間へ退いて洪鐘宇は枕に就いたが、幾程もなく鼾になツて、癖と見えて齒ぎしりなどをもする。

濱風につれて浪の音或ひは遠く、或ひは近く、曉寒さすがに脈々として火鉢の火の瘦せ行くのが目立つ。更に炭をさし添へれば、程無く活火となツて、薄蒼い炎も立つ。

矢部はつく〴〵其焰を視た。

「薄氣味のわるい色だな。まるで形容すれば魔王でも吐き出し相だ、暖かいといふより凄い樣に見える。さりとて火だと思へば、冬の夜などは水よりも親しみたい。したしみたいが又氣味惡い。丁度あの洪鐘宇だ」。

その時ぎツと隣室を視て、胸でしきりに繰り返す。

「どうしても腑に落ちない。彼鐘宇、眞に全く間者で無いのか知らん。どうもそれがをかしいて。第一に辯が巧みでありすぎる。いやさ巧辯、かならずしも間者とも限らんが、間者かならず巧辯とは言ひ得る。

酷評して見れば、亂酒を諫める、その諫め方いかにも巧い、巧いが婦人的である、男兒のいさめ方でない。涙を流していさめる、泣いて諫める、それも可からう。あれでは些し行りすぎはせぬか。如何に情が迫ればとて——諺に男泣きとさへいふ、さほど仰々しくない處に眞實の處がむしろ却ツて有らうと思ふ。

それとも泣くのが癖であるとするか。いかに諫言と言ひながら、それ式の事にあれ程泣く、それ程情に脆い人間で、どうして刺客となツて人を刺さうなどゝいふ念慮が出るものか、出し得られるものか。

しかし彼は金先生を刺さうとしたと言ふ、而も一度ならず二度迄も。彼は自分にその事を述べた。どうも後先

そろはぬ。それとも情にもろい故、刺さうとしても手を下しかねたと假定しやうか。それでも訝しい。人は大抵みづからおのれを知る。よく知らぬ迄も幾らかを知る。自分は賊が働けるか、人ごろしが出來るか、その否やは人間の所業の中でも重大な所業であるだけに誰とてもそれが出來るか出來ぬか位はあらかじめみづから知るべき筈だ、人ごろしが出來ると思へばこそ最初は鐘守も刺客たる任を引き受けたのだろ。でなくて何うして引きうける。さすれば、その手を下しかねたと云ふのは情にもろい故ではない、更にある他の――それは何か今わからぬが――或る他の原因で下しかねたのだ。

　更に疑へば刺さうとして手を下しかねたと云ふのが全での嘘かも知れぬ。それ程のこと迄も最早心服して打ち明けると相手に思はせるのが却ツて信を加へさせる道理ゆゑ。どうも嘘らしい。わざと人の肺腑を穿ツて云ふのだ。一歩ゆづツて眞實として見ても猶うたがふべき點がある。刺さうとして手を下しかねたと云ふ程の人間に不釣り合ひなのは其辯舌だ。前後きちんと揃ツてみだれず要點に中り、究所を衝く、無駄は無くて直ちに胸元を刺す、そも／＼胴骨すわツた者でなくてどうしてあれ程の辯が有らう。その辯でその胴骨のすわツて居るを知ツたと云ふ事は俺からの公平な觀察で、さも情にもろいらしく言ふのを其達辯の人が達辯を自由にあやつツて言ふ言葉だ。其處に多少の不眞實が決して無いとは云ひ切れまい。更に又刺しかねたと云ふのを嘘と假定する。すれば鐘守は何の必要あツて金先生始め俺に迄嘘を構成して言ふか。氣に入られる爲か。欺く爲か。氣に入られてどうする。憂國の志士ならば國家有るのみを知る、利慾もしくは其他の企望がなくて、何の必要有ツて氣に入られる樣にするか。是大いに怪しむべしだ。又欺くのか。既に欺くとすれば、その內心には相手に不利益な、そして己には利益な、何か或る物が有る譯だ。さすれば是大いに怖るべしだ。

　怪しむべくして怖るべくある――それだけで間者と斷

定して最早はなはだしい無理も無い。
　更にまだ〳〵疑はしい所が有る。一旦咄しが濟んだらたちまち鐘字は眠いと言ツた、語り明かさうぢやないかと言ツても切りに寐たがツた。泣くまで情に迫ツたものが直ぐに眠いとは何の譫言、寐ろと言はれても寐られるべき道理でない。それを如何にも眠さうで、あのとほり今は高鼾だ。どうしても怪しい。
　よし枕に就ても輾轉それこそ眠られる譯でない。よしや平素寐坊としても今夜のやうな場合ひ、とても眠り得るものでない。その眠いのは情の迫らぬたしかな證據でもう然りとすれば先程の諫言も涙も皆狂言としか思はれず、同時に又情が迫ツて刺すのも刺しかねたといふ事も根底からして動いて來る。
　どうしても然うだ」。
　決然と斷定すると同時に我知らず目をいからせて隣室をはツたと睨んで、
「よし、狸め、覺えて居れ、矢部が斯うして居る内は俺くまでも貴樣の邪魔をして、事に因ツたら命にも熨斗を付けさせるぞ。しや面のにツくい奸物め」。
　肚でしたゝか罵ツて、麥酒の殘瓶また引き拔いて、口から直にぐツ〳〵と飮んで、
「血だらけの豚か、鷄か、乃至鷲の肉が食ひたいわい」。

其三十七

　入りかゝる夕日は相模洋を茜に染めて、立ち舞ふ白鳥の影いとゞ際立ち、暮山やうやく得も言はれぬ紫がゝツた色に變はツて、畫は蒔繪に似た松の簇立ちも墨繪のやうに見えて來た。浪の打ち方こそは緩いが、幅有り、高さ有り、慌てず噪がずに大布を絞ツて、その緩いだけ却ツて尊嚴の趣きを添へるやうである。國主の好意かそれとも自然か、ほとんど浪の屆きさうな處に置かれてある一つの捨石、誰も皆腰をかけるから自づから滑になツて拭はずとも面は淨くなツて居る、それに只一人同伴も無く、ゆツたりと腰を掛けて居た一美人、即ち例の女裝の

志士、矢部道任、今は僞名しての吉田さんであツた。

無心で沖を眺めるのでは無い。海邊とは言ひながら十二月、よし今日は然程ならずとも富士颪もなく、滯留の人誰一人として而も薄暮に磯邊に出て居るものも無いのを、故さらに究竟として單身群を離れて居るのは容易ならぬ思ひ事が有る故で。

前後見まはしたが誰も居ぬ。その見まはした目は轉じて此方からも見える、玉均、鐘宇はじめ自分どもの宿して居る貸別莊の方へと回ツて、その前のとほり障子の閉てて切ツてあるのを見定めて、落ち着いた上に猶一入落ち着いた樣子である。

「噫殘念に堪へられんな。どうして金先生はあれ程深く鐘宇を信用するのかなア。もう迚も口を以て猛省を促す事は出來ない。證據を舉げ、理窟を改めて今あれ程までに説いてそれでも肯かれぬ。言はゞ却ツてこぢれさせるやうで、反對にいよ〳〵堅く信用するやうになる。手段に盡きたわい。情無いな、實に。俺の此鑑定、鐘宇を一個の奸物、金先生を狙ふ間者、獅子身中の虫と睨んだのが抑もちがツたなら首でも好い。と言ツて馬鹿でもない先生だ、それが眩めば眩むもの、よくも〳〵鐘宇の奴め、あれ迄に籠絡しをツたな。しかし何うして可からうな。彼奴を近づけて居る内には早晩救ふべからざる一大事が――第一が支那と朝鮮とに對する吾黨の秘密是は明らかに知られ、それと第二に金先生の大事の生命……」

竦然として又前後見まはした。

「容易ならん奴が舞ひ込んで來たものだ。國家のため金先生のため、不利益と認めた以上は寸時も早く排斥せんければ、と思ツて今のやうに右左から道理を攻めて金先生に忠告してもつや〳〵採用されんのだ。涙まで流して洪鐘宇は乃公の亂酒を諫める、あれで至誠は分かる。それを疑ふのはむしろ無理だと、驚いたなア、金先生とも言はれる人が唯だ此一點張りなンだ。

そこで此上は最う已むを得ない。諫めて聞かれずば、背に腹は代へられん、可哀さうではあるが非常手段、只

それだけだ。

だが、それが難いのだて。彼奴疾くにもう金先生から聞いて、俺が同先生のため又日本の國家のため身を拋ッても事に當たる人間だと言ふ事や、又は支那へ行ッて熱心にその軍機を探ッたといふ事や、又は大阪の花屋で金先生の刺客たる李之平に返り撃ち食はせて、毒殺した事や、それらを悉く知ッて居る以上は中々一筋縄で手には乘らない。わざと騙で胡麻化し先方の味方になッて次第に欺いて、然る後非常手段を施すといふ事が一番安全で又必らず好結果を得る方法だが、どうしても尋常ならぬ彼奴、加ふるに此俺には油斷すまいとの先入の考へが有るものを、それを欺きおほせるといふのは容易でない。一懸生命に行ッたら終には成るかも知れぬが、それには時日が掛かる時日が掛かッては何にもならぬ。一日を過ぐせば一日の不利益、又一日の油斷もできぬものを。

暴く短銃か刀でやらうか。中々油斷せんからなア。況んや刺客となッて忍び込んで居るほどの奴、いざと云ふ時の用意、稲妻が光ッたら身をかはす位の覺悟は有る。

或は誘き出して山中か海邊で――六かしい、奴なかなかおいそれと誘き出されまい、餘人は兎に角この俺には。寐込みをやらうか。すぐに警察沙汰になッて、いきほひ俺の身に及ぶ。縛られる位怖るゝに足らずだが、此國家多事の今日空しく獄窓の中で日は送れない。

さア是も行はれずと。

それとも又例の毒殺か。只ならば是が一番譯無いが、彼奴め矢張油斷はせんからなア。その命を俺が既に狙ッて居るとまでよしや思ひ到らぬにしたところが、些しでも身に異狀が有ると知ッて其儘醫者にも掛らずうッかりして居る奴でない。毒ならばやはり亞砒酸のやうな、盛られても一寸氣が付かず、それで急劇な力の有るものに限るが、それとても此所では駄目だ。内科の何某博士さへ丁度、いやさ生憎、此園に滯留して居るもの。のみか毒の盛り方それさへも困難だ。まさかに料理する臺所へ行かれもせず、女中が持ち運ぶ途中、手段で盛れば盛れ

るだが、その膳が何處へ行くか知れない。意地わるく肝心の金先生の所へでも行ツたらそれこそ大しくじり。いはゆる鼠に投ずるに蓋を忌むで、どうも困る。名案は無いものかな。已むを得んければ俺も死ぬ氣で大袈裟に行るンだが、扨見す見す國家の大事を目前に控へて居て、徒らに死ぬべき生命でも無い。嗚呼誰か智慧を——はて神算鬼籌を得たいがな」。

　吾を忘れて腕を組むと同時、今更のやうに風の冷つくのに心注いで、不圖また沖の方を見れば、冬の日脚の名殘無く、いつか遠くから暮れそめて漁火の影もほのかに動く。月でもあツたなら又格別、とに角女裝して居る身で夜まで一人濱邊に居るのも他の疑惑を招く道理と心附いては石をも離れた。まづゆツくり又今夜思案を凝らして見やうとの決心、その儘歩を移して室に戻れば、金玉均のみ寐ころんで居た。

「鐘宇さんは」と矢部が問へば、稍不興氣に、

「風呂だ。居らん方が却ツて可からう」。

「ですか、唯何ツたのです」。矢部も些しくつんとした。

其三十八

洪鐘宇が風呂から戻る頃に晩餐の膳も來て、兎に角また例の如く酒になツた。

「鐘宇、今夜は忠告に從ツて澤山は飲むまい。麥酒二三本ならば可からうなァ」。

と玉均は許可を得るのを哀願する語氣。

「それはもう御好きの物ですから——御過ぐしさへ爲さらんければ」と鐘宇は微笑しながら矢部の方を見る、別段何の意味ともなしに。をかしな奴だと矢部のみは思ふ。

玉均洋盃を鐘宇に與へて注がうとすると、手で制して

「いたゞきます。有り難うはございますが、拙者は……」

「何、飲まんのか。なぜ」。

「今日から拙者だけは」。

「訝しいな、なぜ」。

「いや戴いたも同じです。昨夜もあのとほりつい我儘に御いさめ申しまして、後には言ひ過ぎたかと悔いても居ります。それと云ふのも一圖に御身のため又國家のためを思ふ故ではありますが、何しろ人に向かツて之をつつしめと言ツて己れ躬から行ふことが出來なければ、言ツた理窟の貫目も減る譯で、それ故拙者だけは今日から」、

「禁酒すると云ふのか、此僕のために」。

とばかり玉均悄然として。

鐘宇は沈痛きはまる語氣で、「人をしてその快樂を殺(そ)がしむるといふ事、考へて見れば實に無情を極めた事です。馬は麥を好み、猴は果實を愛する、その自然な所を無理に枉げやうとする、是ほどの無情は復有りません。敢てさりながら金大人、大人をしてその好ませられる處を殺がしめ、その快樂を減らしめるといふ、只ならば忍び得られぬ無情な忠告、それを爲すものは此鐘宇――血も有れば涙も有ります嘸御にくしみかと思ふ、又御いたはしいとも思ふ――但し御一身のため國家のため、忍ぶべからざる情を制し、堪ふべからざる苦痛を堪へ、涙を呑んで敢て之を强ひると云ふ事、我ながら殆ど堪りません」。その言葉の終尾の邊は大かたふるへてさへもゐる。

よくも〳〵化けくさると矢部その腹は殆ど煮えかへる程で、席を去らせず其皮を剝いてもやりたい。

但し肚は肚、表白(うはべ)、更にとくと其樣子を觀察しての事と故(こと)さらに注意して生眞面目の生眞面目でさも感じたらしく聽いて居る。

稍しばらくの間默然として居た玉均はやうやくにして嗟嘆と共に、「鐘宇、そりや併し却ツて無情だ、是が全然禁酒するといふのでなし、只僕が是から些しく節制するといふだけだ。それを然う君のやうに、如何に僕の身や國家のためを思へばとて、さう君のやうに言はれると一本や二本の此麥酒さへ快よくは飲めなくなる」。

「いや、さういふ譯では」と鐘宇些しく慌てる氣味。
此所ぞと矢部は跟け入ツた。
「そりや洪君、さうですぞ。諫言にも程度の有るもの君がよしや酒を禁じたとて金先生が心から節制する御氣にならなければ馬鹿々々しい、何の益にもならんでさ」。
「そりや、さうだ」と玉均は嬉しげに。
「況んや先生は既に是からは謹めにしたがツて節制をも爲さらうといふ、その場合ひと爲ツて居ながら、他の快樂を奪ふのが氣の毒ゆゑ自分も飲まぬと、それぢや言はゞ面あてゞさ」。
「といふ程でもあるまいが」と玉均調和する口ぶり、但し斜ならず嬉しがツて居る。
「さういふ譯では」と流石鐘宇も面色些し異彩を帶びて、
「只已れから矯めて然る後他に及ぼさうといふ……」
せゝら笑ツて「そりや場合ひが有るです。そりや頑是無い小兒杯を親が教誨する場合ひに、或ひは用ゆる一法です、一法むしろ變則の。金先生などに對してそんな手段、あはゝツ、むしろ何か思ふ處有ツての狂言のやうに……」
「怪しからん、狂言とは」。 鐘宇滿面の怒氣。
「……だとは言ひませんよ、の樣だと言ツたのでさ」。
「おなじ事です」。
「ちがひます」。
「ま、可いぢやないか。もう分かツた」と玉均さすがに聞きかねて「何しろ鐘宇、好意は受けた。矢部のいふとほり面あてがましい事は僕は不可だ」。
「決して面あてでは……」
「いやさ、ではあるまいが否だと言ふのだ。さツ、矢部、もう可いさ、議論は。僕も快よくいつものとほり飲む。君も飲め。さ、矢部、注いでやろ」。
何思ツたかほろりと計り暗涙が矢部の目に一滴、鐘宇は睨めるやうにそれを熟視する。
「鐘宇、さ、君も飲め」。

聞かれるさうに、「では何うぞ少々」。

「ぶツ」と玉均吹き出して、「何も少々と言はんでも。それとも又僕にいふ面あてか」。

うまく遣られて禹の音も無い。

「飲む、今夜は僕」。矢部その探金の本性が出た。

「うまい、斯ういふ時に飲むのが。人を馬鹿、翌日をも知れぬ命だ。戰爭の有るまで繋ぎたいが、正義のため博愛のためもし已むを得ぬとすれば今でも捨てゝ惡魔の奴等を。生きて居る内が花、飲むべしだ、大に飲むべしだ」と言ツて忽ち氣を換へて、「洪君、鐘宇先生、妙な事を聞くが、君は血は好きか」。

「血とは？」

「血さ、紅い血さ、鮮血さ、淋漓たる生血さ」と語氣までも不作法になる。

其三十九

意外な問ひに洪鐘宇は寧ろ氣を呑まれた氣味である。

「血を好きかとは、一體どういふ血をです」。

問はれた故仕方無いとの語氣で言ふ。

「すべて何に限らず、血をです、鮮血をです、生血を見るのをです、早い噺しが戰爭などしてしたゝか鮮血を見るやうな事をです」。

さう云ふ矢部の聲に言ふべからざる凄味がある。のみならず男子とは言ひながら花の如く美くしく粧ツて例のとほり美人の姿をして居るところで、此薄氣味わるい事を言ひ出した、その凄味一方でない。鐘宇ひたと呆れはてゝ居る。

「醉ふたのか、矢部、つまらん、奇を好んだ事を。何しろ今夜は議論は廢せ。折角の酒が不味くなる」。

玉均は持てあまし顏。

「何の醉ふもンですか、麥酒などに。しかし御不快を招いては御氣の毒ですから、それでは廢めます。が洪君もう直だな血の味を知るやうになるのも。僕は是から血を見、血を味ふ事ができるのが樂しみでならない」。

「何處でそんなに血を?」と鐘宇が。
「知れてるぢやないか、君の國か支那あたりでさ。平壤が屈指の修羅場に爲るだらうとさへ言ふ……」
「よせ〳〵、矢部」と玉均苦わらひして、「何しろ僕が酒を飲み過ぎるから起ッた議論だ。もう可いさ」。
よろしく制して餘談に移ッたが、流石に鋭い洪鐘宇の事とて既に大方矢部の心中をも推察した。
食へぬ奴。刺客となッて乃公が玉均に近づいて居るのを知り居ッたわい。知られては厄介、事に因ると乃公が危い。玉均は既にわが手の物だが、もとより相手はその氣に入りの矢部、どう說き付けられるかも知れはせぬ。あべこべに乃公から先んじて矢部を亡いものにして了ふか、それともそれと無く遠ざけて、朝鮮へなり、支那へなり追ひやるか、此二途の一を選んで手ばしこくするに限る。
肚で斯う思ッても何氣ない顏。二人とも針を呑み、毒を藏して相互ひに樣子を覗ぐ。刺客を二人しかも反對のを二人まで、同じ假面の下に突き合はせた、是また一の奇觀であッた。
麥酒も多くは飲めぬ故、起きて居るたのしみも無いが玉均はやく寐ると言ひ出したので、鐘宇と矢部と一所になッて夜の物など展べてやり、其臥床に入るのを見て二人とも次の室に退ッた。
誰も忘れて居たと見えて手を付けなかッた紅林檎の大鉢が床の間にあッたのに不圖矢部は心づいた。單に林檎として心付いたのでは無い、それを利用して、今や、實に今夜、邪魔ものゝ洪鐘宇を殺して了はうとの怖ろしい工夫が浮かんだので。
しばらくは四方山の物がたりに夜を更かして、もろともに又ちび〳〵と麥酒などを飲んで居る内に、矢部は便所へ行くとて、鞄から紙など出して一寸室外へ出て、やがて又程無く歸ッて來て、何思ッたか床の間へ近よッて山水の掛軸を一瞥した。
すぐ立ち戻ッて座に就きながら、「洪君、片明りで見

ると彼の軸の繪の右の方の高い山は一寸人間の顔のやうだね」。

「なるほど、さう言へば大きに。とんと書探し見た樣ですな」。鐘宇も何氣無い。

「文晁ばやりで至るところ文晁だ、流行は君の國へさへ大分及ぼして居るのね」。

「は、大分」。

「それにつけても國家の危殆をも知らず、無心の人民は平和の夢を貪ツて書畫などを愛玩して居るのが、一朝耳も裂けるやうな砲聲を聞くに至ツたら何う、どれ程に驚くかと思ふのさ」。

「あはれむべしですな」。

鐘宇の返辭さツぱり冴えない。矢部も些し氣が拔けた工合ひ。

卒然として「あツ林檎、好下物、賞玩しやう、一つ」。

起ツて鐘宇には管はず、只一個を洋小刀と共に持ツて來て、「奇麗な色だなァ」とひねくりまはして、やうやく剝きに掛る。嗚呼、鐘宇の命は風前の燈火、矢部の思ひついたその林檎を利用して殺さうとの奇策は大抵成功しさうなのである。

其四十

矢部は林檎を利用して洪鐘宇を殺さうとしたのは、矢部もその國は忘れたが、何でも外國の判決例にあツた故智に倣ツて思ひ付いたので、即ちやはり毒をもツて殺す法である。

手づから相手の見て居る前で皮を剝き、一個を半分に割ツて相手と自分と半分宛食し、それで相手をば毒に中らせるので、もし旨くさへ行れば必らず成功する事を得て、それで露顯の端緒も殆ど得がたい程である。よしや見す〳〵中毒の死と認定されても。

即ちあらかじめ洋小刀の半面に毒を塗り、巧みにさへ林檎を二つに割れば、半面の毒は半片の林檎に移ツて、それで一方の半片は何の異狀も無くて居る、その方を自

分が食し、毒の有る一方を相手に食させる。人の調理した物なら兎に角、天然物を、而ももろともに分けて食するといふに、誰とて疑念をさしはさむものも無い。

此きはどい法を敢て矢部は試みやうとした。一歩あやまてば自分も死ぬのを。

已れ金玉均をねらふ妖怪、また日本の害をする奸徒、この矢部の目にそれと見破られた以上は不憫ながらも命は貰ふ、明朝は早死骸ぞよ。

とばかり何と無くにツたり笑ツて、「あツ旨さうだ、涎液が出る」。

鐘宇の顔を窺へば稍物澄まぬ體である。

さかのぼツて經過を語れば、矢部がその些し前に便所に行くとて鞄から紙を出した、その時は紙の中に忍ばせてわが洋小刀に亜砒酸を共に取り出したのである。

つぎに室外に出て、充分にその毒を洋小刀の一方の面に塗ツた。

つぎに床の間の畫を見るふりしたのは其處にある林檎の傍にわが洋小刀のあらかじめ窃と置くためであツた。

それを怪しいと鐘宇が心づいたか、何うかは疑問である。それ故さぐりを入れるつもりで、四方山の噺しを仕掛けて見たが一向冴えぬ。その冴えぬと云ふのは何うも相手からしてわが様子を嗅がれるらしい。もはや此上は思ひ切れ、斷然と行ツて見ろ、先んずれば人を制す、行はれなかツたら又その上の事と、終に實行しはじめた。

鉢の儘澤山に林檎を持ツて來ては外のを取られる虞が有るといふ早速の機智から、それ故わざと只一個を持ツて來た。絲よりもこまかい注意、それを鐘宇の慧眼は看破するか。

正に只是すさまじい機智と、機智との比較である。

林檎は剝けた。鐘宇の命もそれだけ削り減らされたのである。

「あゝ、好い香ひ、どうも此實に」。

と言ツて矢部また略を仕掛けた。

「この好い香ひ、どうです、まア」とわざと先鐘宇の

鼻の前へ差し出して、「……でしよ」。

鐘宇も仕方無い。「さようですな」。

引ツ込まして洋小刀で剝いで食はうとして、さァ九死一生の刹那である。

とゞろく胸をぢツと怺へて、「あんまり旨さうだ。どうです、あがりませんか半分」。

「ありがたう」。

〻めたぞと、割らうとする處へ、「あちらにも有ります、それは貴下が」。

「ですが、どうせ剝いたのですもの」。

鐘宇は默ツて居る。矢部も何處やら氣味わるくなツて來た。が、猶さりげなく、

「桃を分かつも子瑕の情です。一つ物を分けて食ふのも友情。さァ」と割ツて差し出せば、會釋して受け取ツて、ひねくりまはしてつく〲見て、扨しかし口へは入れず、

「好い香ひ、旨さうだ」。

矢部は早食ふ。「あァ旨い。旨いです、君」。

「は。さうでしよ。しかし矢部さん」。

「えツ」。

「此林檎は僕は食べますまいよ」。

其四十一

その林檎に毒が有ると氣取ツて洪鐘宇は食はぬといふのか、それとも單不好なのか。いづれとも分からぬが、偖やうやく岸まで漕ぎ着けて來た、いざと言ふ間際になツて、「この林檎は食べますまいよ」、その言ひ方さへ變である。或ひは悟られたかな。

「なぜです。御不好？」何氣無い體で反問したつもりでは有ツたが、顏色も稍變はツて居た。

「はい、どうも不好です。御附き合ひして食べやうと思ひましたが、扨いざと爲ると、何うやら」。

「どうやら何う？」

「どうやら不好になりました。折角ですがそれ故に」。

「しかし何うやら不好になツた、それでは些しく訝しい。何か原因でもあツて僕の剝いたのが御氣に入らん様にしか聞えず、唯食べたくないと云ふなら兎も角も、單に何うやらでは頗る不快な……」

「單に食べたくなくなツたからです。どうか貴下召し上がツて下さい」。

試みるたみか何うか知らぬが、鐘宇はその已れの分の片割を却ツて矢部につき戻した。

「御不好とあるを強いては決して。僕もしかし不好になツた」。

「なぜです。あれ程旨いと仰ツて居たばかりで一旦拙者の食ふべき物と爲ツたにもせよ、腐りもしません、毒もありません」。

いかばかり此最後の句が矢部を驚動したか、言ふだけが無駄である。鐘宇はたして之を無心で言ツたか、故意で言ツたか、その眞意の分からぬだけいとゞ猶氣味わるい。

「あがツたら可いでしよ、大分御好きであらしく御見受け申しましたに。何も拙者に御かまいなくとも」と此度は先方からの逆捻。

「いえ、もう澤山に爲りました」。

「あがりませんか。それでは勿體無い、然る上は拙者がいたゞきましよ、但し今は滿腹で何も物欲しくありませんから、仕舞ツて置いて明朝でも」。紙取りのべて包まうとする。

取ツて置いて他の物にでも、もし試られたなら忽ちにして毒は知れる。氣が注きをツたか、畜生――駄目。もうはや此手で迚も行かぬ。證據を取られてたまるものか

「いけない、そりや、取ツて置くなどゝ。時間が經てば澁が出て、とても食べられたものぢやない」。

「中毒でもしますか」とをかしく笑ふ。

「どうか知らないが藥でもあるまい。強ひてその半片を明日に爲ツて食べずとも他にまだあの通り滿足なのが幾個も有る」。

「でも是に限るでしよ」。

「え、何」。

「是非此半片に限るでしよ、是に限ツて拙者に食べろと仰やツたでしよ」と何處やら凜として言ふ。

「そりや今食べるならばさ」。

「それでも子瑕分桃の芳志でしよ。その芳志を敬しんで領するので」。

擒縱自在に翻弄して、その儘つと身を起しながら、

「御先へ失禮しますが、眠ります。いづれ又明朝。さやうならば貴下は御緩りと」。

言ひ捨てゝ臥床へ轉げ込んだ。林檎はその儘其處にある。矢部今更爲すべき手段に盡きた。薄氣味わるさ一とほりで無い。どうしても悟られたらしい、その返報は必らず有る。返報必らずとも怖ろしくは無いが、やみ／＼と此儘是ほどの奸物を仕留めずに了ふ事、いかにも／＼殘念で、その上又いよ／＼猶金玉均の身に取ツて危難を加へる計りである。さりとて是迄に巧んで十が十まで網より外へは逃がさぬ魚と思ひ込んだのさへがらりと外れて、瓢簞鯰おさへ處も無く、彼はつるりと脱けて逃げて平氣で尾鰭を振ツて居る。どうでも池中の奴ぢやない。又それだけに怖ろしい。不吉な事を思ふやうだが、此分で行ツてうツかりすると金玉均の一身は終にどうか斯うか此妖魔に取ツて押へられて了う。はていよ／＼弱ツた事。此上はもう已むを得ぬか――返報の來ぬうち今一撃。

「命と命との取り換へツこで、暴療治してくれべいか」。

其四十二

其あくる朝の洪鐘宇は更にいつもと變はツた體をも見せぬ。林檎の林の字も言ひ出さぬ。些しく變はツた樣子かと思はれるのは常より却ツてにこやかに見える位のもので。

矢部また呆れた。空砲に早腰ぬかした心もちで、氣味わるさ唯ます／＼加はる。今何を言ひ出すかと計り、敢

て此方から索引いても見ず、唯一人の胸でのみ繰る不愉快、前に而も同じ相手たる其人に食ツて掛ツた時とは全で別人のやうである。

「金大人へ些しく御願ひが有りますので」と鍾宇はやがて切り出した、一同の朝飯も濟んで茶と爲ツたところで。

「はやう申し上げ様と思ひましたが、つい此處に滯留して居て面白さに日を送りました。御承知の如く刻下の形勢内外共に穩かでなく、思ふに淸國あたりの此頃の警備も一方ならぬ事でございませう。その邊を探る必要も有ると過日も仰いましたが、實に拙者も御同樣に感じますので、就いては最早種々の御打ち合せも大抵濟みましたから、是から御暇をいたゞいて拙者は一つ淸國へ渡ツて見樣かと存じますが、如何でしよ」。

矢部には意外な言葉であツた。いよ／＼端倪すべからずと宛然片唾を飮んで默然として傍聽する。

玉均すこしく首傾けて、「その事は僕も思ツて居ツたのだが、渡ツて探ツて貰ふ人を一寸思ひつかなかツたので——君が行ツてくれゝば好都合とも何とも。一日も早く願ひたいな」。

「なるほど。丁度此頃拙者の健康もすぐれて居りますし、又どうか斯うか盤纏も有りますし」と微笑めば、玉均もまた笑みで迎へて、「有るか、充分に」。

「三百圓ほど」。

「おほツ不思議だ、君にして不思議だ。よく然う持ツて居るの」。

「儲けましたので。へツ、面白い事で、花で、〇〇公使と領事とを相手に過日偕樂園で、本當かと、本當ですとも」。

「驚いたね、隅へは置けない。それは然うとしても幾分か又僕の手許からも上げやうか、どうか君が其決心なら一日も早くね」。

「他にもう御用はありませんな。さすれば大體を御打ち合はせした上で今日出發しても可いくらゐで」。

「勿論善は急げと云ふ。それぢや然う爲やうか」。

途端取り次ぎの下女が來た。「何ですえ」と矢部が椽端まで出ると、下女は一封の書翰を出して、

「御つかひの方がこれを。あの御受け取り書を」。

受けて見れば金玉均宛朴泳孝の書翰である。すぐ領收書を認めて下女を去らせ、均玉まづ開いて一讀して微笑を浮かべた。

「そろ／＼動き始めたよ、東學黨と命名して」。

「も、始めましたンですか」と矢部も鐘宇も一齊に。

「いゝや、まださ。團結がそろ／＼出來て、蠢々動きはじめたのだ。で、斯うかいてある。武器、特に銃器の不足で弱るし、又綿火藥などの供給が皆無ゆゑ、京城をどう噪がせる事も爲らないとさ、で、それに就き相談したいから來いと言ふから、僕は是から一走り朴君の所へ行ツて委細評議しやうだが、愈よもう君を猶更煩はして支那行を試みて貰ふ必要が迫ツたとは今からでも斷言し得る」。

鐘宇何ゆゑか頻りに聞きたがる樣子。

「首領は誰ですな。どの位の人數の團結が出來たのでしよな」。

「分からん、それは。けれど大抵は推察も付くさ。何しろいよ／＼刻下の形勢が迫ツたと云ふのは事實だ。面白い、多年の宿志も之から遂げるのだ。矢部、時間表を見てくれ、國府津發東京行の汽車の、今から行ツて丁度乘れるのを」。

折も折、又下女が來た。飛び立つやうに矢部が立ち迎へて見れば今度は電報、金玉均宛で差出人の名は分からず。

開封して金玉均、「うム、朴君からだ。今日尋ねてくるとある。此方から行くのを待ツて居られずに來る、こりや大事件だわい。しかし行きちがひに爲らなくてよかツた。矢部、朴氏が來たら矢張直に通してくれと宿へもどうぞ心得させてな」。

「かしこまりました」。

其四十三

午後二時の頃朴泳孝は來着した。玉均は直ちに出で迎へて、別室に請じ、泳孝の求めに從ッて、矢部をも鐘宇をも遠ざけて、凡そ、二時間餘りは秘密の會談に費してやがてそれが終るや否や猶至急の要務があるとて茶も碌に飲まず泳孝は歸ッて了ッた。

それだけでも唯ならぬ風雲とは想像される。泳孝を送り歸して席に戻ッた玉均の顏色にも容易ならぬ雲が棚引いて居る。

「鐘宇、いよ〳〵大事と爲ッて來た。矢部も聽いて居て可い。もう東學黨の蜂起するのも數月を經まいと云ふ、それから上海あたりの警戒も非常になッて、北京の火藥廠には百七十人からの夜業者を加へたとの事、それから日本から行ッて居る軍事探偵の吉永といふのと、今一人姓不詳の男とが天津もよりの鐵道工夫をして居たのが行方知れずに爲ッたとの事、その意味は說明しないでも解ッて居るだらう。外に機密も有るがまづ言はないとして置いて、偖いよ〳〵是からは二兒を煩す、鐘宇は上海へ行ッて道台の手加減、各營の擧動、それから申報社員の動靜、是を旨として偵察してな。それから又矢部、君は變はッた方面、その是から東學黨と名喚ッて起る一派へ近づいてその樣子を見てくれ」。

「樣子を見る、そして報告いたすのですか」と矢部が

「うム」と考へて、「旗を揭げた以上は固より騷擾を極めるから一々報告抔出來るもので無い。近づいてな、まづその味方に爲るつもりで居てくれ。兵器や彈藥の供給をも、もし賴まれたら引き受けて」。

吁そんな秘密の命令、すぐに此座の鐘宇から仲間へ密告されるのにと矢部身も世も有られない。

「いや分りましたが、二人一度に向ッても混亂しますから、兎に角、洪君への御命令から先へ。その後で私のを」。

「いや一度に双方に聞かせた方が互に參考になるよ」

と玉均此方の思ふ萬一をも思はぬ。「しかし鐘宇、矢部是は嚴に言ツて置くが、鐘宇の上海へ行く事と矢部が東學黨に近づくと云ふ事とは實に實に秘中の秘で、他に漏れて知られるべき事でないので、もしも、さ、ま、有るまいが、もしも洩れて敵に知られゝば、もとより命は無い事、それは管はぬとしたところで、いづれ君たち二人の內から洩れたとより外思はんから、そのつもりで居るべしだぜ」。

非常に意味ありげに言ツて、更に言葉を改めた。

「さて、今後の打ち合せだ、それを今爲ておかうと思ふ。だら〳〵急で、嬉しいやうな、心細いやうな、何とも言へぬ心もちで、僕も殆ど前後顚倒するやうだが、思ひついた事だけは速く濟ませておかなければ。と思ふから今後の打ち合せだが、東學黨の旗色一つで僕も再び立ち歸る、ふたゝび故國の土を踏む」。包みきれぬ怡々として顏色。

「然うなると嬉しいですな、その嬉しさ想像し切れませんな」と先口を開いたのは鐘宇である。

玉均重ねて、「さう爲ると二兄にも或ひは彼の地で會ふ事になツて、却ツてふたゝび日本では相會はぬかも知れません」。

後に思ひ當たられた、是實に厭ふべき辻占であツた。とも知らぬ凡夫の身、玉均は早むしろ空想にのみ驅られ驅られる。

「又さうだ、日本でふたゝび相會ふ樣ではつまり猶不得意の境界なのにちがひ無いのだからなア。僕はそれ故君達と故國朝鮮の土を踏み、故國朝鮮の風月の前で一杯の樽酒を傾けたいと思ふ、はや今からそれを樂しみにする」。

その嬉しげな狀、むしろ憐れな程である。鐘宇も去ツて居なくなれば、玉均の身の上さして苦勞でも無い。いはんや茲に東學黨も蜂起するといふ、それへ近づくのも面白いと、矢部も一つは安心した。

只鐘宇が朴泳孝からの通知も來ぬ前に自分上海へ赴か

うと言ひ出した心底、是一つの不思議であるが、明きらかに其心事を解剖すれば、只矢部を遠ざける一策で、もとより上海へ行く氣もなし、さう言ツて一旦王均の傍を去り、矢部に油斷させ、一面王均からは矢部に命令して朝鮮へ赴かしめ、矢部が同地へ行ツた處で、わが仲間のものに殺させて了はうとの心算、そこで自分は又入れ代はりに王均の許に戻るとの工夫。

その工夫を行ひかけた矢先、天は鐘字に幸したか、東學黨蜂起の兆候有るとの通知で、鐘字の策を待たず、否應無し矢部も韓土へ行く事になツて、面白くも風雲はどうやら鐘字掌中の物となりかけた。

女装の探偵　後編

其一

洪鐘宇はその次の日、まづ上海へと出立し、それから一日過ぎて矢部も發する事になツた。是が永の別れにならうとも知らぬ離杯を玉均も矢部もその前夜心無く酌みかはせ、あくる日の一番汽車で出發した。

鐘宇を見送ツたが、その日玉均は矢部をも國府津の停車場まで送り、一先蔦屋の閑室へ通ツて、更に細々といろ〳〵の注意をも與へ、前夜吩咐けた秘密の件の要點をも又繰り返し、もう十分ほどで汽車も出るとなると、虫が知らせてか頻りに名殘りをしい體。

「是からは最う怖い、まづ戰地へ行くのだからな。もとより君も死を期しても居やうが、さて或ひは此儘永別離となるかも知れん、僕が死ぬかさ、君が死ぬかさ。と思ふと未練のやうだが、何だか別れにくいての」。

さすが眼をうるませれば、劣らぬは矢部に於ても同じ情、

「まツたく先生。苦痛は別離ですな、死ではありませんな。いつもと違ツて氣の所爲か、どうも御わかれにくいです」。目は早涙一杯で。

「つまらんとは思ふが、汽車でも後れろ抔とも思ふのさ。だが、君が鐘宇に對して僕に與へた忠告は謹しんで領したよ。だが昨夜言ツた大秘密の事件、即ちダイナマイト盜みの一條は實に細心注意してね、どうか失敗せぬ樣にな。京城へは忍び〳〵に同志者を集まらせるから」。

停車場では早發車の鈴鐸（べる）が鳴る。

「あ、出る。それぢや」。

「さよならば」。

急いで駈け付けて乗り込めば、玉均また後追ふて來て發車する迄眺めて居た嗚呼、これが二人最後の別れである。今聞いたより外は矢部もふたゝび此名士の聲を耳にせぬのである。

是非も無いとは此事か。充分に矢部は鐘宇を刺客と認定して、飽くまでも玉均に忠告を試み、容れられぬので已むを得ず、鐘宇を亡いものにしやうと試みて果たさず終に又鐘宇に舞ひ戻られて、その果はやみ／＼誘き出されて、金は上海の客舍短銃一發の烟りと消えて了ツた。その飛報を聞いた時の矢部の心中推測するに餘り有る。

茲にその後の矢部の動作を言ふに方り、明言するに稍憚るべき所も有るゆゑ、事實だけを簡單に記せば、矢部はそれから神戸へ行き、その後全く踪跡を晦ませたが、いつか何うして忍び入つたか或る處の警戒嚴しい目を掠めてダイナマイトを盗み取つた。

物が物ゆゑ其土地の警察部では殊の外おどろいて、それだから極めて秘密に犯人を搜索したが、更に知れぬ。犯人の遺留品と思はれる古手拭が一筋と讃岐の多度津の甲子樓(假名)といふ遊女屋の書き附けが一本現場に在ツたので刑事巡査は勇んで、それから調べに掛り、まづ其手拭の記號によツて丸龜の回漕店冂十(假名)といふ家から出すものと知り、更に甲子樓の書き附けの日附と敵娼の名とに因ツて、やがて其地の其筋に向かツてその時の客の人體を取り調べてくれろと打電した(犯罪の現場とは百里も離れて居るので)。

やがて調べたが要領を得ぬ。その時の客は商人で丸龜の者であるとの事だけしか分からぬ。して見れば其回漕店に關係あるものと目星を附けたが猶分からぬ。臭味の有るものが一人も無い。嫌疑者とし試に逮捕しやうと思ふものさへ無い。

しかし其犯罪者は矢部なのである。さらば遊女屋で矢部が遊んだのかと言ふに然うでもない。畢竟それは警察部をして探偵の方針を迷はせる爲故さらに其樣な遺留品を置いたので、實は神戸から大阪へ出、便船して丸龜へ

わたる船中で多度津へ行くといふ旅商人と懇意になり、その者の稍痴漢なのに乘じて口前よく欺き遊興費まで出して登樓させ、偖他日の材料にもと體よく言ツて其書き附けを貰ひ受け、手拭ひは又その邊の宿屋で胡麻化し取ツたものであツた。事實だけにして煩しいゆゑ委細は省く。

それ故探偵はいたづらに闇から闇を辿ツてのみ居る内に、例のとほりの婦人の姿で矢部は悠然とその地を逃れ壹岐の勝本港に來た。賴まれた一件は首尾よく手に入れた故、すぐに渡韓する心得である、御安心を乞ふとの暗號電報を取りあへず島田糸子宛にして發して、いよ〳〵夫から故國を離れて、死ぬか生きるかの敵地に踏み込む用意、その夜例の至尊の御影を飾ツて寸志ばかりの茶を奉り、萬歳を心の裡で唱へた。

其　二

首尾よく矢部も京城へ着し、其處に雜貨商を營んで居る日本人小田吉數といふ者を音づれたが、もとよりそれに對する金玉均の紹介狀に因ツたので、又此小田といふ者も言はゞ一個の志士とも言ふべきものであツた。來歷を正せば以前他の姓を名乘ツて外國語學校に在ツて支那語を學び、放蕩の爲め遂に退學され徴兵にあたるのを否がツて老人一人の家の名跡を繼いで小田と稱へる事に爲り、その老人死去の後朝鮮へ渡ツて一個の雜貨商となツた。その頃丁度卅四五、功名心に富み、冒險の事業を好む性質とて、一度東京で金玉均に會ツてから無法にそれと一味する氣に爲り、御用とあらば何をでも爲ると絕えず賴み込んで居た。

それ程ゆゑ玉均の手書を持ツて矢部に訪問された嬉しがり方は一とほりで無く、殊に矢部が女裝の軍事探偵だと言ふので一方ならず驚きもし、自分も亦一の小說中の人物となツたかの心もちである。

「金玉均さんにそれ迄の御世話になられ、又それまで誠を御盡くしになるとは實に御うらやましいです。私も

どうか御仲間入りが爲たいです。丁度幸かうして此數へるにも足らぬ私に金玉均さんから貴下を御紹介して下さると云ふのは身に沁みて忝く存じますに就ては何なりと國家のため盡くすだけの力をば盡くしますつもりで。どうか何事に因らず御遠慮無く」。小田は眞實籠めて言ッた。

「有難う存じます。仰やるとほり國家の爲ですからな。土臺が金先生からして然う申しては變ですが、深く貴下の御氣象を見込んで居られますのでな、是非とも御賴り申して腹藏なく秘密を打ち明け、萬事助けていたゞけと云ふ、かう云ふ譯でして」。

「どうして恐れ入ります。御助け申す抔といふ程の力は更に御座いませんが」。悅氣滿々たる顏つき。

「それで手早く打ち明けて御咄し致しますが、どうかその前に豫め御承知置きを願ひたい事が御ざいます。と云ふのは外でもなく、今度御相談にまかり出ました事は實に私一人、もしくは金先生一個人の利害に關すると云ふ事ではなくて、實に確かに日本帝國の安危に關する事ですから」。

「なるほど、はゝァ」。

「赤心、と申して眞向から御うたがひ申す譯では有りませんが、どうぞ日本男兒たる赤心、所謂日本魂をもッて、人類博愛の主義に因り、仁義の道を履み、身を殺しても國家の爲、更に言ひ換へれば、畏くも皇室の御心を休め奉るやうにとの是れだけの御決心で、然る後に御承諾を願ひます」。

犯すべからざる威嚴をよそほッて肅然として言ふ、その言辭は感情に脆い小田の胸には明きらかに確かな效果を奏した。女裝して美婦人と見えるだけ却ッて天使でも天降りして來て天帝の御命をでもさながら傳へるかに見える。

「それはもう誓ッて。一個の商人とこそ爲ッては居りますが、是でも日本帝國の臣民でございます。口幅ひろうございますが國家のためとか皇室の御ためとか言ふ事

ならば誓ツて赤心をもツてよしや水火の中をでも……」
「わかりました、承知しました。薄々御承知でもございませうが、日本と露國と支那との關係が此頃になつて實に危機一髪といふ處に迫りましたのでな、つまり開戰はどうしても避けられさうもないので、それらの用向きで私も參りましたのです」。
それから三國の複雜した關係を巧みに說明し、軍機の秘密をも差し支へ無い限りはさも面白く說き聞かせ、つまり充分胸臆を吐く樣子に見せかけたが、その實矢部は猶用心に用心を重ねて居るので、秘中の秘は更に語らず只その得意の才辯で飜弄籠絡を思ふ儘に試みた。で、小田も自由にあやつられた。聞く事毎に耳あたらしい樣な氣がして、講談でも聞く樣な心もちになり、坐ろに膝の進むをも覺えず、天晴一身を仁義のために捨てゝもよし萬世一系たる皇室に微忠を盡くし得るだけの名譽さへ有つに至れば男子一期の愉快であると心の底から思ひ立つたゞ今にも自分が砲烟彈雨の間に飛び入りでもする樣な感憤然として扼腕して、
「振古未曾有の快事ですな、もしそれで克つやうになれば」。
「いゝや克つです。又必らず克たんければ。克たせるやうにする、それも吾々軍事探偵の腕一つですよ」。
「あツ、實にツ」と身ぶるひして何悲しくもないが涙ぐむ。

其三

矢部の策をその儘用ゐて小田は矢部をば故郷から尋ねて來た妻と言ひ做し、知人の朝鮮人一同にも披露したが誰とて怪しむものも無い。此上は新婚旅行を口實として東學黨の群まで近づき、くはしく其實相を探らうと相談を固め、旅行の支度に掛ツた處へ不圖思ひがけぬ手がかりを得た。といふのは尹其容といふ韓人が、かねて小田とは懇意であるので、突然と尋ねて來た事であツた。
密議したいからと小田に頼み、やがて一閑室で用向き

を述べたが、豈料らんや此尹共容も東學黨の一人となツたからである。

共容は己れが東學黨に加入した事實を打ち明かすにも共相手たる小田が日本人でもあり、且常から世話好きである故その口から洩らす樣な事は無いと信じて胸臆を吐いたのである。

「小田君、あへて失禮ながら御人物を御見掛け申して御打ち明けもし、又御相談をも致すのです。己れが加入して居て共黨の非を言ふのは妙な譯ですが、實際今の儘の黨の形勢ではとても勢力を得る法はありません、一致も何もして居ませんでね」。

「最初は皆さうです、その內いつかしツかりとした首領も出來、秩序も立つので、しかし最う事を起すのも近いのですか」。

「近々ですね。と言ひながら烏合の勢でしよ、食ひかせぎのために加入して居るのも多いでしよ。坐食を永く續けては居られません、どうしても暴動して財物を掠めなければ叶ひませんや」。

「が、暴動の眞の目的といふのは？」

「頑固黨と日本黨との混合ですから奇觀です。つまり頑固派は日本派を、又日本派は頑固派をおの〳〵當分の內、即ち己れの派の勢力の成るまで利用しやうと互ひに掛ツて居るのです。御承知の通り私は純粹の開化黨、口こそ利いた事はないが、金玉均、朴泳孝の諸子とは志を同じうするもので、素より今の宮廷の大官に甘んじては居らず、と言ツて支那と結托する了簡でもなし、力さへ叶へば頑固派を東學黨部內から全然排斥し、終にまた年來の希望たる君側の姦を拂はふとは思ふのですが、只情ないかな力が足りませんので」、膝すり寄せて一段と聲をひそめ、「只暴動するのみでは實は甲斐がないのです。武器も碌に備はらず、やがて鎭壓されゝばそれぎりで、それよりは一方に暴動を起して置いて一方に於ては最も手ばやく姦臣を殺してしまふので、さうすれば黨の頑固派の勢力も俄然衰へてしまふです。どうでしよ」。

「されば或ひは然ふかも知れませんな。しかし姦臣を殺すと云ふ事が、是どうも容易には」。

「ですが、方法一つです」。

「どういふ方法で」。

「さ、それを御相談にあがツたのです。「ダイナマイト」と言ひかけたが、偖何となく竦然とした樣子で、

「あの怖るべき力をもツて――ね、すれば唯一擊」。

ダイナマイトでその樣な事を或ひは行ふかも知れぬとは矢部が現に既に小田にも咄した事で、それ是思ひ合せて小田も成る程と合點し、直ちに矢部をも紹介しやうかとも思ツたものゝ、先それも一應矢部と相談しての事と唯何氣無く聞き流して、

「うまくさえ行けばダイナマイトなら何だツて堪りませんや」。

「でしよ。處でどうしたら手に入れられましよね。御心あたりはありませんかね。御相談と云ふのは是で、貴下は義俠の方でも有り、且又日本國にいろ〳〵の緣由が御有りで、あちらからどうかして御買ひ取り下さる事を御引き受け下さらうとも思ひましてね。外ならぬ事を御願ひ申すのですから出來るだけの金は失禮ながら差し上げます。どうか國家のため御迷惑ながら小田君、いかゞでしよ」。

「されば買ふ手續きが、どうですかな」。

口まで出かゝる矢部の事を猶つとめて包みおさへて。

「危險物ゆゑ何れも面倒でしてね」。

「無論です」と考へ込む。

其四

小田は尹其容を咄しなかばで待たせた儘にして、急いで別室に來て、矢部に其容の言葉をそのとほり取り次ぎ意見を求めた。

「ダイナマイト買ひ入れの事を引き受けるのは、もとより貴方が持ツて御出でなのですから、譯も無い事ですが、さうかとて更に容易に買へるものでもなし、此方に

於ても萬一の際には使用する必要が有りますからな」。
矢部も些しく考へて、「一寸好都合な人物が來ましたな、仰るとほり然う人に手離してはやれませんが、可いでしよ引き受けるだけは引き受けて置いたら」。
「なるほど」。
「今日すぐに引き受けて今日すぐに渡すといふのでもなし、その間東學黨の動靜を探るに都合が好いぢや有りませんか、引き受けてやれば先方も此方を味方と思ふ、いろ〳〵の機密をも喘してくれましやうし」。
「まツたく、まツたく」と手を拍たぬばかり。「それも一策ですな、ゆツくりと利用して置いて然る後與へても遲くはありませんな」。
「さうですとも。だが、しかし、そりや一應私も面會しましよ、はいその人にさうは言ツても或ひは此方を試みる內偵かも知れませんや、疑へば先。會ツて手段を臨機に施して眞僞を確かめ、たしかな者と認められたなら、可いです手先に使ひます。怪しいと思へば又そのつもりで注意するです。どうしても會ツた方が」。
「いかにもな。私もさうとは思ひましたが、一應御相談してからと思ツて居ました。そして私の妻と言ツて御會ひなさいますか」。
「いや、わざと又さうは言ひますまい。近親のものと言ふくらゐにして置いて」。
「とにかく御任せ申しましやう」。
相伴ツて共容待ちくたびれて居る處へ行ツて、是は近親のものでと小田はやがて吩咐けられたとほりに矢部を共容に紹介した。
矢部も初對面の挨拶、しかもしとやかに惚々となる迄の述べ方、のみならず共言葉がすべて巧みな朝鮮語なのには少なからず共容も駭かされた。
呆氣に取られたと云ふ體で、韓人そのものが却ツて言句にまごついて、漸く又初對面の辭儀を述べて、更に又「はなはだ失禮でございますが、御婦人の御身で韓語に御熟練なのは驚き入ります。吾々男子が却ツて御國の日

本語には通ぜず、御はづかしい事で御座います。此國に永らくの間でも御居住になりましたので？」

「はい、三年程」。

尹其容些し烟に捲かれた心地である。ダイナマイトの買ひ入れ方を小田に頼んだ處が、その諾否を更に答へず突然として一婦人を引き出して來た。さすればもう秘密の咄しもならぬ。否、僞るなと言はぬばかりである。散々人に秘密を打ち明かさせて置いて、茲に至ツて逸れるとは如何にも心得がたい限りである。

「尹先生」。婦人の聲ながら凛として呼びかけた矢部の聲の內には何と無しに怖ろし味がある。

「今あちらで此小田から承はりましたが、ダイナマイトが御入用との事で」さながら詰問の語氣。

其容はまたハツと驚いた、自分は大秘密とする事を小田は早もう婦人などに洩らしたのかと。但しさうでないとも言へぬ。

「は、はい、まづ其様な事で」。

「きツとですね」と詰め寄ツて「さらば改めて御氣の毒ながら私は貴下をば捕縛しますから」。

「ひえツ捕縛ツ？」

「巡檢の內命で今まで貴下を偵察して居たのです。東學黨に加擔して此京城を噪がせようとの陰謀をみづから求めて小田の所へ來てつまりは白狀、證據充分さツ、繩を」。

火の玉が轉げ込んだ程の其容の驚き方、いよ〳〵呆氣に取られてしまツて見る〳〵顏の色も無い。小田と矢部とを唯等分に見くらべて居る。

其五

捕拿すると言はれて無上に驚き、顏色まで變へて其容の呆れはてた樣で間諜でないとの事も分かツた。それ探るために構へた威しの一策、處で正體も見えたので忽ちに矢部は又面を和げ、聲までも優しくした。

「あ、分りました。御もツとも、驚きなさるのも。も

う捕縛などいたしませんよ、實は御試し申して見たので失禮ながら間諜ではないかと」。

「いえツ、私を?」其容はまた呆れた。

「御婦人と思ひの外、私を御ためしなさツたと?ひえツそのまゝ優しい顏で」。

「軍事探偵です」。

「誰が」。

「わたくしが」。

穴の明くほど矢部を見つめて其容は嵐のやうな太息を吐いた。

「吁、々、々おどろいた、一驚を喫した。御婦人で軍事探偵、吁、甘果死毒有りとは是」と不作法に口を辷らせて、さうとは自分心附かず、「すると本國の命に因ツて、軍事探偵として御渡來なので……」

「いえ、ある人の命によりまして、一面は軍事探偵として、又仕宜に因ツて此國の要路の大臣を要撃するつもりで」。

「あなたが?」と又目を圓くする。

「ダイナマイトと毒藥と刀、此三品が私の生命で、刀と毒とは肌身に着け、ダイナマイトは行李の中、時機さへ好くば直に行ります、命は無いと覺悟の上で大要は小田からも承り、同志の方を得た嬉しさは素より言葉で盡くせません。御買ひなさるに及ばず、ダイナマイトなら御入用の節いつでも差し上げますが、しかし既に斯う御互ひに御打ち明けいたした上は一々よく相談して輕擧事を懲らぬやうにいたしたいものです」。

「御もつとも」の聲は異口同音、小田からも尹からも。

「事を行はうとて渡來した以上は私も實に此一身の生命は捨てゝかゝるつもりでして、よしや懲つても日本帝國の迷惑にはならぬやう、その時は直に是です」劍で咽喉切る眞似をする。

一座唯肅然となる。

「尹先生、御うたがひ申して威しをかけたのは謹んで謝罪いたしますが、是實に已むを得ぬ用心とあしからず

どうぞ思し召しを」。

「どういたしまして、どうしまして」と共容はやうやく活き回ツた様になツて、又しんみりとして、

「何とも早驚き入りましたなァ。えらい女丈夫が日本といふ國にはなァ。御婦人で軍事探偵――振古未曾有」と獨語する。

「振古未曾有の筈だ、もとより嘘だもの、やツぱり一の男子だもの」と可笑しさを怺へて矢部は一人で腹の中。

小田は頗る得意氣に、「私も同志の一人なので、まづ私方に投ぜられたのですが、人々には總べて私の妻女と言ひ做してありますからその御つもりで。それで是からは萬事御相談いたしましてな、尹先生、どうか事を愆ちません様に。ダイナマイトの事は大きに御安心になりましたろ」と打ち笑へば。

又笑ツてうなづいて、「大安心。ですが何發ほど御所持で」。

「十七發あります。勿論藥品さへ備へれば製造する事も出來ます。それは先それで可いとして、尹先生も小田さんも御聞き下さいまし。韓國政府が吾々にどう注目するかと云ふ事を何方の御手からでも宜しうございますが絶えず内偵いたしたいのですがね」。

「そりや御尤ですが、困ツた事には私の方には其手續きは何うもなァ……」と小田は當惑顏で共容を見る。

「有ります私の手に」と共容珍らしく勢が好い。どうせ私はじめ終には注目される身とあらかじめ考へましたから、此京城の巡檢の中に二人だけ狗を入れておきました。巡檢の方針は一切手に取る如くわかります。先刻はその狗に訴人でもされ、それで私を捕縛すると言はれるのかと、夫で一方ならず驚いたので」。はじめて活々として笑ひ顏。

其六

「巡檢の中に狗を入れて置くとは貴下も中々抜け目が御座いませんが、それは同志のものですか」と改めて矢

「至極同意に考へます、まづそれが第一です」と小田が。

「御尤もです、承知しました。其探りが必要ですからね、今晩是から私宅へ二人を呼びまして、もし勤番でさへ御座いませんければ。篤とよく問ひ正して」と快く承引した。

大要の談も果てたので、再會を期して尹共容も大いに勇んで歸ッて去ッた。案じるよりも生むが易く、敵地へ入ッて案外に好い手蔓を得る事、まッたく聖明の稜威の效す所と一途に思ひ入れば、天おそろしい様な心もちもする。

その夜は一室に退き、是までの顚末の要點を一々洩らさず書き記してやがて例の如く島田糸子宛にして出し、つく／＼と長途の事等を思ひ續けて茫然となッて居る所へ、手紙が來ましたよとまづ一聲を先に立てゝ一封の信書を持ッて主人の小田が入ッて來た。見れば偖思ひもつかぬ、さきに秋子孃の紹介により大阪で面會した彼の奈部は尹共容に問ふ。

「もちろん同志の者ですが、しかしつまり、金力でご」と共容大いに得意になッて、

「私に父祖から傳はッた些ばかりの資産も有りますので、その中から支出して各の狗に毎月の俸給の倍額だけを與へて居ります。又非常を知らせた時には特別に」。

「面白い、それでなければいけません。大丈夫でせうな」。

「反くまいかと仰やるンですか。そりや大丈夫背きますまい。何なら貴女が御ためし下さッても」。

思はず失笑して「さう／＼試してばかりも。大丈夫でしよ、その位厚遇して置けば。又試すべき機會が有ッたら試しても見ませうが、まづ今は其儘で。何しろ丁度好い工合で御互ひに氣脈が通じ得られて何よりです。就ては早速ながら尹先生、貴下からその二人の巡檢に御たのみ下さッて、警務で私どもにどう着眼して居るか一つ探ッて探ッていたゞきたいですな、さうでしよ小田さん」と

良大尉の書面なので。
「やツ、めづらしい」と封を切る。
「御存じの方ですか、使ひが待ツて居ります」。
と言ふ内に讀み了ツて、慌たゞしく返書をしたゝめ、
「では小田さん、是をその使ひに。恐れ入りますね」。
「どういたして」と出て行ツた。
程無く歸ツて、「御友人ですか」。
「はあ、奈良と云ふ大尉です。よく疾く知りました、私が此方に居ると云ふ事を。また何うして當地へ來て居るのですか知らん。とにかく相談もあり、面會したいから來て呉れとの事で――いづれも矢張り國事に關してゞす」。
「さツぱり氣が付きませんでしたよ、然ういふ人の來て御出でのを。便船の來着ごとに誰が渡來したか直にわかりますのを。又況んやその位の資格の有る人といふのに」。
「忍んでゞも來たらしいです」。
「さうかも知れませんな。すると貴下御出でになりますか」。
「は、一寸行ツて來ましやう。今」。
「今」と鸚鵡がへしに返して、「遲うございますぜ、もう」。
「でも招かれました故。またどういふ緊急の用事があるかも知れません」。
「帶など締めなほしながら、「小田さん、御如才も有りますまいが、秘密書類の入ツたあの鞄とそれから一件とは特別に御監督下さいましてね」。
「一件とは？」心得たらしいが、猶念の爲といふ體で。
「一件……ダイ……」とばかりその後のナマイトは目色でいふ。
「承知、一生懸命に。しかし氣をおつけなさい、あなたも」
「有りがとう」。
やがて大尉方を尋ねた。譯なく尋ね當てゝ、待ちかね

てゐたとてすぐに席へ通され、互ひにまづ一別以來の挨拶をはツた。

其　七

大尉の室の中に軍服も軍刀も軍帽も無く、鼠色の背廣が只釘にかゝつてゐる。一目した所で官命を帶びて來たのでは無いらしい。曰く有りさうだと矢部も睨んだ。

「御渡來ならば大抵わかるのですが、つひ存ぜずに――いつ頃御出でになりましたので」。

鬚ひねりながら微笑して、「一昨日です」。

「存じませんでした些しも。御公用ですか、御私用ですか」。

また微笑して、「曰く言ひがたしです。御察しの程ひとへにな」。

「今も御在職は以前の鎭臺ですか」。

「いや全くの閑散の身です。過般來官は旣にやめましたで。非職でも休職でもない、まづ免職、と思ツてその餘を御察し願ひたいのです、禪家の口吻を借りて言へば、以心傳心の御會得をな」。

「わかりました」と點頭いて「それではもう是から萬事御自由で、前途も亦大分面白うございます。御家族は？」

「水杯して別れて、親戚へあづけて來ましたから安心です。先是からは僕も猿のやうに飛び歩く事が出來ると思ふと愉快でなりませんや。君は劍と毒とを携へて天下を横行される、僕も是から大小二刀と短銃一挺、はゝゝ是からは血が友だち」とさも愉快らしく言ひ放ツて、又遽然として調子を潛め、「思ひ出しては敬服して居ます、とう／＼李之平を殺ツて御了ひでしたな、實に巧く。あの樣は御手際で今度は僕なども宜しく御世話を受けたいです。忍んだり化けたりする事は却ツて君より僕の方がまだ素人ですからなア」。

「どうして中々、さりながら是から僞さうといふ御事業、その大要は伺へませんが、大抵は御察し申しますが。

それともやはり秘密で」。

「そりや御咄し爲やうと思ツて居るので、是でも僕は日本の本國をばまづ亡命して來た身の上でしてな、是からは、それ一件、東學黨、あいつへ身を投ずるつもりで」。

「多分その邊かと存じました」と太甚しくは駭かぬ。

「日本人も些しく加はツて居る樣に噂しますな。私も金玉均の命に因ツて同黨の動靜を覗ふために渡韓した次第で、此の最寄りに同黨に加入して居る士も有り、一寸知己も出來かけました。御互ひに國家の爲ですから及ぶだけ私の方からも御便利を謀りましやうし、貴下からも私どもへ」。

「もとより望む所です。ところで東學黨へ供給する兵器は南米〇〇國から僕の手に因ツて差しづめ小銃五百挺だけ回附する手續きですが、僕ではまだ些しく都合のわるい所も有りますに因ツて恐れ入りますが君の御工夫でどうか御手配くださツて、着荷早々御受け取りを願ひたいので」。

御手まわしの好いには矢部も驚く。只徒らに驚くのでない、いよ〳〵戰雲が鬱勃と蒸しに蒸して舞ひ下るばかりに爲ツたと思へば、又今更の樣な氣もちがして。

「もう兵器を供給する迄に運びましたか。よもや未だそれ程にも。いよ〳〵愚圖愚圖出來ないぞ」と我と我を戒めるやうに言ツて、更に又乞はれる要事に心附いて、

「御たのみとあらば何うにでもして受け取る事に致しましやう」。

「あらかじめ御承知でしよな、受け取り方の困難危險は」。

「もとよりです。但し荷づくりは如才無くできて居ましやうが」。

「それは嚴に吩咐けて置いたですから氣の利かぬ事も有りますまい。鐵の地金のつもりで來るです。更に角君の御手で受け取ツて下されば實に好都合、謹んで僕一人のためのみならず、日本國のためとしても亦充分の感謝を表します、好い處で君に御目に掛ツたもの、是も帝國

の運命に天祐の有る事と信ずるので――どうです日本の或る地方の高等探偵で絶えず金玉均氏に尾行して、その序に君を見知ツて居ツた男が些しく過失が有ツて職を免ぜられた以來、又僕と志を同じうして一旦亡命して共に南米○○國に奔り、それから今度當國へ來て、餘所ながら流石はその道、君があの小田といふ人の所に居られるのを突きとめたので、それで僕から今日御呼び申したです、參上するのは御相談の上と思ツてまづ控へて」。

此度は矢部の方が却ツて深く驚かされて、續けざまに唯それはそれはと許り。

其八

東學黨の一人尹共容から使丁に持たせて小田宛にして來た書面を見ると、昨日御咄しをした、狗として忍ばせて置く巡檢二人の中の一人を同伴して今夜參上するにつき其のつもりで御待ち下されたく、いろ／＼御參考になるべき事有之候との文意であツた。

さらば又夜がたのしみである。氣味の惡い程好都合に行くものと、矢部をはじめ小田も胸が躍るばかりで、又小田は矢部から奈良大尉の事を聞いて更にいよ／＼勇み立つ、その夜は又密話を聞かれまいとの用心から韓人たる店の手代と小僧とに各小づかひ錢を與へて急に一日の賜暇をさへ許した。

果して約の如く薄暮の頃を待ちあへぬとの樣子で、尹と今一人の男とは音づれて來た。

始めて小田も矢部もその男といふのを見ると年の頃卅四五、鬚たくましく魁偉な相で、もし單に外貌のみを以て評すれば、猛勇當るべからずと褒め稱へて差し支へぬ。金叔と自から名のる。

尹は矢部たちにその男を紹介して、「是が昨日御咄し申した男の一人、是又吾黨の士で決して御怪しみなさるに及ばず、充分御相談相手として下さらば、本人も面目に存じます」。

その後をば金叔みづから引き受けて一とほりの挨拶を

した。
矢部とても全く心つかぬといふでも無いが、此夜それから金叔の述べた所を聞いては身に思ひあたる處のあるので、一方ならぬ恐慌を感じた。
「金叔、さきほど君が僕に述べたところを更に委しく小田さんと間部さんとに御噺し申せ。くはしくだ、委しい分は厭はぬから」と共容はまづ叔を導いた。
「訥辯で御聞き苦しうございましやうが」と金叔相應の冒頭を置いて、「間部荊子さま、又は吉田きん子さまと御名のりになる貴方の事に就きましては當國の警務の手で既に一切の取り調べが付いて居りますのでな」。
此一語が矢部を驚かせたのも道理であつた。僞名の色々までを既に知られて居る、それも前夜并共容に打ち明かしたなら格別、まだそれは言はぬとすれば共容から傳へ知ツて斯う言ふのでもなし、全く警務の手で既に取りしらべたに違ひ無し、さらば來た事から來た目的から、所謂箸の上げ下しまでも探り知られて居る譯である。
思へばわが心付かぬ間に昨日は既に奈良大尉附屬の探偵に認められ、今は又此警報に接する、扨も相手が鋭いのか、己れが鈍なのかと矢部疎ましい心地もする。
が、故さらに平氣を粧ツて「さ、その位の事は既に御偵知だらうとは思ひます。いづれ日本からの通信に因ツてゞしよ」。
探りと知らずうツかり乘ツて「御説の通り日本國からの通知です、金先生の御手許へ忍び込んで居る洪鐘宇からの」。
扨こそと胸轟く。
「だらうとは思ひました。就ては當地で私にはどの樣な手くばりをする樣なつもりですかな」。
「敢て手をば下し得ません、當分は。〇〇からの威嚇によツて當分は日本の人士に一々內偵を附して置く丈に止めて置いて——その代りいざと爲りますれば——大分背後に〇國の聲援がありますから。御目にとまりましたか當地へ御出でに爲ツて、市中に散見する一種の韓人、

短い角製の烟管で烟草を吹かして居る、多くは顴骨が高くて顔色が黒い男ども」。

「氣がつきませんな」と矢部が。

「知ツてる、此頃俄に多い――見馴れぬ……」と小田が言ふ。

眉をひそめて金叔、「御存で、あ、あれ皆○國の浮浪の輩、その實は同國から當國へ入り込んで――勿論○○氏の命に因ツてゝすが――日本人士の擧動を偵察し、場合に因ツては其命をも絶たうといふ、一種怖るべき打探者で」。

惡魔のつかみ掛る樣な心もちで、小山は呼吸も吐けぬばかりに僞つて物も言はずに默聽する。今更矢部は流石にさわがず、

「隨分陰險きはまる詭譎ですな。露國の虛無黨そこ退けとも言ふべき、勿論東洋には古來めづらしくもありませんが。此方もそれ故その氣で應ずる、あはツ、陰險の比べツこだ」。

「まツたくです、親友が親友とのみ信じて居られない位で。さりながら彼等浮浪の輩どもは旨とする所が給料に在り、それが欲しさに勤めて居るたぐひゆゑ、太甚しく熱心に事に處するのでもありません。强ひて怖れる程でも無いかと、それ故に、私どもは思ひますが、唯々に苦勞な一大事といふのが有るのです」と金叔樣子おごそかになる。

其九

一座の中で何處となく矢部にのみ貫目があると見えて金叔も專ら矢部へのみ向ツて物語る有樣で、

「こゝに苦勞な一大事があるのです。それを御咄しする前に、私の身の上からあらまし御咄し申しませんければ」と懷中さぐツて取り出したのは皺になつた五六通の書面であツた。

「御覽の如く是皆故の尹氏雄烈君の御手書で、何を御かくし申しませう、實はもと其從屬で、一方ならぬ眷顧

に預り、あの時の暴動にも亦同志となツて働きました」。

「ふム、それでは金玉均氏とも外ならぬ關係で？」と矢部も些しく乘り込んだ。

「さよです。甚だ不幸にして尹雄烈氏は非業な最後、只わが志を後に至ツてもよく／＼繼いでくれとの一言を別れで」と語句稍鎮り來ツて、果は悵然として太息を吐いた。

「よし、一は半生の眷顧に報い、一は國家のため、及ばぬながらも回天の志士の一人たらんとし、そこで竊かに考ふる所有り、自分のみは故さらに蹈み止まツて他國へ奔らず、節を屈して假面を被り、妖鬼の如く化けおほせて、容易ならぬ機密といふ機密をば覗いで居る事、是また一の方法であると、それからは力めて其體を裝ひ、いつと無く人にも然ふ信用されて、終に巡檢の一人たるに至り、且つは內部に多少の勢力を扶植するやうになりました」。

「はじめて伺ツてはなはだ敬服、そりや中々面白い。巡檢となツて最う久しくなりますかな」。

「今年で丁度四年に爲ります。今も仰せの如く前後四方皆陰險の比べツこ、そこで私の所業も我ながら陰險の極とは考へますが、毒には毒で接せざるを得ずで、いかにも據無い事で」。

「さうですとも、譎詐を弄するのも實に已むを得ませんよ。貴下の爲さツた事も又一法で奇妙です」。

「金玉均や朴泳孝の諸子へすら私の聲息を知らせず、いよ／＼是ぞと云ふ時には蹶起して御目にも掛る所存です。唯憾むらくは巡檢の地位でしよ、政府の外交の方針を知るのは隨分廻りどほいのでしてな、前後を比較したり相互の關係等を調査したり拆して、判斷を下して居る內には變動定まらぬ外交は忽ち一變して、その判斷が時おくれに爲るやうな事が有りましてね、その度毎に殘念に感じます。と云ツて急に內機に參與すべき地位に至り得べくもなし、已むを得ずで唯我慢して居るのみです」。

「いかに御尤です、が、いたし方ありませんな。促して伺ふやうですが、氣にもなりますので——今仰やツた

一大事といふのはどのやうな事で」と矢部は待ちかねたらしい語氣。

「然様、思はず岐路に入りました。他の事でもありません、金氏と朴氏との事で」。

「玉均、泳孝の二氏ですか」。

「さやうです。洪鐘宇を御存じですか」。

「存じて居ます」。

「いかなる男と御覧になります」。さも重大な件らしく一語々々と刻んで聴く。

「人物の良否ですか。好否に就てならば殆ど言ふに忍びません。評するに言葉も有りません。單純に奸物とのみ言ひ做しては迚も言ひ盡くせぬと思ひます」。

驚ろいたらしい顔つきで、「たしかに然ふ御みとめですか」。嗟嘆して、「嗚呼、御達眼ですなあ。私は又一つこの事を御忠告して貴下からの御言葉で玉均泳孝諸氏をして渠が如き奸物を御遠ざけにならしめるやうにと……」

「その事です」と矢部は遮ッた。

是から自分も鐘宇を怪しいと睨み、之を近づけては毒蛇を懐にするやうなものだと呉々も玉均に忠告して終に聴かれなかッた始末を有りのまゝに物語ッて、

「それ故に玉均をして鐘宇に對する志を翻さしむるといふ事は迚も最う私の手際に行きませんのです。ところで、それが一大事とは」と膝をすゝめて問ひかける。

其十

「一大事になるのです、鐘宇が金、朴二氏に接近して居る内には」と重ねて金叔たしかめるやうな語氣で、

「十が九までは二氏の生命は彼奴が奪ひますからな」。

とは思ッて居たが、偖さう聞けばまた慄然。

「でしよな。貴下がたには早明白で、え、その事が」。

叔はさみしく微笑して、「僕は鐘宇の親友ですもの」。

「いえツ？」

「立つ時送ッてさへ行きました。柳を折ッて同道して

洪君たしかに土産を持ッて來るだろな、と言ふと、鶏の鮮肉の脂を短刀に塗りながら、刮目して本事を見よと」。

「その費用の如きは」。

「袁閔などの手からです、而も袁は微行して送り別れに臨んで斯う言ひました、くれ〴〵も上海の〇〇には充分心得させてあるからと」。

上海と聞いてぎよッとした。

「上海でどうするのです」。

「そこは夫だけ聞いたのですから解りません。さう言ッては無情ですが、早い噺しが金玉均氏が唯殺されるといふ丈なら宜しいです、延いて戰爭、是は直にです。戰爭も好いです、日本國の實力は失禮ながら今果して如何でしやうか」。

心痛に堪へぬ體で首傾けて嗟嘆した。

「そこで開戰となッて、萬一日本が破れる日には我大朝鮮國は一刀の下に支那の內、開化黨は皆殺戮でしよ。痛恨に堪へんです。更に前後から推定するに、また今年あたりに日本に向ッて開戰する心算でも無かッたらしいのです、左樣支那が。ところが金玉均が日本と結託する事ます〳〵深く、さて又憚りなく言へば此國に對する日本の方針が軟弱、そこで在日本支那公使が北京に傳へる報告に據れば、日本は政府と議會と絕えず衝突して官民迚も一致せぬ、今が乘ずべき好機である、と斯うです。但し日本さへ克ッてくれゝば今日が今日開戰となッてもそりや管はぬ、否、むしろ望む所。が、それがどうでしよ。日本艦隊はまだ備はらんと言ふですしな」思案に餘ッてか調子も沈んだ。

「されば、勝負の事は何ともなア。戰爭も好いが、そりや苦勞なものですが、しかし其所が一つの勇氣です。盲勇と云ふか知りませんが、自重に過ぎず却ッて先んじて機を制する事が多くの例にも有りますからな」。

「まッたく勝負は前以ッてわかりませんな」。今まで默り返ッて居た小田がさも尤もらしく口を入れゝば、尹其容もまた釣り込まれて、「金玉均の殺される事が

日本の利益か不利益かな——わからんな、結果とならなくては。しかし金氏はよほど破裂、即ち開戰を急ぐ様子だ。日本政府の武力をたしかと認めたのだろが」。

「そこが一問題だてよ」と金叔又も嘆息して、「惜しいかな金玉均氏は功名に驅られ過ぎる所が有る」。

「そりや然うだ」。

「その結果は事を起すのを急ぎたがる。現に日外の失敗もそれだからな」。

「うム、大きに」。

「だからまだ〳〵安心は出來ないよ。ですが矢部さん貴下もやはり先んじて機を制する方の御意見ですか、なる程さうですかな——勿論それも得かも知れない。迷ふどうも私は迷ふ」。

突如として戸外に電報との呼び聲。弱味有る身の一同は其けたゝましい聲に震慄した。

たゞちに小田が出て取り次げば、矢部への宛で、差出人は例の島田糸子の名、開封すればやはり暗號、もはや暗號にも熟して表と對照するにも及ばず、胸で繰る〳〵反譯すれば、

「綿火藥都合附いた故、茶の荷梱として舟で送ッた委細信書」。

「差出人は玉均である。さすが一同もその用事は問ひかねたが、大方その近い所迄は察した。但しまだ矢部はそれと知らせず、何氣なく嗚呼然うかとのみ言ひ流したが大事實行の期いよ〳〵迫ると思ふと胸は煮え立つやうである。

其十一

京城輦轂の下に、政府の側から云へば、一郡の賊徒の政府破壞の目的で、日々夜々密議を凝らして居るのである。一味は主人の小田をはじめとして、矢部、奈良、大西、尹其容、金叔、金允嘉は金叔と同じ志を懷く巡檢の一人、古風に血を啜ッてこそは誓はなかッたが、團結の一念はきはめて堅い。

警務の當局者の前をば現に巡檢たる金叔と金允嘉とが巧に胡麻化すので、更に嫌疑の掛る處もない。唯矢部のみは洪鍾宇の通知により警務部内誰一人として知らぬものは無く眞先に目ざゝれる目星であツたが、その他は全く鵜の目鷹の目の睨を逃れた。

巡檢の職務をもツて故さらに小田等と交はりを結び、偵察の事を行ふとの口實で日夜入り込むので、却ツて他の偵吏に對して保障を築いたやうなもので、安心此上も無い。奈良が東學黨へ供給する五百挺の小銃は無事に小田が受け取ツて東學黨の手にわたし、金玉均からの綿火藥も何の澁滯も無く矢部の手に入ツた。萬事が萬事、投ける所無く行くので一同の勇み方、最早事成ツたやうな有り樣で、いつでも來いと機の熟するのを待つのみになツた處へ突然として耳を劈く一警報、いよ〳〵東學黨は蜂起して群衙を襲撃したとの事。

それから其勢の猖獗なのを頻々報じて來る、報告は巡檢二人の手から洩れるので矢部等一同逸早く知る、そしてその電報は一々島田糸子の許へ暗號で筒拔けになる。

食ひつめ壯士のやうな一團體が矢部等と同樣の目的をもツて京仁間を徘徊して居たのも他に有ツたが、金も無ければ高等の傳手も無く、矢部の團體程機敏には立至らなかツた。

一室へ矢部が籠ツて居る所へ、入ツても宜しいかと聞いて、やがて允されて入り來ツたのは例の巡檢金叔であツた。額からぽた〳〵滴る汗を拭ひもあへず、

「非常の暑さだ、めツきり暑い。日本から始めて御渡來では嘸御あついでしよな」。

「暑うございますな」と矢部は重苦しく云ふ。

叔は重ねてそれに應ぜず、膝を進めて小聲になつて、

「事實です、あの事は。今電報をも見ました、もう近日上海へ……」

「えツ、金玉均氏が、やツぱり洪鍾宇と？」

「鍾宇からの通知がたしかに或る筋へ來ました。金氏かならず日本を去るです」。

「全くですな?」

「全くです。驚いて御知らせに來ましたので」。

稍しばらく矢部は瞑目して居た。やがて其目を開くと共にさも痛歎に堪へぬ様子で、

「ちツ、情無い事だな、じツつに。あ、淺ましい、まだ瞞されて——無殘や金先生の運命も、金叔先生御察し下さい、僕があれ程又忠告書をも送ツたのに、吁うらめしい、情無い、駄目々々、駄目ツ。だが殘念だなア」。

と浩歎した。

「殘念ですな實に。殺されると知らぬとは——いゝや忠告されても悟らぬとはなア。どうも仕様が無いですなア。電報ぐらゐで言ツて遣ツても肯きますまいしな……」

「魑魅に魅入られたとは此事。困ツた、實に困ツた。どうしたら此際應急の處置が附かうか知らん。金先生が死んでも開戰となる、死なずとも開戰となる、十の九までは開戰がたしかである所で、何を好んで殺される事はない。金叔先生、私は何ともはや手段に盡きまして。腹も立ツてなア。愚痴もまた言ひたくなる。人が是程迄に思ふのを、而も馬鹿な人でも無い癖に。すると、鐘宇が上海から歸ツて、更に金先生と同伴して渡るといふのですな」。

「上海から歸ツたのやらそれとも全く行かなかツたのやら、何しろ今現に金氏の許に居るのです、電報で一兩日中に立ツと知らせて來た程ですから遲くも四五日中には」。

「間に合ひませんな、是から急いで駈け戻ツても」と力無ささうに言ツて、その儘しばらく瞑目して「吁、もう實に已むを得ん。盡くすだけは私も遺憾なく盡くしたつもり、それでも及ばずば更に又如何とも。だが、しかし、うム」と。

「何か御工夫でも」。

「及ばずまでも試みませう。秋子爵と云ふへ當てゝ出發差し止めの儀を懇請する一電報を。金先生にその人は重きをなす人ですから」。

「好手段、ことに重々しく言ひやるのですな」。

「さよです」。

直ちに電文起草した、上海は金氏に取ツて危いから是非とも出發を差し止めてくれ、同地では暗殺の手配すでに全備して居るとの旨で。金叔みづから局へ走ツて急に打電させた。

が、玉均の命の窮ツた所か、その電信も終に無效で、擦れちがひに早出發して了ツた後で、秋子爵の手に入ツた。

其十二

越えて幾日でも無い、いよ〳〵戰爭の幕を開くべき大切の日とは爲ツた。電報により秋子爵は强ひて玉均をして上海渡航の念を絶たしめたが、それしも猶肯かず行ツてしまツたか、まだ分からず矢部はじめ一同空想でのみ量ツて居る。

いつもより猶蒸し暑い夕がた、明日の油照りを前以て知らせ顔な夕照が山の端の斜角を掠めて、風もわたらぬ林樾はさながら茹で殺されて動きも得やらぬやうに見える。蒸されてはいとゞ此地特有の臭氣が何と形容もならぬ工合ひで鼻を衝いて、些しくは住み馴れた身にも岑々と頭痛を覺えるほどである。暑い、くるしいとは誰も皆異口同音今日の日中は今年はじめて蠟燭が流れ出したと言へば、聞くものも左して怪しみもせず、さうだろ今日位の暑さならばと澄まして居る。

せめては夜涼で一日の暑熱の取りかへしを爲やうと誰も彼も暮れ行くをのみ樂しみにして居る所へ、俄然市中は噪がしくなツて。巡檢は全員を盡くして出たかと思はれる位、あちこちを歩きまはる、その歩き方が急ぎ足なのも何か特別な非常でもあツたらしく見えると思ふ内に、ちらりほらりと武裝の兵丁があらはれ初めるやうに爲ツた。

變だ、妙だとは萬口一齊、いづれも變亂の萌しでも有ツての事か位には慾たぬ想像をする。うろたへては戰爭

でも起ツたやうに傳へるのも有り、傳へられるのも有る。
「何事かね。宮中に異變でも有ツたのかね」。「さやうさ、王妃を刺さうとした奴が有ツたとか」。「王妃を刺してどうする」。「どうするか俺知るもンか」。「さうぢや無いとさ、破裂彈抛げた奴が有ツたとか」。「何處で、何のために」。「何處で何のためだか俺知るもンか」。「ちがふ、皆ちがふ」。「どうしたんだ」。「戰爭だとさ」。「どの國で」。「それ俺知るもンか」。

餘所から小田は慌しく歸へツて來た。

「おツ、矢部さん、御心づきですか、市中の樣子がどうも異常で」。

「氣が付いてゐます。迚も凡事では。近所に東學黨でも起ツたのでしよか」。

「それにしては砲聲の音も聞えずな。怪しいと見ると人を誰何する模樣です」。

「はてな」。

門口にちらりと正裝巡檢の影。と思ふ内つか〳〵と入り來ツたのは例の金叔蒼ざめ切ツた顏に又うろたへ氣味に

「矢、矢部さん、大變。破れた。貴下の身が危ふい。ちツ、百事皆挫折」。

矢部また愕然。「何、何として」。

「殺られましたツ、洪鐘宇に」。

「いえツ、金氏が？」

「け、今朝の事、客舍で、上海の――短銃で、それで即死。それから急電でしてな、あのとほり城中が俄の警戒」。

しばらくは矢部も小田も眼を見合はせるのみである。

「よわツたなア」。程過ぎて矢部が此語を洩らした語勢は全でぐた〳〵で力が無い。

「嗚呼、終に及ばなかツたかなア。上海の客舍で短銃で――呼、豫言が的中したかなア。人の言ふ事を切めて肯いてくれたなら――呼、殘……無念な事をツ」。今は早たまりかねて涙潸然として咽び入る。

「眞電だらうな。僞、僞電でゞもあツたらばとも思ふ

――ちッ、親とも思ふ金先生、私は、私は敢て私の說を容れられなかツた先生の無情を怨みますよッ」と又泣く。

金叔目をうるほし乍ら、きッとして、「しかし矢部さん、そんな事言ツて居る場合ひでは。學ぶべからず婦人の痴をだ。政府部內は上を下との混雜、在留の疑はしい日本人は事に因ツて殺すとの事」。

「何、殺す?」

「おもしろい、殺される位何でもない。此處で死ねば國家のため、命が一つの益に立つ」。

けたたましくどたばたと音させて駈け込んで來たのは奈良、大西の二人であツた。

「矢部さん、金玉均氏は殺――聞きましたか」と奈良が。

「聞きました、今。あなたは何處から」。

「支那から直電で。今その發信人を說明する猶豫は有りません。御相談、どうです今夜是を機に官舍破壞を企てたら」。

「しッ、しづかに」と大西が注意を與へる。

其十三

奈良は意氣軒昂、「政府は大混雜、巡査はまごついて居る、それで足許から破裂彈「金氏の仇を一人でもはやく復してやる――愉快でさ。どうせ斯うなツたら最うはじまる戰爭、濡れぬさきこそ露をも厭へだ」。

矢部はむしろ落ち着いて、「それよりも私の身がもう狙はれて居るさうでさ」。

「誰から、政府から?」と目を瞬る。

「金氏の一味ゆゑ眞先に殺してしまへと」。と。「むウ殺してしまへとな?畜生ッ、ふッてエ事を。おッ、此金叔君がさう言ふのでか。馬鹿、今殺されてたまるもンか。先んずれば人を制すだ。そんな猶の事、こッちやから」。

「矢部さん、どういふ事です」。言葉は解らぬが、奈良の見脉の凄まじさに金叔横から口を入れた。

しか〳〵と通辯すれば、兩手を揮ッて、「そりや無謀——無益の策。警戒が嚴になツて居るのですもの、そも〳〵何の奏功が」。
「こりや至當の言だ」と小田が同ずる。
「のみならず」と金叔は語をつゞけて、「警務の表向きは僕と金允嘉とが矢部君を搦め捕るとの事を故さらに受け合ツてあるので油斷して居るのです。」
不圖矢部氣が注けば、まだ尹其容が來ぬ。
「おツ、まだ尹君が見えませんな」。
「さうだツけ、言ふのを忘れた。同君の身の大いに危いのです。それから金允嘉が保護して今がた三角山の方へ逃がしました。矢部さん、それほどですぞ、決して輕擧して事を誤るべき時でもなければ、又漫に死を急ぐ秋でもないです、逃げるが却ツて男子。そツでしよ、小田さん」。
「大贊成。何も狼狽するのみが能でない。こりや矢部さん、金氏の說に從ひなさい」。
「矢部先生の生命は刻々と細り行くです。かうして居る內も氣が氣でない」と金叔ひとり說きさわぐ。
小田から又云々と奈良に通辯したので、奈良も大いに然うとも思ツた。
「さう聞けば大きに尤も、それぢや今夜は爆裂彈さわぎは先づ見合せとして置いて、扨矢部君の一身だ、逃がすとしても此姿では人目についてばかり仕舞ツてなア。矢部君御考へはどうですな」奈良は意見を促した。
此間矢部は默然として可否何れとも斷言せず、苦り切ツて沈思のみして居た、奈良に意見を促されて、さも是非無いといふ調子で、「痛嘆の至りと云ふよりは私は吐く語を一つも……」
奈良は半ばで、「そんなことばかり言ツて居ツたとて——一身の安危の場合ひ君にも似合はぬ。逃げなさい一刻も速に。金叔氏の好意空にすべからずだ。しかし吾々は未だ逃げずとも大丈夫なンでしような」で
「大丈夫だそうです」と小田がたしかめる。

「どうしたですか、矢部さん」と金叔些しくぢれ込んで、「すみやかに決心なさらんければ萬事休す、折角の苦心も水の泡、私は貴下のためどの位苦心するか」。

決然として、「從ひます御意見に」。

「逃げなさるか」。小田と金叔とが相共に。

金叔語を繼ぎ、「逃げるさへも難いくらゐ、此女裝では。そこで考へましたが大形の支那鞄、あの中へ入ツて荷物の振りして胡麻化すより外は――大形のが有りましよか」。

矢部と小田とは目を見合はせた。

「何です」と奈良が問へば、又云々と小田が通ずる。

「丁度可い、僕の處に大形一番のが有ります、そんなら彼で間に合はせる事にして、しかし隨分くるしいな、氣孔は是非開けるにしたところが」。言ひさして奈良は些しく考へ、「船へ積むに檢査されまいか知らん」。

「されますなア」と小田は當惑顏。

「或ひは檢査されるか知れません。全くそれが困るので」と金叔もまた思案顏。

其十四

「昔の小說にあるやうに」と小田が口を入れた。「まさか人間が鞄の中へ入ツて行かれもしますまい。よし行かれたところが、今奈良さんが言はれるとほり船へ積む時に檢査でもされゝば、もう仕樣がありませんや。それより我輩は斯う思うです、いツそ女裝をすツぱり男裝に改めてしまツて、元山津の方へでも逃げるやうにしたら却ツて安全だらうかと、どうです金叔さん」。

「男裝にするとは――矢部さん此頭は――髮の毛も、さうなら短くしなければ爲りますまい。そして朝鮮人すがたにですか、日本人すがたですか。今折角長い此髮の毛を截ツたら容易に伸びず……さうでしよ、矢部さん」。

「伸びませんとも容易には。さうして了へば當分女裝は出來ません。勿論もう餘り知られて了ツたから、是からは男裝に變はツても可いのですけれども」と猶決しか

ねた顔。

小田は背かず、「截ツた方が可いです、もう今日と爲ツては。それに此とほり矢部さんは朝鮮語に熟通して居られるのですものを、今後男装の朝鮮人と姿を變ずれば却ツて目に立たんで便利でしよ。

「それも一理有りますな」と金叔も些しく折れた。小首かたむけて考へて、「さうすりや當國を去ツて日本へ逃げるにも及ばない」。

「あはツ、それもさうだ」と小田は失笑す。

「なる程いツそ夫も妙策かも知れない」と此度は奈良が中に這入ツた。「僕は又、かう云ふ事も考へて居ました。鞄に潜んで船に積まれやうとすれば檢査される、どうしたらば夫を免がれるかと言ふに、隨分苦肉の策ではあるが、其鞄をば日本公使館又は領事館の荷物とし、僞造した公使館の封印を行ツて、大膽に積ませる、ね、公使の荷物は一國の神聖と秘密とを破らぬために開封して檢査するものでないですからな」。

「はア、なるほど」と小田は苦笑ひして、「それにしろ封印を僞造するといふのが急の事には」。

「必要の場合ひが有るかと思ツて、既に僕はあらかじめ調製して渡來して居るのです」。

「御手まはしの快い。それは〳〵。ですが、それよりも今私の策の方が却ツて安全で利益有りましやう」。

「さうです。今のは唯斯う考へたと御咄しゝた丈に止まるので、今の御意見は誠に可いと思ひます。矢部君、それが可いでしよ」。

「九時過ぎましたツ」と金叔叱るやうに云ひ出した。

終にその議に一決し、こゝに俄に思ひもかけず、その多年養ひ伸ばし蓄へた翠の黒髪を截りちゞめて短くする事に爲ツた。正に是亡夫に對して操を立てゝ尼の身となるかの心もち、婦人の身でなくても殘りをしさ一とほりで無い。

「髪を修するのは拙者の得意」と金叔笑ツて鋏刀を把ツた。女々しいとは思ひながらも未練、是を見をさめと

鏡に向かツてつく〴〵と眺めれば我外に又なつかしい玉均の影も浮かぶ。吁、この髮を斯う結はせた人、かう結はせて悦んだ人、その人は今はや客舍に慘死を遂げてしまツて、今や我もまた共記念とも見られる髮に別れと爲る。さりながらそれとても亦皇國のため、獻身の慈善、博愛の義俠、それらをば口にもし、腦にも刻み込んだ身が此處で諦らめぬといふ法は無い、何の、々々、髮ぐらゐ。

　金叔は手早く截る、むしろ未練をも速かに殘さなくなれかしと急ぐ。忽ちにして見ちがへるばかりの格好、朝鮮風にざツと束ねて、「出來た、どうか斯うか氣が急いてどうもならない。それからして着服だ」。

「おツと可し、出しました。これならば大抵適ひましよ」と小田は發議者だけまめ〴〵しく一領の被服と帽子とを出して、金叔と二人寄ツてたかツて、相助けて着せてやる。

「うまい、〳〵、もう何う見ても韓人だ。それには又韓語はやれるしなア」と奈良は激賞殆ど措かない。

「矢部さん」と金叔いよ〳〵急き込んで、「何方へ行きます。さう爲ツたら却ツて日本へ行かずとも可し、又もう港は嚴重に警戒が附いて居ますし、東學黨へでも投じますか。私は歸ツて上官に虛言を述べて置きます。卽ち風を食ツて逃走し、仁川邊へ向かツた形跡があると言ツて、探偵の方針をその方へ向けさせます。そのつもりで。それぢや早く、一刻も――此場合ひつまらぬ打ち合はせなど愚圖愚圖して居ては大事去ツて仕舞ひます」。

其十五

女裝の軍事探偵矢部道任の影は烟の如く消えて了ツたが、一個韓人と見える男裝の矢部道任の身は依然として朝鮮の各地をさまよふて居る。風雲の險惡一日一日と迫りに迫ツて、やがて大鳥公使の入城となり、始めて京城に銃聲を聞き碧血を見るに至り、引き續いて牙山、成歡の陸戰となり、豐島の海戰ともなツたが、その間部矢の

踪跡は更に些しも分からず、従ツて又國事に何を盡くしたと云ふ事も聞こえなかツた、只そこらに出沒するといふ丈で。

内外ともに神州臣民の意氣が團結一致して連戰連勝の喜びを見る事を得、いざや此上は天下分け目とも云ふべき平壌の合戰を待つばかりと爲ツた。此一戰の勝敗は吾に取ツても彼に取ツても容易ならぬ影響を及ぼすといふので、雙方の將士の意氣込みは一とほりで無く、吾は勝を續けやうと望み、彼は敗を取りかへさうと思ふ、従ツて支那軍の防備もまた一方で無く、巴山や鳳山の邊までも兵はあちこちに散らされて、怪しいものと見れば容赦無く引捕へて問ひ質す。問ひ質すといふよりは責めさいなむ、正式に糾彈するといふよりは寧ろ無法に責め殺す。無辜の朝鮮人の哀れさ、口にするさへ忍ばれぬ程で、餘所の喧嘩を無理やりに持ち込まれ、土地を荒され、墳墓を毀され、生命財產を掠奪されて、此世からの地獄の責め。さりとて逃げたとて何里逃げられたものでなし五里か十里の附近をうろ〳〵して居る内には又酷たらしい目に逢ふ、寄るとさはると殺無理でも無い怨嗟の聲。

大同江畔、廣州に屬する土地に載寧といふ所が有る。南の方から亂を避けて奔竄して來る朝鮮人の多數此四五日は引きも切らず、口々に罵りわめいて宛がら火事場のやうな噪ぎ。妙に仕合はせしたのは其棒鼻にあツた一軒のり煮賣り酒屋で、その賣れるは〳〵、目のまはるほどの忙がしさで、忽ちの內に代物を賣り盡くしてしまツてそれで又戰地の事とて更に仕入れる事は出來ず、一兩日は客にもその由辨解して只湯だけを賣ツて居た。

今日も店さきに四五人が群衆してがや〳〵言ひ罵ツて居る。行く先の路の案內を尋ねるのでなければ、戰爭の愚痴をこぼすのみである中で商人風の、五十恰好の、義州訛りは有るが辯は達者な男が際立ツてよゝしやべる。

「私ゃ義州だが、困ツたてよ、もう一杯の支那兵だらうから。と言ツて女房子も有る、歸らない譯には行かずその道筋ぢやきツと何がしか宛支那兵に賄賂出さなけり

や爲らず、あんまり慾張らないで、早く此春ごろ京城を立ツて來りやよかツた」。

聞きもせぬ事まで一人でしやべツて、やがて吾傍に同じく腰をかけて居た廿四五の一人の小商人を見かへツて

「御前さんは、何ですかい、逃げなさるのでもないンですかい」。

問はれてその男は微笑した。

「いえ、わざ〳〵來ましたので」。

「わざ〳〵ですツて?何、何に?」

「慾張ツてゞす。烟草を廉く仕入れましてね、それから支那兵へ賣る目論見で。かれ是もう駐屯地でしやうから」。

顏をしかめて、「駄目、大駄目。どうして御前さん支那兵が代を拂ふもンですか。無理に代をくれろと言へば直に斬られる位のもの、命を賣りに來なさるやうなもンでさ。何ぼ代物が烟草だツて命まで烟にしちや大變だ。あツはツはツ」。

思ふに讀者も大方は推知の事、この烟草商人といふのが卽ち例の矢部であツた。

其十六

義州の商人は眞實忠告するつもりで、「本當にわるい事は言ひませんや、御よしなさい、支那兵に物を賣るのは。只取られて事によると命まであぶない、こんな詰まらない事は有りませんよ」。

「仰やるとほりですね、みんな盜賊同樣ですからね」とその家の主人が雷同する。

矢部はいよ〳〵微笑して、「御深切有り難うございますよ。牙山や成歡の邊でも賣ツて見やうとしてつい間に合はず、それから此方へ來ましたンですが、そんなに支那兵は太うございましよか」。

「そりや咄しにやなりませんとも」。

些しく當惑といふ體で、「困ツたなア、遠くから遣ツて來て。此儘引ツ返すも馬鹿々々しいし、さうかと言ツ

て相手のわるいのも素より不好だし……」
「よツぽど遠くからですかい」。
「延安府です、さやう、黄海道の」。
「やれ〳〵遠くから御苦勞さまだ。延安府と」と考へて、「京城言葉ですね、延安訛りは有りませんね」。
稍ぎよツとして、「勿論永らく京城に居りましたから。ですが、支那兵は此さき近くに居りますか、何里ほどの所まで」と急に話柄を横へと轉じて。
主人の老爺心得顏に、「十日許り前には此邊にも見えましたツけ。人の咄しぢや何でも川むかふは一杯ださうで――さやうさ、保山あたりは澤山居ましよ。それはさうと烟草屋さん、折角だから支那兵と代はツて私すこし烟草を買ひましやうわ。その代はり大負けに負けてね」。
「ありがたい、買ツて下さるか。それでも商ひさへすりや心もちは濟む。負けますとも」。
「廉ければ私も買ふ」。
例の義州者も買へば居合はす一同も釣り込まれて己も吾もと買ふ。利得かまはずの賣り方、その廉いのは無理もない。
「まツたく大負けですよ」。
「廉い。どうか始終かういふ烟草屋さんから買ひたいな、あツはツは、勿論支那兵に奪られたと思や――私だちは只取りはしないから」。
ぬツと店さきへ現はれたのは武裝した二人の支那兵であツた。二人とも顴骨隆く、眼が釣り上がツて、見るからの獰惡きはまる相好、あたり睨めまはして姑らく衝ツ立ツて居る。薄氣味がわるいので、誰も彼もひとりも默ツて、殆ど息を殺さぬばかり。
開けた儘の烟草の荷に支那兵どもは目を着けて、片言の朝鮮語で此烟草いくらだと僅に儀式だけに尋ねて、やがて銅貨一枚抛げ出して、三個四個鷲づかみにした。すはや掠奪が始まツた、哀れ、言はぬ事か、飛んだ奴に見付かツたと、言ひ合はさないが一同は腹の中、扨烟草屋はどうするかとやはり無言で眺めて居る。

矢部は喋がない。微笑して猶二つ三つ取り上げて更に支那兵の手にわたし、出された銅貨をも返却し、さて今日からが豫ねてより修めた支那語の實地の應用試驗、物しづかに、

「旦那方には是から色々御贔負になツて、御用を仰せつかりとうございますから、今日だけの所は進上いたします」。

貰ふほど結構な事はない。支那兵その獰悪の相好が忽ちとろけて崩れかゝツて、

「澤山に、ほい呉れるのか、忝無い。すると是から營所の方へ賣りに來るのか」。

「さやうにございます。どうぞ旦那方から御取り倣しで、大官人がた御一同に御買ひ下さいますやう――其代はり旦那方だけには毎日二袋づゝ無代で差し上げます」。

「はて面白いわい、無代で飲めるとは。吾々にさうするなら友人へも吹聽して買はせてやろ。それらには些し高く賣れ」。

「有り難うございますが、まさかに高くは……」

「いゝや、さうして置いて、吾々のを四袋づゝ」。

支那氣質の地金を出すぞと肚で笑ツて盲從して、

「さよなれば、それでも」。

「可いか。可し。今日貰ツたのはその數に入れるのぢや固より無いのだな」。

「はい、〳〵」。

「すると明日から四袋づゝ。乃公が三袋飲んで一袋は友人に賣る、その時烟草の賣り價が高ければ高いほど乃公の飲み殘しも高く賣れて、乃公も金になる」。

矢部はほと〳〵呆れて居る。

其十七

「折角もらツた烟草だ、君、どうだ賞翫しやうぢやないか。丁度好いわ、此處で休んで行くには。いくら巡邏の命を帶びて居るからとてさう歩いてばかりも居られやせん」と其支那兵の一人が店さきへどツかりと腰を掛け

ると、その近くの朝鮮人どもはする／＼と避けて遙かの方へ離れてしまツた。

「休息しても大丈夫だろの」と一人は稍心配氣に。

「何が大丈夫？何か、うム、監検に糺弾されはせんかと云ふのか。馬鹿言ふな百總が既に我黨の士ぢやないか」。肩ゆるがせて淋しく笑へば、

同じく微笑で受け取ツて、「折花攀柳の勞を多としてかな？」と言ひながら是また腰をかける。

矢部は此所ぞと乘り出して、「百總閣下は何とおツしやる方でございます」。

「張翼と云ツて粋な人だ。監軍の李朴といふ人の御氣に入りでの」。

李朴、その一語は容易ならぬ響きを矢部の胸に與へた。本國から脱籍して支那の兵部にもぐり込み、劉將軍などに重く用ひられて居る李朴その人、その人が今又平壤而も此あたりに一方の將として偖は出陣して居るか、なつかしくもある。更に言ふに言はれぬほど嬉しくもある。〆めたぞ、防備の秘密はもう知れたぞ。

腹の中をば色にも見せず、「どうか其百總閣下、および監軍閣下からも御用仰せ付け下さるやう御取計らひ願ひ上げます。今仰やいましたが折角攀柳とやら、何かその樣な事でもございますのですか」。

「あはツ」と聲高に笑ツて、「大有りさ。百總閣下張大人は美丈夫での、此國の肅川(郡名)の一美少婦に戀着せられての、招かずして蝶から花を趁ふたのだ」。

「そこを月氷となツたのは此阿哥さ」と一方のがさも仰山に笑ツて言ふ。

「陣に、それで、從ふのですか、その美少婦が」。

「もちろんとも。大官は皆然りさ。啼紅羞白唯命にこれ從ふのだ、ねエ、礪蔵劍花の間おのづから風流情事の消息の有る事、大國の武將の胸中おのづから綽々たる處だ」。

「あなた方は？」と矢部失笑す。

ぴたり額を音よく敲いて、「銀錢只有りわが心事を知

るだ。銀錢のために働らくのだ、それを目あてに兵勇とか何とか、誰とても生命は惜しいやな。

「と言ツても戰地へ臨んだ以上は」と矢部は呆れて苦わらひ。

「それは運さ」と言ひなぐツて、忽ち後ろを見かへツて、「おい、酒くれんか、何でも可い」。

「御氣の毒ですが」と亭主揉み手をして、「皆賣り盡くしまして一滴も」。

「無い？」と目をすゑて、にやりと笑ツて、「しこたま金に付いたの、それぢやうんにや烟草屋、貴樣韓人でよく中國の語をしやべれるの。中國に居た事でも有るか」。

「はい、一年ほど牛莊に」。

「さうか、奉公でもしてか。何でも宜しい、きツと明日から烟草をよこすの。間ちがひ有るまいな。乃公達は是から巡視に出掛けるが此建寧から川向ふ、保山のすこし此方は營寨が有る、そこで百總張翼大人の麾下で、陳休と言ツて尋ねて來い、明日は必ず、きツと儲けさせてやる」。

「や、どうも色々有り難うございます。是非とも明日は御尋ね申します。しかし貴下さまは？」と如才無く今一人の名をも問へば、

「同姓で陳珀珉といふのだ」。

手帳を出して書き附ける途端、貰ツた故か二人とも機嫌よく、さよならとさへ言葉を遺して大人しく出て行ツた。後影を見送ツて一同はほツと呼吸。矢部の清語に通するのや、只烟草をやツたのや、それ是を珍らしさうに稱贊してがや／＼と又饒舌り立てゝ居るところへ、忽然として陳休ひとり立ち歸へツた。

「烟草屋、些し咄しが有る」。

「へ、何の御用で？」

「此處では言へない。ともかくも乃公と一所に來い」。

「どちらへ」。

「何處でも可い。行けばわかる。しかし苦勞するほどの事ではない。すぐ其處までだ」。

矢部はもとより腹をするゑて居たが、事の吉凶如何を料りかねて一同は窃かに矢部のために苦心する。

其十八

載寧の西郊、監生娘々をまつツた支那風の祠が有る。監生娘々とは支那で主に祀る子安の神で、安産を祈れば驗が有るとの口傳、いつ誰が移し祀ツたか、此載寧の西郊に五六百坪ほどの境内をかまへさせ、松の老樹が生ひしげツて一劃の靈區となツて居る。咲きをはツた紫陽花の葉が特に目に立つほど大きく、その緑色も艶々として葉だけでも充分眺めるに堪へる程なのが境内の殆ど三分の一を占めて思ひの儘にはびこツて居た。祠はいはゆる辻堂といふたぐひで、守る人も無く、日暮からは參詣の人も全く無い故一個寂寥たる區域と爲ツて、そろ〳〵稼ぎに出る蝙蝠の勢ぞろひでもはじまりさうである。

その祠の椽に腰稍打ちかけた二人の男、その一人は僞烟草屋たり又僞朝鮮人たる矢部道任で、今一人は例の平壤駐屯の警備邏卒、もとは盛字軍の營兵で、それから張翼の手に從ツて、保山から載寧方面を警戒する任務を有する彼の陳休である。

「此處ならば閑談によろしい。落ち着いて咄しをしても差しつかへ無い。早速用談に取りかゝるが、烟草屋貴樣は行商か」。すこぶる氣味わるい問ひである。

「恐れ入りますが、大清國の大官人を目的として御陣に烟草を供したてまつるつもりで參りました、延安からわざ〳〵」。

問はれる先をくゞツて出立した起點をさへ述べた。

「ふム」とうなづいて、「大に勇氣有る男だの。烟草は澤山用意したか。なるほど、そんなに澤山でもないと？しかし斯うして戰地に入り込む以上は可なりの盤纒を持ツてるだらうの」。

「金子でございますか。金子はあまり……」

冷笑して、「あまり……些しは有るの。無心だが、有るなら出來るだけ貸して貰ひたい。いやさ、驚くかも知

れんが見かけて頼む。實は迫ツた事が有るので」。
支那兵の言ひ草としては怪しむにも足らぬ。但し斯う切り出される迄には斯う伴はれたのも或ひは軍事探偵とでも認めて問ひたゞすつもりであるのかとも思ツた。案外のやうで又案外でも無い、支那兵有りがちの金の無心と來ては今更驚くにも及ばず、むしろ乘ずべき好機緣、大に利用すべき所も有らうと矢部は極めて輕く聞き取る。
「なるほど。御用と言ふのは其事ですか」。わざと慚ぢしめるやうにいへば、流石にきまり惡さうに、
「實は大袈裟過ぎたのさ。乃公とても命を正鵠（まと）にかけて兵勇の身となりたくもない。さき程も言ふとほり單に銀錢のためさ。倭國克たうが中國負けやうが、吾に於て何か有らんだ」。薄さみしく笑みかけて、「二世と契ツた少艾が有る。教坊では無比の名花で、情緒纏綿こゝに一年、彼は一富豪に落籍されるといふのを乃公に情を寄せて、憐れむべし柔荑の身が能く其請ひを斥けその富豪が商賣であるところから、兒は射利の徒を好まず、屍を馬革に裹（つゝ）む意氣有るものに非ざればと斯う言ツての、毅然として節を守るのだ」。
御自惚ですなと言ひたいのを辛く忍んで笑顔つくツて
「健美に堪へられませんな」。
笑みとろけて、「落籍の花費が幾十兩、わかツてるだろ、積もツても」。
「されば」。
「さればとて君も無情だ。まづ須らく打算したまへ。兵勇となツたのもその故だ。一は屍を馬革に裹（つゝ）む勇氣を示し、一は落籍の本錢を作るため、まづ一擧兩得だ」。
「はてな、兵勇となツて、それ程の本錢が出來るものですかな」。とぼけて問へば。眞面目になツて、
「打劫さ、擄掠さ、槍奪さ。營の字を威しにして財物を奪ふのさ。あはゝゝ、打ち明けて貴樣に言ふのだ察したまへ。艷思は相讓らぬ此所娘々の廟城で此の如きことを求めるのも因緣ありだ。その代り又貴樣のためにも盡くす。貴樣から借りたのを是までに貯へたのと併せて、彼

をして落籍せしむるに足る事となれば明日とも云はず跑脱する、いやさ貴様に盡くすだけ盡くして置いて。阿嬌の居る所までは是で隨分里程が有る――え、嶄さ――湖北省のでない、安徽のさ、安徽の鳳陽府の南三十六里をへだてたところの」。

わが情婦の所在まで言ふ、是が戰陣に出て居る兵勇かと矢部今更のやうに呆れて居る。

其十九

「折角の思しめしですから出來るだけの所を御用立ても致しましやうが、全體どのくらゐお入り用なのですか」と案外安らかに矢部に折れて出られて、陳休すこしもぢ／＼して、「多謝。しかし幾何できる」。

「貧弱の行商ですから迚も御滿足する程では」。

「どうだ、四五十元」。

「その位なら」。

「はツ、叶ふか。えらい、有り難い、はなはだ忝い。今でも直？」

「よろしうございます。さりながら、何と物に御相談金もうけの一法が有りますのですな、もし大官が專心この貧商と協力して事に當たツて下さらば、利殖疑ひない事で。どうして其利四五十元は」。

利殖と聞いて身を入り込ませて、「面白いな、どんな事で」。

「御協力下さるならば御咄しゝます」。

「僕にできる事ですかい」と早言葉までが改まる。

「出來ますとも」。

飛びはれた趣向を俄に矢部は思ひ付いたのである。半分は面白半分、うまく行ツたら御なぐさみと又此陳休を手玉に取らうとしはじめた。

言葉つきを屹とさせて、「何を御隱し申さう、烟草賣ツた位の小利を誰が目的として、危い戰地へ踏み込みますか。一攫千金といふつもりでこそ」。

「いえツ？」

「されば大儲けするつもりで。全く協力なさいますか」。

「危いのではないですかい」。

「更に些しも」。

「おもしろいな」。

「豬が居ましよ、この載寧にも澤山、いづれも銘々の家で畜ツて」。

陳休大に意外な顔つき。めづらしくも無いといふ樣子で、「へエ、それが何うしました」。

「その豬と此土地の迷想とを土台として。それ丈では御わかりに爲りますまいがね、御氣は附きましたか此土地に純黑な豬が一頭も居らんのを」。

「さうですかな、氣が附きませんな」といよ〳〵意外と思ふ樣子で、「奇妙不思議な事を調べたもンですなア。純黑な豬が居らん、それで金が儲かる——僕たちの故國には純黑なのがいくらも居るが——あはツ、貧乏人はそれで多いか」。

「冗談ぢやない、金まうけで」。

「まツたくだ、冗談ぢやない、金まうけ。黑豬が居らんで一攫千金——仕入れてゞも來て賣るンですか」。

「どうして此土地に黑豬が居らんかと言ふ譯を御存じですか。知りませんか。黑豬は妖魔ですとさ、此土地の者の言ふには。それで畜はない。黑豬ほど不祥なものは無いとする。ところで其迷想を本とし、黑豬を利用して一番大儲けしやうと言ふのです」。

「待ち遠しい。はやく言ツて下されな。胸がもうどき〳〵する」。

「引き受けて貴下はなさるか」。

「くどい。危い事でさへ無い以上は」。

「宜しい。そこで今御無心の四五十元の金は?」

「さればなア」。

「黑豬で、いやと言ふ程儲かりますぜ」。

「しかし、どうも儲ツた上でなければわからんね。何なら先へ五十元貰ツて置いて、儲ツたら返すとする」。

「ぷツ、それぢやあんまり」と失笑せば、さすが陳休も幾分かきまりが悪いか、「勿論な」と何が何やら分からぬ挨拶。でも大まうけと云ふのに惹かされて、

「何もよし。眞に儲かりさへすれば何の四五十元。ともかくも其策を希はくば漏らしたまへよ」。

「聞いた上異變有りますまいな。無い、斷じて。よろし、それならば。御咄ししますがね、まづ大官、あなたが先巧みに狂言を行ふのです、怖ろしい黒豬を見たと言ツて」。

「居もせぬものを?」

「だから、見なくても見たと云ふので」。

「なるほど、夫から」。

其二十

傍から見れば、矢部が陳休を手遊物にして操ツたのは兒戯に類したとも何とも言ひやうの無い位の事であツたが、又それに旨く乗せられ、而も其つまらぬ元からして思ひも設けぬ日本に取ツての戰爭の利益をさへ得るに至ツたとは殆ど譃言のやうである。

慾と迷想、その支那人固有の殆ど天性とも言ふべき此二つの感情から此兒戯に均しい策も意外と思はれる程よく行はれたので、それも何も日本帝國の膨張すべき潮流が既に暗々裡に孕んで居た兆候と後に矢部もつく〴〵言ツた。

策を充分に説き聞かせた處、陳休また不思議に山氣の有る男で、手を拍ツて稱賛した。

「おもしろい、いや何うも堪へられない。水滸、三國を讀むやうだね、行はる、こりや乾度うまく行はれる。なる程黒豬、土地で妖鬼と信ずるものを利用して、うまいぞ、おもしろいぞ。所が君は謀士だね、奇才子だね。うまい事を思ひ附いた。是で金が儲かツて早く阿嬌を落籍せしむる事が出來れば、僕は一生君を徳とする。世辭ぢやない、まツたく、全く」。

「今言ツた樣な事に大清國の武職の人々が先だまされ

ましよね、迷ひましよね」。

「きツとだ、事實知らんけりや僕でも」。

愍むべき奴ばらかなと我知らず笑ひ出すを、その意味の笑顔とも知らぬ陳休は勇み立ツて、

「一生懸命、辯を弄して欺いて見るよ、安心なさい。その日共日の狀況はやはり深夜此辻堂で御知らせする事にして」。

「承知、どうか宜しく、充分うまくね」。

「乞ふわが本事を見よやだ」。

「あはツ、大氣焔ですな。そこで呉々も李朴閣下にその書面を呈するに方ツては細心注意しなさツてね」。

「言ふまでもないよ。安心しなさい」。

その授けた策を奏功させるには李朴から欺瞞しなければ爲らぬとの口實を以て先陳休から欺き、一書を認めて陳にそれを托したのである。逆さ讀みにしなければ解し得られぬ日本文で自分の當地に來た事、料らずも陳に云々の策を授けた事を簡單に記し、最後にその次ぎの夜ある處で密に會見したいとの趣きを書き添へた。

鈍くも陳は欺かれ、矢部の言ふなりに爲ツて、いそいそとして、立ち別れた後ろ影を見送ツて、扨ほツと太息禁じ得られぬのは嗟嘆である。呼、腐り切ツた士氣、あれで如何の役に立つ。訓練の足らん位ならまだしもの事監檢の行き屆かぬ位ならまだしもの事、土台が士氣たる節が無い。心性の涵養は全く無い。皇帝の有るのをば知らず、無論國家の有るのをば思はず、何のために召募されて何のために兵勇とか戰士とか稱へるか、そこらを思ふ了簡微塵一點も存在せぬ。

と思へば今や交戰國の間柄ながらその腐敗した老大國の運命、共末までも想はれて、坐ろに悚然となる程である。

「嗚呼、荊軻の出た邦だがなア、張巡、許遠も出た邦だがなア。文天祥、方孝孺も出た邦だがなア。呼その精神、それが最早死んだのかなア。だが、今のところ夫が敵國だから先可い。反對に日本が斯うであツたら何うだらう」。

悪魔につかみ附かれる様な心もちに為ツて、例の感じ易い人間とてひとり自らぞツと為ツた。

「是につけても心性の涵養、尊王愛國の思想はすべて人民の腦裡に出來る丈深く植ゑ付け、刻み込まなければ為らないものだなア。よしや俺が日本人たる姿をして居ないからとて見ず知らずの烟草屋、それを如何に慾とは言へ、信じて拇かるとは何事だ。しかし手紙を受け取ツたら嘸かし李朴は驚くだらうて。驚くも可いが、その又日本から間者として忍び込んで居る李朴が此俺が入ツて來た此方面に駐まツて居るのも奇だ。天が日本帝國をして克たせるやうに夫々と部署を定めてくれたやうなものやツぱり、　聖天子の稜威のいたす所と言ふより外は無い。ありがたいな」。

欣然として急に胴卷きから例の　至尊の御影を取り出し、辻堂の塵を拂つてやがて其處に立てかけて、拜を遂げ、しばらくは顏をもあげない。

何事を思ひ入ツたか、やうやく頭を擡げる比には涙さへ目にやどツて、「御安心あそばしませ、帝國は萬々歳」と一句聲立てゝ洩らして拳で涙おし拭ツた。

「妙なものだなア、玉音を承はツた事も無く、又したしく龍顏に咫尺した事も無いが、かうして天姿を拜しまゐらせ、些か犬馬の勞を盡くし奉らうとして、今の様に支那兵の鎧甲萋無きを見て日本の必勝を期し、偖それ故に宸襟やすらかに在しませよと申し上げる。嗚呼此胸中の心地よさ——涙、泣くのさへ心地よい」。

肺腑から出た至誠、眼に利慾も無ければ、名譽も無し只何となく忠愛に志したいのである。

其二十一

その次ぎの夜、大同江畔の保山には矢部が陳休に入れ智慧した策がそろ／＼實地に行はれて來た。

その夜陳休は江畔の番兵を命ぜられ、その時刻も丁度好い午前一時から三時までとの事、此機を外しては為らぬと許り、やがて充分胸を据ゑて、いよ／＼狂言に取り

かゝツた。

慌しく營所へ馳せ歸ツた顔色も安からず、歯の根も合はず、駈け込む勢に氣を呑まれて敢て制しも得せぬ衛兵の前を飛ぶやうに馳せ過ぎて、百總の所へ來て、

「閣下、大、大變でございます。あぶなく殺される所を漸くに逃げて――番兵の職務を曠しうする事の多罪なるは知ツて居りますが。どうぞおゆるしを」と手を合はせる。

「何ぢや、どうしたのぢや、けたゝましい」。

「御咄しゝます、あ、息が切れる、豬、々、々、純黑の豬」。

「あはツ、此奴狂人見たよな。豬がどうした、何うして怖い」。

「そりや眞黑な黑豬で」。

「くすツ、白い黑豬が有るか、馬鹿」。

「いえ、その黑豬が、百總閣下、小人が番して居た所へ只今猛然突然驀然と現はれまして……」

「何疋」。

「一疋」。

「あはツ、一疋にしては大層な形容だ。黑豬が出たといふのか」。

「さよでございます。驚きましたね、口を利きます、へ、此小人に向かツて」。

百總不思議や顔色變ツた。

「本當か。そぢやなかろ。貴様が何をか見ちがへたのぢやろ」。

「御冗談仰やツちや……本當とも何とも。ですから駭きましたので。曰く吾は靈氣の精、大いに中華のために祉する所有らんとして今夜爾の面前にあらはれて心意を告ぐ。明夜半を期し、大同江畔芦荻きはめて茂生する所に待たん。爾もしくは百總張翼、もしくは監軍李朴の三人を限り、その一人必ず孤身にして來り會せよ。敎ふるに交戰の機密必勝の方略を以てせん。もし來り會せずば天譴かならず躬に在らん。あらかじめ知悉せよ、と斯う

でございます、百總閣下。それで會見の約束しなければ今立どころに小人を殺すと云ふ、いや、も、その怖ろしさ」と汗を拭く。

「ふム、まツたくぢやな。面妖なことも有るものぢやな。全體この地方では黑豬をば妖魔と考へ……」

「へエよく御存じで。窃聞でも…いえよく御存じで」。

「黑豬の出現するのは容易ならぬ時にぢやさうぢや。奇な事も有るものぢやな、それに監軍と本職と貴様との三名を限ツて、而も孤身で來れとは不氣味ぢやな臨會すると約束したか」。

「いたしました、已むを得ず」。

「或ひは本職も行くと答へたか」。さも氣味わるげに言ふ。

「誰と限りませんが、三名の中一名は必ずとの約束いたしました」。

「必勝の方略を敎へてくれるとの深切は、忝けないが頗る不氣味な囁し、いはゆる有難迷惑ぢや。とにかくに監軍へも申告して然る上の事ぢや衛戍を捨てて走るといふ事、貴様に曠職の罪も有るが、非常の事ゆゑ今日の所は赦す。別人をして代はツて番兵たらしめるも容易であるが、又妖魔の事ゆゑ出現でもして無益に各人を怯れしむる事が有ツてもならぬから今晩は其儘にして置かう。何まだ倭醜來襲する掛念も無いから」。

呆きれもされる怠慢、しかし熟れて居たので兵士は一向平氣であツて、その癖また冒險にその出現を見に行かうと云ふものも無い、七八人はぐるり取り巻いて一伍一什を聞いて居ながら。

言ふまでも無し、陳休をして李朴に届けしめた書面によツて李も既にその意を領し、早く今夜有るを知ツて面白半分張翼に黑豬の妖鬼たる事などを此日の晝間物語ツて置いたので、あはれにも夜譚隨錄や剪燈新話を面白がる腦髓は譯も無く攪亂されたのである。

すぐと共儘張翼は事の趣きを報告しやうと監軍の居る所まで行ツて見ると、監軍は只一人巡察として今方何處

へか出たとの事、まるで一個人が前歩にでも出たやうな氣樂きはまる所爲ではあッたが、是また珍らしくも無い事とて張翼更に驚きもせぬ。

李朴この時は矢部の書面を領して大同江の畔でひそかに久しぶりの會見をして居るのである。

其二十二

大同江畔蘆荻のさかんに茂生する邊、川原の小砂利の上に胡坐をかいて相對して語り合ふ二人の人士、その一人李朴で、今一人は烟草屋姿に身をやつした例の矢部道任である。

「久しぶりでの拜晤、いよ〳〵斯う戰地で御目に掛かるも面白い時期となりましたなア。御書面を領した時は實に夢のやうで、且うれしく、夜になるのを待ちかねました。しかし先生、あなたも隨分奇を弄しますな。如何に支那人が妖怪談を好むからとて、思ひもつかぬ黑豬などを種に持ち出して！―勿論御書面で御策略の趣きも知りましたから僕もとぼけて前以てそれとなく百總の張翼といふ者に黑豬は妖鬼である抔と咄して聞かせて置きました、何しろ面白半分に思へば馬鹿々々しいですな」と李朴が笑へば、

矢部も笑ッて、「周到なる御注意、いや結構々々。隨分馬鹿々々しい巫山戲でさ、全くな。實行出來ても出來んでも何かまやしません。此處で外ならぬ貴官に御目に掛かれば本懷の至りです。どうか些軍機を御洩し下さるやうに」。

「承知しました。只御如才も有りますまいが、御注意の爲めに御咄して置きますが、此頃大分日本からの軍事探偵が當地邊へ入り込んで居る模樣で、さて隨分よく捉まるです」。

「えッ、そんなに捉まりますか。殺されましたか」。

「ええ、もう、容赦無く。既に僕の知ッて居るところでも三人ばかり。その內一人は何とどうです、僕が糺彈して僕の面前に於て殺させました。たしかに同胞と知ッ

て居ながら、如何にも軍事探偵たる證據が有るので、隊員の手前どうしても救ふに由無く、涙を揮ツて馬稷を斬ツた古事も憶ひ出されましてな、實に、實に涙を呑んで。せめてもの志には慘殺だけをさせぬ事にして」。

「已むを得ませんなア。しかし可惜志士を……無念だなア。名は何といふ男で？」

「口を封じていかに責めても言はず、たま〳〵口を開けば殺せ〳〵と云ふのみで。いや立派でした如何にも。猶殺させるのに氣の毒で、惜しくてな。形容しきれません、その時の僕の胸中は――御察し下さい。ですから御注意をよく〳〵爲さる樣老婆心切に申し上げるのです。實にあのやうな最後を遂げる程、殘念な事は有りませんや」。

「千萬感謝いたします。實に今仰やツた事は私の一身に取ツて容易ならぬ訓戒よく〳〵注意します。が、頗る意外の心もちがしますな、此邊まで忍び込んだのは私一人かと思ツて、實は自負でもする位の了簡で居ましたのが、何ぞ料らん同胞の志士ははや旣に殺されるまでに入り込んで來て居るとは。さすがは日本人、萬歲！日本魂いまだ銷磨せずツ、凛乎たる秋霜烈日――嬉し過ぎて今といふ今どうも此」と泣き出した。

「泣かずにや居られんです、じツつに」と李朴も共に聲うるませて、「日本の軍事探偵の殺される狀況を見聞きするに付けて、その潔い最期の遂げ方、人をして切齒扼腕もさせる、また魂飛び肉動く迄にもさせる、殺して置いて支那兵すら嘖々として褒めて居ます。同胞がすでにあの位の元氣、勝ちますよ、たしかに日本が」。

「勝ちますなア、きツと日本が」と涙一杯の眼の儘さも、さも嬉しさうに笑みを示して、「をしい事にその人の名が知れないのですな。しかし敬すべき吾黨の士、未見の友では有るが敢てその英靈に向かツて心から感謝を表せずには居られぬ、えらい、實にえらい、單純な形容詞では言ひ盡くす事も出來ない、李君できませんやな。申しあげるのは畏いですが、わが國の　聖天子陛下がそ

んな事を御聴きにならせられましたら、そも〳〵何ほど御喜びでツ……と思ふと、ちツ斷腸に堪へら……吁、眞に涙ッ」と又せきあげて聲を呑む。

李朴も目をしばたゝくのみである。やうやくに太息洩して、「ですが人事と思ひなさいますな。捉まへては殺す度ごと如何ほどの人數が探偵に忍び込んで居る事かと却ツて支那軍の方では風にも雨にも乃至木にも草にも心を置くほどで、それ故此頃の偵邏の嚴重なのは一とほりで無い、そこを潜るのは困難中のきはめて困難たる事と考へなければなりません」。

「御もツとも、さうでしよ」。

「殊に正當なる糺彈を遂げて然る後に殺すと云ふのぢやないです」。

「すると、だらう、らしい位で最早すぐに?」

「まづさうです」。

「そりや驚く、すこし酷な……」

「些しくどころか。勿論酷は特色でさ」。

其二十三

卒然思ひついた樣に李朴は聲に力を籠めて、「軍事探偵と認められるべき照驗に就いて御考へは有りますか、どんな物で然みとめられかと?」

「その事今伺ふと思ツて居りますので」と流石に矢部も熱心である。「まだ取りしらべられた事も無く、全然無經驗ですから。もツとも地圖や器械類は直ちに怪しまれるべき材料だぐらゐは知ツても居りますけれども」。

「地圖や測量器械、乃至寫眞器械、双眼鏡に言ふ迄もありませんが、單純な磁石でももし身體檢査を行ツて發見すれば、やはり怪しいと認めます。既に今御咄した僕の陣營で殺した人は磁石と此方面の見取り圖とを持ツて居たゞけでしたが、それでもやはり……」

「たツた夫だけで?」と目を睜ツたが、又言ひなほして、「でも無い、見取り圖があツては流石に」。

「ですが、その圖とても然ほどのでも無かツたでした。

日本で唐紙と言ひます紙、あれに鉛筆で要害の地形を符號でしるし、此方面の兵の配置と森林中の伐採するに足るべき木の種類と數とを英文で書き附けた、それもです靴の中へ履き込んであツたので、處々磨滅してさへあツたのです。

「よく注意したものですな。しかし靴の中では却ツて……」

「御說のとほり、却ツて怪しまれるのです。丸めて懷中にでもあツた方がむしろ然ほどにも」。

「大きに」。

「處を宛も大切さうにして居たのが惡かツたので。そこへ持ツて來て又生憎英文を讀み得る上級の兵勇が有ツたのです。その人の服裝ですか。無論支那服、一見どうして支那人、支那語もつかふのですが、どうも音調が……」

「已むを得ません、音調はどうも。それも一つは怪しまれた材料となりましたな」。

「さうでした。それ故に諄いやうですが携帶品が殊に〳〵大事だと言ふのです。就て、氣になるので伺ひますが、いつぞやも御示しになツた、先生、あなたが常に懷中にしたてまつる　至尊の御影、やはり今でも御持參ですか」。

「はツ、なるほど」と今更のやうに氣が付いた、如何にもそれを持ツて居ては取りしらべられた時疑ひも無く困るとの意は其けたゝましい語氣にも現れて。

「懷中にしたてまつツて居ります、一瞬の間も恐れながら咫尺したてまつるとの心で」。

「危いではありませんか、もしそれを支那兵に認められたなら」。

「御もツともですな」と稍當惑顏。

「ひそかに貴下の爲に圖るに、折角御忠愛の念を此處では姑らく御制止になツて、どうか御携帶なさらん方が御得策かと考へますな。身の危險には代へられません」で

やゝしばらく沈吟して、「御尤の御言葉、かたじけな

い御心切、さりながら何うも是のみはなア」。

「御携帯なりますか、どうしても」。

「敢て一刻だも離れたてまつるにも忍びんです」。慨然として涙ぐんだ。「何事も唯　陛下の御ため、よしんば骨を叩かれ肉を鱠にさるゝとも厭はんとの精神、そりや日外御咄しいたした通りで。心ばかりは咫尺したてまつるつもりで、日々の事柄は細となく大となく一々奏上し、その度毎に嗚呼忝くも微衷を御嘉納あられたと、それを心の満足として快く夜も枕に就くのです」。意氣は焔となるばかりである。

「御至誠は敬服の外有りません。さりながら矢部さん猶御一考を煩はしたいです。それで御心もちだけは満足だとした處で、そのため終に怪しまれ、骨を沙場に曝すに至る事でも有ツて、それで　陛下へ對し奉る忠の目的は達したでしよか。ぢや有りますまい。心さへ一日も陛下を忘れ奉らなけば、もはやそれで充分でしよ。好んで身を危うする材料を具へて、可惜　陛下の御ために惜しむべき身をわざ／＼捨てるにも及びますまい。僕は失敬ながらその類の忠は婦人の忠、むしろ形式的に近い忠だと斷じますな」。

至理の忠告、かへすべき言葉も無い。さりながら道理が感情を征服する程難い事は無い。その言を至言とは思ひながら、猶　御影に離れ奉る事の宛がら生別れでもし奉るやうな感情をば倩容易には鎮められなかツた。

默然として俯向けば、李朴も亦默然。冴えわツた月は白く、瀬に呟く川浪の音と、蘆荻にわたる風の囁きとが唯我の顔にも目に立つ。

其二十四

「どうです御決心は付きませんか」と李朴は答へを促がした。「さらば此度は僕から改めて口幅ひろいやうですが、陛下の御ため、國家のため敢て形式的の忠を御斷念下さるやう御願ひ申し、御頼み申します。得易からぬ志士をつまらぬ感情ぐらゐのものから狗死にさせる事、

とッても忍び得られません」。

　鐵鎚を撃ちおろした様な一言、肝にこたへてたか應へなかッたかを可惜しく言ふ迄もない。茲に至ると武人氣質、李朴は聲までふるはせた。

「意地でも肯いて貰ひます。もし又理で情を制されず貴下が肯き入れん――さらば僕は貴下を以て一僞善者と認めますッ」。

　此たびは鐵鎚どころか、金剛杵の痛撃である。矢部は眼の色までを變へた。「僞善者ッ？」と叫んだが、ぴたりと默して、兩手で堅く頭腦を抱して火焰のやうな息を吹いて「僞、僞善者とは……」

「で無ければ」と李朴短兵急にさへぎッた。「僞善者でなければです、敢て斷言しますぞ、柔弱婦人の精神、男児の膓が無いのです。何の、〳〵、區々たる感情」。

「はッア」と肚の、肚の底からの嗟嘆の息、「李君――わ、わかりました」。

「ほい、わかりましたと？」

「承知しましたッ。ちッ、已むを得ません、岡行くも田行くも忠は一つ……」。

「そ、そ、それだッ」と砕けるやうに。

「さらば迚もの思ひ切り時、今夜を限りとして　御影をば李君、貴官に」。

「僕に？そりや忝ない。謹んで護りたてまッて――想起します亡命して終に此支那の武職となッて何年間、さすが胡馬北風の情は有ります」。愁然として、

「以來夢より外には聖天子の儀仗をさへに拜する事も叶はず、まして況んやかしこい御影を。そも〳〵貴下の如く一葉を肌にし奉ッて來たら可かッたのを、その時其處迄の氣がつかず、以來秋風の夕、落月の曉、また言ふに言はれぬ情懷もありますのでなあ」。

「どうか護り奉ッて下さい。また萬一此矢部が戰場の露と消えた時には、切めて私を御憶ひ下さる材料にも」。

「無論々々」と點頭く間に矢部は胴巻から例の御影を取り出すや否や、川原の石を少しばかり積みあげて、更

に浮く砂をも拂ツて其處に安置し奉ツた。

「うム是は好い御思ひつき、御一所に拜を遂げましょか」。

忙がはしげに川水で含嗽を行へば、矢部も共に含嗽して、「では私から御さきへ——よろしいでせう、失敬ながら」。

いざと川原に跪いてまづ一拜した刹那、たちまちに胸迫ツて、つと涙がさしぐんだ。

嗚呼今の矢部の擧動を女々しいと云ふ人が有らうか如何に、もし有ツたなら著者は親友で有ツた矢部の爲に殆ど痛罵せずには居られぬ。此刹那の一滴は日本人士が皇室へ對し奉ツて表し奉るべき至誠、その實に凝ツたものゝ模範である。淸麿のも此涙、正成のも此涙、彥九郎のも此涙であツた。

狂といふか。熱誠の極もとより狂には相違無い。只それ狂、それ故に一向專念、卽ち節もあり操も有る。利をはなれ、名を思はず、唯どことなく、何となく此萬世一系たる皇室、此金甌無缺な神國のため、情が迫れば泣き出すのが日本魂の美では無いか。どことなく、敬し愛する然らばそれは理法に因らぬ一つの感情、强ひて言はゞ迷想だと、もし冷血の人が言ふならば甘んじて其迷想との評は受ける、喜んで受ける、むしろ——唯それが日本魂の美である。至誠は斷じて理法を問ふものでない、熱心は必らず人を一の盲たらしめ、狂たらしめる。算盤玉を彈一彈として前後みかへツて事にあたる、それらは必ず熱に乏しい。

月は皎々と冴えわたツて、此志士をして御影に別れを告げ奉らせる時にあたツて、時に拜顏の便宜を與へたものらしく、さも無くばその淸らかな隈無い肚をせめて名譽のために照らし輝かせる心とも思はれる。

前から引きつゞいて聞える瀨の音、又風の聲はさながら故山のものとも異ならぬが、今は咽ぶやう、歎くやう悲しむやう、又呻くやうにも聞きなされて又「壯士一たび去つて……」の易水の歌を憶ひ出す。

「恐れながら草莽の一微臣、茲に今日今夜を以て御わかれを申し上げ奉ります――御わかれ、暫くの、又或ひは是を限りのッ」、聲は異樣にふるへた。「恐れ多い言ではございますが、宸襟を安めまゐらせたい一念は敢て此上とも人後には落ちません、又微力さいはひに稜威の光明の下に邦家の爲一毫の益を成す事も有らうと存じます。それがためには最終の支拂をば、只この蜉蝣の一命として」。涙かい拭ッて、「今夜わかれ奉るつらさ。が、已むを得ず日本の爲。よしや別れまゐらせましても心は絶えず千里の關山を馳せて、かしこけれども千代田の宮內。恐れながら御影を仰ぎ熟れた此眼底にはいつしか深く御影を印象して、瞼を閉ぢましても明らかに聖容に接する憶ひ、よしや不幸にして今後身が敵兵に寸斷されましてもそれは誓ッて笑ッて死にまする、名譽にも面目にも御前で死ぬ事を得ると思ッて」。

神靈の手に摑まれる心地がして、かたへに聽する李朴まで我知らずぞッとした。

其二十五

其儘矢部は拜伏してしばらくは面も揚げなかッた。

「愚痴のやうでは御座りますが、兎に角是を御わかれと存じまするに因ッて微衷をも申し述べました。最後の場に笑ッて死ぬ、平和に死ぬ、嬰兒の心もちで死ぬ、是だけは年來の希望として、どうか實行いたしたくも存じ又それがためには平生から心の滿足といふ事を是非とも要する、それには、國家有るを知ッて我身有るを知らず天子有るを知ッて國家有るを知らず、仁義のために身を拋ッて始めて瞑目するにも遺憾無く、卽ち一大滿足を抱いて死ぬるといふ、是だけが本心でござります。茲に涙は雨と降る、但し區々たる未練のためでは御座りませぬ。恐れながら威容堂々たる　御影、かゝの如く堂々たる樣で在された　龍顏が恐れ多くも今は廣島の一客舍に在されて嘸かし前途の事を御苦勞に思しめされ、その御氣色をあらはさせて在しまさぬかと……」感きはまッて口籠

ツた。「さりながら宸襟安らかに在しませ。死を期して國家のため、陛下の御ためには盡くし奉らうとする者澤山にござりまする。日本男兒の一念の凝るところ鋼鐵も何のその、やがて程無く王師も凱旋、今からその日が目に見えまする。嗚呼、君、天上の一輪の日、心あらば微衷をも傳へたてまツてよ、何とぞして　聖體に御恙あらせられぬやうに」。と言ひをはツて又伏拜する。

一方ならず感動されて、李朴も身に痲痺をさへ覺えるに至れば、御影も動く如くに思はれ、且又狂にまでも近い矢部の一心も云ふ方無く尊く見える。

「然らば李君、御影を御納め下さいまし。心ばかりの御わかれは最う聞え奉りました」。

見れば李朴もそツと眼を拭ツて居る。

是も御前に拜伏して、「申し上げ奉ります。恐れ多くも外面は敵對し奉る者の一人、されど大日本帝國のため皇帝陛下の御ために散らさに身を異鄕に捨てましたる賤臣、さいはひに今矢部からの好意により、謹しんで御影奉護の名譽なる任に當りまするで御座りまする。よしや名は變はり、國籍は異なツて居りましても一片丹心の在る所を見そなはされて、日本臣民の一人と何とぞ御覽願ひまする」。

相讓らぬ眞心を表し奉るのを見れば傍で矢部も心うれしさ一とほりで無い。勿體ない　御影ではあるが、斯くの如き人物に預けるのなら更に不快なところも無いと、とける計りの笑顔になツて、「私もまづ一安心しました。どうぞ此後は宜しく御守護下さいまし。ところで積る物語りはどれが何うやら夜を徹しても盡きませぬが、又餘り時間を過すのは、却ツて御互に不利益になるでしやう共都度の御打ち合はせは此邊でするとして、私は却ツて晝は何氣なく公然と營所の中へ煙草を賣りに入ツた方がむしろ可からうと思ふのですが——そこで貴官から然るべく御取り做し下さるならば」で

「さやうさな」と稍しばらく考へて居た。「隨分危いやうな氣もされますが、しかし貴下の事であツて見れば」。

「どうか御聞き許しなさッて下さい。大丈夫御迷惑にならぬやうにしますし、又よく營内の歡心を得るやうにもします」。

「それにした處が一應糺彈をば公然と行はなければ爲りませんよ、御承知ください。何しろ一同が中々猜疑の念に富んで居ますから。その時御如才なくやッて下さりさへすれば宜しいので」。

「どうか何處までも朝鮮人のつもりで押しとほして見ましやうよ、一生懸命でさ」。

不圖見れば川岸を縫ふやうにして松明の影がちら／＼し初めて、二三人の聲もして、此方へ近づく體である。

「はてな、あの松明は」と李朴は眸を定めて視て、

「うム、僕の營兵だ。はゝア僕をさがしに出たのだ」。

「ぷッ、兵士が戰地で夜あそびの士官を搜すとは、よくも然う不規律に……」

「あはツ、僕はじめ故らに盡力して不規律ならしめるのです」。

「御わかれとしましよ、今私が見られたらいけますまい」。

「何とでも口實は有りますが、然樣、こゝでは見られん方が……」

「では明日の晝」。

「待ッて居ります」。

直ちに矢部は身をひるがへしてその後に近く雜生した蘆荻の隱に潛んでしまふと、手早く李朴は御影を懷中にしたてまつッて、やゝ立ち上がッた所へはや松明は近づいた。

其二十六

近づき來る松明の火影に李朴しかと見定めれば、はたして我營の兵士であッた。「巡邏か、何用だ。俺を尋ねにか」と聲かけると、

一同歩武をぴたりと止めて、「あ、あすこに御出でだ。李監軍、張百總の命によッて御歸營の事を願ふため、御

出先を御たづね申して参りましたので」。
「あ、さよか、要用か」。
「何か存じませんが、至急との事で。勿論只今偵邏が一人の怪しい者を引ツとらへて参りましたが、多分その件らしうございます」。
「又怪しいものが居ツたと?、敵か」。
「倭奴らしいとの事で、もつとも中國の服裝は爲てますが」。
李朴些しく胸を轟かせた。頻々として捕へられるものゝ重なるのは言ふまでも無く太甚まづい。猶豫はして居られぬ、一刻もはやく立ち戻ツて、どうにか處置を爲なければならぬ。さるにしても又此間のやうに日本からの探偵との證據があがツて、終に殺すやうな事に立ち至ツてくれなければ可いがとばかり。氣は氣でなくての急ぎ足。
潜んで此應答を聞いて居た矢部、是また途胸を衝いた。支那の偵邏の眼が鋭くてか、日本の間諜の忍びが拙なのか、いづれにもせよ然う毎々怪しまれて捉へられるものが多くては、實に李朴の言ツたとほり、危ふさも又一入加はる。今その後から尾行したいが、さりとて夜の事なり、營所の中へ入れるものでなし、怪しまれるが關の山――しばらく今夜は事無く此儘去ツた方が安全な策だとばかり、しづかに松明の影を見送ツて後、何處ともなく立ち去ツた。
李朴が營所へ立ち戻ると、張翼は儼然とかまへて、その嫌疑者と云ふのを旣にもう裸にして面前に引き据ゑて居た、その傍には兵士十二三人が立ち列んで棒千切など持ツたのも有る、上官の命令次第いつでもそれで責めさいなまうと用意して。
「またこんな怪しい奴がありました。偵邏がそれと認めて一先途上に於て取りたゞし、全く疑がはしいと見定めて今引致して來ましたので」とまづ張翼が披露した。
「なるほど、貴官も御しらべに爲りましたか」。
「御歸營を待ツての上の事として、まだ委しくは。但

し此奴の族籍は何處だと詰問しました、どうしても中國人と主張しますから。さうすると山西省潞安府長治縣の東南なる壺關といふ地の產だと言ひます。然るに惜しいかな、此營內に同地方面のものが一人も居らず、その眞否を斷じ難いですが、どうしても疑はしいのは此奴の所持する此手拭ひに」と手拭を取り上げて李朴に示し、「模樣のやうなものが書き散らしてありましよ。點々木の葉のやうなものを記してあツて、怪しむべきは此處に『鎭』此處に『定』、此處に『來』と書いてある事是です。鎭遠、定遠、來遠の略字ではありますまいか。その傍に又一々歐字で212だの34だのと記してある、是は何でしよか。歐字を用ゐる、既に倭奴の證據と言ツても差支へ有りますまい、中國の人で用も無きに斯く外土の文字を用ゐる事は斷じてありませんからな。況んや鎭だの、定だのと書く。又況んや落書きも物に因る、手拭ひなどに——紙ならば兎に角。僕は何うでも怪しいと認めますな」。

だまツて聞いては居たが、李朴その胸ぐるしさ一とほりで無い、と言ふのは張虁が今斯く怪しいと目を注けたその着目が一々道理に當たツて居るからで、是を反駁する口實は實に無い。212だの34だの歐字の意味を知らぬらしいが、李朴に於ては聊か心當りが有る。即ち外でもない、近々に日本艦隊を粉碎する一決戰を試みようと北洋艦隊は頻りにその支度を急ぎ、戰爭の際甲板の上で血に辷らぬための用意で大同江の河口から小砂を袋へ盛り取ツて人夫をして三板ではこばせて居るといふ事、および仄におぼえて居る樣な心もちするが、鎭遠へは二百十二袋ほどを盛るとかいふ事、そこらを彼是思ひ合はせれば、其歐字はそれらしく、既に然うとすれば無論日本からの探偵、吁又も又もしまツた事になツたと肚の中でとつおいつ。

表面はありげなく、「何さま究竟の御注目、そりや大方外れますまい。しかし今夜は先その儘にして、又明朝を期して調べる事にしようでは有りませんか。些しく身體に僕も疲憊を覺えて居りますから」。

と言ふ肚の肚では一刻を延ばせば一刻の利が有るかも知れず、又或ひは明日になツたら矢部も來て、好い智慧を貸すかも知れず、殊に又捕へるや否や逃がす事もならず、然う毎度殺すといふ事殘念でもあり、又矢部に對しても耻しい心もちがすると云ふので、何氣なく延期させるやうにした。

「御命令ならばそれに從ひましやう。しかし嚴重に拘束して」と張翼下士に目くばせした。

「嚴重は可いが、苛酷に過ぎるな」。

李朴の此一語、捕虜の身に取ツては如何ばかり嬉しいか。

其二十七

「えゝ烟草屋でございますが、監軍樣の御言葉によりまして今日から御用を伺ひに上がりました。どうぞ御門內へ立ち入ります儀相叶ひますやうに」と小腰を屈めて矢部は門番の支那兵に賴むと、

下た目に見おろして、「烟草屋だと？鑑札は有るか」。

「まだ頂戴いたしませんが、監軍樣が御承知で」。

「御承知なら鑑札が下附になつた譯だ。無ければ立ち入らせる事叶はんわ」。

「ではございましよが今日いたゞくつもりで。恐れ入りますが、烟草屋が參りましたと御取り次ぎ下さればそれで……」

「ふざけるな。貴樣の用を取り次ぐ役ぢやない。蛆虫のくせに大それた事を吐かしをる奴も有れば有るもンだな」。

「御立腹では恐れ入りますが、烟草は御好きでゐらツしやいますか」。

「きらひだ、大きらひだ」。

「それでは些困りましたなア。御好きであると宜しいンですが。御好きなら御披露のしるしまでに些しばかり進上いたしたいと存じて居りましたに」。

「何、くれる？貰ふなら厭はんな、きらひでも。又好

きな人に賣ツてやる。本當にくれるか」。

「御迷惑でさへございませんければ、些ばかり」と三袋ばかり取り出せば、

「あはツ、貰ふに迷惑が有るもンか」と鷲づかみに受け取ツて、「どうだもう二つばかり出さんか、その代はり取り次ぎしてやる。よし／＼、もう二袋、そんなら待て、今取り次ぎしてやる」。

代り番をも置かず一散に奥の方へ駈け込んで去ツたが程なくにこ／＼しながら歸ツて來て、

「なるほど、大官が宜しいと言はれたから通れ。こツちだ。かう來るのだ。果報ものだぞ貴樣、今倭奴を捕へて糺彈がはじまツて居る處が見える」。

「さよですか」と言ひ流したが、實は苦勞でならない。夜の目も合はなかツた位で、それで早朝來たのである。

段々と是迄に矢部も敵地へ忍び込んでは來たが敵の營所と言ふのは初めてゞ其凄いやうな、怖ろしいやうな心もちを實地に、又深く味ふのもはじめてゞある。一歩あやまれば死、それは怖くはないが、不成功の死は素より以て好ましくなし、できる限りの奏功を爲ようと言ふ、それ丈に胸中は一方ならぬ苦勞である。

「聖天子、聖天子、大日本帝國の天皇陛下」と肚の中で默禱して、案内にしたがツて、其場に至り途中も色々と視察したい所は山ほど有ツたが、わざと最初から怪しまれては爲らぬと思ツて成るべくは控へ氣味にして、やがてその場へ行ツて見ると、李朴を正面として、張翼といふ者らしいのも儼然と座をかまへて居る、その前には頭を低れてその捕へられたと云ふ男が悄然とうづくまツて居る。

矢部は些しく離れて李の前に叮嚀に禮をして、

「御ゆるしを得まして罷り出ました烟草屋、何とぞよろしく御贔負を願ひ上げます。いづれも樣、どうぞ宜しく」と張翼の方をも見る。

李は前夜とは宛がら別人のやうに變はツて、「ふム承知した。そこで乃公と此百總張氏へ呈する經紀用銀（手

數料）はいくら出す」。

「何ほど差し出しまして宜しうござりますか、とんと存じませんが、どうぞ御遠慮なく仰せ付け下さりまして」。

「微々たる商人からの事ゆゑ澤山にも取れまい。張君二三十元ならばなア。こりや烟草屋、二三十元、いやさ卅元で勘辨して置かうわ」。

「かしこまりました」と笑ツて異議に及ばず出すそのをかしさ比べられぬ。そも〳〵又此一狂言で度胸もぐツとすわツて了ツた。捕へられた人は傍目もふらずに俯向いて居る、その横顔きツと差し覗けば、是はしたり何處やら見おぼえ有るやうな。はてな日本人かも知れない。誰だツけな、見たやうな。と思う途端捕虜もまた此方を見る。見て、やツと吃驚、さすがの矢部も顔色を變へた。是即ち別人でない、自分が京城で身を寄せた彼の雜貨屋小田である。

鋭くも張翼けぶりを見て取ツて、「烟草屋ツ」と一喝して、「貴樣、此奴を知ツとるな」。

慌てゝ、「いゝえ……」

「いや知ツとる。顔見て双方おどろいた工合ひ、この翼がきツと睨んだ。知らんと云ふなら所存がある。李監軍、こりや容赦なりませんぞ」。

しまツたと思ひながら李も何喰はぬ顔をして、

「烟草屋、知ツて居るなら知ツてゐると云へ、貴樣に迷惑のかゝる譯はない。實は此奴倭奴らしいとて召し捕ツて來たもの、まだ取り調べ中なのだ。貴樣が知つて居るなら此奴の身分も分かる、疑ひを決し、赦すなり、殺すなり何れとも爲る。貴樣の證言此場合ひ大に有力なのだ」。

その謎の意は聽く推して、「さう仰やられますると眞實を申さずに居られません。實に此奴、わたくしに取りましては打ち殺しても慊らん奴で、此所で遇ひましにのは幸でございます。どうぞ私の見て居る前であなた方の御威勢で嬲り殺しにして」。

張翼得意になツて、「やはり貴樣知ツとるのだろ。驚いたろ乃公の眼は、此上ともに謊言言ふな。そこで此奴は中國人か」。

「中國人と言ひましてございますか。いづれのものと?」探り探ツて言ひくろめる、その六かしさ一とほりでない。

「何でも可い。貴樣の知ツただけを言ふのだ」。

きツと思案して、「眞赤な謊言です」。

「謊言を云?よし、いよ／＼倭奴だな。倭奴だろ」。

小田も李朴も胸ひやり。が、何しろ矢部の事、どうか胡麻化すだらうと計り殆ど活きた心地もせぬ。

其二十八

とにかく張翼は疑ひぶかい性質だけあツて、又怪しい者の取り調べには機會が有り、それを瞞着し切るのは容易でない。小田の生命は矢部の口一つ、再會の嬉しさ一とほりでなく、それで其心を色にも示せぬくるしさ。誰も彼も胸は大波瀾を捲くのみである。

張翼急き込んで、「倭奴だろ、烟草屋」。

「倭奴ではございません。が、倭奴も及ばぬ奸物、此奴に私の家産は大抵蕩盡されまして、私は又御はづかしう御座いますが、此奴に妻をさへ奪はれ……畜生め、様ア見ろ、好い氣だ」。つかみ蒐りさうな見脈。

「うム、倭奴でないとな?」と張翼甚しく失望の氣味で、「すると、やツぱり韓人か」。

「濟物浦もよりの賣卜者ださうで。小利口ゆゑ私どもの家のものをそツくり欺きまして、終に産をさへ傾けさせました。私が今のこの境界に陥ゐツたのもやツぱり此奴の故で。それ故どうにかして怨みを復したうございますが、此奴に不思議な術が有りますので、どうにも爲らず、旦那さま、私はくやしうございます、御察しなさツて下さいまし」。

「はて、不思議な術とは?」と張は聞き咎めた。

「薄氣味わるいのでございます、私どもの親どもは皆

それで殺されましたので」。
「そりや大變な奴だ、人殺しまでしたとは。その術といふのはどんな事か」。
「殘、殘念でございますよ」。
「だから、どういふのかと言へば」。
「な、なみだが零れます」。散々に待ち遠がらせて、
「此奴が些しでも怨みに思ひますと、いつでも直に其相手を……ちッ、畜生め」。
「罵詈は無用だ。はやく云へ」。
「あ、しまッた」。
要の處で妙な事だと張翼些しく呆氣に取られて、
「何、何がしまッたのだ」。
深く後悔する體で、「口が辷りました、つひ。あ、言はなきや可かッた、どうぞ御勘辨、もう止めます」。
「そりやいかん」と屹として、「なぜ止める、それ迄に喋して。取り調べ出した以上、要領を得ずには何うしても。拘束するぞ、貴樣をも」と睨めつければ、
「へい」とばかりの當惑顏。
「なぜ言はん、なぜ言へん。それとも譃言か」。
「いや決して――しかし、吁、困ッたな。くやし紛れにつひうッかり、旦那さま、どうでも御勘辨なさりませんかなア。困ッたな。ぢや申し上げます、是非に及ばず」と屹と思案する體で、「その代りどうぞ別席で」。
「別席？」と眉を顰めて、「なぜ、此處でわるいか」。
「その譯も御願ひでございますから別席で」と聲までふるはせて、如何にも啻ならぬ樣子である。
已むを得ず一先嫌疑者をば退かしめ、さてどういふ譯かと重ねて問ふ、それへ對しての答へが此狂言の眼目と矢部は一心籠め、籠めた。
顏色までも變へてかゝッて、「口が辷ッてつひ不思議な術を彼奴が知ッて居ると申したのですが、もッと委しく御喋しすると屹度彼奴に怨まれます。怨まれると又私しも親どものやうな目に遇ひます。それですから彼奴の前では」。

「怨まれたとて最う如此されて居る、どうされるもんか」。

「ところで然うでございません、神變極まる術ですから。吁、おもひ出しても氣味が惡い」。

聞かぬ先から張翼も稍不氣味をおぼえて來た。が、聞き正さぬ譯にも行かない。

「李監軍、全體何の事でしよな。此男の言ふ事もさツぱり解りませんが、事實を述べて居るのでせうか」。

「さア、何ともな、よく質して見ませんければ僕にもやツぱり。こら烟草屋、有り體になぜ言はぬ」。

「申し上げます。只どうか私が申したと彼奴に知られません樣に。そうすると怨まれますから」。

「そりや承知した」。

「怨まれると殺されますから」。

「くどい。わかツたと云ふに」。

「おや申し上げます。彼奴の術と云ふのは恐ろしい物を使ひますので、それが固より妖怪なので」。

張翼いよ〳〵不氣味げに、「何を使ふのか」。

「黑豬でございます」。

其二十九

黑豬の妖怪談で前以て迷信の深い張翼を脅かして置いたのを料らずも茲に至ツて利用し樣とは李朴も全く夢想しなかツた、何しろうまい物を材料として持ち出したもの、驚くべき一種の頓智を持つ男だと心で深く感じると共に又可笑しさ怺へられぬ程である。

張翼はじめ並み居る支那兵、いづれも皆勿怪な顏、矢部ます〳〵生眞面目な顏。

「彼奴の居る所と云ふときツと黑豬が出沒しまして夜などは人を脅しますのですが、その黠豬が神出鬼沒、とても手に乘りません。それで彼奴が人を怨みにおもふと毎も其黑豬を放ツて食ひ殺させますので」、と稍涙ぐんで、「私の親ども〻亦そのとほりにされました。どうぞ仇を御うち下さいまし。御願ひでございます」。

「貴様その黒豬を見た事有るか」。張翼眞面目で聞き出しました。

馬鹿め、釣りこまれたわいと肚の中では冷笑ッて、「見た事はございませんが、見た人の噺しには並の猪ぐらゐの大きさで只肥え太り、それで純黒であるとの事で」。

「どうしても殺せないのか」。

「形ちこそ目に見えても一種の氣ですもの、とても殺すなどゝ云ふ事は」。

「ふム、氣か。氣では困るな。今の時世でも稀有な事を行ふ奴が有るものだな、して見ると李監軍、彼奴は倭奴でも無いのですな」。

蘇生したやうな心もちで、「たしかに倭奴では無いと解りました」。

張翼は目をぎろつかせて、「兵勇の陳休も昨夜とか黒豬を見て、而も今夜江畔まで吾々に來いとの傳言をその豬がしたとの事で、いかにも不思議だ。こりや酷待すると却ッてわるいかな、怨みに思ふ時には直にその豬を役して復仇すると云へば。李監軍、どうでしよな」と大に後悔の體である。

「勿論ですな。之を優待すれば味方に利益となるには相違有りますまい」。

「旦那方へ御願ひでございます」と矢部は乗り出した「何でございます、優待なさいますッて？そりや以ての外、御殺しなさッて下さいまし、どうぞ御願ひでございます。私はもう／＼怨みに怨みぬいて居りますので、それ故一生懸命に彼奴の化けの皮を剝いてやッたのでございます。優待なさるとは飛でもない」。

「馬鹿を云へ。殺す殺さんは此方の勝手だ」と張翼は叱咤した。

「ほム、こりや驚いた。やれ嬉しや殺して仇を取ッて下さると喜んで一切を打ち明けたら、はッ／＼しよッ、却ッて駄目に爲ッちやッた。惜しい事をしたッけなア、いッそ嘘吐いて彼奴は倭奴ですと言や好かッた。だが、そんな事仰やらず、旦那方なら御强い方でございますから

どうぞ殺してやツて下さツて」。

「しツ、くどいわ」と目を剝き出して、「大きに御世話だ。罪も無いものは殺されんわい。徒らに殺して怨みを受けるのは好まぬわい。殺したくば貴樣勝手に殺せ」。

「駄目を言ふな、烟草屋」と李朴も其處へ口を入れた。「張君の言はれるとほりだ。貴樣は怨みが有るか知らぬが、此方どもに怨みは無い。赦して放すまでの事だ。しかし貴樣の志しも憐れだから茲で短銃一挺貸してやる。それでもツて貴樣擊ち殺ろしてやれ」。

「わたくしの手でゞすか」と些しく矢部も面くらツた

「さうさ、併し此處では爲らない。實は昨夜とか其黑豬が突然あらはれて一人の兵士に託宣して、今夜江畔まで吾々の一人に來いと傳へたので、それで誰か行かなければならない。が、不好だ。張君あなたは？」

「不好ですな」と苦わらひ。

「な、誰も不好だ。今思ひついたから貴樣に賴む、今夜今の男と同道して吾々の代理になり、江畔に至ツて其言ふ所を聞き、了ツたら擊ち殺すさ。それには貴樣が大いに取り做したので倭賊でないとの嫌疑も晴れ、赦された事になツたのだと、吾々からも本人に言ひ聞かすれば本人も大に貴樣を恩人と思ツて、決して不利益には爲るまい。こりや一擧兩得の策だ。な、さうしろ」。

張翼一も二も無く雷同して、「是は妙策。それ、〳〵結構、大賛成、われ〳〵も小氣味わるい所へ行かずに濟む、國家のため大切な身をもツて居て」。

こみ上げる笑ひを忍ぶ矢部いくるしさ。

其三十

截寧から大同江の流れを沿ふて下ツた所に金化といふ地が有る。一生懸命足に任せて口をも利かず步いて來たのは矢部と小田との兩人で、もう、此邊ならばと思ふ頃畑中のとある草生に休息して顏見合せてはツと一息。

これ〳〵の出放題で、ゆくりなくも敵を欺いて君を救ひ出したと一伍一什を矢部が物がたれば、小田は淚の進

むのをも覺えず、幾度か再生の恩を謝した。

「まるで夢です。あなたに御目に掛からなければ、もう此頃私は刀下の鬼、危い命でしたよ實に。うまく又黑豬の事が役に立ツたもンで、それから又あなたの調子のうまさ、いやもう有り難いやうな、嬉しいやうな、扨をかしいやうな馬鹿げたやうな。唯何と言ツて御禮を述べて可いやら……」

「小田君、そんな事いつ迄言ツて居たとて……それよりは危急の場合ひ、肝心の事を伺ひたいので。京城で御わかれしてから直に貴下は探偵となられたのですか」。

「さうです、奈良君と一所に。その內に日本から軍事探偵として渡來した人も澤山有るといふ噂しゆゑ、さきへ乘り込まうとのつもりで、一旦平壤城近くまで行きました、二人で。ところが端無く敵に怪しまれ、あぶなく捕へられさうに爲ツたのを必死となツて戰ツて逃げ、それでとう／＼奈良君とは別れてしまひました」。

「奈良君の生死は？」

「わかりません。それから漁夫に化けてそろ／＼と大同江を下り、河口の長連縣まで辿り着くと、矢部さん御聞きなさい重大な件」。前後見まはしながら聲に力を入れた。「外洋に碇泊して居る北洋艦隊に戰爭の準備として盛砂をせツせと運んで居るのでしよ。おどろきましたね。更に近くへ到ツてよくよく偵察すると、水兵の操練いや大變、どうして陸兵とは大ちがひ、立派で、そして勉强で」。

「ちツ、畜生め」。

「まアさ、さも忙がしく見える樣子で考へると、もう海戰は數日の內ですな。支那兵の意氣また天をも呑まんづ許り」。

「おどろいた」。

「本當にです。とにかく日本艦隊を邀へ擊たうとの計畫らしく、それから考へると日本艦隊も近い所へ來たらしいですが、十分に戰ふだけそれだけの用意してをりましやうか、何しろ支那では全力を盡くして一戰の下に日

本艦隊を鏖しにするとの決心ですからな」。

「嗚呼、その支度して居てくれゝば可いがなア」と流石に心細さうに。

「ですから苦勞で、どうか此事を一刻も早くわが軍へ知らせやうと思ふので。それで一散に道を急ぎ、つひ擧動も怪しかツた、その故でしよ、支那の偵邏に認められて、ばツさり遣られたのでした」。

「危かツたですな。しかし重要な御偵察、恐れ入りました。一刻も早く御報告なさるが宜しいと思ひます。すると是から本隊の方へ御出でになりますか」。

「その事、身は一つ心は二つと言ツたやうな工合ひで今が大切な時と思ふにつけ、報告に歸りもしたし、又猶深く探ぐりもしたし、どうしたら可いかと迷ツて居る位で。それで貴下に救ツて戴いたればこそ報告もできるので、さもなければ迚も」。言ひさして考へて、「如何でしよ、私は是から本隊へ歸る事にしてその代はり是から貴下が同艦隊の擧動を猶深く探ツて下さるといふ事にしたら」。

「大に望む所です」とは言ツたが考へて、「待てよどうしたものかな。今保山附近の陸兵には御承知のとほり私も先怪しまれずに近づいて居られるので、又もこんな便宜は容易く得られない、それを捨てゝ行くといふのも――はて、どうしたものか」。

丁度その時、旅人と見える二人づれの者が通りかゝツた。一人は賤しい身裝で年の頃四十四五とも見える朝鮮婦人、又一人は漁師とでも見える體の、年の頃二十三四の是も朝鮮人で、通りかゝりながら畑中に矢部と小田との居るのを見て、一旦行き過ぎたが、その婦人が更に立ち戻ツて、畠越しに向ふから大きな聲で路を尋ねた。

「もし〳〵、其所の方伺ひますが、保山へは此道を行けば宜しうございますか」。「よろしうございます」と應接したのは矢部であツた。「しかし道が大分わるくなツて居りますよ」。

「支那兵は居りますかね、是から先には澤山」と問ひ

ながら其婦人が此方へ近づいて來るので矢部も吾知らずふら〜〜とその方へ近寄ッた。

其三十一

「支那兵ですか、支那兵は保山近所にはもう澤山居ます。其處へ私は烟草を賣りに行くものですが、保山もよりは河まで皆支那兵の範圍內、それから先はまだ日本兵も居ず、支那兵も居ません。貴女保山へ御出でになるのですか」と矢部は極めて氣輕に言ッたが、木にも草にも心を置く身の上とて相手を嫌はず多少の探りを入れずには置かぬ。

「いゝえ、もッと先へ參るのです」と婦人は只簡にこたへる。

「そりや大變、この戰爭も有らうと云ふところを。よほど遠くへですか」。

「はい」とは言ッたが、先をば言はず、「保山から先は一所のあの者が知ッて居ますから」。

「なるほど。ですが、處次第で川南の方が支那兵が居らなくて、御婦人の旅などは大丈夫ですな。隨分追剝にひとしい眞似をしますよ。よしんば男の方が一人ぐらゐ御附きでも何とも思やしませんから」。

「さうですか」と冷やかに言ひ流して、「取られるものも有りませんから管ひませんや」。

「でも、旅人の往來はもう大抵とまッて了ひましたよ」。

婦人はこれを耳にも入れぬ體で、「有り難うございました。さよなら、どうも御邪魔さま」。一禮して去ッてしまッた。

が、振りかへり〜〜行く。

「小田さん、怪しいですぜ、あの奴等」と頻りに首を傾けて、「どうも只の旅客ぢやない」。

「些しをかしいですな」。只雷同の語氣らしい。

「どうも怪しい。何者だらう。まさか女の探偵でも有るまいが、どうも變だ。小田さん、私はあの者どもに就き

怪しいと思ふ箇條が二つ三つ有るのです。第一が、路を問ふのに同伴の男をさしおいて婦人が問ふとは尋常ぢやありません、保山から先の道をばあの男が知ッてると云へば、卽ち言ひ換へれば保山から先の旅をした經驗が有るといふ譯でしよ、さすれば婦人との道づれになッては勢ひ道などを聞くのは男の自然の役でしよ」。

「なるほど、そりや然ういふ譯ですな。何さま變だ」とやうやく解ッて來たらしい。

「第二に、あの男の漁師姿、ところでまだ長旅した樣子でも無く、どうでも今朝あたりから始めて旅をしそめたらしい、よしや今朝でないとして昨日あたりさ、此金化から海までいくらも無いぢやありませんか、この邊の海岸の漁師とは認められましよ」。

「いかにも」。

「それでです、保山まで位の道を知らず、それから先は知ッてるとは頗る變ぢやありませんか。保山までは知ツてるが、その先は知らんと言ふのなら、この邊の海邊の住人の言として尤もと思はれるです」。

「いかにも然樣」。

「然らば保山から先に住居したものであッたが、都合有ッて此頃は此近所に漁師となッて居る、と斯う見るより外有りませんや。しかし、それは疑はぬ目での解釋です」。

「疑はぬ目での解釋とは？」

「贔負目での解釋です。更に疑ッて解釋すれば、大に其疑ふべき餘地を存して居るです。斯う疑ッたらどうです、あの漁師は、眞の漁師でなく、假裝して居るもので地理を知らぬ所で見れば他國のもの、扨道を問ふに男たる己が傍觀して居るのは口が利けないので、卽ち朝鮮語ができないので、もし然うなら或ひは外國人、しかしあの相好、あの體格、日本人よりはむしろ支那人としか見えぬさア、支那人の假裝したのと言ッて、まア必らず中るとも言へませんが、その疑ひの餘地は有ります」。

「なる程」と言ッたが、小田も此度はまだ十分に會得

し切れぬ體。
矢部は一入いきほひ込む。「まだ夫だけでは薄弱ですが、偖第三です、あの婦人が支那兵を怖れず、むしろ頼る語氣をも洩らす、又平氣でもある、あれが非常にをかしいです」。
「そりや僕もさう思ひました、全く、〳〵」と此度は小田大きに同感の體。
「誰とて支那兵の亂暴なのを怖れぬものは無く、まして又婦人の身で、之に加ふるに可なりの長旅、相應の旅費も有つ、それだのに此方から忠告を試みましても一向平氣で居て、又行く先をも言はぬのは實に變です。目を圓くして安全な行路を開くのが普通の人情、それが然うでない、然らば支那兵を怖れぬといふ安心がたしかに有るに相違無し、さア胡亂ぢやありませんか」。
「さう伺ツて見ると、いかにも不審ですな。敵兵に緣故の有るものですかな」。
「何うも然うらしいです。違ふか知れませんが、とにかく私は些し奴等に尾行して見ます。氣の故かいかにも怪しい。怪しいと思ふとあの漁師も支那兵の假裝したのかとも思はれましてな。一先保山方面へ引ツ返す事にしましよ」。
「私はもうあの方面へは立ちまはれませんや」。
「そりや大きに。ぢや私だけ」。
矢部の此鑑定は實に神のやうであツたのである。その矢部さへ尾行して一大驚愕を喫した、何ぞ料らん北洋艦隊から平壤へ贈る密書を此婦人が持ツて居るので、茲に矢部に怪しまれたがため終に支那艦隊は海上の實權その一歩をあやまツたのである。

其三十二

矢部も小田もいざ袂を分かつとなると戰地の事、御互ひに是が生別れとなるか知れぬと思へば、又互ひに死を期した身ながらも姑くは後髪索かれる心地がして、隨分御自愛なさいと言ひかはす言葉にも千萬無量の情が籠も

ツた。右と左り、ふり返ツて最早互の後姿も見えなくなれば、斷然と又胸をも据ゑ、一散に急ぎ足、矢部は其怪しい婦人の道を跟けた。

後れたのは十町ほどで、それから見え隱れに尾行する事二時間ばかりの間は策の施すべき所も無かツたが、いつ迄然うして居ても同じ事と、矢部は更に思案を定めて此度は追ひ付いた。

「さきほどは。大分路が御早う御座いますな、このでこぼこして歩きにくいのに」。

故さらに漁師體の男の方に云ひかけたが、笑ツて點頭いたのみで何とも言はず、奪ふやうに婦人の方が受け取ツて、「さきほどは、どうも有り難うございました。何もう脚は達者ですから。貴下は是から何方へ」。

「やはり保山から先へ煙草を賣りに參ります、兵勇の方に御馴染ですから。どうせ御一所の道筋です、何なら御咄しでもしながら」。

「はい」と言ツたのみ進まぬ顔つき。

此方は委細かまはない。「大抵の人は旅をもしなくなツた今日此道而も御婦人の身でわざ／＼旅を爲さいますのは何れ容易ならぬ御用事ででも」。

「はい、取り込み事でして」。

「どちらから御出でになりましたので」。

「雉島の方から」とは答へたが、如何にも煩はしいと言はぬばかりの體。

「偖こそ遠くも無い處から來たのであると、先第一の鑑定の中ツたのに心も勇んで、「あ、あの島の……いやそれは。すると、舟でまづ御出でだツたのですな。支那艦隊に封ぜられて只の舟は一切通行どめになツてると言ふ咄しですがな」。此處ぞとおツと樣子を見れば、稍うろたへて、「そ、さうです」。

「それであツて能く御出でになられましたな」。

「そ、さうです」。

「いえ、よく御出でになられましたと言ふのです、その中を濟ツて」。

「もちろん夜船でそツと」。

やゝ漸う抜けをツたわいと肚ではをかしい。「さうですか。就てあちらの方ゆゑ伺ひますが、艦隊はよほどの數ですか。失禮ながら漁師のたぐひの貴下、嘸よく御存じでございましよ」。意地わるくわざと男の方に言葉をかける。

女はさへぎツた。「これは啞です」。

「ふツ、こいつは旨いわい。耳の聞える啞かも知れない」。

女はたちまち面色變へて、「何ですとえ。一體あなたは饒舌りかけてばかり居てうツとしくて堪りやしない。好い加減になさいよ」。

此時矢部は早決心した。唯疑はしいと言ふ丈では荒療治するのも可哀さうなものゝ、戰亂の際場合ひによツては默ツて居られず、先方の出樣次第と既に右の手は懷中で短銃を握ツて居る。

「道づれだからしやべるンでさ。人に道をさへ聞いて置きながら」。

「そりやそれで禮を云ツた」。

「禮なんぞ聞きたかないや。そう巫山戯て出やがら頭巾脫ぐ。それと知ツて跟けたンだい。さ、二人とも身ぐるみ脫げ」。

短銃出せば仰天した。僞啞の證據には男も忽ち面色變へた。

「泥坊だ、大變だ。御前さん、どうかして」と女が泣き聲で叫ぶと同時に、

「烏龜！白日鬼！」吾知らず男は支那語で罵ツた。

「やツ、辮髮奴の僞啞だな。猶面白いや、身ぐるみ脫げやい。四の五の吐かしや一思ひだ」。

氣を呑まれて逃げもやらず二人とも只茫然。

其三十三

男は懷中から匕首やうの物を出したが、出した丈で短銃が怖ろしいか、其儘立ちすくみになツて了ツた。もは

や男は賴むに足らぬと早くも女は思案したか、きツと爲ツて、

「仕方が無い、それぢや金は上げる。着物だけは勘辨して」。

「兩方だい」。

「そりやあんまりだ。金は其代はり澤山上げる。どうか着物だけは」。

「ふム大きく出たな、いくら有る」。

「馬蹄銀で、五本だけ。どうか夫だけで」。

「いやだ、否だ。どうでも裸にしなけりや――さ脫げ脫がなきや擊つぞ」。

「待、待ツて。ぢや譯を噺すがね、あたし共並の旅人ぢやない。吁、仕方が無い、かう爲ツた上は明かさなければ――北洋艦隊から平壤へ行く使者なのだよ大切な役目が有る、あらい事しては御前の不爲でもあり……」

矢部もぎよツとした。「面白い、そんなら猶の事だ。どういふ使者のおもむきだ」。

「それを何も御前が聞かずとも。それよりも御前には金、ね、大事の使ひ、國のためぢやないか、そこを何ぼ御前でも然う思ツて」。

「ふざけるない。さうは目星を付けたんだ。好い氣になツて白狀しやがツて、様ア見ろ。やい、よく聞け、金も何も要らないンだ、その使ひの趣意が聞きたいやい」。

「そりや私にもわからない、手紙だもの」。

「よし手紙だな。やツつけろ、そんなら」。

咄嗟、剎那、銃聲一發、男は擊たれてのけぞツた。あれエと女は金切り聲我知らず逃げにかゝる、その襟つかんで引きずり仆して、「馬鹿め擊たれたいか、逃げなどして」。

「ど、どー、どうぞ命だけ」。

「着物だけと云ふのが命だけに下がツたか。さ、その手紙と云ふのを出せ」。

「飛でもない事に、吁、なツた。手紙取られるのか濟まないなア」と口惜しさうに襟元さぐツて、なるほど一

封の書狀を取り出した。

受け取ッた儘すぐには見ず「この男は何だ」。

「支那兵です、定遠號乘り組みの。え、私を護るために附けられたので」。

「何の役にもそれで立たないのか。よめた、すッかり。人目に立たない樣にして手紙を貴樣に持たせ、警備を一人附け、平壤へ遣らうと言ふのだな。すると保山まで今日行ッて、それから護衞が又替はるのか」。

「さよです、此人は其所から舟へ歸るのです、保山屯駐所からの證票を受け取ッて」。

「何者だ、一體貴樣は。やッぱり雉島のものか」。

「はい、あの島の漁師の家內でございます。もしくそれで宜しければ何うか、もう此儘御ゆるし下さる樣に——もう此上は御咄しする所もございませんから」。

「うム、聞く所も最う無いが、不愍だが赦されない」。

「いえッ!」

「貴樣が歸れば此事をしやべる。すると此方都合がわるい。俺は日本からの探偵だッ」。

「ひエッ、ぶッ」とばかり腰がぬけた。

「觀念して死ね、不愍だが。助けたいが是非も無い。その代はり回向もする、のみならず卑怯は爲ない、貴樣の此金や髮の毛は今に亭主へ屆けてやる」。

耳にも入れず泣き狂ッて、「言ひませんよ、しやべりませんよ——女ですから助けてよ。御慈悲、御なさけ、家には子も有りますから、た、た、たすけて」と這ひまはる。

途端又ぞろ一發の銃聲。彈は美事に腦を穿ッて、只一發、女は目口から血を出して、その儘卽死を遂げてしまッた。

「あ、可哀さうだがなア」と一言。何より氣になるのは密書の文面、すぐに慌てゝ開封して讀み下して仰天した。

丁提督から平壤へ宛てた書狀で、日本艦隊の中幸にも筑波は損害を受けて戰列に加はるを得ず又同艦隊目下の

狀況水雷の準備も無しとの飛報、是千載の一遇、乘ずべき好機會に付明々後日を期して黃河にて日本艦隊を掩擊する手配との意味。

身をふるはせてぞツとして其書狀引ツつかんで矢部は天を睨んで姑らくは只茫然となツて居た。

「小田の言ツたとほりだ。苦勞だな、此海戰。一刻も早くだ、此由を本隊へ。さ、さ、さ、大變だ。大變だ。うまく我艦隊に注意させる其間に合ツてくれゝば可いが」。もう血眼である。

其三十四

注意は毛よりも細かい男の事とて、矢部は此急忙の折りでも始末を附けるのを忘れず、今擊ち殺した二人の死骸から手がゝりの早く付かぬやうにと急いでそれを丸裸にして細かく着物をあらためると、鑑札、憑單(へうたん)、文書なども有ツた、それもろ共に馬蹄銀をも奪ひ取り、女の髮の毛は、些し計り剪り取り、萬事よろしと云ふところできツと一思案定めて例の保山の營所、李朴の居る處へ戾ツた、黑豬一件はどうしたと氣樂らしく。又さも待ちかねたらしい樣子で慌てゝ問ふ張翼に例の愛嬌ある笑顏で會釋して、今すこしく急ぎの事が有る故、その事は後で御咄しする、ともかく李監軍に御目に掛かると云ふのでやがて李に面會し、是非とも密談を要するとて營外の草原へ連れ出した。

今日の珍事の始末を簡約に物語ると、聞く度每の李朴の驚き、唯呆氣に取られてしまふ。

矢部はそれから疊みかけて、「女をたしかに其の支那が保山へ送り屆けたといふ事を今日中には北洋艦隊へ復命する事に爲ツて居るのでしよ、ところが夫が歸らない怪しむ、追跡を出す、仔細がわかる、直とそれ〲の手配をする、さうすると折角裏をかいてやらうと思ふ吾々の苦辛も甲斐が無くなるです。わが本隊で此手紙を見て帝國の艦隊へ何なりと訓電する間も無い內に北洋艦隊はいよ〲先を越すとのつもりで、明日にも明後日にも帝

國艦隊へ食いつく事になるでしよ。では大變、ところで窮策ですが、今日の一日だけの處を引き延ばすために代理の兵士を貴官から北洋艦隊へ派遣し、女はたしかに受け取ツて是から傳遞（てんてい）させる、傳遞して來た兵勇は病氣になツた故療治してから復す故その事は御承知を乞ふとの意味の手紙を持たせてやツて戴きたいです、どうぞ是非是非ともに」。

李朴しばらく考へて、「隨分苦肉の策ですが、已むを得ませんな。あなたが支那兵となツて行ツて下さると好都合ですがな」。

「行きたいは行きたいですが。行ツて思ふさま北洋艦隊の様子をも見たいです。が、さ、此手紙をすみやかに本隊へ屆ける一件、是が人に頼めませんや」。

「大きに。それで至急を要する事ですからな」。

「ですからの御願ひ、すこし御迷惑なのは御察し申します。が、國家のためと折角」。

「心得ました」と斷然こたへて、「何とか始末して置きます。さう云ふ事なら一刻も早く、さうでしよ。何しろ大變なものが手に入ツた。實に天祐神助といふほどな――それにつけても清國の否運」と淋しく笑ツて太息した。

「實に奇です、こんな物を得るといふのは。ま、しかし急ぎますから御わかれとします。もう何うも此手紙はよし幾ら人に怪しまれるとも持たずには行かれません」。

「御用心大切ですよ。支那兵につかまツたら言ひ脱けは最早困難でさ。つかまらん様にしないでは」。

「此上はもう暴力です。捉まりさうなら腕力です。斫（き）りくづしても逃げる計り短銃はそれ故に頂戴します」。

「結構。彈丸は」。

「二發だけしかつかひませんからまだ有ります、猶くはしくは御咄しも爲たいのですが、急ぎますから此儘。又いつ御目に掛かれるか知れませんが隨分御自愛なさツて」。

「有りがたう。貴下も亦」。

別れかけたが立ち駐ツた、「忘れて居ました。その私が殺した女の髪の毛とその懷中にして居た銀、それ丈は良人の手許へ屆けてやりとうございますから、どうか重々の御手數ですが、折を見て叉宜敷く貴官から。されば雉島のものださうですが、つい慌てたもンで其良人の名を聞きませんでした。勿論小島で、人家も少ないでしやうから、その傳手を以て尋ねたら解らない事も有りますまい」。

銀と髮の毛とをわたせば、大に感じて受け取ツて、

「承知しました、嘸その良人も喜ぶでしよ。同じ殺したにしたところが、是等を返してやれば、どの位功德になるか知れません。御安心なさい。たしかに御預り申しました」。

何から何まで快よく承知されて今は心殘る所も無く、さらばと計り別れを告げて矢部はその儘南へと向いた。

其三十五

ひた走りに走ツて錦嶽といふ山に差しかゝる、もう此山をさへ越せば日本兵にも逢へると思へば心一入勇んで走りつゞけの足の痛みをもほと〱忘れて勢よく步いてその山中俚俗室洞と呼ぶ處まで來て、矢部も先一休みと岩角に腰打ちかけ、燗草に點火して、一吸ひ吸ふか吸はぬかの間に、突然として山鳴り谷應へると云ふ程の凄まじい叫び聲がして、人音さへも聞こえた。

偖も山の中で何の事かとその聲のする方、峯の方面をきツと見上げる途端耳も裂けるばかりの銃聲が續けざまに二つした。

こりや事だぞ。戰爭か。偵察騎兵の衝突か。咄嗟の事とて思案も付かない。無心で身を起して中腰、同時に猛然として目の前へあらはれのは――虎。

是には矢部も仰天した。所持の武器と言ツたところが高が短銃、この猛獸に對しては壁に豆を投げるやうなも

の。はツと唯思ツた計り我知らず二三歩飛び退ツた刹那追ひ駈けて來た支那兵三人、わツ〳〵との掛け聲もろとも又二發ばかりつるべかけた。

　矢部は好い面の皮實にあぶない。自分と支那兵との間が虎、それを管はずに先方では撃つ。中たらないのが運といふのである。

　今つるべかけた二發の彈丸はたしかに虎に中ツたと見えて、虎はうをツと一聲高く叫んで火を噴きさうな口を張り、野郎め撃ツたな思ひ知れとの勢ひ、矢部をば捨て〻支那兵へと飛びか〻ツた。

　偖矢部は何うもできない半町や一町逃げたとて何の甲斐有るものでなし、實に此時のみは茫となツて、その儘大地にへたばツて支那兵はどうするかと眺めて居た。

　飛びか〻る虎の態度には流石に辟易したと見えて、やツと叫んで三人ともに逃げ出す――虎は疾風のやうに跳ぶ――追ひ縋ツた。一番おくれた一兵士、もう是までと決死の勇、銃を逆に持ちかへて、立ち駐ツて臺尻で虎の腦天二つばかりした〻かに食はせた、と思ふ間も無い、虎は手を使ふよと見る間、譯も無くその兵士の横面に一撃、兵士もんどり打たぬ計りの樣ではたと仆ふる――乘りか〻ツて直と吭笛、噛みついた刹那悲鳴只一聲。

　その間他の兵士は三十間ほど逃げた。鼠に投げるに器を忌むと言ふ事今言ツては居られない。また虎を目がけて撃つ。中たらない。が怒り狂ツて高吼えした。前の兵士をば噛んだ儘にして置いて、又その方へと飛んで行く。寄せつけて堪るものかと又一二發、いよ〳〵虎は突進する。わツと言ツて又逃げ出すのに又ほとんど追ひ縋る。

　きツと矢部も思案した。飛ぶやうに最初の兵士の仆れて居る處へ駈け付けてその銃を取ツた時は更に第二番目の兵士が毆り仆された刹那であツた。撃たうか、撃つまいか、瞬間の胸の混雜。

　「撃ツてくれ、手傳ツてくれ」逃げながら一人の支那兵が矢部の體を見て大呼した。

　よし、そんなら。無言で點頭く。狙ひ定めて火蓋を切

ると、やれ了ッた、彈丸は支那兵に中ッて、音に應じてばツたり仆れる、直と虎はそれへ飛び付く。

又峰で人の諸聲がする。きツと其方を見上げると十四五人の支那兵の一むれ何か口々に罵るが何でも今その兵士を擊ッたのを憤慨する様子で、矢部に向かッて擊ち出した。

びユッ／＼と頭上を彈丸が飛び過ぎたと莫ふ間に、木の枝などを掠めるのが又ばら／＼と聞こえ始めて其危險言ふばかりない。言ひ譯で叶ふ場合ひで無いときツと思案、もう實に已むを得ぬ。見れば澗には雜木が亂生する虎に食はれるか、彈丸に中るかの運任せ、ちツといふ掛け聲と共に身を躍らせて、只無茶にとび下ッた。

其三十六

飛び下ッたが端無くも木の枝の橥みに支へられて、矢部の身は逆落としに落ちもせぬ。流石に肝を定めて無法には噪かず、引ッ懸かッた儘上の様子を聞けば豆を熬るやうなつるべ擊の音と人聲と虎の吼える聲とすべてが一所になツて聞こえる。さては、まだ虎と闘ッて居るのかそれならば好都合と木を傳はッてそろ／＼と谷底へ降ッて行く內に凡そ五六分時間も過ぎたらうと思はれる頃になツて上の銃聲はぱたりと歇んだ。

「虎も殺られたらしい。俺に取ッては有りがたい。行き掛けの駄賃に銃一挺取ッたから大に安心だ。支那兵め俺が仲間を擊ち殺したのを過失と知ッてか知らないでか大分怒ッて居るらしい。で無くとも見られては面倒だ。とにかく此谷に身を潛め、遣り過ぐしてから出る、それが一番安全だ」。

上では頻りに罵り喚ぐ。

「こんな小さな虎一疋に三人まで味方を失ッたとは實に殘念だ」。

「いゝや一人は今の韓奴が擊ッたのだ」。

「それにしろ三人だ。忌々しい、彈丸は韓奴に中らず谷へ飛んでしまッた」。

「中ツたのだろ。中ツて跳ね飛ばされたのだろ」。
「さうでない、飛んだのだ、だが訝しな奴だ、餘程決心でなければ谷へなど飛び下りられるものでない。何か曰くつきの奴らしい。とにかく捜せ」。
「自分が撃たれさうになツたので飛び下りたのだろ」。
「何しろをかしい。又我兵を撃つとは憎い。何しろ捜して糺問しろ」。
此應答は下で耳引ツ立てゝ居る矢部には一々手に取る如く反響して聞こえる、にツと笑ツて、「大抵さう來るだらうと思ツた。見付かツたら見付ツた上の事、此處は慌てゝはいけない。嫌疑の種たる書類と短銃とを隠して置けば可し、己も成るべく見付からぬやうにして置いてそれでも見付かツたら他意無い旨を有り體に陳述して疑ひを晴らさせる分の事だ。おや、もう、みし〱、がやがや、御出でなさるわい。證據物さへ無ければ威張ツたものだ」。
とある岩石の間に例の密書と短銃とを隠し、自分はそれから八九間はなれた所の草の茂みにもぐり込んで、わざと俯伏しになツて斃れて居る。
程なく五六人の支那兵がどや〱と下りて來て、彼方だ此方だと頻りに捜す、それを仆れた儘聞いて居る心もち、をかしくも有り、薄氣味わるくも有り。
同時一策が胸に浮いた。見付けられるよりは故と此方から呼ぶ方が可い、どうせ見付かりさうに爲ツた上は。
「もしどうか助けて下さい、もしどうか。どなたでももし何うか」。
「やツ居たツ。何處だ、何處だ」。
「此處でございます」。
「わからん奴だ、此處とは何處だ。うなツて見ろ」。
「うウん」。
「もツとよ、吝々せずと、もツと長く引ツ張ツて澤山――うウん、〱と――何しろ草できツぱり分からん。唸ツてる内には聲をたよりに」。
しくじツたと此時矢部が始めて思ひ附いた。と言ふの

は外でも無い、相手が支那兵だと思ッて、わが身の韓裝なのは忘れてうッかり支那語で應答した事であッた。

「ぬかッた是は。が、もう仕方が無い。先方の出次第言ひ紛らすだけの事だ、その時はまた其時だ」。

「どうした唸らんか」。

「へイ、唸ります、うウん」。

「ぷッ、唸りますと云ッて唸ッて居やがら」。

其三十七

不意とは言ひながら度胸を既に定めた事とて、やがて矢部は谷から上へ引き上げられ、支那兵環視の中に立たせられても更に動ずる氣色も無かッた。

一應國籍から旅行の目的を調べられた、それに對して自分は朝鮮國京畿道梨川府中陽里永石巷の烟草商で、支那兵に烟草を賣る目的で先月頃から保山邊をさまよひ張百總、李監軍にも贔負になッたものであるが、烟草の荷が減ッた故更に仕入のため故郷へ歸る道であると答へ。

すると一人の曹長らしいのが點頭て、「李監軍や張百總の事を知ッて居る所を見ると嘘でもあるまいが、しかしそれなら何故、わが兵の銃を奪ッてわが兵を狙撃したか。又何故に吾等から試みのための發砲したのを止めてくれと哀訴をばせず、身を挺して谷へ飛び込んだか」と儼然として詰問した。

「いえ、それは身を防ぐに一心、最初は虎が私の前に居ましたのをりはや兵士の方は私の方に向いて御撃ちになりましたが只運好くて身に中りませんでしたのを、それから、虎が其先へ飛んで行き、一挺の銃は不用となり剩へ手傳ッてくれとの御言葉でしたからそれでつい發砲しましたのが過ッて却ッて人に。それは恐れ入りましたが、他意有るのでございません。人よりは虎が怖いです何で其場合ひでは危難を相偕にする人を故さらに撃ちましやうか」。

「虎より人を怖れる場合ひが有るぜ、奸細などの身に取ッては」と氣味わるく渋しく笑ッた。

「私をそれでは奸細と……」
「何でも可い、營所へ伴れて行く」。
是には弱ッて、「そりや實に困ります。既に保山の各武職の方々と御懇意でさへありますのに……」
せゝら笑ッて、「とぼけちやいかん。その內部を委しく知ッて居るだけ、篤と問ひ究める必要が有る」。
「何處へ御つれになるのです」。
「何處でも可いぢやないか。强ひて聞きたければ言ふ一應衛兵を具して保山まで。たしかに貴樣の言ふのが眞實なら、よしや保山まで行ッても怖い事が無く證明も立つだらう」。
吁、くるしい場合ひである。行くのは怖ろしくもないが、奈何せん例の密書を本隊に屆ける迄の時日の切迫するのを。玆で一日二日を過ぐさば百事實に畫餅となる。短銃も生憎谷に置いて來た。運に任せ、武力に因ッて一方に血路開いて逃げるといふ事それも叶はぬ。悔いても今は及ばず、流石の矢部も思ひあまッた。

「烟草屋、その他にまだ疑はしい廉が有るのだ」と敵は說明を施すといふ口氣で。
「何がです」と思はず眼をいからせた。
「貴樣の言葉つきだ。中國の語を言ふその……」
「それは……」と云ふのを打ち消して、
「言ふな、こた〳〵と。俺は久しく倭國に居た。で、よく倭人の音を知る。貴樣のは何う聞いても倭人の音、さア、怪しいと云ふが何うした」。
ぎよッとしたが然り氣なく、「それは迷惑な。或ひは似た音も有りましやう。まして況んや御承知の如く私は韓國人でも無し、この朝鮮の者でわづかに清國の語を覺えた丈である位ですもの。さう仰せられては困ります。全く急いで行かなければならぬ所でございます、どうか然るべく御酌量下さいまして、御放免下さるやうに」。
「酌量の餘地が無いわ」。
「それでは是までに事情を申し上げましても」。
「怪しいと睨んだからだいッ」。

其三十八

兵一人を具されて矢部も保山へ護送されることになッた。爭ッても頼んでも其甲斐無い。膓を掻きむしるほどの痛恨、國家の危急を一日二日の眼前に控へて、それで身は自由を失ッて、空しく貴重の日を送らなければ爲らぬ。他の營へ送られるのと異なッて保山ならば一身の生命の危難それは無い。が、死それにもまさる苦しみ。忌々しくも身は罪囚扱ひになッて細索ではあるが兩手をさへ縛され、兵は銃と劍とを供へて、おごそかに護送される。扨逃げる工風は無いものか。欺くか鬪ふか、いづれ逃げるには其二つの一つ。ともかくも試みた上の事と心を碎いた。

「もし旦那、逃がしちや下さいませんか。實は京城にたッた一人の伯母が有りますので、もう日本兵も入り込んだと聞けば心元なく、それ故大急ぎで歸る所なのでございます。其所をどうぞ不愍と御覧下さいまして、どうか御慈悲に、もし旦那、些しばかりは金も持ッて居りますから差し上げても」。

「くど／＼云ふなッ」と叱り飛ばして、「貴様を逃がせば乃公の落度になる。怪しくなけりや保山で調べを受けてそれから歸ッたとていくら日取が違ふものでないわ」。

「ですが不好ですから。で、御金を……」

「しッ、一口まぜに金、金と――賄賂(わいろ)で動く乃公ぢやないぞ」。同時銃の台尻で矢部の背中をくらはせた。

「あ、痛ッ」と切齒して、「そんなに酷い事なさらずとも」。

「くどいからよ」。

「どうでも叶ひませんか、ど、どうしても」。

「まだ毆られたいか、野郎」。睨めつけて直ぐ冷笑した。

もう頼んでも駄目である。金で動かぬ、珍らしい硬骨漢、さて愛すべき、併し今の此場合ひでは大に憎むべき旋毛まがり、こりや一筋繩では行かぬ。

が、身は手を縛され、その上に武器も無い、即ち自由の無い上に爪牙までも失ツたのである。敵は銃をも持つ劍をも持つ、偖どうしたらば逃げられやうか。

「濟みませんが草鞋の紐が解けました、どうぞ、結んで下さいまし。でも手が縛られてありますから結べません」。

兵は苦々しい顏で是非なく結んだ。

一二町行くと又解けた。又濟みませんがを始める、又結んでやる、又一二町行くと又解けた。

「不好だ、もう、貴樣の足はどうしたンだ。是で四度だ、もう結ばない、跣足になツて行け。ちよツ、好い面の皮な」。

「御尤もです、御ぢれなさるのも。私も解けさせるつもりでも無く、精々大事に穿いて居るつもりですが。どうしたンですかなア此紐は。是が本當の紐々たらずだ」。

度胸さだめに一つ洒落れた、と言ふのは早暴力で逃げやうと思案の臍を固めたので。

「もし旦那、これッきり。今度解けたら跣足になります、きツと。どうぞ不運と思しめしてもう一度、もし旦那御慈悲でございます」。

「うツとしい。ぢや今度限りだぞ」。不精々々に結ばうとする、呼々、その刹那、そこが運の決めどころで。

持ツた銃をば無論地に置いてから取り掛る。身を屈めて兩手で紐をあやつる、其頃合ひを見料らツて、力を籠めて兵の鼻面、骨も碎けよと矢部は蹴上げた。

あツと後ろへ反りかへる、同時手先だけをはたらかして銃を奪ツて飛鳥の迅さ韋陀天ばしり、右手には九尺幅ほどの流れが有る、其處を身輕く飛び越えた、兵は起き上ツたが淋漓たる衂血、又眩暈したかよろ〳〵する體、策をも思ひ付かぬか只茫然。

「失敬は謝します。が、已むを得ませんや。幸に此銃を御供に申して是から逃げます」。言ツて居る內岩角ではや手の繩をば擦り切ツた。

鬼見た樣な顏色して兵は切齒して居たが、愛すべき此

好男兒、きツと思案したらしく、蹶然として跡逐ツて同じく流れを飛ばうとした。

「やツ御出でなさるか」。矢部は閃電、流水に沿ツた岩山へ道をえらまず攀ぢのぼる、下から兵士も續いて逐ひ來る。

「是非も無い。しやツ、擊つぞツ」。

銃を擬しても更に動せず、

「擊てツ。逐がすものかツ」。

刹那鳴りわたる銃聲、一道の白けむり。のぼりかけた岩山の中ほどから血を降らせ滴らせ、肉片を處々岩にへばりつかせて轉げ落ちた衛兵は既に死骸となツてしまツた。

首尾よく是から矢部も逃げ、本隊の〇〇中佐(今は大佐)へ例の密書を示した處、中佐の驚愕一とほりならず、直に徹夜の秘密會が始まツて、謀は喘嗟に定まり、その曉方一つの急電が日本艦隊發せられた、その日卽ち明治二十七年九月十五日、黄海の大海戰の前々日で、美事終に支那艦隊は日本艦隊に先を越された。

是までが矢部道任の生涯の前半で、是からの後半は更に一層奇怪の經歷なのである。卽ち是から漁夫になツて威海衛の灣内を探り、又は旅順の戰ひに卷き添へを食ツて殺された支那婦人の死骸の乳房にいぢらしくも何をも知らず縋り着いて居る嬰兒を助け、又は黄海の海戰に某將官が、卑怯な眞似をしたとて面責して切腹せよと迫り又三國干涉の際支那から李鴻章へ來る暗號電報を奪ふため電信線を切らうとしたり、又それから露國へ入ツて踏測を行ひ、又いつか、身をひるがへして布哇へ行き、米國に走り、更に非律賓のアギナルトに面會して身をその軍に投じ、仔細有ツて日本へ歸り、今年終に猛烈な毒を服して可惜不歸の客となツたまでが其後半の經歷の重な所である。あまり長談に亘る故今しばらく是だけにして筆に休息を與へ。不日また稿を續ぐ。矢部道任、本名は些しく憚る所有ツてわざと類似のにしたが、ある部內では思ひあたる人もあるに違ひない。唯この物語りを讀ま

それがためには奮興される人も、又慚殺さるゝ人も或ひは有らうか。

せられるにつけて、帝國の同胞諸君に記憶していたゞきたいといふのは、日本今日此の類の志士が有るとの事で

女装の探偵　終

政治小説 桃色絹

比律賓義戦史談のうち

（一）

「生きるとも死ぬとも偖どうにも仕様が無いとは何たる事か、ちツ。拾はれてしまツたかな、いよ〳〵全く。と、すれば、さ、どうしやうか」。

傍にもし人が居たならば明きらかに聞き取れるほどの高調子の早言、いかにも悶えぢれる様子で扱くばかりに云ひなしたまゝ、はたと若者は足をとゞめた。

處はフヒリツピン群島の中の呂宋島、そのプラカアン州の片田舎で、村の名とも里の名とも付かず、只オート・ダ・フエ（Auto da fe）と呼びなされて、その一方はさして奥深くも無ささうな雑木山、また他の一方は七八町の間一面がらりと切り開いて見はなされる野原であツた。

「困ツた。こんなに弱ツた事は無い」と、若者は口の中でなほ續けた。「外のものならば兎もかくもだ。さ、命から二番目、では無い、命と釣りがへとも云ふあれをいやさ——命よりいツそ大切なあれを——落とし……た……とも思はれないが、無いところを見ればやツぱり落としたらしいが——さ、落としたとすれば、何の事か。何の事かと云ツた丈で濟むものならばそれでいゝ。濟まない、それどころでは無い。誰に拾はれたか拾はれるか知らないが、その相手次第では花が咲くか、火を噴くかそれさへも分からない。困ツた。われながら、脱かりも脱かツた。大切なものを疎に……したつもりでは無いがさて爲たればこそ——もしも悪い相手にでも拾はれたなら——さ、さうなると、乃公一人の難義ではなくなるて」。見る〳〵その顏は蒼ざめる。また涙ぐみさへした。

「紙入れは惜しくない、中の金も惜しくない。惜しい

惜しくないを通り越し、只、とても、どうしても人の手にわたす、人の目に觸れさせる、と、云ふことの、迚も〳〵出來ない物が中に入ツて居るのだからな」。

思案には重る首。足もまた重くなる。やがてはいつか止まツてしまふ。若者は立ちすくみに爲ツた。

「わるい奴に拾はれたらば、どうだらうか。一大事、さ、政府顚覆の陰謀がすぐ知れる。すると、同志は？さ粉だ、微塵だ。計畫大挫折、大破壞。思へば〳〵、ぬかツたな、濟まない事をしたな。どうして乃公はさうまで不注意で——されば、些もと不注意のつもりは無かツたのだのが、な。拾はれずに落ちて居てくれゝばいゝがな。此頃は此邊も淋しく人通りも餘り無いが、もし又不運の神に祟られて居るものならば、たま〳〵通る一人の人にも拾はれるか知れないからな。もしも惡い奴に拾はれたとすれば、とても乃公がおめ〳〵と生きて居られる仕儀では無い。よしや同志の人たちがおれの罪を寛容してくれるとしても、それに甘んじては居られないて。あゝ困ツた」。

若ものは只思案に暮れた。もがいても、苦しんでも、失なツた物をさがし戻す望みが有ることならば、それは宜しい。が、その望みは無い。只の絶望のみである。只愚痴にもなる。

何の分別も無くて、頭をあげてまた何を見るともなしにはるか向かふ、野の果ての方を見た、その目は端無く人影にとらへられた。

野のはるか向かふに灌木のむら立ちが有る。そのむら立ちを後ろにして、草の上に双脚を出して坐ツて、しきりに何をか、下向きすがたで見つめて居る少女が有ツた。人氣は無かツた野原、今やゝ目に入る少女一人その姿さへはや珍らしい。珍らしい、それは只珍らしいといふのみでない。もしやとの念が直に出る。もしやその少女が拾ひは爲なかツたか。誰か拾ツたらうと思ツて血眼になツた矢さきへ、その誰であるにもせよ、誰、それ、その人らしいと思はれる、されば思はれるやうな者が目に止

まれば、やはり氣ははずまずには居ぬ。若者の胸は躍ツた。

われ知らず足をはやめる。目は突きとほすまでの注ぎ方で少女へと、いや、むしろ少女の手元へと注ぎ付く。近よツて彼これ八九間近くまでになるまでは依然として目は其手元へ注ぐのをあやまらぬ、少女の顔、その方はまるで餘所にして。

またいかほどの熱心で、いかなる物を少女が見て居たのでもあらうか、若者が、今云ふ如く、八九間の近くまで來るまでは少女は人の來るのに些しも心付かなかツたらしかツた。で、やうやく音を聞き付けた、若者が草を踏む、草にさはる、その音を聞き付けた。

きツと此方を少女は見る。

その顏を始めてとくと見た若者は顏色をかへて立ちどまツた。

少女は最初きツと若ものを見た、見ると同時、若ものが足をとめると同時、急に目を轉じて他を見て、見る間

顔は眞赤になツた。

おどろくと云はうか何と云はうか、少女その手には何を?何でも無い、一大事、紙入れを持ツて居る。只持ツて居るのではない。中をあらためて、中の物を殘らず見た證據は一方の手に紙入れ、一方の手に中の物をさもしツかり持ツて居るのであツた。おどろくと云はうか、何と云はうか、若ものは痺るやうな心もちがした。

若者のひとり言で大かた紙入れの中味は知れた、それほど大事な、むしろ秘密にすべきものを拾ひ取ツて、さてそのやうに其中味を取り出して、さて又そのやうに熱心に見て居た少女、そのものは何ものか。何ものと若ものは既に知ツて居るか。知ツて居るどころでは無い。

その少女はドロレス・ホセエと名を呼びなして、西班牙人の娘であツた。

その親たる西班牙人はと云へば、その名をレムウダと呼びなして、教徒にいゝ手蔓の有るところから、その手を經て賄賂で收税吏中の重職を買ひ、權力を何よりの武

器として、絞れるだけ人民の血を絞り、その精分をば一切おのれの腹に入れて、またゝく間に怖ろしいほどの富豪になツた者であツた。

その貪慾な富豪、フヒリツピン島民の悪魔たる西班牙官吏のレムウダは旣に政府覆顚同志者の帳簿に、第一槍玉にあげるべきものとして書きしるされた、その寫しは若者の、その、而もその人の娘に拾はれ、あらため見られた紙入れの中に在ツた。

紙入れの中には他人に見られて危險なものがまだ〳〵有ツた。すなはち、新聞紙の切り拔きが二三枚、その新聞紙はいづれも皆ラ・ソリダリダツド（西班牙國政府に反對する主義の新聞紙で、フヒリツピン島の革命志士の手によツて編纂されたもの）で、無論政府からは嚴しく發賣を禁止され、もし隱して持ツて居るとの事がわかれば、一も二も無く國事犯の嫌疑者として捕縛され、結局は無法に責めさいなまれるのが通常である、それ程危險なものであツた。

これら帳簿の寫しと新聞紙の切り拔きと、その二種だけでその紙入れの持ち主がいかなる人であるか、いかなる馬鹿でも想像するに難くない。それが、さて、人も有らうに、當の相手ともいふべき敵の、實の娘たる人の手に入ツた。縄（なは）は早や若者の首にかゝツたと云ツてもよろしい。重刑ははや大口を開いて食ひつきかけたと云ツても宜しい。

さればこそ若者の身は麻痺（まひ）した。足も俄に硬ばツた。只立ちすくみに立ツてしまツた。そこに又其處の奥も有ツて。

陰謀の書類と新聞紙との外にまた一つ重大な物が有ツた。若者が加へられた打擊はむしろ其殘る一つのものからであツた。陰謀の書類はもし敵手におさへられたならば、返報は無論生命にも及ぶ。しかし殘る今一つの物は生命に及ぶことの恐ろしさ程恐ろしくは無いやうな物ではあるが、さて今といふ今の刹那は生命についての恐ろしさより尙胸をゑぐる物のやうにしか思ひなされなかツた。

その物は少女の寫眞であッた。

少女、すなはち、今現に紙入れを拾ッて中をあらためて居たその少女の、いき〴〵とした寫眞も一枚紙入れの中に入ッて居た。陰謀の書類を入れたと云ふだけでも、いかほど其紙入れは若者に取ッて大切のものか分らぬ。その大切な物の中へ、大切な書類と共に入れた寫眞とすれば、また如何ほどそれが若者に取ッて大切か、殆どそれも料り知られぬ。

しかし、その少女は島民が仇敵とする人の兒ではないか。仇敵の兒の、その親をばやがて程無く血祭りに供するとまで計畫が付いて居て、その計畫の書類をば命にも代へられぬと大事がッて居て、そしてその仇敵の片われたる少女の寫眞をそれほどまで大事にする、と、押し〳〵つめて見れば奇怪である。

それは兎もかくも、その寫眞の事を思ひ出すと共に、若者は又一つの、何と云ひやうも無いほど大袈裟な、むら〳〵とした思ひに五體を萎えさせられた。自分は寫眞の持ち主である。寫眞の裏に何と書いて置いたかとも知る。その書いて置いた文句を少女はいづれ見る。然り、見た。見たと同時、その胸に受ける一大打撃は是また、その必らず意外であるだけに、凄まじく恐ろしいに違ひ無い。そして、さう深く驚かされて、さて少女は何を、どう、いかやうに思ふやうに爲ッたであらうか。それは思ひ料るだけで只胸は一杯になる。

無理も無かッた、若ものゝ足が地上に釘づけになッてしまッたのも。身はふるへもする。魂は或ひは身から拔け出しもする。われと我自身が寫眞の裏に書いた文句は決して一時の樂書きではなかッた。述べ盡くせず、晴らし切れぬ胸中懊惱の村雲を一片の丹心(たんしん)そのまゝ赤インキに寫し出して、そして實は寐ても起きても肌身を放さぬとまでにして、其こそ命と釣りがへとも云ふべき大切な書類と共に紙入れに祕して置いたのであッた。思ひ出しても直思ひ出し得る、口にしても直ちに暗誦し得る、その、寫眞の裏にしるした文句は斯うであッた。

「嗚呼、天上の名花ドロレス！

　われのみの片戀ひの花！

露は夜な夜な花にやどる。

　花は首垂れて露を落とす。

うなだれるは露をあはれとてか、

　うなだれるは露をにくいとてか。

あはれむな、あはれむな！

　只にくめ、にくんでよ！

暴虐の風をちからに

　心づよくふりおとせ！

さて、とても、只の一夜も

　そひとげる露でなし、

　そひとげる花でなし、

世を捲いての暴虐の風、

その風に露は露の

　露の命をやがては捨てる。

なまじひの假りのちぎりは

　結ばぬをむすぶとして

さらば、いざ、天上の名花、

　その締すがたをせめてもの

　おも影と見て死なう、

　おも影と見て死なう」。

いつはりも飾りも無く、これら一切の文句はその若者がその寫眞の人に對する情緒を思ひのまゝに列ねたものであツた。書きしるしたその若者の本心を知らぬ他人は只その文句を目に見たゞけではその意味の何となく哀れなのを認めるほか、その外の事の一切は推察し得ぬ。よしやその文句の的にされた少女その人としたところがまた。

さりながら心有ツてそれだけの意味を籠めてしるした本人の若者に取ツては人のたやすく料り知り得ぬ、奥ふかい意味をみづから確かに知るところで、今やそのみづから大秘密とした一切をあるひは少女に覺られてしまひはせぬかと只思ふ、それだけ驚きは一方でない。驚きもお

どろき、中にはいろ〳〵の恐怖の心も交る、いろ〳〵の愛着の情もこもる。苦いと云はうか、甘いと云はうか、その味は扨云ひ盡くせぬ。

實にしばらく若者は何の思案にも暮れはてた。思案に暮れはてる、すなはち只たゞすむより外は無い。簑笠を着たならば、案山子とも見える。そして、少女をきッと見つめる顔つきは寧ろ凄いといふ程であッた。

少女もたしかに幾らかは驚いたらしかッた。が、若者ほどでも無かッた、とかくの思案もまづ付いたらしい。たち止まッた若者の様子のなみ〳〵でないのは明きらかにそれとも知られたと同時、つと身を起こし、小ばしりに走り出す。すはと見る間、若者のすぐ前まで驅け寄ッた。

「おとし物を爲さいましてしやう。あの、これ」。

聲と共に手に持ッたそれらを差し出した。そのくせ、中から出して見て居た物を元のごとく紙入れにをさめやうでもなく、只有りの儘で有りのまゝを差し出した。それからして旣に普通でない。他人の紙入れ、それを拾ッて中をあらためたのも淑女の所業として大きに耻づべきことゝしなければ爲らぬ。すくなくとも耻づべき事とする心が有るものならば、體裁だけにも、そのいろ〳〵を入れた中へをさめて、然るのち何とか云ふべきである。それをさうせず、剝き出しにしてさも〳〵開けて見ましたと云はぬばかりにして、何のすこしも動するところの無いのは不作法でなければ厚かましいのであるとしか思はれぬ。

思はれぬ、その人はさて誰か。若者その身、自身が命までもと戀ひしたッた人である。只戀ひしたッたではない、今の今までも戀ひしたッて居る、その人である。と思ふと若ものゝ腹の中は云ふに云はれぬ不快をもよほした、で、なくとも前から恐怖の念も有る。それに不快が加はッた。返答は出道をうしなッた。

「ね、あなた」と、はや少女は突き付けるばかりに紙入れをさし出した。

「あたしよく存じてをりますよ、これは貴方が御おとしなさツた物と。でしやう、御落としなツた物、ね。けれどもようございましたわ、外の人に拾はれず。さ、どうぞ」。

つと手さきへ突きつけた。はずみでもあツたが、少女の手さき、その柔かいやうな、生あたゝかいやうな、肌とも肉とも分別し切れぬ一種の味がたちまち若者の手に感じた。

つまり手と手と相觸れる、同時若者はまた魔氣に打たれた。さもなくても縮みさうな身體が更に一段びり〳〵疼いて、亂鼓が胸にはだめき出す。

附き穩無い無言の繼續！

すはや、これは又！少女は涙ぐんだ。

少女は何をか云ひたさうである。が、最初の活潑ないきほひには似げもなく、急におづ〳〵する體である、何事かのすさまじい物思ひは確かにもよほしたとしか見えず。

しかし、おいそれと二つ返事で手を出してその紙入れを受け取ることさへ若者は躊躇した。躊躇しなければならぬ事情がある。

その紙入れの持ち主は若者自分であると明きらかに確かめ云ツて、後難の無いものならば無論よろしい。が、十がほとんど十までは先あやふい。そのドローレスは敵人の片われである。おひろひ下さツたか、有りがたうございますと喜んで受けをさめる丈は受けをさめても、その持ち主は如何やうな企てを抱いて居るかといふ事は疾くにその中身を見て知られて居る。さすれば、よろこんで受け納めるのは手もなくおのれを政府に對しての反逆人と白狀し、名のりかけるやうなものである。

卑怯ではない、今いたづらに其やうな事をして一切の暴露を招く、それをどうにかして包まうとするのは、ひとりおのれの一身をのみ庇ふ卑怯で、それは、無い。すくなくも同志一味のためである。

只瞬間、その間に若ものが付けた思慮はそれだけであ

ツた。その思慮が附くと同時、やすからぬ間にもなほ小安さも得たらしい。聲がらもやゝ落ち付いた。が、しかし、挨拶は誠にまづい。

「何です、それは」と、わざとらしく紙入れを見て、「わたくしの物ですツて、それが？」

つたないが、まぎらすつもりであツた。

その顔をドロレスはぢツと見つめた。ドロレスの心に些しの恐れるところも無い。その見入りかたも、それ故きツとした。その見入りかたで、するどく且久しく見入りつゞけられた日には、いきほひ疵持つ足の相手はたぢろがずには居ぬ。

さうして、姑らく、やゝ姑らく、ドロレスは依然として若者を見つめたが、やがて言葉は急に直ちに若者の名へと及んだ。

「グレゴオリオ・デル・ピラアルさんでゐらツしやいましやう、あなたは」。

聲と共には微笑も見えた。この實は罪の無い微笑であツた、が、こちらには冷笑とも見えて。

無論はたと又返辭に窮した。ドロレスはいよ／＼きツと見入る。しかし、今はや若者には最後の観念よりほか出なくなツた。さうでないと云へば、紙入れは取りかへせぬ。名をたしかに明かしたところで、或ひはその少女その人一己の心に一切のおそるべき秘密を封じてもらふ事が、あるひは、出來ぬでもあるまいとも思はれる。只くるしい。

若ものゝ返事の無いのにその大抵の心中をはかり知ツたが、ドロレスは重ねての微笑と共にむしろ追兵急になツた。

「ピラアルさんで入らツしやいましやうね、入らツしやいますね、あなた」と、もはや斷言までした。

「ピ……ピラアル。はい、その、ピラアルはピラアルですが、しかし……」

「まアま、ようございましたこと、持ち主の方に此御紙入れが早速もどツて。あたくしは何うして御手元まで

御返し申さうかと一圖にその事にばかり屈托して、その癖何の思案も出ず、實は當惑してをりましたよ。さア、どうぞ」。

いよ〳〵紙入れをさし付けた。片手には例の危險な書類その他なほその儘で。

「御わびを申さなければ爲りませんの。あたくしは、實は此中の物を此とほり出して一切拜見いたしました」。

ピラアルは只さしうつむく。

さしうつむく其顏を覗き込んで、ドロレスは顏さし寄せて、何とも知れぬ溜め息をした。

「人さまの御紙入れの中の物をしらべる抔と、それは如何にも失禮の至りと存じてはをります。しかし、御拾ひ申したとは云ふものゝ、御名前か御宿を知らなければ御かへし申す事もならず、それ故是非なく中を拜見しました。いはれ無く、中を拜見したのでございません所をばどうぞ惡からず思しめして」。

ゆるやかに挨拶されて、やう〳〵たしかに答へるべき心の餘地を若者は見出だした。見出だしたと云ふよりもむしろ見出ださせられたのである。

「まことに忝う存じます。このやうな紙入れですが、わたくしに取ツては大切ですゆゑ、一かたならず有りがたく……」

「御大切どころではねえ……」と、云ツたまゝドロレスは一寸語を切ツた。

薄氣味のわるいドロレスの言葉ではある。落ち人は荻の風にも心を置く、邪推もする。ピラルアは一語を聞かされて一語ごとに縮んだ。

「まツたくあたくしは故とらしく心有ツて中の物を拜見したのではございませんの。けれども拜見して實は驚きましたわ。御わびは御詫びとして申すだけ決してつくろひもしませんければ、又隱しだてもしません。只その中の物を拜見したいも持ち主の御名をでも知らうと思ひましたばツかりそのためつひ殘らずを調べることに爲ツたといふ、そこだけ御察し願ひます」。

「御察し申しますとも、それはたしかに。中の物一切を御覽になツたのはそれは素よりやむを得んことです。その元はと云へば遺失した私にこそもと〳〵過ちは有りますので」。

「さ、さう仰せられますと、何となく只御氣の毒になりましてねえ。しかし、まづ好い鹽梅でございましたわねえ」。

好い鹽梅といふ、その語の眞意がちよツと怪しい。單に好運であツたと云ふよりは寧ろ他人に拾はれなくてよかツたとの意味がどうしても語中に見えるやうな。

「まツたくです。只今も仰やツたとほり、いゝ加減の人に拾はれなくて宜しうございました。今さら何を御かくし申しても致し方有りませんゆゑ、何の辯疏がましい事をも申しませんが、御覽のごとく、紙入れの中には容易ならない書類が有ります、それをあなたは御覽になツた、と、して、それから何事かあなたに於いても御思ひ付きになツた事が御有りでしやう」。

ドロレスは眉をひそめた。

「思ひ付く？　何をでございましやう」。

「さ、さう正面から仰せられますと、御返辭にも一寸躊躇します。只、中の書類を御覽になツて嘸かし御おどろきになツた事が御有りであらうと――いゝや單純に、御おどろきになツたと云ふどころでは無く、さぞ御立腹になツたことが御有りであらうと存じましてな……」

ドロレスは無言であツた。

ピラアルもやゝしばらく無言であツた。

またしばらくしてドロレスは涙ぐんだ目をあげた。

「なるほど、驚きもしましたよ。しかし、又驚きもしませんよ」。

「どういふ事です、それは」。

「何ごとも皆當然なのですもの」。

「當然？」と、ピラアルは恐ろしく目を見張ツた。

「當然ですとも、それだけの謀叛――と、云へるならば、ですね、謀叛――が出來てもそれは仕方有りません

わ」。

「仕方が？　有りませんと？」と、刻み込む。

「有りませんとも。ですもの、當然でございましやう。わさ、西班牙の民といふ身分のわたくしが斯ういふと、わが本國に仇をするやうに、わからない人は云ひもしましやうが、人類の、ひろい道から云ツたならば、今この島々の人々がふるツて謀叛をしやうと爲はじめたのは無理も無いことですわ」。

やゝ呆れてピラアルは只無言、只ドロレスの顔を見つめてばかり。

「わたくし共が何と云ツたとて齒の立つことではございませんが、全く本國の政治が壓制きはまるのですもの。つもりに積もツた鬱憤、此國の人がとう／＼怨みをかへすといふ所まで立ち至るやうに爲ツたのは、それゆゑ、當たり前なのです。御察し申します、あなたがたの御心中を」と、その聲はやゝうるんだ。

ピラアルに取ツては意外といふも疎(おろ)かなやうなドロレスの言葉であツた。蛇の目と思ツたのが螢であツたかと思ふ。只不思議なくらゐに驚かれる。それとも此方の氣を引き、口裏をあやつるのか。さもあらばあれ、最初は疑ひあやぶみもした位、さうと心づいたならば、運まかせ天まかせ、それはそれとして置いてよろしい。さらば唯一つの誠實、それにのみ只頼(たよ)れ。

涙ぐまれてはさすがに感激して夫丈！　また涙無くては居れぬ。ピラアルは目をしばたゝいた。

「ピラアル一言もありません。恐縮ならが敬服のいたりに堪へません。味方身最負とは云ふものゝ、われ／＼が政府に對して反抗を試みやうと云ふのも、十分こちらこのフヒリツピン島民に正當な理が存ると思へばこそです。しかし、その理の當否を今みだりにあなたに向かツて事々しく述べる必要もなし、また議論をあなたと鬪はす必要もなし、只その事はその事の有りの儘にして、すなはちあなたの御かんがへにのみ任せることゝして、さてこゝに殘る一つの問題、すなはちあなたがわれ／＼の

密謀を料らずも御承知になツたとして、これからあなたは如何やうに處さるか、それを明白にうけたまはりたいのです。露骨にいへば、われ〳〵の密謀は私の不注意から端なく露顯の小口となツたのです。すなはち、私は嚴重に法文に照らして國事犯罪人……でしよ」。

　ドロレスは無言で首だれて居た。

「紙入れを落とすまでは無辜の良民でした。いゝや、落としてあなたに拾はれるまでの私は西班牙國政府の統治の下に在る謹直な被統治者でした。紙入れを落とし、その中の物をあなたに見られると共にこれまで謹直な被統治者であツたといふ、その、わたくしの假面は剝げました。なるほど、あなたは法吏でいらツしやらぬ。しかし、西班牙の臣民として、母國に對する義務から云へばあなたは無論、わたくしを告發すべき權利を御持ちになる、すなはち一の私人、私人中の一の御婦人、それだけであツて、しかしその上いはゆる法吏の行ふだけの權利を今は御持ちになツたのです。しかるに何ぞはからん、われ〳〵の謀叛をもツて正當と御見なしになる、それについて私が腹藏なく申さば、私はその御言葉を非常に、非常に疑ふと共に、また非常に、非常に敬服してうけたまはるのです、もしも疑ふべき餘地が無いとすれば、只敬服すべきです」。

　ドロレスはきツとなツた。

「分かりました。御もツとも。しかし、それならば、つまり夫ゆゑ尚あなたは私に對して敬服なさるよりいツそ御疑ひになるのでしやう」。

「え、何ですツて」。

いゝえね、あなたは私を御うたがひでしやう」。

「疑ふとは何ういふやうに」。

「いゝえね、どうも斯うもなく、只、謀叛の機密をこの女に知られた、この女は必ず告發する、と、まづ此やうに」。

　ドロレスその云ひかたは嚴重さはまツた。やさしかるべき處女の口吻としては又それも意外とも云ふべき程な

ので、ほとんどピラアルはぎよツとした。

「あなたが私を國事犯人として告發するであらうと私が疑ふであらうとの御言葉ですな」。

「さやうです」。

一句一句つめ寄ツた、その腹の中で大かた是であらうと殆ど待ち受けたピラアルの返辭といふのは直ちに引きつゞく、そのピラアルの斷乎として一言に一たまりも無くゆらめいた。

すなはちピラアルは斯う云ツた。

「それは無論ですとも」。

「えツ?」

「うたがひます、無論々々。しかり、私から取れば、十分うたがはれる地位に、不幸、あなたが御立ちなのでしやう」。

しばらくはドロレス默ツて居た。

「あなたがこの國の土人ならばいざ知らず」と、ピラアルは直ちにつゞけた。「現に西班牙國政府の官吏たるレムウダさんの令嬢でしやう。そして、今密謀の書類をのこらず御覽になツたでしやう。その書類に何と書いてあツたかと云へば、さ、申しにくうはございますがレムウダさんと御名前も見えて居ましやう。謀叛の第一着手としてはレムウダさんを槍玉にあげろと手筈まで定まツて居ましやう。そのレムウダさんは貴女の親御、さらばその方の一大事、それを今令嬢のあなたが御知りになツたとすれば、見やすい普通の理によツてもあなたがそれら秘密を親御さんに御打ち明けになる譯でしやう――と察してもちがひますまい」。

これだけでピラアルは默ツて見た。が、ドロレスは尙答へもせぬ。

「さすれば、私の地位としては如何やうにしたら宜しからうか、何と御かんがへに爲ります。あなたは」。

言葉よりさきに瀧のやうに涙がドロレスの頰につたはツた。只唇を嚙みしめて居る。

「すべて打ち碎けて眞實を申します。同志の友に對す

る義務上、また島民を暴虐の政治から救ひ出す大目的の方便上、只今の場合ひ、わたくしは、これより外取るものは有りません――これ？　何？　非常手段です！」その聲はふるへた。

「非常手…………」

「御わかりでしやう、既にあなたには。非常手段、すなはちこゝで一思ひに…………」

ドロレスその目は異様に光ツた。

「一おもひにあなたを…………です」。

ドロレス顔は紅熱した。

「一思ひにあなたを…………さ、これです」。

同時つとさし出したピラアルの手つきで知れる、拳銃(ピストル)での意味であツた。

「これ！　さ、一發只！」

蒼ざめながらも氣丈であツた。追ひつめられて勇氣たちまち跳ねかへツて、

「御打ちなさる、では私を？」

「只、思ひ…………切ツてゞす」。

「御もツともです、わかりました」。

「いえツ？」

「さうあるべき貴君の地位です」。

「地位…………さうあるべき？」

「わたくしを御打ちなさる、さうあるべきあなたの地位です」。

「地位、と、御みとめですな、あなたは」。

「みとめます、たしかに」。

突如！　ピラアル聲放ツて泣き出した。

「令…………令孃！」

刹那、取り出した、短銃を！　すは、おや、撃(う)…………たぬ。

うなるばかりの横なぐり短銃は風を切ツて横の方何間といふ處へ投げ飛ばされた。

飛ばされるその短銃を見おくツてドロレスは惜、たゞたゞ茫然、同時ピラアルの身はその前に殆んど跪いた。

「令嬢、只わたくしは是です」とつゞけざまにピラアルは叩頭した。「捨てました、わたくしは短銃を。十分御わかりでしやう、意味はそれで」。

耳までドロレスは紅くなツた。

涙は依然としてドロレスの頬。

いつかピラアルの右の手はさし伸ばされた。さし伸ばされたと見る間、ドロレスの手へ……手を……

しかし、ドロレスは手を動かしもせぬ。

ピラアルの手はドロレスの手をぢツとおさへた。

「令嬢」、とばかり、ピラアルの呼吸は迫ツて、しばらくは言葉が咽元でつかへた。

「令嬢、おわかりが無ければ申します。いや、御わかりが有ツても一度は是非とも申します。ピラアルはあなたを射擊しません、いゝや、燃えるばかりの思ひに燒かれて射擊の腕ぶしは灰にしました。令嬢、御聞きくださるか、ピラアルが是から心の血をしぼツて、ほとんど末期とのおもひで、是から、さ、唯今申し上げる一切を」。

「…………」

「え、令嬢！」

「……………」

「御聞きくださるか」。

「さ、泣……泣かせて下さいまし！」と堰きあげた。

「泣？」

「御ねがひです、どうぞ泣かせてツ！ 泣かせて、泣泣き死ぬまで！」

ピラアルは死人色になツた。

熊手でゑぐツたらば斯うなるかとさへ思はれる胸の心もち、殺氣は目にさへ充ち〳〵て、

「令嬢、どうしても私はあなたを擊てなくなりました。なるほど同志一味の利害に代へられぬとのみ一圖に思へば、ここでは是非ともあなたを射擊してしまはなければ爲りません。しかしです、しかし事の元たる紙入れを拾ツてくださツたのは貴女、それは貴女の御心次第で

それから直ちにわれ〳〵一味の破滅となるかも知れませんが、まだ、あなたが其處まで事をおし進めなさらぬ内運よく他人に拾はれなかッたと云ふ、しかも〳〵刹那、わたくしが請求もせぬ内すぐに紙入れを返さうとなされた立派な御心ざし、それ是に對しては全く私には撃つべき丸(たま)も無くなりました」。

意は嵩んだ。情は迫ッた。語は出た。出た――完全な形ちを爲さなかッた。自分にもわからぬやうな云ひかたと爲ッた。ドロレスには分かッたか、よく。

「紙入れを落としたのは私の不覺その不覺をつぐなふがためあなたの密告をおそれ、拾はれた恩を仇にして、あなたを此處で射撃するといふ、それは元より譯も無い――が、無いが、さ、無いが、しかしすくなくも完全な人間の理想として、そのやうなことを敢て、忍んで出來ましやうか。魔になッたらば出來る。人である内は迚も〳〵。

「それ故、彈丸、あなたを撃つべきその彈丸をばこゝに私はその儘捨てるとして、他日大に一揆となッた時、あらためて西班牙の軍旗に向かッて、十分死毒を籠めて撃つ、と、只この一つに決しました。旣にさうして貴女を撃たぬとする――すれば、あなたに對しての疑念といふ疑念、それらも一切投げ捨てます」。

「捨て……疑念を?」と、ドロレスは殆んど睨んだ。

「まるで、のこらず」。

只ドロレスは聲をあげた。

「しかし、令孃、私には猶あなたに御禮を爲なければならぬ、その、云はゞ、殘る義務が有ります。な、令孃義務、のこる義務!」。

同時、ひし〳〵ドロレスの手を握りつめた。

「御わかりになりませんかな、令孃」。

「…………」

「日ならずして親御さんの御命が危いといふ一事、その事をたしかに〳〵極はめて、たしかにあなたへ屹と御知らせ申すといふ事、それが私からあなたに盡す義務で

あツて……」

咄嗟ドロレスは握られた手をふり放した。

その手は拜むかたちとなツた、すぐ。

「これですよ、ピラアルさん。これ、この、只拜むだけ。父をば、それでは……」

「御すくひ申します！」

「御助けくださる？」

「誓ツてゞす」。

ピラアルは前後とつかは見まはした。内懐から取り出した鑑札一枚。

「令孃、通行自由の鑑札です、まだ〳〵此鑑札の御入り用になることも有りますまいが、しかし萬一の御用意に。とても斯くても親御さんは一日も早く御出奔に爲りませんければ……さ、それだけを御勸め申すのが寸志、御わかりに爲りましたでせう」。

　とばかりに鑑札をつき付ける——のを宛も慌てゝ受け取ツた、匂ひこぼれる笑顔を見せた。

涙の雨を含んだ名花、うつくしさは各國各時代の詩人文士が述べ盡したそれ、その儘であツた。この場合ひ、云はゞ生死二つの追ひ分けにほとんど煩悶して居る場合ひ、色も色には見えもせぬらしい場合ひ、それながら比へやうない一種の魔氣がとろけるやうにピラアルを鎔かした。骨も肉も只一ツか。骨も肉も……いや、それは己れの一つのみでない。おのれの骨もおのれの肉も己れのほかの他のものと互ひに鎔け合ツてしまツたやうな、然り、他の物、他すなはちそのドロレス！

暫時、ピラアルは只恍惚。

ドロレスはさめ〴〵と泣く。

泣く、それが、しかし、よくピラアルには分からぬ。情のつよい婦人の普通とのみ解釋してしまへば、何のことも無ささうではある。が、さうとのみは迚も解釋されぬ。

　何ゆゑドロレスは然ほどに泣くか。

父を死命から免かれさせてくれると云ふ、しかも保證

の鑑札までくれた、その志しが身にしみて嬉しくて、さう泣くか。しかし、さう泣くほどの事でもあるまい。なるほど嬉しなみだ、その些しはうるませても宜しいであらう、が、堰入るまで泣く、と、いふ事が、單純な原因だけで果たして實際有り得ることであらうか。その點、ピラアルは何うしても合點が行かぬ。

「大層御泣きに……何もさほどの事では貴女。何かまだ御不滿足の事でも御有りに？」

無言でドロレスは手をふツた。

「では御有りでない？　はてな、これは」。

「御わかりは有りますまいツて、とても。しかし。今わたくしは……わたくしは一應またあなたに伺ふだけ伺ツて、それから御はなし致さなければ爲りませんことがまだ／＼澤山……」

「澤山御有りなのですか」。

ドロレスは點頭た。

（二）

「この場合ひ、令孃、御はなし下さるといふ事はいづれ私の身にかゝツた事、でなければわれ／＼の一大事、凡そそれら何れかであらうと存じますが、さ、いづれにもせよ、願はくば十分のところを宜しく、な」。

云ひながらピラアルは最前からの態度を變へて、どツかり草の上に坐をおろした。眞面からのドロレスとの差しむかひ、聞かされる一言一句は決して仇に聞きのがすまいとさながら精を凝しかためた。

ドロレスは涙おし拭ツた。

「今となツては私もまた相當の値段をもツて、あなたのいろ／＼の御深切を御買ひ申さなければ爲らなくなりました。なるほど私はあなたの御紙入を拾ツてそれをその儘あなたへ御返しすることゝ爲ツて、そこだけは貴君から謝意をいただく丈のことは有ります。が、それながらです、あなたから私に下さる御謝意は實のところ多過

ざいます」

「多過ぎる?」と、眉を寄せて、「謝意が多過ぎると仰やいますか」。

「ですよ、本心で私は申します」。

「わかりませんな、わたくしには」。

「直に御わかりの爲るやうな單純でもありませんものを。御尤もです、それは〳〵」。

「わかりませんな、いよ〳〵」。

「御わかりが無い、それ故、あなたの御命は風前の燈火です」。

「わたくしのが?」と、聲はずむ。

「あなたばかりでなく……」

「私の外の人のもですか」。

「たしかに私は申しますよ」。

「へ、たしかに?」

「たしかに私は申しますよ」。

ドロレスは差し寄ツた。で、ほとんどピラアルの耳に口、

「御命のあやふいのは貴君のほかの方のもまた――どちらと云へば、いツそ眞先。その方首領の方」。

「首領?」と、目は怒ツた。「首領? アヒナルドオ氏ですか」。

ドロレスは點頭た――と、同時、あたりを見た。

「アヒナルドオさんを首領として、いよ〳〵謀叛を御起しになるとの事はもう西班牙政府で知ツてをりますよ。あなたが實に立派な紳士として、一言のいつはりも飾りも私に向かツて仰やいませんだけ、わたくしも亦、あなたに對して、いはゆる秘密――惡意をもツての秘密――を守ることは出來ませんの。よろしうございますか――決して詐りではございませんよ、アヒナルドオさんの御命の今あやふいのは」。

ピラアルに取ツては何さまと思ひあたられる所の有るドロレスの言葉であツた。それながら扨顏色を變へずには居られぬ。

「それですが、ピラアルさん、御聞きくださいませ、味方をばかり見るとやらで、こちらで手くばりをさうして居ながら、さて又アヒナルドオさんの方で又眞先にわたくしの父を殺さうと爲さツて居らツしやるのをば西班牙人の誰一人として今日只今までは存じませんわ」。

「すると、今日誰か知りましたか」。ピラアルは稍あわてた。

「いえ、只一人」。

「只一人？」

「……のは私」。

「うゝむ、なるほど」。

「私だけ。私もわたくし、御紙入れを拾ツたばかりで始めてそれと知りましたので」。

「さうでしたな」。

「よしや御紙入れを御落としになツた御ぬかりは貴君の方に在るとしても、それを御落としになツたればこそ私も拾ツて中を見ることが出來、中を見ることが出來たればこそ父の命の危いといふ事も知れましたのでございましやう。自然とは云ひながら、御紙入れを御落とし下さツたあなたの偶然の御手あやまりに對して、わたくしは御禮を申さなければなりませんのでしやう」。

ピラアルは苦わらひした。

「ところが、申さなければ爲らぬ私からの御禮よりさきに貴君の方から却ツて御ねんごろな御言葉でございましやう。あなたは然ほど深い思しめしが無くて仰やるのでもございましやうが、私に取ツては過分でしやう」。

見る〳〵ピラアルは又涙ぐんだ。たしかに感動されたのである。

「それゆゑ、父を御見のがしなさツていたゞくと云ふ重大な御恩に對して、何か又別に、わたくしが私だけの志しで御禮をする處が無ければなりませんでしやう。さ、その御禮です、アヒナルドオさまたちの御命があやふいといふ事を思ひ……思ひ……思ひ切ツて」。と、力を入れて、「今とう〳〵御打ち明け申しましたのは。誓

ツてゞございますよ、これは。決して嘘いつはりではございませんの、これは。アヒナルドオさんに政府から附けて置く探偵は一ととほりではございませんの。それは御承知でゞもございましやう。けれども、程無くアヒナルドオさんが逮捕されやうともまだ〳〵あなたはじめ……でございましやう、まだ御承知が無くて」。

「有りませんとも、それは全く。われ〳〵の方でも味方は味方をのみ見るです。おどろきましたな、實に。おどろくに付け、何處まで御行き屆きになるかわからぬ貴女の御取りはからひ、それについて私は只感謝のほか有りません。感謝、しかし何で御禮をすることもならず、只この上はいよ〳〵誓ツて、親御さまだけの御安全をはかるやう、それだけをでも切めては切めて……」

「さ、何よりそれが私どもには有り難いのでございますよ。何と云ひましても、父は父、わたくしには親……」

と、まで云ひかけて、はたと默ツた。

見る〳〵ドロレスは咽せた。

「おや！　これは、令孃。何ゆゑ、さう……何もわたくしの申した事が別に……」

「そのやうな事ではございませんの。今さら御恥かしいわたくしの身の上がつく〴〵思ひしみられまして。いえ、ね、父とは云ひながら私の父は、それは〳〵この國の人を隨分虐待もいたしましたもの。それだけの怨みのかゝるのは當然ですとも。他人ならば私とて何で父の味方に爲りましやうか。只、只、親子の間がら、人間の道理を是非なく、どうかすれば曲げてもして……そこには何を云ひましても親子の情愛、どうか助ける丈は父を助けたいと思ひまして。さ、それは些し無理……では無くなか〳〵の無理……その無理なのを枉げて御ゆるし下さツて、通行自由の鑑札をさへ下さツて……」と、その後は又絕えた。

ピラアルも何となく涙になる。

「いよ〳〵承はれば承るだけ敬服に堪へられん丈の純潔な御精神、眞、眞實このピラアルあなたをば仰ぎます。

人間以上の方として」。
「わたくしは只氣になります」。
「何がです」。
「さほどまで島の人が目がけた私の父をあなたの獨斷で御逃がしに爲ツて、それでその委細がアヒナルドオさんに知られませんといふ事は、ね、無いでございましやう」。
「知れますとも」さも斷乎として。
「で、御迷惑は？」
「わたくしのですか。もし私がそのため迷惑を受けたならばですか」。
「はい」で
「更に〳〵厭ひません」。又きツぱり。
ドロレスの目はすわツた。
「どう御迷惑なさツても？」
「義のために受ける迷惑ならば、その迷惑は名譽です」。
ドロレスの目は又うるんだ。
「そこまで貴君は御決心くださツて？」
「おしとほしたいと思ひます、人間で」。
ドロレスやゝ蒼ざめた。
「では私をあはれと思しめして下さツて？　親子の情を御思ひやツて下ツて、そこまでの御決心に？」
「いゝや、決して！」
ドロレスはぎよツとした。
「私をあはれと思しめして下さいませんのですか」。
むしろ詰め寄る語氣。
「其處まではまだ〳〵です」。
「まだ？」
「ですよ、令孃。この度、只今、親御さんを見逃がすのは親御さんを御可哀さうと思ツたのでもなし、かと云ツて、令孃、あなたを悦ばせやうと思ツたのでもなし、あなたを悦ばせて一滴の感謝の淚をあなたから賜はらうと思ツたのでもなし、只、これ、受けたのに對する相當

の報酬、只そのためにです」。

蒼かツたドロレスの顔はみる／＼紅熱した。

「では、あなたは私を愛する、と云ふ御心の有ツたゝめでは無く、只道理に對して道理を用ゐて、それで？」

「いツかにも」。

「今の私が他の人であツても一切の境遇が今の私とおなじならば、やはり私と同じやうに貴君は爲さいますので、それならば？」

「いツかにも」。

「ちツ！」

ドロレスは咽び入ツた。

「女です、くどうはございましやうが、さ、ピラアルさん、くどく又御聞き申します。さやうならば貴君は私を可愛いと思ツたゝめ、さう御深切にして下さるのではありませんのですか」。

「さやうです」。

「いえツ？」

「あなたを可愛いと思ツて、さうしたのではありません」。

「では憎い？」

「では有りません。今はあなたを可愛いも、憎いもなく、只道理の尺に道理のペンを宛てたのです」。

「それでは、是までは？」

すはや凄まじい問ひ！　それに答へるつらさ、切無さ！

ピラアル身はふるへた。

無理に冷やして氷りとさせた水をばそれへの答へと共に還元させなければならぬ。生けみ殺しみはすべての意味において不仁であるが、その、不仁を今は是非なく行はなければならぬのか。いつはりをさへ云へば何でもない。いつはりを云ツて一時の不仁を避けるか。いつはりを云はず不仁を行ふか。倫理！　道德！　この窮境をどう解くか！

しかし、いつはりは云へぬ。あなたを元から愛したのでない、と、もし云へば夫はいつはりである。死ぬまで

戀ひこがれてさへ居たのが實であるものを。

さらば、いつはりで無くて眞實を云はうか。それ將一種の不仁ならぬか？？？ 倫理！ 道德！ この窮境をどう解くか。

しかし、いよ〳〵決心した、詐りは言はぬと決心した。

「ピラアルは今死ぬやうな苦しみです。が、令孃、その苦しみを冒して云ひます。いツにても私は……」

ちり〳〵とドロレスの手を取りしめた。

「あなたを戀ひ、こがれ、したツて居ました」。

と、まで、は云ツた。その後の語はどうしても出ぬ。

ドロレスの顏は眞紅！ また涙も沸く。

眞紅をかくすとてか、涙を見せまいとてか、さらば何れか、顏を兩手に埋めてしまツた。

ピラアル息もせわしい。

「御覽でしたろツ、あなたの御寫眞……」

ドロレスびくともせぬ。

「あなたの御寫眞——紙入れの中にあツた、その……」

ドロレスびくともせぬ。

「御寫眞、裏に詩の書いてある……」

ドロレスの身はがた〳〵ぶるひした、そこで始めて。

「え、もし、御覽でしたろ」。

ドロレスは答へた。只何とか答へた。何とか答へたやうにピラアルには聞こえた。が、その意味のわかるまでには聞こえなかツた。

只見るドロレスの俯向き切ツた顏。

只見るドロレスの眞紅になりまさる顏。

何ものか銜きのぼるやうにピラアルの胸は躍ツた。われながらむしろ呆れる、出す聲も低く低い。

「むしろ殘酷です、御覽でしたらうと伺ふのは。でなくても私の胸ぐるしさを更にまた言葉を重ねてあなたにまで強ひ加へるには及びません。さ、伺ひますまい、もう。只私だけの事を申します。令孃ドロレスさん！」

その名の呼び聲は氣味わるく凄かツた。

「ピラアルも最期に、あるひは、近いでしやう。日な

らずして誅戮となる、さすれば此身はいづれ銃丸の目的でしやう。で、最後の言として心の中の掃除をします。令嬢、いかにも私はあなたを戀ひしたひました。事の元は何かと云へば、私の叔父ガスパアグ、それです」。

きツとドロレスは面をもたげた。

「叔父ガスパアグは一徹者で政府の吏員に賄賂を行ひませんでしたらう。また教徒に冥加金を奉納しませんでしたらう。で、商業に失敗して、自暴になり、人のさま／＼戒めるのをも、聞かず、西班牙政府公認の富籤を買ツたでしやう。人の惰弱を奨勵する博奕制度、富籤その他を公認する政府が何處に在りましやう――です、西班牙を除いては。政府は人をして怠惰にならせ、遊蕩こならせ、一定の産業もなくて一時の僥倖を空想させる魂のやうなぶら／＼したものに係らせるため、すなはち人民を愚にするため富籤を公認したのでしやう。さもなくても熱帶地方に惰民の多いのは眞の事實であるところを、更にこれら僥倖を空想させる――のを、奨勵する、人間の弱點が強力の掩護に發達し／＼て、つひに甲も身代かぎりする乙も逃亡する、たま／＼中ツたものは不時の大金に眩惑して、かならず無意味の酒色につかひはたしてしまふ、歸する所は人民一統の困厄でしやう、疲弊でしやう。で、罪惡はます／＼殖える。すなはち刑は酷になる。同時に税は重くなる。人民は五分切りにして油鍋で炒られるのです。

「叔父ガスパアグも油鍋に入ツた一人でした、で、炒られた一人でした。富籤で財産は烟、引きつゞくのは自暴酒、酒氣が生む喧嘩、喧嘩が流させる血――結句、殺人――すなはち遂に入牢の身……」

云ひさして涙聲にもなツた。

「ところで賭博ならば放免される。しかし、もう無財産の身でしやう。金の目方だけの重みの責め苦は受けるのでしやう。誰から？

「西班牙の官吏から！

「足を縛ツて倒さに井戸の上に吊るされもしました。

誰に？ 西班牙の官吏に。
「撻を口へ充されて、半日猿轡を掛けられました。誰に？ 西班牙の官吏に。
「眷族も糺問されました。私もその一人として糺問されました。誰に？ 西班牙の官吏に。
「で、結局はどうでした。叔父は牢死の悲命です。實に責めころされたのでしやう。
「その時に只一人、たゞあなた――ドロレスさん、決して御世辭ではありません――あなた只一人があなたの親御さんレムウダさんを御いさめでしたろ」。
ドロレス顏の色を變へた。
「あら、ま、御存じ、そんな事を？」
「博愛の御精神はその通すべきところに必ず通ぜずには終りません」。
「ですが、どうして」。
「忍んでゞす」。
ドロレスは目を見張ツたまゝいかにも不會得の顏つきであツた。
「忍んでゞす、あなたの御邸へ。御おぼえが有りましやう、棕櫚の花の香の、雨を帶びて腥くかをる曇り空の如法闇夜、御邸の犬がはげしく吠えて、御家内中さわぎ出し、賊でも居はせぬかと御庭中御さがしになツた事が有りましたでしやう」。
「あら、本當！」
「でしよ、本當」。
「本當、本當、そんなら其とき……」
「その賊といふのは私でした」。
「あの、あなたが……」
「ですよ、捜されたその賊、犬に吠えられた忍びの者で」。
「まあ……どうも」。力を入れて、そのくせ長く〳〵ドロレスは調子を引き落とした。
「忍び入ツて御窓の下であなた方の御はなしを伺ひましたので。さあ、ドロレスさん、何とその時あなたは親

御さんに仰せられました」。

「あら、ま……あら、どうも」。

ドロレスたしかに答へるべき力は既に〳〵萎えさせられて居る。

「いよ〳〵御思ひ出しでしやう」。

薄さみしくにたりと笑ツてピラアルは相手の手をじイわりと握りしめた。

ドロレスの身は只々ふるへる。

「何ゆゑ私が不正當な手段、すなはち他人の權利内に忍び入るなどゝいふ、むしろ耻づべき事をしたのでしやう、それは外でもありません、御邸に叔父が禁錮されて居ると聞いた故です」。

「いゝえ、決して……」

「でした、それは。それは僞りの噓でした。が、とにかく私は欺かれて、さう信じたのです。よし、尋常の手段で叔父をば救へぬ。さらば夜陰に乘じて、ぬすみ出せ。と、一圖に思ひ込みました。で、短銃をふところにしてとう〳〵御邸へは忍び入ツた、が、一切は徒勞なのでしやう。叔父は居ないと知れました。制し得ぬほどの無念心外、しかしどうすることも僞らずそれながら心がゝりでもあり、忍びに忍んで遂にあなた方の御出でなさる室の、その窓外に行りました。

「聞けば中ではなし聲。運よく窓の下半分が開けはらツてあツたゝめ、その聲はよく聞こえました。ガスパアグといふ聲もする。すはやと轟く胸、引き立てる耳。で何事が聞こえましたらう」。

ドロレスは目を見張ツた。

「御氣にさはるか知りませんが、私は有りのまゝを申します。で、聞けば親御さんはどうしてもガスパアグを牢死させてしまはうと御主張なさるのです。何といふ人でしたか、何でも親御さんの下に付く官吏と思はれる人がむしろ親御さんを煽動するのです。でしやう」。

ドロレスは涙を拭く。

「ところでゞす、あなたがです、その場に御出でゞあ

ツたあなたがです、その處へ口を御さしはさみでしたらう。十分の御論議でしたらう。罪不相應の刑の適用は道理にそむく、それほどの罪惡は他に無いと鋭く御論なさいましたでしやう。親御さんもその官吏も一向聞き入れず獸類には獸類相當の刑を用ゐなければ懲戒の目的は遂げられぬ、開明人に加へるとほりの寛大な刑罰は決して野蠻人に苦痛を與へぬとの議論を根據とし、西班牙人は歐洲の開明人、フヒリツピン人は東洋の野蠻人と井戸の蛙の獨斷をはじめから下して掛かツて、それ故西班牙人に加へる寛大な刑罰をフヒリツピン人に加へたとても益は無し、それよりも野蠻人相當、即ち獸類にほとんど近いところの野蠻人、相當……」

突如、ピラアル語は切れる。はら／＼とはふり落ちる悲憤の涙。

拳をかためて腕を叩いた。

「すなはち島民には獸類の刑罰を加へよと、さ、誰が――誰でも無い――親御さまはじめその官吏も異口同音でしやう」。

ドロレス又も涙をぬぐふ。

「文明と誇り、開化と稱しながら人種によツて偏頗をおこなひ、愛憎をことにするのが白人とか自稱するものども、乃至歐米人とか名のる輩の一般でしやう。例は遠くを見るまでもなし、近くは北の日本帝國、その開化はあれ程の程度まで發達して居るにも拘はらず、その文武の進歩はあれほどの處まで進歩して居るにも拘はらず、黄色人種たる故をもツて歐米人には異種類の動物、野獸よりは些しは優ツた位に思はれて居るのではありませんか。歐米の大陸に、むやみにエルロオ・ペリル(黄色患)をとなへて、つまり弱い犬が大犬を只吠えるものと同一な態度を――ですよ、紳士として――取ツて、滔々たる俗意をむかへ、更に一歩を進めては卑怯きはまる移民の規則の鐵輪をつくツて、かれら日本人を排斥しやうと全力を盡くすのさへ有りましやう。戰爭に克ツたといふ餘勢の有る日本帝國でさへさうです。われ／＼は其無念を

忍ぶ日本人に同情を實に表する、が、われ／＼の頭の蠅さへ逐へもせぬ內、いたづらに他のために發憤したとて何にもなりません。只、それゆゑ、多分は日本人の中にもわれ／＼の境遇を同じく憐れんでくれるものが有るであらうと、只、心ぼそくも、只、せめてもと心に信じてわれ／＼の愍れむべき境遇をば彼等の――もし有らば――一滴同情の涙をもツての推察に只まかせやうと思ひます。

「ドロレスさん、つひ言葉が横へそれました。それら委細を忍んで聞く私の無念腕はうなる、目は眩む、短銃を持ツた手が疼きに疼いて、見よや叔父をば奪ひもどしてくれるぞ、と、さ、立ちなほりました、足もやゝ。

「待て、しばし、奪へるか奪へぬか不確である。

「成功は不確で、危險は確である。確なるべき危險を冒して、不確なるべき成功を萬一に希ひ、もしあやまつとしたらばどうか。

「是が揣るわたくしを引きとゞめた無形の綱でした。

それは卑怯か、何か知らぬ。卑怯にもせよ、何にもせよ尚大きい任務の有る私の、この身である――やがて政府に叛旗をひるがへして人民を非自由、暴虐、壓制の境遇から救はうとする此身である――然り、われながら大事の身である。暴虐政府攻撃に盡瘁したラ・ソリダリダツド新聞、その新聞は島の志士が殆んど鮮血をしたゝらせ綴ツて、それをインキに代用して書いた、云はゞ火の燃え立つやうな紙、その紙を十歲の子供の時から何を目的として賣りあるいた自分このピラアルであるか。只一意島民をして壓制に對して如何に反撥すべきかを知らせたいとのみの子供心の一念、捕縛々々とひしめく警吏の目をすりぬけ、かいくゞツて賣ツたのでないか。それほどの一念、またそれ故、たツとい身體、今こゝで不たしかなるべき成功にのみ揣るは決して男子の所業でない。

「と、それは頗る無理、その無理の下に無理に心をおしつけて、暴虎馮河の輕擧をつゝしみ、さ、息を殺し／＼て聞く聲を呑んで泣く……

「豈おもはんや、その時のあなた、ドロレスといふ令嬢、そのドロレスといふ令嬢が嚴の嚴、沈痛の沈痛、親御さんとその官吏を相手にさかんに抗辯なさるのです。

「聲、その聲は實にわたくしの耳には神女のです。外では伏をがむばかり、情は迫る、きはまる、はねかへる。ほどばしる不可言不可說の涙！」

ひしげるほどピラアルはドロレスの手をしめた。その眸子は眞にすわツた。

ドロレスは只總毛立ツた。

「令嬢、そのときにあなたが抗辯の委細は今他人に向かツて云ふ場合ひでなし、あへてこゝに繰りかへしますまい。まこと、至誠は何をでもつらぬく。親御さんが遂に屈服、ガスパアグは放免、とまで。

「不幸、ガスパアグは責めくるしみで死にました。折角のあなたの御心づくしも殆んど空には爲りました。爲りました。それはガスパアグの肉體の生命に對しては。その靈魂の生命に對しては徵塵も空には爲らなかツた、それをば確かに此わたくしが只無言のうちに押しつゝんだ千、萬滴の涙でもツて、つゝしんで受け、いたゞき感佩して、爾來肝に銘じて居ります。

「その後、一日と過ぎ、一月と立ち、その立ち過ぎる丈何とは無し、只、只、只敬愛の至りに堪へられぬ情があへて、實に、あなたに對してもよほしました」。

溜め息と共に顏あからむ。其聲も微動した。

ドロレスは？

耳から頸までまるで紅い。

「敬愛の、敬愛の情、天女聖母としか見えぬあなた、情か感か殖ゑかさみ行くに從ツて、敬愛は一變して火ならば燃える、水ならば沸く、只の愛慕となりました、されば實に無殘にも。

「敢て私は無殘と云ひます。その人の父はわれ／＼の仇、國民の敵、その仇たる敵たるものゝ子たるあなたをその、其仇をやがては秋水一閃の影と共に無きものにして了ふべきわれ／＼のその一人の、この『わたくし』が

目にくらむまで愛慕しはじめたとは！

「人をいぢめ殺すのがそも〳〵戀愛の目的か。戀ひはわたくしには美味の死毒でした。死むべきものか、それを嘗めて。死ぬべからざるものか、それを嘗めずに。嘗めず、只死にたい、とまでの無理を希ひました。

「思ひあまツて、あなたが御寫しになツた寫眞屋をさがし當て、種板をさがし出させ、苦痛の裡に御寫眞を買ひ取りました。

「なぜ苦痛？　苦痛でしたとも。

「御寫眞を買ツたのが生きたあなたを斷然思ひ切る、その仕切りの付け所でした。生きたその人は此世に在るにも拘らず、物も云はぬ畫像をことさらそれと思ひなす、即ち死にわかれよりつらい生きわかれ、いや〳〵〳〵、只の生きわかれより猶々つらい生きわかれでしやう」。

ドロレスは聲を放ツた。

聲を放ツて泣きたふれた。何處へ？　無殘、何處までの？　ピラアルの膝のうへに！

突きのけた。

ピラアルは突きのけた。わが膝へ泣きたふれたドロレスをピラアルは突きのけた。

ドロレスの身は動いて動かぬ！

ドロレスの身は突かれてしなやかに搖れた。しかし、ゆれもどツて吸ひ付くやうになツた。容易には動かぬ。搖れはする、動いては行かぬ。

咄嗟、ピラアルは身を退る。ドロレスの身は膝の上にたふれた儘の形ちで蓙の上に打ちたふれた。

いぢるるしくその肩に見える一高一低、あはれ、咽せかへり、堰きあげて居る。

「殘酷！　令孃！」ピラアルは絶叫した。「溫の愛は人を慰める。熱の愛は人を殺す。あなたは私を御ころしですかツ」。

「わかりませんよ、そんな事」。

「未練を私に殖ゑさせますか」。

「私をどこまで御泣かせなさるか」。

「なぜ無慈悲にしては下さらん……」

「あなたこそ〳〵」。

「ちゝえツ！」

力を入れて突きはなした。

二回ほどドロレス毬ところげた。飛びすさツて早ピラアルは四五間はなれた。

「済みません、令、令嬢。どうか。怨んで、にン憎んで」。

「うらみます、よろこんで」。

ピラアルは両手を顔。

「ちかひます、ピヲアルさん、一切の御秘密はドロレスきツと守ります！」。

「又ツ、私をさう泣かせて……」

「どうぞ、もし」。

同時、ドロレス手を合はせた、——

「かげながら御無難で御勝利を……」

ピラアルは歯をくひしばツた。

「さ、あなた、御目的の遂げるまでドロレスきツと生きてます」。

「えツ」。

「生きてます、きツと〳〵」。

跳ねられたかの如くピラアルは駈け出した。見る間数十歩ドロレスから遠ざかる。

しかし、足をとめずには居られなかツた。ふりむかずに居られなかツた。後ろにあたツて一聲高いドロレスの泣き聲！

見れば手を合はせて涙と共にふし拜んで居る。

＊　＊　＊　＊　＊

その伏しをがみは千萬の感謝でか、億百の美禱でか、それとも双方を共に交ぜてか。

野の何處にか野牛の聲、

野牛その聲は牡を呼ぶ牝のであツた。と、ピラアルは心付く、同時胸はまたざわ立ツた。不圖心づけば身は汗

一杯、顏さへ水を浴びたやうであツた。何の氣なしに拭ふ氣になる。いつ持ツたか、手にはハンケチが――有る、よし拭けとばかり、只また何氣なく汗をかい拭ツて、そこで始めて心付けば、おや、これは、柔かい、絹である。持ツた覺えは無い絹ハンケチ、しかも桃色の艶きあまるもの、ビラアルはぞツとした。

「こら、どうしたのだろ、此ハンケチ！　あツ、おや持ツて來たのか、ドロレス孃のを」。

あわたゞしく兩手にそれを擴げて見れば、果然、いかにも孃のであツた。

何よりも目につく縫ひ取りになツた文字、水淺黄の色絲でドロレスと隅の方に。

ハンケチの中央には宛も持ち主その人の、品位滿々たる面影を見せるやうな、純潔さも雪を欺くやうな白百合の花が二輪、絹で浮き縫ひにしてあツた。

すはや偶然の推察どほり戀ひ人の物であツたかと、ほとんど愕然として思ひたしかめると共に、われながら扨いかなるはずみに其ハンケチを持ツて來たかは何うしても分からぬ。

「いつ、どうして是を取ツたかな。まるで／＼覺えが無い。わが手にまで確と取ツた、持ツた、それであツて今が今まで氣が付かなかツたとは何うだらう。喪心もよツぽどだ。それ、それほどの喪心者に此乃公(おれ)が、ても、爲ツた、爲り切ツた？」

しばらくは溜め息ばかりで、取りまとめた思慮も無かツた。が、その取りまとまらぬ間にもいくらか些しは思ひ出す所も有ツた。

「なるほど、ドロレスは手にこれを持ツて居た。二三度これで口元を拭いても居た。思ひ出す／＼、今いきかへツて目に見える、その口元を拭いて居た樣子のうつくしさを。あの艶々しい顏色、あの水色の襟元、そこへ取り合はせての桃色の此ハンケチ、で、たしかに口元を拭いて居た。どうしてかな、それを此おれの手に。いや、思ひ出す／＼、うム、それ、それ、おれの膝の上に身を

なげ掛けた時、つと己が突き放す時、放すか放されぬかの刹那にその手をおれが取りにぎッた。にぎるより放すが早い。放す——つき放すが早い。ハンケチだけが手に殘ッた——手、おれの手に。で、それだ、それが是。その時——さう〳〵いよ〳〵思ひ出す——ハンケチが己の手に殘ッたと己はたしかに知ッて居た。どちらか、返さうとさへ思ッた。思ッたが、しかし——まッたくそれがしかしであッた。しかし惜しい。かへすのが惜しい、いや返すのは惜しい。ハンケチとしては惜しくもない。その人のとしては實に惜しい。戀ひ人のとして離れともない。で、その儘。

「あゝ寫眞にさへ精血の色をその儘にして意中を寄せた。鏡花水月のほんの寫眞をさへまざ〳〵その人として見てこがれた。ましてやその人の手に持たれたハンケチその人の肌に觸れたハンケチ、さ、何として返せる。未練、云ふまでも無い大々未練、妄想、たとへやうもない迷々妄想、が、旣にその未練妄想の犬となりはてた此身であッた、さうだ、さういふ身であッたものを」。

ピラアルは我と我を庇護するかの如くかき口説いた。ひろげた上に、また透かして見たまゝ、さらに奇麗に疊んで見たり、やがては徐ろに唇におしあてゝ見たり、果てはひッしと手の内に握りしめた。

もと來た方をふりかへッた。

「ゆるしてください、令孃、あなたの御承諾も無いのに、故意でないとは云ひながら、とにかくあなたの所有の品を取り去ッて來て、そのまゝ此處で御かへしも致さぬのを。偶然のやうに手に入ッた此ハンケチを非常に意味の有るものと私は認めて、今後これをも肌身にします……」

目の底にあり〳〵浮かぶドロレスの面影、あら嬌羞を含んだやうな。

しばらくはうッとりと爲ッた。

何の聲もせぬ野原にドロレスの聲は聞こえる。何の花も無い野に白百合の色は見える。

いつか身は草の上に坐ツて居た。と、氣が付くと共に寒氣がした——のに、又、頭が惱ましく痛くなツた。何となく胸もさわぐ。

暮色もやうやく催した。

（三）

ドロレスと別かれたピラアルはその夜首領アヒナルドオの許において軍議を凝らす約束の有ツたのを知らぬでもなし、又忘れたのでもなかツたが、千に萬に疊みあがり、くづれ落ちる、さまぐ\の物思ひに胸をかき挘られて、あへて臨席する力もなかツた。いとしらしいドロレスの姿のみが目に浮かぶ、やさしげなドロレスの聲のみが耳に響く、その姿を目に復活させ、その聲を耳に再生させて居る内に時はいつか知らぬ間に立ツた、十一時の時計が鳴ツた。

「はツ、十一時！　さ、奇怪だな。もうか、もう十一時か。馬鹿、すゝみ過ぎて居る」。

口の内でかう呟いたが、又やゝ氣にもかゝツた。机の抽斗から懷中時計を取り出して——見て、はツとおどろいた。何さま、いかにも十一時！

「十一時！　本當にか。十一時！　こりや事だ！」

ピラアルはやうく\氣が付いたのであツた。すぐにも叛旗は揚げられかねぬ、この頃の切迫（せつぱ）の切迫、すはや臨席を怠ツてはならぬ。

身は椅子から彈かれあがツた。

「正十時からの集會なのを、何だ、一時間もおくれるとは、でも、さても、何うした事か。馬鹿、どうしたでは無い、原の夕がたの事を思ツて居たればこそ」。

あわたゞしく身仕度するにも室内を右へ左に無意味にせかせか歩きした。

戸口に何ものか音なふ聲。

「もし、ちよツと、ピラアル氏！」

引ツ立てる聞き耳、それながら一寸用心して、直とは答へず……

「御留守ぢやないンでしやう、ピラアル氏。あまり御遲いゆゑ御むかへに……」と外ではつゞけた。

何の用で誰それと外では名のらぬ。が聞きおぼえの有る、その聲はパテエナといふものであツた。

パテエナは同志の一人、では宜しいとピラアルも安堵した。

「パテエナ君か」。

「さやうです」。

「や、氣の毒な。さうか、御むかへか。押したまへ。戸はすぐ開く」。

パテエナは答へをかへさぬ。只、戸を押して半身をあらはして、ぎろりとピラアルを鋭く見た。

わざとらしい笑ひ聲、「いつも時を違へぬあたが今夜に限ツて非常に遲いと云ふので、一同心配しましてな」と、云ひ云ひ何故かぢろ／＼際立ツてピラアルを見た。

「うむ、つひ……」

「どうしたンです」。

「つい用事で……」

「用事？　重大の？　今夜の時間におくれるほど重大の？」

ひりゝとした否味の口上、ピラアルはやゝ勃然としたが、おのれに遲刻の失も有るので、さりげ無い體して、妙に附き穗無く默ツた。

その儘無言で外へ出る、と、さて、何の事か、尚五人の人が居た。

「何だ、君、パテエナ君、あれは」。

「やはり御むかへ」。

「わざ／＼僕をか。僕を、さうわざ／＼何人も／＼……」

「統領の命です」。

その語氣が妙に嚴であツた。ピラアルは何と無く迷宮に入ツたやう。

「統領？　アヒナルドオ君の命？　こんな多人數で僕を只むかへるために？」

「知りません、その譯は」。

またその語氣は嚴であツた。何やらピラアルには只奇怪である。が、どうしてどう奇怪であるか、それは我身にも分らぬ。

會議の場所までは六町ばかり有る。芭蕉の双方に生ひしげツた間を行くことゝて微月は有ツたがきはめて暗いその間一同無言であツた。

形容すれば、鬼氣人に迫るとでも云ふべきほどであツた。どうも、どうしても尋常の迎へではないらしい。とまで邪推か、ちよツと思ツたピラアルの疑念もやがては如何にもと思はれるに至ツた。

會議所、すなはち密謀の秘密室は一種奇妙な岩屋やうの所であツた。日本ならば鎌倉あたりにあまた有る岩の横穴、それと大低おなじやうな構へで、只その穴の入り口から奥に行くまでの通路が「乙」字形に屈折して居た。その屈折したところを突き當たツた奥の廣さは土窟とは云ひながら日本でいふ疊數にして十五六疊じきほどの大きさが有ツて、全體は穴の中でありながら、その奥の室の入り口は殊の外狹く、幅二尺高さわづかに四尺ほど、どうしても人一人づゝ出入りするより外出來ぬ。

その入り口には番士が居た。それは常から同じことであるが、氣のせいか、今夜は思ひのほかその番士の様子が薄氣味わるいやうに見えた、社(しや)にかまへて短銃(ぴすとる)をさへ持ツて居ツたので。

奇怪の感はとう／＼其處でピラアルをして進む足を止めさせた。

「パテエナ君、やはりいつものとほり構はず奥へ入ツてもいゝのか、え、このまゝ」。

とばかりでピラアルはぢツとパテエナを見た。

「えゝ、よろしいので」とパテエナは應じたが、しかし全で下を向いて云ツたのであツた。

心得てピラアルは入り口の幔幕を絞り開けた。で、きツと中を見る、見るその一目にそれと知れた、なるほど毎も寄る顏は中に揃ツて居る。

「おッ、諸君、遲刻で失禮」

何氣ない挨拶、かるく又會釋してつか／＼進み入ッたところで、一同は只目禮した。

誰も挨拶の語は出さぬ。それ將すでに奇怪である。奇怪と感ずると同時、さらにその奇怪の度を加へる事實さへ現れた。

首領アヒナルドオが、つと座を立つと見ると同時、直ちにピラアルの傍へ來た。

「ピラアル君」。

その聲は凛として、そしてさう云ッたばかりで姑らくは言葉を切ッた。

「失禮、遲刻しました。しかも意外な御むかへまで受けて……」と、ピラアルの語も苦々しい。ことさら斷るやう、きは立たせるやう「意外な御むかへ」とまで形容を加へて述べた。

迎へをよこさすともの事なのを、それ故むかへを受けて意外に感じたと云ふ胸の中をそのまゝ短句にこめて言ッた位を他の者が察知せずには居ぬ。果然、席上の一同は大かた不快の色を示した。

ピラアルもなほ不快になる。

「統領」とアヒナルドオを呼びかけて、「今わたくしを御呼びでしたな。御用はいかやうな」。その顏いろは詰め寄るらしく見えて來た。

「うむ、特別に君に對してゞす」。

アヒナルドオの言葉は是だけの短いものであッた。が一語一語が一々手いたい意味を含んだ。「うむ」との挨拶はいつものアヒナルドオに似ず、やゝ不遜であッた。「特別に」の一語は非常に曰く有りさうであッた。

ピラアルます／＼快くなくなッた。

「特別に?」と、ちとばかり冷笑をさへ浮かめて、「會議以外の事について特別にですか、この私について特別にですか」。

「もちろんです」。

アヒナルドオの此言葉の調子も判事の宣告の時のやう

に、只何と無く威を含んだ。

「ふうム、なるほど。御むかへはそれでわざ〳〵……」

「です」。

とばかりでアヒナルドオはピラアルの肩を叩いて、

「秘密に御はなしゝたい事が有ります。どうぞ私と共に奥の室へ……」

「秘密に？　はゝア、それ故『特別に』でしたな」。

「どうか、すぐ」。

アヒナルドオは先に立ツた。ピラアルは引きつゞく。

奥といふのはその、今までの秘密の又一つさきの奥、これは日本の疊數にして六疊ばかりの、きはめて狹くるしいものであツた。土窟には似げなく、入り口には胡桃の厚板の大戸がきツかりメまツたやうになツて居て、いかにも密談には持ツて來いであツた。

しかし導かれながらピラアルつや〳〵合點が行かぬ。いよいよ出でゝいよ〳〵奇怪な一味の擧動、その事情はいづれ込み入ツても居、深くもあらうをは察するが、さてそれ以上は何の察しやうもなく、すなはち疑惑と不快とは增すのみであツた。

やがて揃ツて二人はその室へと入る、すぐアヒナルドオは自身戸を閉ぢて、おや！　隱袋から鍵を取り出す、ぴんと一ひゞき、錠をばおろした。

ピラアルはツと思ツた。

疑念、加はるばかりの！

錠おろすや否やアヒナルドオは其鍵をからり音させて卓上に投げ出した。が、投げ出されて鍵の落ちた場所がさも氣に入らぬとの樣子で輕く一寸舌うちして、手を伸べてその鍵をピラアルの方へさし寄せた。

ピラアルはその意を得ぬ。

「念のため鍵をあづけて置きますよ、君」と、アヒナルドオは口を切ツた。

「ピラアル君、生命は第二、赤心が第一、その第一以上は吾々の年來渴望する自由の權、これら三つをあらかじめ私は云ひつらねて置いて、さて君に御はなししたい

事が有るのです」。

ピラアルは猶その意を得ぬ。

アヒナルドオはやゝしばらく息をやすめてゞも居る様子で、瞑目してゐた。

「ピラアル君、はなはだ御はなししにくい事を御咄ししなければならず、アヒナルドオは實に中心おもしろくありません。が、既に諸君から推されてこの度の運動の一大任務を托せられて居る以上は女々しい私情は切り捨てなければならず、すなはち只々冷やかきはまる口上であへて是から御たづねしますがな……」これだけで一寸言葉をやめた。

「なるほど。何事ですか知らん。よし何事にもせよ、統領の直接の御はなし、つゝしんで承ります」。椅子と共に身を進めた。

「實は君について奇怪な噂を耳にしました私に取ツて何もいたづらにさう深く君を疑ふつもりも有りません。が、その噂に相當な事實らしいところが有るやうに聞きなされて、それでそれを打ち消す丈の事が十分まだ無いといふ段になツて見、又云へば、その噂を信ずるより外無いのです。御たづねしますがな、どうぞ確かに答へてください、君はな、君は、御存じですかな……」と、ぢツとピラアルの顔を見て、

「ドロレスといふ婦人を」。

さて其事でか！

ピラアル胸はとゞろいた、さすがに流石。

さすが顔は紅らんだ。

「知ツてをります」。

「ふム、御存じ。

改めて伺ひますが、どのやうな御關係ですかな、君とその婦人とは——さ、立ち入ツた事ですが」。

「非常に深い關係です」。

アヒナルドオにはむしろ案外な返事であツた。

「深い？」と顔色もやゝ變はツて、「未來夫婦とでもならうとでも？……」

「と、心に期して居ました」。

「心、誰の」。

「わたくしの」。

「なアるほど！」

むしろアヒナルドオは跳ねはぢかれたやうであツた。

又しばらくは無言であツた。

「先方は？」

「ドロレスですか」。

「さやう」。

あらたまツてピラアルは屹とした。

「嬢、ドロレス嬢ですか。ドロレスは滿腔の實意をわたくしに捧げやうとして居ます」。

アヒナルドオは稍呆れた。それながら怒氣やゝ顔に燃えそめた。

「その實意に對して何か君はその人に報いてやるのですか」。

「當然の報酬は無論でしやう」。

「で、報いてやるのですか――報いてやツたのですか」。

「やりました」。

「やツた。何をです」。

「ドロレスの父の安全をです。ドロレスの父レムウダの殘殺を救ふ爲、出奔自由の保護を與へてやりました」。

「おもしろい事を云はれますな、君は」と、アヒナルドオの息はやゝはずんだ。

「如何なる地位に在る人の所爲として君はさういふ事を爲たのですか」。

「むしろピラアル一個人としてゞす」。

「むしろとは何ういふ譯です」。

「一個人たるわたくしの私有物たる紙入れを一個人のドロレスが返してくれた、それに對して、一私人の報酬としてゞす」。

「一私人の報酬とした丈でそれで公けとの關係に對して、相抵觸するところが有るか無いか御考へなさらんで

したか。一私人としてあなたがドロレスの父を逃がすといふ事は公けのわれ／＼一味の利益に抵觸するところが無いでしやうか」。

「あるひは、それは、有るかも知れません」。

「有るかも知れぬ、といふ、その危險、しかも重大な危險、それを冒してもあなた丈の一個人の爲すべきことを行へばそれでよろしいと云ふのですか」。

「よろしいと信じます」。

ピラアルその聲は烈しかツた。進める餘地もほとんど無いのに、さてさも進め／＼る樣子でわが椅子を二三度ゆすツた。

「承りましやう、その理由を」。

アヒナルドオも目は怒ツた。これも椅子をおし進めた。椅子をおし進めたのみでない――たちまち短銃を取り出した。隱袋からか。

ピラアルの顏の色……も、すこし變ツた。

「うけたまはる前に、ピラアル君、短銃にまづ口を利いてもらひましやう」。

「何です……と」。

「容赦いやしくもせぬ此短銃に」。

「何が……なツぜです」。

「ま、御受け取りなさい、あなたの手に」。

「受け取れと、わたくしに？」

いかにもピラアルは心得かねた。この場合ひに短銃はいづれわれ、こなた、自分、即ちピラアルの「生命」といふものに對して擬せられたものとしか思へぬ――のを何の事か、相手が却ツてこれを此方へわたさうとする！

「わたくしが是を受け取ツて、どうします」。

「わかりませんか」。

「わかりません」。

「アヒナルドオがピラアル君にまづ命をさし出した證據です」。

「なに故です」。

「明答を私に下さらんあなたの御決心ならば、御こた

への前にまづ射撃なさい」。
「誰をです」。
「私をです。此エミリオ・アヒナルドオをです」。
同時、アヒナルドオは胸を叩いた。
電撃を食ツたとでも云ふ心もち、ピラアルは胸さきがひやりとしたきりゝと痛んだ。
さすが返事が出ぬ。むしろ只縮む。むしろ只四肢は硬ばる。
石像そのまゝとなツた、只。
いつかアヒナルドオの目には露が宿ツて居る。
「明答もなさらない。また射撃も爲さらない。察しました、御胸中の煩悶を」。
更に調子は嚴になツた。「この上あへて君を追究しますまい。わたくし一人の胸に委細を葬ります。よし、委細これから御はなしします」。
はやアヒナルドオは落涙となツた。
「今日君がレムウダの娘のドロレスと、原の中でいろ〳〵の事をはなされた、それを一切わたくしは聞きました、前後ことゞ〳〵く始めから終りまで皆。すべて、殘さず、まツたく聞きました。
ピラアルの口元がわなゝいた。
「どうしてゞす」。
「聞くものが有ツてゞす。でなくて何で私の耳にそれが。それはとにかく、私が聞き知ツた事の違ふか違はぬかを一應云へば、君は思ひあたりなさるでしやう。紙入れを君は落としてドロレスに拾はれ、いかにも氣高いドロレスの心底に感じて、其父を見のがしてやる事にされた、でしよ、さうなのでしやう。
「察します、くるしいその時の御心中を。それゆゑ同情を私は君へ十分さゝげます。が、しかし、すこしは疑ひもしました君を。誰とその名をば指せませんが、同志の人の多數も皆君をうたがふのです。曰く、よし紙入れを返された報酬としても、人も有らうに第一血まつりにすべきレムウダを逃がすやうにするとは心得ぬ、と。中

には非常に激昂して、今夜君を歸りに於て要撃しやうとするらしいのも有るほどです。それが中々しづまらぬ。とにかく君の身の危險は間髪を容れずでもあり、すなはち上部は嚴を主としてことさら仰山な迎へのものをさし出した、それをば君の護衛にでした」。

ピラアル胸の中はざわ立ツた。

「護衛にあれらの人々を……わたくしの安全のためあれらの人々を……あゝ、さうとは察しませんでした。さうでしたか、なるほど、さうでしたか。しかし――」首をひねツた。

「何か御不審?」

「只すこし。それにしては迎への人々の擧動が――いや、パテエナ君の樣子がすこし奇怪でしたがな」。

「どう奇怪で」。

「護衛といふよりはむしろ護送と見えましたな、どこまでも冷やかでしたな」。

「その筈です」と、微笑して、「誰が眞意をパテエナに明かしましやうか……」

「誰がとはあなたがですか」。

「わたくしがです」。

「眞意を明かさぬと仰しやるのは?」

「とにかく君を捕縛せぬばかりにして連れて來るやうにと嚴重に云ひ付けたのです。それは已むを得ませんでしやう、衆議がほとんど同一樣に君をうたがふ事に於いて一致して居て、とてもたしかな證據の有る打ち消しの力でどうかするので無い以上は、よし私が君をおのれだけの信用から庇護してもその甲斐は迚も／＼無からうと思はれましたものを」。

「たしかな證據の有る打ち消しの力、なるほどそれをばあなたが御持ちにならなかツた? なるほど／＼」とピラアルは念押すやうに語をかさねた。

言ふだけは云ひ盡くした。生來アヒナルドオは口數のすくない男である。それだけ事實の論究說明が了ると共に、ほとんど附き穗無いばかりそのまゝ默然となツてし

まツた。

アヒナルドオのその默然はピラアルをしてさま〴〵思ひをめぐらせるには究竟であツた。とさまかうさま、箇單なやうな複雜なやうな考へが競ひ立ツてピラアルを取りおさへた。なるほど說明を聞いて見ればパテエナの擧動の不審なのも譯はわかツた。さてもいつドロレスとの咄しを聞かれたものか。他所ならばとにかく、殆ど他に人氣も無く、さしたる草むらなども無かツた野原での始末を、いかにして、又いかなる忍びの巧者に聞き取られたか。ほとんど聞き取られる丈の餘地は無いとしか思へぬ。が、聞き取られたればこそである。鬼神のやうに洞看して云はれるのも。しかし今はどうでもそれは可い。降ツてわいたやうな新らしい苦、勞さらばそれをばどう處理するか。

アヒナルドオは短銃まで投げ出して秘密を明し、同時に身に引き受けても、衆議の迷想を排してピラアルおのれを助けてくれるとの意味を示した。もとより度胸の有る人とはかねてから此方も思ツた。今、錯節に逢ツていよ〳〵その利器たるところも知れた。思へば、さても、これほど彼アヒナルドオはピラアル自分を見拔いてくれたか。思へば、さても、これほど彼アヒナルドオはピラアル自分を見拔くだけの明が有ツたか。

なるほど紙入れをドロレスに拾はれたところで、云はゞ敵人の片われとも見るべき彼ドロレスが普通ではない大度量で、ちかツてその紙入れの中に在ツた一切の物の神聖についてまるで秘密にしてくれるとの事で、無論その人品に對してこちらも十分の信用を置き、そしてその恩に對する報酬として、其父たるレムウダの命を助けてやる事にした、それはどう心に考へても、すこしも疚しいところは無い。

レムウダを逸した丈で獨立戰爭の計畫が一切頓挫するものならば、なるほどそれは、それを逃がす抔といふことは惡い。が、レムウダ一人を助けたゝめ戰爭の計畫は決して挫折せぬ。もとよりそれ丈の高をくゝツて逃がす

といふ丈の決心をしたのである。なるほどレムウダは憎からう、あまたの島民を是まで泣かせ切ツた、その怨みをかへしたいあまりに、それを逃がしたのを且惜しみ且いきどほる者が有るか知らぬが、それは野蠻に近い復讎の偏頗心である。さもなくても島民は野蠻人のやうに世界の各國に心得られた。獨立の義戰を起こす、と、名のりかけるならば名のりかける丈の事が有ツて、いはれ無い野蠻に近い、殘忍な事は怪我にもつゝしむべきである。

それともドロレスが言葉を食んで、おのれの承知した丈のことを逐一その父に打ち明けて、島民が事を擧げぬ前、すなはち斧を用ひぬ内に二葉を刈り盡くしてしまはうと志しでもするか。が、それは萬々無い。有る位ならば一切打ち明けはせぬ。後に心がはりでもするか。心がはりまでする必要は有るまい。よしや戰爭が起こツてもわが父は助かるとの保證をすでに得もしたものを、あへてその上、云はゞ、物數寄に他の祕密を強ひて暴露することもあるまい。

しかも此斷言をたしかめる事實も有る、すなはちドロレスの平素の心がけがそれで。

既にドロレスは富籤の犯罪者に十分の憐愍を有し、十分同情を動かして、そのため父と爭ツたことさへ有る、その事實はたしかにドロレスをして不法な惡意惡行に出でしめる事の無いとの證據になる。

ところで、こゝでアヒナルドオは自分ピラアルにも十分同情を表してくれた。委細をその胸一ツに葬ツてしまはうとさへ云ツた。で、しかし、その後である――その後、つまりピラアルその人をうたがひ、怪しみ、彈劾したそれら有志の諸人に對して、いかなる口實の下にピラアル宥免を報告するか。

ゆるしてくれる、有りがたいとばかり、只おのれ一人が免かれる丈で、他の人がいかほど迷惑するか、それには一向無頓着であるものならば、いかにもそれは利己一方としては宜しからう。いやしくも國のため義をさへ唱へやうとする、死んでも俠骨が香ばしいと云はれやうと

する身に取ツては、さう只、人はどうでも自分さへ好ければ、と、恣にのみはして居られぬ。

と思ひ、と考へるだけアヒナルドオの身の上、その迷惑はいかほどかと坐ろにピラアルは心をいためずには居られなかツた。何處までも義をば義でつらぬく、その間にはいかなる誤解をされやうと乃至いかなる盲目の惡評を受けやうとも、決して〳〵厭ふまいとの、ある種類の人によツては馬鹿と云はれる、一ツの固い決心がしツかりと付いて來た。伴なツては知遇に對する感謝の念、それもまた一方ならずもよほした。おのれはよく〳〵アヒナルドオに知られたのである。よし一の手段にもせよ、短銃をまでさし付けて、我から他人の權力の內に身を投じてあへて他人を死地から救はうとするアヒナルドオの大勇のほどしたがツて又大仁のほどを思へば、さほどまでの知己を得た身、そのうれしさ、はや言句の外となツた——外、それ以上をば只ある一つの物のみがあらはし示す、曰く、涙！　いはゆる感涙！

で、二人しばらく無言の比べ合ひであツたが、さすが最初にもどかしくなツたのはアヒナルドオの方であツた。

「それではなピラアル君、今御はなしゝたとほりの次第で、何も一切わかツたとして、潔くこゝで君に對する糺問、まづさうです糺問、を、終ることにしましやう。ついては改めての御わび、あるひは過言を呈したかも知れぬ、その邊の御容赦をばよろしくな」。

聲の一高一低、それさへも極はめてやさしかツた。それ、またピラアルの胸には浸みた。やゝすこしは涙になる。

「それは感謝に堪へません。が、しかし、私からは是非また伺はなければ爲らぬことが……」

「あはゝ。ですか」

何とも知れさうもない、のに、言葉なかばでぴツしり潰して、アヒナルドオは前に屈んだ。

「かまひませんとも、そんな事」。

「そんな事とて、まだ御承知では……」

「大抵はわかツて居ます。同志の諸君に對して、いかやうに君の處置を付けたと私が云ふであらうといふ事、それ御尋ねなさるのでしやう」。

中てられてピラアルは苦笑した。

「さ、それも氣に……」

「安心なさい、是でもエミリオ・アヒナルドオです」。

突如豹變、仰山にわが名を云ひ立てた。一寸思ふと尊大らしいアヒナルドオの一種のくせ、またそれだけ宛も立ちさうな萬丈の氣焔、云はゞ一時の屛息が決してあてにならぬ火山であツた。

「これでもエミリオ・アヒナルドオです。いたづらに他の盲從を傳染させられて、いつまでもダアクネス（黑暗）に目を封ぜられては居ません」。

ピラアルはよう〳〵その意を解せぬ。

「何とおツしやるのです」。

「ですからな御氣がかりならば云ひましやう――君に對するわたくしの今日の處置に對しては同志の人一般に對して、私は只私の無上權に口を利かせるのみの事、只これです」。

「無上權に口を利かせるとは？」

「專制的にです」。

ピラアルは目を見張ツた。

「それでは何の說明も何もなさらんので……」

「さうです」。

斷乎と云ひはなツたアヒナルドオ、その意氣さながら「斗牛を呑む」であツた。虹も立つか、吐くその氣焔に。いはゆる英雄の人を人ともせぬ流儀は、口を突いて迸ツた。

「專制的にです。なるほど報告だけは私も爲ましやうさ。斯う云ツて――『ピラアル君を糺問した。しかし、同志に背く事實は全く無かツた。アヒナルドオは諸君の信任を受ける主權者としてたしかにさう認めた。諸君もそれゆゑアヒナルドオの信任の結果をそのまゝ心に得られたがよろしい』と、只それだけです」。

時として木の葉の落ちたにも衆議に問ふかと思へば、時としては山がくづれてもひとりでその土を片付けるのが、すなはちいはゆる「不可端倪」がアヒナルドオの特質であツた。酷、壓制、武斷、およそ是等の言葉で此場合ひのアヒナルドオを或ひは評すれば評し得られもしやう。が、その評はどうであるにもせよ、事實は只有りのまゝの裸では然うであツた。

「なるほど」とは云ツたが、ピラアルは不安に堪へぬらしい。「諸君が只それだけで服せば、それは結構ですが、しかし容易ならぬ犯罪の有ツたものと一時は見もしまた或ひは尚まだ見ても居る私の事に對して只、おれが認めて不正は無いとした、いづれもそれ故一概にたゞさう思へ、と、斯うばかりでは誰も決して……」

「いゝや、聞きます。聞かなければ、さ、聞かせます」。

「理非をまるで説明せず？」

「そのやうな間だるい事をして居られる場合ひではないでしやうが。場合ひをよく／＼思はなければ。もし又一言咄嗟のわたくしの言葉をでも諸君が間だるこくその理由を聞くまでは認めぬ、聞きとめぬといふのならば、諸君がわたくしに寄せたといふその信用は何處にあります。創業と守成とは土臺がちがふ。創業はその直との裏に破壞を含むと思ツて見て、さ、――暴論といふならば云へ、です――神變の處置を取るべきです。天下が一定してならば、なるほど公儀にも輿論にも、それは、問ふ。かため拵らへるそれ迄は一意只自我のみです」。

アヒナルドオは拳を握ツた。なるほど毎もの一轍が始まツたとばかりでピラアルはやゝ朝にまかれた。

「議會を」と、アヒナルドオその聲は勵を加へた。「議會を蹂躙したナポレオンの意氣、それは批評家の口にかゝツたならば何とでも云はれましやうさ。かまふものですか、それが何に。その意氣は實は暴、あるひはそのための失敗も有らう、が、すべてその類の意氣は、すべて舊を破壞して新を創造するものゝ是非とも持たなければならぬのでしやう。何の何の失敗ぐらい、失敗を恐れて

あへてさう爲し得ぬのは、一言で評せる、怯人です。さアヒナルドオは名言と自負して〳〵かういふ事を云ひます、曰く『成功多者くは怯人である。不成功者多くは勇者である』。わたくしは窃かに此意氣を持たうとする、又やしなひたいと思ふ、それを批評家が種々の色目鏡で評すれば、それは色々に云ひましやう。かまはん、云ふ奴は、それこそ、云へです。ピラアル君！」

さし寄ツた、ピラアルの手を取ツた。

「それゆゑ、私は君を衆人の攻撃の內から是非とも救ひます――救ひます、君の身を只わたくしの背に負ツて。そして、さ、諸君が聞かぬ、承知せぬ、と、したならばどうしますか。どうするも無い、何でもない、君と共に仆れる丈、あはは、只それ丈です」。手をふツて肩を搖ツた。

「な、ピラアル君、おのれも燒ける氣でなければ火中の人は救へますまい。おのれも溺れる氣でなければ水中の人は助けられますまい。今の世界の一般はおのれを十分安全にして、さうして人を（もし救ふならば）救はふと云ふ、只それです。あるひは救へもしましやうさ。が眞の俠骨、眞の同情といふものは夫では迚も、まだ〳〵〳〵。こひねがはくば、無謀といひたいくらゐ、何人もアヒナルドオを無謀といひたまへ。無謀、その冷評をアヒナルドオは甘んじて、いや、よろこんで受けます。わかりましたか、ピラアル君」。

語の末になツて聲やゝふるへた。その筈、氣焔それほどの男が、おや、いかにも涙一杯になツて居た。

（四）

つひにはフヒリツピン群島は血戰の巷となツた。

今ピラアルだけの事を書き綴る場合ひ、われ〳〵は細かい事をば略して云はなければならぬ。

とにかくアヒナルドオは西班牙政府に對して獨立の旗をひるがへした。

誰だ獨立の旗をあげたのは、エリミオ・アヒナルドオ

といふ男だそうだ、と、ばかりその噂は電流より速かに全島につたはツて、日一日、今日もそこで相應ずるものが起こツた、明日もそこで郡衙を攻めたものが有ツたとの取り沙汰が波を打ツて聞こえ來り、また波を打ツて聞こえわたり、十日と立たぬ內、大抵のところは呼應を交換して連夜そこの山、かしこの峯に聲援呼應のしるしの火焰が天を焦すばかりに立ちのぼツた。

西班牙政府は震駭した。兵は出した。アヒナルドオをはじめとして諸所に蜂起した志士の手にいづれも微塵にやぶられた。

突然米國が双方の騷亂の渦中に飛び込んだ。結局米西の海戰となる、で、譯もなく米軍の勝利となツた。

陸上の攻擊、堡壘の掃蕩には島民が米國の好意に感奮して從事して、一心は終に西班牙の陸軍を支離滅裂ならしめた。米軍は實に島民を賛稱した。又島民に感謝した。陸上の諸種の動作に米軍は一々島民の助けを得た。助けを得た、あゝ、米軍は助けを得た、島民をその實自殺させるだけの助けを得た！

欺かれて島民は米軍に便利を給與して、いざと爲ツたと同時、手の裏をかへすばかりの米軍の態度の急變、前の笑顏は睨みに變へられて、飽くまで馬鹿にされ、蹂み付けにされ、それ見ろ智慧の不足で無駄骨を他のために折ツたか、米人は皆よろしく申しますてや、と、云はれた。

又、かうも云はれた。島民御前たちは蠻人である。人道の大義によツて開明なる米國はその獨立の基礎の完全になるまで御前たちを世話してやる。故に一切の主權を米國は持つぞ、これから。有りがたく思ツて、島民一同は米國の星の旗の下に跪け！

又かうも云はれた。島民はまだたしかに政府を建設し得る能が有るか無いか他で見れば安心ならぬ。島民は、云はゞ、身代をよく維持し得るかどうか分からぬ道樂息子である。米國は親の慈悲で、それゆゑ、世話をしてやるのよ。しツかりちやんとしたならば、一切の主權を返

してやる……まい……もの……でも……ない……
歸するところ一句で盡きる、——
島民は欺かれて犬骨折らせられ、用が濟んで鎖つなぎにされたのである。

思ふに基督教主義の、自由主義の、公明正大なる米國はこの所業を人道の正理と見るのであらう。島民はさぞ喜ぶであらう、始めて○○によツて「人道」の、おもしろい解釋を拜聽したのを。なるほど「石が流れて木の葉が沈む」のである、と。

島民の憤慨は只狂するとの一語で盡きた。如何にも野蠻人たる島民は天賦の人類の自由を冷淡に見過ぐほど宏量の開明人ではない。詩人として小說家として一管の筆を取ツて最初フヒリツピン群島の獨立思想を縱横に鼓舞し、つひに西班牙政府の毒々しい牙爪にかゝり、銃刑に處せられてしまツた、フヒリツピン島人リサアルは其自由思想を仰慕する點に於いて、常に英國の大詩人ジョン・ミルトンを愛慕して措かなかツた位の野蠻人であツた！

「野蠻人にはダムダム彈を用ゐろ」、すなはち「人間をば羽で、しかし馬をば丸太で打て」、すべて、「心を壓服するには先その體からして始めろ」、これが——少なく〳〵見つもツても——何ものかの主義である、自由の義戰をした華盛頓はどのやうな人であツたか、それは忘却した何者かの主張である。人種によツて待遇を殊にし異色の人間はほとんど人でないと……いや、もう云ふまい。

＊　＊　＊　＊

悲しいかな、島民は矢竹にはやツても武器彈藥の次第に盡きるのに惱まされた。そこで血の出るやうな金をこしらへ、ある人を使者とし。ある國へ渡らせ、援兵の請求かた〴〵、それら軍需品を買はせることにした。何ぞはからん、その金はこと〴〵く空に消えてしまツた。

どう消えたか、われ〳〵はそれを口にするのも不快である、とにかく、只消えてしまツた。一挺の鐵砲も、一函の彈藥も、義軍の手には入らなかツた。しかし、その

使者たる人が消費したのではない。

島民はやむを得ず、山賊風の戰爭するより外は無くなツた。森にひそみ、藪にかくれ、或ひは烟草畠を燒き、あるひは大雨の時期を利用し、手段の有らんかぎりを盡くして米軍をくるしめた。

しかし、將士は次第に戰死する、また米軍に降參するのも有る、何處かへ脫走するのも有る、遂に千八百九十九年十二月は情無くも、悲しくも全義軍の統領たるアヒナルドオがわづかばかりの手勢を率ゐてバグエツト地方から山深い方へと落ち退く時となツた。

それも且戰ひ、且退くのでもあツた。海岸には米軍の艦隊が居て米の陸軍の掩護作用をした。手勢は米軍の何分の一といふほどでもなし、一敗事あやまツたならば、せめてわづか殘ツた義軍の命はまるで斷えることゝなツた。

この圖を外すなとの米軍の意氣込みである。つひにはいよいよアヒナルドオは險阻きはまる山中へ追ひつめられてしまふ事となツた。なるほど後へは逃げられもしやう。米軍の方へは一歩も進めぬ。

斥候のもたらして來た報告を材料として軍議、溜め息まじりのやうな軍議が野營の內に開かれた結果、本人の望みを快く、且十分の感謝をもツて迎へて、アヒナルドオは殿となるべき任務をピラアル一人の上に托した。

それでも陣中に三鞭酒は有ツた、ことさらピラアルの望むまゝ、多くも無い瓶の口を拔いて、明日は別かれといふ前夜アヒナルドオはピラアルと、それを酌みかはした。

さすがピラアルも些しは醉ツた。つゝしんで居た口數もその醉ツたまゝ多くもなる。しかも溢れるばかりの胸中無限の感慨、洋盃を下に置いてピラアルは愁然とした。彼はもはやアヒナルドオを大統領と呼んで居る。

「大統領閣下、今晩は一度有ツて二度無いと思ふほど快く御酒をいたゞきました。で、これから三四時間、曉がたの四時となれば、わたくしは手兵を率ゐて御いとま

を願ひます。が、その御いとま乞ひ、それ、それをば、實に私は殆んど十中九までの生きわかれ、閣下と此世において對顔する、その、最終の時と考へます」。

アヒナルドオは只憮然。

「閣下、われ〳〵の先輩と仰ぐべき殉難者リサアル君は志士中の小説家として詩人として、絶えず無形の教訓をわれわれに賜はツた、それをば閣下も御承知でしやう。が、リサアル君が舊日本の一武人小山田高家といふ人の感ずべき事實を生前われ〳〵に咄してくれた事が有りましたが、それをば閣下は御承知ですか」。その調子から沈痛であツた。

アヒナルドオも憮然とした。

「聞きません、まだ知りません。小山田高家?」

「さうです、小山田高家です、リサアル君は常に旭日の國日本帝國のきらびやかな光りを仰いで、つひに日本歴史をまで究められたのは、それは、閣下も御承知でしやう」。

「いかにも、それは」。

「で、リサアル君はその小山田高家の事を喜んで咄しました。史詩を小説に作らうとさへ云ツて居られました。曰く、小山田高家の名は日本の史中には小さい。が、その心の清さたツときはさながら生きた神である。つまらぬ罪名を負はせられて、高家があはや殺されさうに爲ツたのを、たしかな、眞面目の同情をもツて一心それを救ツたものは新田義貞といふ、日本屈指の武將でした」。

「新田義貞とは?」

「日本屈指の武將でした。武將も武將、權力に乘じて事をするのを知り一たび權力が失墜となると共に膝を屈めて屈服してしまふやうな膓の無い男子ではなく、逆境に陥ツてもいやしくも屈服せぬ、大きな器量を持ツた人物でした」。

と、云ふ、その人の心の內に早くすでに、その理想的の人物が目前に見えるやうにもなる。敬愛する、わがアヒナルドオもそれらしい。尙またおのれピラアルもそれ

らしい、いや、それである。

と、思ふ、恍惚ともなる。

「で、その人がどうしました。その人がその小山田とか云ふ人を救ツたのでしたか。」

「さうです。救ツてやツて、それで日本武士の生命より大事なものを安全にしてやりました」。

「生命より大事なもの」。

「武人としての名譽をです」。

アヒナルドオは涙さしぐませた。

「小山田の事は御わかりになりましたな。閣下、その小山田は義貞に救はれたその恩義に報いて、いはゆる日本の名譽の花たる武士道を完うするための一念、ある時の戰ひ、義貞の身の危くなツた非常の時、こゝぞとばかり、みづから義貞に代はツて敵の大軍を引き受け、縱横に奮戰して、義貞の退却をつひに〳〵……」と、おろ〳〵と泣き出しもして、「安全ならしめて……」

たまらず遂に堰き上げた。

「おのれは遂に戰死です！」

いつか早ハンケチがアヒナルドウの双の眼を掩ツて居た。

二人暫時は只無言。

「閣下、アヒナルドオ將軍閣下、今日といふ今日は、ちツ、たしかに〳〵申します。ピラアルは……」

蹶るやうに椅子を離れて直立して、一拍(ひとう)ちはげしく卓を打ツて、

「あるひは小山田高家です。ピ……ピラアルは閣下に對して、あるひは小山田高家となりますかも――戰死するかも知れません」。

とばかりで、むしろ、睨めた、涙一杯の兩眼で。

「何……何を君、君は」。

「多分は死です、戰死です」。

「戰死？」

「ドロレス一件についての御恩、只それに對してゞ」。

「恩？」アヒナルドオは頷(うなづ)いた。

「ピラアルは面倒、云ひます、有り體、只、云ひます」と小刻みに急き込んだ。

「ドロレス一件、わたくしは諸君の疑團の第一となツて、命もあるひは危かツた、その時、只、閣下、あなたといふ知己の有ツたばかりで、ピラアルはピラアルはいはれない恥辱も受けず、只潔白でとほせました。あの時の閣下は暗夜の一燈、さ、ピラアル骨は光ります」。

我をわすれて手をさし伸べてピラアルはアヒナルドオの手を取ツて碎けるほど握り〳〵しめた。

「かざりも無いところで、この度來襲する米軍は兎にかくその數が數、なみ〳〵の手段では安全な閣下の退却それ或ひは實に難いかと――さ、こゝ、ピラアルが御恩に對して今や百年の末を捨てゝ、閣下のため義貞の高家となる、眞の時です。

「閣下、御とめくださるな、なまじひ未練がましく。この度いは必ず〳〵手ごはい敵、その敵を引き受けて、十分御危險無からしめるに不肖、さ、廣言！　只このピラアル一人です。人間のピラアルではなく、今から早身は半ば死んで居る、すなはち必死の勇のかぎりを出す一妖魔、血と硝煙とを泣いてよろこぶ一魔神のピラアルです」。

既に血色から言葉からピラアルは一の熱狂者となツたとしか見えぬ。むしろアヒナルドオは氣を呑まれた。無い、かへす語も、はさむ言葉も。

「閣下、さてあまり諄くは私も云ひますまい。多辯は却ツて眞情を鑢で逆きおろしにします。云はぬ――のを只無言で御察しを……午前四時までには堡壘も出來るやう云ひ付けて置きました。防禦地點はカラバロ山の化物谷、千尺の絶壁に二千尺の谷九十六折りのうね〳〵路のそれも幅はわづか十五フヒイト、目に物を、米軍を、成らば、微塵に、ピラアルがです。石を打つ石は他の石をも碎くがおのれその石もあるひは碎ける。ピラアルは碎ける段においては其石たらんを心に期すると同時、また碎く段においてもその石たらんを心に期します。十を十

までほとんど保證しても云ひます、明日の御退却は誓ツてかならず御安全には爲ます。しかし御安全が得れたと共に、どうぞ思ひ出し、また思ひやり、また思ひたしかめて下さい、曰く、ピラアルは戰死したのである、と」。

彼ピラアルは最早泣きもせぬ。燃える情火に乾かされて、涙その形迹も無い。

アヒナルドオは？　横を向いて瞑目した。なまじひ口をば利かぬ。實は出すべき語が無いのであツた。

※　※　※　※　※

あくる日は果たして劇戰、わづか四百の小勢をもツて米軍のメエヨア・マアチ氏の三千の兵にあたり、久しい間米軍をして一歩も進み入らしめず、十分アヒナルドオに逃走の餘裕をあたへのは實に青年二十三歳の義軍の一士官グレゴオリオ・デル・ピラアルであツた。

しかし、無情な銃丸はつひに此年少俠男兒の胸板を貫いてピラアルは屍となツた。

屍、これはどうなツて居たか。

あふむけに仆れて、胸板からしみ出す血を何ものでか押さへたまゝ死んで居た。血をおさへて居たその物は？

ドロレスの絹ハンケチ！

（をはり）

グレゴオリオ・ピラアルとドロレス・ホセエとの間は只前述べた丈で絶えたが、筆のついでゆゑ、書きしるして差しつかへ無い丈をドロレスの後談として書く。

さて可憐なるドロレスはその後どうしたらう。これが誰しも催す考へである。しかし、もとよりフヒリツピン群島に居る筈は無い。人の傳へるところによれば、今は西班牙に歸ツて居るとか。

ドロレスはその誠心で父レムウダはじめ一族の殺害される悲運を救ツた。ピラアルのさしづどほりにフヒリツピンを抜け出し、一旦香港に足をとゞめ、更に便船によツて無難に西班牙の故郷に歸着した。いかなる手段で貯へたにもせよ、とにかく父のレムウダは金財の中から首

を出す身の上で、西班牙に歸ッても中以上の生計は只やすく\と立てられ得る。ドロレスの配偶にならうとするものは數へ切れぬほど有ッた。が、思ふところ有ッて、ドロレスはつや/\それらには其耳をも貸さなかッた。

いじらしいまで、哀れなその娘氣の一心は、別かれても別かれてもピラアルを忘れなかッた。只フヒリツピンの空にのみあくがれる。あはれ、わが未來の良人、少年の武將グレゴオリオ・ピラアルが人にすぐれた、目ざましい功を擧げて、やがて共和政府の建ッたあかつきは、金色のひかり眩い勳章を胸に飾る姿となる、その時こそは此身われドロレスも更に、此所西班牙へ逃げて來た時とはまるで變はッた嬉しい心もちで、フヒリツピンへと歸るのである。片付いてくれ、はやく戰爭。獨立國となッてくれ、はやくフヒリツピン。

只このやうにのみ思ふ。戰況の詳細な新聞紙は西班牙には一枚も無い。それどころか、眞事實を報ずるものらしいのも無い。いろ/\尋ねて見たところで、佛蘭西で發刊するもののみが大分眞實を傳へてあるらしく、そして又手にも入りやすい。それから後は父の目を忍んでは佛蘭西の新聞雜誌その他すべての發刊を手に任せて讀んだ。ピラアルの名もちら/\見える。やがてアヒナルドオの運動が着々功を奏して米人がつひに島民を助けるに至ッたと分かッた。海戰に西班牙が敗北したとも知れたが。局面は一變して、恩を賣ッた米國の不德義はつひに島民と米國とのたゝかひになッたともわかッた。讀めば讀むほど、佛蘭西人が島民に同情を寄せて居るのもわかる。いかにもラ・フアイエツトといふ義人の出た國である、他人の自由に對して如何ばかり佛蘭西人が義俠の情火を燃え立たせるか、さても嬉しいたのもしいと思ふ、その發刊物もまた肌身に着けて居たくさへなる。その矢さきも矢さき、一佛人の筆に成ッた一文章、それが扨思ひもがけぬ、わが意中の人たるグレゴオリオ・ピラアルに付いて書いたもので、端無くも目に觸れた。Grjorio der Pilar と題した文字は射込むやうにドロレスの目に

とほツた。胸はとゞろく。顔は火になる。さて、讀めば——

「フヒリツピン少年士官の一人グレゴオリオ・デル・ピラアルと、自分と久しく一所に居たこともあツたが如何にも同人は勇猛おのづからの武人、まるで小說的の人物である。同人および同人の友人とわれ／＼との交際は決して短かくは無かツた、それだけ吾々はそれらの人物をよく知ると同時その死ぬまでも我國の自由のために戰はうとする凛然たる勇氣は實に光芒となツて人を衝くばかりに認められる。武人としては古羅馬の武人を今日に見る如く、宛然コルネイユの詩中の豪傑が現存して活動するやうである」。

ドロレスの胸はいとゞ轟いた、はじめからの大々賛評それが、しかし、餘所の人のことでは無く、嗚呼他人のことではなかツた。

さらに、又つゞけて讀めば——

「かれら比律賓の有志者が虐政に對して憤慨するありさまを、もし事情にうとい人に見せたならば、あるひは狂人かと見える。しかしそれは彼等が求めずして自然にさうなツたので、つく／＼わが佛國の大革命當時の志士も亦そのやうであツたのかと自分は坐ろにその時代の事をも思ひ出す。米人彼等を蠻人といふ。自分は決してさう認めぬ。只その或ひは狂人に近い態度をあらはす事も有る、それは精神の非常の憤慨からおのづから來たもの、もとより止むを得ぬ。

「此ピラアル氏についてはまたさながら小說のやうな艶話が有る。すなはち、同氏に一人の意中の人が有る。その名はわからぬ。が、いよ／＼戰場へ出るとなツて、ピラアル氏はその美少女に對する纒綿の情に堪へず、つひ／＼一死を決して訣別の辭をそれに述べやうとしたが、時を失して遂に逢ふことを得ず、長く同氏斷腸の種となツたとか」。

讀んでこゝに至ツて、ドロレスは顫かずには居られなかツた。顏の色もまた變はる。目にピラアルその人の姿も見える。

そも〳〵その所謂意中の人とは自分ドロレスであるか、それとも他の、自分の知らぬ美少女であるか、そこまでは確でないが、大抵心を虚しくして考へたところで、どうしても自分ドロレスであるらしく思はれる。かれピラアルが自分ドロレスを愛する、慕ふといふのは寫眞にしるしたその詩の句、原中で自分ドロレスに逢ツた時述べたその言葉、あらはしたその樣子、それらで一切たしかである。かれを此方で未來の夫と思ふと同じく、かれは此方を未來の妻と思ひ込んで居るらしい。らしいでは無い、居るである。

と思ふと、その文句がことの外心にかゝツた。「訣別の辭をそれに述べやうとしたが、時を失して遂に逢ふことを得ず、長く同氏斷腸の種となツたとか」、さりとては〳〵讀めば讀むほど盡きぬ恨みの沸く上にもまた沸くやうな文。あるひは悲しいことの辻占になりはせぬかとなるほど自分ながら愚痴か妄想とも思ふものゝまにそのやうにのみ只思ひなされる文、胸がつかへる心もちになツた。

あはれ此辻うらがなるほどたしかに中たツたのであツたが、それと差し迫ツた便りを聞くまでは尙只頼みにならぬ事をたのみにして、むしろ強ひて心で成功の側をのみ見、吉事の方のみ思ふ、他から只これを評すれば、只いぢらしいと云ふのみであツた。

又つゞけて讀み行けば、書いてくれた佛人その人さへ坐ろにゆかしく思はれるのみの文、――

「ピラアル氏が國家の大事に當たツて一婦人に心をほとんど奪はれて居たのかとこれを冷笑の目で迎へる人がもし有ツたならば、その人は人間の、きはめて尊い人情といふもの、それを全く知らぬ殘忍な性質の人である。かれピラアル氏はなるほど、婦人に情が厚かツた、それだけ國家にも情は厚かツたのである。かれピラアル氏は、婦人の神聖、美麗、純潔、溫情を愛した。すなはち肉體以上の、眞の、高尚な愛を理解した。その愛はそれをその儘國家に向ければ、正に志士の愛

となる、仁者の愛となる、義人の愛となる、その美少女をさう深く思ツたとの事實はピラアル氏が國家に對する熱誠のいかにこまやかであるかを反映して示して餘り有る」。

ドロレスの目は既に涙で幾度かうるんだ。

「ピラアル氏は他の志士とおなじく、國家一般の人道のためたには身を殺して仁を爲すのみと覺悟して居る。仁義のために愛情を思ひ斷つ、世に此上の無殘は有るか。ピラアル氏のみか、かれら島民の志士一同は戰場へ出るとなツて皆遺言として斯く云ひ殘す。曰くわれ〳〵は博愛のために死ぬ。義侠のために死ぬ。人道のために死ぬ、自由のために死ぬ。さらば人間としての最大名譽ではないか。泣くな、それゆゑ、われ〳〵が死んでも妻子は。泣くどころか、祝ツてよろこべ、わが夫、もしくばわが父がさうして最大名譽を得たと。そして妻は夫の志しを子に繼がせろ。子は父と名譽の同列にならうと志せ。これを只ひとつの念、その念ならば何事も成る。忘れるな、妻子、この遺言を、この心を」。

しばらくドロレスはさめ〴〵と泣き入ツた。

それからその文は斯うまでも云ふ、――

「自由獨立の思想はこれほど深く比律賓島民の胸中に刻み込れてある。もし他の暴虐な、人道の惡魔たる政治家が妖魔を指揮して此島をつかみ取らうとするならば、自分は敢て云ふ、島の人類を全く絶滅してゞなければ決して出來ぬと。進んで問ふが、米人は果たして終にさう爲し得るか。よし、此問ひに答へやうとならば、只一の數字を見ればわかる。曰く『島民は一千萬人の多數である』と。嗚呼、一千萬人の生命そも〳〵米人は鏖殺(みなごろし)にしてしまふか、してしまふ氣か、さて、する事が出來るか、する事ができる氣か」。

文はこれで終ツた。その文からドロレスが心に受けた感動は文が終ると共に倍加の力で胸の中にむら立ツた。

あゝこれほどまで、誰……されば、誰でもない……この

わが意中の人は……今は名もいかめしくグレゴオリオ・デル・ピラアル將軍と呼びなされるその人は、これほど迄、佛國人に云はれるか、と、今さらのやうな、又元からさうと知ツて居たやうな、又まるでさうでも無いやうな、云ふに云はれぬ思ひになツた。

　ふと心付く、さても誰、佛蘭西の何といふ人が此うれしい文を書いてくれたのかとばかり、さりながら、それほど好意をもツてわが意中の人を稱揚してくれる、云はゞ恩人とも云ふべき人を、その名をも知らず、また知らうともせずに過ぐすのはむしろ罪ふかい事、濟まぬ仕業と思ひなされ、またさう思ひなされるその思ひにみづから己れを責められるかのやうにさへ思はれて、一時は逆上するまでになり、急に顔色まで變へて、その文の署名を見れば、Jean Hess とは記してあツて、そして、その文の記納された時を見ればその年(一千八百九十九年)の六月であツた。あゝ、ドロレスはまだ知らぬ。それからわづか半年の後、その、さほどまで佛人に稱揚されたピラアルその人があはれ果敢ない最後を遂げやうとも。

　只それから凡そ六ケ月間は、あはれ果敢無い運命をさながら賴みの有るやうなものに思ツて、ドロレスはむしろ心も勇んで居た。

　勇んで居た、しかり、やがて泣き死ぬまで泣かされるために勇んで居た。

　もとより只ではピラアル戰死の報を得やうもない。その報をドロレスが受けたのは、米人の發行に係る Manila Freedom (マニラ自由新聞)、その新聞紙に因ツてゞあツた。その文に斯う、——

　「デル・ピラアルはアヒナルドオを逃がしてのち手兵をもツて踏みとゞまり、メエジョア・マアチ氏の兵を食ひとめ、大膽に戰ツた。米軍が優勢であツたゝめ見る〳〵ピラアルの軍隊の旗色はわるくなツた。數へ切れぬほどその手兵の死傷、只散走するよりほか無く見えて來た、それにも屈せず、ピラアルの抵抗は頑強をきはめた。彼は全く聲を嗄らすまでになツて一刻一

刻立てつゞけの號令それで兵士をはげました。しかもその身は誰よりもさきに立ツて居る。やがて脚部に負傷した、その疵は重かツたが、醫療を受けやうともせぬ。其うち第二致命の彈を胸に受けた、もとより其場所は究所いかに勇猛でもたまらぬ。只即死であツた」。

「あルら！」とドロレスは絶叫した。

只茫となる。只紙の上を見つめる。只見つめたのであツた、讀むのでも何でもなかツた、しばらくは。その記事は猶下の如くにつゞけた。

「首領をうしなツた全軍は潰亂した。首領その人の死骸までも捨てゝ逃げた。ピラアルの引率した兵その總數は四百であツたが、命を全うして逃げたものは實に只八人であツたといふ、それだけの事實で戰ひのいかほど烈しかツたかは分かる。

「米兵はやがてピラアルの死骸を點檢した。見ればその手には美くしい絹ハンケチを持ち、それで胸の創口、生血のしたゝる處をおさへて居ツた……」

絹ハンケチとあツた丈でドロレスの胸は轟いた。

その記事はなほ下の如くに進んだ。

「其ハンケチの端に縫ひ取りでドロレスの字が……」

あらツとまた一聲、ドロレスは我知らずその新聞紙を手から離す。

さては其ハンケチ、自分ドロレスのであツたか。思ひあたる、いかにもピラアルがそれを持ツて居たかとは。さては扨、その末期までも、戰場の最後までも、その、あの、自分ドロレスのハンケチを、ても、ピラアルは持ツて居たか。

持ツて居たか、あゝ、持ツて居たか。持ツて居て、あゝ、末期まで持ツて居て、その致命の疵口を、あゝ、それで押さへてくれたか。

沸きかへる涙の急潮、しやくり上げ咽せかへツた。

その記事が有ると思へば、新聞紙それさへ懷かしい。只その紙をわが肌へと抱き占めて、そして只泣き倒れた。

（をはり）

はしがき

取締條例の威力が悉く工場に行きわたるか。警事を扱ふ所あたりの内情は如何ほどの豫想外に在るものか。心得を示經して、向後資本主と勞働者との衝突が必らず避けられるか。そこらに感ずる所も有ツて、此小説「吁工女吁薄命」の一編とは爲ツた。眞面目なるつもりの作なのである。思ひ當たられる人は有るか。

明治卅六年八月　　美妙

小説 吁工女吁薄命

まへがき

將軍の胸間、燦たる勳章は兵士何人かの鮮血の色なのである。兵士何人かの鮮血は故郷幾何かの老父母の紅涙のしたゝりの凝結なのである。その本の紅涙から頓ての次ぎの鮮血を想ひ、更にその鮮血から又勳章の末を想へば、勳章共物は只是れ殘忍の標本、無情の表旌、猛惡の符號としか思はれぬでは無いか。

今の、汎く云つて勞働者、狹く云つたところで彼等各種の職工の徒輩は悉とく皆兵士であつて、今の滔々たる資本主は悉く皆將軍である。職工の汗や涙、それで工場の織り物は染まるのである。職工の無念の呼吸、その熱で染め草の色は上がるのである。職工の苦痛の呻き、その響で機械は運轉するのである。彼等職工は薬品を鍋で

烹る。その自身は資本主によつて工場で烹られるのである。資本主は避暑の、別莊のと云ふ夏の三伏、彼等職工は職業によつては熱度百度以上の密室の中、生きながら焦熱地獄の苦しみをするのである。資本主は有るが上にも望蜀の慾に鎌首をもたげて、地面を買つた、妾を置いた株を殖やした、藝者を引かせたと一年まし悪德に肥え太る此二十世紀とか云ふ時代、彼等職工は只、その露命――然り、全くのこと露命である――只その露命を繋ぐがため日々骨を削り脂を乾かせ、痩せ肱でのたうち回るのである。その苦しむのは只その生きんがためである。その苦しむのは決して生きて樂しまんがためでは無い。只生きるため、即ち只命をつなぐため齷齪として日夜苦しむのである。何事か、嗚呼、何事か、命をつなぐため苦しむのであるとすれば、即ち命を續ぐと云ふのは快樂のためでは無くて生きながらの修羅道に煩悶輾轉の憂き目を見るためであるか。日夕辨當持參で骸骨を工場へ往返させて優者の蠻勇の暴虐を味はひに行く夫等勞働者を見る毎に無限の感慨はわれ〳〵の胸に湧くでは無いか。

都の近郊にある東洋紡織何某製造會社といふ大きな一かまへ、千足らずの工女工男を絶えず食はせて行くと其會社の長や重役は口癖のやうにさへ云つた。食はせて行くとは、然りとは、それから先忝なさ過ぎた言葉でもある。なるほど、其云ふ通り千足らずの男女工は其會社の御蔭で食つて行くのかも知れぬ。しかし、食はせて貰ふのでは、必らずしも、無いのである。脣と齒と相扶ける格で會社も工職で持てば、また職工も會社で持つ、双方に同じ五分五分の相賴り相助ける處が有ればこそ手間にも爲り、仕上げも出來ると云ふものを、頭から扨何を云ふかと云へば、會社といふ資本主の方ではそれ食はせてやる、やれ命を續がせてやるといふのを己が勞働者たる男女工に差し向ける一點張りの口上とする。題に取つた工女をわれ〳〵は無意識に、只一つの飾りとして決して仇には出さぬのである。さらば是から次第に筆を進めて見やうか。

第一回

紡織會社其午餐時だけは社會の人並に十二時で、さすが又午餐後の休息時間と云ふのが十五分間は定められてある。五分間は辨當なり賄ひ飯なりを口に入れてさへ仕舞へば十分時間の休息は、なるほど、出來るが、手のろくて十分時間も食事に費してしまへば休息の正味は五分しか無い。慣れたこととて、否、日に責めはたられて無理にも癖が付けられた事とて男女工に限らずその食事は如何にも手早く、五分どころか或ひは三四分でも濟ましてしまふ。濟ますが、しかし、よく／＼咀嚼してゞは無い、胃の力の助かるやうにと、よく／＼噛んでゞは無い舌の愉快を十分ならしめやうにと具さに味はひ嘗みたのでも無い。只箸のまゝに食ふ、乃至手づかみにしても只食ふ。むしろ云はゞ、食ふ味はふと、云ふのでは無くて目を白黒にして、詰め込む丈なのである、飯らしいもの菜のやうな物を殆ど知覺の無いやうな口中へ運び込んでいつでも其際は早速承知して舌といふ物が夫を受け取つて殆ど直に咽喉へと宿次ぎおくりにする丈なのである。刻み錫の針り金、それも鵜呑みにするのである。刻み錫の針り金を鵜呑みにする夫等職工は素より日夕勞役の熱湯を呑むのである金平牛蒡といふ柔革の刻み屑、それも丸呑みにするのである。柔革の刻み屑を丸呑みにする夫等職工は素より日夕瓦斯の毒氣や塵埃をも呑むのである。斯くて彼等の顏は煤と埃とに染まつて夕刻の入浴後午前四五時其執務までの十數時間だけが只其無垢清淨の儘であるのである。斯くて彼等、ことに女工の髮の毛に虱は殆んど絶える事が無くて、一たび手をやつて振ひ落とせば、髮垢のやうに見えてその實活動する小さな動物がこぼれ落ちて這ひ出すのである。

さりながら泥に落ちても美玉は汚れぬ。その會社の女工の多數のうち、取り分けて人目に付く程の一人の美人があつた眞の年齢は二十一とか、年より併し若くも見える。女工と爲つて荒骨を折る、口腹の肉慾を僅かに一瞬

間滿足させる事にのみ癖が付いて、受け取つた些ばかりの給料は直ちに買ひ食ひ抔に葬つてしまひ慣れて居る氣の若さに、誰も彼も女工と云ふ女工は大かた年より老けて見えるものが少ないとは云ふものゝ、その美人、その美玉だけは只そのやうな惡い惡癖が有つての、氣が若い故では無くて、只何か知らぬが、年よりは實際若やいて見えたのでもある。小肥りの中肉中身長、水々した年頃だけ稍肉多く見える肩つきも早既に憎氣は無し、近所の役宅からの日々の往復にも多くは役服をのみ著て居たが眉は顰めても西施ならば其顏の美くしく見えると云ふ格で、その役服姿がいとゞまた其美人たる人柄には似合つてよくも見えた。紺木綿の筒袖、形ばかりの襞の有る裾まはり、何もさして見るべき花も無いやうであつたが、それでも扨その解語の花が一たび桃色木綿の腰帶を胴に細く卷いて、切り立ての鮮かな模樣の有る手拭を竪に四つ折りにして中程から頸元へふわりと掛けた風情は遂にいつしか會社中の女工共の健美を受けて、たちまち其類似が流行となつた程である。

其名は波多野阿絹、其生まれから十五六歳までの育ちは東京でもあつたが産業の失敗から兩親が家族を纏めて東京を引き拂ひ、些し計りの知る邊を便りに浦和から四里ほどの在方に引ツ込む事になつた儘、阿絹も共に田舍娘の野の花、草むらにやうやく香を吹く身となつて、やがて體のいゝ人買ひとも云ふべき會社の事務員の、又その下の下役とか云ふ、口の達者な、折り屈みのよろしい如才の無い、一寸しても面白い事ばかり云ふ、三十恰好の、身の裝のいつも小ざつぱりとした、樣子のいゝ男の云ふ儘、勸める儘、口說き付ける儘、遂には理窟がましくなつて無理やりにもと誘ひ込む儘、兩親はじめ煙に卷かれて了ひ、阿絹自分も何が何やら碌にはよくも分からぬ有邪無邪の間に決めるとも無い腹を決めるとも無しに決めて、遂にその男に連れられて、自分の居村や隣村の同じ年頃小娘と一途にその會社といふ處へ雇ひ込まれたと云ふ丈の、これを單純の、其又單純の內部には恐ろし

い未來の薄命の種が籠もつて居たと云ふ、一の怪しい經歷なのであつた。

　それ以來、卽ち雇ひ込まれた以來の會社の待遇は聞いたとは全で變はつて居た。一々云ひ出して數へ立てたなら一日しやべり通しても大かた盡きまいとさへ思はれるのである。小娘の身ながら自分の身の上の事と思ふので最初雇はう雇はれやうとの約束の出來上がつた時の事、それは大抵一々覺えて居なくもないが、何しろそれを思ひ出し、又もその後の現在を思ひ思へば、何も無し只ほろりと淚が出るのである。

　雇ひ込まれる時の約束は三年縛りの十五圓で、口賄ひは一切會社の方で、その外に面白い溢れの旨味も有るとの口上なのであつた。段々身の上のくるしさが身に浸みて來るにつけ、段々また元聞かされた時の木に餅の生るやうな口上の、何やら旨さうに思はれたのを今更のやうに思ひ出しもし、又今更のやうに口惜しくもなる。

　つくづく思へば其時、その口巧者の御べつかゞ宜しく旨く一同を欺した時に欺されると知らなかつた一同は工女と云ふものは夫程いゝものと思ひ込んだのである。

　三年縛りの十五圓、一年については到底五圓、一年の五圓は何も大した高で無いとしても口賄ひと云ふものが會社の方ゆゑ、當人に取つては其一年五圓の給金は丸殘りになる外は無い、と、斯う云はれて、なるほどさうかとも思つた。

　著物はどうかと云ふに、仕事の間は役服と云つて、會社の方で只で著せて吳れるのが有るゆゑ、夫さへ著て居れば夫で濟む譯で、自分の休みの日か何か、村芝居でも見に行くとか、村の鎭守の祭禮へでも遊びに行くと云ふ時で無ければ、自分の懷中錢を出した著物を著る事も無い、と、斯う云はれて、なるほど然うかとも思つた。

　又その著物を拵らへると云つても、會社に出入りの商人といふ者が有つて、其者は會社の御蔭で大きな商ひをして居る事ゆゑ、決して當たり前の商人のやうに澤山な儲けを見やうと云ふのでも無く、直段は夫故餘所では迚

も眞似も出來ぬほど廉くて、そして品物の性質も亦決して惡くない抔と云はれて、何さま然うかとも思つた。

右から聞いて左から考へ、縱から聞かされて横から疑つて見ても、如何にも／＼尤としか思はれぬ、そして又なまじひ、田舍に燻つて圍爐裏の上の自在竹では無いが老い朽ちて仕舞ふよりは遙かに優しとしか思はれなかつた儘、乘るとも無し、その口車に乘つたのが、やがて住み込んで仕舞つた上に爲つてやうやくの事で氣の付いたやうな、取り返しの爲らぬ脫落ではあつた。

一口に云つて仕舞へば、何から何まで欺しに欺されたと云ふ丈なのである。金では素より縛られて居る。拔け出したところが繩目と爲る。年期の三年は扨置いて四年になつて身拔けが出來るか、六年に爲つて故鄕へ歸れるか、迚もその確かな見込みは立たぬと阿絹やう／＼日を重ね、週を多くするに從つて、只此絕望の考へのみに爲つたのである。

春やうやう日が重なつて來て、朝夕の風も肌に柔かく暖かく觸れるやうに爲つて、餘所は知らぬが、會社の構へ內、煉瓦塀の裾まはりの邊、また其傍に沿ひ流れる小さな流れの岸あたりに愛らしい草も旣に生えて、名は知らぬが其中に一二輪蒲公英のやうな、黃色な花さへ咲いて居た。全く蒲公英のやうなのである、似た花の草なのであつたが、蒲公英に些しでも似て居ると、見ると共に思ふと共に、懷かしい其故鄕の野山が目の前に浮き出すやうである。

忘れもせぬ五六年の前、故鄕の村を後に見て、今の此身の上になれよとての、門出の時、時は丁度春の中程で道傍の此處彼處に此今目の前に見る花のやうな蒲公英が金を散らしたやうに咲いても居た。何心無く其蒲公英を見ながら、二里あまりの野路を步いて停車場まで來た時つく／＼嗚呼どうか斯うか此蒲公英のやうな身の上に爲るのかと思つたのであつた。その蒲英公は人の足や馬の蹄の下にばかり掛けられる。いくら育つたところが松の高さには爲れぬのである。いかにも花は咲く。咲くが、

誰一人として喜んで鉢に植ゑて吳れやうとも爲るのでは無い。摘まれたところが、子供の手遊位が高々で、どうにか斯うにか賴みにならない運を賴みにして一寸逃れや五分逃れや只今日明日を只踏まれなかつた潰されなかつたと一つ息で居るだけで、そしていよ〳〵大きく爲つたと云ふ處で、馬に食はれるのが關の山ぐらゐなものである。

蒲公英を見るに付け、雇れて故郷を離れる身の上を思ふに付け、其時からして胸が一杯になつて野の果も見えぬ迄眼も曇つた、その時の邪推のやうな取り越し苦勞が仕舞ひには本當の事に爲つて、ひし〳〵胸に當たるやうに爲り、そして斯う今目の前に其時のその草その花に似た何かの草花を見れば又すぐと直その時の事を思ひ出しその時の親たちの泣き顏を思ひ出し、又その時の自分の卸し立ての手拭ひの絞るやうに爲つたのをさへ思ひ出して、そして熟々今の身の上を考へると、されば生きて居る空は無くなつて仕舞ふのである。

雲とも付かず、霧とも付かず、霞とも付かず、煙とも付かぬ、只これ濛たる物思ひが其花の目に入ると共に一時の阿絹の總身を封じて、只頭腦も重くなつて、只目も暗くなつたと思はれた折から、不圖心付けば身の後ろの方に當たつて可怖らしい靴の音がした。

其靴音が何として可怖らしいのか。

嗚呼、その靴音が何故阿絹には可怖らしく思はれたかといふ譯を說く丈でも旣に早その說明は一幅修羅道の圖解なのである。

靴音といふ其一種の音を立てゝ步く人に阿絹に呵責の限りを盡くされて居る身の上なのである、工場の身と爲らなかつた迄、さすがまだ田舍住まひの身であつた迄は靴音といふ靴音は勇ましいやうに阿絹には思はれたのである、便りになるべき賴もしい物のやうに思はれたのである。縣廳の御役人もその音をさせる身分の人で、その御役人は勇ましいやうな、偉いやうな人と以前わが村に居た時阿絹の身には思はれたのである。學校の教師さん

も其音をさせる身分の人で、その教師さんは物識りのやうな、えらいやうな人と以前わが村に居た時阿絹の身には思はれたのである。兵隊さんや巡査さんは萬一の時何よりの便りになる人と以前わが村に居た時阿絹の身には思れたのである。袈裟を見れば坊さんを思ふ、車を見れば車挽を思ふ、その靴といふ物を穿き、その音を其如く響かせる其やうな類の人はすべて其やうな勇ましいやうな、頼りになるやうな、えらい人のやうに思はれたと共に其頃は靴その物の音を聞いた丈で直ちに又頼もしい限りの物のやうな心もちもされたのが、しかし、會社に入つてからの後となつては、嗚呼、まるで打つて違つた心もちに爲つたのである。

會社の身と爲つてからは靴を穿く人は何でも斯でも全で可怖い人と爲つて了つた。社長さんも夫を穿く。その人は肩で風を切つて、どうかすると氣に入つた女工を引つこ抜いて下女とも妾とも付かぬ者にして、そして仕舞ひには涙金で只逐ひ出す。事務や工場掛りの人たちも夫を穿く。その人は毎も工女には目に稜立てゝばかり掛かつてそして又さうで無いと思へば今度は目尻を下げて掛かるか、又さうで無ければ工女どもに血の出るやうな思ひをさせて遣ひ物をさせて漸く笑ひ顔をする。死に苦しみをするのも其靴を穿く人の御蔭である。死に苦しみした上の脂を絞られるのも其靴を穿く人の御蔭である。死に苦しみをした揚げ句のヒヾだらけの身體にされて仕舞ふのも其靴を穿く人の御蔭である。それ程恐ろしい人たちの身に附き物の靴と云ふ、一つの穿き物である。靴といふ、一つの穿き物は今の工女の身に取つては地獄の牛頭馬頭の穿く千本針の逆立つた、それこそ、板金剛でもある。その靴は靴墨の黒光りの凄味の有る照りを射る。その靴は人情も慈悲も踏みつぶすのをばかり知る。その靴はもともと牛馬の身の皮を引ン剝いて、不淨な金で手間を拂つて、わが足の物に縫はせたと云ふ、初めから其酷いのは分り切つて居る程のものである。

笑ふ勿れ、羹に懲りて膾を吹くのを。靴を渇仰して居

たのが、俄かに靴の人に迫害されたと爲つて、靴その物靴その音が直ちに女工たる阿絹などの身に取つては呵責の罵聲を發する機械、蹂躙の痛苦を壓し下す道具と只思ひ做されたのである。繼親にいぢめられ續けた幼兒は親の咳にも肝を冷やす。靴の人を怨めしいもの、賴みに爲らぬもの、身の仇となるもの、血から脂から吸ふものと思ひ浸み／＼來つた阿絹の耳には卽ち其、今聞こえた靴音が容易ならぬものに聞こえたのである。それ程可怖らしい靴の音と常から頭の中に浸み切つて居る、それ丈また其音が響くと共に阿絹は仇にその音を聞き流さぬのである、否、聞き落として仕舞はぬのである。鞭の音だけで馬もびくりとする。その靴音だけで阿絹もまたびくりとした。屹となる。目の色もやゝ變はる。いつもの芙蓉の目尻に何と無く異様な晃めきさへ見えて、殆ど云ふ方無く凄く凄くもある。

只凄いと云ふのみに止まつたのでも無かつた。凄く晃めくと共に其音の方をと見てはたと一人の男と顔見合はせると共に、素氣無いやうな冷笑が些ばかり又その目に催したのでもある。

其音を聞かせた者は工場掛かりの長であつて、無論社長の氣に入りとの噂の有る人物であつた。名は柔之助とか、通例は苗字で榫取さんと一般に呼び做されて、毒虫の、蝮のとあらゆる不好な綽號といふ綽號を澤山背負つて居た者なので。

それと見る儘、阿絹も一通り只の義理一遍だけと云ふ情合ひも何も籠もつて居ぬ、卽ち形ばかりの笑顔もほのめかぬ顔つきの儘の默禮をした。が、驚いた。

いつもの默禮とは打つて變はつた酬いをされた。いつも此方が行ふ默禮は反對は先方の頭を一際高くさせるだけのものであつた。いつも此方が丁寧に默禮すればする程工場掛りや何かの役員達の頭は反り返つてその鼻はいつでも突き出すのが、工場間の一つ咄しの種と爲つて居た。それが其時に限つて然うで無かつた。此方の、卽ち形ばかりの默禮に如何ほどの溢れた重量が籠もつて居た

のか夫は知らぬが、その、此方からの、默禮と伴なつて即ち此方の頭の低がる度合ひとよく／＼釣り合つて、その楫取の頭もまた低がつた。低がつたも低がつた、當たり前の低がり方では無い。此方のが五寸低がつて先方のが一寸低がる位でも、いつもならば、珍らしくも思はれ又珍らしい丈さうされる工女達の心はなかなか嬉しいのである。しかるに其時の楫取のゝ低がり方は夫とまた飛び離れて、いつもとは全く打つて變はつて、阿絹の低げ工合ひより又一入低く低げたのであつた。

驚いた。更に阿絹は驚いた。しかし、まだ／＼夫どころでは無い。その上猶も／＼驚かされて、殆ど不思議に殆ど怪しく、殆ど氣味わるくさへ思ふやうに爲つた事となつた。楫取は頭をさう低げたのみに止まらなかつた。低げたところで、おもむろに其頭を上げて、そして、妙滅多には逆も見られまいとしか思はれぬ、それも亦珍らしいは珍らしい、たつぷりした笑顔をまで見せてくれた。楫取その年頃は五十程である。笑顏と共に其不揃ひの齒さへ今始めてのやうに阿絹の目にはよく／＼滲みて見受けられた。正面の一枚の前齒に金が入れてあつて、その隣りはまだ透いても居る。なるほど、透いて居るので思ひ當たる事も有る。近頃の事でもあつた、その楫取が同僚と雜談中、懷中都合が惡いので、まだ此處へ入れ齒をして十年か十五年若く見えるやうに爲つて女工の誰かに思ひ込まれるやうに爲る事が出來ぬと巫山戲々々てしやべり散らして女工共を尻目に掛けて居たことも有つた、それをも今また思ひ出す。

いつもは苦虫を嚙みつぶしたやうな顏ばかりして、つまりは齒を見せる樣な笑ひ顏を示した事も殆ど全く無かつた其人に今その珍らしい樣子を示されて見ると、阿絹の身に取つては、その毎も見慣れて居る、やかましやの親爺の楫取の顏がまるで始めて逢つた人のやうにさへ見受けられた。

是だけの心もちを察した丈でも、嗚呼、優者と劣者との間に平素は格別な墻壁や、物々しい塹壕が故さら建て

築かれ掘り穿たれて居るのが譯も無く思ひ知られるので・は無いか。優者が劣者に對して門墻を築き得る間は優劣の爭鬪、强弱の衝突は決して絕滅するものでも無いのをさりとては、嗚呼、今日の、口ばかりは平民主義といふ工場にも此門墻や城壘は依然として貧富優劣の間に大々的區劃を置くのでは無いか。

第二回

其愛嬌笑ひを其儘顏から消しもせず、其儘楫取は滿面に猶それを溢れるほど湛へて見せて、阿絹の身の側に差し寄つた。

「えゝと、波多野さんでしたな、あなたは。そして阿絹さんと仰やつたな。たしか然うでしたな」と計りでびたりと佇んでしまつた。

正面からさう云はれると、娘氣に阿絹は恥かしいやうな氣持もした。顏さへも稍赧む。うつ向いて點頭た。

美玉で細工したやうな耳のあたりの美くしさを横さまに且上の方から見下す計りにして姑らく楫取は見惚れるかの風情に無言只見詰めて居た。

「一寸御咄し爲たい事が有るですがな、何か今御差し支へは有りませんか知ら。御差し支へが無くば、一寸別室まで御顏を貸して頂きたいのですが」。

その語氣に又も〳〵阿絹は驚いた。丁寧な、其云ひ方いつも工女としての自分が每も工場掛長としての楫取についぞ掛けられた言葉付きでは無い。待遇の急變は何者の心にも不安、氣味わるさを湧き立たせる。阿絹も只意外のことに思ふ、それ丈また不思議と怪しく思ふ、それ丈また氣味わるくも思ふ。その直前まで咲きにほふ海棠の花その儘の顏の色も一拭ひ刷毛で拭ひ取つたかのやうに紅味を失つて、見る〳〵又白くも變はる、目のあたり眉の邊、不安の雲も棚引いた。思へば、是ほどまで、是ほど僅かの物事にも感じ易くなつたほど夫等工女達の神經は何日か、嗚呼、過敏になつて仕舞つたか。

考へれば奇妙な事を工場掛は云ふのである。御さし支

へが無いか有るかと、扨もさう聞く丈いかにも只不思議である。工場の雇ひ人として、雇ひ込んで仕舞つた以上もとより一寸した病氣位で休ませる事さへ許さぬ掟なのである。いえ、一寸した病氣どころの沙汰では無い。病氣も病氣、肝心の職工その者のその身體に眞實の惱みが有つて眞實その日の勤めも爲らないと云ふ時だけが到底會社に於いては如何にも本當に病氣かとやうやく、而も漸々承知して認めて呉れる丈なのである。一口に云へば親掛りの身の者の一寸した風邪引きや肉緣の者の世話に爲つて居る者の假りそめの頭痛、凡ぞ其位の度のものに總べて何の病氣をでも會社はそれら職工のを全く認めてしまふのである。一口にこれを云へば、會社で輕い病氣と云ふ病氣は親許や宿許で云ふ可なりの大病なのである。會社は何の氣ぶりも無いと云ふ病氣は親許や宿許で云ふ一寸した病氣なのである。阿絹その身に試した事は無いが、工女仲間の話しに因れば、親許や宿許であたり前の醫者に見せて、可なりの病氣だと云はれた病氣がふたゝび又會社の常雇ひの醫者に見せたところで、何大した病氣では無いと云はれて仕舞つた事は幾らも有るとさへ云ふのである。病氣でさへその通りである。一分一厘の身動きも大抵爲せぬ。まして休息の時間、それこそ鳥が水を吸ふほどの短い間をでも決して仇やおろそかに大目に見ぬのが會社の是までの極まりなのである。些しでも怠け氣味とさへ見られたが最期、帳面にちやんと夫だけの黑い點が付く。とにかく只一も二も無く雇はれて會社の仕事をすると爲つた以上は一分一厘の緩みをも勝手にするものでは無いと頭から決めて仕舞はれて居るのである。これを又云ひ代へれば、一分一厘の隙と云つては聞くまでも無く云ふまでも無く、只全く無いと云ふのである。さう見られ、さう決められて仕舞つた身動きも出來ぬと爲つて居るとしか思はれぬ工女たる身に向かつてされば其えらい工場掛の長と云はれる人が改まつて開き直り、その言葉つきから丁寧にして掛かつて、その顏から笑みを含ませて見せて、其腰からいくらか屈め氣味に

もして見せて、御はなしをしたい事が有るが御差し支へは有るか無いかと、扨も扨も思ひの外慇懃さはまる口上は全くのところ夫まで假りそめの夢にも見もせず思ひもしなかつた沙汰なのである。

既に工場掛の長の言葉は工女の身に取つては無上の力の有るものと認めなければ爲らぬ。隙が有るかの、差し支へが無いかのと假令その工場長に問はれたとした處で扨改つて有るの無いのと云へたものでも無い。隙が有るにせよ無いにせよ、差し支へは無いと其人が思へばこそ御噺しをしたいと云ふのである。爭ふも爭はぬも素より無い。

耻かしげに阿絹は下を向いて、そして小聲で「わたくしには何も別に差し支へといふ事もございませんが――けれど最うかれ是就業の時間かと思ひますが……」と其後は言葉を切つて、就業時間に近いといふのを御承知ならば更に異存とても無いとの意を示した。

「なるほど」と楫取は仰山にうなづいた。「いかにも最う就業時間でさ。しかし、拙者から求める用事でだ。そりや拙者が承知しましたさ。夫ぢや差し支へは無いのですかな」と又も又笑みかたむけて、そして姑らくは無言であつたが、又仰山らしく點頭て「それならば斯うしましやう、すぐ今拙者と一所に來て下さい、あすこの第九號室の附屬室まで。いゝでしよ」。

第九號室と云ふのは應接所で、その附屬室といふのは扉一枚を隔てとした其續きの小座敷で、先は秘密室とも云ふべき處であつた。さう聞いた丈で阿絹には異樣な感じがされた。あたり前即ち役向きの云ひ付け事や何かで呼ばれるのならば毎でも事務室と決まつて居る。第九號室の附屬室と云ふからには何うでも當り前の役向きの用事では無いらしいとしか思はれぬ。役向きの用事で無いとしたならば、扨その用事とは何であらうか。されば、分からぬ。分からぬ丈氣味もわるい。もぢもぢした。

夫と見て取つて、楫取は笑ひを含んだ聲にもなる。

「いや何、心配な事では無いのだ。むしろ云はゞ御前

さんの幸福に爲ると云ふ事なのだ。積もつても分かるでしよ、此方から下から出て、御差し支へが有るか無いかときへ豫め尋ねて掛かる程の事柄に何で御前さんの不利益になる事が有るもので。さ、來なさい。早く咄しをして拙者も安心するやうにしたい。宜しいツて事さ、拙者に任せて置きたまへ」と又も其齒の缺け目をあらはし示して、につたりとさへ笑つた。

故郷を離れ、他人の賄ひを食ひ、多くの友達にも揉まれながらも其實阿絹とてまだ〳〵千種萬樣のあらい世の風波にいろ〳〵揉まれた身でも無い。初心で故郷を出たまゝ、工場と云ふ或る意味に於いての牢獄に投ぜられてやはり其人擦れると云つても同じやうな身の程度の者と擦れ合つた丈の事ゆゑ、猶まだ廣い世界の奸曲や譎詐も知らぬ段、只食つて只眞面目に働らくのをのみ知るといふ質朴な段に於ては明きらかに正しく矢張り今とても無垢淸淨の少女なのであつた。萬戸侯の招聘を肯ぜぬ高節の志士も有る世に一銖半錢の惠投にも叩頭する乞食も亦無くは無い。世に揉まれ拔いた所謂擦れツからしならば一顧をも返されぬ程の甘言も無垢でそして薄命で、微力でそして淸淨な少女にも淚を以て喜ばれぬとも限らぬ。あはれや、稚取の、その每に無い優しい言葉は梅天の明月のやうに宛がら阿絹の心に映じたのである。氣味のわるいやうな嬉しさを漸く阿絹は感じたのである。「澁かろか知らねど柿」の心もちを漸く阿絹は覺え知つたのである。貧者のために垢を洗つてやり、貧者のために靴を揃へてやると云ふ事、よしや其事業が慈善にもせよ博愛にもせよ仁慈にもせよ、何の勞苦を要するものでも無い。さりながら、貧者同志が御互ひの間に其樣な事をしたとてさう爲れた貧者が必ずしも淚を流すまでには喜ばぬ。しかし、人を變へてそれを富人としたらば何うか、王侯としたらば何うか。癰の膿を吸つてくれた大將のため、それ故、可憐の兵士は喜んで死んだ。要するに慈善の德は其を行ふ人の地位の高まるに從つて增大して感ぜられる。されば富人から云つたならば慈善ほど爲し易いもの

は無く、また行つて利益の有るものは無い。しかし、それを爲たがらぬ者の多い世の中、儼かに咎め立てするでも無いが、とにかく偶々、むしろ其思ひ掛けぬ程打つて變につて向けられた優しい言葉は少なからず少女の阿絹の胸に柔かく且うれしく浸みたのである。

　阿絹すなはち差し俯向いた。差し俯向いたその顏すなはち時ならぬ紅葉を散した。憐れむべし、冷酷なる修羅界の工場あたりに滅多には見られぬ感謝の餘りの匂ひの色合ひが今は蜃氣樓のやうな幻想の喜悅に蒸されておのづから催したのである。

　それ故桿取の云ふ儘その後へと跟き從つて、その秘密室へと行つた。拒みたいやうな、辭みたいやうな氣もしなくは無く、又その用事を前以て聞かせて貰ひたくもあつた。が、そこが又擦れぬ身だけに押し切つて何う切り出すと云ふ處までには至らず番犬に引かれる羊では無いが、只安心したやうな、又おづおづしたやうな、得も云はれぬ樣子で無言で桿取に尾して行つた。

　そして秘密室へといよ〳〵入つた。桿取は只何が何やらにこ〳〵又そわ〳〵。旋風のやうに室內をぐる〳〵回りして、入り口の胡桃の大戶を手強く閉ぢた。

　雨後の一雷、閉ぢたその音はまた阿絹をぎよつとさせた。

　桿取は相も變はらずにこ〳〵顏なのである。卓前の一脚の椅子に腰を落として、更に手眞似を加へながら「さ、御前さんもその椅子へ」と他の一脚を指し示した。

　阿絹は猶もぢ〳〵。

　「あはゝッ」と桿取は聲迸らせた。「今日はその遠慮には決して〳〵及ばんのだ。さ、腰を掛けて下さい、掛けてゆつくりとして下さい、掛けてゆつくりとしなければ落ち著いて御咄しは出來ぬ故」と、其切り出しから物々しい。

　腰を掛けろと云はれたとて、おいそれと其とほり出來るものか、もので無いかは每もの會社の、やかましい規則によつて考へた丈でも、可い加減、分かりさうなもの

なのを、さりとては今日はまたよく／＼の事に違ひ無いと、只その重大なるべきを推する丈いとゞ又氣味惡くのみなるのであつた。

しかし、漸くにして腰は掛けた、掛けたがほんの掛けたと云ふ形ばかり、混み合つた乘り合ひ馬車內傍の人の御情で半座もしくは四半座を分けて貰つたのと宛から同じやうに、腰を些しばかり、只名目のみ掛けた掛かつたと云ふ位、淺く掛けて、それ丈また釣り合ひをも取る、前屈みにならずには居られなかつた。前屈み、それだけまた態度もいとゞ慇懃にしほらしい。

微笑また微笑、始終を微笑の儘で例の掛取は見詰めて居たが、やがて愈々阿絹の態度が落ち著いたと見ると同時、咳ばらひ一つ輕く行つて、其顏を前へ差し出した。

「あんまり突然のやうだけれど、しかし必らずしも惡い咄しでも無いかと思はれるんで、一應相談しやうと思ふんですがな……いゝや相談とは云ふものゝ、只何うだらうかと聞くと云ふよりは何しろ御咄しゝた上卽答で、承知したと云つて貰ひたいんですがな、どうか知ら」

只さう云つた丈で、さて其肝心の話しの筋道はまだ／＼容易に切り出さぬ。しかし惡い咄しでも無いとか云ふ。夫聞いた丈で胸の波風も一寸和になつたやうでもある。が、惡い咄しも善い咄しも、勿論、その咄しに由る。給料を上げてくれるのか。それでは相談といふ程でもあるまい、上げてやるよと云ふ丈で濟む。役を上にしてくれるのか。それとても矢張りそんなものである。その外に惡くない咄しと云つた處で、されば何か、どんな事か。阿絹には解せぬ。解せぬ筈なのである。大抵の者には解すべくも無いのである。

「どうですかな、阿絹さん、承知して下さるかな、な、惡い咄しで無かつたものならば。な、決して惡い咄しで無いんですからな」と掛取又も一圖に掛かつた。

惡い咄しで無いと云はれる丈、また然う云はれる身が初心でもある丈、答へより先阿絹の頰は紅らむのであつた。その言葉さへおづ／＼する。其聲さへ低くなる。そ

の顔さへ下を向く。その眼さへ床へ注ぐ。要でも無い咳まで交る。

「どういふ御咄しか存じませんが、私は最う只だ會社の御用をする丈の者ですものを、會社の御云ひ付けならば、どんな事でも致すつもりで……」

阿絹は只是だけ、而もやうやくの事で云つた。生れてから廿一のその年頃まで人からまだ改まつての相談などゝ云ふ事を微塵も受けた事の無い身、臍の緒切つて始めての、人間並みらしい目星に取られたと云ふ事、されば只それ丈で肩幅のどうやら廣くなつた氣持ちさへされると共に、又その受ける相談に對して、自身でそれを背負ツて立てるか立てぬかと云ふ段を思へば、ると云ふよりはぬといふ方が確らしいやうにも一圖只思はれて、胸騷がすには迚も居られぬ。

「なアる程」と梶取は反り身になる。「御前さんの云ふ通りだ。如何にも會社の云ひ付けならばどんな事をでも爲やうと云ふ、全く其心が無ければ爲らない。工女といふ工女が皆さういふ優しい了簡方なら苦勞は無いンだけれど、我ばかり只强くつてな。いや、しかし、夫は夫でと」と首を傾げて「そンなら御咄しゝた以上否とは云ひなさらんな。まして其用向きと云ふのが是までの日々の事業のやうに難澁なものでも無し御前さんには出世の小口となるもンだし、さア不同意は有るまいね」

阿絹は只うなづいた。

「外でも無いが、社長さんだね、明日浦さんと云ふ御方を知つて御出でだろ。あの御方がだ、いつとも無し御前さんの優しい氣性や何か御聞き及びで、可哀さうにさう云ふ女ならば長らく工女などさせて置くでも無いと御思付になつたといふのでな……」

梶取の語は只まだ是丈しか云ひ進められなかつたのである。が、只それ丈、夫で俄然阿絹の顏の色は些とばかり變はつて來た。しかし、梶取頓著無い。

「しかし、何うすると云ふ折をも御思ひ付きに爲られなかつたのだ。然るに先頃からの事でもあるが——　薄々

は御前さん達も聞き知つて御出でだらうが——奥さまの御持病が重くなつて、床に御就きになつた限りの始末で、御邸でも人手の不足を感じ、第一社長さんが御晩酌でも爲さると云ふ時御酌をして上げると云ふのに相應な人をも得られない始末なンだ。高い聲では云はれないが、正直な方だけにまた中々の氣むづかしやの社長だろ、また〳〵而も奇麗な人の御酌を好きな社長だろ、それ、一寸した持つて來いと云ふ婦人が、まア無いと云ふもンだ。桂庵からも三四人連れて來た。しかし、いづれも長し短しでね、小奇麗に見えるかと思へば素性が惡かつたり、大人しさうだと思へば間抜けじみたり、些是はと思へば擦れつ枯らしや慾張りであつたり、どうも其是はと云ふのに當らないンださうだ。その筈さ、さう申し分無いのが譯も無く世間に轉がつて居た日には世の中に何の苦勞も無いンだからな。そこで社長が奇妙な方面から不圖その人を見付けやうと御考へになつたンだ。會社には女工が澤山居るだろ。其平素の品行帳を調べ、また其人品をも調べ、もし是はと云ふのが有つたなら、引き抜いて御邸へ雇ひ込み、十分また御手當てをもよくして遣らうと云ふ、斯う云ふ面白い手段を御工夫に爲つたンだ。面白いぢや無いか、え、阿絹さん。さすがは社長さんの思ひ付きだね。試驗濟みといふ人が、そんなら、得られるだろ。譯も分からぬ桂庵からの口入れ抔より幾ら確かだか知れやしない。ところで、其中、その多くの中から選まれた中で、されば、御前さん、そら、阿絹さんと云ふ果報者が一人有つたぢや無いか」。

高らかに笑つて、阿絹の顏まで指で差して、肩から椅子から搖めかす。

其云ひまはしは蜿蜒して居る、いづれかと云へば只捉まへ處も無いやうに體裁よく云ひ回して居る。さりながらよく〳〵其木地を洗つて見れば、明日浦社長の奥さまが御病氣で小間遣ひの奇麗なのが御入り用で、女工の中から選んだところで忝くも阿絹といふ御前に高札が落ちたのであると、勿體を付けるのやら、御爲めごかしを

云ふのやら、自分の都合の好いために譯も無く煽動て込むのやら、どうやらよく分からぬやうな口上である。

如何に初心な阿絹でも多少は此邊を只をかしく思はぬでも無い。奥さまが御病氣で人手を要すると云ふ丈ならば宜しい。奇麗な女が何故入り用か。奇麗なのをと云ふからには何處やら其處に薄氣味わるいところも有る。

即座さすが此考へ丈は付いた。時間を與へられて、猶長く思案したならばまだ／＼其上の思案、つまり掛念、これも亦猶多ゝ付いたでもあらう、出たでもあらう。が、それ程時間も無いと云ふ處だけで、兎にかく夫でも猶右だけの考へは付いた。如何に野の花でも、初心でも流石婦人は何處までも婦人である。美くしいの、奇麗のと云ふ問題に出遇ふと同時直それに對して囘らす機敏な考へが宛から閃めくかの如く現はれる。現はれると共に如何にも薄氣味わるい。目の色もやゝ險しくなる。しかし、何とも口は利けぬ。何とか云はうとは思ふ。が、云ふ題も見當らぬ。

楫取その身を入り込ませた。

「な、分かつたでしやう、つまりは御小間遣ひさ。御召し換へやら御給仕の御世話を御前さんがするのさ」とばかりで妙に只にこりとして「な、すべて今迄奥さまが爲さつて居らつしやつた通りにするんだ。早く云へば、第二の奥さまさ。出世だろ」

聞く／＼阿絹は總毛立つ。目は早豊しは涙も有る。

「下女ぢや無いんですか、その御小間遣ひてへのは矢張り。でしよ、下女なんでございましよ」と語氣やゝ詰問めいて來る。

「下女？あツは、勿體無い。どうして下女どころでこ下女ならば是までの工女と何の、大した違ひも無いぢや無いか。下女どころか下女どころか／＼」と楫取うるさい程二度三度同じ語を重ねもした。「な、御小間遣ひならば水仕業もせずさ、柔かい衣服も著て居られるしさ、取り亂して居ては素より居られないゆゑ二日置き位には髪も結へるし、勿論紅白粉すくめでも居られるし、それ

で外の下女をば目下につかふ事も出來てそして御給金も高ければ、また戴き物もいろ／＼有ると云ふ……」

その話しの餘りの旨さ、只阿絹には可笑しくなる。ちとばかりは顏にも洩れる笑顏、勿論冷笑ではあつたが、そのやうなものもほのめいた。

それをまた其内心の喜悦の發表と一圖櫸取は見たのである。

「なア、こんな結構な話しは無い。女には生まれたいものさな。いや、さうで無い。器量の好い女に生まれたいものさな。有封に入つたよ、本年は御前さん。吾々は只羨ましい。さう爲つて御前さんが社長の御世話になると爲れば、われ／＼も大に面目有りだから」

其言葉付きから考へたならば、どうでも小間遣ひと云ふのは表の名目、その實は小間遣ひといふ丈の、單純な務めのもので無いとの趣きを大方察し得なければ爲らぬ。しかし、阿絹は、あはれ、前にも云ふ如く、只初心の娘である。其處までを邪推するほど世に擦れた身でも無い。あはれ／＼、心は些し妙に動いた。

云はれるとほりの條件ならば、世の中にそれ程結構な事は無い。しかし、餘り旨過ぎる。それ程の好い取り扱ひをする自身阿絹を、されば、何故今まで工女にして置いたか。工女として置いたのも宜しい。一通りや二通りの難行苦行をさせたか知れぬ、その、さう云ふ情無い目に今までなぜ逢はせたのか。それもまた合點が行かぬ。どうやら疑へば、器量のぞみをするとも云ひ、云ふ目の出る儘にさせるとも云ふ、それ若しや妾と云ふのではあるまいか。

思ひやれば何うしても其處となる。其處となると共に、さツ、身は竦とする。俄か眼前、猿の化け物見たやうな明日浦社長の顏も浮かぶ。

第三回

小間遣ひといふのは表向き、全くの處は、奥さまも御病氣とさへ云ふ事、體よく欺かして邸へ連れ込み、袋の

鼠として置いた處で、いよ〳〵さア妾だぞよと壓し付ける氣では無いかと阿絹も扨思はなくも無い。思はなくも無いが又、さう思ふと共に、また只何と無く嬉しいやうな氣持ちもする。

然り、嬉しいやうな氣持ちもするのである。と云へば一圖に人は訝るでもあらう。無垢の、それほどの少女が妾にされると心づいて、何をどう嬉しがる。つもりにも知れた事、それは違ふ、と。

が、必らずしも然うでない。阿絹は內心嬉しくなつたのである。心やゝ時めいたのである。これを露出しに書き發くのは抑も或ひは酷かも知れぬ。が、必らずしも阿絹その人の恥辱になる事でも無い。

取り詰めて云へば阿絹位の若盛りの年ごろ、もし又汎く云へば總べてそれ以上の老年でも、婦人その身を美人といふ簡條に於いて褒められたとか好く云はれたとか云ふ場合ひほど心の嬉しいものは無い。よしや醜婦とみづから承知して居ても、又さう承知してみづから自分を此通りのスベタでと其女が云ふとしても、スベタならばスベタ相應の何かまた取り立てゝ理窟を付けて何うやら斯うやら褒め好ささうな所を見付けて、夫をさへ褒めてやれば、其スベタは宜しく心に悅喜する。必らずしも是が婦人のみの弱點では、素より、無い。男子とても然うではある。が、みづから已れを恃む處が男子と婦人とは些しまた違ふ所から、婦人が唯一無二の武器とその美色を恃む代はりに男子は必ずしも美色を武器とも恃まぬ丈、容貌の美醜の評を受けて、即ち男子は婦人ほど其痛痒を感ぜぬのでもある。云ふまでも無し、阿絹は年頃も年頃婦人美といふ婦人美の、やうやく是からといふ廿一前後である。その身に取つては天地皆美の精である、美の模範である、美の標準である。曙の天色の美くしいのを徒らに只美くしいとのみは見ぬ。嗚呼、あの色を帶揚に染めたいものと見るのである。風薰る森林の鳥の聲を窒しく只淸らかなとのみは聞かぬ。嗚呼、あの聲を自分にも持ち備へたいと聞くのである。流水の岸に輕く捺れて、

ざぶ、ぼちやと一寸可愛らしい舌打ちでもして、また花車にくるりと囘り込つて其儘すウツと低い方へと滑らかに逸れ流れて行くのを只面白いとのみは眺めぬ。嗚呼、あの擧動の輕いところ、情の有るやうな、すねたやうな、又思はせぶりの様なところを自分にも眞似したいと考へるのである。切りつめて云へば、年頭の婦人は一目で直とあらゆる美を見る、見て而して逃がしもせず、又その肉體の生命とさへする。さればこそ凡そ何が嬉しいとて、わが身體の美を(もし有るとすれば)他人からそれと認められて、宜しく取り出して夫を云はれた段となつた、其嬉しさは全く筆舌の外なのである。筆舌の外、すなはち無言の神域その妙不可思議の喜悦なのである。梻取は故さら其弱點に乘じて、故さら夫を際立たせて云つたのでもあるまい。然り、その云ふ所は自然に出たのではあつた。一圖阿絹を美人として見て、その心を口にも迸らせて、必ずしも相手から感謝の報酬を望むと云ふのでも無い優しい言葉を迸らせ、降り注がせたのでもあらう。が、夫だけは全くのところ阿絹には嬉しい。嬉しいと感じて、必らずしも其嬉しさを覺えさせて賜はつた好意に對して感謝の實を報いとして差し出さうと思ふ程までゞは無いが、しかし必らずしも、其、自分を美いと認めてくれたと云ふ人の心を色も艶も無く眩にして仕舞ふには、また一寸忍びぬやうでもある。あはれ、此心弱さが婦人の長處卽ちまた短處でもある。此心でこそ暖い涙も有る。が、此心でこそ婦人は其己れの涙の灘津瀬に却つて其一身を投じて永久浮かむ瀬も無くなるのである。阿絹今は早其危い淵のほとりに立つ。而もやゝ顫へて、足もしかと定まらぬ儘で立つ。而も一吹きの生ぬるい風が魂をとろかし掛かつて吹いて來れば其足は輕くさらはれて、みづからは沈むとも知らぬその深淵、その底には毒龍惡蛇が口を張り目を怒らして潜むところ、卽ち其ほとりに只一人危げに、他に何の深切なる支へも無くて立つのである。

それ故多くの工女の中から引き拔いて迄も邸へ連れ込まうと云はれて見ると、其處に怖ろしい心もちは有りな

がらも、また嬉しいやうな心もちもする。阿絹は何うやら空に迷ひ出す。

慾には其怖ろしくないやうにして、そして好い目にだけは逢ひたいと思ふ。何さま虫の好い考へでもある。さりながら阿絹の今の場合、その虫の好い考への、ともすれば、催したがるのも是非には及ばぬ。もとより河豚も食ひたし、命も惜しい。即ち命の危くない丈の事にして、河豚のその旨い味に舌皷をも打ちたい。阿絹はいよ〳〵迷ひ出す。

無言で顔は赤らんだ。

赤らむ顔は承知の兆、蒼ざめる顔は不承知の兆と老功の桝取は其多年の經歷――されば單に經歷とさへ云へば體裁は宜しいが、其多年花を折り柳を傷つた、その方に掛けての老功の經歷――即ちそれから推して考へて、阿絹の其頰の赤らみをも萬事多望のものとは見た。が、果たして眞實その考へがが當たつたであらうか、どうか。

全くのところ、阿絹は其褒められたと云ふ丈で其世に多く採まれぬ丈、只それ丈で譯も無く我知らず顔を赤くしたのであつた。その現在の身の上の、わづかに工女位なものに止まるのを、それ程に見て吳れた人が有つたのかと只それ丈が無邪氣に嬉しくて、即ちとにかくはつと思ふ、それ丈赤らみもしたのであつた。それ以上に話しが押進んだ曉までよく久しく保存し得られる其美しい色かどうかは受け合へぬ。

「どうだろ。不承知は有るまいと思ふが――な、さうでしよ。夫と心が決したならば、外ならん御前さんの事、この拙者が引き受け人にさへ勿論爲る。親達と云つた處が、御前さんの國元に居るといふ事だし、此最寄りに相談する程の人も有るまいし、さ、即決としたらどうだろう。な、即決、それに限るんだ。なまじひ考へたり何かして日でも逡つて、先方へ住み込んで仕舞ふ者でも有られた日には馬鹿を見る。だろ。でしよ。決しなさい。な、拙者が一切引き受けるとするからさ」

語の終りは卓まで打つて、辯者拍子をさへ取つた。前

にも既に示した通り、阿絹その無邪氣な娘氣質にわが器量を褒められたのが只々心に嬉しいのである。卽ち、あはれにも今はまた楫取をも今日その一時間前までの、小憎らしい爺とは一圖に思ひ做されぬやうに爲つたのである。何か知らぬが深切らしい處も有るかの樣に思はれ出したのである。いつもの喧し屋が是ほど打ち解けて云ふ處を見ると、よく〳〵自身此阿絹の評判がいゝのでもあらうと、つまり事實を想像の眞實にして、いくらか自得の心もちに爲つたのである。褒められたいと只思ひ、褒められゝば又尙々褒められたいとのみ思ひ、空褒めでも猶且大に悅び好む只その物思ひ、その中に天下の婦人といふ婦人その十人が殆ど九人までは一生の運命を全く犧牲にするのである、むしろ之を手嚴しく云へば、投げ捨てゝしまふのである。猿の化物見たやうな社長は素より好かぬ。がその化物でも其口から褒められるのならば其褒められる事丈は決して好かなくは無い卽ち褒めてさへ吳れゝば化物もいくらか可愛くなる——よし可愛くまでは爲らずともさう酷く憎らしくもなくなる。

阿絹その心の動搖は斯くの如くであつたその他愛無い、無邪氣な心の時めきは斯くの如くであつた。

胸おのづから轟くのである。

呼吸おのづからはずむのである。

何ものに注ぐとも無い濛たる眼中に金の輪や花が往來するのである。

× × × × × × ×

斯くて遂に阿絹は點頭いた。卽ち小間遣ひたる事を只承知した。小間遣ひとして如何なる務めを行ふべきかは其肝心の最初の時、嗚呼、つひ問ひ究めなかつた。

第四回

譯の分かつたやうな、又分からぬやうな曖昧の間に遂に明日浦社長からの望み、楫取工場掛長の傳言、それらに對して承知しましたと云ふ結果になると共に、さらば

今夜兎も角も御邸へ來いと續けさまに楫取に促される儘いよ／＼又空濛たる間に迷ふとも無し迷はぬとも無しに爲つて、阿絹は其求めをも承知する仕儀と爲る。何事も勝手に都合すれば都合の出來るもので、工場掛長からの許可とあつて、阿絹は職業の休暇をも與へられ、例の秘密室へ呼び入れられて、暫時の間待つて居てくれと楫取に云ひ付けられた。只云ひ付けられたどころで無く、云ひ付けて楫取が室外へ立ち出る際にあたつて、其進めかけた足をさへ引き返し、卓上の菓子器の蓋をみづから取りさへし、その儘の手で茶器をさへ指し示し、待つ間退屈でもあらうゆゑ、勝手にその茶をも入れて飲み、またその菓子をも食べてくれと、ても扨も、其云ふ事爲る事昨日今日先程までの楫取とは打つて變はつた事のみであつた。

阿絹は驚きの上を通り越してむしろ呆れたのである。呆れて只何やら分からなくなつたのである。何が何やら全く夢を見て居る心もちに爲つたのである。どうも只跋がわるくなる。もぢ／＼する計りとなる。其跋をわるがり、もぢ／＼する風情は只楫取から見させた丈でも艶冶きはまるものであつた。社長の思し召しもなる程尤もであつたと楫取いよ／＼思ひ當たるらしい。にこり宜しく愛嬌笑ひとなる。その儘その室を出て行つた。

楫取の出て行つた後と爲つては阿絹たちまち千萬一時に掩ひかゝる、さま／＼の物思ひの巣となつた。その物思ひが一として空想の物ならぬは無い、こと／＼く皆蜃樓の類である。さりながら其蜃樓がすべて皆一つとして樂天的の豫想から組み立てられた物ならぬは無かつた。世の中を單に怖ろしいと思つても扨まだ必らずしも甚しく怖ろしいとまでおもひ浸みたのでも無い無垢の身には今斯く一滴二滴の油を掛けられたと同時に甘言やうやく蜜に味はひ得られて、美味を勸める惡蛇の佞辯またぞツとするほど嬉しくなる。はや最う是からは花園にいつも萬代常磐の春をしたしく味はひ得る事であらうとのみ思ふ。素より招かれて雇ひ人とさせられ、直ちにその夜か

ら枕席の塵を掃ふのであると前早く云はれたならば、云ふ迄も無く眉は顰み、顏は横を向いたであらう。其處、すなはち楫取の佞辯は只よろしく言葉を綾に組んで聞かせて、綾のその表模樣のきらめく美くしい處を示して、その裏模樣の怖ろしく醜い所を示さなかつたのである。すなはち阿絹は錦の裏をば見ず、單に錦の表のみを見た。

默坐して楫取の來るのを待つ間も最早身は工女の苦境を蟬脫して、羽衣を身にそなへ、今や一吹きの春風微涼の迎へを受けて晴れた天、かをる空、遊絲の五彩を放つ碧瑠璃の間に立舞ふやうな氣もちがされた。運命の夫まで强面かつたのを夫から樂しくなる序開きであつたと見た。その實は夫までが却つて夫から後と比較して或段の上立ちまさつて居たかといふ事を其眞の時に至つて思ひ付くまでは只一語で云ひ盡くせる誘惑の捕虜、只さういふものと爲つて仕舞つたのである。

やがて夕刻阿絹はいよ〳〵楫取に連れられて明日浦社長の閾を跨いだ。閾を跨ぐにさへ胸とゞろく。名をば知らぬが實は內玄關、阿絹の目には別にそれより大きくて立派な上り口が門からの正面にあるのに、是はまた格子戸など面倒臭くも篏めてある、無駄らしい、別の、また一つの小さな上り口と見えた、その內玄關にいよ〳〵下駄を脫ぐと爲つて、身の縮むとは何故か。やがての其後の身の上の、前以ての辻占では無かつたか。

仕こなし振りで楫取は自由にあがつて、振りかへつて腮で阿絹をしやくり招いた儘無言で只先へ立つ。阿絹も只後から從つてそしてやがて通された一間といふのは一寸した床の間のある四疊半の小さな所であつた。何故そのやうな部屋へ通されたのか分からぬ。薄暗く付いて居る瓦斯の螺線を楫取は一寸ねぢつて明かるくした、其光に就いて部屋中を見るとも無し見まはせば、拙妙なもの、又偖早く目にも付くもの、一重ねの、ちらと見た丈でも奇麗らしい着物が床の間に載せられてあつた。

坐るとも無し、阿絹は只うづくまつた。楫取は何より

先その著物へと手を出すく\ずつと阿絹の前まで持ち出して、無言、只にこにこ、重なつた儘なのを一枚々々取り列べるのを、されば、阿絹の身に爲つても外ならぬ美くしい著物といふ何より見たいもの、只我をさへ忘れてぢつと夫等へ目を凝らした。

金光りのする帶、それ、繻珍とかいふのであらう。また別に紫いろの丸帶、それ繻子とかいふのであらう。また、おや、今度も帶、海老茶繻子と縮緬の腹合はせ、あら、ま、奇麗な帶である。帶の下からだらり流れ出す、おや、帶揚げ――鶯色の、あら、幽禪。それからは袷、小袖、三枚か、五枚か、されば何でもその位！

雇ひ込んだ女に向かつて古著屋が荷を廣げたやうな楫取の眞似には阿絹只々解せなくなつた。惚れく\する程美しくい、されば又それ故欲しい氣もするやうな其品々と楫取とを譯も無く見くらべたなりに爲つてその實呼吸も殆ど吐き得ぬ。

楫取ますく\にこく\した。

「さ、えゝと、阿絹さん、いやなもンぢや無いだろ、こんな奇麗な物を見ちや。どうだね、著たら宜からう、え、君、あつはつはつは」。

答へは阿絹も笑顏で返す。

「奇麗ですこと、まア。どなたのなンです。お孃さまの？」。

「あつは、如何にも御孃さまの。それ、そこに居る御孃さまの――阿絹さんといふ御孃さまの」。

阿絹胸どきりとした。

返事は出ぬ。

「あつは、冗談ぢや無い、阿絹さん、まつたくなの、嘘ぢやないの、御前さんの著物なンだ。目を何もさう圓くせずともさ、よしかな、忘れやしまい御小間遣ひに今日から爲つたのを。な、云はない事ぢや無いだろ、御小間遣ひてへものは何んなに好いものか知れないつて。云つたろ。聞いたろ。分かつたろ。飮み込んだろ。さればそれで」と反り回る。

「そウら、即ちこの著物は殘らず御前さんが著るんださ」。

阿絹その顏又も〳〵さながら紅をさして來た。

「嬉しいさ。嬉しくない奴ア無いさ。女の命は著物だ。蛞蝓の塲ぢや無いが、著物に締けない女は無い。うれしいさ。尤もだともさ。しかし、有り難く思はないぢやいかないな、是丈の著物をわが御娘御のやうに見做して著せて下さる社長、いやさ、旦那さまの御心を考へたらばな。さうだろ、阿絹さん。仕合はせさ、な」と、辯者いよ〳〵其口は油をさした車より猶よく〳〵回るのである。

しかし、奉公する丈の者の著物としては如何に何でも立派過ぎると阿絹とて怪しまぬでも無かつた。なるほど下さるのは嬉しい、嬉しいが些し過ぎる。東京が田舍と違へばとて、大家の娘の著さうな物をさう著せる主人がさう有るか知ら。

疑ひも出ずには居ぬ。どうしても目を見張る。態度いくらか硬ばりもする。

「あたしにこんな奇麗な著物を著ろと仰やるンですか。でも只御奉公する丈なンでしよ。御嫁に行くンでも無し、こんな立派な著物を……あの、本當なンですか」。

その顏色は嬉しさに照り優るかと思はれたが、その眉は不安に稍顰んだ。早く云へば怖いやうな嬉しさ、おいそれと手は出したいが安心ならぬ所が有るやうな有り難さ、殆ど夢のやうでもある。しかも又重ねもする――

「只御奉公する丈なンでしよ。御用をするに……汚れましよ」何所までも無邪氣な口吻、桿取いよ〳〵微笑である。しかし其「只御奉公する」と云ふ其「只」が流石手痛くその耳へ浸みたのでもある。

「只……無論……それは只御奉公する丈さ。けれども只と云つた所で無論立ち働かなくも無し、それには今も云つた通り御小間遣ひといふ、それ、始終奇麗にして居る役ぢや無いか。その位の著物著ないでどうなるものかさ」。

わざと事も無げに云ひは云つたが、腹の中では此初心は随分困りもの、いざと爲つて駄々捏ねはせぬかと先まはりの考へをもひそかに抱き出さずには居られぬ。さりながら今の場合ひ、咄嗟たゞ烟に捲いてしまふそれより外無いとも思ふ。

「だからさ、好かろ、嬉しかろ。本當に仕合はせものだと吾々は只羨ましい。さ、どれでも好きなのを取つて著るさ。著たら直御邸へと行くンだ。先方さまでも御待ちかねなンだ」。

一人只しやべり立てる。阿絹何をどう口を出す餘裕も無い。いよ〳〵轟く胸のまゝいよ〳〵鳴り騒ぐ耳の儘、桿取の云ふところを聞くとも無し聞かぬとも無し、何さまいよ〳〵烟に捲かれて居る處へ、また是は別人、その座敷へ入つて來た年四十を餘程越した女が有つた。

「この方なンですか、阿絹さんてへのは」と其女は阿絹を、是また、笑顔を含んで見やりながら、桿取へと尋ねた。

尋ねられたそれに對して答へを與へるより前、桿取は一寸席まで避けて仰山に一禮した。

「いや、是は〳〵、只今御知らせに上がらうと存じましたのに、はい、早速御承知で御出でゞしたか、はい。その、此子でございます、阿絹さんと申しましてな、今日只今斯う連れまして參りましたのでして、はい」。

その「はい」の度毎に一々桿取その頭は其老女に向かつて下がるのであつた。阿絹には夫が奇妙でをかしくて爲らぬ。片笑靨愛らしく寄せて、思はず是も微笑は爲たにが、腹の中では其四十あまりの奥様風でまた奥さまで無いとは見える其女が何者であらうかと云ふ事を人知れず考へ込みもする。

その女の人は思ひの外横柄に桿取に向かふ樣子である。しばらくは無言の儘の微笑の儘で、しげ〳〵阿絹を見詰めて居る。一座只寂とした。寂とすると共に阿絹の胸には又一種不快の心もちも出なくは無い。何ぞと云ふと身柄の有る人は此やうに人を目の前に置いた儘、をか

しく横柄にして口も碌に利かず、上の方から抔しけじけ人を見下してばかり居るのが多いやうな。それならば此女の人もやはり又その流儀かとばかり。やゝつんとなつた刹那、その女の人の聲として「そんなら著せましやうかな」と云つた。著せましやうかとは何をであらう。其著物をか、其著物を其女の人が乎。

第五回

「そんなら著せましやうかね、あちらでも御待ちかねですから」と其女はまた重ねた。「兒柄が好い。宜しいでしやうよ、似合ふでしやうよ。あの、それぢや御前、阿絹さんとか御云ひのね」と其女はその語と共に阿絹の方へ屹と向かつた。

其只一寸した言葉つきではあるが、夫でも何でもまづ其頭からして横柄きはまる忌味なのを流石感ぜぬ阿絹でも無かつた。又一入不快になる。笑顔もやうやく薄くなる。默つて居る。

老女些してれた。さすが跋がわるいと見えて、其穴塞ぎに再び桿取へと取つて掛かつた。

「阿絹さんてへんですつてね。阿絹さんかあゝ好い名ですこと。旦那さまの會社の御商賣物そつくり其儘、まつたく御縁が有るんですわねえ」と、上げるのか下げるのか更に分からぬ言葉であつた。

「あツは、全く」と桿取が直受けた。「奇麗な好い名ですな、仰しやるとほり、いかにも、はい。名も名、御本人と不釣り合ひでは根つから冴えませんな。この子のやうなのが阿絹さんなら極はめて宜しいのですがな、松材に手足を付けたやうなのに阿絹さんなら恐れますな、あははは」と一色の笑ひ方をして更に又「うふふふ」と笑ひ聲まで別に取り換へ、相變はらずの「はい」を其終りに又出した。

おそろしい阿諛者と阿絹はつくづく桿取を只その樣子で腹の中では思つて居た。されば又面白くも無い。いづれかと云へば手遊物にされる心もちもする。其芙蓉の目

尻に幾らか凄味もほのめいた。

　其様子の硬ばつて一寸手に乘らぬらしく見える趣きを老女は只その阿絹その者の初心な故からとのみ思ふ、なほ夫丈また見くびる。猶それ丈横柄にして、わが威を誇りたい氣味でもある。

　「ね、阿絹さん、あたしの事から御咄しするがね、私や、この御邸へ永らく御奉公するもので久江と云ふものですわ。奥さまが御弱でゐらつしやるので、御邸の事は一切私の手で取り仕切つて居るのですがね、今度御前さんが御邸へ來ると云ふ事に爲つて、萬事は御前久江が世話をするやうにと旦那さまからの御頼みも有り、まア私が何角につけて御前さんの御世話をば爲ますからね、どうか其つもりで安心してね」。

　是が久江の切り出しの口上、その何と無く意味有りさうな、何處やら一言一言毎にづゝしり耳に響き入る重みの有るやうな、それを氣味わるいと云へば云ひ得る奇妙な口ぶりなのであつた。奥さまが御弱いゆゑ、奥さま代はりに邸中の事は何でも其手一つで掻き回して居るとの口上なのであつた。御前阿絹の世話をする役目であるとの口上なのであつた。只の奉公人を何う、そのやうに世話をしなければ爲らぬか一寸分からぬが、とにかく然う云ふ口上なのであつた。御前阿絹もそれ故安心してとのさりとては、些し口幅過ぎる口上なのであつた。安心しろと云つたとて、何もそれ程むづかしい事も有るまいとしか思はれぬに、それ只をかしい口上なのであつた。

　をかしく、怪しくも阿絹は思ふ。不快の上に危惧は加はる。何と無く寒氣がするや否や、刹那又打つて變はつて頭が重くなりさへした。

　いよ／＼硬ばる。いよ／＼無言。

　久江と桝取とは只妙に顔見合はせた。

　「ね、それだからね、阿絹さんと」再び久江が切り出した。「一寸早速只是だけ、著物は揃へさせましたのよ。ね、すぐ御著代へなさいよ、今。さ、どれが好くつて、云はゞ御目見えのやうな今夜の事ゆゑ、こら此矢絣の是

さア御殿女中見たやうで丁度好いのよ。こはれて居るなら結び直す處だけれども、好い塩梅にその頭はそのとほり奇麗で、今別に何も結び直すには及ばない。ね、さ、だから早く、さア此矢かすりをね。好い事ね」と一人でしやべつた。

阿絹ますノヽ只氣味わるい。さりとて其、著ろと云はれる言葉を拒んで、敢て從はぬと云ふ處まで押し切つて仕舞ふほどの勇氣も無い程初心なのでもある。一時怖いやうな、氣味わるいやうな心持ちに取り詰める迄となる、上氣もする。金色か銀色か織り綾から一種の光りを射る共帶地さへ今は稍凄くもある。欲しいの、著たいの、身に著けたいのといふ乙女心は疾くに消えて共著物などが却つて怖ろしいやうにさへ見られるのである。

身を縮めて後へ退つて「あの、一寸待つて頂戴。あの私……どうもこんな著物では……どうも此、こんな著物を私、こんな私が著るなんぞと」と云ひノヽその目は寧ろ怒りをさへ帶びて、「こんな物を著ろと仰やつたつて田舎者にどうして著られるもんでしやう。何ぼノヽ樂な好い御奉公だからつて、こんな物を著よと仰やるなら私たゞ妙になりますわ」と共語氣も早烈しいのである。

「をかしいのね」と久江が些しせゝら笑ひをも交ぜた「樂な御奉公なればこそこんな好い著物を御上から下さるんぢや無いか。嬉しがりさうなものを……をかしいのね。こんな好いのを著ろつてへなら、妙になるつてね。とは何、それこそ妙だわ、わからないわ」と、是も目に角立てた。

しかし阿絹は何とも答へぬ。只さしうつ向く。その顔は蒼ざめた。

久江は楫取と目と目と見合せたのである。忍ばせてゞはあつたが、舌うちしたのでもある。

「好い物著ろつてへに、何が妙なの、え、阿絹さん。そんな、をかしな駄々を捏ねられて居て、私たちが不行き届きのやうに御上に思はれるのは私や否だ。ね、楫取さんさうぢやありませんか」。「全くです」。

楫取はそれ迄むしろ庞胸を抜かれて居たのであつた。美服と見る、すぐ震へ付くと豫察したのが外れた案外に肝を消して、却つて女の身の久江より意氣地無く、呆氣に取られて居たのであつた。が、楫取さんさうおやありませんかと迄差し紙を付けられると爲て、始めて聲も凜とする。

「全くです。妙だといふのが妙ですな。わからない。何が何だか。あツ、こら、阿絹さん。これさ、阿絹さんと云ふに返事もせず、分からないのか何か譯が」。

しかし、其言葉は空を過ぎた。答へと爲つて肝心の阿絹から何の酬いも來ぬのであつた。

又二人は目と目と見合はせた。

突如、阿絹は席を離れて、つと部屋の外へと出さうにする。是はとまた楫取等は仰天した。肱を伸ばして楫取おもむろと其手を押さへ止めて、聲さすが最う暴い。

「どうするんだ、失敬な。ことわりも無く逃げ出すなんて。こら、おい、何とかしつかり云はないのか。人馬鹿に……手遊物にばかりは爲れないぞ、おい。著物が否だつてのか、おい」。

その言葉の終る頃、はや既に阿絹の兩手は我と我顏を掩つたのである。

「泣くの、あら」と久江が只。

「泣く？　えツ」と楫取が。「はつて、いよ〳〵可笑しいぞ。笑ふべきに泣く。落ち著くべきに逃げやうとする。おツどろいちやつた」。

噛みしめるやうには云つたが、押さへたその手は猶弛めぬ。弛めぬが最う阿絹は敢て逃げやうでも無い、固まつたその身は疊の上に縮み付いた。

同時、襖のあらく開く音。また別人が入つて來た。

第六回

入つて來たのは若い男で、楫取も久江も氣色を變へた。阿絹を押さへた手を楫取は兎にかく離す。飛び退るまでの態度でべたりと座つて、如何にも仰山に一禮した。久

江はと云ふに、是はその態度の仰々しさが梶取ほど甚しくもなかつたが、兎に角阿絹へ對するのと打つて變はつた樣子になつて、追從笑ひと云ふべき早速の笑顔がその面に催したのである。

「いや、是は若旦那さま」と梶取聲柄から頗る忙しい。「御用でゞもありますか、何か共。御用なら唯今そちらへ參つてゞも伺ふ事に致します」。

語氣の忙しいも忙しい、突きあげるやうな調子の勢ひには如何にも〳〵慌てたらしく、殆ど目をも白黑二色にして、汗さへ額口からにじませた。

梶取に若旦那と云はれた男といふのは如何にも其呼ばれた稱呼のとほり明日浦社長の長男であつた。胤が違ふとか腹が違ふとか、世間では噂するとか云ふが、とにかく其顏だちから樣子合ひまでが親とは殆ど冰炭の相違である段、正にその名が親のは剛造、子のは道之助と是また殆ど相反して居るやうなのと如何にもよく相應して居るとか、是また、取り沙汰なのであつた。

道之助は梶取の言葉を耳にも入れぬ體、目ざし只嶮しく梶取から久江へ掛けて睨みを加へて、つと阿絹の身近に差し寄つた。

「若旦那樣〳〵」と梶取猶も息を切る。「突然の御入來ならば何か至急の御用向きでゞも……もし然らば、今すぐに私が……」

「宜しいよ、何でも」と言葉なかばで殆ど叱つた。

「何でも宜しい。おれは己の思慮が有る。おい、こら娘さん、御前名は何と云ふ。會社の工女なのだな。何と云はれて連れて來られたか、え、御前は此家へ。え、こら、そして誰にだ。この梶取といふ者にか。梶取といふものに何と云はれて連れて來られたのか。聞きたい事が有る話してくれ」。

その語氣は中々暴い。暴いが、只聞いた丈で考へても阿絹その己れの身に不利益な事の有るべきをその若旦那と云ふ人が知つてゞも居て、何とか味方にでも爲つて呉れやうとの考へから、今さう突然むしろ暴々しくその場

へ割り込んだ事らしいと流石推察せなくも無かつた。

時間こそ然ほどでも無い、美くしい著物抔差し付けられたと同時、掩ひかぶさる凄さ可怖さを感じて、阿絹はさながら死地にでも陥つたやうな心もちに爲つた程の場合ひ、されば又跡も先も無くその儘逃げ出さうとさへした程の場合ひ、舟ならば難破、家ならば火に包まれたやうな刹那、たちまち見當たつた板子のやうなもの、注がれた水のやうなもの、明日浦の若旦那といふその人の出現には只それだけで阿絹は生き返つたやうに爲つたのでもある。

縋れると思へば今は扨あはてゝ逃げもせぬ。問はれるならば答へもしやう。否、問はれずとも進んで云ひたい。と、しかし、只思つた丈であつた。と思つた丈で、扨口は利けぬのである。また上氣した。只さしうつ向く。

「え、こら、話して貰ひたい。此桿取に何と云はれて連れて來られたのか、さ、それを話して貰ひたいのだ。全く承知の上でか、それとも何とか譃言を吐かれてか。どうだ、こら。是非聞かなければ無らん事が有るのだ、こら」。

堪りかねたらしく、久江が顔の色から變へて掛かつて身もだえして「をかしいンですね、若旦那さま、何を此子に御聞きなさるンです。私たちは大旦那さまの仰やり付けで、この子を連れて參つて來た丈なンですわ、何をあなた樣が御聞きならうとも、私達は大旦那さまの仰やり付けどほりに……」

「默れ、惡婆、引ツ込んでろ。親父の命令通りにするなら爲ろ。己が此子に聞く丈の事を聞くのを妨害する權が貴樣に有ると思ふか、やい。ふざけるな」と睨め付けた。

若旦那さまと云はれる身分、その道之助が叱り飛ばした相手と云ふその久江は叱られて直鎭まらうでも無かつた。

「御聞きになるなら何をでも御聞き遊ばせ。けれども若旦那さま、此阿絹さんてへ子は桿取さんが大旦那さま

の仰やり付けで只今こゝへ……」

「諄い、わかつた、幾度も聞いた」と道之助は又跳ねた。「その事を聞くのぢや無い。阿絹と云ふのか。そんなら阿絹と云ふ此子に聞きたい事が有るのだ、親父の命令で此女の子をどうしやうと、夫は後で貴さまたちの隨意だ、勝手にしろ」。「ぢや何を御聞きなさるンで?」。

「聞いて居ろ」。

跳ねて〳〵跳ねられて、流石主家來の間柄、久江も怯み氣味となる。其顏を、只、眞紅にして、唇をさへ震はせながら、何をどうすると云ふのでも無し、また其儘鎮まらうとするのでもなし、只一寸默りは默つた。

すぐ道之助は阿絹へ寄る。

「阿絹さんか、おい阿絹さん、突然に聞くと云はれたとて、氣味も嘸惡からう、又譯も分かるまい。本來こんな人間ども」と梶取等を尻眼に掛けて「こんな人間どもの居る前で、問ふの聞くのと云ふつもりでも無かつたが場合が場合ひ已むを得ん。で、直聞くがね、手短かく只問ひに應じて要領だけを……いやさ、肝心の所を……ね只その正味の所を云つて呉れ。或ひは又御前の身のために爲る事を己が料らつてやらんとも限らん。さ、其眞先には是だ、此一問だ、ね、斯う云ふ事を聞きたいのだ。御前は何のために雇はれて此邸へは來たつもりか、梶取が何と云つたか、さ、是だ」。

快辯きはめて直截的に、てきぱき宛がら利刀である。利刀その鋒鋩を差し付けられて、ぎよつともする。さ、わがため揮はれると思へば凄い晃めきも頼もしい。阿絹嬉しさに此度は却つて又總毛立つ。

「それですよ、怪しいの。怪しいと思ふんです。どうでも只の奉公ぢや無いと私今氣が付きましたの」。

「うンむ、只の奉公で無いと?」

阿絹その目は異光を射る。異光は梶取と久江とに刹那只ほどばしる。

「どうして、あなた、只の事が。御小間遣ひにと云はれましたの。來て見れば、こんな奇麗な柔ものすくめ、

縮緬を著ろ、繻子をメめろと――日髪にしろ、白粉を塗れ――紅を塗れと――あの、それぢや全く只、只其、あの……」と云ひよどむ。

「さうか、分かつた、いよ〳〵だ」と道之助は切齒した。「意味の有る御小間遣ひにだ、全く」。

「へえ」と阿絹は勿怪な顏。

「何でもよろしい。夫からどうだ」。

「夫からは」と云ひ掛けたが、何處までも初心である。

「それからは、えゝと、夫からはと――夫つきりですわ、夫つきり」。

ても扨も斯くまで初心か、斯くまで人擦れぬ木地のまゝの若枝か。斯くまで塵に染まぬ野の花か。と、思ふ。思ふ丈、それが只欺かれ、甘言で只殺され、只殘忍のなぶり物に爲り終ることかと又思へば、怒氣いとゞ道之助の面にも燃え立つた。

「それ丈か。それ丈としか知らんか」と道之助は疊み掛けた。「だな。如何にも然うだろ。然うだらうとも。只御前のみでは實は無い。幾人も是までに御前のやうなのは有つた。有つて、其都度、此おれの耳にも入つた――入つて其時は最も事の終りと爲つたのだ、さ、阿絹さんか阿絹さん、構はんから話してくれ、ね、是から篤と聞く一切を。楫取がこゝに居る。丁度なほ宜しいぞ。御前が噓を、若し吐くとすれば、却つて楫取が打ち消すて。公明にする。おれは決して秘しては爲ぬ。さ、然らば阿絹さん、箇條を立てゝ聞くとする。噓云はんで眞實の事云つてくれ。ね、怖がるんぢや無い、決して。親元から離されて來て、されば、御前には人間といふ人間が一切仇敵のやうに見えるだろ。おれの云ふ事も氣味を只惡くのみ思はれるだろ。さ、其處だ、さう思つて呉れずにね眞實の所を云つて貰ひたい。ね、受け合つてとも云はれんが必らずしも力にならんといふ事も、或ひは無いと思ふのだ。ね、よしか、分かつたかね、阿絹さん」。

疾風の如き早言ではあつた。早言だけ語氣只するどい。鋭いが、其鋭いのが只今、不思議に賴もしい。冷笑はれ

ても笑顔ならば、其他人に對してさへ却つて繼兒は笑みで受ける。

嬉しさは阿絹の胸に込み上げた。つと涙さへ差し含んだ。

涙其一滴は無言、しかし其無言がなまじひの千語万言より道之助の胸に浸みた。是また目蓋すこし濕む。一寸して只の口のみの深切にも誘はれる程の脆い涙を、さればそも／＼何人が可憐なる無垢の孱弱いものに貯へさせ湛へさせたかと、もとより是は腹でゞある、が、面上にもあり／＼夫だけの意味は現れたのである。

道之助は斯う云ひながら、見るとも無し不圖目に付けたのは阿絹の右の手の指であつた。

勞役に從事するとは云ひながら、糸取りを主とする阿絹の事とて其手の指は太くもなかつた、否、むしろ骨太では無かつた。それながら湯浸しにする事とて、殆ど烹えて、或はぶよ／＼肥りになつた樣にも見受けられた。素より是丈の事ならば、何も甚しく怪しむにも及ぶまい。さりながら其指の爪、其爪は片手の五本の指に對して五枚の内、殆ど其三枚は大抵脫けて無いのであつた。

記事を進めてやうやく茲に至り、此小說の起草者は謹んで滿天下の同情有り、涙有る人士に向かつて、工女も工女、糸取りといふ工女の如何ほど殘酷なる待遇をその資本主から受てるものか、如何ほど人並みに法律で保護されるべき幸福に洩れて居るものか、如何ほど其迚も脫離し得ぬ工場といふ牢獄に於て修羅道の苦惱を受けるものかを、而もさうされて夫を訴へるべき口を持たぬ哀れなるものに爲り代はつて、敢て是から訴へやうとするのである。都人士の其苦境をよく御承知無いのは御尤もである。其苦痛の呻吟は機械の音に消されて居る。さりながら汽車に乘つて、郊外數里の田舍に諸君の身が運ばれると共に諸君の目に入るべき夫れ等工場の煙筒から吐き出される煤煙は其の工場の中で工女何人かゞ血反吐を吐いた、それから立ち昇る一種の腥い烟なのである。重ねても繰り返す、阿絹のその指(左はまだ／＼無難であるが)

その右の指の爪の三枚は脱落してしまつて、其代りとして後から生えた柔かい、是また爪のやうな物が赤肌の肉の上に乾からび付いて居るのである。

如何なれば爪は然うなつたか。

曰く、烹え爛れて、終に脱けてしまつたのである。

曰く、糸取りとして竈事に當たり、定まつた熱度の湯即ち熱湯繭を烹る、その湯の中へ工女は始終指を入れなければ爲らず斯くて遂に其爪は烹える、斯くて遂に其爪は茹でられる。斯くて遂に其爪は性を失ふ斯くて遂に其爪鎔けて、粘液のやゝ固まつたやうなものにもなる。斯くて遂に其爪は脱ける。斯く又た新らしく柔かいのが備さに人界釜茹の刑に逢はんがためいぢらしく又芽ぐむのである。云ふ迄も無し、劇烈なる痛みは其爪の夫だけの經過に伴なふのである！

第七回

「生れ付きの不具で指が其やうに無いと云ふので、夫ならば、無いのだね。もと〳〵前には當たり前に矢張り有つたのだね。聞いては些し知つても居る、糸引きをして鍋で烹て、とう〳〵さう云ふやうに爲つたのか」。

又無言で阿絹はうなづいた。

「はて、やれ、實に。扨實に驚いた。それでは烹て、烹えて、また〳〵其肉體に生えて居た爪が、嗚呼、とう〳〵抜けるまでに爲つたのか」とばかり聲は顫いて「うンむ全く驚いた。さ、痛くは無かつたかね、いやさ、嘸痛かつた事だらうね」。

暴々しい調子ながら涙のこもる一言には阿絹我知らずまた涙誘はれずには居られなかツた。挨拶の聲を出すどころでは殆ど無い。目はたちまち只一杯……

「驚いた〳〵、肉體が烹えて解ける、地獄の責めとは成るほど是だ。さ、泣いては分からん、分からない。阿絹さん、此今日の世の中に有り得べくも思はれぬ事が其とほり現在有るとすれば、又それが其所へ至るまでの間に推量の殆ど付き難い程の恐ろしい色々が必らず有つた

に相違無い。さ、押し切つて開くがね、爪がさう烹えて抜けるまでにしなければ絲は引き出せんのか。なる程湯が熱い、それ故指も爪も烹えるのだろ。しかし、さう云ふ熱い湯にもせよ絶えず、若くは永く指を浸して置きさへしなければ何も指や爪が烹えて性が無くなる迄に立ち至りもせまい、さうだろ」。

阿絹は又うなづいた。うなづいたが此度は早涙さへ止め所無く、云はゞ殆ど泣く〳〵うなづいたのである。

その涙を見つめた儘、道之助は稍しばらく語も無かつた。楫取はまだ懲りぬ。

「御言葉の中ですが、爪が抜けますのは絲引きの通常なのでして、別に何も不思議と云ふ事はありませんのです、はい」とばかりで、暫時相手の氣色を見て「絲を取るがために爪が抜けるといふ、只さうばかり云ひましたり、又聞きましたりしますれば如何にも殘酷のやうでございますがな、しかし、夫は職業の上の事ですからな、致し方はありませんのでな。早い噺しが命をさへ職務のために失ふのがむしろ當然、巡査が賊に斬られたと云つて、巡査たらしめた事を無慈悲とは素より云へませんのでな」と爲たり顔に捲くり立てた。

「尤もらしい事を云ふね」と道之助は冷笑した、「しかし、楫取、今おれは御前と議論する必要を感ぜんのだ。無論それ故御前の横合ひからの辯解を聞く必要を認めんのだ。只おれは此阿絹さんとか云ふのに深く試みる丈の必要を認めたのだ。ね、もし、阿絹さん、沸湯へひたし續けゆえどうしても爪が抜けるのだろ。一日の大抵、その十五六時間の永の間を烹續けにする故烹えるのだろ」。

阿絹またうなづいた。

「そこを聞きたい。なぜ然う浸しつゞけにする。もすこし緩やかにだね、さう浸しつゞけと云ふ程でないやうには出來んのかね、どうしても」。

阿絹は急に掉頭をふつた。

「あの、それは出來ませんの」。「なぜ出來ない」。「浸しつゞけにしませんで、指を鍋から外へ出して置くと云

ふのならば、そりや御休みにしないぢや全るで出來ない事なンでしやう。さア、その御休みが自儘には出來ませんわ。御休みにしないで毎日仕事をするとして居るとすれば、そりや最う些の間でも怠けちや居られませんわ。怠けるといふ程で無くつても、些しでも手明けにして居た日には見巡りさんに寒竹で打たれますわ。ですもの、どうしたつて指は鍋へ浸しつゞけと爲りますわ」。

「さうかな」と嗟嘆して「すると、然うして働らくのは大抵一日何時間だ。何時から何時までだ」。「いゝえねそれは世間へ向かつては規則は是々ですと旨くして見せますがね」と漸く楫取をも尻目に掛けて「本當は規則抔とは大ちがひ夏も冬も寢るのは九時でそして、夏は二時冬は四時、さうなると最う起されますの」と又すこし涙ぐむ。

「待つて呉れ。聞き直す。寢る時は夏も冬も夜九時でそして起こされる時は冬は四時夏は二時だと、斯うなるか」。

「さうですよ、そのとほりなのですよ。全く嘘ぢやありませんの。嘘と御思ひなさるならば……」と阿絹は楫取を又も〳〵尻目に掛けて、怒りは其目にも早ほのめいて「此方に御聞きなすつても……」

「よし、宜しい。それ丈は分つた。楫取そのとほりなのだな」。

「御意でございますがな」と楫取は乘り出した。「決してさう早く起こしたくはございませんがな、工女の銘々が兎角怠けましてな、一人前に宛てゝある仕事を手早くは致しませんのでな……」

「嘘ですよ」と阿絹は身もだえした。「早く早くつて、急いで早くすれば仕上げが悪いと云はれて、打たれたり御飯を食べさせられなかつたり……」

「待て、御待ち、阿絹さん、御前は後で云つて呉れ。楫取、御前が口を出したがる故、そんなら御前に一寸聞くが、工女が兎角怠けたがる故、すなはち早ゝ起こすのだと云ふのだな」。

「御意にございます」と揉み手をして「御承知の如く夏は養蠶の、目貫きに忙がしい時節なんでしてな、一人の所も二人にしなければ追つ付かないと云ふ位、それゆゑやむを得ず、然う早くも起こしますがしかし、若旦那さま、二時に起こすと、夫は〳〵口では然う申しますがな、どうして〳〵延つたり反つたり、二時の拍子木が二度までも鳴りわたつてやう〳〵床の中でもず〳〵動き出す位でしてな」。

「それは已むを得んぢや無いか、若いもの共だもの、まして疲れ切つても居る。眠がるのは當然だ。それだから二時に起こすと云ふのか」。

「御意にございます」。

「好い加減に噓惚けるが宜しい。おい桿取、御前は工女に對する言葉を以て同じく吾々に對する氣か」。

「へえ」と桿取俄に嶮どい目色に爲る。

「へえも無いものだ。眠がつて仕事が捗取らんと云ふので、澤山寢かさず早く起こすと云ふのか。それを御前は本氣で云ふかこら。早く起こすも宜しい。相當の睡眠時間を與へずに置いて、それで誰がよく目を覺まして活潑に仕事が出來ると、さ、御前は思ふのか。御前はわが身を抓つて痛さを知らんのか。ましてや若ざかり、眠がりざかりの工女どもでは無いか。辻褄の合はん事を云へば云ふ、大概にするが可い」と其末は甲走つた。「何、しかし、そんな事は何うでも宜しい。御前に云ふ必要は素より無い。只、たしかに此阿絹さんの云ふとほりかと云ふ點だけを御前から聞いて置けば十分だ。ね、そこで夫ならば冬は四時に起こし、夏は二時に起こしたと云ふのだな。そして、双方とも共寢かす時間は夜九時と云ふのだな」。

「もし一寸」と阿絹が挿まつた。「九時とは云ふンですが、それも何うかすると、遲くなる方が、どつちかと云へば多いンですわ。正九時に、おや、今夜は寢られるのよと、偶に云ふ晩が有つて、其時はどんなに嬉しいか知れません程なンですものを。九時なら早いンですわ」。

眞實には何も怖ろしいものも無い。かよわくは見えても一念である。阿絹は今只臆面も無く云ふのであつた。

「正九時に寢られゝば、それが偶だと云ふので、どの位嬉しいか知れんとね。なるほど、只其口上だけで其平生の九時より遲いのが察せられるね。さすれば斯うと九時から十十一十二一二三四、さア四時までゞたつた七時間、眠い筈だ」。

云ひ切つて道之助は桝取をきつと睨めたが、桝取は只下を向いて、睨まれた其するどい目光を一向認めなかつたらしい。道之助は猶續けた。「碌に寢かしもせずに置いて、そして怠けるの、眠がるのと云つて叱つたり、叉打つたりするか。あつは、是ほど凄まじい事は然う有るまいな。桝取、さりとては凄まいじ事ぢやないかな」。

無言で桝取はうつ向いて居た。

「そこで叉阿絹さん、そんなに寢かされないで眠くなるとしてだね、それでも何うにか斯うにか寢ずにそれ丈の仕事は出來るのかな」。

阿絹は怨めしげに目を据ゑた。

「出來なければ叱られるぢやありませんか、口で叱られる丈ならまだ、有り難いと思ふ程なンぢやありませんか。叱られる、それと一所に寒竹で打たれずには濟みませんわ。寢が絶えたら話しですわ」。

「生疵も、さういふ譯ならば、或ひは矢張り受けるだらうな」。

「疵？ 疵も絶えませんわ。打たれた疵が無ければ火傷の疵……」

「火傷？」道之助身は入り込む。

「爪の拔けるのも、まア、火傷なンでしやう。一度に成た疵ぢやありませんが、やつぱり當たり前の事なンぢやありませんのでしやう」。

「火傷といふのは其事か」。

「あら、ま、あなたは――まア、そんなら最う些し聞いて下さいまし。一口に火傷と云ひましても、そンな、爪の拔けるやうな、優しい火傷なら、まだ／＼我慢も出

來ますの。さうぢや無いンですもの」。

「爪の拔けるのが優しいのだと？　爪は拔けてもまだ其位なら可いと云ふのか」。

阿絹は又うなづいた。

「驚いたね。爪の拔ける位平氣だとえ。爪の拔ける位は平氣になる迄の、そんなら又それ丈より猶恐ろしい苦しみが實際有るのだね。驚くね。驚くも驚く、公然と臆面も無く斯う陳述して居る工女の有るのを默然として聽いて居なければ爲らぬ者もまた何さま有るのだね」と冷笑と共に桿取を道之助は又睨め付けたのである。

さりながら桿取は相も變はらぬ無言であつた。

「絲引きで只爪が拔ける位なら――そりや苦しいのは苦しいンですけれども――まだ腹は立ちませんわ。鍋で湯を沸かして然うして絲引きをして居ながらつひ、其眠いもンで居ねぶりも出るのでしやう。すると今云ふとほり寒竹で打たれるのでしやう。その當座目は冴えましやう。當座、打たれた痛みの殘つて居る間はさうでも無く。又眠くもなるンでしやう。意地にも我慢にも眠くなるンでしやう。眠くなつては本當に自分で自分の眼が憎らしくなりますの。あゝ何うしたら斯う眠がるだらう。眠がればいづれ又ひどい目、その酷い目に逢ふと知りながらなぜ畜生、あの、此、役に立たずの憎い目と、自分で自分の目が、もし、あなた……」とばかり急き上げた。

「うンむ、わが身でわが身の目が憎いとねツ？」

「つぶして仕舞ひたくなりますの」と阿絹は身をさへ震はせた。「眠くなりませんやうにと、嗚呼、若旦那さま、御聞き下さいまし、藥屋へ行きましてね……あの藥屋へ行きましてはね、みんな工女が……御聞きなすつてどうぞ、若旦那さま、一錢づゝ薄荷を買つて來ましてねいつでも目に塗るンですの」。

「薄荷を目にツ？　爛れるだろ。無論目の緣にだろが爛れるだろ」。

うなづいて阿絹は泣く。

「薄荷を塗るのは亂暴だね」と、道之助は嗟嘆した。

「しかし、又よく考へも考へたものだけれども、さう迄爲ずとも可さゝうにと思はれなくも無いがね」。

「考へ切つた上ですわ。工女といふ工女が考へた上、段々その後のへ夫から夫と教へるンでして、さうなンですわ。けれど、どうせ薄荷だつて然ういつまでもよく永く利いて居ると云へませんわ」。

「それで、薄荷も利かなくなるか」。

「利かなくなりますの」。

「すると何うする」。

「夫ですよ、空歌です」。

「歌をうたふか」。

「仕方か無さにです。死にくるしみでゞす。泣くより幾らか可いと聲あげて歌ふンです。歌ふのは泣くのです！」

田舎娘の一工女、しかし其云ふところは純然たる詩人である。道之助の胸先は又きりきりとしたのである。

「さうかなア」と投げるやうに聲放つて道之助は暫時瞑目する。一座只寂とした。際立つて耳に立つのは其途端阿絹が鼻をかむ音のみで。

「さうかねえ。嗚呼、さうかねえ。泣くより幾らか好いので歌を唱ふのだとは、扨も扨も何たる悲惨な事實だらうか。征人が胡笳を聞くとは、嗚呼、そンなやうなものだらうて、地獄だね、修羅道だね。工女にさう云ふ思ひをさせ、血を吐かせ、肉を絞らせ、天惠に浴して此世に生まれて來た蠶に釜茹の死刑を與へて、その死に骸から絲を取つて、嗚呼、貴族とか富豪とか云ふものは現世の鬼どもの間に誇るのだ。法律が何處の保護して居るのだらう」。

目から火も燃えるかと思はれる計り、怖ろしい顏つきで桿取から久江へ掛けて道之助はぎろりと見回した。その日の果をおさへ止めて、久江はやゝ急ぎ込んだ。

「どう遊ばすのです、若旦那さま、御聞きになる事が御有りならば、御聞き爲さるも御勝手ではございますがしかし私どもは大旦那様の仰やり付けで……」

云ひ掛けるのを聲で潰して、「又出掛けるか。默つて居ろ。貴樣たちがどう云ひ付けられやうと、己の知つた事では無い。聞き正す事は幾許も有る。どうして直終るものか。敢て此處に居ろとは云はぬ。もう貴樣たちに用は無い。行け、勝手に出て行つて差し支へは些しも無い」。

「でも、しかし、大旦那さまの……」と、久江はます〳〵諄くなる。

「分からんのか、强情な」と道之助は早大喝した。

「親父が何とでも云ふのなら云へだ。親父に云ふ己の意見が有る。命令を奉ぜんとて親父が貴樣達を責めたならば親父に向かつては斯う云へ。さ、道之助の奴が邪魔して何うにも爲りません、と。さう云へば貴樣たちの役は濟む。罪惡に與して同罪たるを敢て喜ぶ木偶の坊の役はそれで濟む」。

「若旦那、何もさう烈しく仰やらんでも何も……」と楫取は氣色ばむ。

氣色ばむのを尻眼に掛けて、又も〳〵冷笑して「親父は最う歸つて來て居る時分だ。歸つて來て居るには違ひ無い。さりながら、よし歸つて來て居てもだ、敢てこゝへ來ると云ふ事は出來んのだ」。

久江も楫取も返事はせず、二人とも當惑きはまる顏つき、只互ひに顏を見合せた。

折も折、障子が開いて、顏さし出したのは小間遣ひで席の一同の顏を心配らしく銳く見やつて、「大旦那さまが御歸りで……」

えつと久江と楫取とは狼狽氣味できツとなる。

「皆なさんに直御出でになるやうにと」。

「御居間へか」と楫取は押しかへして、其儘八の字を寄せた。

第八回

楫取も久江も躊躇した。

久江には主人、楫取には准主人にあたる其いはゆる大

旦那さま若しくは社長の明日浦さまの御召しと云つては神の命令ほど大切と見倣さなければ爲らぬと其久江も其楫取も常から心に思つて居る。たとひ其本心は何うにもせよ、上部丈でもよろしいが、兎に角さう大切に思つて居ると十分見られるやうに爲なければ爲らぬとのみ思つて居る。その命令は今や下つた。されば何を捨て置いてもすぐ參らぬ譯には行かず、さうするのは何でも無いが二人が二人そこから去つて、後に只道之助と阿絹との兩人を其儘の有樣で殘して置くと云ふ事は何う思つても心掛りの至りであつた。楫取や久江が居る前でさへ若旦那の權力を笠に着て道之助が勝手に振る舞ふ仕儀、今更に又二人が其所を空にすれば、決して碌な事は無いと、二人が二人、口にこそ出して云はぬものゝ、腹の中では殆ど同じだ。それ故共に躊躇もする、互ひにさも當惑げに顏と顏と見合はせた。

「どうした」と道之助が。「二人共呼ばれて居るのにさア何が氣になるか。あはゝ、氣になる所も有らう。しかし、已むを得んからね。さうぢや無いか、え、楫取」と其云ひ方から人が惡い。

煮え立つやうに胸は爲つたが、ともかく御氣に入られなければ爲らぬ社長さまの、其、とにかく子たる道之助といふ相手である。

「御命令とあらば」と楫取は夫でもやはり前こゞみに爲りもした。「御命令とあらばです、されば大旦那さまの御命令とあらばです、御命令どほりにも致しましやうけれども」と又當惑らしく久江を見やツて「此子を捨てゝ置けと云ふ迄の御命令には接しませんのでな、一部分だけは明亮になつた御命令で、他の、まだ不明亮の點も有りますのを其儘では何うも……」。「會社の重役と云ふ者は恐ろしく責任や命令の範圍問題をやかましく云たがるね。夫では已の命令は聞かんと云ふのか」。「何も必ずしも、その、夫は、はい……」。「何の事で、馬鹿々々しい。ぐづ〳〵云ふ席が有るか、こゝに。行けと云つたらそれで行け」。

要するに桿取は何とか口實を付けて、二人の中一人だけは其場に殘つて阿絹の見張り役、また阿絹と道之助との物語りの邪魔役と爲らうとのみ、只又その心のみ急迫らせた。急迫らせたと云ふ丈で、さて何のはかぐ\しい其智慧から口實を生み出さうとするでも無い。咄嗟、斯ういふ際に迫つたところで何の然るべき分別も出ぬと云ふ丈で大かた其人物も知れて居るものを、更に又そのやうな劣才のもの共を事務長とまで云ふ重い役目に任命して居たとの事實、その子細の如何やうであるかと云ふ處を坐ろに又道之助は思ひやると共に、なる程わが親の經營の下に在る一切の事實とは云ひながら、何と辯護の付けやうも無い、殆ど沙汰の限りであると心でひそかに歎息した。

× × × × × ×

更に又一二の押し問答は道之助と桿取等との間に行はれた。行はれたと云ふのは形式だけ、結局は二人が二人ながら矢張主人風のいくらか吹く道之助には强壓されて一も二も無く退去を遂に强ひられた。斯くて二人の去つた後はいよ／＼更に切り込んで道之助が阿絹と對座して是までの一切の事實、如何ほど殘酷な境遇を工女として受けたものか、十分くはしく問ひ究める事と爲つた。

物語りも是からが漸く其正味に入る。

第九回

不承不承久江も桿取も追ひやられた。後見送つた道之助は形ばかりの笑みを顏に浮かべて、其儘暫時は無言であつた。

暴雨急電の最中は恐怖に克たれて却つて騷がず、收まつた後で怖がり出す類、桿取等の立ち去ると共に、そのやうな恐ろしい者どもを逐ひやつた人も有つたかと思ひ浸みると共に、今までの恐ろしさの心持ちが餘力を胸に打ち返して來て、一層の怖ろしさも怖ろしさを阿絹は覺えて、更に又それと同時に道之助を只神か佛かのやうに

思ひ出す、我知らず涙さへ差し含んだ。

「驚いたらうね、阿絹さん。まるで夢のやうだろね。大抵は譯も察し得たらうからその說明抔は後の事として今も此己が云つたやうな事、御前の是までの經歷に就いてを便宜聞きもし、聞かされもしやうと思ふのだ。有り體に、夫故、云つて御呉れ、ね、分かつたか」。

阿絹はうなづいた樣子をば示した。が、只無言ではあつた。

「肝を潰して固まり付いて仕舞つて、一切に油斷をしなくなつたか知らんが、ゆつたり落ち着いて呉れても宜しいのだ。切角の、肝心の話しが中途で一旦挫折したがそこで先程の續きだがね、さうして爪が拔けると云ふ程の難ぎに逢つても、其御前たちが云ふ見巡りさんや何かたとへば彼の稼取等の連中だね、あれらは皆些しも構はんのか。いや、構ふの構はぬのと云ふ點に付いて聞く前に、さう拔けると迄爲つて本當の所は一寸我慢もできるのか」。

我慢もできるかとの道之助の問ひは只一言、夫でも早その阿絹には情無くさへ思はれた。

「我慢ができるかつて御聞きなさるんですか。え、痛くつても、我慢のできるやうな痛みかと御聞き爲さるんですか」。

聲はふるへた。

「うむ」と只簡單。

阿絹は又も見る〳〵間淚、「ですもの、さう云ふあなたはじめ我慢が出來るか出來ないかと只さう何でも無い事のやうに御聞きなさいますのねえ」と直はや怨みがましいのであつた。

またロにこそ出して云はぬものゝ、嗚呼只是式の事にさへ、云はゞ、僻んで聞き取る程その慘酷なる境遇が質朴なる少女を一つのねぢけたものにしたのであるかと道之助は腹で思ふ。沸くやうな心もち。

「いやさ、何でも無い事のやうには思はんよ。思はん故にこそ又よく聞くのでは無いか。我慢できんほどの痛

みだね」。

「御咄しには爲りませんの」と、顔をしかめ〳〵た。「瘭疽といふ指のわづらひが有りましよ」。「知つてる。指の劇痛だ」。「えゝ、指が何でも夜寢られないほど痛むとかいふ……」。「さうだよ。だから劇痛だと云つた。その瘭疽のやうに痛むのか」。「瘭疽といふ指の痛みは煩つた事は有りませんから知りませんが、何でもそれとおンなじやうな痛みなンですと。どうせ湯出られて爪が拔けるのでしよ。湯出つゞけられて居る毎日はまだ〳〵拔ける時ほどでもありませんけれど、いざ拔けるとなつた時、又さうしてとう〳〵拔けた時半日位の痛みと云つたら、御はなしにも何にも爲りませんの」。「疼くやうに痛むのだね」。「疼くやうですとも、いえ、まア、何かで擦つてゑぐるやうなンです。迚も〳〵其時は泣くまい〳〵とも思ひ、涙も出すまい〳〵と思ひますの。思ひますけれど、意地にも我慢にもぼろ〳〵と……つひ、泣きますの。けれど泣けば又、泣けば又その上にです……と阿絹は今早さう云ひながら泣き出した。「寒竹で打たれる位すぐでしよ。仕事爲ずには居られますまい。一日いくらといふ丈の絲を引かなければ御飯は減らされましよ、寢かせられますまい。死んだが優しと思ひ〳〵死ねもせず、泣きながらやつぱり然うして絲を引く、その涙は烹鍋の中へ幾度落ちるか知れませんわ。絹絲は、若旦那さま、その涙で烹たんです」。

道之助は目を拭ふ。

「さうして苦しみ〳〵引く丈の絲を引き一日分丈の事を仕舞ひましよ。まづ是からは寢られる。寢る間だけでも切めては苦しみを逃れたいと臥床へは入りましよ。入ツたところで何うして寢られるもンですか。痛くて〳〵寢られるもンですか。と云つて大きな聲を出して呻吟れもしません。搔い卷きの袖を噛みしめて泣く。隣り合つて寢て居る工女仲間もやつぱり同じやうなのが有つて是も一所に泣く。そして、二人も三人も泣き合つて、互ひに抱き合つて指を撫で合つたり、息を吹き掛け合つたり

して、つひ誰が教へたとも無い歌をさへ唱ふンです」と今更の如く阿絹又さめ〴〵となる。

さめ〴〵と爲つたものゝ、阿絹また今は只却つて泣き入つてのみは居ぬのであつた。泣くつもりでは素より無い。つひ只思ひ出しても口惜しく悲しくて涙も出たので今只又さう泣き崩折れてのみ居ては、折角の肝心の話し色々の事を訴へやうとする其行き掛かりが却つて中途で折れて仕舞ふと流石其心は急き込むのでもあつた。急き込めば又涙を手あつく拭ひ取る。拭つても〳〵泉のやうに後から後からと出る、噴き出すやうに逆る。しかし、やがては又只其逆る儘に逆らせて、涙をば只勝手の儘にさせて、夫よりは先立ついろ〳〵の話しの方をと心からあせり立つた。もう問はれるのを待たぬ。

「そして痛んで泣いては居ながら藥でも付けて下さいとか、でなければ休ませて下さいとか、そんな事は幾ら〳〵云ひたくても工女の方からは云へませんの」と其目はいくらか怒りを示して、うるほひの在る中にも晃めいた。

「云ふと又叱られるのか」。

「叱られる所ぢやありませんの。その時が、まア、夜寢てる時としましよ、さうして、さう云ふ時泣き聲でも立てたいと思ふのでしよ。些しでも泣いて、それを見巡りさんに聞き付けられた日にはちやんと帳面に付けられますわ。付けられて、朝の御飯を半人分に減らされますわ。けれども、どうかすると、あんまり痛くて苦しくて堪らなく爲りましてね、たとひ朝になつて御飯を減らされゝばと云つて、泣かずにどうして居られやうかと、とう〳〵泣きわめかうかとさへ心に決めて、さア大聲をと其聲を口元までは出しますわ」。

うなづき〳〵道之助は肉薄して身を入り込ませて、突き刺す如く目をすゑた。

「口元までは出しながら、又、嗚呼、さうでは無かつたつけ。聲出して泣くンぢや無かつたつけと又自分でぢつと我慢もしますのよ」。

「なツぜ?」と道之助は力を入れた。

「みンなの事を思つてゞす、工女仲間の事を思つてゞす」。

聞く儘道之助その眉は顰んだのである。

「何? 一寸分からんよ。みんなの事、工女の事、それ何う思ふ」。「いえ、ね、仲間の工女の事を思はずには居られなく爲りますの。泣き聲を出せば折角よく寢て居る仲間のものゝ邪魔になるのでしよ。誰も眠いのは同じでしよ。あたし達に取つてもよく寢たいところを邪魔された心もちは惡いのでしよ。まして同じやうな身の上の仲間でしよ。いくら此方が苦しいからつて、泣きたいからつて、大聲出して、仲間の切角いゝ心もちをして居るのを邪魔するのは、ま、その味を知つてるだけ、迚も出來なくなりますのでしよ」。「あゝあ、可愛らしい心底だ。うん、そんなら他の邪魔をしたくないとて、自分はどう泣きたくても其聲をさへ呑むと云ふ……え、さうだね」。目はうるんで、「で、其泣くのを我慢するか」。「人事ぢやありませんもの、我慢もしますわ。けれども、さうするとです、さうすると、又仲間の工女が泣け〳〵と云ふですわ」。「え、何」。

又意外に道之助はきつとした。

「仲間が云ひますのよ。我慢しちや却つて苦しい、泣けば苦しみが減る、疼みが薄くなる、だから構はず御泣きよとみんなが云つて呉れますの」。「みんなが云つて呉れるとね?」。「構はず御泣きよと云つて呉れるんですわ泣けば何れ御飯を減らされる、その減らされた丈の御飯の量だけはみんなが一所に食べる時、自分のを些しづゝ減らして足してやるからと、斯うなんで……」

道之助は身もだえした。

「あつ、えらい義俠心、聞いた丈で涙が出る。自分たちの眠いのを邪魔してもよろしいから泣けと仲間の工女が云ふンだね。泣いて、明日減食の罰を受けるならば受けろと仲間の工女が云ふンだね。減食の罰を受けたならば、其減らされた丈の飯は仲間の工女が自分たち銘々の

を減らして分けて食べさせて呉れやうと云ふンだね。感心した。感に堪へん。驚いたよ、實に。眞正の情愛、純潔の心性は、嗚呼、却つて草叢の中に在る。僕は……己れは御前、阿絹さんの今の話しを殆んど大詩人の同情の涙のしたゝる淋漓たる詩のやうに聞いた。詩だ、全く詩だ。御前のは詩人の聲だ。詩人も詩人、同情有る義人の詩だ。ね、さうぢや無いか。爪は緣取りを無理にさせられて、熱湯で烹えて抜けると云ふ、それ既に魔界の詩だ。その抜ける痛みに苦しんで、歌をうたつて慰め合ふと云ふ、それ更に一歩を進めた魔の詩だ。その痛みで泣きわめきたいが、泣きわめけば減食の刑、卽ち餓鬼道の責めに遇はなければならぬと云ふ、それ又既に前に一歩を進めた魔界の詩だ。あるひは苦しいまゝ、減食の刑に遇ふ危險を冒しても、いつそ絶叫しやうかとぢり〳〵し出すといふ、それ又二歩も三歩も進めた詩だ。さう爲つたところで、然う絶叫して己れ一身の苦痛は幾らか減るとしても、可愛さうに切角わが傍では一日の疲勞でぐた〳〵になつて僅かに一睡の夢にだけ圓滿の快樂を求めて居る仲間の安眠を妨げるには又敢て忍びんで、それゆゑぢり〳〵齒を食ひしめて我慢する丈我慢すると云ふ、それ又三歩も四歩も進めた詩だ。詩も詩、同情のこぼれる詩だ。いやしい工女の身をもし泥と云ふならば、其泥は白玉の粉末の泥とも云ふべきもので、その淸らかな美くしい泥の中に天の靈光は輝くのだ」と、そのまゝ姑らくの無言の後、慨然として身を反らした。

「夫だけの無殘を斯くの如く工女に味はせる、抑もの本と云つたならば何であらう。人道が何うの、人權が何うのと何の口で誰が云へやうか。よし、阿絹さん、はつきり如何にもよく話して呉れた。大きに御蔭で利益を得た。が、猶それと同時立て續けに聞かなければ爲らん事がまだ〳〵有るがね、その爪の抜けた所だ、抜ければ痛いと云ふだろ。痛い、それに見巡りさんは藥を付けるといふやうにでも肯は折つて呉れんのかね」。

阿絹は無言でうなづいた。

「どうだツて?」

阿絹は先かぶりを振つた。

「骨を折つてくれるどころですか」。「構ひ付けんのか」。「ちよつくら一寸、どうして構ふもンですか。痛い〳〵と誰でも初めは云ひますでしやう。梶取さんはじめ何處を風が吹くてへ顏ですわ。それから幾度も〳〵云つたところで、斯う云ひますの。些しは山葵が利かなければ、眠がつてばかり居て仕方が無いと、只斯う」。「痛くても構はんと……だね」。「さうでしやうとも。けれど此方だつて仕舞ひには我慢の我慢が迚も〳〵出來ないと云ふ事になりましやう。もう打たれやうが、御飯を減らされやうが構はないツてへ氣になつて、仕事を投り出すとまで爲りましやう。さうすると、さ、漸くの事で、そンならば藥をやるからとて、藥も藥、呉れるンでなくて、賣り付けるンですわ」。「賣り付けるンだ?」と道之助は只呆れた。

「膏藥ですわ。一貝二錢づゝでみンなに賣り付けるンですわ」。

「賣り付けるとは? 賣り付けるとは? 本當に代金を取つて賣り付けるとは、その藥を? 何で爪が拔けると思ふのか知ら。その會社の仕事をすればこそ拔けもする。その社のために苦しむものを、それでも何でも其膏藥の代をまで取るのだね」。「えゝ、も、ちやんと取りますの」と阿絹いよ〳〵呼吸を切る。

「無道! 極端の壓制だツ! その藥を買はんければならんのかね。何も必らずしも其藥を買はずとも……いゝや、そして幾許に賣る」。「そりや廉いんです。どうせ私達が買へるやうな藥ですもの、二錢です、一貝。けれど、その藥を買ふの買はないのつて、外にどんな藥が有つてよく利くものか何うか知りませんものを。また、その藥は、夫でもよく利きますもの」。「何だ」。「何だか知りません。けれど利きます、膏藥です、ねば〳〵した、臭い臭氣のするやうな」。「すると、其藥を買つて塗けるンだね。幾度もつかへるのか」。「三度分くらゐですね。

一日に三度塗けますから、一日分ですね」。「すると何うしても一日二錢づゝは、御前達の工錢の中から減るのだね」。

阿絹は只うなづいた。

「けれど夫は／＼痛くしみる藥ですわ。爪の痛みとどつちかてへ程痛くしみる藥ですわ。塗けは塗けても何うしやうかと思ひますの。いつそ塗けなけりや可かつたと思ひますの。塗けて、あンまり痛いので、やツぱり泣きますと、やつぱり又寒竹で打たれますの。高い藥をやすく賣つて貰つて、治るやうにして貰つて、痛いの何のと生意氣な、どうして泣ける義理かと云つて打たれますの。打たれるのは泣かなくなる迄打れるンです。泣いたので打たれて、其打たれたので又なほ泣いて、又もつと打たれて漸く泣かなくなるやうにされるンです。あたし達には寒竹は泣かせるのと泣きを止めさせるのと兩方の役に立つのです」。

道之助胸さきは殆どきり／＼したのである。大息した。

「その時女工仲間が御互ひツこの事ですから、やつぱり互ひに抱き合つて、搖ぶつてくれたり、指を呼吸で吹いて呉れたり、さうして勦つて呉れるのです」。

また涙は道之助の目に寄せ返した。

「痛い代はりにはよく利きますの、二三人に身體を押さへて貰つて塗けて、帛で卷いて置き、一日に三度も塗け代へれば、あくる日は痛みはまるで治るンです。けれども、治るより何より、只その痛みのあンまり強いのでその藥を塗けるのさへ強面くて、つひ／＼不好になつて三度の所を二度にする、さうすると治癒が遲いツて、また小言で、とう／＼仕舞ひには又御飯を食べさせられません」。

爪や藥の物語りは兎にかく是で一段落であつたと見えて、其末の方の話しぶり語勢はやうやく平坦になつた、それも、ほんの瞬間で、すぐ又阿絹が思ひ出した又別の大きな苦惱が更に直また阿絹の口から悉しく開き述べられずには濟まなかつた。阿絹の語勢は又はずむ。

「若旦那さま、それですけれど、まだ〳〵今の事なンぞは何でも無いンです。それどころかもつと酷いのが有りますの。爪に浸みればと云つた所が、まアそりや痛みの治るためなンでしよ。まだ我慢もできますわ。さうで無い、もつと〳〵恐ろしい事が有りますの。その方は痛いところを治されるンでなくツて、痛くなつた所を痛くされるンです。わざ〳〵湯傷(やけど)させられるンです」。「湯傷を?」。「鍋の御湯でゝす」。

「鍋とは烹鍋のことか。湯とは繭を烹る其湯の事か」と問ひかへす。

「さうなンです。今御咄しゝたとほり繭を烹る熱い御湯でしやう、浸しつゞけにして居れば爪まで抜るほどの御湯でしやう。その御湯の中へ工女といふ工女が見巡りさんに怒られて、づツぷりと手を突ツ込まれて湯傷させられた事の無いのは一人も有りませんの」。

道之助ほとんど聞くに忍びぬ。顔をしかめて、「烹鍋の湯の中へ手を……それも罰か何かでか」。「なまけたとか、絲の引き方がわるいとか云ふ時に……」。「どう突ツ込む?」。「抑へ付けてゞす。絲の取り方がぞんざいだとか、眠がるとか、怠けたくてぐづ〳〵して居るとか、そんな時にです。見巡りさんが私(あたし)なら私のですね、私の手首をぐつと引つ掴むンです。掴んで、うんともすんとも云はず、いきなり其あたしたちの手を鍋ん中へと突ツ込むンです。突ツ込んだツて直と出すンぢやありません」。「えツ?」。「ちよいと突ツ込んで、すぐ外へ出させるンぢやありません」。「何だツて、すぐ外へは……夫では突ツ込んだ儘か」。「突ツ込んだツ切り……」とばかり涙また逆る。「突ツ込んだツ切り、鍋の、鍋の、底へ押し付けて……」。「押し付けて? 手をか。底へか。その熱い鍋の底へ手をか」。「さうですよ」。「うゥむ」とばかり道之助は只暫時顔しかめて、「で、湯傷するか」。

「する段ぢやありません。誰でもさう突ツ込まれると云つて默つて突つ込まれても居ません。是非きつと、我知らず手を固く握りつめるンです」。「突つ込まれると同

時にか」。

「えゝ、その握りつめた手が何れ鍋の底へ當たるンです。すると、其當たる所は手の掌の方ぢやなくツて、屹度手の甲、甲で無いとしても、指なら指で、いつでも其外の方、上の方、手の掌へ向いた方ぢや無いンでしよ」。「なるほど手を握りつめる故でか」。「さう云ふ所の湯傷ならば、仕事の邪魔には爲らないから可いと見巡りさんは云ふンです。仕事の障りになる所なら、湯傷させたら事だけれど、さうで無く絲引きの障りにならない所の湯傷ならば、其湯傷が藥になるから可いと斯う見巡りさんは云ふンです」。「惡魔！　嗚呼、羅刹の口吻だ！」。「寒竹で打たれたり、どうかすると又抓られたりする、その痕の赤斑や黑斑は、絲のよく出來る御祝儀の染め色だと斯う見巡りさんはふンです。ですもの、工女の歌とさへ爲りますの」。「歌知つて居るか。只一寸聞かせてくれんか。いや何も大聲で唱はずとも……只その文句丈を只」。

さう云はれるとなると阿絹は、しかし、羞かしいのである。薄さみしい笑みを示して、直其言葉にも乘らぬ。

「え、御聞かせ。小聲で可い」と道之助その顏は苦り〳〵切つたのである。

笑顏でゞもあつたならば阿絹は却つて羞かしがる。苦り切られた丈さうでも無い。

「え、おい、小聲で可い。聞けば又大きに考への種にもなる」。「歌なんか？」。「なるんだよ。爲るから爲ると云ふださ。どう云ふのだ」。「どうせ其、をかしいんですわ。可笑しいんでしやうよ。歌だか何だか、只口で云ふ丈の、只まづ口癖なんですもの」。「好いつてば、とにかく早く」。

同時身のまはりを掻い探つて道之助は手帳をさへ取り出した。如何さま冗談でも無い。鉛筆をも手には取る。今は阿絹も切角の志しを敢て無にするにも忍びぬ。極まりわるさうに下を向いて、やうやく、口から洩らした歌其語句は扱いやしくもあつたらうが、すべて實に血を絞る。

「あか痣に　黒あざ。
　親は　痣子に生みはせぬ。
つめられる丈　色は出る。
　叩かれる丈　色は濃い。
からだも絲も　おなじこと。
　煮られたり、湯出られたり
血の色で　染めあげて、
　末は　浮き世の　金持の
　肌身の自由に　されるぞやー」。

聲もろとも道之助は手早く其歌を寫し取つた。二度、三度通讀した。しばらくは無言と共に瞑目をのみ繼續した。扨旣に斯うなつては阿絹の方がはずみもした。

「その歌をもです」と最早一々問はれるのを待つて居ぬ。「その歌をも大きな聲では中々どうして歌へるどころぢやありませんの。大きな聲で唱つたが最期、また直と罰なンで――みンなが只口の中でうたふンですわ。妙なもンですわね、さう云ふ歌ですと、小聲で、それこそ口の內で云つて居ても、きつと目が冴えるやうに爲つて一寸又眠くもなくなりませんわ、さう云つちや濟まないか知りませんが、畜生め、會社の奴、人をこんなに意地めやがる。と云つて此方で何うする事も出來ず、歌でゞも思ひを晴らす位なものだと思ひながら、つひ其歌に氣が乘つて、まア好い心もちにもなるンですね、それで目が冴えるやうに爲りますの」。

其言葉はあとけ無い。さりながら其境遇は單純なる只の俗謠の只一篇、それ丈でさへ慰撫されて、興奮もされ鼓舞もされるほど哀れはかないものでもあるかと坐ろに又思ひもやる、いよ〱只聞く方ではしんみりとなるのみであつた。

續けざまに阿絹はます〱語り進むのみである。

「國許に居ました時、聞いても居ましたわ。國許で斯う云つて居ますわ、ねえ、馬にやる氣でなけりや絲引きには遣れないつて。どうせ最う絲引きといふものになつたらば、ちよつくら身拔けの出來るもンでなく、たとひ

又身抜けが出來るとしても、夫迄の苦しみと云つたら一通りや二通りで無く、まるで人間の此身體を馬にやつて仕舞つたやうな、又もつと夫より酷いやうなもンだと斯う云ふンですわ。はじめは旨く云はれても只欺され、來て見れば大ちがひで、さア國へ歸りたくつて〳〵ならずさうかと云つて歸るにも御金は無し、只逃げ出せばみンな捕まつて酷い目に逢ふ丈ですし、汽車の音をも仇やおろかには聞きませんのよ。音も、また笛も、つひ聞けばいつでも毎でも只涙が出るンですわ。ねえ、その汽車のごう〳〵いふ音や、笛の聲が夜なンかよウく聞こえるンでしよ。さうしますとね直また自分が欺されて連れて來られた時の事から何から一度に思ひ出すンでしよ、あゝ彼の汽車へ乘つて來たつけなア。あの汽車へ乘つて國元の停車場を出る時に、只涙が止め所無くこぼれたつけが全く斯ういふ身の上になつて泣きの涙で毎日毎日居る辻占であつたかなア。來た汽車なら行きもする。行つた汽車なら歸りもする。汽車は行つて、歸る事が出來る。乘つて來た自分たちは、嗚呼、歸ることは出來ないのか。斯う只思ふンでしよ。又、嗚呼、あの汽車は如彼して國の方へ毎日々々通つて居るものを、自分だけは取り殘されてしまつたやうなものになつて、いつ乘つて歸る事が出來るやうに爲るのか知ら。斯うもまた思ふンでしよ。さう思ふと、何處の人だか知りやしませんが、いづれ其汽車へ乘つて國の方へと行く人が有るには違ひ無いところで、又その人が羨ましくて〳〵ならなくも爲りますんでしよ。もう、さう爲ると涙ばかりが……其涙が止め所無くなりましてね、さうして只泣きますの。

「泣きますけれど、誰も仲間のもので共泣くのを不思議がるものは又ありませんのですわ。涙を見て誰も珍しいとは思ひませんの。泣くと見ても、只、その一寸の內は默つて居ますの。と云ふのが、工女で一人として泣かないのは無いンですもの。泣いたからつて、何故泣くと聞くまでも無く、その泣く心の內が疾くに最うみんなには分かつて居るンですもの」。と一語は一語より斷腸。

「もつともだ」と道之助もまた力を入れた。

「如何にも尤もの至りだ。汽車の笛も、さう云ふ境遇では決して仇には聞かれまい。察するに餘り有る。泣きの涙の噺しも亦然うだ。如何にも、何の工女も〳〵皆泣く。それらは、それ故、涙を見馴れた、珍らしがらんと云ふ、まつたく實際は然うでもあらうが、しかし、さう聞けば聞く丈猶その殘酷きはまる趣き、人權の全く無視された始末がよく〳〵局外者にも、嗚呼、分かつた上なほ分かつた」と獨り言のやうでもあり又さうで無いやうでもあつた。

さし俯向いたまゝ更に打ち返して來た涙の波を阿絹は只溢らせて居たのである。

「それで終に我慢し切れなくなつて、よく新聞などにも見えるやうな工女の逃亡沙汰となるのだね。當り前の務め丈ならば素より誰とても前以て承知の事、何も必らすしも逃亡する事も有るまいさ、ね」。「本當、本當に然うなンです。工女仲間でも云ひますわ。牢屋だつても、まだ〳〵こんな會社見た樣に酷い事は無いンださうだつて。ね、あなた、わるい事をしたのなら、牢屋へも入れられるでしよ、土擔ぎをさせられましよ。そりや夫で仕方が有りませんわ。けれども、何にも惡い事もせず、どつちかと云へば親のためや家のためで、身賣りのやうな事に爲つて仕舞つて、それで又牢より酷い所へ入れられて仕舞つたと云ふ、そンな無理が有るもンでしやうか」。云ひ方は、婀娜氣無いが、語氣は鋭く「あなたは若旦那さまですつてねえ。さうすりや社長さんの御子さんなンでしやうね、あなたは。社長さんは會社の旦那さまなンでしよ。會社の事は旦那さまの心一つで何うにも爲るンでしよ。どうにも爲る其旦那さまが私たちを今のやうな目にばかり逢はせるンでしよ……」

「待つてくれ、阿絹さん。その詰問は尤もだ。しかし己の關する事ぢや無い。むしろ事情の細かい所を己は却つてよく知らんのだ。それ故にこそ御前に聞く。己に向つては止してくれ、詰問は」。「詰問て、何ですの」。「い

やさ、さう己を攻めつけるやうな事は止して呉れと、只斯う云ふのだ」。「攻めつけるンですつて？」

阿絹は顔の色を變へると同時又忽ち涙含む。

「あゝら、攻め付けるンですつて。御免なすつて頂戴よ、御氣に障りましたら。攻め付けるなンて其樣な事あたし決して若旦那さまにする氣なンぞ……」。「いゝやさうぢや無い。それぢやあンまり早呑み込みだ。さうぢや無い。それこそ…… 御前こそ氣にするな。さうぢや無いンだ。只己に向かつて理窟だけは止してくれと斯う云つた丈なンだ。あゝ、しかし、それにしてもだ、思へば〳〵夫式の事に然うまでまたびく〳〵するのかね、然うまで、びく〳〵する程臆病には、さ、誰、何が爲たのだろ」。

とばかりで道之助は又重ねて嗟嘆した。今はや一生懸命で縋り付かうとする阿絹の心中は其一語をさう出す迄に爲つて居るので坐ろに只察せられもした。世の波に大かた呑まれてもがき苦しむ絶望とまでなつた境遇、片木板でも板子と見てかぢり付く。道之助のやさしい言葉に最う只縋るのみとなつた阿絹の胸中、今只どんな事をしても道之助の心もちを惡くせまいと素より思ふ思ふ、その下から、或ひは口が辷りもしたか、聞き直せば「己を攻めつける」とか云ふ一寸した言葉、それ、或ひは又思ひ掛けなくも、さう氣に當たるやうな、攻めつけるやうな口を利いたものかと一圖胸先までがきりゝとさへして直もう感じ易く、直又却つて氣にさへして、目の色まで變へるなどゝ拔も〳〵嗚呼爲つたものかと、されば、道之助はいよ〳〵哀れを覺えたのである。

「會社といふ惡魔外道が無垢の御前たち處女にさういふ臆病心を與へるのだ。さうでは無いか、阿絹さん」と道之助は更に〳〵一際調子をもやさしくして、「しかし詰まらん論爭だつた。どうでも宜しい、そんな事。それより肝心の話しを、さ、もつと早く聞かうぢや無いか」。

嬉しさうに點頭いて、「御免なすつて頂戴よ。それから御噺しゝますがね、毎日あたし達が食べさせられる物

ですね……」。「さうだ。何よりだ。第一聞きたい」。「ひツどい物なンですよ。國で馬の食べるやうな物を食べて居た癖に何を云ふと會社の人は云ひますけれど。國だつて然うひどい物ばかり食べませんわ。海の御魚が無いとしても川の、うまい御魚も有りますンですわ。いくら麥飯だつて、いくら國だツて、會社で食べさせるやうなのは眞逆食べや爲ませんわ」。

道之助は微笑した。

「如何にも然うだ。結局却つて、なまじひの海魚よりはるかに旨い鮎や鯉、そンな物が有るだらうさ、ね」。

阿絹も顏やゝ和らいだ。

「本當ですよ。石魚も有りますわ。鮠も有りますわ。泥鰌も有りますわ。鰻も有りますわ。まだ〳〵旨い物と云へば茸の色々なのさへ有りますわ。會社へ來れば、東京も近いから、いろ〳〵な食べつけない、旨いものも食べられるなンぞと云はれて本當と思つて居ましたけれどそりや最う全つきり噓なンですわ」。「そこらをだ、そこらが己たちにはよく分からん、又、それ故、よく聞きたいのだよ。なるほど鮠や鰻や、乃至石魚や、鯉や泥鰌、または茸、そンな物は食べられまいさ。そりや食べられんと云ふのは仕方がないさ」。「あンなものを東京近所で?」と目を圓く。

「御前たちの國で云ふあンなものが此邊ではあンなものどころでは無いのだ」。「高いンですか。無いンですか」と又々阿絹は目を圓く。

「はゝゝ」と流石道之助も笑はずには居られなかつた「下ざまの事を御承知なさらん御孃さまは又違つたものだね」。

阿絹只勿怪な顏。

「いゝや、眞面目に爲られると氣の毒になる。無垢の處女に對して詰まらん皮肉、いや、勘忍してくれ」。

阿絹には其云ふ事がよく分からぬ。

「とにかく、さう云ふ石魚や鰻のやうな物は會社へ來てからは食べられんと云ふのだね。ところで、其所が聞

き事なンだが、會社へ傭はれて來てからこのかた、御前が受けた賄ひだね、其賄ひは何樣なものかね」。「御菜ですか」。「さうだ。御菜だ」。「そりやア、もう……」。「そりやあ、もう——とは何のことだ」。「でも、そりや最う——ですから何うせ好くはありませんの」。「好い惡いを聞くのぢやない。只其樣子を有りの儘に聞きさへすれば夫で只よろしいのだ」。「御菜ですか」とばかり、云ひかねる樣子で、そのまゝ阿絹は鼻で笑ひながら下を向く。

「構はんでは無いか、づん〳〵云ふさ。御前の身錢の賄ひでは無し、耻かしがる事も有るまい。どうせ會社の宛がひ扶持だ。好からうが惡からうが御前の責任の係る所では無い」。

「えゝ」と阿絹は只下のみ向いた。

「妙なもンだ、實に全く。女や子供と云ふものは自分の御菜を人に聞かれるとなつて、多くは耻かしがつてゝおいそれと明白に云はんものだね。御菜をば只妙にかくしたがるね。稀代だね。小學校抔でもまた然うだ。男の子は然程でも無いが、女の子は大抵その食事となつても自分の辨當の菜を成るべく〳〵隱して食べるやうだね」。

微笑は阿絹の面にもよほした。尤も道之助にもまた。

「女の子に限つて、一々蓋を開けたり閉めたりして辨當の菜を口へ運んで、決してその菜を構はず人の見るまゝに開放しては置かないね。冗談では無い、本當の事だ。御前が會社の賄ひを聞かれてすぐ思ひ切つて云へんと云ふのがやつぱり夫なのだ。好いさ、女子の天性だ。しかし、今は特別だよ。かまはず云つて呉れんではね……」

「云ひますよ、申しますよ」と流石勇氣も奬まされた「御聞きなさると吃驚なさいましやうよ。朝と晩とは御汁一杯それッきり、御晝は十日に一遍位か鯡か干物、大抵は煮豆の甘くないのか鹽つ辛いのか小皿に些し」。

「朝と晩とは御汁が一杯、晝は十日に一遍位が鯡か干物、大抵は甘くない煮豆、それで無ければ鹽ツ辛い……はてな鹽ツ辛いとは何だね。それは煮豆ではあるまいがね」。

「いゝえ」と流石阿絹は微笑。「やつぱり煮豆なんですわ」。「煮豆だとえ　煮豆に有るか、鹽ッ辛いのが」。「御存じないんですの?」。「聞いた事も無い」。「それぢや彼所だけの食べ物ですか知らん。鹽煮にしたやうな豆なンです」。「豆とは、大豆?」。「えゝ」と極りわるさうに「まづ鹽茹でにした豆です。只の茹豆にほんの鹽味だけ付けたんです、馬にやる豆とそンなに違はないやうな物です」。「菜、に、だ、ね」と力を入れた。

「えゝ、御菜に」「それッきり?」と又力を。

「外にですか。外にはまだ御香物……」。「澤庵か」。「えゝ、陳を。この位の層さの」と一分ほどの厚みを指で見せて、「きツと毎でも一切れだけ」。

「さうかねえ」と歎息して、しばらく小首傾けて「思ひやられる、その食物を聞いた丈で一切の他の百事を。して見れば飯と云つても推して大方知るべしだ」。「御まんまですか、えゝ、もう夫や。けれども御まんまは命でしよ。いくら何うでも食べずには……いえ、食べずにどころか食べられる丈あがいて食べなけりや目がまはるやうに爲つて、御腹が空いてしまひますからね」。「そんなら、量は多く?」

阿絹は又うなづく。

「夫だけは幾ら食べましてもね、まア小言は云はれませんの」。「麥飯だね。どの位の割りの飯だね」。

「割りッて何ですか」。「知らんのか、割を」。「引き割りの事ですか、麥か、彼の……」。「さうではない。米が幾許に麥がどれほどと云ふ其割り合ひさ」。「うウん。打ン交ぜ樣ですか」。「あはゝ、さうだ、打ん交ぜ樣だ」。「それですか。分かりました。打ん交ぜやうはね、麥六升に米一升……」

「えッ」と流石驚いた。「何だつて。麥六升に米一升、それぢや麥が米の六倍か。え六倍か、六層倍」。「さうなんです」。

「いよ〳〵酷い。もつそう飯でもまだ〳〵然程でも無いと云ふに」。「もつそう飯てへのは何なんです」。「牢屋

の飯さ、懲役人だね、あれに食はせる牢屋の飯さ」。

「あ、牢屋の御まんま」と些ばかり眉を寄せて、「牢屋の御まんまが、何ですつてあの私たちの賄ひのよりも可いんですつて、まだ?」。「可いともさ。なぜと云ふにさ、其もつそう飯はね、中々今御前が云ふやうな割り合ひぢや無いのだ。もつと〳〵、夫から見ると優しなのだ。え、何、割りか、割り合ひか。割りはもつそう飯のは麥六に米四と云つて、つまり麥が六升なら米が四升と云ふのださうだ」。

「え、麥が六升に?」と、阿絹は殆ど身を入り込ませて、いかにも熱心籠めたらしく「それから米が四升ですつて?」

「さうだとさ」。

「まア」と投げ出すやうな調子、「まア、そんならあたし達のより、まア、ま、始めて聞きましたわ、いくら可いか知れませんのね、その牢屋の、あの懲役人が食べるつてへ其もつさう飯と云ふのが、ねえ、あなた」はたと澱んで涙ぐむ。「そのもつさう飯てへのがなまじつかの私達のおまんまよりずつと〳〵可いんですのねえ。まア、どうも。して見れば、私たち會社の工女のは懲役人のよりもつと〳〵酷いんですのね。いくら懲役人でも工女のやうな惡いのをば眞逆食べやしないんですのねえ。ひツどいんですのね、まツ。それぢや懲役人よりあたし達は……」。「うん、まだ遙かに劣るのだ」。「まア、ま。さう爲ますとね、いつそ其位ならね、あたし達工女で居るよりもいつそ懲役ンなつた方が幾ら可いか知れませんの。ね、身體に疵は付かうとも、ね、餌で畜はれる虫けらで居るよりはまだ〳〵人間らしい方がまだ優しか知れませんわね」とその目の色に殺氣も有る。

第十回

阿絹の目に催した殺氣はよく〳〵の思ひと見えて、現れた丈で消えさうも無い。

大抵の腹立ちとか無念とか、其目の色の變はるのは瞬

時である。晃めけば如何にも稲妻のやうに人を射る。しかし、射方の鋭さも稲妻ならば、其一刹那だけで多くは永續せぬ其壽命の短さも亦同じく稲妻の、それなのである。阿絹のはさうで無かつた。

その眼の殺氣は消えぬ。むしろ晃めき優る。見るも殆どまた凄かつた。目には拭ひ切れぬ涙痕が滴々として殘留する。目蓋は夜目ながらも擦り紅められて、紅味それにも無念に煮える血は滲む。血は滲んで、そして又其目蓋はさも／＼重げにさへ見えたところで、其目蓋が半夜やうやく一日の勞役の疲勞に萎え切つて閉ぢた其皮裏の夢の中に開けて示し得ず只中に押し包んで活動させる人生の修羅界の苦惱の惨劇をば其半夜幾度か、其數は連夜連宵連夕にわたつて只一人その阿絹その者は夢見て居るものかと忽ち早思ひやられるに付けて、又更に其殺氣の永く消滅せぬといふのさへそれだけの心の切無い趣きのあり／＼外に現れたものと直ちに測り知られるのであつた。

あたり前の心もちならば現はれても直消えるべき、瞬間の命脈たるべき殺氣が然う永く消えもせず只その儘に殘ると云ふ事、いかに夫がさう爲る迄には其さう爲る迄の宛がら烹られる、さながら炒られる、さながら引きこすられる思ひが嵩み切つたことであつたか。あはれ、世の汚れに染まなかつた野の花、都の人爲の美は無くとも暴い風をばおのづから防いでくれた山ふところの、其ふところ育ちの、是只一輪の姫百合の花、その花の打ち惱まされ續けた篠突く雨の涙は殘りて永久殆ど消えるまでも無く樂天であるべき若ざかりが何物を見ても直厭世となるまでに變へられて、此世を苦しいものと觀じ、更に天然に生つた木の實も其甘いのはすべて富豪の食ふもので、其澁くて苦くて取り殘されたのが自分たち其かよわい身の上の口に入るものと世を只悲しいものにのみ見て仕舞つたと云ふ、即ち繪にしても殆ど描き盡くせぬ、口にしても千萬言を費さなければ爲らぬ迄の、その、情無い運命の歴史として面色に現れた其いぢらしい殺氣との

み道之助は只、見た。

「懲役になる方が優だと、阿絹さん、御前は思ふかね。さう思ふも無理は無い、全く懲役人の方が御前たち緜引きの工女より遥かに旨い賄ひを受けて居る。あゝ、さう思ふまでに爲るかなア。さう思ふやうに、爲るだろなア奥州の若樣さへ、食ひ物の煩惱から狆になりたいとさへ獸の狆をうらやんだ」と靜かに其目をかい拭つて、道之助は火のやうな呼吸、それ吐くにさへ音をさせた。「何よりも命なのは食物だ。その食物をさうまでする以上他の事は推せもする。それから又思ひやれば、それを食べる量だがね、その量をもまた惜しますには居ないかね。どうだ、思ふさま食べる丈食べさせるかね、さ、それも疑はしい」。

「それは食べるだけ食べろと、口にも云ひませんが、さうなンでしよ」。「曖昧な云ひ方だね。何だつて？ もつとはつきり云へないか」。「はつきりですつて？」と又いぶかしくも躊躇して、「さうですねえ。別にはつきりとも云へませんが、只、その御飯食べる時間ですね、その時間をさア〳〵と成るたけ〳〵早いやうにと只いつでも急かされますの」。「長飯は無用と云ふのか」。「さうなンでしやう。仕事をする身の上で早飯で無いのは大馬鹿だ。早飯か早飯でないか毎日點を付けて置くと云つて、五分で食べて仕舞ふのを一等とし、十分のを二等とし十分から上掛かるのをば三等として、三等には御茶受けを呉れないてへ事になつてるンです」と、話しは出てゝいよ〳〵甚しい。

「三等には茶受けが無いとね？ 茶受けとは何だ。やはり東京抔で云ふ彼と同じものか。午後二時か三時の頃職人に少時間の休憩を與へる時茶を飲ませる、その時添へて與る菓子抔のたぐひか」。「さうなンです。その通りの物で、いつも毎日三時から四時までの間に出ますの。けれど、それは夏なので、冬だけは晝間で無くて、夜八時から九時までの間に出ますンです」。「ふウむ。むしろ意外だね。茶受けを出すとは殆ど信ぜられん位だね。麥

六の米一といふ飯を食はせて置く流儀から推して云へば只殆ど不思議だね。さりながらその物にも因る。何を出す」。「外では又何も出さないのが澤山有りますと。出すのは假令何でもまだ〳〵可いンださうです。それから又外でも然うでしやうが、まア私どもの所で出したのは大抵一つ同じものと極まつたやうに爲つて居ましたわ」。「同じものとは?」。「豆なンです」。「豆? 豆か、また。御茶受けも?」と道之助が吹き出せば。

「ぷツ」と阿絹もさすが笑つて、「堅豆てへのが有りましやう。御存じ? 蠶豆を只堅アく熬つた、あれ。あれを銘々丁度茶飲み茶碗に一杯だけ」。「一杯限りか」。「さうなンです。けれどもその豆がどんなに旨いか知れません。御腹が空き切つて居るところで食べるンです。その豆がですね、また譯が有つて、わざわざ毎でも豆にするンで、またわざ〳〵堅豆にするンで、その豆が堅豆で無い、只の、茹でた豆ですと、あんまり早く食べてしまつて、樂しみが早く無くなるからですと、また、それを豆にしませんで、外の御菓子とか何とか云ふものに爲ますと、堅豆ほど食べるのに骨が折れません故、あがいてづん〳〵一口に頰張るやうに爲つて仕舞つて、永く口をよろこばせて居られませんでしよ、直樂しみが無くなつて仕舞ふ、と云ふので堅豆にしたンですと」。

微笑で道之助は聞いて居た。

「面白いね、御前の說明もまた上手だ。それでは毎日大抵變はらず堅豆だね。早く云へば餌だね」。「まア、さうです。どうせ堅豆でしよ。食べてから後、御腹でふやけて、御腹が張つて來ますでしよ。あがいて、急いて食べたので、どうか斯うか早く減りたがる御飯の御腹が丁度その工合ひで旨く好い加減になつて行きますンです。云ふのを忘れたやうですが、御飯時に誰一人としてゆつくり座るとか腰を掛けるとかして御飯を食べる工女は有りませんの」。「どうしてね」。「立つてゞす。みンな立ちながら食べるンです。でなければ中腰に爲つてゞす。ゆつくり座りなぞして食べて居るのを見られますと仕舞ひ

が遅くなると云つて、又例の寒竹ですわ。また、それからです」と身をゆすつて、「まだ／＼御咄しする大切な事が有りますの。工女で半年も居て、目の悪くならないものはまア無いンですわ」。「知つて居る、その事は己も聞いて。營養不足でだ。いはゆる鳥目も有るだろ」。「まあ御存じ。さうなンです。それには毎晩の燈火ですね。仕事の割りには其燈火が暗いンです。暗いのに何と云つても明かるい程には付けて呉れず、ぼんやりした所で夫こそ目を擦るやうにして毛よりも細い絲を引きますの。目も、一つは、それで悪くなるンです」。「明かるくしては悪いのか」。「いゝえ、ちつとも悪くはありません。やつぱり油が澤山入らないやうにと、それなンでしよ」。「聞けば聞くで際限が無いね。いゝ加減に最う爲たいが、それ丈でも些し聞くか。どの位の割りに付けるのか」。「暗い／＼ンです」と阿絹はほツと息を吐く。

「まづ八人が一組みの一列びになつて並ぶンです」と阿絹は手を廣げて樣子を見せた。一斯う一列びに夫が二側にです。さうすると人數はまづ十六人、その十六人がちやんと揃つて絲を引くンですがね、そこへ付けてある洋燈と云つたら右と左とでたつた二つ丈なンです」。「八人を一列びと……疊一疊の長さに五人づゝとして、八人ならばざつと二疊分、卽ち二間の距離だね、そこへ洋燈は二つ丈か。さ、其洋燈にもよるが……」。「洋燈の心の幅ですか」。「さうさ。八分ぐらゐか」。「どうして、あなた」。「もつと、小さいのか、五分か」。「どうして、あなた」。「おや、三分？」。「いゝえ、まだ」。「まだ？　まだア？　まだ／＼小さいのだと？」。「偶には三分も付けますさ」。「三分が偶だと？　偶で、めづらしいのかね」。「さうなンです。二分なンです」。「二分？」と殆ど聲を放つて、「二間の距離で二分が二つか」。「ところを旨く都合するンです。一つが二分で一つが三分、つまり二分のばかりでは暗過ぎますし、それかと云つて三分のばかりでは勿體無さ過ぎると云ふので、二分と三分と兼ね合ひで付けるンです」。「それで毛の樣な絲を引くンだね」。

「繭の絲の細さは己も知つて居る。あンな毛よりも細いものをそんな茫然した燈火で、よく、しかし引くもンだな。熟練もあらうがね」。「さうなンです、初めの内は何を指につまんで居るか、まるつきり見えやしませんわ。その時の骨の折れる事と云つたら御はなしに爲りません。手でつまんで居るか居ないか見えないどころか、手當りでも分かりません位でしよ。仕方無く一生懸命目をはだけて、透かして見てやう〳〵分かるンでしよ。それですもの、何うしても熟れない内は手のろいンです。何うして早く出來るもンですか。けれども恐ろしいもンでそれが段々熟練ですね、さうぼんやり暗くつても、はつきりよく見える樣に、いえ見えは爲ませんが分かる樣に爲るンです。又爲らずには居られません。分からないと何時までも云つて居た日には年中やつぱり生疵の絶え間は有りませんものを」。「なる程見えないと云ふ者もいづれ嘸有るだらうね」。「有りますとも〳〵。いくら何でも、國で絲引きして居たつても會社のやうな暗い燈火ぢやありませんものを。國ぢや大勢で引くンぢやありますまい、みンな手内職見たやうなもので、どの家でも引くンでしやう。大きな絲場は又格別ですが、大抵は然うなンでしよ。一人で三分の洋燈ぐらゐは使つて引くンでしよ。ですもの、まだ其方が明かるいンですわ。それですもの、會社へ來た當座思ひのほかびつくりして、是ぢや暗くつて絲が引けないと愚圖々々云ふのも有りますとも」。「さうすると小言か」。「えゝ、もう夫は〳〵。仕舞ひには小言だけで濟みませんわ。仕上げ高を勘定して御小遣ひを減らされるとか、さうで無ければ例のとほり御飯を減らされるとか、又さうで無ければ又寒竹で打たれるとか、又さうでなければ丸裸にして椽の下へほふり込むとか、雨や雪の降る所へ木へなぞ縛り付けて立たせるとか、まづ〳〵そんな事に爲るンですわ」。

聞く間も眉を顰め〳〵て「いよ〳〵出でゝ愈烈しい。どうしても人間を扱ふのでは無いのだ。下等動物を扱ふ

のだ。いゝや下等動物だと云つて、さう虐待は許されない。どうしても人間がおのれ以外の生物に對するといふ法ではないのだ。道理こそ、全く道理だ、工女の自殺沙汰がよく有るやうだ」。

「本當ですわ」ときつとして、「本當に有りますの。工女であンまり辛いので、とう／＼自害なンぞして仕舞ふのが。あたし達が覺えて居るのさへ六七人は有りました。「それは、しかし、一概に信ぜられんやうだがね、御前は眞實で云ふのかね」。

「うそですつて」と目を見張つて、「本當とは思へないてへンですか」。「さア、どうもね。あンまり極端な咄しだもの。をり／＼然ういふ噂は聞く。しかし、何しろ自殺、いやさ、自害だね、自害をすると云ふのはよく／＼の咄しだろ。なる程虐待されて、さうかと言つて國へも歸られず、女の狭い心から取り詰めてのみ仕舞つて、二度と命の有るかのやうに無茶苦茶に死んで仕舞ふと云ふ事、それは或る程或ひは有るかも知れんがね、どうも皆が皆さうとは思はれんやうだがね」。「さう御思ひなさるんでしやうね、やツぱり何うしても」怨がましい語氣と爲る。

「己の云ふのを惡く聞くか」。

「わるくは聞きませんけれども……」

「惡く聞かない？　よく聞けば、よく分るよ。まア御聞き。誰だつて命は惜しいだろ……」

無言、しかし阿絹は屹となつて、道之助を見上げた顏つき、どうでも不服の樣子は見えた。

「誰だつて命は惜しいだろ。大抵の事でどうして死ぬとまで。いやさ、大抵の苦しみで無いから死ぬのだ、とそりや云ふか知らないが、しかし、年期さへ明けるとなれば、苦しい思ひをせずとも濟むのだろ。それ知らぬ皆でもあるまい。それを何も非業に自害する抔と——なるほど中には然う云ふのも有るだらうさ。しかし、其多くが悉く然うだとは眞逆云へも爲まいがね……」

「けれど、あなた」と顏に血の氣は突きのぼつた。「やつぱり、あなたはじめ然う御思ひなさるンですもの。そ

りや皆が皆まで自害して仕舞ふことにばかり爲りはしませんから、さう只、御考へも爲さるンでしやうけれども決して〳〵然うぢやありませんの。むら〳〵と自害する氣ンなりますのが全く幾度だか知れませんわ。あたしたちにさへ二三人同士で、そンな事さへ現在有つた程なンです」。「いよ〳〵夫だ本當かね」。「御咄しゝたつて誰も本當とは思ひなさいますまい。ですもの、誰に云ふもンですか、まして會社の係り合ひの有る人になンぞ猶の事ですわ。けれども、あなた、若旦那さまばかりは……」と暫らく云ひ淀んでもぢ〳〵して、云ひにくいか咳拂ひさへ加へて、そして聲さへ低くなつて、「やさしく今のやうに云つて下さるンで、まア御言葉に引き出されて、御はなしすれば爲るンです。何なら御咄し爲ませんでも：…」と思ひの外斯うなると何處と無く締まりが有る。

「いや、大きに惡かつた。早呑み込み過ぎたのだ。聞かせて貰ひたければこそ、斯うやつて先刻から一生懸命ね、さうだろ」。

さう只云つた丈で、いぢらしくもまた愛らしくも阿絹は如何にも嬉しい樣子で優しく頭を低げたのである。道之助もとより其姿色に心をつけ目を止める氣でも無かつたのである。それであつて此時の阿絹の樣子その譯を云ひ聞かされて、すぐ感じすぐ心に浸み、すぐ又眞底から嬉しくなつたと云ふ、其いつもいつも僅ばかりの情にも只すぐ銳く感ずる趣きを我知らず上部にまで示すのを止め得ぬと云ふ、其あどけ無いと云ふべきか、愛らしい云ふべきか、いぢらしいと云ふべきか、凡そ其邊の言葉を一つに寄せ集めてゞ無ければ、云ひ盡くせも、形容し盡くせもせぬ其風情をしたしくぢツと見つめると共に、只何と無く胸さきの痛むやうな氣持ちもして、しかも其眼前の阿絹の容色、その伏目になつた下向き、眉の伸びわたりの際立つあたり、額口の雪のやうなあたり、凡そ夫等が云ふべからざる優美の物に見えて、むしろ只捨てがたいやうな、名花として眺めたいやうな氣も何うやらおのづから催すのであつた。

評論·隨筆集

評論・隨筆解題

柳田泉

「日本韻文論」　美妙の『日本韻文論』は明治二十三年十月三日發兌の國民之友第九十六號から明治二十四年一月二十三日發兌の國民之友第百〇七號に亙つて都合八回掲載されたものである。八回以後同誌には掲載されてゐないが、八回で完結してゐるのではないので、その限りでは中絶したものと考へる方が至當であるらしい。此の論を發表した時の美妙の目算によれば、その論の豫定總目次は次のやうになつてゐる。

○散文と韻文との區別定義○韻文の名義○唯物主義と理學と不可思議論派とが韻文に與へた影響○日本韻文歷史○韻文制定の方針○短句と長句との比較優劣○人の發音と音樂○七句及び五句○風調○各種句法論○音樂に對する各國言語の相違○平仄アクセント○格式○語法○國語に活氣が乏しいとの說○漢語の便否○漢洋語併用程度○言語の雅俗に對する迷想○擬人法○掛詞緣詞對詞○野々口隆正○歌論批評○各國詩想の相違其原因○押韻の利害○詩人の本領等

これは、果して此の論發表の時これだけの項目が用意されてゐたものか、それとも此の論發表の時にふと思ひついたまゝたゞかう書き立てたものか、そこは疑問であるが、恐らく此の後者の方ではあるまいか。これは、韻文論本論の章節が此の豫定目次の通りに區分されてゐないのに見ても察しがつくのである。だが、兎もかく國民之友に發表された八回分では、丁度この目次の中程「人の發音と音樂」のあたりから以後が全く掲載されてゐないので、中絶と見る私の見解が至當であらう。

『韻文論』起草の趣意は、古來の日本韻文を歷史的に論ずるのが目的ではない、將來の日本韻文の大進歩のためにその方法を說かうとしたもので、歷史的研究的といふよりも、革新的創造的意圖をもつて書かれてゐる。美妙の言葉をかりると、「そもそも韻文に一進歩を與へろとの考へは、衆人の胸には充ちたものゝ、猶其方針は一定せず、或は和歌を主とし、或は俳諧を主とし、又は漢詩、又は新體詩とそれぞれ人に應じて好みも違ひ、渾沌亂雜極まり無いところ批評かたがた意見を述べるのも無駄では無ささう」そこで韻文に一進歩を與へるための諸家の方針を批評し且つ自家の方針を公にするために此の論文を書いたものといつて可い。

ところで、此の韻文論の前奏曲ともいふべき一文が、國民之友第九十四號に掲載されてゐるが、これは「日本韻文に對する放任主義」といふのである。韻文論の趣意をよく理解するには、此の論文の方から讀まなくてはならぬと思ふから、今こゝで此の「放任主義」のことを一言する。

日本韻文の進歩を計るとして、それには「格律を定めて掛るがいゝか、又た放任して自然に定めさせるがいゝか。」美妙は前項即ち人爲說（人工といつてゐる）の急先鋒で、放任主義の大反對者である。格律が自然のものだから一切自然に任せて可いといふ事は不可ない、宜しく自然を助けて變化を生じさせる意味で、韻文發達に有利な格律を人爲的に制定しなくてはならぬ、これが美妙の人爲說の要旨である。つまり自然放任では依然として詩文混淆のまゝでありこれでは障碍が多くて韻文の發達が實現されないといふのである。それではその格律を何う定めるか、これには先づ韻文に用ゐる言語の性質（Characteristics of the Pchysmical and Poetical Words）から調べてかゝらなくてはならぬ。即ちそれを調べて日本韻文の格律の制定に及ばうといふ、これが此の韻文論の由つて來るところである。

これを前書として『日本韻文論』の内容の一斑を解題することにする。

〔第一回〕の例言では、日本韻文を進歩せしめんが爲めには、新式の韻格を制定しなければならぬ旨を述べ、さて第一編第一章、「散文と韻文の區別」では節奏の有無を標準として散文と韻文を區別し、詩想の有無といふ説を排してゐる。節による語及び句といふことを韻文の主眼にしてゐる。同第二章の「韻文の名義」は、何故從來の詩といふ語を用ゐずに韻文といふ新語を用ひるのかといふことについての辯であるが、それは畢竟は詩といふ語には漢詩を思ひ出させる先入觀念があるからといふのである。末段に此の韻文論の目的を説いてゐる、「從來の各種の韻文より一層に思想の多い一種の韻文を向後の社會が要する者として、其新調韻文の方針は何う用ひていゝかを説き、從來曖昧であつた散韻兩文の區別を明らかにし、其新調韻文に更に名目を與へ、併せて韻文と音樂との關係を研究するのが目的と」云々。美妙が後にその新體詩に唱歌の名をつけたりするのもかういふところから出てゐる。

〔第二回〕第一編第三章「韻文と開化」、英國の詩史を例にして、韻文と開化の關係を説いてゐる。韻文の進歩といふものは、開化卽ち文明の進步と兩立しないやうに見える（マコウレーの説）、これは英國の詩壇では幾分事實である。近代文明の進歩と共に、韻文の力を衰退させ、これを惱惑させた勢力の原因となつたのは、三つある。（一）不可思議論、（二）實體論（レアリズム）、（三）理學の進步、これである。（一）は詩人から直覺を奪ふ、（二）の濫用は想像力を狹める、（三）合理主義を要求する。だから放任すれば進步が止まつてしまふ。韻文の衰退は韻文の側で開化に伴はうとしない無努力による。宜しくこれ等の原因を研究して、新韻文を開化に步のあふやうに努めなくてはならぬ。

〔第三回〕第一編第四章（上）「在來の日本韻文に對する妨害、餘情の性質」、日本古來の韻文（和歌、俳諧、詩）の論で、日本古來の韻文には眞實十分に韻文の目的に叶へたものはない。理想も、思想もない、たゞ小局部の卽興が生命となつてゐる。さうして口にするの餘情の有無である。餘情の有無で韻文の價値が定まるやうに考へてゐる。然し從

來の餘情は眞の餘情でなくて說明であり注釋である。これが日本韻文の發達に大害を與へた。それは萬事餘情主義で進んだ結果、眞情をうたはぬ、秀句をのみ求める、寫實をのみ欲するといふことになつたからである。

〔第四回〕　同第四章（下）「韻文制定の方針」、だから餘情主義は日本韻文發達の爲めには大敵といはなければならぬ、又餘情主義の結果、巧麗纖弱なものゝみ貴ばれるといふ結果になり、壯大崇高雄渾なるものなどが餘情として排斥されることになる。且つ從來の日本韻文は厭世主義の發表機關のやうなつてゐた。これも亦韻文發達を遲くする原因の一つである。そこで新韻文制定の方針も、此の舊韻文の病根から着手しなければならぬ。先づ餘情論を破り、厭世的な纖弱な思想を破らなくてはならぬ。その病根をもつと具體的にいふと、(一)韻格の簡單、(二)韻句及び韻語の藩閥主義、(三)押韻(之は俗曲についていふよし附言してゐる)これである。この病根を革めるのが日本新韻文を制定する第一の方針でなくてはならぬ。

〔第五・六回〕　第二編「韻格」、第一章「和漢洋韻語の相違」（上・下）、韻格をなす原子たる韻語及び韻句の根本的硏究である。日本、支那、西洋の韻語の比較から日本語の音調上の特質に及び、日本語には音調上の束縛が少ない（卽ち四聲もなくアクセントも少ない）ので、日本語は韻文組立上大に柔撓性に富み、便利重寶この上がないと說く。

〔第六・七回〕　第二編第二章「韻律」、第一章の韻語や韻句から成る節奏の順序たる韻律の詮義である。こゝでは西洋の韻律分類をそのまゝ適用して、新韻文の韻律を(一)短長、(二)長短、(三)短々長、(四)長短々、(五)長々、(六)短々、(七)長々々、(八)短々々、(九)短長短、(十)長短長、(十一)短長々、(十二)長々短の十二類に分け、その一類がそれぞれ八種の韻脚(一脚より八脚まで)をもつてゐることを述べ、更に右第(一)から第(四)までの韻律を例を擧げて示し、最後にこの四種の韻律のもつ基礎音十四類を擧げてゐる。

〔第八回〕　上記十四種韻律の實例の說明、第二編第三章「十四韻律の各性質」と題する。

かくて十二基礎韻律の說明中、第一から第四までの說明に及んだだけで、第五以下第十二までの說明を遺してゐるのに、これでこの論文は終つてゐる。これで見ても中絕したことは、明白であらう。

此の韻文論が出た時は、美妙もいつてゐるやうに、諸家の韻文論がチラホラと出始めた時であつたから、これが出てまだ完結もしないうちに石橋忍月、內田不知庵等の諸家から駁擊されて、明治新詩壇で最初の詩的論爭が惹起された。忍月はしがらみ草紙で、「韻文論をあざける」(美天狗と署名)又國會に「美妙齋に與ふ」といふものを出した。不知庵は國民之友に「詩辯」を、國民新聞に「美妙齋に一言す」といふものが出た、他に匿名の一二あるが、これは略す。美妙は、「しがらみ草紙」と國民新聞で忍月に答へ、日本評論で不知庵に答へた。そのうちで不知庵の「詩辯」がもつとも痛烈に反駁したものであるが、要は、美妙が、詩が韻律(節奏)を生命とするといふ外形的態度に對する內容(思想側)からの反駁である。然し要は詩の本質論だけで、美妙の韻文論の眼目たる韻格、韻律の研究には觸れないのでいさゝか見當違ひの議論となつてゐる。

最後に森鷗外はしがらみ草紙で、美妙齋主人が「韻文論」と題する深切な啓蒙的な批評を試み、兼ねて美妙の駁擊者達の說の當不當にも論及して、この論爭をおしまひにした。詳しいことは同誌並びに全集に讓つて、こゝでは餘り深く立ち入らぬが、鷗外は美妙の論と立脚地を公平に觀察し、その是なるところ、誤つてゐるところを鷗外一流の銳い批判の眼光で照してみせてゐる。要をいへば、日本詩にアクセントのないのは重寶ではないこと、アクセントがないのに西洋の韻律にあてはめやうとするのは間違つてゐること、餘情論は尤もなところもあるが、一概に美妙のいふ如く排斥もされぬこと、眞の餘情論のこと、日本韻文に哲理の有無を求める如きは誤謬であることなどを諄々と說いて

ゐて、人を傾聽せしめるものがある。韻文論の批評としては、これに越したるものはあるまい。有志の方は參考されるべきであらう。

美妙はその後この韻文論を完成したか何うか、私は寡聞にして聞いてゐない。だが彼は別の處で韻文論めくものを度々發表してゐることは事實である。その例は明治三十二年刊「散文韻文美文法」中の韻文論、又三十五年刊「新體詩歌作法」中韻文新體の作りかた、等に見るを得るであらう。前者は、韻文を作る一般の心得、韻文の句格、五言の句六言の句、七言の句、八言の句等の順序であるが、その心得の中で、餘情を韻文の生命としてゐる點は、注意されるこれに比すれば、後者はやゝ研究的なもので、句格總論、句格の四種類、句格表、用語の音調について等の項を立てやゝ詳しく語つてゐるが、中には韻文論中の補正と見るべき說もないではないから、韻文論を見られる人々は、此の「新體詩作法」の書も併せ見られるが可い。

美妙の「日本韻文論」は今日歷史的に見て何うか。私は美妙がこの論で唱へた日本詩歌革新の精神はまことに盛なるものと賞讃したい。同じ文學革新とはいへ、小說卽ち散文藝術の方面はこれより數年前に春のや主人によつて、明確に宣言されて、もう實行の時代になつてゐる、然るに、事實は小說よりも一步早く革新意識を示したといふ新體詩の方は、流石に日本韻文の長い長い傳統を相手にしなければならぬために、容易にその根本革新の宣言發表に行き難んでゐる有樣であつた。靑年美妙が進んでこの大役を買つて出た意氣は諒としなくてはならぬと思ふ。

勿論『小說神髓』が皮相的な立論に成るものであり、幾多の缺點があるやうに、「韻文論」にも幾多の缺點があり、皮相的な立論があることは、鷗外以下の指摘してゐる通りである。日本語のアクセントの論の如き、美妙の考へ方は殆んど滑稽に類する、又西洋の韻律が人爲で出來たものでなく發達して來たものといふ點も忘れてゐる、且つ總體とし

て革新の必要から西洋韻律に着眼したといふよりも西洋韻律の整然としてゐるのが羨ましさに、それを日本へもつて來て當てはめやうとしたといふ難もある。且つ又この論文の內容についていへば、種々批をうつことも出來よう。美妙が力說してゐる餘情論の如きにせよ、鷗外の說くが如くば誤謬が多いものである。だがその一切を認めたとしても美妙が、在來の日本韻文をあきたらぬものとし、新時代には新時代に則した韻文があるべきを高唱した精神は當然過ぎる程當然のことであり、又その新韻文の制定、つまり韻文革新の方針を、在來韻文の形式の打破から進めやうとかゝつたことも、間違つてゐるとはいひ難い。春のや主人の「小說神髓」が、明治小說史上に於て革命的功績があるものとせば、美妙の「日本韻文論」も、明治新體詩史に於ては略ぼ同じ功績あるものと見なくてはなるまい。なほ「小說神髓」の理論が「當世書生氣質」で實行されてゐるやうに、「韻文論」の理論が美妙の諸作で實現されてゐることも注意されなくてはならぬ。さうして此の理論を實行した諸作が、爾後の新詩發達に何ういふ貢獻をしてゐるかは、岩野泡鳴、河井醉茗の如き人々が、これを如何に高く買つてゐるかを見ても想察されるのである。

たゞ惜むらくは、美妙が、「韻文論」を中絕しないで、完結せしむべきであつた。さうすると、美妙の革新的精神がもつと徹底したであらうと思ふ。たゞそれがまことに遺憾な點である。

「明治文壇叢話」　正確にはいひきれないが、これは恐らく明治二十三年春夏の交に改進新聞に載つたものであらう。而かも美妙が改進新聞に入社後間もなくと推されるから此の年四五月頃のことではあるまいかと思ふ。今のところ現物の改進新聞を見てゐないので何ともいへないが、大體さういふところであらう。

緒言に書いてゐる美妙の思惑では、明治文壇諸家に對する印象、見聞を隨筆的に面白く書いて且つ一種の文學資料

にしたいといふのが本願らしい。さうして當時まだ會合をつゞけてゐた文學會（二十一年九月創立）が、彼にとつて丁度いゝ材料探訪場となつてゐたことは、この『叢話』そのものをよむとよくわかる。だが美妙の本願はさることながら、彼はその本願を十分具現することが出來なかつた。これは何ういふ都合であつたか、恐らく今日程文壇消息に興味をもつてゐない讀者階級からあまり歡迎されなかつたので止めたのであらう。まさか此の程度の書き振りでモデルの方から苦情が出たとは思へない。それで本文で見るやうに、春のや主人、依田學海、二葉亭四迷と、此の三人を傳へただけで中絶となつてしまつた。（恐らく新聞の方を調べたらまだ少しは掲載されてゐるかも知れない、然しあるとしても此の三家以外にさう澤山の諸氏に言及したものとは考へられない）。

改進新聞は見られないので、本文所收の分も、書物往來で再錄してある分にそのまゝ據つた。勿論誤字誤植は訂したが然し、校訂は完全には施し得ないので、大體は書物往來のまゝとなつてゐる。本文所收の分が、大正十四年十二月號及び十五年一月の書物往來に再錄されてゐるものゝ全部である。

此の叢話も、美妙としては比較的すつきりした、あまりマネリズムの鼻につかない文章の方である。美妙隨筆の代表的なものであると思ふ。

「戸隱山紀行」　明治二十二年七月十五日、十六日美妙は信濃の戸隱山に遊んだ、その時の紀行がこれである。翌二十三年夏の起稿で、當時彼が關係してゐた改進新聞に掲載されたものである。

美妙は戸隱山へ登るためにわざわざ出かけたものか何うか、それは分からない。然し此の紀行の初頭の文氣を察すると、何うも信濃漫遊の途次、ふと志して登つたやうにも受けとれる。兎もかく長野に暫時滯在してゐたことは事實

らしい。そこで私の推量だが、これは何うも美妙の父吉雄氏が此の頃長野縣の警部長をしてゐたので、それで歸省したものでなからうか。父を長野に歸省して、そのついでに戸隱山に登つたものであらうと思ふ。さうでもないとあの都會人の美妙が特に戸隱山を志して信濃路を遙々やつて來るなどといふことは一寸考へられない。

私は、此の紀行は美妙の言文一致文章としては有數のものだと思つてゐる。單に當時の紀行文としても、實に立派なものと思ふ。田山花袋氏もたしか此の紀行文だけは賞めてゐた筈である（『小說作法』の中）。これには、よく人の嫌ふ美妙流のマネリズムが比較的少なく、行文の具合もいつもの女性的氣合が割合出てゐないし、何となくさつぱりした、生々した、新鮮な感じが出てゐる。殊に此の頃の紀行文が大抵は土地案內記じみたものであるのに、これは幾分にせよ感情を描き、自然を描き、空氣を描き、人間を描くに成功してゐる。觀察の點も、二十二の青年（今日では少年）としては、むしろ大人に過ぐるを咎めたい程である。

概していつて、私は此の紀行文を、いかにも青年らしい美妙の匂ひの特に多くこもつた文章として、好きなのである。

末段のところで、お給仕に出た少女のことが出て來るが、そこで美妙は、これを使つて詩なり小說なりを書いてもいゝといふ意味のことを述べてゐるが、美妙は事實戸隱山で小說の稿を起してゐる。これは例の有名な『いちご姬』である。『いちご姬』を都の花に載せた時には別に何とも斷はつてゐないが、これが單行本になつたのには、

明治二十二年七月中旬信濃國戸隱山に於て初回起草

とある。紀行には、さういふ小說を書いたといふ記事はないし、又事實書けさうな餘裕もなかつたらしい。だから此の起草といふのは、恐らく起案といふ程の意味に解すべきではなからうか。これを起案とすると、『いちご姬』の女

主人公いちごは、此の少女の面影にインスピレーションをそゝられたところがあつたのでなからうか（筋は別に本づくところがあつたことの由は、『いちご姫』の解題の條にのべてある）。

美妙は長野から登つた。同行したのは長野の人柴田某氏、福武某氏の二人、これは何れも父吉雄氏の知人か何かであつたらう。

日本韻文論

〔國民之友第九十六號、廿三年十月三日〕

例言

韻文に一進歩を與へろとの論おのづから萬人の口にやや上り始めたのは洵に以て悦ばしい限りの事、ついて昨年來わたくしもこれに關していくらか調べたことも有り、或は韻文振興論者の多少の參考にもなるかとこゝに國民之友の此號から逐次連載することゝ爲りました。そも〳〵韻文に一進歩を與へろとの考へは衆人の胸には充ちたもの〻、猶其方針は一定せず、或は、和歌を主とし或は俳諧を旨とし、又は漢詩、又は新躰詩とそれ〳〵人に應じて好みも違ひ、渾沌亂雜極まり無いところ、批評かた〳〵意見を述べるのも無駄では無ささう。引きつゞいて永くなる處は其向の方も宜しく御辛抱を下されたく併せて此事もと〳〵一人の意見ゆゑ其目の足らぬ處も有つたなら充分に御教へを賜はりたいのです。

論段の排列に於ては頗る苦心してなるたけ前後させぬやう力めましたが、如何にも双頭の蛇で兎角前後に立ちまじる處もあり、或は御了解に困難なところも有りましやう。其邊は宜しく御海容下されたく、而も作者に於ては前に略した處も必らず其必要だけは後に至つても論じ盡くす氣、それゆゑ其處も御ふくみの上成るたけ前後充分對照の上御批評を願ひます。現に韻文は新たに一進歩を今日與へるがいゝか、それとも從來のまゝで滿足するがいゝか、又詩人といふ物はどういふものか、いくらか既に論じた人も有りましたが猶これとても言はゞ未定の問題、そも〳〵冒頭の初めに於て論題とするものが至當のやうです。が、それすら初めにいふ處に不都合の無く

も無いと思はれたため故さらに後まはしとしたやうな次第で、凡そ此類の事は頗る有ります。蛇足のやうな辯ながら一應御注意のためにことわります。

今までに日本の韻文世界は中々の進步で有つたものゝ猶その專門語には適當で無いのもあり、無名なのもありそれらは便利上かれ是と名を命じました。

千人が千人の心ゆゑわたくしの此韻文論にも反對はかならず有ること、其反對論は成るべく此文學のためとして御聞かせを願ひます。ただし都合により全篇掲載後まではよしや反對論がどう有るにしろ必らず、御答へをするとは限らず、そこらは宜しく御ふくみを願ひます。

簡略に總目次を絞れば次のとほりです。——

○散文と韻文との區別定義○韻文の名義○唯物主義と理學と不可思議論派とが韻文に與へた影響○日本韻文歷史○韻文制定の方針○短句と長句との比較優劣○人の發音と音樂○七句及び五句○風調○各種句法論○音樂に對する各國言語の相違○平仄アクセント○格式○語法○國語に活氣が乏しいとの說○漢語の便否○漢洋語併用程度○言語の雅俗に對する迷想○擬人法○掛詞緣詞對詞○野々口隆正○歌論批評○各國詩想の相違其原因○押韻の利害○詩人の本領等

第一編　第一章

散文と韻文との區別

言語によつて思想を現はしたのは文、文に二種あつて一つを散文と云ひ、他の一つを韻文と言ひます。右二つの名、之を從來の口癖にすれば散文はいはゆる文、韻文はいはゆる詩、是等の稱呼で多少不都合が有る、それ故に吾々はあらたにこれを呼び變へた其仔細は後に言ひます。今この韻文論を啓くに方つての第一の急務は二種の文の相違の點です、その相違の標準です。

二種の文の區別に付いては、從來たしかな論も聞えずことに散文が韻文に於ける相違は殆んどアキショムのやうに餘り明白に近過ぎて却つて人の疑問を免れ、二者の

相違を會得するらしい者が之を了解せぬ者に比して甚だ多い處からたゞ〳〵放縱に流れました。併しながら苟しくも散文とか、韻文とか各國ほとんど言ひ合はせたやうに文の内に二種類の有るのを認め、二種の名を命じたのはそも〳〵偶然か、また必然か？　そもそも又吾々は右二種の文に向いてどのやうな見解を下すか？　曾て是は「新小說」の外篇で馬琴文を評した時一寸わたくしが說きました。あらためて爰でくはしく說きませう。

散文と韻文とを比較すれば何さま人の言ふやうな二三の相違が二つの間に存在する、それながら唯一相違の根本といふは其實二つ無いので、其いくらも有ると云ふのはつまり第一の根本に隨從しただけのもの。二者相違の根本といふは唯一つの節奏です。

散文は得て句が長く、韻文は短く、散文は多く繁で韻文は簡、散文にして二三行費す處は韻文にして多く一句で足りる、これが二者相違の一點です。しかし此二者相違の點は別に他の主因が有つて生まれた物か、それとも是自身が獨立なのか、それらが初々考へ物です。假りに主因とい物は無く、是自身が獨立で、卽ち此相違が其原因と定めた處で、何故に二者の間に其相違を現はす必要が有るかは是非とも引き續く疑問です。感情を與へる效力に於ては何の長短繁簡に優劣は無く、各其場合の許す處に於て相讓らぬ效力をば持つ物。從つて散文と韻文とに各其長短を異にする譯は決して此效力云々のためではなく、猶他に求める處の有るためでしやう。そもそも只々人に與へる感情の點からのみ撰んだ事ならば二者の間に長短繁簡の相違が出來る譯はない、そこから考へればば必要は更に他に存在する、其他のものを何かと言へば卽ち唯一の節奏です。語（Word の假譯）が有つて言語（Speech の假譯）が有り、節奏をこの言が帶びて、從つて節奏に應ずる支度の出來たのが俗に言ふ廣い意味のうた。或は呼び變へて韻文、もしも韻文から節奏を取り除くことが出來ると假定すれば、さて其節奏の無くなつた物は果してどの點に於て散文と逕庭が有りますか（後段

參考）？　併しながら古往今來いはゆる散文以外の韻文に於て節奏の無いものは一つも無い。嚴しく言へば節奏音調を脫ぎ去つてはそも〳〵文は散文一つになつて仕舞ふ、凡そ是等の點から見れば韻文に取つて生命とも云ふべきは音調を除いて何が有りませう。

旣に音調節奏の範圍の裡で韻文は運動する、こゝで其效力をして散文と同じくするには勢ひ其節奏を破らずに巧みに語を組むが是非とも必要、ところが節奏は殆ど冗漫の句を許さずそも〳〵韻文に於て簡潔を求める必要はこゝから出たことで、卽ち散文の句が長く、韻文のが短いのは音調のために生じた結果です、單身獨立の物では有りません。韻文の固有は音調節奏であるとの例、これが其一つです。

更に反對の論として下のやうなのも有ります。韻文と散文との間の相違は其音調の有無で無く、只その思想にある云々、卽ち是です。さすがに辯じ甲斐のある論、但し吾々は反對です。

なる程極言すればある程度までは散文にも音調に似寄りの色も有り、古來の名家の散文の中頗る音調を考へたのも有る、その處一寸見れば吾々が言ふ韻散兩文の區別も殆ど無くなるやうです。が、論者はまだ一を知つて二を知らず、普通の音調と音樂上の音調（樂調卽大節奏）とを同じものと見て居るのです。其實普通の音調も樂調も理は同じもの、併しながら結果として現はれる處は何で同じものでしやう、一は唱讀の間に稍味ひを持たせるだけ僅に音調を許した物、一は一意無二無三に樂調にもとづいたもの、之を同一に見られては論は黃河の澄むのを待つまでも片付く事は無い譯です。果して從來の散文に全くの樂調を帶びて居るのが有れば、堅く言つてそれは賦です、韻文です、決して散文とは言へず、其間髮を容れぬところ、一步距つて其樂調が音調である事ならば言ふ迄も無く散文です。いはゆる純粹の韻文は樂調に因る物のみでただの音調は散文のまづ粧飾、それゆゑ古人の散文に音調が間々有ると云つてそれを混同した論者の

說に吾々は承服されません。

ならば思想に至つてはどうかと云ふに、吾々は別段に是が韻文の思想卽ち詩思といふ物をまだ見たことが有りません。論者は言ひました、散文の思想卽ち文思は多く實で、韻文の卽ち詩思は得て虛と。此虛實とははたして何の謂でしやうか？　察するに論者の意は實と解して形而下的、具體的、現實的、また虛を解して形而上的、抽象的、感情的との意でしやうか？　ならば甚だ奇妙です。形而下的、具體的、現實的が何故に散文の獨占でしやう、之を固有の物と云ふは甚だ狹いはなしです。もしも論者の言葉に從ふならば哲學論の散文は韻文で、記事卽興の韻文は散文です、「ふアるすと　ぷりんしぷる」が韻文の上乘で、「春過ぎて夏木にけらし」は散文です。奇といふもおろかな新說、そも〳〵服せる論でせうか？　なる程「春過ぎて」の言外には或は感情的の意味が有るか知れず、但しそれから逃げて「春過ぎて」を韻文と若し論者が言ふならば、論者がいはゆる二者相違の標準は同じく徹底に壊れます。こゝろみに古來有る短句の金言を取つて見れば、よしそれが散文に出來て居たにしろ、一轉たゞちに節奏をさへ加へれば變はつて直に韻文とは爲つて、さて其處で前の文思が詩思に變はつたと云つて論者は攻擊出來ますか？　思ふに決して出來ますまい。ならば文思と詩思は、そもそも何の點に於て違ふのですか論者の答へを聞きたいものです。退いて虛心になり、其根源に遡れば散文も韻文も同じく思想に外ならず、違ふのはたゞ其躰形ばかり、思想は違ふ譯は無い、この言葉甚だ極端には似て居るものの、吾々は正しいものと信じます、たゞ〳〵從來の結果で見れば論者が一時違つたも無理で無く、韻文には比較して散文より感情的のが多いやう、其多いのは多い理があり、卽ち節奏の保助を借りれば感情を喚がす便利が比較して多く有る、唯それだけが原因です。そも〳〵「はむれツと」の獨言をもし椽大の筆が有つて散文に書き直し、米國獨立の檄文を韻文に書き直した處が其思想について難は決して入らぬ事、從

來によく慣用した文思とか詩思とかの語はいはれの無いもの、吾々は思想より外に之に對する語を持たず、從つて論者の說には服せません。韻文の固有は、詩思で無く只その音調節奏であるとの例、其第二は是です。

あるひは習慣が遂に相違を爲し、形容または用語の點に於て自然に散文と韻文との間に相違を做した、これが右二種の文の差別とも一寸言へやう、併しながら是とても同じく附屬だけの相違の點、唯一の根本では有りません。散文では「風が木にわたつて悲しい聲を出す」といふ韻文では「木が風に啼く」といふ、或は散文では「秋氣が原に行き亘つて尾花も充分に咲き亂れ、早咲きの白くなツた處に風が吹いてさながら其風が白く見へる」といふ、韻文では「尾花の原に秋がわたつて風の色が白い」といふ、或は擬人、或は提喩（森田思軒氏の譯に從つて）、なるたけの修辭上の美を韻文の方にむしろ多く添へる此事が何に基いたと云ふに、矢張り其原因は樂調です。既に韻文は樂調の支配を受け、前條のはじめに言つた通り語や句を簡に用ゐる必要が有る、簡に用ひて感情を充たせる、卽ちあるたけの修辭の上の美を取り集めるのが其方便、今言つた二者の相違は此點から出たのです。或は場合により、散文にすら其語句のきびしく簡潔なのを要する時には間々此の法さへ用ゐる始末、韻文に於て之をほとんど特色のやうにするのは音調を思へばこそです。韻文の固有は形容で無く、只その音調節奏にあるとの例、其第三は卽ち是です。

共他餘情含蓄の有無を以て二種の文の相違とする抔の說は淺薄で論するまでも無い事、したがつて以上二三の點から觀察すれば正に散文と韻文との相異の標準は唯一の樂調卽ち節奏にあると斷言は大抵出來ます、之によつて吾々は定義として次の文を得ました。——

節奏に據る語及び句、及び節奏に據る句で出來た文が韻文で、節奏に據らぬ語及び句、及び節奏に據らぬ句で出來た文が散文です。

泰西は措いて問はず、從來東洋にもいくらか是等韻文

の解釋を與へた事も有りましたが何れも第一の標本より枝葉の方へ走つたもの、「詩者人心之感物而形於言之餘也」と詩經の序にあるのも甚だ杜撰、殆んど文との區別も見えず、「倭歌は人の心をたねとしてよろづの言の葉とぞなれりける」も亦同前、作者が感じて何となるのが俳諧のまことゝ芭蕉翁が言つたのも同じく充分の特色を說いたのでも無し、先は概言するところ皆是で、憶へば今迄にこのやうな淺薄の論定を見逃して置いたのも甚だ奇怪の至りです。斷じて世には思想こそ有れ、文思の詩思のと區別の付く事は無いものを、唯々大本を一にして分れて兩つの途を取り一は樂調の光彩を併へ、一は備へず、讀者にわかつ感情の味ひがそこで異なつて見えるもの、詩は志なりとか詩は所感なりとかはそもそも漠とした解釋、これを持つて、俳諧を聞き、また和歌を論ずるどこに論が乾くでしやう、たゞ双方に理が有るのみです。

吾々の與へた此定義がもし幸に謬りの無いものであつたなら、先は此定義を標準として今後は進んで行きたい物、そもそも向後の韻文を——もし創成することを人が許すなら——其標準は天晴この一點に據りたいものです。簡略に前條論じたところに例を與へれば、彼の平家物語のやうな、樂調によつた物ゆゑ、無論完全の韻文で八犬傳の中の諸處のやうな、よし樂調に據る氣で著者が無かつたにしろ、最早音調をはなれて樂調に浸潤した處もあるゆゑ、其ところも亦韻文です。駢四儷六の九分の韻文を全くの散文で打ちこはした退之の眼力、今思へば甚だ高い事でした。それ故に餘事ながら詩味を文が帶びるのは殆んど作者の恥とも言ふもの、散文は散文、韻文は韻文と條理を井然とさせるべき道理は煥然として存して居ます。（上段詩思論參考）

或は今の吾々の韻文の標準を見て直に今後の韻文とそれを同一に視、吾々の區別が井然として居ぬ、むしろ茫漠として居ると思ひ迷ふ人も有りましやう。が決して茫漠とは爲て居ません。今言つた韻文とは卽ちポエトリーの事です、之に對する詩全體の事です。今後——もし社

會が許すなら――出來る新體の韻文は今言つた韻文中の一部分です、ポエトリーの中には種々さま〲の種類もあり、新體の韻文と韻文全體との關係はポエトリーと其種類との關係と同じこと、其委細は次の章を讀んで下さい。

參考

語と言語――英語のウヲルドを語、スピーチを言語と吾々は前段で假りに譯しました。之を語と言との二樣に譯しても宜しいです。が、支那でいはゆる言及び語の意は迚もウヲルド又はスピーチに配せるもので無く、其發は或は直言曰言、論難曰語と云ひ、或は發端曰言、答述曰語などゝ言ひました。前後ともに之を評すれば言は發言で、語は答辭です、所謂言語學上の分類ではありません。二つ又は二つ以上の音が結合して一つの意味を成したのが「コトバ」卽ちウヲルド、發音幷びに語法の違ふ國柄ゆゑ仕方も有りませんが、兎に角此解釋は支那に於て適用は出來ません。仍つて今專斷を以て一方に於て使用の便利を考へ、ウヲルドをばたゞ語、又二つ又は二つ以上の語が結合して一つの意味を來したもの卽ちスピーチを假りに言語と譯しました。ウヲルドとスピーチの着目は日本語の研究に於て第一の重要事件、全躰是は他日著す「日本散文論」に於て言ふつもりですが、一寸こゝにも參考のため倂せて言ひました。

今後使用する語及び言語の意味は右の通り、之を總稱して「コトバ」と命じ、これの活用を語法と云ふ、それらの區別を讀者も御承知下さい。今後また便利の點から韻語、韻句、散句抔の語を用ゐます。韻語は韻文に用ゐる語、韻句は韻文に用ゐる句、散語は散文に用ゐる語、散句は散文に用ゐる句、卽ち此の意味です。

第一編　第二章

韻文の名義

何故に舊來の文及び詩といふ便利な語を捨てゝ新たに散文及び韻文とこれを呼ぶのかとばこゝに至つて是非と

も人が起す質問です。韻文といふ語、或は不穩當かも知らず、たゞし吾々は之を以て從來の各種の名義より立ち優ると信じます。

いたづらに舊習を換へるのは素より穩で無いこと、たゞ此韻文に至つては顯然として舊來の用語に不都合が有る、そのために呼び換へました。今英國で Prose といひまた Poetry といふ語、それを今日和譯して日本では前のを文、そして後のを詩といふ、其前の方はまだ結構、後の詩は甚だ不都合です。日本で普通に詩と云へば、言ふ迄も無く支那の詩を指す、その矢先たゞ詩と言はれてそも〳〵ポエトリーを思ひ出しましやうか、それとも支那の詩を思ひ出しましやうか？　知者を待たずとも、吾々和人と支那との昔からの關係も深いこと、詩といへばポエトリーを意味するよりむしろ日本では支那の詩を意味するとは知れます。ところが支那の詩は日本に取つてはいはゆるポエトリーの一部分、日本全體の上から言へば日本のポエトリーの中には和歌もあり、長歌もあり、連歌もあり、俳句もあり、そして日本でいふ詩は其中の一部分たる支那の詩よりしか意味しません。詩と聞く、思ひ出すのは平仄、四聲、及び韻脚などの云々、即ち日本で用ゐ慣れた詩といふ語は猶日本人をして各種の詩歌を包括しての意味とは受けさせません。詩といふ語の不便はこゝにあります。

大學の博士たちは古の長歌やうのものを俗語まじりで構はず聯ねてそれに新體詩の名を命じました。が、これとてもいけません。第一その詩といふ事、それがそも〳〵邪魔ものです。よし又さうでないにしろ猶これとても一部分の名、「すゝめや進め」口調の一種の名、なほポエトリーの義は出ません。

ならば詩歌と付けましやうか？　早く諦らめればそんな物、併しながら甚だ拙です。同じく是とてポエトリー全體の義は出ず、つまりは漢詩と和歌とを意味するばかり、川柳都々逸の類の意はこもりません。

ならば簡單にたゞ歌と付けましやうか？　これでも矢

張り其意味は和歌、長歌、短歌の類に限られて、其他のものをば含みません。

ならば謠ひ物と付けましやうか？　英國でいふヴアースの意義と是ならば大抵同じもの、やゝ前の二三よりはいゝ方です。が、只ポエトリーの務めは謠ふにあるにしろ、其出來た源は音調です。謠ふ事と音調とどちらが重い物といふに、言ふ迄もなく音調がポエトリーには重いです。ならば、まだ〳〵謠ふといふ語でポエトリーの意味は限れません。

それのみか言葉もまづいです。ならば今樣長歌と付けましやうか？　是ならば頗る宜しいです。しかし是とてもつら〳〵思へばそも〳〵一部分の名目です。義理にも今樣長歌と言はれて短歌の考へが浮かみましやうか？　それ故にこれも不都合です。

なる程以上五六の名とて其實どう付けたにしろ强ひてポエトリー全體の意にしろと言ひとほせば言ひ透せぬ事もあながち無い、それながら無理との評は決して免れはしますまい。日本で筆、西洋でペン、强ひればペンを筆とも言ひます、それながら無理は無理です。故さらに無理と知つて滿足するにも及ばぬこと、或は事に因つて仕方が無ければ何がしの說のやうに外國語のポエトリーを其儘假りて用ゐるので、よしや假り用ゐるにしろ、まだ〳〵意味の混亂するより理解の妨げとは爲らぬ事です。しかしこれは最後の手段、其最後に至る迄の間せめていくらか代用の語が有るものならばと苦心は一先爲べきこと、從つて考へれば他に歌曲歌謠などの名義も有る、まづ是等なら强ひてやゝ我慢も出來ぬで無いものゝ、むしろどちらかと言へば從來の種々の語に全く因緣の絕えて居る韻文の方が宜しいです。と言ふにしろ、これを以て金甌無缺是上の物とは吾々とても斷言しません。只在來のに比べてゞす。穴を言へば韻といふ字そも〳〵此字義すらやゝ曖昧、支那の上代では音と韻と同義にし、後世では異義にした、それらの變な點も有る、それらからか人に因つては結語と命じやうとも言ひ出しました。何さ

ま結語も頗るいゝ、が、語といふのが些と變です。そも〳〵語や句や文の區別が、日本の今日に猶ふたしかである、それ故これらの說もいる(前段餘論の部參考)。しかし、畢竟、それにしろ、極めて俗にこれを解いても語は文の一部分とは大抵斷言は出來ること、既にかうなら、惜しい事に結語は語のいゝわりに意味に於て韻文に劣ります。つまりは吾々が韻文と言ふのも散文に對しただけの事、卽ちポエトリーに配しただけの事、たゞ〳〵節奏に據る語及び句、及び音調に據る句で出來た文を一口に言ひ盡くすに於て此邊の名義ならば大抵其意味を荷はせられる事であらうとの考へから、まづは命じた名目です。ポエトリーと命ずる迄の間に於て韻文の外に好い名が猶有ることならば吾々も喜んでそれに從ふつもりです。

それならば和歌や詩は何か？　言ふ迄も無く韻文の一部分です。和歌や詩には限らぬ事、苟しくも前條に與へた定義の範圍内に在る物は何れも吾々は韻文の一部分と呼び做すので、卽ち長歌も催馬樂も、謠曲も、淨瑠璃も悉く各韻文の一です。つまりは韻文とは廣い名、韻文の其中には和歌や其他の成分が有るのです。とすれば韻文とは全躰の名、全躰の意味である韻文の外に一部分の意味の韻文は無いわけ、これは如何との疑ひは是非引きつゞく問題です。元よりさうです。吾々とて決して〳〵今後韻文の領内に別の一部分を作るにしてそれに迄韻文全躰の名を專用させる大野心は持ちません。ならば此韻文論の目的は何にあると問ふ人の有るは必定、吾々も多言は累ねません、唯これには斯う答へます、從來の各種の韻文より一層に思想の多い一種の韻文を向後の社會が要する物として、其新調韻文の方針はどう向ひていゝかを說き、從來曖昧であつた、散韻兩文の區別を明らかにし其新調韻文に更に名目を與へ、併せて韻文と音樂との關係を研究するのが目的と。此目的を完くするために便宜上次の回で飛んで韻文と開化との關係を說きます。

〔以下國民の友第九十七號、廿三年十月十三日〕

第一編　第三章

韻文と開化との關係

世界といふ廣い處から韻文を觀察すれば如何やうの斷定が下せるか、或は文明の進歩と逆比例に、文明が進んで韻文が衰へると云つたまこオれいの說に從ひましやうか？　まこオれいの此說が妄だとは、旣に人も認めた事たゞし退いて又考へるに、此論も强ち空を摑む方でも無く言はゞ病ひを卜して僅中り得ぬだけでした。其子細に伴つて廣く韻文と世界との關係とを言ふに方り、大躰は已れに近い日本韻文から言ふのが順、しかし夫では殘念ながら今の世界の開化に浸潤した日も淺い事とて吾々の一時代前後の日本の產物を以てとても比較の論は立たず從つて歐洲、而も英國をまづ論臺に取りました。

今この十九世紀に先だつ十八世紀、それら二つを對照すれば大同の中に小異が有り、各々一種の固有を供へるとは見えました。まこオれいではありませんが、虛心になつて一般韻文の傾向を考へると、或は第十八世紀から掛けて衰退したかとも見えます。てにずんは假令詩聖の桂冠をいただいたにしろ、其呼吸は、壯丁の嘯きで無く或は蔑見すれば病者の片息、前世紀から受け取つた最後の一擊は脆くも老躰の韻文を打ち惱まして餘脉絕えさうに爲つたとも見えなくも有りません。あるひは一層酷烈に評を下せば、今の韻文は兎に角今の理學と其表面に於て一致し、合躰し、そして其內面に於ては殆んど氷炭相讓らず、歸順の日の淺い敵黨とも言ふ見得もあるやう、卽ち理學と韻文と契合協同する事の利を表に說いて裏には不利の反問を放つ、やゝ此邊の姿も見えます。あはやまこオれいの論が成功して、先見の明を恣にするか？　そも／＼調和互に協つて充分に唇齒となつて運動し得る大能がかなしくも前世紀以後の韻文家に缺けて居たものか？　夫とも世の運命、勢力の趣くところ岩石も泰山も物數で無くなつたことか？　あるひは之を歡迎して韻文

は理學と合同せず、却つて卑怯に降伏して、其間陰險、志しをたくはへる事か？　その子細の何れに在るかは今さて措いて、其後も韻文の力をして減らさせ、之を惱ました勢力の原と爲つた物は前後數へて三つ有りました、即ち(一)不可思議論、(二)實體論、(三)理學の進歩、これら三つ。

何さま十八世紀に於てはぐれい、ばるんす　こりんす、及びかうはアのやうな大家も出現して各々獨得の眼を啓いて其理を謠ひ出した物の、要するに詩聖の數取りは唯々それら二三でした。固より大詩人は容易に出ぬ物、その二三なのが惡くは無い、唯髓を穿つて天の奥に到着したもの、それら完全なのを尋ねればまづはすぺんさア、みるとんの時に比してそも〳〵何程の相違が有る事でしやうか？　ぐれいやばるんす何れも稀有の天才でした。但し十八世紀全體から取つて論ずれば、此世紀の韻文は多くダイダクチック(教授的)でした。所謂韻文家の本領と呼び來つた想像(イマジネエション)よりは覺性(センス)の方が發達しました。えらすます、だるうゐんは「ボタニツク　ガーヅン」を謠ひ、うゐりあむ　へエれエは「トライアムフス　オフ　テムパア」を聯ね、其他ゆうすでん、ほわいとへツどなど所謂韻文家と云ふ韻文家も、又下手の横好きといふ學者たちも各相應の力を振つて此道に心も注ぎ、中にはさうせいのやうな、一も二も無く、へエれエを攻撃して骨も殘さず爲したのも有るにしろ、要するに外觀は中々盛んで、即ち其餘脈は遂に十九世紀に幾人かの大家を殘しました。悲しい事には是が只外觀でした。會てみるとんが「自然」を談じて後の哲學者に參考を與へた夫だけの力は比較して十八世紀にありませんでした。いはゆる韻文に盡くす力が有れば、即ち感情的に物を言ふ能が有れば、直にそれを一轉して教授的の文即ち散文に、或は教授的の韻文に向けたのが此一時代の概略の現象、それも何故とあれば、外でも無く、前言つた三つの敵に恐迫されて冥々の內領地を削り取られたのです。ましう　あるのるどが歎息して「十八世紀では心意と靈魂

との大妙力を現ずるより寧ろ悟性、機智、敏捷が一般人民の心に行亘つた」と言つたのも誠に見る處有つての事でした。

英國の韻文世界の中で最も隆盛を極めたのは處女王えりさべすの時代でした。が、不思議の現象も有るもので、この十九世紀の初半期は、さて其時代にも讓らぬ勢岸の砂も路傍の柳もすべて韻文を歌ひました。中で屈指なのはをるづをるす、こりれッぢ、きィつ、しエれい、ばいろん、すこッとの類、更に是輩の薫陶を受けて其脉は後半期にも消滅せず、凝つてぶらうにんぐ、てにずん、すゐんばるん、ましう　あるのるどと化生して天晴英國をしていよ〳〵益々天下第一の詩膓國との美名を專有させて來た、そも〳〵此現象實は考へねば甚だ不可思議です。消える前には燈も一たび光る、或は此隆盛はその類でしたか？　飜つて廣く世を見渡せば理學の進歩は日を爭ひ、月を急がせ、時には韻文家の想像の本領に其たしかな腕を差し伸べて、理想の色をして次第に薄くならせる時代、そも〳〵十八世紀が第一に新歐洲の理學の空氣に窒息の犧牲と爲つて終に哀れ無殘に凋落して、さて其後を襲いて同じ轍を踏まぬとは、理外の理か、無因の果か、一考を費すべき價は充分に有ります。

併しながら猶よく考へれば其處に理は有りました。如何にも十九世紀は殆んど其形に於てえりさべす時代と頡頏しました。が、前の十八世紀が陷つた流弊、それをば全く免かれませんでした。試みにだるうゐんの晩年の語を思へは、吾々は殆んど筆を抛つ氣にもなります。だるうゐんと云へば近代の理學の泰斗、言はゞ科學者の代表者です。それで何を言ふかと思へば、其非常な研究、深く理學を究めて飜然として悟れば前日まで最も愛讀したしエくすぴィあでさへも亦面白くなく爲つたと言つた體「さへも」餘は推して知れとの義でした。何さま多少の偏頗も此論にありましたらう。素より夫を偏頗として一概にだるうゐんを駁し倒して濟む事なら世の中に何も苦勞は無いのです。併しながら、他人は知らず、吾々に於て

は決して此だるうゐんの暴言をまこオれエと同じく誣妄極まるとは言ひません。いかにも其理も多少有ります。時代と人の理想とは結び付くもの、初等の地文學を修めた今日の小學生徒から見れば天動説を唱へた釋迦は其生徒にも劣つて、こゝに其生徒に天動説を説く、卽ち釋迦は脆くも一人の小學生徒に說破されて仕舞ひます。素よりだるうゐんを以て小學生徒に比するのでは有りません。が、たゞ理です。今吾々をして直接にほオまアに就きしエくすぴィあにつき、又「フエアリークキーン」につき、失樂園につき、全く今日の理學を離れて考へさせたなら吾々は是等四五の大家の靴を執つて陪從するのも厭はぬ筈です。そも／＼一旦今日の理學に染んで後更に又誦すれば、さて感動され、感化され、欽慕する迄に立ち至つたにしろ、猶前日の靴を執らうとした時より其敬慕の熱度は是非とも淺い譯です。だるうゐんは近代理學の北斗、其若年にしエくすぴィあを愛讀したのは卽ちだるうゐんの晩年を成した譯、何の不審も何も無い、卽ちしエくすぴィあは初めてだるうゐんに讀まれて、さて之に敎へて、さてだるうゐんは敎へられて終に天才の幇助を得てしエくすぴィあと爲り、其極それより一歩の上にさしぬけたのです。之を以てしエくすぴィあの目方は減りません。して見ればだるうゐんの言葉も非理では無い、無い段は無いとして、さて從來の韻文は明かに其邊に於て一步理學の下になつたとは言へます。從來の韻文の能は感情的、變化の瀨戸際に於てそれが敎授的解析的と改まる、つまりは十九世紀も此場合でした。外には又例の博士ほるむす、同じく、此人も韻文の敵と公言して「穢れ手を侮る蚤」、旣にみるとんは排斥した古格の押韻を攻擊の種に取り、鐵枷に束縛されて韻文に自由は一點も存在せぬと宣言しました。吾々を以て此ほるむすの說を見れば是ばかりは局量が狹いと思はれます。鐵枷を牛に嵌めて其牛が自由を得ぬとて、其動けぬのを牛の罪と言へましやうか？ 牛は鐵枷さへ無ければいつでも動ける。押韻は何さま鐵枷、それを去つても「失樂園」のや

うな大作も出來る、それはほるむすの目に入らなかつたですか？ 元より此ほるむすの此攻撃は極めて纖弱な方、併しながら其人は英人に取つてチヤーミング エセイスト（愉快な論文家）でした、其論は人民の過半に信用されました。

一般の傾向がすでに是れ、それで更に文學家全躰を顧れば中には急激の進歩（寧ろ變化）を玩弄にし、終に一方に凝結して所謂近頃の佛蘭西派、即ちぞオら派が出來ました。ぞオらは佛蘭西、併し向ふ岸の菓子を持つ子供は得て反對の岸の子供をして羨ませました。吾々はすこツと、ばいろん、しエれいの類が其非凡の天才を縱横无盡に用ゐて、實際即ち感情（プラクチカル、イズ、ポエチカル）の語を殆んど實地に見せ掛け始めた、その大手腕には敬服もします、又てにすん、あるのるどの徒が同じ脉を受け繼いて多く失はぬのも喜びます。併しながらぞオら派にかぶれるのはどうでしやうか？ 理學の勢力が不思議に強く、それに毆たれて傷は直に治らず、韻文もそのため病ひの蓐に臥して恢復が頗る遲い、それに構はず理學は進む、その兩方をつく／＼見、せめて恢復する病者を見捨てゝ、突然として理學に追ひ付からうとする熱心に驅られたのがそも／＼今日のぞオら派では無いでしやうか？ もしも此推察が違はなかつた物とすれば、即ちぞオら派の熱心を謝すると同時に病人が見捨てられたのを悲しまなければなりません。既に病人は我と同じく一家の運命を荷ふ內輪にさへも飽きられました。まして／＼外面の理學者に！ 併しながら病人は其實今が今藥劑の撰擇中です。

今までを十八世紀以後の韻文に對する論として、さて三種の敵が各々どのやうにして働いたかと言ふに、中で甚だしく韻文を傷つけ、天晴韻文家となる望みの有るものをさへ打ち倒したのは第一の不可思議論でした。

形容して言へば詩人は人の知るとほり宇宙を直覺するもので、哲學者が解剖して覺る處は詩人がたゞちに覺るのです。そして又も一つ形容して言へば、詩人の腦は其一時代或は一時代以後に趨くものです。つまりは世に連

れて同時に世にさし抜け、前時代の落ちた實を集めて完全無缺の宇宙に質しどこやらに「自然」の聲を聞いて悟るのが卽ち其能です。不可思議論は而も此直覺を詩人から奪ひ掛けました。

そもそも完全の韻文とは何？　極めて漠とした題ながら說けます。厭世の分子を含ます、究厄に落ちて惱ます、薄命を見て驚かす、喜悅、感奮、優悠、卽ちこれらが其力めて至るべき點、國を亡ぼされて泣かす、身を失つて樂しい果に安んずる、そもそも是輩が心得です。感情の燃えるのは一種の狂、たゞし詩人の狂は醫學者のいふ狂とは違ひます。卽ち「自然」を愛し、敬し、たのしみ、したしむ、そこに到着する方便は何かと言へば、只一つの誠信卽ち是です。唯誠信の有るばかり——固より詩人に限らぬものゝ、特に——道の在る處を、信じて疑はず心を安らかにして扱うたふ、所謂前哲が堂に上つたのも此より外では無い事でした。たゞ似て非なる物は誠信に似た獨斷(ドグマ)、一步踏をあやまてば則ち誠信は獨斷です。其獨斷、それも場合に於ては必らずしも誠信の敵では無く、卽ち韻文の仇でも無い、が、詩人の能をそこと定めて、心は誠信をやしなふ氣で、終に目を閉けば身は邪路の中となる、卽ち、不可思議論はこれを招きました。誠信は厭世の心を起させぬ物、それで不可思議論が學者の腦に食ひ入れば其主義として物一般を不可思議と見させる、卽ち誠信の領分が、言ひ換へれば多少食ひ減らされる譯でした。よしや其局量の狹さが懷疑學派と同く僞らずとも一旦宇宙に感ずる目を有ちながら、其感ずる目を有つた抑々のいはれを怪しむ、つまりは結果となるものは浮萍のやうな大迷想、でなければ大獨斷、で無ければ犬儒再來の厭世主義です。學問として吾々は不可思議論を充分に尊み敬ひは爲ます、又それが纖弱きはまる詩人を掠め去つたのをば惡みません。唯掠められた詩人の腑甲斐無さ、それをつくづく考へれば惜しむ心も起ります。不可思議論の勢力の始末卽ち是です。

次ぎにリアリズム卽ち實躰論の濫用について考へれば

均しく是も不可思議論と同じ故障を韻文に爲しました。そもく所謂實躰論、まづ言ふべきは夫についての疑問です。はたして此實躰論を奉ずる學者、特に詩人はそのために想像をどう象るものですか？ 之がために想像は卑陋になるものか、それとも低くなるものか、乃至何とも爲らぬものか、或は立ち上つて來るものか、それが一つの考へ物です。が併し斯うなれば、既に論は理の奥に入ること、自然言葉の解釋が先きに立ちます。假りに解釋すれば卑陋は邪心のある陋しいこと、低いは邪心の無い平凡のこと、まづ夫として一二の前輩の說を叩けば韻文家の多數は甚しく、實躰論の反對で、彼輩は今解釋を擧げた通りの意味に因つて之がために想像は卑陋になり、また低くなり、で無くとも何とも爲らぬが精々の處と言ひました。それの證據を求めれば近世は直ちにぞオらが引き出される、如何にもさう有りさうな事です。併しながらぞオらの主義は吾々が前にも述べた通りつまりは急進を求めて得た結果、卽ち實躰論の濫用です。とすればぞオらを以て其例として引かれるのに吾々は承服出來ません。濫用で無く、全く以て實躰論の眞髓によつてさて卑陋になり低くもなつた觀念が有ることならば其見本が見たいものです。が、吾々には見出だせぬ、見出だせぬ處で吾々は須義務として意見を明かせば實躰論を奉ずるため想像を卑陋にさせ又低くさせる事は決して無い、只何とも爲らぬにしろ、少なくも立ち上がらせる、と斯う答へる計りです。言はゞ此說前段不可思議論の場合ひとやゝ反する處も有るやう、が、決して反對はしません。そして何故に卑陋にさせぬと言ふのか？ 多言も入らぬ事、「自然」を卑しめてこそ思想の卑陋が始めて出「自然」を低くしてこそ思想も始めて低くなる、今の實躰論に於て此邊の事實の有る事を吾々は更に信じません。もし有れば、濫用です。

ならば實躰論は韻文の敵で無いか？ いや、それで偖大敵でした、而も其濫用、急進の害は悟らずに觀する大弊を招いて、卽ち其悟らずに觀するため、吾々の誤解が

「自然」をいやしめたかとも見えました。併しながら是は只々濫用の一點だけ、濫用で無くてあつたにしろ、猶從來の韻文に實躰論が矛を向けたのはそれが直接又は間接にどうしても想像(所謂從來の)の區域を狹める性質である、此一事でした。此論派の固有として間々理想的と衝突する、さて其理想的と實躰的と其何れが從來の直覺の韻文に便であるかと言へば、兎に角今迄の處で理想的の方でした。直覺のある部分が、實躰論に蹴散らされた譯卽ちこれです。但し韻文と此の論との關係について吾々の言ふ處は是のみです。他に想像が之に汚されるとも信ぜず、獨り濫用が却つて之を汚すかと或は見えると考へるのみです。

次ぎに理學の進步、これが韻文をいぢめたのは今更あながち嘖々しく例を引くまでも無く、つまりはじゆぴたアを以て日に配したやうなそれらの想像が減殺されるのは迚も爭ひ得られません。卽ち今日こゝに韻文を作るとして、其辭句を巧みに用ゐる段に於て直ちに古代の想像に任せ、みユうず、ゔゐなす、あぽろ、きユうぴッどとよし用ゐるとした處がその用ゐたのは唯々習慣、讀者も之を習慣として扱かふ、其段になれば習慣は得て一步かたむいて儀式となるもの、卽ち讀む者に分配する所感はむしろ儀式といふためにそれ全躰は傳はらず、動もすれば却つて嘔笑の情をも動かし、從つて信も感も乏しくなります。或は前人も言つた通り、未開の時代では天地宇宙の變幻奇怪を單に變幻奇怪として驚き、あやしみ、敬んで觀る、そのために感情も其點から動くに便利のよかつた、それを理學が故障を入れ出したのは理の視易いところでした。

先は以上三種の大勢力が十八世紀以來の文學特に韻文の上に邪魔を加へて、一時見る〳〵そのために天晴堅かつた韻文の根も左右に動搖された、その現象、それが此後どうなるかと、扨こゝでまこオれいに言はせれば、直に持論に從つて斷定して仕舞ひましやう。が、併し吾々は現在これら三種が前にある害を爲したに拘はらず、こ

の害を爲したのは三種の方に惡意の有るためでは無くて、むしろ搖かされた韻文の方に於て充分の貫目が無かつたことと信ずるばかり、更に他に目は附きません。まづ太古を考へれば分かります。

　不朽の寶典の「イリアツド」、その出來た處の希臘は今も永久に無上の光りを哲學に貽して、仰いでは後世の祖とも言へる、さて其時代に「イリアツド」が何故に出來たものであらうか、もしまこオれいに爲つて見れば疑ふ處も出て來ます。韻文は、開化と全く伴ふ事は出來ず是非いくらか後れるものか？　もしも是が眞理なら、そも〳〵太古人間が始めて出來て、やがて始めて韻文らしい物の出來た時には其韻文は其時に於て一歩その時の理想より引き下がつた物でしたらう。更に遍く例を取れば「ねんねんこゝろり」の子守唄を始めて作つた其人は實際其「ねんねんころり」を作つた時だけ平生より馬鹿に爲つた譯です。が、是は暴論です。なる程直覺はする、しかし時代に後れるとは公平に見て、誰でも決して言へません。後れると言へぬ、即ち開化と伴へぬとも言へません。開化と伴へぬと言へぬ、ならば、伴へるか、或は進むかの二つです。進むといふだけは大言に過ぐるため言はぬとして、さて伴へるとは充分言へます。勿論これはたゞの理です。これで思へば十八世紀以後恐ろしく動搖したのも奇怪なやう、併しながら遙かの前でも言ひました、一般の人の思想が新らしい學問を得て大にかはる時代とて其間その動搖は一時の變相であつたのです。もしも變相で無いとすれば前の暴論は活きる譯です。それ故に二つは互に伴へる、ともすれば其理の有りながら理に外れたのはそも〳〵誰の罪でしやう？　つまり當局の韻文家の罪でした。甕の中で甕の外部の話は出來ず、今までの韻文家が此方に於て凌遲した、それのみ見て理を覩なければ、二つ相伴へるとの論も亦空論と見られるわけ、併しながら理の端は一分でも手に入れば其末は引ける物、伴へると見込みが付いたことならば是非伴へる譯のものです。ならばどうして伴ふか、前擧げた三つの大敵が有る

以上は迚も成效は無いであらう。かう言ふ説も出る順でしやう。併しながら此點には吾々とても充分な答へは付きません、もと韻文は感情の花、之に對してどこから咲いてどう實がなるとは言へません。只效果のある事とは道理からして斷定します。

如何にも不可思議論は從來の誠信を減らしました。が强ひて言へば其減らされた誠信は唯不可思議主義の誠信で無いのみでした。假に、之を不可思議論が奪ふとするところで、其奪つた物は矢張り同じく不可思議主義の誠信です。直覺して娛むのも誠信なら、不可思議として敬するのも誠信です。「敬する」、不可思議論の眼中に「敬する」一抔の語は許せぬと若し打ち壞す者が有れば、其人は「自然」に逆らふもの、「自然」を卑しむもの、たゞしどんな學理でもさう有れば早非理で、韻文に關係の有無を言ふにも追ばぬ事です。そも／＼直覺は疑はず、不可思議は考へる、たゞし考へるだけならばまことに「自然」の靈、徳、美、愛などを滅絶する事はまだ／＼出來ず、さうあれば韻文もよし一時は之に惱まされたにしろ之が敗理無殘に走りさへせぬ以上は永久の敵となる事も無く、寧ろ同じく兄弟合躰の實は奏せる譯です。「自然」の靈、徳、美、愛などが滅絶せぬ以上は韻文の命は有るものです。不可思議論が從來韻文を辱しめた廉に於て第一に烈しく働いた物、それすら既にまた右のとほり、まして況んや實躰論にしろ、理學の進歩にしろ、もしも邪力を振ふとしても、「自然」の價値は決して減る譯が無いとすれば從つて韻文の亡びるいはれも有りますまい。たゞ何が無しに從來の韻文を其儘にして保存し、亦受け繼がせやうと思ふのは大變な迷ひなので「オヂツセイ」にあつた美も未來の美も天意ならば均しく同じもの、其歸する處が「自然」を恥かしめる點にさへ無い以上は卽ちそれが絶世無雙の韻文なのです。が、しかし、從來の韻文その躰を墨守すれば、卽ち取りも直さず、理學に後れるよし何うにしろ、後れさせるのは、抑々韻文家の大恥辱ところが悲しくも今日の世界の韻文は一般が悉くその方

です。これを思ひ、彼を考へれば、まことに以て今日は猶豫する時では無く、當に一派の韻文を更に開き出すべき秋です。吾々が隗から始めて言ふ韻文、そも〳〵成效は幾年の後にも知れぬものの、これを獨り日本の小局部にとゞめ獨り和歌や俳諧と爭はせる處に止まるでは有りません、つまりは望みを大にすれば、前條言ふとほりの理由により庶幾くは世界の開化に天晴伴はせるに至らせる、其規模をそも〳〵造り出したい其點にあるのです。

第一編　第四章（上）

在來の日本韻文に對する妨害

餘情の性質

端無く前章で韻文の本能をも說きました。それを標準として開闢二千年以來の日本韻文を批評したらばさて何と言つていゝでしやうか？　前章に言つた標準に正しく契合して居る德が從來の日本韻文にありましたか？

日本韻文といふ韻文、その內譯を數へれば和歌といひ謠曲といひ、俳諧といひ、淨瑠璃と言ひ、其他殘らずで殆んど三十種にも上る、其外觀は盛んな物です。外觀は盛んである。其盛んであつた甲斐がそも〳〵充分有りましたか？　思ふに在來の日本韻文中、霸權を一方に掌握して隱然として大勢力を具へて居たのは和歌、俳諧、及び漢詩卽ち是等三つでした。漢詩、之を日本韻文とするのは稍變なやう、が、日本に傳來して米食の和人が之を思想發揮の具に用ゐ、中には多少支那に心醉して支那の理想を含んだものも有つたにしろ、兎に角に疑ひも無く日本では一派の日本の產を造つたので、而も其勢力は中々和歌、俳諧に讓らず、時としては他の二つをさへ凌ぐばかりの體もあつた、卽ち之を日本韻文の三種の一と名づけても、思ふに不都合は有りますまい。と、して以上の三つが日本韻文の代表者であるからは之を充分に評しただけで大方日本韻文全斑の批評も終る譯です。

其心を以て三種類引き括めて評を下せば、或は酷評かは知れず、併し頗る惆悵に堪へぬ處もあります。吾々は

近頃になつて、文學に對する世人の眼が次第に鋭く、和歌、俳諧、及び漢詩の比較論が前後續々として現れたのは見ました。みましたが、赤心を言へば、吾々は抑も其等の論を以て第二の點を喋々し、却つて肝心を忘れたので無いかと思ふ處無くも無いです。三十一文字も短いでしやう。十七文字も猶更でしやう。思想の大小は其實はなはだしく字數の多少に因るでも無い、それを構はずに十七字は短い、いゝや三十一字は十四字多い、廿八字は又少ないと只管に數量の多少を爭ふのは窃かに惜しい心もします。勿論、これには双方に理と非理が無くも無し爭論もそれ故にこそ起るものゝ、吾々は字數の大小より何より先きに、日本從來の韻文が眞實充分に韻文の目的を達し得たか、どうか、其方を論するが至當と思ふのです。と言つて、決して篤志の諸家が各其信ずる處により熱心に辯難論評した其事が今日の文學界を多少利益しなかつたとは言れません。吾々とても、流石益をも得ました。得ましたが、只々和歌、俳諧或は漢詩とそれぞれ一局部に眼を注いで相辯論する偏頗を去り、之を日本韻文として一段廣い點から見、ついて充分の批評を下すのが却つて目下の必要では無いでしやうか？

それからして以上の三種に思ひ切つて吾々が批評を下せば、さて歌人、宗匠、及び詞伯の憤怒は招きましやうが、前章の標準にまづは適せぬと言ふだけです。鷄肋の殘肉ぐらゐは成る程未練で拾へもしましやう。其他に於ては全く駄目です。

或は吾々の理解力がまだ不充分で、和歌、俳諧、及び漢詩の充分の長所を見得ぬかも知れません。固より曾ては一時見えるものと勉めました。併し乍ら終に今迄吾々には見出だせず、飜つて其當局者、卽ち歌人、宗匠、及び詞伯の說を聽聞するに、是すら吾々には充分な答へをしてくれません。敢て問ひますが歌人、宗匠、及び詞伯の中其一言一句でも充分に明らかに各の韻文の長所の解釋を與へたのが有りますか？　と言へば、中には怒つていくらも有る、歌人には貫之の古今の序を始めとして各

家の歌論も有り、宗匠には俳諧流行以來相上下した俳諧論もあまた有り、詞伯とて同じく詩論を草したのも有る、斯う云ふ反對は是非とも出ましやう。が、それです共點です、反對者は何を例に出すかは知りませんが、兎に角其の古今の序とか、又は世に普通有る所の説に就いては一も二も無く吾々は服せません。そも〳〵夫等をもし萬一金城鐵壁として論者が恃むものならば吾々はまだ〳〵論者がその位の前人の論で滿足して居るのかと聊か失望する所も有るのです。

今揭げ足は成るべく取らず、として歌人共他が充分に今迄に於て和歌共他の作の目的が前章に擧げた所にあると信じて居たかどうかは第一に吾々が疑ふ所です。如何にも「人の心を種としてよろづの言の葉と」も爲たのでしやう。「眞を現はして姿」とするのでしやう。が、その眞や心といふのは果たして何を指したのですか？　吾々一己の心意といふわけか、それとも天地自然の眞といふわけか、貫之のは言ふ迄も無いとして言はず、吾々はその範圍の大小を區別するに當つて五里霧中に立つ思ひもします。それで今日の歌人すら之を充分に解釋もしません。歌人には分かつて居る事でしやうか？　ならば何故に解釋を呑まれるのですか？

一方からして偏見の解釋を下せば歌人、宗匠及び詞伯が言つた韻文論も多少われ〳〵が言つた所と同じやうにも見えはします。が、その結果が、更に其作に出て居ぬそこからしてまた考へれば吾々は共作者が果して充分に目的を理解したかどうかを疑はなければ爲りません。それの證據に歌聖や詞伯がさて大達の人であつたか、よしや、大達の人で無かつたにしろ、頗るの哲學者であつたか、その一段が疑はしい事です。人丸赤人は成る程歌聖でしたらう。成る程ある歌人の辨ずる通り天地の大は認めたでしやう。ならば其人の平生の理想はどうでしたらうか？　吾々はこれを知るに苦しみます。義務として意見を言へば、人丸や赤人すらさて天地自然をば觀たばかりでした、觀て悟つたのでは有りませんでした、調和の

錠前に手は觸れませんでした。

「田子の浦に」、たゞし是は觀察しただけです。なる程、前面には白雪皚々たる富士を眺め、其前は一面切り開けた青海原、言ふ迄も無く其景色は壯觀です。其場處に立ち臨んで「あゝ素晴らしい」と心に感ずる、そもそも其處が歌となる境の場處、それだけは宜しいです。が歌に因つて考へれば、風情は唯々それだけです、大きいと感じただけです。所感を寫したのみが、韻文の能ならばなる程是でも宜しいでしやう、觀ただけ、觀てただ其「大」を感じたのみでは俗人と何處に相違が有りましやうか？　今この歌仙の代りに無智の老父をつれて來て其天地の雄大を見させる、見させた處で老父とて同じく素晴らしいと思ひましやう。唯々老父なら歌に綴せぬ、それ故に歌にはならず、併し所感の點から言へば歌仙も老父もそれだけならば同じものです。そも／＼歌仙が感じた趣きが充分に歌に出て居ますか？　吾々はかう信ずるのです、感じ極まれば其感の因つて起るのを考へるのが自然、と言ふ譯は天地の大なら大に感じて其大の因つて基づく處を考へる、卽ち是で、哲學者と同胞の實を表し得る詩人の本能は此一點です。特に吾々の思ふ處によつて見れば「田子の浦」の所感は極めて淺いのです。ただ「自然」の大を觀て、大きいと感じたのみです。感じたと言ふものゝ本當に感じ拔けたのではありません、感じ極まつたのでは有りません。たゞ／＼觀ただけの風情です、卽事です、卽興です、田夫野人と同じ胸中です。もしもさうで無いとの證據がこの歌にたしかに在ると世の歌人が敎へて下さるものならば無論吾々も滿足します。只々吾々の滿足は、吾々の刻苦した研究解釋も遂に甲斐無くいかにもこの歌に充分の價値は見出だせません。

或は斯う反駁する人も有りましやう、卽興寫眞は意外に餘情を持つ、「田子の浦」の歌も他の俳諧漢詩の卽事と同じく、淡々として卽興に眞を寫して意外に餘情を籠めてあると。面白い問題です、吾々もかねてから卽興と餘情との關係については、隨分言ひたく思ツて居ました。

特には吾々の意見によれば、從來の日本韻文の長足の進歩を妨げたのは或は餘情云々のためかとさへ思はれる場合ひ、こゝで卽興と餘情との關係は無論、單獨に餘情は何かと研究するのは大に面白い問題です。

吾々は歌に限らず、俳諧にも、また漢詩にも各其當局者が注釋批評を加へて、しか〴〵の餘情が有ると無暗に言ふのを聞きました。中には吾々も同じ餘情と認めて充分に承服するのも有ります。が、當局者の言ふ程充分には認められません。吾々の眼力の足らぬためでも有りましやう。但しそれにしろ意見を叩いて見ましやう。

まづ田子の浦なら田子の浦の好風色に感じて思はず安らかにそれを其儘有りの儘詐らずまた矯めず、例へば畫家が實物を寫生したやうに、寫し取ツて詞藻とした處で吾々は思ふのです、そこには付け加へやうで餘情が有るとも言へる、併し有ると斷言は決して出來ぬ譯であらうと。何故ともし言ふなら虛心に爲つて考へるがよし、眞を寫したといふだけなら理は唯その場が眞物の摸擬であるだけです。例へばこゝに林檎が有る、その紅玉のやうな麗はしい點から、赭色に濃い枝の邊まで些しも眞物と違はずに寫す、その寫し上げる處で畫とし、又眞を寫すとして完全無垢の結果は有つたにしろ、さてそこに何の餘情が有りましやうか？　成る程林檎は極めて美麗、甚だ甘さうにも見える、卽ち見る人は圖に對して涎を思はず催ほす、其甘さうに思ふたのが、もし歌人其他に言はせれば所謂餘情である譯です。もしも餘情と云ふものが歌人宗匠たちの言ふとほり極めて靈妙な力を持つて文學の中に存在する事が正確であるものなら、同じく美術として理の同じな繪畫、彫刻の中にも存在する譯です。併しながら歌人達の言ふやうな極めて漠然とした餘情の色は吾々を以て視れば全く以て繪畫の中にも存在しません。林檎は甘さう、しかしそれが眞正の餘情ならば天下に有る物何れも餘情は持つでしやう。塵垢にも臭いと云ふのが餘情ならば、瓦石にも碎けるといふのが餘情でしやう。「田子の浦」とばかり只々景色を平叙しただけを

以て餘情が有るとして満足が出來るから、同じ道理で塵垢と言へば臭いといふ餘情を思想に聯絡させて満足も出來る譯でしやう。そも〳〵是が正しい論ですか？　吾々は今この論の正否を説くに及びません。

殆んど斷言する氣で言ひますが、從來の歌人たちの言ふ餘情は吾々を以て見れば餘情で無くて注釋です。今更に他の歌を手に當つた儘取上げて其子細を説いて見ましやう。

「きみがため　をしからざりし命さへ　ながくもがなと思ひけるかな」

意は情人に逢ふ迄は殆んど命の無くなるのも惜しまずに居たが、さて逢つて後になれば更に永久の楽しみが欲しさに前日は無くなつても構はぬと思つた命も却つて惜しまれて來ると山譯で、さて歌人は其實これらの注釋をどこに區域を付けるとも無し漠然として餘情と言ひ做すのです。何さま歌について見れば(一)歌人を愛する意、(二)快楽を保存したい意この二つは意外に於て髣髴としてついては居ましやう。併し乍ら歌人は是等をも餘情といふ、ならば林檎の甘さうなのや、塵垢の臭さうなのと些しも變はる處は有りますまい、元より附屬の感情です、隨從の意匠です。手紙を書くに方り、硯を持つて來いと言つて只硯のみを持つて行くのが普通の智識を具へた人の所業でしやうか？　手紙を書く場合に於ては硯といふ一語の中に墨も筆も籠る譯、そも〳〵前々の例から言へば歌人はこの筆や墨の附屬するのをも餘情と言ひ做す事でしやう。さて爰です、即ち前にも言ツた通り、この附屬隨從のものがもしも餘情としてさほどに尊いわけならば天下有りとあらゆる物何れも尊い餘情で充ち〳〵て居るわけで、すなはち是で詩歌の類が品位を加へると只管に斷言するのは餘りと言へば幼稚な論、筆や墨は右の場合で硯の效用を寛くさせる分擔の一部分、素より珍らしくも可笑しくも無い事で、即ち「君がため」の歌に於ける二種の情感も等しくまた隨從の一部分、吾々はそれが餘情といふ有り難い名を貰つたのを窃かにそのために僥

倖とします。隨從附屬を離れては土臺からして意が成り上がらぬ、即ち隨從附屬は其作に取つての一器械、人に取つては四肢眉目、四肢眉目が有るからとてよく出來たと人を評せるものならば、つまりは其評論は不具で無いといふ所を許すだけの價値のもの、そも／＼歌人等はこの位な哀れな辯護で之を護るのですか？

旣に餘情――歌人、宗匠、及び詞伯の言ふ――餘情の性質は詰まる所右の通り、理窟の付くのもそれ故に言はば勝手次第な譯です。逃れがたい附屬の道具をさも作者の腕らしく云ふ、それが果たして正しい批評ですか？ 所謂作者の腕といふのは、猶一歩の上に無くては叶はずもしも必要の道具を用ゐたばかりが詩人の腕と云へるならば其詩人は何の點に於て俗人と違ふでしやうか？ 修辭の巧みであるだけでしやうか？ ならば哀れ極まるものです。

ならば餘情についての吾々の意見は？ それは多言も要しません。歌人達の所謂餘情は無いものとも、又無用の物とも吾々は云ひません。が、其餘情は其實必要の道具、その有るのは無いのに優るとは云ひましやう、有るからとて褒めて騷ぐ原因は些も無いのです。畢竟餘情はそれだけの物、それを尊崇して心醉に傾むく、自然理窟をそれに付けて果は普通の歌人、宗匠だとか云ふやうな恐ろしい故事附けもまた付く事です。考へて見てもわかる譯、如何にも平淡で景を叙した其韻文は佳作です。佳作、しかし價値は景叙といふだけです。餘情崇拜家――ともし云へるなら――は此空隙に跟け入るのです。空隙に跟け入つて、何が餘情、あれが餘情と種々さま／＼考へが許すかぎり、想像が付くかぎり餘情で其作を評し上げる、さうした處で、眺めれば世の中は先そんなもので痘痕もやはり笑靨、つまりは其平々淡々が俄に解釋を受けて出世して天下無類の作ともなります。併しながら可笑しい事です、何さま古池に蛙が飛び込んでぽちや／＼した、其景叙に取つては無双の出來、もしも此一句がつまらぬ百姓の口から只句面だけ現はれたものならばそも

〳〵何の世評が付くものでしやうか？　たゞ百姓は景を言つたと言ふだけで澄まされましやう。幸ひにして芭蕉は達人、不世出な一種の哲人、其口から出たればこそ何はさて百姓にも言へるものゝ、世評は却つて受けたのです。西施が顰めば東施は宜いと思ひ、太閤が寢言を言へば下民は寢言に意味が有るかと思ふ、大抵解釋批評の出所は其平生に基づく事で、要するに事の過半は平生の樣に照らして判斷される、古池やも其實その方でした。言ひ過ぎるか知れませんが、また宗匠には憎まれるか知れませんが、吾々は古池やを景叙と見るより外に目を持たず、よし意味卽ち餘情が有るかは知らぬものの、それは畢竟、餘情崇拜家が故事附け上げただけの事、句面に其意は充分して居ぬ、是が吾々の私見です。唯これを景叙と見て、凄まじい秀作であるとは素より吾々も信じます。が、他の意味に於て分理も信じません。よし、それにしろ、餘情が實際有つてさて言出したものならば充分に其餘情が人にも通じ得るやうに作るのが作家の任、實に義務です。古池やで通じますか？　通ずると或る部分の宗匠は言ふ、しかしそれは先人の考へから引き續く評では無いでしやうか、前の塵埃を臭いと言ふのと同じ類では無いでしやうか。（次號參考）

畢竟卑劣な言葉ながら餘情までも分かるふりをするのはさて大した量に見えるもの、吾々は今の先輩がこのために餘情を理解された振りをするとは言ひません、が、吾々はよしや吾々の貫目を落すにした處がどうしても歌人たちの付けるやうな理窟は道理と見る事は出來ぬのです。さうかと言つて吾々は死を期して主君の難に赴く者の心中に主人を愛する丹心の有るのは元より認めます。此丹心は隱れたもの、歌其他にして語を隱せば所謂餘情となるもので、それをば前にも言つた通りわるいとは決して言ひません。その位のものを咨しく褒める歌人たちの氣が知れぬのです。歌人たちの氣が知れぬのでもありません、その餘情主義が大に日本韻文の大害を做した事實を認め得たため吾々は甚しく餘情主義を憎むのです。

餘情主義は道理に於て吾々が前にいくらも證據立てた通り幼稚極まる說、が、それを尊崇した結果は遂に日本韻文の進步を充分に妨げました。

是は前人または吾々の朋友中にも餘り着目は無いやうです、が、吾々の一己の意見にしろ多少の理は有ると思ひます。

餘情を以て作を辯護する、作るに方つても餘情含蓄の巧を望む、さて餘情含蓄の巧を望めば極端の結果として引つゞく弊害は秀句を射らうと勉める事と寫實を能とする事とで唯是だけの五六句で從來の日本韻文の欠點は吾々も充分言ひ盡くせると思ひます。實に從來の日本韻文は餘情主義のために死物と爲ツて仕舞ひました。

素より餘情含蓄の巧妙は韻文に取つては甚だ必要、それを望むのを吾々も排斥はしません。が、それから極端の弊に走ツて秀句を求め出したのは飽くまでも論ぜずには居られません。いはゆる俳諧歌の發生はこの故でした。終に走ツて俳諧の出來たのもこの故でした。未開は單純、進步して複雜、そもそも未開時代に發生した和歌を凌ぐばかりに猶單純な俳諧が行はれ出したのは誠に以て異數なやう、しかし吾々はこゝに其然るべき原因は明らかに認めました。秀句は長いより短い方がよくそれに短くても餘情云々が理窟を付けて大きな意味のやうにしてくれるこの二ケ條が俳諧の保護者となり、前の一條が俳諧の發生を勸めて後の一條が其命脈を繋がせました。前のは創業者で後のは守成者でした。餘情主義のために俳諧も育ちました。一方に走ツて一種の子、卽ち狂歌が生まれました。此解釋は可なりに言葉を要しますが、其前に言ふべき事は餘情主義の發生の原因です。

何故に餘情主義が日本に於て發生して而も二千年來支配の力を失はぬかは最も考へて面白い問題です。吾々は餘情主義が日本の特有とも思ひません。苟しくも文字の有る處には必らず是は有る事で、只強弱が有るのみです。支那に於ては詩經の古昔から天晴發育に發育して長篇さへも現れた、其進步をこちらから見れば甚だ美ましく思

はれるのです。何にしろ、長篇は長篇の必要を以て出來たもの、一言二言に言ふ處を猶景物の附屬を加へて胸中をば思ふまゝに漏らす、即ち支那に於ては日本よりも餘情主義には凝らなかツた、其證據とは充分見えます。元來餘情の考へは小で大を兼ねさせやうとの點からして起るもの、既に歌人が和歌に對して餘情云々を說き出したのは、裏から言ツて、それら歌人が幾分か最早和歌の短をみとめた事の有つた故で、即ち何と言ツても此點には決して血路は開きません、よしや短篇の別、寸鐵殺人の花を言ふにしろ、もはや歌人が餘情を口に言ふからにはそれが小を厭ふ心中の證據です。日本韻文が長く發達せず短かく固まり付いた原因は即ちこれで分かる事、抑歌人宗匠などは之を外に延して進るのを思付かず、內に固めつけて終に小くして仕舞つたのです。西洋(支那も多少)は比較して之を大く育てました。日本では小男に拵へて小刀細工を爲させました。餘情主義は早く韻文を大人びさせ過ぎて瘦生い者にさせたのです。夫で情を隱して漏すまいと勉める、在來日本の韻文は即ち是でした。

(國民之友第百號二十三年十一月十三日)

第一編　第四章(下)

韻文制定の方針

餘情の藩屏金城が有る以上は故さらに刻苦勵精して宇宙の秘密をみづから宇宙に代つて解釋し正さうとの念は是非とも作者の胸に起る譯は無いことで、つまりは作を作るに方つても其餘情は酌み得る人にだけ酌ませる氣に爲り、其他に一つも目的を有たなくなる、即ち餘情主義に沈淪した作者の腦に斯う爲るのです。是が完全な詩人の本能と云へましやうか? それだけならばまだ好いです、弊の極まる又は一歩々々と歩を進めて、苟しくも餘情に害となる物をば忌んで來る、さて何が餘情に害となるかと云ふに、其主なものは鹿爪らしい議論、即ち鹿爪らしい、骨々した議論はよしや如何なる理想を以て萌えたにしろ、一も二も無く排斥されて、即ち、こゝに巧麗

纖弱、優美、細心などばかりが比較して詞藻の花と稱揚される、日本從來の韻文——ことに和歌俳諧——は全くこの境遇に陷つたのです。ある人は日本語に壯んな言葉が無い故に「壯」といふ思想が和歌俳諧などに乏しいと言つた、それも一理の有る說ながら吾々は猶其他に於て此餘情主義が大に其いはゆる「壯」「大」などの思想の發揮を日本韻文から强奪したと思ふのです。詞藻の花と云はれるものが、僅に巧麗其他のこぎ／＼した物にのみ止まる、自然にそれからして引きつゞくのは奇警、敏捷ぐらゐなもの、沈着、大度は全く形無し、卽奇警に因つて奇才を振つた、云はゞ地口やうの物ばかりが引續いて人の氣に投じ始めて來ました。この場合に於て俳諧は不思議に便利なもの、それ故に實は空前絕後の異現象、卅一文字から生れた十七文字が見事に三十一文字をさへ凌ぐに至りました。併しながら、もと／＼それが發生した原因も右のとほり、大抵は餘情主義が其命の綱で、それから出る斬新奇警が身の楯で、終に隆盛を得るに至つたそこを考へて見れば俳諧に於ても一大觀を人に與へる文の無いのも怪しむに足らず、又哲理を解釋する本能の欠けて居るのも至當な譯です。日本韻文の規摸が是程に小さかつた物かと思へば、遺憾實に心骨も碎けるやうです。

併しながら吾々のこの位の言葉を以てよく從來の歌人宗匠たちに猛省を乞へるかどうかはむしろ吾々自身とても怪しむのです。たゞ／＼輕薄な追從や世辭をはなれて獨り文學を眼中に置いて見れば、吾々は以上言つた處の言葉を一歩も退ける事は出來ぬのです。そも／＼此事の證左を此上にも求めれば猶無くも有りません。第一に吾々は歌人宗匠たちに問ひたくなります、もしも吾々の局外の觀察は迷ひであつて、和歌俳諧は全く以て完全の韻文であるならば、是非ともそれに祕密を開いただけの結果は後世にあらはれたらしいもの、併しながらそれが現はれたかと。例へば失樂園は人世罪惡の本源を解剖して遂に後世の學者の材料と爲つたとほり、もしも日本の韻文が完全であつたものならばよしそれ迄に至らずとも多

少其邊の效果が出た譯でしやう。ところが吾々にはそれが見えません。よしや、人丸赤人西行の輩が歌仙にしろそれは和歌といふ一部の物の技術の先生であつたのみです、哲理を闡いたものでは有りませんでした。無かつた證據には有つた證據が無いことです。芭蕉に至つても同じく其の通り、俳諧といふ一吟詠の作り方の先祖でもありました、效果は只それだけ、學術に何の益も與へて有りませんでした、益どころか、害さへも與へられませんでした。いづれにしても人間世界のすべての思想に影響らしい影響は持ちませんでした。情無い事實では無いでしやうか？ 彼は天地のうるはしい處を見ただけで、それを闡く事は出來ませんでした。見るだけならば誰も見る、無理も無いことでした、學術にも影響の無かつたのは。わづかに「しぎ立つ澤」に哀れといふだけを觀、わづかに「枯れ枝に烏のとまる」のを淋しく觀、其着目と觀察とは天地宇宙の一端の處に止まつて更に顯然として大きく觀る處の無かつたのは蔽る處も無い事實でしやうが！ まことに眞成の韻文が日本從來に有つたものならば何故に日本は是程に哲學に於いて貧弱な國でしたらうか？ 宗教家には中々の哲學者も有つた、然し日本の詩人には十分の哲學家が有りませんでした。有つた、多少は有りました、有りましたが、世尊の糟粕を護符と崇めて、其小天地に跼蹐するのでなければ、理窟も無く國家主義に狂した者のみでした。いはゆる規律正しく宇宙を探つた文學者は其實一人も無かつたのです。畢竟宗教の内外に論無く宗教心を文學に働かせるが詩人です。しかし、日本に此類の詩人が一人でも有りましたか？ 餘情云々のつまらぬ辯護に、たとひ韻文を地口の材料としただ躰裁のいゝのを尚ぶ、ことには題を設けて物を詠ずるなど大俗きはまることを行つて恬然として些しも恥ぢす、それで詩人の能を盡くしたと思つて居た、實に是が從來の日本韻文世界の有り樣でした。

さすがに此點に於ては漢詩だけがむしろ和歌俳諧よりも優つて居ました。其優つた原因は、多く言にも及ばす

彼等詞伯は比較して歌人宗匠よりも無形の學に委しい方、それのみか韻文として可なりの價値の有る唐以前の詩を常にも見做れた、それらがそも〳〵原因でした。がしかし終に和歌俳諧を全く配下と屈服してみづから盟主と名唱るその處までは行きませんでした。何の故にさうでしたらう？　吾々を以て云へば漢詩に於ては和歌及び俳諧の各の長處はいづれも具へて而も其外に猶支那風としてすぐれた處を持つて居ました。殆んど、云はば漢詩は日本韻文の中の最上乘、しかしそれが終に覇となれなかつたのは、吾々の見る處で只その語法に因つたのです語法が日本語としたしみ難かつた事、その點に於て漢詩は和歌俳諧に劣つた、それが大きな邪魔を爲したことでした。それ故にこの漢詩とても其內部の頗る發達して居るに拘はらず、終に天晴の物となれませんでした。

更に立ち戾つて全體引きくるめて言へば、どうしても日本從來の韻文はひとり一局部の蠡測で、終に大きく纏まつた處も無く、それの證據には如何に歌人や宗匠が辯護するともそれだけの效益が學術上にあらはれず、ことには哲學と韻文との關係が日本に限り甚だ輕薄に過ぎて居た、凡そ是等が、從來の實相と吾々は斷じて云ふので畢竟それを招き出したのは、其基づく處全く餘情主義でそれがために或は秀句にかたむき、或は寫實に流れ、或はまた比興纖弱に陷つたのです。はたして吾々以後の世界はその位のかよはい韻文を以て滿足が出來るでしやうか！　人花を取つて銅臭紛々或は兼題の披講に馬鹿禮義の正しい、それら、むしろ俗人の手遊物だけの韻文を以て吾々以後の世はとても滿足しません。ことに他を見れば凜然とする處も有る、吾々が前の第三章に於て韻文と開化との關係を說明したそれだけでも猛省しなければならぬとは吾々が赤心失禮を忘れて實は從來の歌人宗匠共他の方へ願ひたい處なのです。はゞかり無く云ひますが泰西一千年以來の韻文は實に東洋二三千年以來の韻文よりはるかに優つて居たのです。それすら今日の理學に逢つては無殘に敗亡の色を呈したいきほひ、そも〳〵ほん

の地ロぐらゐな從來の日本韻文がまことに人の思想を左右し得るものですか？　あへてこれは公言します。

考へて見れば人情は得て國勢と關係するもの、日本に於て韻文が小規摸の下に安んじた、それもいくらか緣由の有る事でした。第一に、政治、文學その何れに於てしろ絕世の大偉人と言ふものは、吾々の偏見か知りませんが實に日本には有りませんでした。其何の故に無かつたかは歷史家が說明するもの、吾々は解釋を入れる義務も有りませんが、何にしろ、其無かつたといふだけは殘念ながら事實でした。韻文は之と同一の轍を踏みました。韻文が從來日本で學術に大影響を有たなかつたと言ふのが、裏から言つてそこに一人の偉人も無かつたといふ證據、すなはち此證據を破らぬ以上はいかな辨護も無效なものです。それならば日本に於て永劫韻文の後來發育する望は無い？　但しそれは覺悟次第です。從來の韻文が終に、意外の進步を遂げなかつたのは、一方から言ツて一つは他を見なかつた處に基づいたのでも有りました。もしや其以前に外國のものと充分接する便宜が有つたものならば決して鎖港の後世の結果には爲らなかつたに相違は無いこと、是はひとり韻文に限つての事でもありません。覺悟次第で充分吾々の以後幾年かの後に於て成效は必らず有ること、むしろ十九世紀と二十世紀と思想が一大變遷をする今日といふその好時期に吾々は投じ得たものと實は心に信ずるのです。よしや計畫が水泡と爲るにしろ、それだからとて吾々は從來の日本韻文を完全なものとして保存する氣になれません。

以上われ〳〵は前から續いて從來の日本韻文の最も重な欠點を論じました。制語、秘傳、句法其他も頗る在來の韻文に於ての短所でしたが、是は猶言ふ程の事でも無く、その最も言はなければ爲らぬのは全く以て從來の日本韻文は小局部の觀察に止まつて居たと言ふ丈です。と言へば辯駁する人もあります。が、なにさま長歌は和歌に比して長い、長いからとて其思想です、その思想が淺薄皮相であるならば其長い甲斐は其實些しも無いので

す。つまり吾々が前から列ね擧げたところは前後すこぶる錯綜しました。錯綜はしましたが、其意に於ては從來の日本韻文が小局部の觀察であツたといふ段は逃げ隱れもせず公言しました。餘情主義のために大に韻文の發達を妨げたといふ段も公言しました。上乘の韻文の無い證據はその結果が後世の思想を左右しなかつた處ろにあるとも公言しました。そして、それ故に從來の日本韻文は完全なものとする價値が無いと公言しました。更に引きつゞいて附屬の公言をすれば、猶言ふ事は一つ二つ有ります。即ち、日本在來の韻文は概していはゆる厭世主義のものでした。悲しみに陷ツて悲しみに苦しみ、慷慨悲憤、痛傷、罵詈、この世を一種の苦土と考へ、死んで其苦患をわづかに忘れ得るといふ方、元より吾々は此主義を東洋の固有として怪しみもしませんが、歸する處は大抵さうでした。第一に日本韻文の仰ぐに足らぬといふ文はこの點に於ても有る事です。厭世の絆に全く縛られたのは大に思想の害である趣は吾々も前の第三章で說きました。以上かさね〴〵の欠點が即ち歷々として日本韻文に存在するのです。そも〳〵之を放任して置けましやうか？　放任して置けぬ、置けぬ處でいづれに着手していゝかと言ふに、大綱には二つの着手すべき點が有ります、一つは即ち韻文の發育を妨げた處の餘情主義を打ち壞すこと、一つは即ち思想の厭世的、其他極めて纖弱であつたのを改めること、これら二つ。即ち前の目的を達するには是非とも韻文の躰裁を定めなければならず、こゝに於てそれを長篇に形らうとの必要も起ります。後の目的はそれからして引き續いて覺悟次第で出來ること、一言にして言ひ盡くせば唯此五六句の外には出ません。

それならば韻文の形を制定するは比較して第一の必要では無く、其第一の必要はむしろ其思想にあらうと、斯う言ふ人も有る事でしやう。素よりさうです、それには吾々も反對しません。思想の必要は、誠に以て第一の事しかしながらそれに至る迄に扨妨害が有る以上は成功は覺束無いことです。もしも餘情主義の從來の勢力がかよ

わい物ならば猶我慢もします、が、それが弱くない、無いに限らず、和歌といひ、俳諧と云ひ、同じく門閥風の句法を堅く守ッて苟しくも一新の面目を許さぬ、それ故にこそ吾々は迚もこれらがこの後の相談に爲らぬと思ひます。これら門閥を全廢するのは大抵の歌人たちに於て承知も無さうな事、よしや二三の歌人たちの說のとほりそれが廢止になッた處が、もと／＼簡單を主とした地に於て更にそこから雄大の產物を望まうなどゝは其實架空の想像らしく、又一二の歌人が新語を許した例も吾々は見ぬでも無いものゝ、それらは叔一斑の見本らしく、そして見本どほりに行く事は其物の簡單であるだけ大に困難であらうと考へられもする、それよりは極めてそれ程の心配の無い他の一種の新躰を起す必要は即ちこゝにあるのです。唯それのみで有りません、吾々は和歌俳諧が其短句のため自然餘情主義に傾きはじめ終に救へぬ物と爲り果てた、前車の覆轍は見て懲りました。或はもしや同じ運命に陷らないかとの冲々とした掛念を以て居るよりも、むしろ其の掛念の無ささうな方に依頼したいがそもそもの願ひ、新躰の韻文の格式を定めたいとの必要はこゝにあります。思想に至ッても元より言ふ迄も無い事土臺が吾々は和歌俳諧漢詩等の小規模に安んじたのを好まぬため、飜ッて一躰を執らうと言ふのです、いくら格式ばかりが出來たとて思想が完全にならなければ駄目な事です。

　今和歌、俳諧、漢詩、その他琵琶歌、朗詠、催馬樂、謠曲、淨瑠璃、端唄、都々逸其餘の類の一々の細かい比較は却ッて略して言ひません。句法、語法などの各の間に存する相違は必要に從ッて今後の處々に於て取り立てゝ言ふつもり、和歌や俳諧の長短如何のやうな事は全躰の論として事々しく言ふ程の事でも無く、全躰の論としては吾々は、吾々が前に擧げた處を以て其必要は言ッた事と考へます。

　いよ／＼それならば韻文を新に制定するに方ッて其方針はどう向けるか、是が極めて必要な問題です。既に前

にも言ツたとほりの短處が從來の和歌、其他にもあツた、その短處をつぐなふだけの事が出來なければ新躰韻文制定の效果は決して望めぬことです。既にさうとすれば新躰の韻文の方針と一口に言へば言ふものゝ、考へれば誠に重要な事、極言すれば新躰韻文の命脈は全く以てその方針の如何に賴るもので、實に容易ならぬ大題目です。今やゝ重複のやうながら、心を潜めて思ツて見るに和歌其他が凌遲した致命の病根は歷々として數へ上げられもする、そも／＼其病根を、もし出來るなら、避けて他の活潑自在な處におもむくこと、それさへ行はれゝば取りも直さずそこで新體の韻文の出來る初歩は明らかに付いたものです。方針を定めるに當ツての工夫は是より外に無いとした處で、その病根を擧げて見れば其重なものは左の三つです、(一)韻格の簡單、(二)韻句及び韻語の藩閥主義及び(三)押韻。

第一は卽ち世の學者が旣に言ツた通り和歌俳諧が全躰に於て簡單であるといふ事、第二は卽ち和歌といひ、俳諧といひ、天則で無い人則を一種の式のやうに取り用ゐて遂に新思想の妨害を與へた事にして第三は和歌俳諧にあまり關係の無いことですが、其他の日本韻文、たとへば日本俗曲などに韻があるなど言ふ說、それについての問題なのです。ついて是からは右の三箇條を順々に片付けて、委細の處を說くつもり、卽ち第一は韻格とし、第二は韻語及び韻句として、そして第三は同じく押韻として。いよ／＼是からが實地についての管見です。

参考

(一)韻文の二側面　效用の點からして、韻文を觀るとそこに二種の區別が見えます。第一は卽ち文學としての韻文、及び第二は敎育の器械としての韻文、これらです。今吾々は新躰の韻文制定に志を傾ける、ならばそのどちらを吾々は望むのか、其第一か、それとも第二か、この問は敎育社會の人の口から思ふにでる事らしいです。ついて第二と吾々も、差支の無い以上は、答へても宜ろしいです。が、今の場合に當て中々さうは答へられません。

教育社會の人の胸中を察すれば素より吾々とても同感を表します。見過せば、今日の日本の韻文に是れぞと云ふものは一つも無い、ところが韻文が教育に對して尤も深い關係を有する事は疑ひも無い處の事實、さてそれならば焦眉の急。それに應ずる物を望むのは元より至當の人情です。が、今の場合に於て、新に韻文を作るにあたりよくそれら教育家の望みを充たすのを以て韻文家の差し當つての務めと言ふやうな說が、萬一出るやうな事が有るならそれこそ以ての外の事です。教育用としての價値は尊いでしやう。但し文學としての價値はそれより猶です。もしくは教育家の望みに應じてつまりは其欠乏を充たすといふのが覺悟なら。その韻文は疑ひも無くひとり俗曲改良の目的を以て働く物としか言へません。そもそも俗曲改良の說は既に政府に於ても行はれ、われ〳〵の知る在野の學者の中にそれを大事業と見る人も有る、しかし是は吾々に言はせればまだ〳〵狹い考へです。俗曲と言ふものゝ行はれるのはその俗曲を迎へる耳が有ればこそで、成る程ある段までは教育を以てそれが匡正されるか知れませんが、しかし唯盡力がそれだけに止まるならば、ひとり俗曲を押し退けたといふ結果だけは有るにしろ、文學として一生面を充分に開き得たとはまだ中々言へません。はたして、眞正の文學が世を亂すにあるかもしも是が眞理なら望まぬ事、實際に是をば非理と見てさて充分な腕をふるつて、所謂文學としての韻文に盡力を爲し遂げれば、つまり教育に於ての事は造作も無く出來るのです。いやしくも一旦韻文の新天地に足を投げ入れたからには、僅に小局部の教育器械に韻文を働らかせず、迚もの事に大きく働かせ、其大を以て小を兼ねさせる、その方が望ましい事です。

（二）日本韻文の寫實主義　ある點から見れば從來の日本韻文はむしろ寫實主義に傾いた形迹が有ります。却つて理想を主としたのが少なくて、なまじひに眞實を寫したのがよく見受けるやうでした。誠に一種の不思議な現象、もしも此場合ひを以て殆んど獨斷に評を下せば、從

來の日本人の思想にはある僅かの處まで理想が發達して其餘は一切現實的であつた、斯う言つても宜い位です。古今以後の韻書は無論、更に俳諧にいはく之を質しても歸する處は寫實の主、間々、理想的のがあつたにしても其の程度は誠に淺々しい、これが實に從來の日本韻文の一種の特色です。何の故に斯う爲つたのでしたか？ この類の方は專門の哲學者が是非一考を費すべきこと、そも／＼日本の地形、氣象などが與つて大に關係の有つた事でした。土臺が日本に所謂他の大陸に出たやうな大偉人が無つたやうな、ほとんど其事實と此變則の寫眞主義とは律を同じくして論ぜられさうです。雄想天地を呑吐するなどの氣宇は先は日本の古來に徵して少なかつたところ、或は日本韻文に寫實主義が早く催したのも其邊から原づいたのでは無かつたのでしやうか？ 理想的と現實的とは之を單獨に評して、前は大に趨り、後は小に流れたとも言へます。そも／＼一旦甚しい理想の堂にまで登り、更に翻て現實の庭に遊ぶ事ならば、何れにしても一方に偏する變則は無い事なので、處が吾々の見る處では日本の從來に於てこの事實は案外な現象と爲つて現はれました。餘情主義の命も實は幾分か之にも助けられました。吾々は想像の甚だ大なのを日本の韻文に見ず、そして實際を寫したことの頗る巧みなのを多く見た、それからして論を定めて、即ち前のとほりに斷言しました。

（國民之友第百一號二十三年十一月二十三日）

第二編　韻格

第一章　和漢洋韻語の相違（上）

韻語或は韻句（此雜誌第九六號、第二五頁上段參考）が、獨立、或は二以上結合して完全な節奏を成すに至る一定の順序の標準が韻格です。それ故に韻格を成す原子の韻語及び韻句、其性質の研究が題に入る前に當つての必要です。韻語と節奏とはどう關係して居るものか、韻語と散語との區別の標準は何の點にあるか、是等が第一に考へるべき問題です。それで各國散語が韻語に變はる

のも多少の手加減こそは加はれ、さして大した工夫も入らぬなど、其邊の茫漠として居るだけが却つてまた迷ひの種です。今こゝに前人の作例について其韻語及び韻句を考へて見ると、扨第一に胸に浮かぶはそれが甚だ放縱自在の事で、卽ち一音を以ても韻句となれば、二音を以ても韻句となり、果は三音四音に至つて何れも韻句と爲れる、この不羈自由(?)の故は何の點にあつて存するのでしやうか？　も一つ疑ひを挾めば韻句といふものは其實絕對的に存在するものか、それとも相對的で無くては存在せぬものか是も一考の價値は有ります。此點を一々批評するに於て吾々は非常の困みを味ひました。手を着けて說明の源とする第一の物其物が是ぞと差拔けて居ぬ事です。いづれも平等相互に相支へる關係を持つ事です。これからの論も夫故に或は甚しく複綜もしましやうが、是は筆を執るに方つても實は大に愁へました。

さて前人は韻句を以て「三」、「四」、「五」、「六」、「七」、「八」、すべて是等六種類と勘定したやうでした。是は初學への教授には却つて理解の困難を與へぬといふ一德が有りましたが、其を學理上解釋批評するに方つては少からぬ不便を持つ分類でした。

まづ此「三」、「四」其他の意味を解きましやう。「三」とは三音といふ譯で、卽ち人の發音の一聲を以て一音とし、三聲を以て完尾となるのを三音としたのでした。例を擧げれば「アラシ」といふ語、是は三聲ゆゑ「三」です。同じ譯で「ヨモギフ」、是は四聲ゆゑ「四」です。「五」、「六」となつても同じこと、五聲が「五」で、六聲「六」です。併し乍ら此勘定は必らずしも一つの語が三聲であつた所で始めてそれを三聲とするでは無く、二以上の韻語が結び合つても、それが三聲に、纏まつて韻句となれば言ふ迄も無く「三」なので、卽ち「ユキニ」といふのは「雪」といふ二聲の語と「ニ」といふ一聲の語と結び合つて出來たもの、併し之を韻文上取つて「と三」言ひ做します。

と爲つて來ると少からぬ不都合が湧いて來ます、何故

にそれなら前人は「二」と「一」とを同じく以て韻句の仲間と言はなかつたかとの疑ひは是非引きつゞいて起る事です。「一」と「二」との語が無いなら知らず、既に日本には殊更有る、其有るのをかへりみず之を數として見なかつたのは不都合極まる噺しです。が、此點に於てよく考へれば、何故と事々しく正す迄の事は無く、まことに前人は是等の着目を各の人の理解の內に放任して、卽ち其言ふ處は「五」と「七」と實是等に過ぎなかつたのです。たゞし吾々は之には不服です。「五」と「七」とが實際に單立な語でのみあるものならば如何にも前人の說もいゝです、必らずしもそれらは單立の語と限らず、二以上四五ぐらゐまでの音の集合して成るのも有るとすれば、只ひとり韻格の基礎を以て「五」と「七」との二點に置いた前人の說は實に漠然とした事なのです。「五」が一變すれば「六」、「六」が倍して「十二」、「七」が一變すれば「八」、「八」が倍して「十六」、それで前人は「五」の一變、また「七」の一變を直に以て字あまりと見做しました。しかし、よく思つても見るがよし、「七」必らず「七」で無く、或は「三ト四」かも知れず、また或は「四ト三」とかも知れず、また或は「二ト五」、「五ト二」かも知れず、そしてまた其「二ト五」も「二ト二ト三」か「二ト三ト二」かも知れず、それを、一概に七と概言する思へば恐ろしい杜撰でした。唯々こゝに不思議な事は日本固有の節奏は「五」と「七」とにむしろ多く適したこと、それが實に僥倖で、そのためにこれら不充分の前人の解釋でさしたる大害も出ませんでしたが、もしもある部分の韻文卽ち大津繪のやうに「六」と「八」とに富んだものが大勢力を得るに至つた事がもし有つたものならば果して今日に至る迄にどのやうな結果が出來たものでしやうか？

吾々は、それ故に、分類を些しく前人のと違へ、稍手數ながら其本からして說くが順と思ひます。人が生まれて始めて聲が有る、其聲は實に唯一つ、其一音が卽ち各種の聲の源で、韻句と爲る元子の第一は卽ち是です。更

に「一」と「一」と結合して「二」と爲るのも有り、それから又單獨に「二」を作すのも有ます。卽ち一音を以てある意味を完くする語、それが二つ合したのと、また一音では意味を成さず、やうやく二音でそれを完くする語と此二つは是非有つて、例すれば前の場合ひに「ニモ」などの語、後のに「ヨリ」などの語を引いても宜しいです。「ニモ」の「ニ」は後置詞で獨立しても一つの意味をば充分に持つて居て、そして「モ」も亦同じ性質、卽ち「一」と「一」と結合して更に「二」を來したので、そして此點から見て明らかにそれと「ヨリ」とは違ひます。それ故に均しく「二」と言つても結合の「二」と單獨の「二」との二種類は是非あつて而も「二」ならば其何れにしろ、種類は此の如く少いものゝ、「三」、「四」と數を加へるに從つて其複雜はいよ〳〵益甚しく爲るものです。甚しく爲つて「七」、「八」などゝなれば一朝に言ひ盡くせぬ計りの凄まじい數にも成り行きますが、こゝに極めて解釋の便利を與へる事と言ふのは日本語の一種の性質として、それを韻語や韻句とするに方つて、其組み立ての形の影響がさして他の單獨獨立のものと大きな相違を持たぬ事です。たとへば「ウキ世ニ」といふ一句は完全な「四」の形を成した韻句です。たゞし前段「二」を說いた理から言へば「四」は「一ト三」、「三ト一」、「二ト二」、「一ト一ト一ト一」、「一ト一ト二」、「一ト二ト一」、「二ト一ト一」、凡そ是等の何れでも形ることが出來るのです。假りに語を欲めて造ツて見れば、

「コ＝ガラシ」…………卽ち「一ト三」
「カタナ＝ニ」…………〃「三ト一」
「ヨヒ＝ヤミ」…………〃「二ト二」
「手＝ニ＝手＝ニ」………〃「一ト一ト一ト一」
「手＝ニ＝弓」…………〃「一ト一ト二」
「勿＝ユキ＝ソ」…………〃「一ト二ト一」
「ハナ＝ニ＝モ」…………〃「二ト一ト一」

以上いづれも組み立ては互に違ツて居ながらも、さて不思議は、夫に似氣なく、その違ふといふ丈の結果がそ

れの節奏の上に於て甚しく無く、前後の句が如何やうであッたにしろ大抵は「一ト三」の代りに「三ト一」を用ゐ、又其代りに「一ト一ト二」を用ゐても大した差し支へは無い事、是が最も便利なことです。何故に日本語が斯うであるか、そもそも外國語はどうあるかは此際研究の價値の有る物です。

今直ちに支那の詩について之を見るに、所謂「格」として平仄の配合を一定の形につくッて前人も既に示しました。之によッて日本人は平仄を配合し、どうにか一首を煉り上げた處で、苟しくも前人の教へた形に因ッて其範圍外に出ないならば、無論その詩が完全の音調を成して居る譯でしやう。が、不思議はさうで無い事です。同じ格に因ッた作にも日本人のには全く以て支那から考へて其音調に甚しい不快の調子を含むのも有る、そして支那人の作ッた物に於ては大抵其掛念が殆んど無い、是が怪しむべき限りです。ならば五言又は七言の格として支那人が與へた格は杜撰極まる物でしたらうか？　必らずさうでありません。それで彼と我との間に此相違が有る、言ふ迄も無く、其ところに原因が有るに極ッた事です。そして其因を何かと言へば、外でも無い、支那人には同じ仄字の中に於ても上、去、入三種の聲の識別が自然にあることで、此點に於て日本人はとても支那人に及びません。均しく仄字と言ッたからとて中には三種類さへ有る、土臺が「上」と「上」と重ねる時と「上」と「去」と重なる場合ひとは其音調上どうしても違ふ點が無い譯は決して〳〵無いことです。即ち支那人に於ては此識別が充分に有るために「上」と「去」と重ねてゐるい處は決していくら仄字を要するとて重ねず、そして之に反して日本人は無茶苦茶にする、つまりは彼と是と一首完成の上に於て氷炭の懸隔を爲したのも此故です。それ故に又日本人が作ッた漢詩はつまり通讀して意味を知るだけの物、即ち形こそ支那ので有ッても其實は日本のです。勿論日本の詞伯の中にも一切四聲の區別を支那音の儘に心得て、天晴支那人でつくるとほりの思想を以て、又識別

を以て詩を作る人も有りましやう。が、それは少數です、晨の星と云ふ斗り、つまりは一部分としか見られません。畢竟支那の前人が單に平仄とのみ說明して深く內部の四聲の配合に立ち入ツて詩格を說明しなかつたのは、其煩を避けた故も一つでしやうが、自ら支那人の理解の程度から考へて、深くそれを言ふ程の必要も有るまいと速信した故でも有りましたらう。但し、それ故にこそ外國の日本人は迷ひました。これからしてつく〴〵思へば、誠に以て、支那の詩もそれを平仄と一口に言ひ做すものゝ實以て緊急な箇條、強ひて言へばそれらの四聲の配合は同じく漢詩に取つての命根でした。平起仄起と種類を定めて而も時に蹈みおとしまで許した、それらは實に自然に背かぬ事、吾々が後から見ても常に其格の巧妙よく中庸を得たには敬服もする、それと同時に吾々をしてつくづくと思ひ沈ませる事は支那にも四聲といふ音調上、また樂調上の大關鍵があるといふ一點で、そして支那の韻文は常に此支配の下に立ち、其儘今日に至つたので、從つて唐韻が今日の韻とまで變化し來つた處に於て膠柱の古代の詩格を墨守のみして居れば自然支那それ自身すら通讀するだけの詩と、唱和する事の出來る詩を終に持つにも至つた事です、日本語と比較して難易は實に一等の比でありません。思へば其實日本の言語は韻文に持つて來いといふ物です。

　更に移つて泰西の韻文世界について見れば、同じく支那の詩に見受けるやうな自然の規律が定まつて居ます。此事は森鷗外氏が曾て一寸讀賣新聞の上でも言はれました。美辭學、又は韻文學を修めた人は既に知つて居るとほり、其重な物は四つ、卽ちアィアムバス、ツロキー(又はコーリー)、アナペスト、及びダクチル、そして此外に猶詩人が使用する小さな物に至つては、或はスポンディ或はパーリツク、或はモーロス、或は、トライブラック或はアムフヒブラツク、或はアムフヒマツク(又はアムフヒメーサ、又クリーチツク)、或はバクチー、或はアンチバクチー(又はハイポバクチー)、これら八種もよく見

受ける物で、猶此上に數へたら二三の別のものも有りましやうか、そして何のために右のやうに分類を付けるといふに、誠に自然の音調に迫られての必要に出たもので之を日本語に比しても、西洋語は特に音調の高低の强い處、之に一調和を得させて一つの韻文に組むに於ては勢ひ支那の平仄と同じく、其形を定めて晦澁を避けるべきが至當の事で、右のアイアムバスといひ、ツロキーと云ふも其配合に外ならず、只々支那に比して配合が精密であるといふだけです。多少後の參考にも爲る故に、こゝで右のアイアムバス其他二三の性質を概言して、之に日本語を嵌めて見れば、

アイアムバス――これは一つの短い綴りの次に一つの長い綴りが續いたので、卽ち日本語ならば「ユメ」といふ語、是などはアイアムバスの韻語として直さま差し支へ無く用ゐられる、其子細は「ユメ」の散文上の音調は高音が「メ」にあつて低音は「ユ」にあり、卽ち前が短くて後が長いもの、形に示せば「ユメ」つまり完全のアイアムバスです。かうしてアイアムバスで一聯の韻句を作つて見れば不充分ながら左のとほりです。

ユメ|ユメ|キミハ……‖タマ|クラ|ニ……

之を唐韻に直して見れば、

一○二●|三○四◐|五○六●|七○八◐‖イ○ロ●|ハ○ニ◐|ホ○ヘ◐

卽ちこれが一變すれば七言仄起の句と、五言仄起の句とが一つ宛出ます。

ツロキー――これはアイアムバスと反對で、一つの長い綴りの次に一つの短い綴りが續いたので、日本語ならば「ツマ」などがそれで、「ツマ」は高音が「ツ」にあります。之で韻句を作れば、卽ち

ツマ|コノ|ナサケ|ニ‖

ユク|ミノ|ツレ|ナサ‖

アナペスト――これは短い綴り二つの次に長いのが一つ續いたので、例すれば「ヤナギ」などがそれです。「ヤナギ」に於ては高音が「ギ」にあり、そして「ヤ」と「ナ」は同調です。之で韻句を作れば、卽ち

ヤナギ｜ニネム｜レルトホ｜ケフリ‖

ダクチル――これは前と反對で、長い綴り一つの次に短いのが二つ續くので、例すれば、

カリハ｜ナミダニ｜ノベハ｜クサ……

以上重つた四種の例は一々に擧げましたが、煩を恐れて其他をば只性質だけにして置きます。今右の四種の外の八種一切引きくるめて之を表に作つて見れば、卽ち左の通りの相違が有ります。

(イ)アイアムバス…………短……長(○●)
(ロ)トロキイ………………長……短(●○)
(ハ)アナペスト……………短……短……長(○○●)
(ニ)ダクチル………………長……短……短(●○○)
(ホ)パーリツク……………短……短(○○)
(ヘ)モーロス………………長……長……長(●●●)
(ト)トライブラツク………短……短……短(○○○)
(チ)アムフヒブラツク……短……長……短(○●○)
(リ)アムフヒマツク………長……短……長(●○●)
(ヌ)バクチィ………………短……長……長(○●●)
(ル)アンチバクチィ………長……長……短(●●○)

卽ち(イ)は(ロ)の反、(ハ)は(ル)の、(ニ)は(ヌ)の、(へ)は(ト)の、(チ)は(リ)の、何れも反對で、そして日本語の適用するに右の內どれが便利かと言ふに何れも優劣はないものです。

卽ち泰西も亦支那の通り、韻句を組上げるに於て右の通りの定めがあり、そして(イ)なら(イ)、(ヘ)なら(ヘ)と定めて一首を作る時には押韻の外、猶組み合はせに少からぬ困難が有るのです。多少中には支那で言ふ蹈みおとしのやうに例外を交へ用ゐて過ぐすのも有りますが、大概は何れも皆此格を遵奉して成るべく格から隔らず、而も語によつては(イ)の韻文に用ゐるに拘らず是非他の躰を傷したなども有つてそれを避けたり又代用語を見出だしたりする其經營は中々の物夫も何も節奏一つに苦心する故とは言ふものゝ、さてさう苦心しなければならぬ自然の其國の語勢故どうしても仕方は有りません。

以上支那泰西兩つながら通じて觀た上に於てさて日本はどうあるか、そも／＼前人は此邊に何の注意も置かずに居たかとつら／＼考へるに、そこです、實以て吾々日本人は殆んど驚喜雀躍してもいゝ程の大きな便利が日本語には有る事です。

國民之友第百二號二十三年十二月三日

第二編　韻　格

第一章　和漢洋韻語の相違（下）

其便利は何かと云へば日本語が音調の束縛を極めて深く受けぬ事、即ち是で他の西洋語や支那語のやうに甚しく音調に拘泥する所の無い事です。今全く韻文學から離れ、言語學の上からして考へれば例として示せる物は容易に探り出されます。人の知る通り支那には平上去及び入の四聲が有る所で去聲が上聲に變る時は其音調の相違と共に意味も亦變るのです。上聲が平聲になり、入聲が上聲に爲る時でもいつも理は同じ物、即ち支那に於てはよしやどんな節奏に迫られたるにもしろ、あらかじめ其意味の變化を覺悟した上で無ければ音調の變化は許せぬ事、まことに思へば不便の至りです。不便では有るものゝ國語の固有ゆゑ仕方は無い、それと同じなのは西洋です。西洋には四聲の稱呼は無い、それながらアクセント（音節）といふ語は既に言語學の中にもあります。二綴り以上の語になれば西洋では必らず其一方が高音で其一方が低音です。公然と字引に載て居るのは其最も普通のアクセント併しながら其アクセントの前の方にあるのを直に移して後の方にやる事は出來ぬのです。バットルは戰ひといふ英語、其高音は「バッ」にあります。が、之を便宜上定めて高音を「トル」につけるなどとは夢にも出來ぬ事なのです。同じ例は至る所にある、ところで詩人は之を用ゐるに方り土臺の思想を述べる外に少からぬ困難に出遇ふ事、實は他から見て氣の毒な程ではあるものゝ同じく是とて其國語の自然と言へば人工で仕方の有る事でも無い、それに日本語は全く反對です。日本語はい

かなる運か是程の困難が實際無く、よしや間々有つても極めて少ないのです。こゝに「やなぎ」といふ言葉、もしも吾々が之に普通の音調を示すものならば吾々は猶豫せず其高音を「ギ」に付けます。「ヤ」と「ナ」とは互に同じ平聲共「ギ」だけは上聲です。もしも此場合が支那西洋のやうであるものなら吾々は何しても高音を自然のまゝの「ギ」に付けるより外にまた之を言ひ現す手段をば持たぬ譯です。が、さうでありません。よしやどのやうな韻格に因つて何をこしらへ出しても之を用ゐる際に於て其音調を勝手に換へて大抵は差支ありません、「ギ」にある高音を取つて「ヤ」に與へても同じく音樂に配した所で充分に配せるのです。此日本語の一種の奇相これは日本言語學を調べる時に於て最も考へを費すべき物で吾々は韻文を主として說く、こゝに於て言語學の本領まで立ち入る餘白を持たぬ事ゆゑ其原因は言ひません。が何しろ前言つた事は事實です。したがつて日本語は之をアイアムバスとして使はうがトロキィとして用ゐやうが運轉の上に於て縱横な役に立つもの、中々漢洋の語の及ぶ所で無く、極言すれば韻文のために生まれたと言つても宜い程の語です。ならば例外は一つも無いかと言ふに只一つだけは有ります。音調に因つて意味の變化する場合ひその時だけ大に注意を要すべき事なのです。

たとへば「ユメ」といふ語、其本來の性質は高音が「メ」にあるので、さて前に言つた日本語の特質にあり「メ」に高音が有るに拘はらず同じくそれを「ユ」に移して用ゐても更にさしつかへ無い、と言ふ譯はさうした所で意味が迷つて來ぬ故です。もしも音調を變へただけで甚しく意味の迷ひを爲すものなら其時は音調は變はられぬのです。卽ち「コレラ」といふ語のやうです、「此」の複數が「コレラ」その高音は「ラ」にあります。所で便宜上と言ふ所から、それを變じて高音を「コ」につけるさうすれば凄まじく意味は變じて仕舞ひます、さう爲つた曉には病氣の虎列刺の義になります。それ故に作者は心注がず用ゐても實際それを音樂に當て欲める場合ひと

なれば思はぬ處に妨げが起て來る、それが比較して支那西洋に多いので、こゝに於て料らず此の事が分かりました、日本語は他の外國語に比し音調によつて意味の變ずる事が少いと。其の韻文に取つて便利と言ふのは手も無く日本語が音調の束縛を受けぬ事です。以上は韻文を說くに方つて韻格を充分に言ふ前、あらかじめ與へた三國の言語の相違する注意なのです。さて是からは吾々の言ふ韻文その方の形の論、それ故に論說の躰も稍是までとは變はります。

第二章　韻　律（甲）

（第一項）　韻語或は韻句が完全は節奏を成すに至る一定の順序の標準が韻律です。

（第二項）　韻律には（一）短長、（二）長短、（三）短短長（四）長短短、（五）長長、（六）短短、（七）長長長、（八）短短短、（九）短長短、（十）長短長、（十一）短長長、（十二）長長短の十二類が有ります。

日本韻文を是から新たに建てるに於て吾々は西洋のアイアムバス、トロキイなどの分類を其儘用ゐて日本語も之により韻文に用ゐる所存です。この分類は西洋で作つたにも拘はらず其基礎とする處は自然の聲にあつて一國の聲無く卽ち之を日本に適用するに至つてもさらさら不道理を見出せません。不道理が無いのみで無く之に因つて韻文を作る段に於ては頗る利益があります。

從來の日本の韻文卽ち和歌にしろ俳諧にしろ音樂の思想を以て作つた例はありませんでした。和歌など其むかしこそ之を口に謠ひましたが後世に至つては一つの摸型と爲つて唱讀の用にしか立ちません。俳諧などは猶更です。漢詩などは一層です。これが不都合で無いでしやうか、素より吾々とてソングとポエトリーとの區別は知る韻文は必ず謠へなければならぬ、音樂にあてはまらなければ爲らぬとは斷言もしません。斷言はせぬものゝもともと韻文といふものが出來たいはれそれを考へ合せた處で音樂に適するものとまたやゝ適せぬものと共何れがま

さるかと言ふ事、さうなれば吾々とて少くも音樂に適する物が優ると斷言します。なる程句法の工合どうしても音樂に當て箝まらぬのも有ります。が、當て箝まらぬと知つてさて代用の無いために止むを得ず其儘さしおくそれならいゝです。もしも一つの破壞家が有つて其當て箝まるかどうかは無茶苦茶で、それで自分の不識を掩ふため韻文は必らずしも音樂の下に束縛されぬと公言するに至つては吾々はさて抵抗します。少くも韻文を作るには韻文に要する智識、即ち音律の一般、それ心得るが務です。なる程それ知らなくても韻文は出來ませう。が、それは韻文を謠ひ出したのではありません、韻文を固め付けたのです。或は從來の學說による文學者は明らかに人の思想に文思と詩思との二つが有ると認め、其詩思さへ述べたものならば韻文であると斷言する此說に吾々は反對する由は前に吾々も述べました（此雜誌第九六號第二三頁參照）。つまりは是等の人から言はせれば韻文家に音律の思想を要するといふのも全く非理としかなりますまい。が、吾々は吾々の定義節奏に據る物を韻文といふ事を猶信する點からばかり言つても音調を蔑視する事を許しては置けません。だんてと言ひみるとんと言ひ其作つたのは何れも〳〵音律の思想を以ての上でした。そもそも今日の學者間、この類の思想の有るのは少ない、それが思ふに音調排斥の原では有りませんか知らん。素より士君子が音律に亙るのをいやしめた幕府以來の風習それが跡を引くものとすれば差して言ふ事は無いやうな物の、つまりは和歌俳諧それらにさへ音律の思想は從來皆無であつた事、思へば恥べき事でした。ひとり此中に於て萬綠叢中に紅を點じたのは端唄、大津繪、長唄、淨るり、其遠い處で謠曲の類で、これらがいくらか音律の思想を持つて取り扱はれたものゝそれとてもさしたる發達は至れませんでした。淨るり、端唄の類は中々の點まで至りました、至つた物のまた一方の思想に於て缺けました。之を下等の思想を言ふくらゐの處に概して止めて其他には手も出さなかつた、即ち是等が從來の姿でした。

極めて尊い觀念を言ひ現はす事、それは素より韻文の能です。但しそれだからとて韻文と音律との關係を絕つて構はぬいはれは塵ほども無いでしやう。それに又韻律と言ふ物が勝手次第たゞ一局部の人民の好尙に因つて製された物ならば誠に益も無い邪魔物です。が、さうでありません。人工を出て製された物にしろ其基づく處は自然でした、微塵一點も自然に背いては居ません。之を用ゐるに當つて之が益を爲すとはそれ故に言へます。害を爲すとは言へません。

思想の調和は言語の調和と一致します。まくすみゆらるの說はさて措くとしたにしろ思想と言語との間に極めて密な關係の有る事は誰とても認めるでしやう。極言すれば思想は言語と異物同躰、言語が受ける處の激動は直ちに說く思想も受ける物で卽ち言語の不調和は思想の調和を害します。古來の名篇大作にさへ此點に背いた處は殆んど無い。多少の不完全が其中に有るにしろ、其理は卽ち是なのです。もしも思想の調和が言語の調和と伴ふ事この理が全く空想であるなら知らず、で無いならば只此一點これだけを見た上でも韻律を拒んで蔑視する口實はありますまい。何故と言ふに韻律は卽ち言語の調和を得させるそのための標準です。吾々はそれ故に今後の韻文に之を用ゐる事を望むのです。

（第三項）　韻律にいふ「短」とは低調で「長」とは高調です。低調とは發音を低くする方、高調とは高くする方です。今「ヤマ」と言ふ言葉を例に取て見れば其高調は「ヤ」にあつて之を羅馬字で示せばYa-màです。物を縫ふ道具の「ハリ」は高調が「ハ」に在て屋根を支へる橫木の「ハリ」は高調が「リ」に在るのです。低調といひ高調と云ひ其區別は右のとほり、其性質があらまし斯う分かつた處で前の第二項に揭げた十二類の物の例を示せば左のとほりです。

（一）短長　聞く（キク）山（ヤマ）の類。

（二）長短　見る（ミル）鎌（カマ）の類。

（三）短短長　柳（ヤナギ）眠る（ネムル）の類。

（四）長短短　嵐（アラシ）わづか（ワヅカ）の類。
（五）長長　左樣（サウ）の類。
（六）短短　筒（ツヽ）の類。

以上六種が普通な方、以下の六種類は日本語にも是非極めて罕であるべき韻律で強ひて言へば其大抵は一言葉で充分には爲らぬ程それ故あへて事々しく之がために例をば引きません。

（第四項）　日本語で高低の調子を便宜變換して意味の變化を來たす物を除く外は場合ひ次第調子を變へても宜いですが濫用は最も忌むべき事です。是は前の章に於て略ぼ言ひました。卽ち針（ハリ）と梁（ハリ）、鎌（カマ）と釜（カマ）、雨（アメ）と飴（アメ）、是等（コレラ）と虎列剌（コレラ）、日（ヒ）と火（ヒ）、木（キ）と氣（キ）、此類の語は日本に頗る有る。これらは何れも調子ばかりで其意味が通ずるのでもしも一旦調子が變はるに於ては全く意味は變はつて仕舞ふ、凡そ是等の類に限り韻律がどうあらうとも語調を變へてはならぬのです。如何さま前人の作の中には時に餘義無さの極卽ち漢詩に孤平を用ゐるのと同じ格で此法則を破つたのも有りました。が、素よりそれは一有つて二無いが望ましい事、韻律の大切を思ふに於ては少くもこゝには充分の注意をしなければなりません。

（第五項）　ある韻律で起した一つの完全な韻格の中に成るべく他の韻律を交へてはいけません。此一事は安からぬ問題で、從來の日本韻文家の中こゝに氣を注いた人は一人もありませんでした。端唄に「春雨」といふのが有ります、其初句は卽ち、

「はるさめに　しつぽり濡るゝうぐひす」

の今右の句に替へ唄の句を作つて箝め當てる際に於ては勢ひ同じ韻律で無くては迚も當らぬのです。「はるさめに」の代りとして試みに「淀の水」と入れて見る、其字數も互に同じ五字であつてそれで實際當て箝まりません。何の故かと言ふに「はるさめに」と「淀の水」と韻律が違ふからです。「はるさめ」の「はる」は成る程一寸

見た處「淀」(ヨド)と同じ調の「ハル」です「ハル」では決して無い、それながら「ハルサメ」と爲つた上は充分調子は變化する、そこを思はなければ爲らぬ事です。即ち「ハルサメ」とあれば其中で高調は「メ」にあります。二つならべて例を作れば正に左の通りです。

「ハルサメニ」　「ヨドノミヅ」

二つの間に調子の相違は即ち正に右のとほり相諧和せぬのも至當な事です。ならばどのやうな語を入れたら代用がよく付くか、それは外でも無く同じ韻律なら直にいゝのです。「ウキヨニハ」など即ち是れ、「サミダレニ」など同じくそれ理は即ち是だけです。

それ故に一つの韻格ある韻律で起したからには勉めて後から共韻律と衝突するやうな物を避ける工夫をするのが法です。それ故に又韻格を爲す韻律は勉めて悉く同じ種類の物を以てし、短長なら短長、長短々なら長短々と常に一定して亂さずに組むに越した事は有りません。從來の日本韻文中和歌や俳諧が音樂と伴へぬやうになつたのは、吾々の見る處で、其原因は全くこゝにあります。「君が代は千代に八千代にさゞれいしの……」、この歌は僥倖にも樂に適用が出來たにしろ、それと同じ字數の他のものが同じく適するとは云へません。發句なども亦さうです。是等の韻文は只ある一定の宗教と音數（音調と言はず）とを以て一つの意味を述べたもの。充分の韻文とは決して言へず、極言すれば散文的韻文です。

（第六項）　韻文を作る人はあらかじめ言語の音調をよく心得なければ爲りません。

既に前の項を以て韻文と韻語との間に音調といふ一大事が横はる事は明らかに爲りました。ひとり字數を以てしては決して充分な事は出來ぬとした處で、さて韻文に當る人は是非とも言語各々其音調を熟知しなけれ爲らぬのです。それも今日、完全な日本語典が有つて、それに一々音調が西洋のやうに記してあるならまだいゝですが今はそれも無い處ことには地方語と普通語との間に中々音調の相違の有る今日、つまりは此習練が六かしいです。

つらく／＼パラダイス、ロストを見ても散解します。其理想は撊いて言はぬとした處で、當時英國に然るべき語典も無つた處、夫にも拘らず共音律の調和に於て凄じく整頓して而も許多の綴りの語を自由につかひこなした事、思へば夫もパラダイス、ロストの又一つの長處でした。

（第七項）第一類の韻律即短長の種類は八脚の物です。

第一類の韻律を以て種々の種類が出來る、その中で八脚の物も一部分です。八脚とは八種の短長律が列なつて一つの韻律を成したもの、即ち例は左のとほり。

カキ|ネニ|サク|ハナ|アス|マタ|キテ|ミン、
コヒ|シキ|ヲト|メノ|ヤド|トシ|オモ|ヘバ」

（國民之友第百四號二十三年十二月二十三日）

第二編　韻　格

第二章　韻　律（乙）

（第七項）　第一類の韻律即ち短長の種類。

（一）八脚　即ち圖にして、○●|◡●|●|◡●|○●|◡●|○●|◡●|

例すれば「カキ|ネニ|サク|ハナ|アス|マタ|キテ|ミン、
コヒ|シキ|ヲト|メノ|ヤド|トシ|オモ|ヘバ」。

（二）七脚　即ち圖にして、◡●|◡●|◡●|◡●|●|◡●|◡●|

例すれば「カキ|ネニ|サク|ハナ|アス|マタ|キテ|
ヒト|エダ|タヲ|ラン|イヘ|ヅト|ニ」

（三）六脚　即ち圖にして、○●|○●|●|◡●|○●|◡●|

例すれば「カキ|ネノ|ウメ|ガカ|カヲル|ナリ|
ユキ|ニモ|マヨ|ハヌ|シル|ベカナ|」

（四）五脚　即ち圖にして、○●|◡●|◡●|◡●|◡●|

例すれば「ユメ|ノヨ|ニワ|レモ|ユメム、
カリ|ノヨ|ノワ|ビズ|マヒ」

英國でいふヒーロイツク、ポエム（戰詩）の正律は此五脚のもので而も此律は無韻にも大に適するといふ處から大篇の韻文は多く皆之を用ゐました。別にエレジーといふ韻文の一體是も此律です。が、ヒーロイツクと相違する處はエレジーは隔脚に韻を用ゐることです。日本に取つて見れば此律もさほど目に立ちません、韻でも履むなら

格別。

(五)四脚　即ち圖にして、○●|○●|○●|○●|

例すれば「バウ|サン|カン|ザシ|
アムマ|サンニ|オメ|ガネ、
ネ(エ)|コニ|ネン|ブツ、
ムマノ|ミミ|ニコ|バン」

(六)三脚　即ち圖にして、○●|○●|○●|

例すれば「イヤ|カ、オ|ウカ
ヘン|ジド|ウヂヤ」

(七)二脚　即ち圖にして、○●|○●|

例すれば「ヤマ|カゼ|
アレ|アレ|.
フモ|トモ|
カン|ヌリ」

(八)一脚　即ち圖すれば、○●

「カゼ
フク
ヘウ
ヘウ
タイコ
タイコ
ドン
ドン」

（第八項）　第二類の韻律即ち長短の稱類。

(一)八脚　即ち ●○|●○|●○|●○|●○|●○|●○|●○|

例すれば

「ネン|ガト|ヾイ|テカ|ウナ|ルカ|ラハ|チヨイト」。

又は

「ツナ|ハジヤ|ウイ|ヲカ|ウフ|リテ、|コリヤ|コリヤ」

(二)七脚　即ち ●○|●○|●○|●○|●○|●○|●○|

例すれば「オキ|ノカ|モメ|ニコ|トヅ|テタ|ノム、
カタ|ワレ|ブネ|トミ|ヲナ|シハ|テヽ」。

(三)六脚　即ち ●○|●○|●○|●○|●○|●○|

例すれば「ウス|ハナ|サク|ラス|レソ|メテ

ハグ|ノイ|ロコ|ソニ|ホフ|ナレ」

又は　「ソラ|クロク、ヤイ|バ|血ヲ|吹ク|
ナダ|アレテ、ナ|ミニ|カミ|ナル」。

(四)五脚　即ち　●○|●○|●○|●○|●○|

「サヨ|スギ|テ、シカ|ノコ|エ、
オキ|カヘ|リ、キヤ|ラヲ|タク」。

(五)四脚　即ち　●○|●○|●○|●○|

ヒヅ|ヌハ|カラ|カラ|
ケフ|リハ|タナ|ビク|。

(六)三脚　即ち　●○|●○|●○|

「チヨ|イト|ゴサ|レ、
マン|マタ|ベヨ|ー」

(七)二脚　即ち　●○●○|

「クモ|ニハ
アメ|アリ
ダヤ|チヤー
スゴ|ロク、
フリ|ダス
マモ|ナク
ユフ|ヒガ
キラ|キラ」

(八)一脚　即ち　●○

「イザ
イザ
コゲー
フネー
カヂ
トレー
カヂ
トレー」

(第九項)　第三類の韻律即ち短短長の種類。

(一)八脚　即ち　○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|

ヒサシ|クナリ|ヌ、スミ|ヨシノ|マツノ|フタモ|トシゲ|リアヒ、
レンリ|ノエダ|ヲウケ|カハシ、|イモセ|ノミチ|ハイツ|マデモ|

スヱツ|ムハナ|ノコウ|バイト|

(二)七脚　即ち ○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|

サガノ|イホリ|ニウキ|ヨヲシ|バシシ|ノブソ|レガシ

カゼニ|チリユ|クハナ|ヲミル|ヨヨヨ|ソゴヾ|ロナシ|

(三)六脚　即ち ○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|

ナニハ|ヅヤタ|ニシノ|フタモ|フユゴ|モリ○」。

(四)五脚　即ち ○○●|○○●|○○●|○○●|○○●|

ヤナギ|ノヒト|カゼト|ホヤマ|ウゴク、

カスミ|ノマン|マクヌ|ヒユク|ツバメ」。

(五)四脚　即ち ○○●|○○●|○○●|○○●|

「…(二脚略)… キミス|メバ|

コレモ|クモヰ|ノツキ|ナレド|」

またソノア|カツキ|ノヒト|コヱハ|

ハナカ|ハドヨ|リナキ|ソメテ」。

(六)三脚　即ち ○○●|○○●|○○●|

「ユフツ|キハコ|マツニ|

カクサ|レテ、キ|エギエ」

(七)二脚　即ち ○○●|○○●|

ヤマニ|センネン

ヲカニ|センネン

ニセン|ネンノ

フルツ|ハモノ

(八)一脚　即ち ○○●

「サクラ

サイタ」。

(第十項)　第四類の韻律即ち長短々の種類。

(一)八脚　即ち ●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|

「ツユノ|ヒヌマ|ノアサ|ガホヲ|テラス|ヒカゲ|ノツレ|ナキニ」

また「…………………ミヤ|シヤンセ、

ツユヲ|シタフ|テマツ|ムシノ|チグサ|ニアソ|ブシホ|ラシヤ、

スヽキ|ヲバナ|ハモノ|オモヒ|ウツム|クカホ|ニソヽ|ゲガミ|

(二)七脚　即ち ●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|

「アメハ|フリダ|スヤネノハ|マキャヌ|レル、セ|ナノガ|キャナク」。

(三)六脚　即ち ●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|

「チンバ|ヒクカ|ハヅニ|ソフル|ナミダ|カナ〇」。

(四)五脚　即ち ●○○|●○○|●○○|●○○|●○○|

「ツユノ|カゴト|ノソノ|ソノキ|ノフヲ|

　ワスレ|ガタナ|ノハヲ|ダニフ|ミミン」。

(五)四脚　即ち ●○○|●○○|●○○|●○○|

「ツユハ|ヲバナ|トネタ|トイフ|、

　ヲバナ|ハツユ|トネス|トイフ」

(六)三脚　即ち ●○○|●○○|●○○|

「トホザ|トカハ|ヒトヘ、

　アラシ|ニカス|ミユク」。

(七)二脚　即ち ●○○|●○○|

ナダメ|ラレテ

　ナホモ|マヨフ、

イキテ|ヨキカ、

　シニテ|ヨキカ」。

(八)一脚　即ち ●○○

「クモル|ソラニ

　クモル|マナコ」。

一斑を擧げれば更に角右の通り其他も亦同じ理で推せます。そこで各の韻律が悉く八種類を各々有つとした處で十二類の上で其全額は七十六種。それからして新に又別に着目する處も有ります。

第一及び第二種類の韻律は二音それゆゑに其

(イ)八脚は…………十六音

(ロ)七脚は…………十四音

(ハ)六脚は…………十二音

(ニ)五脚は…………十音

(ホ)四脚は…………八音

(ヘ)三脚は…………六音

(ト)二脚は…………四音

(チ)一脚は…………二音

第三及び第四種類の韻律は三音それ故に其

(い)八脚は…………二十四音

(ろ)七脚は…………二十一音

(は)六脚は…………十八音
(に)五脚は…………十五音
(ほ)四脚は…………十二音
(へ)三脚は…………九音
(と)二脚は…………六音
(ち)一脚は…………三音

それ故に凡そ以上の韻律により出來る音の數は前二種合併したもの即ち、二十四、二十一、十八、十六、十五、十四、十二、十、九、八。六、四、三、二の十四種類です。此律の何れを用ゐて韻文を作るのも素より人の自由です。今右の各種類を明かに解剖して見ましやう。

第二編　韻　格

第三章　十四韻律の各性質

(第十一項)　韻語或は韻句が獨立或は二以上結合して完全なる節奏を成すに至る一定の順序の標準が韻格です。

此定義は前既に與へましたが、更に必要に因つて再びこゝに出しました。前回述べ定めた、二十四、二十一、十八、十六、十五、十四、十二、十、九、八、六、四、三及び二、以上十四種類の韻律は吾々が日本韻文に所有する、そして其各の性質が充分分明に爲ると云ふのがつまり日本韻文の韻格の定まる事なのです。前回に與へたのは各其一例で、均しく「二十四」とても「十二」の二つ合したのも有り、「八」の三つ合したのも有る、それを銘々に就き精密に調べ定めなければ何を以て韻格を定めていゝか、よしや原子の韻律までは分かつた所がそれだけで止まるのは九仞の功を一簣に缺く事です。但し各韻律の性質を解剖するに方り是非持たなくてならぬのは其種類(短長とか短々長とかの人)を豫じめ心に銘して置き、それから手を下すと云ふ注意なので從つて吾々は順序の稍混亂する些少の虞れを顧みず便宜之を二種に分類して說きます。即ち其一は短長、長短、長長、短短等の四種つまり二音から成る物其二は短短長、長短短、長長長、

短短短、短長短、長短長、短長長、長長短等の八種、つまり三音から成る物この二つです。中で多少双方似寄る處も有ります。

（第十二項）　二音の韻律の（チ）即ち一脚、同じく（ト）即ち四脚是等二種はどのやうな組織でも構ひません。

即ち二音には「手（一）ヲ（一）」のやうに一音が二つ合したのと又「ハナ（二）」のやうに二音が獨立したのと是等二種は有るものゝ、さて夫を何れの方で用ゐても差し支へは無いのです。四音になつても共通り「ハルサメ（四）」も「アラシ（三）ニ（一）」も「（手（一）ニ（一）手（一）ヲ（一）」も何も角も韻文上殆んど同じ物なのです。强ひて言へば實際は同じではないのです。が、今の處で日本語に共同じでないだけの兆候がありません。

（第十三項）　二音三音共何れにも用ゐられる韻律の變躰に「五」、といふ物が有り、そして是はどのやうな組織でも構ひません。

「五」は従來の歌人や宗匠が無造作に用ゐ來つた物で従來之に對し是ぞと言ふ意見は世に一つも有りませんでした。そも〳〵「五」は二と三、或は三と二、或は一と四等の和、但し従來の韻文家は只何が無し之れを以て一種の貴い韻律と見做し、之を正當の躰と考へ、直に之に對し「六」を其變躰と爲しました。が、之を正當の躰とした、其譯はどの點かそれらは漠として居ます。要するに古人の心別に深く夫等の點に考へを及ぼさなかつた事でも有る事、としか吾々には思はれません。そも〳〵二音が二つ重なつて四音三つ重なつて六音、二音が正當に重なる時には二、四、六、八等の偶數は成すものゝ、決して三、五、七、九等の奇數は成さぬものです。それで「五」はどうして出來ました、又三音の例でもさうです。三音が正當に重なれば三、六などは元より出來ます。但し、四、五などは出來ぬものです。それで「五」はどうして出來ました、つまり「五」は一種不可思議の物なのです。二音にも屬さなければ三音にも屬さぬのです、何が無し唯「五」と考へた處で。即ちこゝで考へれば「五」

は之を二音の物とあらかじめ定めた處で、さて「四」に「二」が加はつたもので無ければ「六」から「二」が減き去られた物なのです。再び三音の物と假定した處ではつきり「三」に「三」が加はつた物で無ければ「六」から「一」が減き去られた物なのです。で純粹の二音でも無ければ純粹の三音でも無いのです、卽ち韻律の一種の變躰です。

（第十四項）二音の韻律の（へ）卽ち三脚六音には左の二種類が有ります、卽ち獨立の六音と三と三。獨立の六音とは「ユミハリヅキ」「トホザトヲノ」の類、三と三の六音とは「ウミヲ（三）ワタリ（三）」「フユノ（三）ヨサム（三）」の類です。但し六音には以上の二種の外、猶二と四、四と二の二種も有るそれを何故認めなかつたとの疑ひはこゝで必らず起る事です。が、日本語に於ては二と四も四と二も其實全く獨立の六音と同じ性質なのです。否獨立の六音がつまり二と四及び四と二との同じ性質なのです。是は日本語の一種の特色です。が、原因は知れて居ます。日本語の固有の性質は、音數の少ない語をいくつも集めて更に一つの語を作る事です。それ故に前に獨立の六音と認めた「ユミハリヅキ」も强ひて言へば二と四です、で無ければ四と二です、又一層きびしく言へばたしかに二と二と二との和です。斯うして强ひて論ずれば殆んど此日本語には獨立の六音は無いのです。二と四、及び四と二を吾々が認めて數に加へぬ子細卽ち是です。

（第十五項）二音三音其何れにも用ゐられる韻律の變躰に「七」といふ物が有り、それに「二と五」、「五と二」、「三と四」及び「四と三」の四種が有ります。

此「七」も「五」と同じ理の物、其理は前の第十三項と大抵同じゆゑ爰には略します。さて此「七」これに在る四種の組織、その各に例を擧げれば卽ち左の通りです。

「二と五」「イマ（二）カヘリコン（五）」、「ヨハ（二）フケユキテ（五）」の類。

「五と二」「サトリシカ（五）キミ（二）」、「イツシカモ

(五)ミン(二)」の類。

「三と四」「ミネノ(三)ユフヅキ(四)、「タレカ(三)タヅヌル(四)」の類。

「四と三」「ユフベノ(四)ユメニ(三)」、「カタノヽ(四)ミノヽ(三)」の類。

(第十六項) 二音の韻律の(ホ)即ち四脚八音には左の三種類が有ります。即ち「四と四」「三と五」及び「五と三」。例すれば左の通りです。

「四と四」「アキカゼ(四)サムケク(四)、「ヒヅメハ(四)ヒヾケリ(四)」の類。

「三と五」「スヱノ(三)トリベヤマ(五)、「ヤガテ(三)カヘリコン(五)」の類。

「五と三」「ユフグレニ(五)カヘル(三)」、「アラシニゾ(五)クモル(三)」の類。

(第十七項) 二音の韻律の(ニ)即ち五脚十音には左の五種類が有ります。即ち「五と五」「三と三と四」(即ち六と四)「四と三と三」(即ち四と六)「三と四と三」(即ち七と三)「二と五と三」(即ち二と八) 右「七と三」の外には「三と七」も有り又「二と五と三」の外に「二と二と四」も有るそれを省いたのには子細が有ります。「七と三」は設論に言つた通り「三と四と三」です。が「三と七」も同じく「三と四と三」です、でなければ「四と三と三」何れもそれらは既に數に加へてありました。これ故に五脚十音の「七と三」は「三と七」と同じ價格の物なのです。別物とは見られません。「二と二と四」に於ても理は同じです。それ故に之をば省きました。

「五と五」其他に例を示せば即ち左の通りです。

「五と五」「ミワタセバ(五)アヲヤナギ(五)、「ツキシロク(五)カリゾナク(五)」の類。

「三と三と四」「イケニ(三)ネフル(三)ユフヅキ(四)」「アラシ(三)フケハ(三)モミヂモ(四)」の類。

「四と三と三」「シグレニ(四)ソマル(三)モミヂ(三)」「ウキヨハ(四)ゲニモ(三)ウキヨ(三)」の類。

「三と四と三」「イザヤ(三)ワキモコ(四)キタレ(三)」

「ヒトリ(三)ミヲノミ(四)カコツ(三)」の類。
「二と五と三」「イマ(二)オモヒヤル(五)ワガミ(三)」
「キミ(二)ミヨヽカヽル(五)スガタ(三)」、「サテ(二)
イカニシテ(五)ユカン(三)」の類。

(第十八項) 二音の韻律(ハ)即ち六脚十二音には左の十種類が有ります。即ち「六と六」「五と五と二」「五と二と五」「四と五と三」「四と四と四」「五と四と三」「五と三と四」「四と三と五」「三と五と四」及び「三と四と五」例すれば左の通りです。

「六と六」「タヾヒトエノ(六)ワスレガタミ(六)」、「ヨアラシニモ(六)キミヲオモフ(六)」の類。
「五と五と二」「イリアヒノ(五)カネノネヲ(五)キク(二)」、「ツキモナク(五)ヤミノイロ(五)コシ(二)」の類。
「五と二と五」「イタヅラニ(五)ツレ(二)マヨヒタリ(五)」、「ボンナウヲ(五)イツ(二)ハラフベキ(五)」の類。
「四と五と三」「オモヘバ(四)ナツカシキ(五)ヒトヨ(三)」、「アハレニ(四)ツマヲトフ(五)ヲジカ(三)」の類。
「四と四と四」「チドリヲ(四)カキケス(四)タカナミ(四)」、「ソビユル(四)ミネニモ(四)シラクモ(四)」の類。
「五と四と三」「サムシロニ(五)カタシク(四)コロモ(三)」、「タイエキノ(五)フヨウノ(四)マナコ(三)」の類。
「五と三と四」「ユフグレゾ(五)イザヤ(三)カヘラン(四)」、「ヤマブキノ(五)ハナノ(三)ツユソフ(四)」の類。
「四と三と五」「ユメヨト(四)カハル(三)ヨノナカニ(五)」、「イカナル(四)ハナノ(三)サクヤラン(五)」の類。
「三と五と四」「コヒシ(三)ソノヒトヲ(五)オモヒテ(四)」、「イマハ(三)ミソナハセ(五)スミゾメ(四)」

の類。

「三と四と五」「タノム(三)カゲトテ(四)タチヨレバ(五)」、「ヒトモ(三)ウラメシ(四)アヂキナク(五)」の類。

(第十九項) 二音の韻律の(ロ)即ち七脚十四音には左の三十種類が有ります。即ち「三と四と三と四」「三と四と四と三」「四と四と三と三」「四と三と三と四」「三と三と四と四」「四と三と四と三」「四と四と六」「四と六と四」「六と四と四」「四と五と五」「五と五と四」「五と四と五」「三と六と五」「三と五と六」「六と五と三」「六と三と五」「五と三と六」「五と六と三」「三と三と五と三」「三と五と三と三」「三と三と三と五」「五と三と三と三」「二と五と二と五」「五と二と五と二」「二と五と三と四」「四と三と五と二」「二と五と三と四」「四と三と五と二」「二と五と四と三」「三と四と五と二」「五と二と三と四」及び「五と四と三と二」。例すれば多数ながら左の通りです。

「三と四と三と四」「ウラノ(三)トマヤノ(四)アキノ(三)ユフグレ(四)」、「アルジ(三)ナシトテ(四)ハルナ(三)ワスレゾ(四)」の類。

「三と四と四と三」「ウキヲ(三)マシラノ(四)コヽロノ(四)ホドヲ(三)」、「ユキニ(三)マヨハデ(四)ウメコソ(四)カヲレ(三)」の類。

「四と四と三と三」「ハナニモ(四)ナレヌル(四)ワガミ(三)ナレバ(三)」、「コヽロヲ(四)シラスル(四)ヨシモ(三)ナキカ(三)」の類。

「四と三と三と四」「クダケテ(四)モノヲ(三)オモフ(三)コロカナ(四)」、「モミヂノ(四)ハシヲ(三)ワタル(三)アキカゼ(四)」の類。

「三と三と四と四」「コヽロ(三)カハル(三)キミトモ(四)シラネバ(四)」、「ムカシ(三)シノブ(三)ノキバノ(四)ツキカゲ(四)」の類。

「四と三と四と三」「ツクバヲ(四)スギテ(三)イクヨカ(四)ネツル(三)」、「ユフベノ(四)ユメノ(三)アト

ヲゾ(四)オモフ(三)」の類。

「四と四と六」「アラシニ(四)キエユク(四)ユミハリヅキ(六)」、「オモヘバ(四)コナサン(四)オホベラバウ(六)」の類。

「四と六と四」「コナタニ(四)コヒゴロモヲ(六)ヌハセテ(四)」、「タビユク(四)ヨロバウシノ(六)ネガヒヲ(四)」の類。

「六と四と四」「イキワカレノ(六)ナゲキヲ(四)オモハバ(四)」、「ソモイカナル(六)ツキヒノ(四)シタニテ(四)」の類。

「四と五と五」「キノフノ(四)カネゴトモ(五)ミヽニアリ(五)」、「イマハノ(四)コノネガヒ(五)キヽテタベ(五)の類」。

「五と五と四」「カスカナリ(五)クモノキル(五)トホヤマ(四)」、「ウタガハヾ(五)キテモミヨ(五)ワガヤド(四)」の類。

「五と四と五」「ナサケナヤ(五)イタヤノ(四)ユフシグレ(五)」、「フヂコロモ(五)ナミダニ(四)クチモセン(五)」の類。

「三と六と五」「ヨハノ(三)ハツシグレニ(六)ツケテマタ(五)」、「ネガヒ(三)カナヘテタベ(六)ヤヨヤキミ(五)」の類。

「三と五と六」「ハルノ(三)ユフグレノ(五)ヤマサクラド(六)」、「サメテ(三)ナツカシキ(五)ソノマクラガ(六)」の類。

「六と五と三」「ヤマオロシニ(六)マタモマフ(五)オチバ(三)」、「ツキサヘタリ(六)シカバネノ(五)ウヘニ(三)」の類。

「六と三と五」「チリヤスキハ(六)ハナト(三)キヽシカド(五)」、「オキナグサト(六)キクノ(三)サカヅキヲ(五)」の類。

「五と三と六」「フカクサヤ(五)キリノ(三)マガキニタレ(六)」、「ウラカゼモ(五)ナミモ(三)キヨミガタノ(六)」の類。

「五と六と三」「ヒレヲフル(五)マツラガタノ(六)ヲトメ(三)」、「フシシバノ(五)シバシノマモ(六)コリズ(三)」の類。

「三と三と五と三」「ハナニ(三)ネフル(三)テフミレバ(五)ワレモ(三)」、「ユメヲ(三)サマス(三)サヲジカノ(五)コヱニ(三)」の類。

「三と五と三と三」「ナツハ(三)ウノハナノ(五)サケル(三)カキネ(三)」、「アマノ(三)ツリフネニ(五)ヨセテ(三)タノム(三)」の類。

「三と三と三と五」「ヌシハ(三)タレト(三)シラヌ(三)フヂバカマ(五)」、「カギリ(三)アレバ(三)イマハ(三)ワカレテン(五)」の類。

「五と三と三と三」「キリギリス(五)ナレモ(三)ナクカ(三)アキニ(三)」、「ヨモスガラ(五)シロク(三)トザス(三)サギリ(三)」の類。

「二と五と五と二」「ヨハ(二)フケユキテ(五)カリガネゾ(五)スム(三)」、「タヾ(二)スミエナリ(五)ムラサヌノ(五)ソラ(二)」の類。

「二と五と二と五」「ハル(二)タチテイマ(五)モノ(二)オモフナリ(五)」、「サテ(二)コヒシキハ(五)ソノ(二)ヒトノヤド(五)」の類。

「五と二と五と二」「ユヽシトヤ(五)ミン(二)スミゾメノ(五)ソデ(二)」、「ナサケナリ(五)イザ(二)アリアケノ(五)ツキ(二)」の類。

「二と五と三と四」「タヾ(二)ヒトヽキノ(五)ワカレ(三)ナリセバ(四)」、「イザ(二)ヒトエダヲ(五)ヲリテ(三)カヘラン(四)」の類。

「四と三と五と二」「ムナシキ(四)エダニ(三)ハルカゼゾ(五)フク(二)」、「ミダレテ(四)ナビク(三)アヲヤギノ(五)イト(二)」の類。

「二と五と四と三」「コノ(二)ウラザトヲ(五)タレカハ(四)トハン(三)」、「ノヲ(二)ムラサメハ(五)ワケテゾ(四)フレル(三)の」類。

「三と四と五と二」「ツキニ(三)アマギル(四)アケガ

タノ(五)ソラ(二)」、「コヽロ(三)アレナト(四)ミオ
ヲモフ(五)カナ(二)」の類。
「五と二と三と四」「アキノヨノ(五)ソラ(二)タカク
(三)スムラン(四)」、「オモヒシル(五)コノ(二)ムク
ヒ(三)アルヨヲ(四)」の類。
「五と四と三と二」「エダシゲキ(五)コズヱニ(四)ツ
キゾ(三)キル(二)」、「ユカシサヨ(五)ヲトメノ(四)
ソデノ(三)ハナ(二)」の類。

明治文壇叢話

例言　西洋人も中々筆まめで日常見聞の事を日記にしたゝめる中にことに面白いのは、文學者が他の文學者に出遇ッて其の風采から態度迄綿密に寫すことで、或はそれらの人々の死後或は生前に世に公になります。日本では之が有るか、無いか、よし有るにしろまだ秘れて世に現れず、兎に角それ故隗から始めました。充分に直筆したつもり、是から次第に掲げます。勿論中の記事は一切筆者が一己の考へで或は直接に實見、或は間接に推測した處も有り、殊によると天眞とあやまッたか知れませんが、それは御本人の御考へにある事で、或は相違の事が有れば御辯明次第取り消します。まだ〳〵其人々の生前に出す方が口の無くなッた死後に出すより罪は輕いでしやうか。次第は素より不同、たゞ思ふまゝに排列しました。こゝに是から書くのは第一男女の文學者、新聞雜誌記者などです。知人を食物にした所は海容を願ひます。

第一　依田百川氏

まづ先輩の依田氏から記しませう。私が始めて依田氏に逢ッたのは明治二十一年九月八日(土曜日)で、逢ッた處は芝公園地内の洋食店三緣亭でした。それまで實は私も餘り世の大家と交際するのをば好まず、つひ諸方に面會の折は有ッてもいつも逃れて居ました。が、突然、忘れもせぬ右面會の日の三日前即ち九月六日に、德富猪一郎森田文藏、朝比奈知泉の三氏から手紙が來て「文學會志のもの相集ッて文學會を組織しやうと思ふ故出席を」との文言、どうした張合かむらむらと其處へ出席する氣に

も爲りました。

で、出席した會の定刻は午後五時半、私につゞいて直ぐに跡から入ツて來られたのは高橋五郎氏で、われ〱より早く依田氏は出て居ました。依田氏の前にはまだ誰一人とて居ぬところ卽ち依田氏が出席の第一番でした。實に今日までも相續らぬのは會期の時間を違へぬ依田氏の性質で、それから以來こゝに三年、諸所の會でも出會しますが大抵は依田氏が先陣です。

姓名を互に名乘ツて其處で三人同志の物語になりました。依田氏は其時五十五六、鬚髯頰髯とも大方白髮まじりで髮の毛は割合に薄くない方、身長は中長できりゝとした顏付き、色は歲月に染められて白いといふ方でも無いものの年と比較して皺は少なく、笑ふ時には一種の愛嬌が目に生じて、まづ親しむべく、又敬すべき態度でした。紋無しの鶯茶の羽織着ながしでしたが、着物は何か見損ひました。依田氏の紋處は橫向の揚羽蝶が、氏の好みは無紋に有ると見えて此日のみか、他の時でも氏が有紋を着るのは最も罕です。

やがて吉野拾遺名歌譽の事から芝居の話しが始まりました。彼是論も湧きましたがさしたる事でも有りませんでした。その內に彼是人も集まりました。內田周平、朝比奈知泉、森田文藏、德富猪一郞、竹越與三郞、坪內雄藏、久米幹文、矢野文雄これらの諸氏で、實に今日の文學會のはじめは此時でした。

人が集まるに從ツて談笑の聲やうやく喧しく、中にも宴會などの節すこし隙が有れば其室なり庭なりを散步するのを依田氏は好んで、明治二十二年九月土方子爵からの招待によツて日本演藝協會委員が一同芝離宮へ集まツた時にも依田氏は其庭內を散步しました。

時は正に秋の央、前夜の夜あらしが過ぎたばかりのところ、量でしるしの見える泉水は面白く海風に小々波を紋ツて居ました。依田氏はしばらくはじめ緣側に立ツて眺めて居ました。この日は珍らしく有紋の黑羽織に細縞の鼠地に茶糸入の袴を穿いて居ました。吹入るゝ風にわ

なゝく髯を右の手で撫でながら快活な聲、――

「あツ、魚が跳ねる！　山田さん、えツ、先生、庭アちツと歩きませう」。

言ふや否や庭下駄を突掛けて直に下立つ、私もつゞいて庭へ出ました。

「あゝ」前後を見回して依田氏が、「まるで源氏の須磨のやうですな――殿上のすまひ、あツ、殿上で思ひ出したいちご姫は意外な御趣向でしたな」。

依田氏の會話は甚だ爽で、しかも早口の切口上です。會話の間には折り〳〵「うゝ」、或は「えゝ」の唸り聲が交りますが、辯は達者な方、かてゝ加へて音聲は香ばしくそれに些し鏽が掛かツて、それでいつでも高い調子ですから依田氏が居る席はいつも非常に賑かでした。森鷗外氏が主人でそれこそ德富蘇峯氏でも客である席などはしんみりと爲過ぎて彼一句是一句ぼつり〳〵聞える位なものですが、其處へ一點依田氏が入れば絃歌がたちまち湧き立ます。依田氏は、それに、其交際が中々巧で、人に接するにいつでも不快な顏色は無く、したゝかに面前で駁撃されても高笑ひの高聲、しかも其高笑ひの高聲が故意につくツたとは見えぬところは如何にもさツぱりして居ました。

馴染むと自然、依田氏も言葉がぞんざいに爲りますがぞんざいだと思ふ下から又甚だしい、丁寧な語氣にも爲ります。依田氏に限らぬ事ですが、依田氏も左樣です。敬意を充分に含んだ頃には「斯うですな」と「な」重に言ツて、すこし親しんで來ると「な」が「ね」にかはります。

依田氏は全で禁酒禁烟會員、酒も烟草も用ゐません。宴席で座をくづした事も有りません。席に列ツた藝妓などに公然多く冗談をも言ひません。新小說發兌の前同好會員が日本ばしの菊住(料理店)に集まりました。麗人も席を周旋した、其時只一回主人は依田氏が藝妓と笑ツて會話をして居るのを見ました。其他の會では一度も見ません。

去年の春の夜おぼろ月の床しさ、蒸し籠めた梅が香で

人をぬくめるやうな心持ち、そゞろあるきが面白さうに爲ツて私も家を立ち出で小川町にさしかゝツた處で依田氏に會ひました。依田氏の眞率はいつに變はらず、今日もそゞろあるきながら友だちの家を訪づれたかへりとて身輕な打扮をして居ました。藍勝ちのバッチをあらはして裾を一寸と端折ツたところは、如何にも飾らぬ體でした。

これらは些細な事、こゝに唯一ツ噴出すばかりの話がありました。その活劇をしたのは依田氏と私とでした。日本演藝協會の技藝下演習が淺草の奥山閣にあツて行く時は夜遲くもならうと思ツて居たところ、案外に、下演習の捗が行ツて午後三時頃に了りました。車は歸して無し、ひとり飄然と公園内を散歩して居るところで依田氏と一緒になりました。

主は往來は見馴れて面白くないといふところから小意氣な家づくりのある細道を縫ふやうにして人が聞かぬだけに冗口を言ツてやがて路次から廣小路へ出ました。最も賑なのは依田氏でした。たちまち此處に於て演劇を論ずるかと思へば忽ち其處に於て小說論を叩くなど非常に席に快話の色を添へました。やがて年齡の話しがはじまる。私の若年を見て一つ二つ依田氏も冗談を言ひました最後久米幹文氏の側へ行ツて大聲に又その話と爲りました。

依田氏の癖として物語する時に身をすこしづゝ搖る方で、腰を掛けぬ座敷ではしツかり正しく座して時々膝の上へ手を果ねて上ので下の手を擦りながら語り、また椅子の有る座敷では起ツて間手を後ろに合はせ、足をすこし動かしてそして話す方です。今久米氏に對しての擧動もまた是でした。

「久米先生（依田氏は人を呼ぶに先生と多く言ひ、何某さんなど言ふのは少い方です）御年役なら御見受け申すところ私と先生ですな（「な」を加へるのが依田氏の語氣ので常です）。先生御いくつですな？　私はもう五十六ですが」。笑ひを含んで、

久米氏は物ごしのをとなしい性質、聲ひく丶答へました。依田氏は語を受け取ッて、
「は、それぢや私より御老年ですな。は丶丶丶丶」。言語を絶ッてから快くそして輕く、笑ふのは依田氏の常です。
「いや、もう、老人は最う恐れるよ」。誰を目ざして言ふので無く、殆ど獨語と言ふ場合には依田氏も多くこの體で言ひます。「若武者が轡づらをたて丶現れて來るから」。
「しかし先輩は又」ゆる／＼と春の屋主人坪内雄藏氏が笑ッて口を容れました。「後進の先導で……」
「は丶丶丶漢文で先導でもしましやうか、は丶丶丶」。
私は笑ッて答へぬ。その譯は依田氏が斯う言ッた言葉の眞意がまだ分かりませんでしたから。更に引きつゞく言葉を待つ間程なく
「淫婦ですかな、淫婦」。
明らかに分かりました、依田氏はいちご姬に格別の深い考へを付けなかッたので、それ故私は只うなづくのみでした。
「あ、それで何ですな、あの中に小君といふのが有りますな」この度はすこし氣の加はッた語氣でした。
「あの小君の讀み方ですか、ありやア貴君は『せうくん』と御讀ませでしたが、『こきみ』の方が宜さ丶うぢやありませんか、藝者じみるけれど」。息を入れて更に語り繼ぎ「源氏あたりの例でもあんなの丶音讀は罕ぢや有りませんか知らん。全體兄貴とか伯父貴とか言ふのも要するに兄君、伯父君の轉訛で……」
一寸話しが橫道に入りました、――
「私がそれゆゑ娘にも〇〇（仔細あッて此名は空虛にしました）と付けたんです。
返答を熱心に待つ體、そこで簡略に私も答へました、
――
「御もツとですが、公卿頃に小大君といふのも有りましたでせう。後世の讀み癖もさう有るからにはそれから

と思ツて小君とつけました。それだけです」。
話しも亦それだけで果てました。と言ふのは話しを果てさせた人が有ツて後から小中村清矩、鳥居忱、關根正直、森田文藏、坪内雄藏など及び燕枝、如燕などの人々が逐ツて來たのです。それからは早銘々やがてしばらくは彼一句是一句とりとまらぬ話しのみでしたが、最後に私がひとり先へ立ツて海を見晴らす築山の上に上ツて坐ろに後をふりかへツて聞けば木立の間から呵々と笑ふ依田氏の聲があり〱と響きました。
おのづから氣の晴れ〱とする海の景色、茫然とながめて居るところへ例の聽き馴れた聲がしました。聲の持ち主は言はずと知れた依田氏、——
「何か見えますな」言ひ〱上ツて來て「あゝ海風の狀だ。少し違ツたな。」
「いえ、この離宮の樣子が。舊幕の頃私が一度こゝへ來た事が有りましたが、其時は紀州家の邸で、どうも」庭の海近い方を指し「この邊が何だか違ひました」。が、話は更に飛びました、——
「修史局に集まツてる材料の中には餘程奇異なのが有ツて私は是からあれらからの記憶を種にして懷良親王や夏井の事を書くつもりです」。
あゝ思へばことしやがて出版になる依田氏の『應天門』といふ草稿も既に此頃から孕んで居たのでした。
かれ是海のながめも飽きてやがて館へ立歸ると、既に堀越秀（市川團洲）氏も來て居て呼びかけたため依田氏とのみ會話は了りました。
依田氏の性質は、清潔を好み、規律の正しいのを愛しまた讀書を喜びます。書齋などの取片付いて居るのは實に心持ちいゝ程で、書架には書物が如何にも整然として而も幾度用ゐられても書物はいづれも新らしく爲ツて居ます。中根香亭氏などは讀書するに寢ながらの方を好む性質、依田氏は全く反對でちやんと四方を片づけて、さて靜に机に向ツて讀む性質です。讀書を氏が好むのは其書齋に夜も洋燈が赫いて居ぬ事が少いので知れます。

ことに妙なのは、氏の書癖が日を逐ツて進む事です。數年前よりは、依田氏の書癖は物によつてかツてかわりました。が、今日の勢ひでは玉石いづれも喜んで通讀し、しかもいづれにも面白味を覺えるとの事です。依田氏は草稿に大した苦心を爲ません。一度稿を立てゝすこし直し、それから直に淸書してその向へわたします。校正は森田氏とかわツてみづから爲すことがあまり多く有りません。令孃が下座敷でしらべる琴の音を聽きながら、樓上に始終筆をとります。

いつも集會の節には依田氏の演劇論が始ります。明治廿二年四月頃の文學會で依田氏と森田思軒氏と菅了法氏との間に盛なその論が有りました。今依田氏の口吻だけ書いて見ませう。

「だつて貴君、私にや感心されないよ。男之助があんなに顏を眞赤に染めたツて那な人間が實際有るもんか。それで鼠ィ……鼠ィふんづかまへやうとしても鼠は逃げちやつた。そして彈正が拋るあの手裏劍、あれがあとでさつぱり役にや立ちやしない……」。

依田氏についての事は猶有ります。が、あまり長くなりますからこれだけにして、次は春の屋主人坪內雄藏氏に移ります。

依田氏を叙して終りに至り、更に肝要な依田氏の家庭の樂しみを落としました。

依田氏には四人の令孃と一人の令息とが有つて、之に對する依田氏の愛情はいはゆる春風和氣とも言ふ方、はなはだ穩でこまやかです。一年に四度と時をあらかじめ一定し、其時には令閨及び令息孃の中を交代につれて遊山するのが慣例です。毎年一月は二日或は三日のうち必す令閨及び令息孃のうちを二人拔いて伴つて淺草にある同氏の菩提所金藏寺に行き、先祖代々の墓に參詣し、歸り途には淺草寺に寄つて寺中に遊び、萬梅か一直といふところでゆるりと支度し、やがて又玩弄品や小間物を買つて與へ、四月の花ざかりには小川町の本宅に留守居を置き、此日は總出で下婢までも殘らずつれて墨田川また

は舞鳥山に遊び、七月はまた二人を拔いて墓參をして公園に遊び、一月のとほりに過ぐし、さて十二月十七日の淺草年の市にはまた七月と同じやうにして墓參をし、或は羽子板或は福笄を買つて與へる、これが今日に至るまで引きつゞいて十年餘、大抵缺いた事も有りません。墓參の數と一家內のしたしみとは事々しく評する迄も無く春風和氣の評が當つたかどうかは讀者の判斷にあります。

どのやうな時でも來客に留主をつかふ事の無い、これが依田氏の常で、と、氏もみづから言ひました。來客があれば筆を擲げて大抵は直に書齋を出で其人に對面しその人を導いてやがて客室に通すのが依田氏の好むところです。事がすこし輕々しさに近いとて、それでは却つて失禮であらう、せめて煙草盆ぐらゐは出して置いてから對面なさいと細君または令息孃も助言する、それをなかなか依田氏は聞きません。「何、わたしの顏が見たさで來るのだもの、早く見せただけが禮といふものだ、茶煙草盆はどうならうか」。

第二　春のや朧大人

春のや朧大人（坪内雄藏氏）は安政六年美濃國太田驛代官所に生る。其父は尾張藩の士族なり。十歲の時父と共に名古屋の近在に移る。明治七年同所なる愛知縣外國語學校に入り英語を學ぶ。同九年東京開成學校に入り後に東京大學に轉ず。同十六年卒業して學位を得。同年東京專門學校に聘せられて今尙かしこに講師たり。此年より同十九年迄三年間は教授と著作との間に晝夜を分てり。シエークスピヤの「シーザル」の飜譯は其最初の筆也。「小說神髓」といふ論文も同時の著述なり。（出版は十八年也）其他リツトン氏の「リエンジー」の飜譯（不結局）、小說「書生かたぎ」、寓意談「京わらべ」、飜譯「マダム、ローラン傳」、「未來の夢」といふ內地雜居に關する小說（不結局）、「妹背かゞみ」といふ自由結婚と關渉結婚に關する

小說等相次で出づ此頃また「今日新聞」「女學叢誌」「政學講義會」「中央學術雜誌」「讀賣新聞」等に關係し又專門學校の外に私立學校二ケ所を敎ふ。十九年の夏妻を娶る。同二十一年「政學講義會」及び「讀賣新聞」の外に暫く「繪入朝野新聞」「浪花新聞」「新潟新聞」「學藝雜誌」等に關係す。又春のやの名義にて「浮雲」といふ小說を出す。但し之は二葉亭氏の作にして自著に非ず。此年の間從前の諸學校の外に成立學舍といふ私立英學校を敎ふ。又「讀賣新聞」の小說を擔當す。同二十一年「讀賣新聞」を退き專ら敎授に從事す。同年末「國民之友」の爲に「細君」といふ端物を綴る爾來著作無し。

坪內雄藏氏がはじめて世に現はれたのは私が書生で潛ッて居る頃でした。その初陣は該撒奇談、明治十九年の出版、それを葦原生といふ人が讀賣新聞に評して「日本始めて譯書あり」と云ッて一も二も無く褒めた。その文に接し礑と私も駭きました。しかし半信半疑、その內間も無く告書で坪內氏の答辭も有ッた、その文を見れば馬琴から出た和文體、中々の品のよさ、まづ謹若と爲りました。

それから書生氣質、小說神髓、當世士傳、及び妹背かゞみなどを續けて見て感不感相半しました。實に是は思ひ切ッて今打ち明けて云ふのです。

はじめて私が坪內雄藏氏に面會したのはやはり依田氏と同じ日で、その場所も同じ三緣亭でした。氏は定刻よりすこし後れて來て、私が朝比奈知泉氏とはなして居た時でした。

不圖聞けば絨氈を踏む輕い靴音、ふりかへつて見れば來會の一人でした。中身長で瘦がれた方、色は薄白くあまり濃くない髯の迹があをゝ顋に殘つて一昨日あたり剃ッた體、めかすのが好きでも無ささうとは一目にも見えた。それが思ひ設けぬ坪內氏でした。それ迄に想像したのとは全で違ひました。

爲朝がはじめて白川御所に出た時、諸公卿が其名聲を想ひやッて大騷ぎして透かし見たといふ。その昔しの儘

の心持ち、これが春のや氏かと屹つと眼を注いで見ました。

髮の毛は多い方、また厚い方、やゝ左へ寄せて分けて有りましたが、あまり、櫛に厄介は掛けたらしく無い風度のつよい細緣の近眼鏡を掛けて居ました。身に着けたのは、變り縞の薄鳶の格子の背廣、白茶琥珀の襟かざりカラをば澤山にあらはして金の角ボタンを付けて居ました。時計の金はすこし目の付く處にちらつき、秘袋からはんけちが一寸顏を出して居ました。坪内氏は洋服では背廣を多く好む質と見え、この日に限らず集會又たは外出の時にはフロック又はモーニングを着けるのは比較して少い方です。

初對面の口誼を述べて、そろ／＼四方山の話に移れば其話しにいつも角は立たず、ほとんど喧嘩場の話になツても丸くかたれるといふ方でした。近眼鏡がやゝ下の方にさがツたためか、多く人をば上の方から見て、そして應答の時しきりに點頭のが癖で、相手のはなしが、言はゞ眼目といふ處になると「なアろど」（是は音聲のたすけがなくては明に似ませんが「成程」といふ坪内氏の慣用の語氣です）と言つて下に點頭いて微笑します。音聲は太い方、また調子の高い方、あまり早く無い方、會話の間にはをり／＼滑稽がまじる方、問答の論が僻して出ても手づよい反對も現れません。その癖話しはます／＼語り進みます。

言葉の音調には名古屋言葉が猶おもかげを殘してるますが、なか／＼知れません。ほとんど東京語そのまゝです。酒は飲まなくも有りませんが、決して多くはなく煙草をばなか／＼に好んでいつも喫烟の道具はたづさへます。が主な好みは刻みの紙卷たばこに有ると見えて、携帶の品は大抵それ、今も目につくのは鼈甲製のその煙草入れです。

外見は前に言ツたとほり、これからは些し細かい處に立入ツて見ましやう。人との談話は甚た愉快で而も話しが進む方、人が語ればたゞ／＼頻にうなづいて居るとこ

ろは或は人の心中を窺ツてでも居るかとも見えますがよく／＼正せば强ちに左樣でも無くつまらぬ爭ひに波風を立てるのを好まぬといふ方です。ならば話しが衰へるかと言ふにまた左樣でも無いとは頗る奇です。要するに、雨中の梨花、遠く見て艶、近づいて瀟洒、たゞ人に媚びる海棠の色を餘處にして却ツて落ちついた處に香りをとどめる體です。たゞいよ／＼親しんでそしていよ／＼分からなく、而も兎角の批評をも下しかねるのは氏の性質です。澄む水の底は泥床つねに重くも無くまた輕くも無い氏の態度は暗に他人をして氏を神經質の人かとも思はせます。が、思はせるだけ、その兆について尋ねられてはまた答へられなく爲ります。何が無し、心のつまらぬ愛嬌のある人、往來で頬に小ヒゲの入つた子供を見ても齒を白くあらはして笑ツてそツと抱きあげさうな性質です。一口に言へば敵の少ない身のこなしです。

座敷のかざりはあまり氏は心を用ひぬ種類と見えて、いつも際立ツたところも有りません。相應の軸に九谷の大花瓶、打ち付けの物で打ちつけのまゝ――粉飾を廢して部屋を普通にして置くのが氏の常です。あゝ是が氏の文や態度とかはる源です。

長谷川辰之助氏

長谷川氏の賢父とわたしの父とは共に久しい馴染でした。其前長谷川氏一家も地方に居て、そして辰之助氏だけ東京に留學してる頃でした。わたしの父が上京して辰之助氏と私とを一間に集めてしたしませた事が有りました。

而も今から八年前、明治十六年の夏のはじめ、席に茶菓だけを置いての閑話でした。其時の辰之助氏は木綿濃藍の上衣に皂染の羽織、小倉袴に日和下駄また私は二子袷の上衣に紫のしごき、一も二も無く二人とも書生體とは誰にも見える打扮でした。其時辰之助氏は魯西亞語を修めそして私は英語を學んで居た。二人語學の相違は飛んだ會話をはづませる種でした。文法、文脈のところま

では二人も言葉を交へました。が、一點も文學といふ處には話し及びませんでした。たゞ、これだけの注意が長谷川氏から出ました。「私の方の教科書は小説が主です」あゝ今から思へば！

會話の模樣では氏は利辯といふ方でも無いもののまた訥辯といふ程でも有りませんでした。別に考へ〳〵話す方でも有りませんでした。其内に――何の張り合ひからか今は忘れましたが――突然、はなしが軍事にうつるとさていづれも少年、肱を張ツてはなし出しました。「軍人は面白うムいませうな」と言つた辰之助氏の言葉は猶今日の耳にも殘りました。

再會を契ツて袂をわかツてそれから二人とも取りまぎれて思はずの內に音信を絕ちました。やがて明治十八年の秋でした。突然長谷川氏は賢父とつれだツて尋ねて來ました。その時は急ぎとの事でほんの門口だけの挨拶でしかも夕暮、歸りましたが、私の目にとまツた一種の奇異が有りました。辰之助氏の身長が二年前見た時よりは非常は高くなツて、そして態度がすこし重々しく爲ツて來たことです。「はてな、大人に爲ツた」。かう自分でつぶやいたのは忘れもしません。

終に長谷川氏は辰之助氏の事を色々はなして、

「あれも今遊んで居りますが、どうも困るのは小說が好で隨分凝りかたまツて居るやうで――私もつまらぬ物を、御前なんぞにそんな氣の利いた事が出來るものかと言ツて差しとめるやうにして居ますのです。がどうも聞きませんで困ります。あの春のや、あの先生とは同國の處から懇意で今往復して居ますが……」。

どきりと私も胸に來ました。長谷川氏は語をつゞけました。

「あの先生は學問もあツてあゝ賣り出したンですから宜しいですが、辰なんぞが何のどうして。全體その魯西亞語を、御承知のとほり、學校でやりましたがその教科書が大抵小說であるとかでそれから兎角……はゝゝゝ」。

ほとんど小說のやうな事實、まことに此時の私の驚き

は非常でした。前に川上氏から彼是辰之助氏の浮評を聞いたそれながら猶果して浮雲の著者其人が實際わたしの幼友だちであッたとは思ひませんでした。何が無し、言句は出ません。しばらくは。ところを、あゝ錆刀の一ゑぐり、またも長谷川氏が言ひました。

「時にと、今日の讀うりに武藏野とかいふのを出した美妙齋といふ人は誰でせうか？　辰が一讀して恐ろしく珍らしがつて居ました」。

まことに長谷川氏は私が其著者であるといふのを知らなかッたんです。が、このやうな、意外をかさねる場合は又と有りますまい。

「さうですかな？」實に噓も何も無く、をかしさもをかしさ、私が言ひ得たのは是だけでした。はづんで掛ッた長谷川氏の語氣、はづまぬ返答に力抜けがしたと見えて更に話しは又舊に戻りました。有體に言へばその話柄が武藏野を歩るのをば——自惚！——殘りをしく思はれました。それからと言ふものは彼是その浮雲の評論になりました。今まで放假して著者は誰かとのみ思つて居たがさうとは更に氣が注かなかつたぐらゐを明らかに私は言ひ得たのみでした。口がむづ／＼しました、その武藏野の著者は私だと明さうかと思つて、幾度も言葉が舌をつきました。が、兎角また敢て打ち出し得もしませんでした。みづから名唱る大人氣なさを流石に知つても居ました。それのみか。猶その打明を禁ずる原因が外にもありました。

戸隱山紀行

去年の夏信濃國戸隱山に遊び、其日記を書くつもりで居て終に果たさず、思ひ至れば旣に今日で殆ど一年山に對しては紀行を誓つた、それ諸共其日を記憶するため心覺えの中から列ねて、この夏期漫遊を計る人にも人のまた餘り行かぬ此山の名勝を知らせる所存、引きつづいて是から暫時此處へのせます。

耶馬溪の奇は實見せぬ事とて何とも云へず、妙義の勝は成る程勝、然し戸隱山に比べれば猶規模の小さい處が恨です。戸隱の名は紅葉狩の故事から緣を引いて今日も人が聞く、聞いてそれで見た人は却つて少ない、それには原因も有ること。何を言ふにも信越のほとんど境、長野からさへ五里の險阻を越えなければ行かれぬ、是が一つ、それに有名な險阻な山、一度遊んだものが懲懲して驚いて其危險を唱道する、是が一つ、つまりは第一の原因が都城の人足を隔てたわけで、第二が信濃人をさへ威した處であつた。信濃、而も長野の人で猶戸隱を見ぬ人が頗る有る。それで其險も分かる。長野へ着いた其夕ぐれ、福武氏に逢つて戸隱の話しを聞けば險阻は險阻ながら見る價値は充分あるとの事、福武氏は曾て一度遊んだ事が有つて山蕎麥の味も忘れられぬとか同行しやうとの言葉、聞く身も勇さみ立つた。

これを人に話すと矢張り長野の柴田氏も贊成した。けれど三四日間は大雨で出立さへ出來ず、空しく天を恨むばかり、それでなくとも戸隱は雨の多い山で、道の泥濘は無類との事、まづ白河法皇を極めて空しく日を暮らしてゐた。ときに七月十五日、午後から不思議に雲切れを見付けた其嬉しさ、まだ晴雨何れとも決せぬものの早晴れた心持ち、前日來の雨で道は嘸かし損じた事と思つた

ものの夫を顧りみる處でなく、翌日は、晴雨に拘はらず無論濡れるは覺悟、泥布子を着るのは必定、夫ながら朝立ちして向はうと相談一決し、翌朝を契つて其夜は床に付いた物の、目を覺ませば、山嵐も點滴とあやまたれて田の蛙のなく聲も雨を呼ぶかと胸はとつおいつ、いつか起されて見ればあゝ戸隱大明神！　東の嶺の端しらしらと晃めいて、朝霧の薄紗が朝日山の額を包み、風しづかに、空玉子色正に好天氣の瑞はあらはれた。朝まだ四時既に柴田氏に訪はれた。顔を洗つたか、洗はぬかは全く夢中、單衣にくくりつけた高袴、脚半と足袋とで足をしめてそして前夜用意した日和下駄を穿つた打扮は登山に似合はぬ打扮と人は轉げて笑ふばかり。生來山越は靴で無ければ下駄、其外は不得手な私、よしや黒鐵の岩角でも踏み碎いて進まうものをと氣ばかりは半ば拔けて山へ馳せた。柴田氏は單衣の着流しに脚半草鞋がけ、福武氏も單衣に高袴の脚半草鞋がけ、何も身輕な打扮であつた。金剛杖にも象る蝙蝠つきたて用意整つていざと計りに出立した。長野町の人家まだ起きず買ひ立ての樫齒音高く響いて、雨も朝開の風もろとも涼しさう、往生寺山に差掛かる内爪先は次第に上つて其谷を經た頃は最早一起一伏すこしも定まらぬ峠となつた。此處を何と聞けば其處に聳えるのが大峯山との事であつた。

この大峯山は有名な松茸山で、如何さま見上げた處松といふ木の外には土ばかり、山はざらめいた土で松には適しさう、之を左右に送り迎へての一里ばかりはまことに唯の山、是と言ふ興もなければ、是といふ不興もなく同行三人無駄口を木だまに響かせて罪もない途傍の甘艸又は釣鐘草の花をつまんでむしるばかり、果ては高笑ひに驚いて飛び立つ雲雀が二つ三つ。顧りみれば長野にあつて見上げた朝日山やまた今まで高いと思つた大峯山も山途の常、次第に低くなり果てて終には記標に見えた絶頂の松が地平線に齧まれて行く體、夜は充分に明け離れて山の端を隈取る旭日の色もほんのり紅く、此日の天氣いよいよ頼もしくなつた。行き行く内に荒安といふ處に

かかる、掛つたところで際立つたのは道が樂に爲つた事であつた。むかし親鸞上人が大峯山からここまで來る時道の險阻に弱り果てやうやく荒安まで來て「あら安」と其道の樂になつたのを喜んだと云ふ、それが故事で今日も其處を荒安と名付けたとか、今は——婦人小供にはやや六かしいものの——夫程の道でもなく、むかしこのやうで親鸞がさう言つた物ならば實に上人は飛んだ弱虫、三里の灸を勸告しても宜からうと一同が飛んだ空威張。

路傍に一軒ばかり淋しさうに設けた茶店に立ち寄つて見晴らしのいい椽鼻から遠くを望めば今までの山中に引き更へ天がまるで切り開けたやう、山は遠近にうねつて思ひ思ひの色、中に一際遠く見える一脉の猶あまたの雲を載せて居る。あれは何山と尋ぬれば飛驒の國境との答へ、ああ飛驒が見える處までもう來たかと思はず感じもした。腰に帶びた望遠鏡を取り出した柴田氏は頻りに吾吾ともども見回はすのを、村の小兒が見て羨ましがる「飛驒の山に鬼が居る」と嚇して渡せば眞面目で望遠鏡の鏡の面にとまつた蝿に欺かれて居るをかしさ。

休息所を立ち出ていくらも行かぬ內次第次第に天氣が惡くなり始め、遠山の根方は切れて居るものの頭の上には雲足が低くなつた。幸ひに凉しさは凉し、然し苦勞も苦勞、聞こえる難所にやがてさし掛つて降られたら何程の不都合であらう。が、雲足の低れた割りには容易に雨も來ず、沖沖に送られてぽつぽつと足を運んだ。路は一起一伏やはり定まらず、而もやうやく一間前後の上り下り、左右は或は林或は谷、人家も折り折り思ひ出したやうに一二軒あるばかり頗る氣候は下界と變はつたと見えて時時見える麥畑の麥は猶青味を帶びて、脊も低く、而もそれで刈つては無かつた。見るからが變はつた心持ち道を傍つて流れる溪流の透き徹るまで美しいのに立ち去りかね、はんけちを浸して汗などを拭つてゐる內に落ち合つた二人の男、是も旅よそほひであつた。最早人界に遠ざかつて中中に人は戀しく、言葉をかければ先方も應答した。これら二人は丹波島のもので、鶯の雛を戸隱山

に取りに行くとか、矢張り朝立ちして出て來たのであつた。何を携へるかと思ふと別にそれらしい物も無く、就いて鶯の事を話さばなる程黒人であつた。戸隱には以前鶯が中中澤山であつたところ近頃取り盡して大に少なくなり大によわるとの愚痴、誰が取り盡したと問ひかへせば「私等さ」と言つて呵呵とわらふ其質朴！

小一里の道を、これらと一途にして、一行すべて五人面白をかしく思はず道を捗取つた。やがて其內林の中に突然と鶯が見えたとか「それ居た」と言ふより早く二人は林に飛び入ると、さても草の深さ、身は早沒して仕舞つた。心よい田舍の人の道連れもここに無くなつた。人の鯛釣り、見て隙をつぶすのも詰らぬ噺し、其儘袂を分かつて彼是四五町、何と言ふか名は忘れたが山蘭など道傍に多く居る、山中の一軒家を遙かに望んで、右を迂回し左をまはり、行き着いて見れば是は如何に、前の二人は旣に其處に腰を掛けてゐた。

最早一日の馴染互に言葉を掛け合つて吾吾も其處に腰を掛け、さて其家を見回すと、何が無し目に入つたのは獵銃であつた。獵師かと問へば齒の拔けた皺がれ聲の老婆が「はい」と答へる、途端見れば見馴れぬ吾吾の姿に寄つて來たのは例の日本種の狐めいた、瘦がれた狗、主に獵に用る類であつた。差し出す山茶は色ばかり、よく有る事、烟草盆に取り入れた火は爐の燃えさしで、取るや否や一服つけさせたのを御役濟にして直さま消えて仕舞つた。獵についての事を話かけても兎角老婆の話しも火同樣、答へるだけで直ぐ消えるばかり、前の二人の鶯取りとは傍で聞いて更に分からぬ應答を高聲で饒舌つた。要するに前の二人は常に鶯を取りに來て、ここの家とも旣に入懇、われわれは一足さきに袂を分かつた。この間見るものは山、一つ越せばまた山、空も、山で支へられ地面も山で固めてあつた。で、始めてやや珍らしい心持ちのしたのは是からが卽ち信濃で有名の原、飯綱が原に掛かるのであつた。

程無くも飯綱が原に出て見れば、何さま凄まじい大き

な原、一望たゞ茫漠と切り開かれて、今までに山中をもぐつた目が俄かに暗いやう、右を見れば例の名高い飯綱山が雲の中に入つて居た。飯綱の不動と言つて音に聞えた山、卽ち是かと見上げれば山も凛然と故さら威儀を正した風情、一面に何の木か隙間もなく、而も造化の手は過不及なく其稍を揃へさせて、評すれば豐富な山、山の形は西角に大甕を絞つて、それで目に立つ山脉も無い事とて屹然として而も三角形に恰好よく峙つて居た。山の裾からの一回が卽ち飯綱が原、われわれが過ぎた處は大抵山から一里ばかり離れたのみ、それで山の威嚴は猶是程であつた。携へたのは双眼鏡、力めても山の木は何か分からずそれが頗る遺憾であつたが、扨其遺憾に附け加へていやな話しと不快とを段段に感じた。いやな話しとはこの邊に山犬(狼の一種)の多いといふ事、及び原の景色がやがて千篇一律になつたことである。

　近來汽車が開けたから猛獸の類は皆其響きに怯ぢ、深山へ逃げ込んで、其ため從來あまり猛獸に逢はなかつた山にも意外のものが現はれて、この飯綱が原にも折折山犬が出沒するとのこと、われわれがここに差し掛かつたのは早や午前八時やや過ぎた頃で、晝間のことゆゑ眞逆と思ふ氣もあつたがしかし半ばは恐いもの見たさの心も交つた。

　原と言つても中中むかしの武藏野などのやうではなく小さな岡が高低して居る平地で、二つばかり湖も有つた原の土は墨のやうな黒土、木らしい木は一本も無く、下生の草は芝ばかり、其外は實のつかぬいちご、又は名も知れぬ灌木ぐらゐのもの、わるく言へば草さへ疎なのは少しも無かつた。土質の惡るさに物も生へず、唯荒蕪に歸して居るのは惜しいものと飛んだ實業家氣取りで呟くのは吾ながらをかしな話し、いくら歩いて歩いても飯綱山はやはり右に元の形、原はやはり形も變はらず、もう山が鼻について八重十重に列なる體を見ても名を聞きたくもなく、また開くものもなく、前後をふり返へれば一面圓い天に限られた平たい土盤の上に人間はわれわれ只

三人、肺が破ぶれる計に人の事を罵しつても空氣の外には聞くものも無く、唯唯滿足したのは其サブライムな事

此原が戸隱へ旅行する者の最も不快な處である。長野から出て足は早いくらか草臥て來た上に增して長い間變化もない處、同伴でも無ければ欠伸は請合である。夏でも人の通行は一日何人と言ふ位、十月の初めからは全く雪で埋つて、それに飯綱おろしの吹雪は馬をも埋める計り、人跡は全く絶えて、容易ならぬ所用の有る者の外僅に飢ゑた獸類が雪を踏むのみとのことであつた。いつとか長野から兇賊が脫走して戸隱山に逃込んだ時警察官が其跡を追つて此原を徒步で越した事が有つたさうで、雪は三尺も積つて居る內になほどんどん降りしきつてやがて戸隱へ行き着いた頃には烈寒にこらえて足は血がにじんで脹れ上つたとの事であつた。

やうやくにして原の果てに當つてささやかな鳥居を認めた時の嬉しさ、其鳥居が卽ち戸隱神社のもので、すはや着いたかと躍り立つて、さて又聞けば、驚く話し、はるか遠くの雲の中で模糊として居るのが、戸隱山との事まだまだ里程は遠い事、評すれば鳥居はほんの小供だましの藥菓子、一寸氣を賺すだけであつた。が、流石に氣は勇んだ。ことには天の憐れみか、泣き出しかかつた天氣も亦直つて雲も稍薄く、折り折りの破れ目から目的の山の中腹を見せた、そこに眸を凝らせば、さても妙絶佳絶鼠色の巉崖絶壁

やや催した足の疲れも忘れ果てるばかり、旣に原をば後に見て山道を左右に迂回し山の位置をここかしこに見かへて、とある人家二軒ばかり有る處に出て、それを見過ぐせば一軒の休息所、直に入つて憩ふ間に、無殘、亂雲が其處此處に湧いて日影も忽ちかくれ、ねばるやうな雨が降り出した。

亭主は世辭のいい、小利口らしい男、而もここは戸隱登山の者のために力餅を賣る處とて、頻りに之をすすめそれでも感心に白砂糖をふりかけて出した。今までの道の寂寞に引き更へて意外なのはここの茶店に糸莚連中が

同じく旅よそほひで二十人餘も居たことで、聞けば是れは飯山（信濃の北隅、雪の名所）最寄の農家のもの、近頃の降り續きに、晴れを山神に祈るための登山との趣むきいづれも力餅の馳走に大口を開いて口中は丸で眞白、ががやがやわやわや目を眠れば繁華な土地へ出た心地ちもする程であつた。

われわれが腰をかけた處は、向つて左の庭あいた處で屹然其前に當つて峙つのは全く石質の大磐石、千年の苔蒸して谷水のしたたりが風を絶やさず、名も知れぬ異草が生へて居た。はや空氣の温度は冷やか、思へば今日は盆の十六日、都下の此頃の暑さと比較すれば猶冷やかと言ふ中に言ひ盡されぬ凄味が山の常とて身に染みた。この雨は霽れるかと亭主に聞けば、いつかは晴れるだらうとの言葉、戸隱は餘程雪が降らぬ時でも降るのゆゑ珍らしく無いとの澄した答へ、聞いても聞かぬでも同じ話しであつた。

雨は無論覺悟の事、いざとばかり立ち出ればさあ此度は飽き飽きする道、これから山までは一町毎に町數が記して一里半（？）と石杭の立つてゐたが、その間は左右いづれも木立ばかり、山も見えなければ、雨はびしよつく道は漸く一間位、中に一筋おのづから石段を刻んだやうに牛の跡が蛇腹についてゐた。石はなし、道は赤土、うつかりすれば辷るあぶなさ、すでにわれわれ三人が實際之を經驗した。左右の林は何處まで奥があるのか、大木に小木、灌木に下草、土目になれて生ひ茂つて蛇がゐるやら、蝮がゐるやら、ことに目につくのは樺の木とまた雷火に燃えた大木であつた。伊香保から掛けて上州の山にも落雷した木が多いとほり、この邊も落雷は凄まじい事と見えた。

談笑の中に向ふにあたつて見える一簇の樅の木立、其横にきらつくのは待ちに待つた戸隱の山里であつた。折から雨も晴れて雲も少なく、濡れる戸隱山の絶頂を仰げば、岩石の樣もやや詳らか、谷間に一點見える白いもの瀧か河かと評したのも當推量、よく見定めれば矢張り雪

であつた。いつか樅の木立に入れば山はもう何處へ行つたか分からず日影も洩らぬ木下闇、まづ異常なのは身に感ずる山氣であつた。樅は木立でこそあれ、猛然として雲を突くいかめしさ、山に入るに從がつて山だけの形容が段段ついて來た。時計を見ればやや午前十一時。

右の鳥居は一の鳥居とて長野からの登路はここに限ることで、それから力餅を賣つて居た處は大久保といふ村いざや山と言ふ處で追分路になり、其處に石が建つて居て「右、中社。左、寶光社」と彫つてあつた。中社と言ふのは中院で奧の院へ行くものの經る處、寶光社は一つ山に別に設けた一宇の社でここからも中院へ行けるが、初めて登山するものはまづ中院へ行くのが順路である。はじめ携さへた繪圖によれば此追分から右の道を取つて程なく熊の塔といふ由緒の有るらしい物が有つた趣き、しかし殘念な事、見損なつて仕舞つた。右に富士見山といふのを眺めて登る山路、さあ開いた通り弱り果てた。何しろ途は柔かい赤土、それで果もない大のぼり、自然の足に力が入る、それ丈に一足下せばぐつと潜つた。曾て碓氷峠を越した時、其道のわるさ馬さへ脛を沒する勢には駭いたものの、此處は上信の境で通行も有る處ゆゑと諦めたが、僻境の戶がくしが斯うあらうとは思ひも付かぬ話し。草鞋がけなら辷らずには濟まず下駄がけなら脫がずには終らず、私も二三度下駄を吸ひ取られた。唯掛け聲ばかり、其くせ、我慢で成るだけよささうな道と擇ぶだけ些しも捗らず、儲けものだか、損耗だか泥染めの足袋が出來た。やがて引き續く山里、いづれも舊の許多の神官の住ひで、今は何れも登山の人のための旅宿、見たのは其くらゐ、下を向いて足をとられぬ用心するばかり、中社まで行き着いた時は重荷を下したやうな氣がした。

中社と言ふは思つたよりは大きな規模、而も登山の人が虛弱ででもあれば其上奧社迄猶遙か有る事とて多く此中社限りにして歸る、其爲の拜殿ゆゑ其立派なのは山中第一であつた。社は白木づくりの宏壯な殿堂、他國にも

中中珍らしい普請、別に、案内者も持たずに見たのみか而も寺と違つて其處此處に塗抹彫刻の飾りが無いために深く目に留る物も無く、只宏壯と感じたのみであつたが獨り二間四方餘ばかりの一枚板の天井に描いてあつた墨繪の龍、筆者は誰か、兎に角非凡な出來、只夫が目について後で歸京して圖らず思ひ出したのは卽ち是が曉齋翁の筆であつたので、曾て香亭氏の雜談で讀みまた同氏からも其由緒を直接に聞いた事も有つた。それをさつぱり忘れ果ててしまつた。早く氣がついたらと後で悔いるといふぬかりの至り。

中社から直ぐ左にあたつて有つた社務所は社司久山義男氏の住ひであつた。柴田氏は久山氏と懇意な中、柴田氏の案内によつて先此社務所に着き、泥足の事とて裏へまはり、其邊の下男と顏見合はせて柴田氏が愛嬌のある久し振の挨拶、洗足の水に足を淸めて上れば僅かに出るくたびれ。書院二つばかりを過ぎて見晴らしのいい一間に案内された。時計を見れば正に十二時。食膳と蕎麥と共に言ひ附けると、引き違へて出した菓子は例の越後へ行けば必ずある笹飴であつた。

休息して煙草一服、袴を脱ぎ捨て今までの道の事を話しながらつらつら家の建築を見れば何さま昔し慕はれるやうな、一間の木目立つた椽側がはるかに走つて、小壁の高さは四尺ばかり。鍍金の六角形の襖附の釘かくしも處處取れては居たものの、ここに衣冠で坐を廣く潰しても失策は無ささうな體、見るからが古代に生れた心持が爲た。戸隱山と言へば歷史に緣の深い山、神代記のそもそも始め、天照皇大神が素戔嗚命の暴を憤つてこもられた岩窟は卽ちこの戸隱山で、今でもそれのみ手力雄命を祀つてあるとの口傳もあり、維茂が此山に分け登つて鬼女を退治した紅葉狩の故事もあり、（今でも山中に紅葉狩といふ處が存在する）、また近くは武田信玄が河中島の戰爭とかで時の明かぬにお早く勝たせてと此山に誓つた事もあり、またはは佐久間象山翁が軍旗と兵書とを携へて此山に籠つた事もあるなど、それやこれやを思ひ出せば日本

建國の昔からの、二千年間を一時に短つめ合せに其處に生れ出た心持ち、ことには身の前後左右すべて、古風な物で無いものはない——わが姿をさへ顧みなければ全で明治以前の世の中であつた。

吾吾の部屋は奥書院で、其前には庭が廣く造つてあつた。左に當つて峙つ山、其切り岸からしたたる瀧の點滴が常に雨の音をなして、雨をうれへる吾吾の耳を幾度か欺いた。瀧の下流から右へ折れて出來た池水は泥にごりで魚も見えず、流れを受ける事とて絶えず水面は動搖して雲紋を絞つた。水水として居るのは、岸の草木ばかり名の知れぬ草に名の知れぬ木、山蕨、木賊、さまざまな苔などが愛らしく雜生して、ことに驚いたのは菖蒲の莖は有つても蕾がやうやく催ほしと云ふ位な體であつた事である。七月の中旬に菖蒲が咲かぬとは。

彼是する内持ち運ぶ杯盤　向つて箸を取れば空腹か中中うまい料理、魚は燒くにも煮るにも岩魚ばかり、其他は玉子ばかり、しかし岩魚の煮びたしから鹽燒、また茶碗蒸しに至るまで中中深山で得られる物とは思はれぬ計り、殊には戸隱固有といふ地瘤とか言ふ菌の一種、それが他國で迚も得られぬ物であつた。地瘤とは形ち土筆の大きなやう、蛇の脊に似た斑があつて其色は薄鼠、口へ入れればぬらついて一寸言へば蓴菜のやう、しかし美味であつた。是は地から取つて數時間立つと腐敗して虫になるとか、其ために戸隱より外へ持出す事も出來ず、長野にも亦無い程である。

地瘤の名は猶人が知らぬものの、蕎麥に至つては信濃の人で戸隱の名を知らぬ者は無いくらゐ、東京で更科が其名所と聞いて、さて其の土地へ行つて見れば更科などさしたる方では無いとの事であつた。蕎麥は縱六寸横四寸楕圓形の竹笊に揃へてならべあつた、決して東京などのやうに紊れさせては盛らず、奇麗にそろへて。山家の蕎麥には他でも間間この類がある。

元よりいづれも盛蕎麥で、種物は無く、下地汁の蕎麥に比して劣なのが殆んど玉に瑕の心持ち、藥味は葱に山

葵に乾海苔の揉んだの、是等でした。福武氏の常からの蕎麥黨、柴田氏もゆづらぬ相手、やゝ冷淡なのが私であつた。やがてぞろぞろざらざら、餘所目からは蕎麥の食べ方が一番をかしいもの——鼻息はあらくなる、目はすわつて、そして山葵の涙で一杯になる、一杯二杯と片付けて相手の兩雄も頻りにひしめいて居た。しかし何れも言葉ほどには行かず、强ひる、斷はるでしばらくは捫擇やがて食事も果てゝそれから一先休息とて給仕の女が蒲團小夜着など持たらしたのを幸ひ、しばらく横になつた。

二時半といふ頃起きて顏を洗ひ、いさゝか養つた勇氣を力にいよいよそれから奧の院まで登らうと決した。社司の久山義男氏は旅行中で不在、細君が見えたを幸ひ其趣きを話せば眉をひそめて今日の道は御わるうムいましやうとの言葉、しかし思ひ立つた矢竹心は中中之でしづまらず、笑つて決心の趣を答へるとそんならといつて子息に案內させてくれた。また舊のとほりの打扮、裏山を傳はつて山路に就けば何さまこたへたと言はうか、何と言はうか、其路のわるさ、意地わるさ、道といふよりは泥であつた。それもいいが山路の常とてすさまじい虻の攻撃、すこしでも油斷すれば震るへるばかりに嘖まれて跡には殘る疼痛と痒み、ぬかつて扇も團扇も忘れて詮無く辛くもはんけちを振るばかり、襟をはらへば足につく足を逐へば顏に來る、折角少しいい道を見付けても操り人形の眞似するやうに手足ふればよろめいて深みへ飛ご込むやら、まだまだ雨の無いのがせめても、是で雨に降られたらそれこそ大變、降らなくても虻の用心に安心しては四方を見られず、なる程厄介な山とつくづく思ひ知つた。山はますます登る斗り、いよいよ深く行けば行くほど何處が奧だかわからぬ程、道は左右に林と松ばかり何のながめも無く、やがて次第に行くに從つて山氣が凜然と肌にしみて來た。蓊鬱と茂つてほのぐらくなつたのはまた樅と松との森で、中を通して一條の道が有るばかり、森の奧には雜草や灌木が叢生して人跡はすこしも止

めず、處處足を奪ふやうに狂ひ立つて飛び流れる溪流の清さ。道の向ふに當つた見える一構への門、近よつて見れば荒れさびた隨神門で、見るから胸にとほる石の榜示杭に「下馬」とばかりに唯一句、將軍の背像は雨露と時代に剝落してゐたが其剝落が却つて物淒くなつて居た。空氣は最早ひやついて來て、汗は出ても氷のやう、それに深山ほとんど晦冥、口に言へぬ一種の臭がして、あはれその梢の上に大魔王でもゐるかの心持、少し咳でもすれば木靈の誤らず答へる、いよいよ淒味は加はつて、正にありあり神靈に撲たれるかの迷ひも出るばかりであつた。

戸隱は海面から五千尺の山。既に此下馬から絶頂までは遠くも無い事とて肌には異常な冷氣を覺えて來た。道の困難に津津と湧く汗、それも出るや否や冷汗と變つて身の內が熱して外が冷え言ふに言はれぬ心持、のみか山には天狗が棲むとの俗評、いはゆる天狗風が怒號して林立した梢を揉み立てる、橡などの枝葉は脆くも吹き折られて鳥の様に飛ぶ勢ひ、その淒じさ。草も次第に乏しくなり、艶款冬、獨活など嚴寒を物ともせぬのが多く生じて、やがて奥院に近づくに從ひ數十段出來てゐる石段の上に我物顏に生じてゐるのは樣樣な苔であつた。ただ木ばかりは密封して絶頂を示さず、わづかに泄れる處から仰ぎ眺むれば大盤石の屏風を建てたばかり、石段の盡きた處が卽ち奥院であつた。社殿物淒く寂寞として飾つてある一面の鏡の薄曇りしてゐるのが何やら靈氣を帶びたやう、魔風が時を賺さず吹き掛けて注連繩の定まる折も無いくらゐ、之に並んで左にある社は九頭龍神社と呼ぶ建物、九頭の蛇を祀つたものとか、蛇は今でも生きてゐて日日供御する趣きで、見れば社殿は岩窟にさしかけて出來、其前に九枚の土器が有り、蛇が通ふといふ廻廊が些しばかり出來てゐた。素より人を禁じて窟には近かせず人も此方から眺めるのみであるが、窟は三尺餘、隱隱として薄暗く爲つてゐた。

兩神社から左の手前、さし出た岩角に設けた一構への

家は即ち奥社を護る男のゐる處で、すべて岩を土臺とし、また岩を楯にして、一方社に向つた方は壁が岩、岩の窪みが即ち竈、入口は天日も洩れず殆んど暗夜、音なひの聲に立ち出て來たのはくくり袴をどつぷり穿いて惣髪に結つた男であつた。やがて客座とも言ふところに案內されて今一人の主の山守に應接された。

客座は八疊ばかりの座敷、岩角へさしぬけた一間で欄干が古風についてゐた。岩角の事ゆゑ眺めもいい事、其處で休んで遠近を望めば何がなし、ただ千里兩眼の中。

裏口から絶頂を仰げば、さてもよく峙つた事、只岩石の塊であつた。岩は妙義あたりの粘土の樣に凝つたやうな物とは違つて全くの石、それで一面用捨なく屹立してゐた。苔が滿ちて足はすべる、わづかにある岩間のひびが足の掛け處、手の入れ場所、道の無い處に道を認めるばかりの至り。絶頂は充分に見盡くすには一日かかるといふ險さ、雨も我も我もと峙つ岩石の種種さまざま。蟻のとわたりといふ道は幅僅に只の五寸。五寸の處が即ち峯の上、左右は底も知れぬ千尋の谷、一歩足をあやまてば身體は粉粉微塵。わづかに有る鐵綱が命の本、鐵綱が切れたら身は忽ち谷底の蛇の食ひ物である。ここに至るまでは勇氣も火と燃えて、ここで忽ち水と冷めるが常とは誰の心も同じものか？　いざや幅五寸の、苔にぬらつく自然の危橋を踏まうといふ處で誰がふるへずに居られやう。顫へを促がす寒氣の殘虐、七月の夏が猶冬であつた。見なければいいに其處が人情、つい谷底をすかし見れば亂雲白雪千年のままに殘つて珍らしい人間の生物に腮を張つて待つてゐるやう、風さへ烈しく足をとられる誰が立つてあるかれやう。馬琴が庚申山で現八が石橋をわたる處を叙し、やすやすそれを渡つて現八は全く柔術に長じてゐたよしを書いた、それも流石に思ひ當ること。ここに至つて這はずに居られず、更に安全を索めて道を馬乘りに跨つて擦り行かずに居られず、ここまで攀ぢてくる人すら少ない處、更にここで勇氣を挫かれて立歸る人が過半とか、思へば役行者が此處をも經て更に絶

頂の最絶頂の劍ヶ峯に高足駄の齒を鳴らした恐しさ。蟻のとわたりを渡つて氣のむくまゝ、嶮岨に打ち勝ち打ち勝つてかけ回れば越後の海もはや目に入つて而も信州甲州二國をつらぬいて富士も珍らしく見えるとは！　近く見れば飯綱、黑姫、妙高の諸山、遠く眺めれば越中、飛驒の連山、木曾の山山、われを見ろと言はぬばかり、一劍直ちに天宮を衝くのは鋒先山、一脈急に空を支へるのは御嶽山あちこちに間斷なく湧く亂雲の樣も種種さまざま、つかれて山の腰にもたれ掛かるもあり、怒つて大獸の牙を張つて走るのもあり、其間さても奇絶、塵に染まず、白けた峯の岩角に肩を怒らせて止つてゐた鷲が獲物を見てか、ここの天地を我物がほ、縱横無盡に飛びまはる造化一個の大觀！　ひるがへつて山の岩を仔細に尋ねれば、白玉の山をなした水晶窟、形ち怒つた獸王に似た獅子窟、天帝窟、大多利窟、仙人窟、大岩殿、歡喜窟、金剛窟、三世窟、威德窟、猿女窟、不動窟、西窟、長岩窟、三層窟、虛空窟、象が窟、五色窟、大隈窟、小隈窟中窟、鷲窟、利軍窟、金窟、藥師窟、日中窟、大盤窟、智慧窟、醍醐窟、梯漸窟、そして醍醐窟と藥師窟との間にあるのが天岩屋、すべて岩がすなはち窟、外には佛掌窟などと言ふのも有つて窟の數が大抵三十ばかり、思へばよく斯う揃つた物。

ああ山の奇といひ、海の妙といひ、自然は無心で作つたものがよくもかうまで完全なもの、近づいてつらつら見れば岩の色は矢張り鼠、それながら夏の三伏四人の着る肌着の色とは思はれぬ、さても天地秀靈の氣の凝つたもの！　岩角にただずめば千里一瞬の風が耳を擦つて天は何所まで連なる事かまた何所まで高いことか、素晴らしく大きな夕陽が天神の毬を抛つて、餘所に分かつ餘光は永久不變の天火の彩色り、咽喉わづか三寸、つんざける斗り叫んでも裳を玩ぶ風の囁きには勝てず、目を閉ぢてぢつと觀念、金輪を暗黑の皮裏に湧かせても終に消えかかる横雲の鍍金の色にさへ及ばぬ――さても偉人とは何のことか！　嘗て太平洋に向つて立つた時、成る程海

はこんな物かと坐ろに舌を卷いた、それと、同じ心持ちしかし今比較して考へれば海の大と山の大とは亦違つた所も有つた。思もふに日本の山は富士、富士でもない所で是程に考へるのはやや量の狹い至りながら思ひ切つて切り開けた天に向つた心持は要するに推せる事であらう。で、比較すれば海の大は快活に近く山の大は威嚴に傾いたやう、例すれば海は希臘の神らしく、山は印度の佛めいたやう、浪怒つて天を呑む所は壯なものの、一旦怒りが風と共に消えれば面は嬌羞をうつす鏡を拭つて平和優美、また愉快、之を山の千本の劍はげしく空を刺し千秋の靈氣を凝らして人を睨め下す所に比べて凄まじいのはそもそもどちら？

さして深い考へが催さぬものの、立ち去るのは殆んど強面いやう、夕暮に促がされて割愛する事となつた。山守は愛嬌のある男、若い時には江戸にも居たとか、ただ吾吾を駭ろかしたのは前に記した飯綱原の鳥居、その建立は殆んど十年前、で、立つた以來まだ一度も其山守は見ぬとのこと、卽ち山に起臥して些しも下界を踏まぬ譯質朴で金錢をむさぼらず、敝衣一枚が千年の褻、床の間に吊したものを何かと言へば、冬雪に山が埋つた時の用意に取つて置く獨活との事であつた。早足は引ずるやうやがて打ち連れて中社へ立ち歸る道、いづれも脊は中中折れたが、道で楢などから下る猿尾草など見れば飛び附いたり、下つたり、いよいよ草臥に掛けをした。中社の久山氏方へは轉げ込む、直ちに風呂にころげ込む、透きとほる湯に心氣全く恢復して一同沐浴を終つてやがて膳に向へば早燈光が點いた。夜は晝とかはつて料理、いづれも佳味であつた。が、外に猶一つ珍らしいものが有つた。卽ち給仕に出た處女、年は十七八、口重で容易に物を言はず、かざりも無く唐人髷を結んで飛白の單衣と赤縢の帶、質朴な、世にすれぬ氣色正にたつぷり、他日清潔な鄙の少女を詩か小說に使ふ時には之に因つても宜ささうな、笑顏を出すのは惜しいと言ふ體、一寸洩らしたと思ふ間にすら見直せば何處へやら、燃燒の早い花火と

いふ風で、ことに其名はさてもさても、何かと言へば「紅葉」と一言。要するに是は紅葉狩の故事から緣で命じた名、御前が鬼女かと言つてさへ泣き出さうかと危まれる程、

秋はまだ知らぬ深山の若もみぢいかなる風の色に染むらむ。

夜の寒さは骨に透つて、中宵目が覺めて廊下へ立ち出れば寢衣一枚なかなか凌ぎ切れず、淸溪の音は山風に通ひ分つて——その筈思へば身は五千尺も上の事。

朝景色のうるはしさは言葉に盡くされず、久山氏が貸してくれた羽織を引掛けて、ふたたび近處を散歩して富士などをさぐり眺めて立ち歸へつて食事につき、それからはトランプ又花がるた、また第一に志した所藏の寶物など見た。寶物は久山氏の家に預る分が長持に三つばかり、故さらに許されて吾吾の自由自在、見張りもせず勝手に引き出して自由に見せてくれた久山氏の深切は深く感謝する。實は何處の名所舊跡でも案内が錢を貪つて早口に由緒を說いて人に隔靴の感をいだかせるのは普通の事、此日自由に品に近づいて寫すことの出來たのは何よりも仕合はせであつた。寶物は多數で數へ切れぬものの其中での尤物を拔けば卽ち左の品品であつた。

一　持統天皇御所用犀角御笏（形は後世の笏より小形で切落しも少ない方）

二　後醍醐天皇宸翰

三　後陽成院懷紙（歌の題は重陽月詠菊有新花とあり歌は「うへかへてなをいくあきと契らまし、けふをはじめの白きくの花」但しこの假名は思ふ所あつて原文の儘にした）

四　正親町天皇和歌「みよしのの山の白雲つもるらしふる鄕さむくなりまさるなり」例の有名の御歌である）

五　後光嚴院歌切

六　定家卿式紙（たのみてし常盤の山も大空の霞にかすむ世にこそありけれ）

七　頼政和歌二首（是は取り落として忘れた）
八　武田信玄願狀（上杉に對して勝軍を戸隱山に祈つた漢文の願狀、年付は永祿元年戊午八月）
九　西山公書翰
十　德川秀忠和歌（題は逢不逢戀「千鳥なく澤邊のちはら風絶えて逢はでぞ歸る有明の月」）
十一　慈眼大師一行物（長生殿裡富春秋）
十二　烏丸光廣卿百人一首
十三　兆典司羅漢圖二幅
十四　探幽雪中文珠圖
十五　同人丸像（題歌ほのぼのは守澄親王）
十六　石川丈山贊堂武矦圖（畫は狩野安重）
十七　戸隱山紅葉狩繪卷物二卷（畫工筆者共に不分明）
其他には佐久間象山の旗、家綱將軍にはとりの畫など一寸珍らしい物が許多、外に刀劍類に至つては凄まじい物が無數であつた。

晝すこし過ぎてから名殘をしい山を下りはじめ、寶光社に立寄つた。それからの歸り道はいづれも前日と同樣であつた。山には種ケ池、涌池などいふ池もある趣であつたが吾吾は見なかつた。何にしろ、今思ひ出しても共凛然とした姿は目にも逼るああ秀靈の名山！

初期小說集

初期小説について

塩田良平

本集には「堅琴草紙」と「嘲戒小説天狗」とを收めた。著作年表にも明かなる如く、未だ問題とすべき作は多いが文學史的意義から謂つて、此二作が相當に重要性があるので若干說明しようと思ふ。

「堅琴草紙」美妙の小說として傳つてゐるものの中では最初のものである。（中學時代に書いてゐるが、それは殘つてゐない）。

是は明治十八年、彼が豫備門にゐた時紅葉等と一緒に初めて回覽雜誌を作つた。その回覽誌卽ち「我樂多文庫」の第一號（三月）より、回覽誌としての最後第八集まで斷續的に揭載されたものである。美妙自身が筆耕したもので書體は楷書である。

しかし、右「我樂多文庫」は某氏の秘藏本となつて容易に見るを得ないので、本書に收載の本文は、山田家所藏の原本に據つたものである。（現在は立命館大學の所藏にかかる。挿繪參照のこと）

原本といふのは、紫色の厚表紙をつけた假綴ぢの雜誌帳である。序文一丁、全編目錄二丁、列傳姓名錄半丁あつて和紙で毛筆で認めてある。

本文三十丁、四六判よりやゝ小型の洋罫紙を假綴ぢにして、ペン細字で表裏共に書きつけ一丁に約五百字以上ある。尙、表紙の裏面其他空間に樂書がある。「春のや主人批」などと書きつけてあるが、當時の文學青年が如何に春の屋に對して望む所があつたか、是を見ても判らう。勿論、坪內逍遙は右堅琴草紙に關しては知らなかつたさうである。

原本の「竪琴」と「我樂多文庫」所載のものとは、助詞其他多少異動がある。それを一々校合すると面白いのであるが、煩雜になるから中止した。

本書は未完物である。然るに、本間久雄氏は山田家より、更に此續編を發見されたといふ。首尾一貫すれば此上もない事と思つて、その續編の揭載を懇請したのであつたが、許可を得られなかつたのは殘念である。

尙、全編の梗概は左の如くである。

泰平の夢圓かな英倫（イングランド）に野心の日を注いだ海賊の枯樹嵐（ガスラム）は六千の配下を引き具して英倫（イングランド）に渡り國々を攻む。馬沙國（マアシヤ）はいち早く攻められむとしたので領主覇祿（バアレット）は國王に援助を乞ふ。この討手の役を買つて出た國王の弟亞弗勤（アルフレッド）は紅顏の美少年乍ら文武兩道に勝れた强者、之が兄葉策烈（エゼルレッド）王や覇祿を助けその危急を救ひ等して敵を亡す。意氣搖々としてがいせんしたが、すでに逃げのびた敵兵は外土（ワイト）の島におし渡りこれを占領せしことを忠臣雷怏の注進により知り同じく嗶門渡（エドマンド）等と策戰を講じて遂に禍根を後に殘さざるため再び敵を討ち枯樹嵐を亡す。此戰にて、それ〴〵功を奏した覇祿嗶門渡、雷怏は領地をさづけられる。

かくして海賊は平定したが國は疲弊し、飢饉、疫病はひどく人民を惱ましたので國王は之をひどく心痛し病を得て遂に崩御せらる。王弟亞弗勤（アルフレッド）は位につかれしが、海賊、枯樹嵐は再現し嗶門渡の城を攻む、今はのがれ難かることを豫知せし嗶門渡は妻子を城より落して自分はいさぎよく討死す。

落人となりし嗶門渡の遺族達は賊にとらへられたが、妻の苫草（トマサ）は刃にかゝり息子江守（エモリ）は大鷲にさらはれ、召使と娘美麗（メリイ）は辛じて逃げのびた。鷲にさらはれた江守は南幹（サウスランド）と云ふ地に配ばれ村民の恐るゝ神木槲の木の上に居たので誰も助けるものが無かつたが羅卓父（ロウドルフ）に助けられ子供同様に育てられた。

話代つて、靡門渡の城は落ち揶傘波蘭(ノツチユムバアランド)と約克も兵火にかゝり馬沙も攻めらる揶傘波蘭領主雷伕は病み、手勢も少く忠臣共かくの如くなればさすがの亞弗勤も嗟嘆し、之に反して敵は益々力を得今はせんかたなく亞弗勤は近臣花離(ヘアリイ)と唯二人凡人姿に身をやつし都を落ちのび亞勢尼(アゼルニ)の百姓小屋に住む波祿紀(ヘロルド)にかくまはる。

この「堅琴草紙」は、文章が讀み本の七五調で、全編の體裁、仕組の段取まで全く讀み本式であり、美妙の過去の文學的教養の影響下にある。從つて、未だ、彼の先驅的な功績は此編には見出されないのである。

しかし、文章は甚だ達者で且筋も波瀾に富んでゐる。面白いといふ點から見れば、美妙の作品中でも屈指のものであらう。殊に題材がエキゾティックである。當時十八歳の少年が是だけの業績をなし得た事は驚くべきことである。しかし、彼が二世馬琴を詐稱し、美少年錄に倣つて「美少年姿(わかしゆすがた)」を連載したり、馬琴の摸倣をしてゐたのは僅かの間であつた。

「嘲戒小說天狗」「堅琴草紙」を馬琴影響作と見ればこれは傳統破壞作である。彼は此編に於て二つの方向から傳統文學を破らうとしてゐる。一つは、寫實的立場に於て、他は文章の革新的立場に於てゞある。

此作は、「我樂多文庫」十九年十一月號から連載された。既に活版刷になつてからである。

この主人公の意外は、須藤南翠を目標としたものと謂はれてゐる。讀み本趣味から中本趣味に移つたものとも考へられるが、既成作家に對する若々しい反撃精神が漲つてゐる、是も未完物であるが、內容は次の如きものである。

熱海の宿屋華高屋に、鄂須月五郎(號、意外)といふ作家が妻と同伴で來て、博學ぶつてテムペストなどを讀んで四邊に聞かせる。そこへ、宿に盜賊が入つていざこざが出來る、といふ所までの未完物である。

言文一致體の小說の創始者は誰かといふ問題は異論が多いが、言文一致の意圖は確かに長谷川二葉亭の方が半年許

り早く、且起稿してゐるのであるが、發表はされなかつた。從つて、最初に發表された言文一致の小說としては、やはり美妙の「小說天狗」を選ぶべきであらう。

もつとも、この「小說天狗」は純粹の言文一致ではないといふ說もあるが、よく分析して見れば、口語動詞の終止形を用ゐてゐるし、全文殆んど句讀點なしの古風のスタイルでこそあれ、調子は全く近代口語文になつてゐる。後、これは「夏木立」といふ單行本中に採錄され、訂正されて「柿山伏」と改題されてゐる。場所は、箱根に改まり、テムペストがミルトンの里しだすに變つてゐる外、文章はもつと積極的な言文一致になつてゐる。

美妙は、この「小說天狗」を出發點とし、急角度を以て言文一致體小說に旋回した。かくして、自ら言文一致の小說と名乘つて堂々と發表したのが、二十年七月雜誌「以良都女」に載せた「風琴調一節」である。是も未完で終つたが、此小說に至ると全く口語文體であり、近代小說の源泉であるといふ感が深い。

とにかく、美妙の文學的生涯は、この「竪琴草紙」的なるものと、「小說天狗」的なるものとの鬪ひで發展して行つたと見て差支へない。その點に於いて、此二作は美妙研究家にとつては忘るべからざるものである。

竪琴草紙序

白虎通に曰く。琴ハ禁なり。邪心を禁止し。以て人心を正すや。此頃稗史野乘の新作。世に出るもの。池の蛙の私利に鳴き。一雨毎に涌出す。數限はあらねども、偸盜里俠の傳ならずば。可愛可憎の痴情談。切た張たの血塗は。黴の生たる古趣向。ところを見せ新しく。竪琴のいと面白く。横の文字なる正史の骨に。肉を附けたる愉々快談。アルフレッドの一代記。倒れし大厦を獨木もて繋止めし英雄が。哀別離苦の血の雨を。ふらす廣野の大激戰。袖を絞らす愁歎場。拳を握る立廻り。童蒙婦女子に解し易く。されど淫術の心を禁止し。人意を快にする墨の。濃き交情の友垣が。備に奏む詞なく。伯牙が知己をミづから許し。をこがましくも端書して。童女童男達の御愛顧を。柱と頼ミ倉卒に。桐にはあらで櫻木に。上せし日より四方にひゞく。音色よき御評判を願まつる。

はづきの中つかた　柳翠花紅樓のあるじ

半可通人しるす

竪琴草紙全編總目錄

竪琴草紙列傳姓名目錄

【帝王】葉波多　葉策幹　葉策伯　葉策發　葉策烈　亞弗勒　該遨　灑兒曼

【將士】覇綠　疃門度　雷沃　葉拉　江守　建業　參遥　枯樹嵐　行髮　甦賚　花羅　棘那

【婦人】苫草　美麗　璆琳　優斌　愛妥　葉策水

【村夫】羅卓夫　芙朗　波綠舵

右通計二十八名　其他雜卒莊客奴隷名字佚者載悉皆省焉

竪琴草紙

東京　二世曲亭馬琴編
春のや批

第一回　標幟を名として海賊英倫を使す　虚誕を信じて王弟英里に赴く

そも〳〵英倫と呼做すは佛蘭西國の北の方に海を隔てし島國なり昔はその民野蠻にして取るに足らぬ樣なりしも羅馬の大將該撒がひとたび軍を推進めて蠻民とたゝかひつ遂に平定したりしより日を逐ふて開け行き後には羅馬も衰へて統御昔日に事異り有れども無きが如きにぞ忽ち羈制を脱し去り一箇獨立とハなるものから内地ハ數部に分裂し北に揶朶蘭あり南にあたりて威塞あり二國の間に馬沙あり皆是屈指の大國にして自餘の小國も類多く互に鄰國の隙を窺ひいハゆる戰國の樣をなせしも分れて再び一に歸するハ天の常數なりとかや紀元八百年代に威塞の王にし一葉波多と呼ばるゝ王あり年弱かりしころほひにハ佛蘭西にも遊歴し彼の智勇にきこえたる灑兒曼帝とも疎からず友垣さへ結びたれバ尋常の王には似ず英武絶倫の御性なりかゝれば威塞の王位に在りて唯一國に君臨するをば心に快しとハ爲したまハずつひに多年の辛苦の後兵を起して諸王と戰ひ瞬間に英倫の諸國を從給ひつゝ殘れる敵もあらずなりて全國一定したりしかバ乃ち一天の王と仰がれ馬沙等の舊王をば故意と舊土の領主たらしめ仁政隈もなきものから諸王は感涙に咽びつゝあだしごゝろも無かりけりかくてのち葉波

多は久く王位に在せしのちに崩れさせ給ひしかば唯一人の御子なる葉策幹王位を繼ぎ四男一女を生ましたまふ第一の御子葉策伯第二の御子葉策發は葉策幹年老て位を去らせ給ふ折引續きて王となれとも年永くは在しまさず第三の御子葉策烈并に第四の御子亞弗勒は各兄王の後に立ちて王位を踐ませ給ひけり又一人の姫君なる葉策水は齡二八といふ頃ほひに馬沙の領主なる覇祿が方に嫁らせゐに凡此等の事どもは皆是後の談ながら筆の序に記すのみされば英倫の王位をば葉策幹が去賜ひしより第一第二の御子達相續きて繼ぎたまひ遂に第三の御子なる葉策烈に及ぶほどに忽一條の殃禍起れりことのもとをたづぬるに此頃丁抹の海邊に枯樹嵐てふ海賊ありそが父なりける辣那も極めて猛き賊にして一千餘人の配下を有ち近海を航行りて不法の所業を行へども其勢猖獗なれば國王も之を制しかたく其爲すところに任しゝより辣那ハいよ〳〵いきほひつきつひに佛蘭西に亂入して多く鹵掠を働きつゝ數艘の舟に贓物を犇々と積載して故鄉にかへる途次にハかに颶風に遮られ船は名殘なく壞られて身一つバかりまぬかれて挪傘波蘭の海岸に辛くたゞよひつきしより里の家に推入りて衣許多奪ひしかバやがて挪傘波蘭なる領主葉拉に搦捕られ土窟に囚せられて蛇責にして殺されたり斯りしほどに枯樹嵐は己が父積惡の報にてかく成果てしとは毫思はず且はかね〴〵英倫の國富み昌ゆるといふよしを人傳にさへ聞くものから爭で之に侵入して隨意に東西を掠め機會好かりなば全國さへ渾て我手に取入れて之が王ともなりなむと最淺墓にも思初め事の便宜を籌れども彼の佛蘭西に攻入りて歸途に颶風に出逢ひつ命を落さず辛くして枯樹嵐が方に歸來りし配下は僅に百人に過ぎず之に辣那には從はで枯樹嵐が方に殘りたる配下の數を加ふるときは漸く三百人を超ゆるのみ奈如とも詮術なければ思はず日をば暮らすほどに此賊惡運強きものかさせる故とてあらざれども新に

配下に加はるもの年を逐ふて增加はり枯樹嵐三十歳になれるとき卽八百六十七年十一月の末に至りては配下の總數六千に餘りて漸熾になるものから枯樹嵐心に喜びて今はしも心安しいでや日來より念ひたる心の望を果さばやと頓て配下を召集へて緈由を解示し翌年六月に英倫に押寄せて挪傘波蘭には恨もあれば先是より居るべしと嚴に順序を定め準備何吳となく爲すほどに早くも歳は過行きて瞬間に春も過ぎ五月の末となりければ軈て英倫を指して出帆す船數すべて百五十餘艘每艘兵四十名各々劍戟を赫かして順風に乘し走らせつ思ふよりは早く來て其月二十六日に挪傘波蘭に到着し新壌に陣を占め勢猛く攻入りて當るに任して亂暴し猖獗いとも極まりたり然れば此時領主なる葉拉は先頃物故りて其跡を續ぐ子なければ馬沙の領主覇祿が假に此處をも統轄して一人の鎭將は置きしかども斯く枯樹嵐が押寄せたる事急にして意外にあり遮莫命を上に受けて其任に當りたれば何か猶豫のあるべきぞ敵寄來ぬと聞くよりも直に立ちて兵を集へ簇る枯樹嵐が軍に當り必死となりて拒けども遽なれば事齟齬ひて戰ふ毎に敗れを取り終に力も盡果てそこに討死したるより挪傘波蘭一國はすべて枯樹嵐が手に落ちて勢愈振ふものから這度は南の方に下りて馬沙を略らんと圖るよし覇祿に聞えしかば一度ならず二度までも驚呆れて分くよしなく如何にせましと躊躇しも然るべき方法の出るにあらねば緈趣恁々と威塞に在すなる葉策烈に聞上げ救ひの兵を請ひければ葉策烈も不慮の事に打驚けども叉更に捨置難き大事なれば諸臣を集へて評議あれども何れも倉卒に驚くのみ唯默然たるのみなれば葉策烈も止を得ず使を馳せて弟君亞弗勒を召賜ひ枯樹嵐俄に寄來りて挪傘波蘭を奪略し叉もや馬沙を侵さんと圖れるよしの本末を遣もなく說示し卿の意見は甚麼ぞや思ふくまをば述賜へと思入りてぞ問賜ふ此時亞弗勒は年いまだ十九歳に在はせど

も稚き頃より文武の道を夜となく日となく修賜ひて傍琴を奏づるにも其奥妙に至賜ひ夜を觀るに明察にして事を裁くに銜寃を致さぬ古今無双の君なれば聞くと齊しく且憂ひ且憤遂に堪賜はず容を改め對ふるやう誠は不慮の珍事なれば手を措くに處なきは理無きに候はねど彼の枯樹嵐は強敵なり尋常をもて論ずべからずさばれ之を打捨置けず一は萬民の大患にして一は國威の汚辱なるに默々として誰かは止まん所謂誰彼を撰まんより唯討手の責任は某に仰させたまへ不肖なれども愛國の利劍を揮ひ公道の鐵楯持ちて馳向ひ力を盡して敗らんに克たざる事の候べきと憚る色なく述賜ふに葉策烈は感嘆の聲を霎時は絶賜はず稍ありて宣ふ樣勇ましき哉亞弗勒業已に卿の同意を得たるに今更遲々する處かハ朕も卿ともろともに進ミて馬沙の方に至り覇祿を相助けて賊の首領を獲つへけれとて軈て亞弗勒に暇を賜ひて有司に命じ親征の用意をかにかくと整へしめ猶日となく夜となく亞弗勒を初めとして諸臣を集へて種々の評議もあれとも是もまた敵の内地に入らさるさきに迎撃つべき事よりほかは策略もあらざるにぞ愈親征の日を急がせたまひ召に應じて集ひたる兵の數を改むるに凖て七千人がほど有れば乃之を三分し歩騎三千を兵馬の司雷沃に打委し威塞を守らしめ騎兵六百と歩兵四百合せて一千の兵を亞弗勒率ゐつゝ葉策烈は歩騎すべて三千を引率し六月十二日の黎明に威塞を出發し馬沙を指して行くほどに十五日のあかつきにハ既に馬沙の國中なる履雪多まで來りたまへバ馬沙の領主覇祿は這回葉策烈兄弟が親救に來賜ふよし報知によりて知るものから驚喜びて妻なりける葉策水と俱に出迎へて互に口誼終りし末葉策烈は倚かにかくと賊軍の模樣をば覇祿に問賜ふに出没不測なるよしにて頻に其率うなる兵の數少きを喞つにぞ葉策烈は領賜ひて朕もとよりさるよしのありもやせんと心附きて三千人を率連れたれば一千人を分割ちてそ

を和殿に借すべしとて頓て之を渡したまふに覇禄はいよ〳〵喜び斯くては臣等の率うる處すべて一千六百を超ゆれば心安く候と喜びを述る折しもあれ豫て亞弗勒が分散らしゝ斥候の一人馳來りて亞弗勒に聞ゆるやう多少は具詳に候はねど賊の一軍五四河より茨里城に乘入りて見る〳〵彼處を奪取り夫より直に是方を指して撃入らんづる準備の爲めに近鄕の農家を荒して糧を取入れ候と息吻あへず申すにぞ咸々眼と眼を見合すばかり頓には思案も出ざりし中に獨亞弗勒は且嘆じ且勇ミて誠に出沒不測の名の僞ならぬは今こそ知りたれ願ふに彼の枯樹嵐は唯尋常の賊ならず配下の多きと己が知謀と此二ツに依憑ミて大志を懷く者にぞあらん侮がたき敵なれども其居る處は定ならず打つに由なく攻るに便なく來るを待つより詮術なし然はあれども今安に阿容々々として止まるは怯れしに似て却に影護く候へば此より某は引返して直に茨里に馳向ひて彼處の賊の其力未成らざる前に撃たば御心安く候ふべしと最勇ましくも請賜ふに葉窠烈は打案じて機會歹かりと思へども既に倫敦を拔きしといへば是も捨がたき敵なるに餘人に任して敗られなバ愈那に勢附きて後悔其處に立難からんと早くも分別定まりたまへば然らば御身を煩はさん疾く馳向ひ賜へかしと宣ふ言葉に亞弗勒は拜謝して暇乞し一千人を引率して茨里が方へと急がせ賜ひて城下近く來て見れば賊は既に兵糧を取終れると覺しくて堅く城門を鎖し固めて唯數十の旗幟章風に飜へれるのミなれば亞弗勒は城外の郊に馬を駐めさして二三名の斥候を放ちて城の樣子を探らするに霎時にして歸り來り城中なる賊兵は如何になしけん靜然にて些も音の候はずといふに亞弗勒は怪ミてそは不思議なる事どもなり兎にも角にも攻試んと言ひつゝ士卒にも令を傳へ徐々と寄近づき鯨波を作る事三度に及べど城には何の應もなければ愈心に誇りて門を破つて機入れば這はそもいかに城中には敵一人もあらずして只是

處彼處の木幹に旗を結びしのミなれば皆々呆れ驚きて偖は欺く處となりしか鈍ましさよと呟くのみ亞弗勒も憖に敵の虚聲に誘はれて可惜隙をば費すものから今となりては兒王なる葉策烈の御身の上も心元なきかぎりなりよしなき事をしてけりと悔ゆればいとゞ胸騒がれて心憂に堪へざれば兵們をも慰めて再軍を引返し葉策烈に追着かんと頻に急ぎたまひけり

第二回 美少年孤軍急を救ふ 英國王一箭賊を斃す

案下某生再說葉策烈は亞弗勒が荚里なる賊兵を撃たんとて已に出行たる後に覇祿とも談合して賊を迎撃つべしとて乃覇祿ともろともに二隊の軍を推並べて北の方に進ませ賜ひつ其日の午のころほひには早く斯蛙居まで來賜ふに賊の大將枯樹嵐は早く之を伺知りて亞弗勒が葉策烈に伴なひて來るときは味方の不便となりぬべしと思へば態と百人有餘の兵に吩咐て五四河より荚里に打入り農民の粟を奪ひ城には虚勢を張りおきて速に歸來ね遲々なせそと戒めて頓て一人の部將をそへて出遣りたりければ偖こそ件の兵は旨々と成遂せて亞弗勒を誘出し葉策烈と離せしなれ然るからに枯樹嵐は謀計圖にあたりて亞弗勒を遠ざけて葉策烈を助くるものは唯覇祿のミとなりしに心喜び急かはしく斥候を放ちて探するに葉策烈は早既に覇祿を從がへて此方を指して來れるよし精確に得知れたるものからさらば出でよと六千の兵を引率して徐々と南を指して行くものから葉策烈も枯樹嵐が出來ぬと聞しより足驅を早めて進ませ賜ひて只見れば果して北の方より一隊の賊兵とも整々として列を亂さず烟嵐を捲て來るにぞすハや彼こそ賊兵なれ打見るところをもてすれば味方より大勢なるに中割られなば諡なからん兵們隊伍な亂しぞとて轡頭を差揃へ蘂紛徼塵と迎撃つ這方ハさしも葉策烈の訓練せし精兵なり那方

もきこえし枯樹嵐が手に隨ふ鋭兵なり成敗熟否ハけふにありと互に心に思ふものから日來よりハ勇氣も増し力も出でゝ戰ます怯まず早夕ぐれに近づけとも勝負更に果しあらねバ葉策烈はいらだちて騎りたる馬も懲るゝまでに嗚叫んで戰ふにぞ枯樹嵐が左の一陣堪へ難て崩立つを見るより味方ハ勝に乗りなほ奮撃するそのをりしも賊の遊軍一千餘騎いつかほどにか忍びけん横方より葉策烈が麾下目注けて衝入りたり咄嗟とばかり不慮の事に駭きながらも葉策烈が將士ハ更なり殘兵まで王擊たせじと霎時がほどは防戰力を盡すといへども味方ハすでに疲憊たり敵ハ新手の勁兵なれば鋒先强く勢猛く息をも呼吸せず揉立てつまたゝくひまに擊るゝもの幾人といふ數を知らずされど葉策烈主從ら今ハ覺悟を決たまひて二千騎有餘の殘兵を百騎の備に立直し敵軍を引請々々必死となりて戰ふものから前隊ハまた是のほどに賊の後陣とわたりあひ思ハず深入りしたりかバ遁れ目にそれと葉策烈が危ふくなりしを見るといへども引返すに遑あらず心も空になるほどに賊の頭人枯樹嵐は是體裁に力を得てたちまち士卒に下知を傳へ葉策烈のミならず霸祿が兵をさへ十重二十重に圍ミたるいとも危きかぎりなりかゝるところに賊の軍中俄にミだれさわぐていにて敵來りぬと呼ばる聲いと囂くきこえければ其意を知らねど葉策烈もまた霸祿も心裡に五分の勇を惹起し尚一心に拒ぐほどにたちまち敵をかけちらし進れいでたる若武者あり今其人を形容して爰に言ハんか伊見る齢ハ二十をも超えず紅梅の顏鳳鑾の眉耳厚くして眸清く唇丹らして齒皓かり頭には紫銅の重に銀の鋲打たる冑を戴き右手には長鎗を挾持ちたる左手の旗に二尺ばかりの鋼鐵製の持楯をたづさへ太く逞げなる栗毛の馬に泰然として打跨れりその秀でたること言葉に盡すべくもあらずその雅なること筆もて寫すもかたかるべし正にこれ一箇の美少年天より降りしか地より湧きしかと思ふばかりの

樣にしあれば葉策烈も覇祿もひとしくともに打該き特に枯樹嵐が兵は這ハ何物といふのミにて茫然として目戍りて居り當下若武者遠近を佶と見亘して呼ばるやう抑我を誰とかする當國英倫の一人の王葉策烈が次の弟亞弗勒なるを知らざるや今朝料らずも汝等が謀計に導かれて茨里の城に驅向かひしに城には一人の賊もなければ欺かれしと知るものから兒王の御身上もいといと心元なければたゞちに其處より引返し驅歸りたる甲斐ありて此處に泚むを得たりしかば扨こそ膽ハ潰れつらめ寄せたる其手の頭人を枯樹嵐と見るハ僻眼歟今こそ現ハせ亞弗勒が武勇の程を受けても見よやと勢猛く罵りて千名許の手兵を前後にたゝせて馬に拍れ從横無碍に斫立れバ賊の軍勢愈驚き思はず其儘躊躇ふを枯樹嵐は見て冷笑ひ叔は汝が亞弗勒か聞しにまさる敏捷さよ遮莫士卒も少き只一人の少年なるを斃すに難き事やはある兵們猶豫することかはと聲振揚げて下知すれば兵們は力を得て咄とばかりに鯨波を作りて又々之をも圍まんとす然れば亞弗勒は今こそ貴き機會なれと思ふよりして一層の勇氣を增して手兵に下知を傳ふる必死の掛聲前後に當る衝撃突戰向ふべくもあらざれば言甲斐なくも賊兵は稍亂立つ折しもあれ遙に那邊に闘まれたる馬沙の領主覇祿も今此樣に時を得て士卒に下知する聲もはげしく賊は足並亂れたるぞ此闘なぬかしぞ兵們崩せよやツと呼はれば勵まされたる士卒の面々應へもあへず敵中に面もふらず衝入たる勢斯の如くなれば難なく路の開けしにぞ喜び勇む覇祿は遙那方に賊の大將枯樹嵐が在るを見て佗と睨まへつゝ聲高やかに思知りしか奸賊輩我は馬沙の領主なる覇祿にこそあんなれ望む敵手は其將枯樹嵐其處な退きぞと罵りつゝ無二無三に驅回れば賊兵愈膽を喪ひ茫然として知踏ほどに皆紛々と觸倒され矢庭に命を殞すもの三四十人に及びけり斯りしほどに葉策烈は此體裁を瞻はして一度は訝りつ一度ハ喜びつ早全

勝を得し心地して心切に勇むものから疲勞も忘れ氣力も出で殘兵を罵聲まして力を極めて研立れば麾下近く攻入りける賊兵も今ハ再燃りし勇氣には敵しかたく脆くも其まゝ引退ぞき足並揃ハず枯樹嵐が陣に閃入ろほどに枯樹嵐が兵卒も大かた亂れたるものなれば爭で是に堪ふべき風に吹かれし秋の葉の東西南北處を嫌はず思ひ〳〵に散亂して撃たるゝもあり逃ぐるもあり或は追來る兵を迎へて降るも最多かれバ枯樹嵐は齒噛をなし這は奇怪なり言甲斐なし敵は烏合の小勢なるに心臆する事やハある引返さずや戰はずや笑を貽すを知らざるややよ兵門と敦圍けども大勢の亂れしことなれバ絲棼を治むるよりも難く側を見れバ味方は既に千騎ばかり殘れるのミ覇禄が軍兵は勢こミて競蒐るに獲の大言には似もやらず這は叶はじと馬乗返して田ともいはず道ともいはず殘兵とゝもに逃れゆくを亞弗勒は呼懸々々覇禄と兵を一ツに合せ餘すな漏らすなと追ふほどに流石に長き秦の日なが

ら日は漸西に落ち只一痕の新月の天に印せるのミなれバ跡を蹤くるにいと便なく兎角する内そが蹤跡を遂に見失ひたりけるにぞ亞弗勒は大に焦燥ち那奴あればこそ我國も民諸共に惱めるなれさるを此儘逃さんや兵們松火を燃しねと急がし立つる其折から後邊に當りて囂塵と人馬の諸聲音すなり那誰時の事なれば敵か味方か確ならねど軍兵なるは疑無ければ亞弗勒を止むを得ず心ならねど其方に向ひて士卒を揃へて待賜ひて稍近づく比にそが隊の中よりして一騎の大將現出るを眸を凝して打瞻遣れば是即別人ならず葉策烈王なりければ亞弗勒は心落居て馬を下り跪き敵は手剛く候ひしも幸ひに敗走して兄王の御身にも恙も在さで最愛たしと申すを葉策烈は聞あへず不措賜へ其言葉は朕の言ふべき事なりかし寔にハ好機會に歸賜ひて朕危難を救はれし事謝するも中々に悉されず其ハ兎まれ角もあれ士卒も既に疲勞たれば疾く休らはすべきにさハあらで急がはしげなる體

裁は如何なる故ぞ聞かまほしと宣はするにぞ亞弗勒さん候仰は洵に然る事ながら奈何せん彼の枯樹嵐が踪跡を見失ひたりしかば時を移さず索め出し永く禍根を斷たんとて斯くは急がせ候ひぬ事急なれば長くは白さじ允させたまへと言ふより早く片足の鐙蹈掛けて馬に騎らまく爲賜ふを葉策烈は又押止め猶は卿の急賜ふは然るゆゑよしのありての事かさらば朕に心得あり待賜へと言ひつゝもそれと近臣に指揮して取出さして示させたまふ一箇の首級は則是紛ふべくもあらぬ枯樹嵐なりしかもいまだ血をも拭はず斬たるまゝの物なれば實にもと思へど疑惑の陰は晴れぬ薄月夜迷はじものと跡を跟け自ら追ひつ來にたるを後に殘りし葉策烈が手にわたりしは心得ずとはいへ正しきものなるを故こそあらめと打點頭擧取りたりし處と樣とを願ふは具に告げさせたまへと眉根を顰めて問賜ふに葉策烈はさもこそと牀几を其處に据さしてさればこそ其事なれさきに卿が這奴を追ひて後そも見ずに覇祿と打連立ちて行賜へバ朕も續きて行なんとせしに甦養と呼べる雜兵ありと宣ひながら後に控へし雜兵甦養を召出して亞弗勒に引合せ是は北國の者のよしにて去歲の暮のころほひより朕が雜兵になりしものにて朕が御身と覇勒の跡よりつゞき行なまくせしに慌げに走來て朕が方に申すやう是は御手の雜兵にて甦養と呼ばるゝ者に候今し亞弗勒君達の追はせたまふ枯樹嵐は眞の枯樹嵐ならず面體似たるを撰び立てゝ同じ打扮なさしめたる敵の謀計にて候なりされば眞の枯樹嵐はあれ覩はせ彼處なる枝最繁き落葉松の木立の陰に身を寄して五名ばかりの配下とゝもに潛ミて行くを小可只今明晰に覓めて候へば那へ御越ならせたまへと息も吻あへず語りければ朕は彼にうちむかひ什麼汝はいかにしてそをバ眞の枯樹嵐なりと覓めたりやと詰るを待たで甦養は再押返しいまだ具に聞召さねバ御疑はざる事ながら小可さきに合戰の折かの木立のほと

りにて從獲を股に負ひたれば痛苦に得堪へず倒れしを味方も賊も戰の最中にて候ひければ誰とて咎むるものもなく兎角して承はるに味方勝利の趣なれば喜ばしやと苦痛も忘れ僅に歩行を移すほどに只見る一人の武士あり鹿毛の馬に打騎たる身裝も賤からず五名許の從者と見ゆると連立ちて歩ませ來つ頻に後邊を見返る樣は問はでもしるき落人たらんと思ふものから要時が榊木蔭に隱匿て近づくまゝに熟と見れバ面體も年程も嘗て小可が丁抹國にて見し枯樹嵐に毫遽はずしかのミならず左喩に大きやかなる黒子のあるも亦是彼に見覺あり這は好鳥のかゝりたれ打取て恩賞にあづからばやとは思へども彼方ハ六人此方は單身危きところに近づきて此身を失ひ那奴をも取逃しなば詮無かり今は本陣に聞ゆるより他には手段とてもあらず然なり然なりと默頭て那奴が行過るを待着けて力の限り走參りさてこそきこえ候なれと詳か明に得知れしかばさらば運々する處にあらずと遶卽

甦賽を嚮導にたゝせ件の處に行きて見ればげに數町の外に人の行けり是なんめりと些も騒がず二十有餘の兵に行路を阻よとつかハすを彼等は早く曉りけん馬を早めて逃出すにぞ斯くてはたとひ兵衛が息をも吻かで走るとも阻むる事は難かるべきに取逃しなバ口惜し日來學びし弓術も用は斯る折なりと眹は心決せしかば從士に持たしゝ團木弓を取るより早く矢を注へきりきりと引しぼりて狙ひ固めて發と射る思ふ矢坪は愆たず枯樹嵐が背の方鎧の眞中打碎きて胸まで愚差と串きたる究所の重創に何かハ堪らん馬より撞と落てけり此體裁に味方の兵は早簇々と走寄りて從者をさへに擒にしたる有樣はまづ此の如しされば朝の違ハまくせしは尋常の敵にはあらずかし心を鎮めて聞賜へといと詳細に述べ給ふ言葉も智慧もすぐれたる擧動はげに亞弗勒が見とこそは知られたれ。

第三回

村民功を樹てゝ部將を迎ふ
國王議を變ひて計策を問ふ

始終を聞て亞弗勒もまた覇祿も心裡に扨は鏡くも計られしか心胸かごりきと且驚き且葉策烈が擧動の意表に出しに感嘆して亞弗勒のたまふやう卿によりて始めて知りぬ今暫時遲かりせば益なき事に拘泥て却に士卒にも可惜疲勞を増させなんさるにても容易からぬ那強賊の一戰に首を授けたりしこと喜悅何か及ぶべきと慇懃に述賜ふを葉策烈は打消賜ひあな卿が謙退なる凡這度の戰捷は是卿の賜なり其故をいかにといふに曩に戰場にのぞミし時初度の勝利に心弛ミ思はず隊伍を亂せしに乘入る一隊の賊軍は聞えし敵の精兵なれば打ても突けども物ともせず暫時がほどに味方の者は或はうたれ或に免れ殘罕なになるものから朕が最後も近づきぬと既に覺悟を極めし折柄料らずも卿の扶けられしより兵氣勢度立反りて遂に斯る勝を得たりもしかのをりに卿あらずバ朕は更なり父祖より受けし國家をさへも失ふも料りがたき樣なるを誠に恩惠に謝するにたへたり苦からずバ茨里より卿が此處まで馳歸り賊陣を崩したる其光景を告賜へ甚麼々々と問賜へば亞弗勒も拜謝して是より茨里に馳向ひて欺かれたる事由を詳細に申つゝ其言訖りて又いふやう斯くて臣等はいとゞしく這方の勝負心元なく兵をも憩へずして喘々先のほど漸く歸着きて見るに早戰は最中にて矢叫の音鯨波の聲耳を劈くばかりなればすはやと噪ぐ胸を鎭めて先遠近を見亘せども兄王には何處に在すや御所在も更に得知れず遙望むところに因れば味方の旗色最惡かり轍鮒の急を救はずば市に問ふも何にかせん要こそあれと牽來し兵們を督責して勢篭みて敵の眞中突入る鋒先に辛くして其處なる一陣衝崩せば皆噪ぐ態色に這は面白しと奮擊して遙に望む那方にあたりて一旒の牙旗翩飜たりすは兄王は那處にこそと思ふに勇ミて聲振立て自名乘りて欺

きつ漸今の全捷を得て望は足りて候ひぬさりとはいへど全く是れ王の御徳高けれバ天鑑空からざる所詢に畏く候と功には誇らぬ軍氣の宏大淸けき姿も光ある古今無双の一明主是や千歳の鑑の月雲を漏出で皎然たりされば葉策烈を初めとして並居る將士に至るまで其欽捷と奇才あるに驚かざる者はなく葉策烈もなほかにかくと言葉盡して勞賜ひて更に又馬沙の領主覇祿を召賜ひて其擧動をも賞めさせられ而してまた時を移さず兵卒を引率して直に約克に趣きて殘れる敵し有りもせバ圖を拔さずて敗りねと最慇懃に分付賜ふに覇祿は唯々として其命を承り約克に向て行しかバ葉策烈は其他の事を二三の將士に命賜ひ一園亞弗勒と諸共に威塞に歸りたまふに畔門度と雷沃は傳離たる面色にて葉策烈と亞弗勒が還らせたまふと其が前に這回の勝利を祝ぎて偖雷沃が申す樣往日王には賊兵を迎擊たんと出させたまひし其次の日の夜半の頃賊兵俄に外土の島に簇々と押上りて矢庭に那處を占領し例の如く此國に打入らんづる由聞えしかば畔門度は打聞て某に議するやう我們天子の御命を以て此國を守るの身なるに聞くが如くば賊の來襲捨置難き所なり夜戰の事なれバ注進の者も敵の多少を明断には知らねども頼ふに賊は與と頼む約克擲傘哦蘭を略られしとて必や我王の御軍の方に力を盡めて擊破らんと圖るなるべし是將推量に違はずば外土に寄來し賊軍はさばかりの多勢にはあらざらん和殿は此處の城壘を固めて非常に備へたまへ某は兵五百をもて賊兵を迎ふべし此議に任せたびてんやと他事もなく言ふ言の理なるに某も憖に引留めんも不忠なれば隨卽五百人の兵を畔門度に授與へ出しやり候ひしに賊は外土より其儘に上陸はせで濱邊を沿ひ續散次に上りしかば畔門度は霎時も擬議せず直に其處に馳着きて伏兵をもて最容易く賊軍を擊破り遂に之を鏖にして偖其勢を閲するに僅に二百人に過ぎねば乃皆斬首して齎歸候

ひぬされば嘩門度が料りところ違はずして斯全勝を得たしかば再寄する敵もなく今まで無事に候ひぬと言ひつゝ備も斬獲たる首級三百を其まゝに葉策烈等に示すになん葉策烈も亞弗勒も驚嘆せずといふことなく親語を賜はりて嘩門度をも雷沃をも慰められて御暇を賜ひにければ二人とも有難しと言受してやがて其處を退出けり斯て六七日を經るほどに覇祿は手勢を引連れ威塞に歸來て葉策烈に見參するに葉策烈は其歸りの餘りに早きを訝りて直に後の體裁を問はせたまへバ覇祿樣に仰を承奉りて先馬沙をば探らするに賊は早くも逃失せて其影だにも候はねば隨即約克に趣くに是處の村人數十名が既に待設けてありにければ其意を問ふに彼等の申さく小可等は約克の者にて年來住ひさふらひしに往る日より儀の難儀枯樹嵐とか呼ぶ海賊が挪傘波蘭を略りしよしにて忽地此處にも押下りて人畜すべて掠取り又馬沙に入らまく欲し南の方に下りしに幸にも我王の親臨せさせたまふのみか御弟に在すなる亞弗勒君さへ來ましたまひて馬沙の領主なりと聞く覇祿主ともろともに御軍を相援けて早くも賊の全軍を破らせ賜ひしと聞くものから現に流水は高きに走らず唯彼威力に壓附けられて伴從ひたるものゝ爭で之に勇まざるべき此處に在るを幸に賊兵逃來りなば撃ちや止めんと談合して準備を爲して待間程なく果して夜半に近き頃一隊の賊兵們喘々て逃來るを薄月ながらそれと見て噎叫んで競蒐るに賊は落武者なりといへども聞えし枯樹嵐が配下なれば這方の勢の少きを早くも知りて驚かず寄するを拂ひて逃行きつ鈍や東の海岸なる傷痕縣まで落延しに這方は愈心慌て斯くては今まで待受けたる企圖も皆畫餅なりたとひ命を殞すとも一人だに撃取らずば民の民たる理に背かん疾彼奴們に追及びて舟に得乘らぬ其ときに死力を盡して撃たずやと一人が言へば勵まされて皆々然なりと默頭つゝ飛ぶが如くに追蒐けて纔て海邊に至りて見るに

幸なるかな其近傍には二艘の小舟のあるのみなれば這方は是に力を得て喘と嘯きて斫蒐る其聲雷の如ければ賊は流石に打駭き多勢なりとや思ひけん念々に二艘の舟に飛乗々々逃んとすされば今是二艘の舟の一個は早く岸を離れて漕出したりければ乗りたる賊も多きにあらねど後なる一個の舟の中には賊皆慌てゝ乗込たればいかにして堪ふべき見る見る舟は覆りて賊皆水に陥りて狼狽ながら泳游術を知れるは先なる舟に泳着きて漸に免るゝもありさらぬは岸に上らんとて這方の者に撃たるゝもあり暫時の攻撃其甲斐ありて敵の死ぬもの三十餘名屍は波に漂ふて何處へか流去るものから取留めざるは遺憾なれども早我々が一廉の功を樹てしは僞ならねば各心の誠を信じて是處にハ必賊兵を追ふ方ざまの來ましやせんと思ふよりして待奉るに程なく御目にかゝれる事此上なき幸に候なる哀れ疑はせたまはずば我々はじめ此國の民の先にハ賊兵に從ひたりし情狀をも酌ませたまひて御慈悲の沙汰をば願奉ると拜まぬばかりの體裁に太訥ながら僞ならぬ樣は現はれ候へば某輩て名を名乘りて願ひの趣き心得たり素り賊に迫られて從ひたるものなれば此儘許すも惜しうはあらねど我私には料らひがたかり數日の後に大王に聞上げて兎も角もそは其時の御沙汰に因らん暫時待ねと言置きて軍中に駐入れ偖是よりは北の方なる挪伞波蘭に赴くに此處なる賊は早くも逃れて全國平穩なりければ乃ち屯所を處々に置きていまがた歸候ひぬと詳具に申せば葉策烈そは便宜き事なりき既に挪伞波蘭にも賊兵あらずなりしといへば憂ふる事はなきものから思へば這回の大捷は朕德に因れるにあらず皆是亞弗勒を初にて汝達必死を自期し國のため民のため又朕がために盡したる忠義の因て効す所忝なき事なりき其は兎まれ角もあれ彼の約束の村人が敢て孤忠の誠心もてさる擧動をなしつるは嘉する餘あるものをよく勞ひて歸しねと情ぞ深き言葉を漏るゝ

事にあらねども皆感涙に咽びつ愈國の安らけきを念はぬものはなかりけり斯くて覇祿は御前を下りて彼村人に仰を傳へ事なう赦しやりしかば皆喜びて歸りたる事果てゝ後葉策烈は亞弗勒を召賜ひて覇祿が言ひつる事も箇樣箇樣と物語り降人の吟味諸將の勳功各々に定められ覇祿には物を賜はり馬沙に還遣り又揶傘波蘭と約克をば領するものゝあらざれば雷沃を以て之に任じ馬沙の東に接したる東央李の國にハ曄門度をもて領主とす此國東海に臨める故にをさ〳〵非常に備へんためなりされば曄門度は身の面目と勇ミて之を承り妻苦草と諸共に兄妹二人子を共して軈て任處に赴きて鑳笠といへる處の城にぞ住居を定めける此二人の子は兄を江守とて今歳はすでに十一歳なり妹は美麗と呼做していまだ幼き齢ながら容貌の雅幽なるは物に比ふべくもあらず是は此歳九歳なり又約克と揶傘波蘭の領主となりし雷沃は一昨年妻を喪ひて只一人の男子を持ちて之を建業と呼做して今歳十三の少年なり閒話休題斯くて諸事も濟みければ葉策烈王は改めて雜兵甦養を召出し曩に枯樹嵐を見出して早く之を本陣に恁々と報知らしたる功勳頗る大なりとて重役に居らせんと思はざるにはあらねども其器あるものにあらざれば其請ふ所に隨ふて東央李なる曄門度が隊中に加へられて那處に赴かしめたりける斯りしほどに是彼の事は漸に整ひければ今はしも心安しとて上下押靡て喜びあへる程に夏は早くも過行きて秋風塞き十月の上旬となりにけり強賊平定の後にしあれば國家太く疲弊して頓には恢復すべくもあらぬにかてゝ加へて此年は穀物の登り更に無く庖に肥肉無きものから民には飢色の現はれて廐に肥馬は有らねども野には餓莩横はれり獸を率ゐて人を食ますと孟子は既に刺りけむ梁の王のそれならで官府の倉廩空きまでに開きて賑はしたまへども宛然砂を手に握りて河水投ぐるが如く毫だに効の無きものから葉策烈も一方ならず御心を惱ま

せられ亞弗勒に謀りたまふに數日を經て對ふるやう往る日の仰につき兎さま角さま思按をめぐらし好法もがなと求めしに唯一ッ候のみ聞え上るべうもやと宣ふ言葉に葉策烈は笑ながら坐を前めて疾々と急がせたまひけり。

第四回

重厄を憂ひて葉王病を釀す
再寇を防ぎて曄侯節に死す

當下亞弗勒は畏まり一ッの方とは外ならず臣等聞候に佛蘭西の國にては連歳皆秋ありて餘れるばかりに候へば穀物の價の廉きは驚くにたえたるよし皆人々の申すなる戰亂の後にしてかく言はんは心無きものに似て候へども是の外には然りぬべき策もあらざるを此議は如何に候やと他事もなく宣ふにぞ葉策烈も稍暫時首を傾け打案じて現に卿が言はるゝ所は是至妙の法ながら枯樹嵐との戰といひ今國中の饑饉といひ多くの黄金を費したれバ國庫に殘れる處は少なく是をもて來ぬる秋までに足るべきほどの穀物を得買はん事は叶ふまじ縱令それまでにあらずとも非常の準備は無かるべからず其だに乏き事と思ふにさる用になされんや然れどもまた顧ミて民の樣を見るときは目も當てがたき體なるよし進退殆谷りたりそもいかにして良かるべきと言ひつゝ嘆息し賜ふを亞弗勒は聞あへずそは勿論に候へども臣等が思ふ所は然らずあながち物を購ふに其時價を取らするを必とはいふべからず申すに及ばぬ事ながら大父葉波多の王の御座りし御時には佛蘭西の帝なる瀝兒曼尼帝とも疎からず交らせたまひしを今は是彼任さずとも御使をもて我國の難儀をかくと告げさせたまはゞ海こそ隔つれ言はゞ是れ隣國にはあり舊來の親懇さへにあるものを誰か强面もてなすべき來ん年の秋までは足るべきほどの穀物を貸さゞる事のやはあらん然るを況てや彼國には打も續きて年ありて價廉しといふなるをや賢慮を運らし賜ひねと寄しくも宣ふ一言に葉策烈は落居つゝ分

解をもて漸く曉りぬ現に卿がいふところハ是れ當今の好法なり朕よろしく取料らはん大義にこそと勞ひて亞弗勒に暇を賜はり直に有司に仰せつゝ佛蘭西につかはせしに十日有餘の日數を經て數十艘の大船に小麥許多積載して歸り來り絳伝々と葉策烈に言上し隨即仰に隨て究民に之を施しつ漸く焦眉の事を救ひ偖翌年八百六十九年なりとなるほどに今年は去歳にことかはり穀物の樣よきよしにて是秋に至りなば去歳の不作を償ふも容易かるべしといふことの評判隱れもなかりしかば葉策烈は更にもいはず亞弗勒も群臣もなべて喜びあへるほどに七月上旬のころほひより這面はまた國中に疫病を病む人出來り人より人に傳染して勢甚猖獗なり苦樂互に移り辛甘交々更るは浮世の常とはいふものを今此時の體裁は重々の艱楚のミ現に「運の通塞時の否泰は夢とやせん現とやせん」傷ましかりし事ともなりされば葉策烈王は他よりも彌深く御心を惱ませられ早く病根を絕ちなん物とて只管に方法を運らしたまひ夜もよくは眠賜はず御心のミは揣られけれとも其身木石に在さねば之がため遂に篤疾に罹賜へり是故に亞弗勒に更に一層の憂苦を加へて羅馬は更なり遠近より扁鵲盧氏の妙手を招き華陀蒼公の奇術を求め御回陽の方をのみ只はかりたまへどもつゆばかりの効驗もあらずひゞ〳〵に危篤行きて今はしも頼少く見えさせたまふになん葉策烈もつひには得免れがたしと思ひ決められけん一日亞弗勒を召させたまひいと苦然に宣ふやう向には卿の扶援を得て手剛き賊を平らげたれば喜ばしとおもふ間もあらで疫てふ惡疫の此國に起りしがために敢なく命を殞すもの數々つきぬよしなれば心苦さ限無く兎や角と思屈したるも此身の腑甲斐なきよりして積りて斯る樣に成行けば最早本腹には及びかたし言はでもしるき事ながら朕亡後は位を繼ぎ末永く平穩に國を治賜はれかしとばかりにして是やこの終焉とも覺しくて吻く息緒も細行く體に並居る人々も應と

て出でばこそ腸を断つばかりなる思は同じ杜鵑血になく容も結隠て重げに見ゆる雲脚や別れていつか逢ひぬべき愁傷をこそ釋くよしも涙の外に物ぞ無き憂きをも知らで音もせず操に燃ゆる螢火も有漏路を超て無漏に入る魂の導なるらんと思ふに情趣眞澄影微明き夕月と共に果敢なく消賜へり思定めし事ながら今としなれば流石に恩愛の羈斷難く皆跡に泣崩折て正體なければ亞弗勒ハ漸々に念反し撓まぬ心を勵まして歎凝りては却々に悪かりなんと人々を或ハ慰め或は賺し程へて後に御亡骸を御父王葉策韓が御陵にほどちかき氤哲妃に送らせたまひ厚く後世をぞ弔賜ふ實にこれ紀元八百六十九年八月上旬の事なりきされば是より月を追ふて十月の頃となるほどに涼風やうやく吹初めて氣候寒けくなるまゝに彼疫病も早晩消て英倫一國には之を病むものあらずなりぬ是よりの後は姑物語なし却説其後早くも三歳の光陰過ぎて紀元八百七十一年となるほどに亞弗勒は早既に二十二歳におはしませば乃衆庶の請ひを容れて九月の頃王位に即き今は王となりたまへば皆萬歳と唱へつゝ此王位に即きたまへバ彼の枯樹嵐が殘黨なんども向の手並に見懲して境を侵すこともなく一國安穩なるべしと皆人毎に風聞すれども亞弗勒が御心は傍の見る目に殊なりて今王位には在すといへども枯樹嵐が戰國の凶年幷びに疫病なんどいふ種々の殃禍に未佛蘭西より借入れし穀物を拂ひもかへさず加之國内の男は多く戰爭と疫病とに命を殞し現に亞弗勒が親兵は其數僅に三千許そも年老たるものゝミ多く物の用にたつべきハ一千に得も足らず之に準じて地方なるも皆かゝる姿にて就中擦傘波蘭と約克を領する雷沃はたゞ六百の士卒を持ち又那東央李の睡門度の手に屬きて其指揮に從ふ兵は尚是よりも甚しく漸三百人なるめり勢此の細くなれば亞弗勒はいとゞしく御心を惱ませられ日夜思案に沈ミつゝ今日翌日と經賜ふほどに此年の十月頃世間再度さわ

がしく又もや枯樹嵐寄せたりと遠近頻に風聞するにぞ亜弗勒は其意を得ず那枯樹嵐といへる賊は往る八百六十八年新蛙居の戰に亡兇王が一箭にて事なう撃たれたるものを再度來つべき理由はあらじ這は傳誤ちたるにこそと仰する折から二人の邏兵何處よりか來けん喘ぎ〳〵て走參り手續を經て聞ゆるやう是れハ東央李なる曄門度大人の下につきて那處を守る者に候ふが九月四日寅のころ忽焉城外に人馬の響いと喧く聞亘り加之松火の光も許多見えて候へば城戸守りし兵們半傾きし月影に熟と之をすかしミるに何れとは分解ねども紛ふかたなき軍勢なるにぞ這は什麼如何と打驚きそがまゝかくと曄門度大人に包まず申上たるほどに聽くと齊しく立上り篤と覘はしたるのちに小可等に仰するは夜眼なれバ旗章も明晰にハ得知れねど打扮をもて推すときは恐くは又是賊兵なるか然はあれど往る新蛙居の合戰に我王の智略に敵しがたくそが巨魁と憑ミたる枯樹嵐さへに亡びしを尚不懲る寄來ぬるは其志最猛かりざるを憖に挑合はゞ徒に味方を損ひて後に悔ゆとも及びは得ならじ第我指揮を待ねかしさはとて總て城中に有りとあらゆる兵を召集へて一人毎に點檢賜ふになん辛うじて三百餘人ありて常よりの數にハ違はねども訝きは彼棄策烈王に枯樹嵐が跡蹤を覓めしと申しける甦賚となのれる者のミ一人何地行きけん影だに見えねば其が平常の住居は更なり隈なく探索むれども更に得知れず然れども事遲々すべき候にはねば唯命運を天に任し只管準備を爲すほどに少焉にして敵中より身丈高く肉肥たる一人の武士濠傍近く馬騎寄して聲高に喚はるやう丁抹人の大將枯樹嵐今城中に物言はん去歳の夏六月中旬新蛙居の戰爭に思はぬ事より仕損じて劇く亜弗勒に追はれしにかねて這方より忍ばせおきつる甦賚の智術一にて我に似つかはしき面の者を眞の枯樹嵐ぞと云做して寄しくも棄策烈のミならず亜弗勒をさへ眩ましたる其隙に我は虎口を

免れ本國丁抹には歸りしも怨憤骨髓に入りて忘難く膽を甞め薪に臥しいくその辛楚を經過してやうやく今しも前辱を雪ぐべきの秋に至りたるを迷ひを取らば其方に僉なし敵ながらも其城の頭人なりと聞えたる曄門度は勇士なり我なんでふ強面く爲んや速に志を改めて我此陣に降りねかし聞えたりやと喑く廣言聞くに咸々是はとばかり驚く中にも曄門度大人は憤怒の面色朱を注ぎ這は曉らざりき知らざりき憎さも憎きは鼠輩の誑詭其ならぬものを其れなりと眞樣に云做して死地に陷たる枯樹嵐を救出せし姦謀譎計獨それのミにはあらずして昨日までも阿容々々と恆に變らず我に附き我に仕へて此城に在りしを思へば這方の事餘さず泄さず枯樹嵐に告知らしたるに疑あらじ然ればこそ途のほど點檢し折にも見えざるなれ遮莫天網は疎にしてもらさず假令暫時ハ逃るゝともそを逐すべき方あらんや兵們心な落しぞとて頓て高櫓に登賜ひ佶と見亘して大音揚げ物々しや狗黨の奸徒儕に一死を免かれたりとて僥倖を得貌に說示すのミならず德天に順ひ澤民に及び古今に秀でし我王が虎將を再度拈らんとて恩命荷へる曄門度にさへ降れと勸むる言可笑や單身なりとも我もまた忝くも一天の王の仰を受奉りて此城守れる身にしあれば軍兵もあり食糧もあり楯籠るに難からんや正門後門處を嫌はじ好ましきより攻來ねと物に動ぜぬ膽勇絶倫枯樹嵐得堪へず聲振絞り這難物が大膽なる吾情有る言葉を忝しとは思ひもせで却て喑きに喑きたる報果は覿面冥罰を思知らせて吳れんづと率ゐし士卒を驅立々々嘯號んで攻むれども城兵皆よく一致して曄門度大人に從へば大軍を屑ともせず擊ては靡け靡けてハ擊ち何時果つべくも見えざりしに何者の業なりけん西城門の傍より忽然火手起るほどに折も折とて西風強く見る〳〵此處彼處に燃傳れば城中の混亂は一方ならず宛然湯水の沸如く上を下へと騷擾し更に秩序もなきものから曄門度大人も力盡き今は斷らんと思賜

ひし、諸共にと願ひたる小可二人に此由を走りて備に王の許へ御聞に達せよとて死を許賜ハれバ爭難く御綻をふくミ御注進の其儀に背くして討洩けて奔參候なりと這掛けて早迸落る淚を日來噠門度が人を尋び重ぞし忠標とこそハ知られたれ畢竟今此雜兵が亞弗勒に注進の後の物語甚麼ぞや其は次卷に於て解なん。

第五回

忠臣强心婁子を訣す
義僕單身追兵を混む

再說亞弗勒は彼の雜兵が走參りて恁々と聞ゆる言を聞召しつゝ流石に智勇に秀でし王ながら思懸けねバ茫然と呆るゝこと半時許り稍少焉にして思はずも太き息を吻きたまひ甦聲が偽しゝ誑詭ハ憎ミても尙足らねどもそも這方に亘來て雜兵の群に入りたるハ糊口のためにハあらずして初よりして仕へたる枯樹嵐が內意を受け危き敵地に入來りて誑詭ながらも枯樹嵐を逃れしめしハ是忠なり畏けれども亡兄王が信をだにおき賜ハずバ那が奇計も水泡とならんに毫々忠を懷くに及ばじ其へ先措きて今一言汝達二人に問ふべきことあり噠門度が其後の事をば何とも知らざるや又這回寄來つる賊は其數幾何なるや具に告げよと宣へば雜兵們は畏まりさん候噠門度大人が其後は如何に候や早く御先途を振棄てゝ走參り候へバそを憶えてハ候はず但賊兵の總數ハ往る歲の比類にあらず凡そ五六萬にてや候べしといふに愈亞弗勒叔もノヽとばかりに胸騷かすのミなりけり雜兵二人が事此下に物語なし案下某生再說單表東央李の噠門度は心利たる二人の雜兵を喚寄して戰の光景恁々と包まず亞弗勒の大王に言上せよと迯行りつ込入る賊兵の隙を潛り夫人苫草子江守並びに娘美麗等が在りける館の奥に入りて先早苫草に打向ひ年來の契ハ淺からねど今の體裁ハ卿も見もし聞もしたまひけん我思慮の足らざるより思設けぬ不覺を取り王の仰を受參らせて守りたる此城を火攻

にせられしかバ今は罪科免るゝところもあらねバ我ハ心を決めたり此后頼むハ唯卿と二人の童們のミにしあれバこゝ恩愛の羈を断ち執着の觸を打壊りて敵の眼に觸れざる前に急ぎ是處を落延て何處へなりと身を忍び江守と美麗を守育てゝ父が汚名を雪がしたまへ我情懐ハ是のミなり外にハ言ふべき事もなしとて續て這囘ハ江守と美麗とを呼近づけ膝の邊に押据てそが頭を撫でつゝやよ二人共今しも父が聞かすること心に籠めて忘れなせぞ凡武藝を常に食べて其任に當るもりハ其義を盡して然る後衛計盡き力究まり諸術なくんバ一死をもて君恩に答奉らんこと準て人の常分にて這ハ汝達も知りつらん近く父が身に取れバ我君の御寵愛たくして分に超たる祿を食べ此職を守るべき任を此身に負ひたれバ其義を盡くすハ素なるに見よや城ハ落されたり是力究まるもの父が此儀得すべき事を言はでも直に曉りなん江守は身量こそ小けれ早十有四歳の男童にてあるものを今日の樣をバ忘れずして人と成りなバ逸早く父が心を繼受けて君に忠義ヲ盡せかし美麗ハ女子の事にしあれバ只よく母の教訓を守り他念な世しぞとて續てまた參河と呼做されたる壯佼の年來仕へて心田最忠實なるを喚き書草等三人の供せよと云含めて後甲落ちよへと悲き事は毫だにも口に言はねどおのづから是れや妻子の別れかと思へバ騎も張裂る歎は同じ妻苦草物を言はんとあせれども偏生憎に舌塞りて霎時は打泣くのミながら思返して涙を支へ濃細なる御言葉に今ハ愚痴も出でずなりて兎角の思案も得られねども益なき繰言に時移りて賊の兵に見咎められなバ亡後までも恥のため王の爲よと思し賜ふ御心背くに殊ならず鶴の羽掻百羽搔かきくどけバとて悔バとて甲斐あるべうもあらざれバ仰にハ悖参らせじと末期に物を思はせじと口にハ強く言做せど心細きハ女子の情昨日までも今日までも斯るべしとハ毫知らで友白髪ぞと契りたる妹伕もえにし薄染や朝露待たで消る身の人と思へバ

倘更に悲さ彌増す夫の妻全身は血潮の韓紅に塗る心ぞ倘丹き今生後生の告別も今日を限れば此後にあはれ二人の童等が母より外に簑虫の父に得逢はぬかなしさよと念ふ心をいへばえに岩に碎くる瀧瀬の涙は同じ江守と美麗泣崩折る斗なれバ然でハ果てじと曄門度が急立る言葉に詮術なく今は苦草も氣を勵まし然らバとばかりの告別言ふ身も涙聞く身にもまた胸迫る別路の二道かけぬ丈夫が首獲てんと群來る敵兵早奥の間に踏入れバ心得たりと曄門度ハ落行く苦草等四人の影を霎時見送りつ思ふがまゝに奮戰して終に其場に討死せし勇士の最後ぞ勇ましき斯りしほどに賊兵はすは曄門度こそ死にゝけれ我そが首を取らんづと相爭ふて走着枯樹嵐が弟なる行髮といへるもの遂に首を獲たりしかば即之を頭魁なる枯樹嵐に示しかば枯樹嵐太く打歡び行髮にハ多く物を賜はり且之に指揮して敵にハあれど曄門度が忠義の程の尊しとて厚く其首に回向して當時颯浮衛と呼ばれたる處の中に之を葬りけるいとも奇しき事なりき話柄一轉曄門度が妻なる苦草と二人の童幷びに若薫參遜は心ならねど曄門度がくれ〴〵言ひつる言葉の理なるに爭ひかね立ぞ出でたる館の北ハ後門に間近く加之幸に敵一人もあらずして主に離れし駒一疋鞍も手綱も備はれるが人待顏にて居りしかば是究竟と苦草ハ更なり江守と美麗も打騎りつ墮ちぬためとて細き繩もて楚と馬に結付け參遜之が轡を執り辛うじて後門より逃出で行向を竊に商議するに參遜が家ハ是處より七十里ばかりを隔てたる抹撒てふ處にあれば霎時其處にて身を忍ばんとは決めたれども本街道より行くときハ影護き事もあれバ浦曲傳ひに至らんとて頓てなほも身を窶ひ只管途を急ぎしかバ其日の黄昏比にハ廿里許の路を行きて柳絲澤まで來りけり思ふにハまして早かりしと主從齊しく其處なりける松の木蔭に休らひて沖を遙に瞻亘せバ雲井に紛ふ沖波寄せてハ返し返してハまた寄來つゝ岩背に碎

くる音も最凄く吹拂行く濱風に亂るゝ蘆の一夜さへ枕高くも寢ねられぬ身と成果てゝ憂しやこの馴れぬ浦曲に漂泊て何處を目途と定めなき浮世の灘の捨小舟繫がぬのミか梶をだに絶てもいとゞ絶やらぬ涙の雨ハ必よ仇の頭に注りなん世に憂事のありとても斯る悲懷に身を忍ぶ悲懷に超ゆるものあらじと悵然として主從が交互に袖を絞りつゝ那方の空を見返れバ白雲遠く朦罩めて住ミにし館の影も無しあぢきなき世の轉變ハ免れがたきと豫てより物の話に聞きつれども思懸けや早晩に我身の上に在らんとハ均く去りも得離てや思ハず其處に躊躇ふほどに忽地後方に囂然と轟亘る人馬の脚音這ハ什麼いかにと主從ハ驚きながら打瞻遣れバ手勢大約三十人皆武具に身を固めつ早間近く來る樣ハ問ハでもしるき追兵の兵這ハ何とせん喃恋しやくれ〴〵言はれし我夫の言葉を守來りしも今は六日の菖蒲草十日の菊となりけるか吾儕一人の死ハ厭はねど夫の記念の江守と美麗それだに此處に殺しなバ亡夫に合はす面もあらじやよ參遜いかにぞやと忍ぶに堪へぬ村肝の心苦さ胸苦さ想像られて哀なる心は同じ參遜も此體裁に一度は驚きしかど素していとも剛氣の壯佼なれバ早く心に思按すらく現に安からぬ事なれども今に方りて足に任し直走に走れバとて逃遂さんこと覺束なけれバ太刀の刃のつゞかん限り禦ぐに上超す事やハあると思へば些も噪ぐ體なく腰なる太刀を拔持ちて程度好處に立出でつ苫草等が後に推闔ひ寄するを待て衝立たり浩る處に追手の兵ハ瞬間に寄近づき咄と揚げたる鯨波とゝもにそが頭人と覺しきもの馬に拍れ機出るを咸々共に打瞻遣れバ是即別人ならず又かの雜兵甦賚なるにぞすはやと急立つ參遜に先ちて甦賚は大音に愚やな蛆虫輩今冥途への餞別に枯樹嵐君が恩顧の郞黨甦賚が听かする一言を謹んで承はれ抑娜笠の西城門に火を放ちしも卽亦吾智術の爲す處にて脆くも城は陷しかバ枯樹嵐は又更に吾を召て勞賜ひ改めて御

するハ嘩門度は既に死にしかどもそが妻幷びに二人の童が生死存亡のミ料られず那嘩門度が忠義は嘉して厚く吊ふべきも若這奴達を生置きなバ吾は更なり汝が身にも仇とならんハ必定なり然はあれども他人はそを見覺へたるものは無きに汝ハ最長く從へバよくこそ心に知りつらめ此儀を思ひ辨へて逃がさぬ前に疾く追ひねと冥加に餘る御言葉に承はりつと御承して直に手勢を引率して其處此處となく尋ぬるほどに圖らず此路に迷入り行けども行けども更に又何處なりとも分くるよしなく兎角して對向を見れバ賤からさる樣の者松の木陰に憩ひて居り萬一それかと思ふからに足驅を早めて近づきつ熟と見ればあな嬉しや尋ぬる汝等主從なれば扨こそ斯くハ及べるなれされバ今は籠裡の鳥釜中の魚にも殊ならざるを益無き抵抗其詮無からん手を束ねて尋常に我刄に掛りねと多勢を頼む雜言過言參遜いとゞ口惜くやをれ奸賊膽太し己が僞しつる惡事の顚末阿容々々として吐くのミか嘩門度大人が夫人はじめ御子達の御身にまで無殘の刄を加へんとか人ハ知らず此參遜が息あるほどハ覺束なしさるにても先年ハ吾大王を欺き奉り這回ハ又もや我主なる嘩門度大人に非業の死を遂參らせたる汝が奸計神人怒り怨めるを此處にて逢ひしハ天の賜國士の仇敵主君の讐生けてハ還さじ覺悟せよと呼はるを待たで那の甦賚ハ物な言ハせぞ疾く蒐れと烈き下知に兵　們承りぬと應もあへず打倒さんと右左振閃かす應手物を或は拂ひ打落し隙を揣りて斫去る神變不思議の太刀風に霎時が程に十餘人刀下の鬼となつてけり此光景に甦賚ハ獨恐惑へる兵們を叱罵り懷中より擊丸めきたる物取出し對向に一息吻と吐きつ血刀提げて立たりける參遜が眉間を目懸け力を究めて擲ちたる狙ハ違ハず憐むべし左の眼を打透されそが儘其處に倒れなんと兵們さへ見詰たる此時遲し那時早し思ひ懸なく頭人甦賚ハ馬より撞と落てんげり這は何故ぞとよく見れバ今迄彼方に立ちたりしと思ひ

し參遜ハ早晩に飛來る丸を避くるやいなや甦賚が側に突と寄て身を沈まして其馬の前足拂然と薙ぎたるなり世に比類なき剽拔に兵們一度ハ驚きたれども詮術なく甦賚を圍ひて參遜が前面に立現ハれ均く打て蒐るものから參遜愈怒に得堪ず必甦賚を撃たんづと支ゆる兵を斬伏々々頻に進む勇力剽拔譬へバ颶風の船を碎き鯨の沖に暴るゝが如く打向ふ者も向ふものも皆散々に散られつ生殘れるも今ハ又抵抗ふ氣力も失盡きて甦賚もろとも先を爭ひ這ふが如く逃行くにぞ穢し返せと參遜は呼揚け呼掛け追蒐つ忽地思附くよしありて苦草が方を見返れバ這ハ又如何に片道より前の如き兵一隊苦草母子を守る人のあらずなりしに勇立ち早近々と來れる體に參遜咄嗟と仰天し宙を飛して馳て行く此段は尙長やかなれバ姑く是處にて筆を收め看客後を知らまく欲さバ且下文の分解を聽ねかし。

第六回

四人の主僕生死相別る　一箇の任俠殃禍忽平らぐ

話表す側道より出來りたる追手の兵は早く苦草等が側に至りて用捨もあらず騎たる馬の太腹目注て鎗をもて禺差とばかりに刺貫けばこそが倒るゝと諸共に苦草母子も撞と落ち遁んとあせれどあら悲や落ぬためとて慾に繩もて楚と結付たれば身動きだにも爲難く居所の辛に畏らぬ悲懷ハ三途八難の苦患も及びかたかるめり然るほどに追手の兵ハ苦草母子が落ちしを見るより得たりや應と飛蒐り其方に近く向きたりし苦草を目注て打下す刄の冴に何かハ堪らん耳より肩に斬下られて叫びもあへず息絶たり這時結びし繩ハ切れて江守と美麗ハ思ハずも仰向に倒れしかど危急の折とて勇氣も増し勃然と起て逃出すを其逃すなと追手の面々續て追ゐ其處に參遜漸く馳着きて大喝一聲虎眼を睁り前に立たる兵の眞向望んで乾竹割に返す刀に一人の細頸丁と打落す隙に乘ずる其餘の兵參遜

が前後押包みつ又一簇ハ江守と美麗に競蒐るに參遜ハ身も世もあられず思へども其身も既に圍まれたりさりとて處を隔てたる江守と美麗を救ふも由なし進退殆谷りながら揣りて死ぬる時にあらねば唯一方より突出でんと一心籠たる乳獅の勇猛劃叫んで戰へども身を烈く疲勞たるに敵は新手の勢なれバ江守兄弟を救ふハ偖置き身體處々に疵さへ負ひて難儀に難儀を重ねたる心裡は如何なりけん想像だに哀なり斯れバ江守と美麗の二人も此體裁に愈驚き兎角の思案も出でバこそ唯今はしも一生懸命足に任して奔れども十五に得足らぬ身にしあれバ稍にして疲勞を覺え竟にハ堪ずや二人共礮と地上に面伏すにぞ夫れといひざま追手の兵ハ螽の如く跳蒐りて既に危ふき其折しも何處よりハ來りけん其長五尺有餘なる一羽の大鷲舞下り羽嵐颯と音する間も渚に近く倒れたる江守が腰の傍をば無手とばかりに引掴み中空高く飛行く體にあれよ〳〵と其場の皆々呆果たるのみなりける折も折とて參遜ハ辛くも我身を圍みたる敵兵を衝破り血に咽喉を濕しながら血刀打振々々て美麗に近づき來ぬるほどに美麗ハ此時兄江守も鷲に掴去られつゝ母と兄とに別れたる歎に心も顚倒し共に死なんと思ふからに疲勞はしたれど流石に曄門度夫婦が女とて敵の刄に罹らんハ亡後の名も口惜しと嬌柔き身ながら烈女の念力猝然とばかりに立つより早く刄の下を潜り隙を見澄し突と馳行きて剣岸高く聳へたる數十仭の岩頂より逆卷浪に飛入りつ行衛も知れず成にけり此光景に參遜ハ情無き事してけりと其身も續きて入らんとして忽心に思ふやう然はあれど我身もまたこゝに空く成行なバ敵は必夫人の御首を斬て持行くべし啻にそれのみならずして御若君の鷲に攫へれ御姫君の海に入れる必死せりとすべからぬを尋得んほどハ尋試て御父母の御志を繼しまゐらせざるときハ恩惠を受たる甲斐もなし吁然なりと肚に問ひ肚に答へて疲勞も厭へず支ゆる敵を衝退けて漸苫

草が亡骸の側に近づき忙がはしく口に稱名目に涙弱る心を鬼にしつ首搔切て口に銜へ萎ゆる双足踏束めつ力の限り奔るほどに皇天后土忠實の心を愍み賜ひけん奇しくも虎口を免れて行衛は知れずなりにけりされバ此時那の畦賚も再返し來りしかど斯る樣に呆果て兵們もしかすがに狐に魚偸まれし心地して交互に目と目を見合すばかり又詮術も無かりしがさてあるべきにあらざれバ苫草等が打騎りたる馬もろともに亡骸を取收めつゝ阿容々々と本陣指して歸りける之に因りて參遜が勇猛ハ敵に聞へて彼の遼來々々の故事ならねど啼兒もをさ〳〵靜まるめり閑話休題江守ハ料らずも鷲の摑むところとなりて幸に命ハ殞さねども亦是前門に虎を禦ぎて後門より狼を進むるが如く遂にハ之が餌食とならんも料られず只其のみにあらずして父母の事妹の事參遜が事さへに胸に浮出て堪難く唯潸然と打泣くめり然れども年老にたる荒鷲に強き爪もて衣の上より腰の邊をいと確く摑まれたることとなれバ些の身動きとても得ならず其行く處に任するほどに兎角して鷲ハ江守を爪に摑みしまゝ南に七里有餘を飛行きて南幹といへる處に來りつ其處に立ちたる最大きやかなる樫木の梢の恰好き枝に窃と江守を置きたりける事の不思議に江守ハひたと呆果て那そもいかになすやらんと其儘にしてあるほどに鷲は軈て翼を振ひ一聲高く叫びつゝ何處ともなく飛去けるにぞ江守ハ稍に落居て挨くこの隙に逃れんものと靜に枝を傳はりて下の方へと降るほどに此頃ハ此近傍にも曚昧の風習多かりければ木石を崇めて神とし事ふるもの尠からずされバ今江守が鷲のために置かれたる樫といふハ此南幹の里人共往昔より神の宿らせたまふなりと口傳へて枝を下すことハ更なり之に攀登る事をも禁制しもし然するものあるときハ忽ち神の怒に觸れ近鄕までに厄難を及ぼさるゝ事ありとて樣子知りたる里人ハ畏敬みて此前を過るにも容易くハ得行かず恭しく禮拜して然るのちに行

過ゑを常とせり素江守ハ此等の事をつゆだにも知らざれバ對向の方より里人二人許其樣耕夫とも覺しきが鋤鍬肩に打掛けて連立ちて來れるに機會こそよけれと打悦びてかの里人等が近づくを待つほどに里人ハ斯くとも知らず頓て木下に立寄て忽大地に俯さぬばかり江守が方に打向ひて禮拜すること頻なれバ江守は何とも意を得ざれど其身ハまだ樹上に在れば此二人に乞賴みて下さればやと思ふからに枝蔭より面を現しやよや里人達和主等は何の故にてさまでに禮拜したまふぞや吾儕はつや〳〵曉し難しそハとまれかくもあれ吾儕ハ本是娜笠の者なりしに料らざる厄に遇ひ父母にハ死別れ妹にハ生別れて生死さへに得知れず加之吾儕ハ其時鷲の攫むところとなり海を超て此梢に置かれたるに因り下んとハなしけれども木の方ハ幹太く足便とすべき枝もなく兎にも角にも詮方なしあはれ吾儕を下してたべと最しほらしく說示す言葉に驚く二人の里人霎時其方を打仰ぎ睨詰たる面色ハ問ハでも江守が神木に乘りたる事の無禮なりとて怒りし樣とハ知られたり斯くて後少焉して二人の里人商議すらくげに驚くべき事ながら咱等にハ料らひがたし所詮かにかくといはんより里正殿に走參りて由を告げなバ那人ハ萬の事にものなれたり惡うハ料りたまハんや和主は霎時此處に待ちて那小童の番をしね我は是より直さまに里正許へ赴かん夫れ善けんなんいで〳〵と問ひつ答へつ一人の里人逸足だして走て行く里正とは何人ぞ南幹に年久く其職を爲し、人にて羅卓父とハ呼ばれたり其素正を尋ぬるにそが父の頃までハ耕人の群なりしに羅卓父ハ性として武藝を深く好み又物の道理をもよく辨へてさぞ〳〵都人にも恥かしからず生長しかは父母も世に頼もしと思ひて及バぬながら教育を加へたりしに羅卓父年僅に十五六の頃に父母もろとも時疫に罹りて歸らぬ旅に赴きしかバ流石に悲哀やるかたなけれどかくてあるべきものあらねバ漸野邊の送を濟し、後

ハ前の里正に身を寄せつ父母が田圃をも悉之に預置を思ひ彼を念へバ默してあるべき術にあらずよし我一命き骨身を惜まず働きたれバ前の里正も感服して二なきもを抛ちて養はれたる里正の恩をも報じ又一ツにハ村民のに思ひつゝ俯仰の間に早くも十年の光陰過ぎて羅卓父の禍をも攘去らんと思ふ心を人にハ告げず其夜ハ知己二十五歳となりし春の頃即紀元八百五十三年に此處にの家に宿を借りて翌明る日となりしかバ喜を述べ別も何某と呼ばれたる強人あり里の内を徘徊して只管狼藉を告げて何處ともなく立出つ兎角して日を暮し兼て嗜みを行ひつ羅卓父が身を寄せたる里正の家ハ富て財有るて持にたる短刀を携へて小夜更るころ賊寨に忍入り遂と聞しより一夜俄に押入て財寶を掠め取るのみならず里に手もなく頭人を殺しつゝ大音聲に縡由を悉々と呼は正夫婦を斫殺し家にさへ火をかけて焼拂ひ立去りて山寨りて小嘍囉等を恐嚇せしかバ此勢に氣を吞まれて皆手に歸りけり然るに此時羅卓父ハ里正の用を帶びて近郷まを合せて大地に平伏し懺悔のよしを告げしにぞさもこそで往きたるが其事果てゝ歸來れバこハ淺ましや家ハ失あらめと羅卓父は皆之を差許し隨時茲に宿りたる里人許せて殘る處ハ灰のみなるにぞ兎も角もすべきやうなくそ音信て有りつるまゝに語知らすに里人は聞くと均く且のまゝ其處に彳みしを里人見て馳來り縡由を詳に驚き且喜び其夜の中に里なりける誰彼を呼集へ羅卓父を洩さずも語るにぞ羅卓父ハ歯をかみならし獨心に思案引合せ那山寨を毀つことの是非を心裏聞へバ心ある壯佼するに身は父もなく母もなくうき世の一人者なるのみか達皆之に勸まされ羅卓父に從ひて時を移さず毀たんと勇年久くも里正に養ハれたる恩義もあり且ハこのまゝ那む言葉に羅卓父は素異議もあることなく打連立ちて行強人を打捨置きなば後つひに國難たらんも保しがたし是かまくす浩處に山寨なる小嘍囉等數十人此處に尋來て

羅卓父等に懇求しつさきにも申したる如く吾等は既に早舊悪を悔悟しつ命を宥したまはしたる御恩の萬一にも答へまつらんと思ふのみ爭で之を許容ありて此里に空地もあらバ住はさせたまへかしと偏ならず乞求むるに羅卓父はまた里人等の意見を問ふて然るのち其請に隨ひつ折よく里の遠近に空き土地のありけれバ此處に渠等を住ハせたり是より後に其子孫も追々に繁殖しつ此里の盛になりしも其力多かりしと是はこの後の譚なり

閑話休題是より里も穏に腥風起ずなりければ里人の悦喜ハ大方ならず是も全く羅卓父が義侠の効すところなりとて羅卓父と諸共に山寨を毀たんと言へる壯佼等をはじめとして里のもの一同より乃後の里正たらん事を羅卓父に言出たれども羅卓父は肯て隨ハず其職に當りがたしとて辭む事數回に及ぶものから里人毫々許すことなく請迫られて漸に委囑を納れて里正となりしより良く人を撫ひたれバ一郷渾て悦服し此歳羅卓父四十四歳におよぶまでもいと平安く光陰を送来りけりさるからに羅卓父ハ齡二十八ばかりの頃同じ里なる芙蓉の娘優曇を娶り程經て一人の女子を儲け名を瑠琳と呼ばしめつゝ此歳すでに十歳なる顏色の麗きハ却いふべうもあらず洵に是天成の美玉とて褒めぬものなん無かりける。

第七回

妄を論じて羅氏陋習を破る
危きを免れて江守他人に依る

然るに此羅卓父ハもとより心あるものなれバ里人等がかにかくと由無き迷に沈みつゝ槲木なんどを神とし敬ふを片腹痛く思ふものから如何にもして此事を除きてんと年來心を碎きしかども古くよりの口傳なれバ憖に言出て悟らする事能ハずバ其甲斐もなきこととなりとて些も之を人につげずあるぬばたまの闇夜に唯一人竊に那槲木に攀登りて枝二ツ三ツ下しつゝ其儘家に秘置て空く月日を過すほどに今日ハ殘暑の烈くして却に堪

難けれバ奴婢に吩咐け湯を沸らせ沐浴せまくするほどに背門の方より里人一人慌しげに走來りて羅卓父を見るよりも其儘走近づきてやよ大人聞賜へ古きよりの口傳にて神木とし崇むなる那處の櫟木に鷲に置かれたる由にて九歳十歳ばかりなる男童が枝の間に懸居て小司等が過りし折に下してたべと申しにき捨置きなバ此里の禍たらんも料られねバ大人に之を告參らせてともかくもの處置を仰がんものと思ふより小司ともろともに那木の下に行合したる一人の者をバ其處に待たせて走來り候ひぬいざ疾々と急がせバ熟々聞て羅卓父ハ不圖心に思付き這ハ里人の年來の迷霧を攪すに究竟なりと獨心に頷きつゝ其ハ未曾有の珍事かな言はるゝ如くバ打捨難きに吾儕は直に先立行かなん和主ハ後より里人を咸呼集へて來りねと吩咐てのち物置庫に秘たる櫟の枯枝一ツ二ツ取出しみづから之を攜へつゝ櫟木の下に急行き只見れバ里人の告しに違ハず枝の茂處に身裝も賤しからざる男童さきのほど里人に救を請へども驚くのみにて諾ひもせず剰今又此羅卓父が木下に來りし體裁訝きことのみなれバそを怪むゆゑにやありけん呆着顔にて懸りて在り此光景に羅卓父は要こそあれと點頭て其處に江守が番しける一人の里人と暫時ものがたらひてあるほどに曩に羅卓父に江守が事を告知らしたる里人ハ羅卓父が指揮の如く里の誰彼呼集め打連立ちて來りつゝ其處に集ひたりしかば今こそと羅卓父は皆々に打對ひ辭意ハ定めて聞も知られけんかばかりの細事に各位を煩はすまでにハあらねど吾儕に思ふよしもあれバさてこそ足を運バせたれ暫時其處に止まりて吾儕が言を聞賜へと一圓制して容を改め抑此處なる櫟木にハ鷲の棲りて在るをもて枝を下すことハ更なり登ることさへ叶はずとハ古きより此里に口傳へたるものゝよし這ハ誰人の言初めしや今將知るべき處にあらねど吾儕を以て見るときハ無下に理なき虚談ならんかといはれて驚く里人皆々眼を睜

り異口同音に這ハ日來に似げもなき里正が仰かな木は千歳にして木精ありとか木精ハ卽是神なり然れバ神の在す木とハ取も直さず木精の木にて卽此處の御樅木も無禮に逢はせたまふときハ木精のおハしますをもて直に怒を現はして其當人に罰を加へ若それにても嗛らずバ近傍にも禍を及ぼさせ給ふことハ昭々として明なるに異なる大人が御言葉よ其故甚麼と敎因荒く最誇顏に說破れバ羅卓父は打笑つ各位們が難問甚佳し然らば具に說示さん心を鎭めて皆聞ね夫天の覆ふところ地の載する處の中に在とし在るものにして人より尊きハあらざれバ皆是人の用を辨へ人の益をも爲すべきに心得難き木精の事ども從哉千歲の老木こは然るべきものゝありとするも什麼何の故をもて己草木の分として人の益たる事を拒み登ることは兎も角も枝下さるゝをも憤り心の儘にハ振舞歟又もし此木に木精ありてさまでの力を持つことの僞りならずとするとても夜々此處に塒をとりて宿れる鳥のあるならずや大枝小枝の嫌惡なく糞尿もて汚すならずや其をば罪せで萬物に秀れし人の所爲をのみ怒るといふハ心得難しといへバ里人懲ずまにそハ勿論の事ながら禽獸は掟を知らず掟を知らぬものを罪すハ酷にして本意にあらず人は則之と殊なり大人の宣ひつる如く是より尊きものしなく思慮分別もあるべきに神を無みすは理に悖れり怒らせたまふも宜ならずや斯れバ神の鳥を赦して人をば宥したまハざる裁斷の灼然なる證覺因て件の如しと息吻あへず言解くにぞ羅卓父は思ふ坪と思ふよりして急がはしくさらバ今此男童も只是鷲に置かれしのみにて掟を知りつゝ犯したるものにあらねば此まゝに扶免すも咎はなからんさにはあらずやげに然なりいでや下して得させんづと我に問ひつゝ我に答へ立たまくせしに里人は咄嗟とばかり引駐め仰は洵に然ることなり然ハあれども那童を下すとすれば大人とても此木を侵さゞるを得ずさでは罰も出來りて里に及びや候はん鼠に投るに

器物を忌むとは是等の事ならん縦哉其外に此御木を侵さで下す術もあらばそは御心の儘なるべし然なくば迚も叶ひがたし忽爾にも揣りたまひて此等に御心掛けたまぬは將是千慮の一失歟と口説きて止まねば羅卓父尚かにかくと各位は曉らねばこそ却に吾儕をまたも押止めて益なき言をいふならめさらば吾儕に詮術あり此枯枝は何とか見ると里人の前に差出せば里人乗りて打眺め何ぞと思へバ珍らしからぬ這ハ槲にて候はずやと言ひも訖らず羅卓父は誠に然なり槲木なりそも尋常のものならず神宿れりと各位が俺迄思凝にたる此槲木の枝なるはと言放ちたる一言に是ハとばかり里人は驚呆れて茫然たるを羅卓父はさもこそと言葉を正していへるやう儂ふれバ旣に早二十年許の昔になりぬ吾儕强人を平らげしより各位が深き愛顧にて此處の里正となりしより不德なれども何卒して里の障害を悉除去らまく欲せども由なき昔の口傳を各位眞と心得てはかなき迷に沈みぬれば是を除かずバあるべからずと心斗りハ揣れども愁なることを爲出しなば毛を吹て疵を索む譬喩に增して鈍ましかりと種々に肺肝を摧きつゝもとより神木に神なんどの宿りて在るべき所以なければあるぬばたまの闇き夜に更るを待ちて妻にも知らせず斧をのみ携へて忍びやかに家を立出で槲木の適宜き枝に辛くも繩梯子掛けてそれより枝を一ツ二ツ下して家に持歸れる其枝は即是なり斯て其後に至るまで物置庫に深く祕て披瀝る日となりしかば各位に之を言知らして迷霧を醒さしめんかと一度ハ思ひしも徒に憂ふべければ姑祕て年を過ごし全く障害のあらざる後に示すこそ上策なれと一圓之を隱置けども此槲木は枝繁く下せしところも目にたゝねバ各位も心注かざりけん何事もいひいでず兎角して去歳と過し今歳とくらして今日の日には至れども穀物さへ他國に勝りてよくも登りつゝ里も安寧くなりしかば愈此處に口傳の僞なるを知るものから言出るべき便も無くて思はず

日をば暮せしに今日料らずも此梢に男童のあるよしを報知によりて知りしかば便宜にこそと心に喜び各位を呼集へて斯くは料らひたりけるなり然はあれども此類の僞事は頗る多かり深く心をとりとめて迷はされなと言ひつゝも豫て準備やしたりけん其長ながき繩梯子を取出つゝ押手繰り槲を仰ぎて打掛くる狙ハ違はず一二の枝に楚と掛れば羅卓父ハ猿猴の如く馳登り江守を扶勦りて徐に大地に下したる世に罕なるべき智術に里人は一句も出ず今ぞやうやく年來の迷ひの雲も晴亘りて且感じ且愧らひ其儘にしてあるほどに羅卓父は猶もまたくれ〳〵と說諭して各々家に歸遣り江守を懇切に慰めつゝやがて之を扶導き家路を指して歸りたる心の程も大なる槲木とゝもに譽さへ高く聳えて近郷までも皆此事を傳聞て大約は感服し年久くも沈みたる迷夢を醒せしこそ偏に羅卓父が動にて那西門豹が古事と日を同ふして談ずべく語繼ぐだに勇ましけれ閑話休題里正なる羅卓父が濁に染まで明なる處置に料らずも江守は危急を救ハれて羅卓父に導かれそが家に至りければ羅卓父ハやがて妻なりける優賦と娘璆琳等に今日の始末を譚り江守に之を引見せ扨來歷を尋ぬるに江守は再生の恩人と思へバ禮を正しくなし先救はれし喜びを最慇懃に述しするゑ國の再亂の親の非業美麗參遜が事さへに遺漏もなく告知らす辯舌童兒に似氣もなく簡單にして本旨の通れる大人も及びがたきにぞ羅卓父ハ感嘆し初よりして卿をば賤からぬ人の子と吾儕も思ひたりしハおろか忠勇の聲譽高かりし嘩門度大人が令息よさるにても傷はしきは彼是差別あるにあらねど中につきて妹御なる美麗が御身の上こそ心元なきかぎりなれまだ幼稚身をもちて其後甚麼になりたまひけむ卿をば吾儕が幸に救參らしたるものから此處にて長く暮したまふも素り難き事ならぬに妹御は不幸にも憖に入水して跡も止めずなり賜へば縱哉蘇生ることありとて御心細さはいかな

らん迚もかくても威塞の亜弗勒君の御許に御身を寄せさせたまふとも深き知己あるにもあらず是を思へば時を俟ちて出るにます事あらざるべし吾儕とて料らずも卿を救ひたるものから是最深き縁といふべし倘此上は兎も角も卿に心の在しなば如何にもなして養巾さんいかに思すと忠實なる人の誠に江守はたゞ感涙の進むを覺えず恭々く禮をしつ寄邊なき身を愍賜ひてかくまでにも宣はす御言葉に隨ひて苦からずば霎時がほどいかご扶援を願ふのみといふに羅卓爻は異議なく諾ひ家の奴婢にも心得さして是より月日を經るほど江守は萬事に心を用ひ一ツとて隙間なければ羅卓爻夫婦のものもいとゞしく愛慈みて我子の如く璆琳ともろともに育てける。

第八回　勇士を激じて亜弗勒敵を逆く　姦賊を誅して波綠乾王を養ふ

誅柄一轄枯樹嵐は既に前回に說きしが如く忽にして東央李に曄門度が守りたる擽笠の城を陷せしより兵氣日頃に十倍して且戰ひ且進んで早くも五四河を打渡りて茨里の城を乗取りつ是より總軍を二隊に分ちて曩に擽笠の戰に曄門度が首を得たる枯樹嵐が實の弟行髮蘭と呼ばるゝに四萬の兵を割與へて北の方なる挪傘波蘭と約克の二州に打入らしめ己は六萬の兵をもて直に馬沙に攻入りけり蓋斯く兵數の想の外に多かるは土人を導ふて使へばなりされば是時約克と挪傘波蘭の領主なる雷沃は折歹くも病看に臥て賊寄來ぬとは聞ぬれども躬陣には莅みがたく家隷們に分付て之を防がしめたれども名に負ふ敵の領袖は枯樹嵐が弟にて且兵さへに多なれば皆散々に打破られ賊は遂に內地に入りて雷沃は更にもいはず其子建業に至るまで悉俘擄となしすなハち二國を占領し再南に軍を向けて馬沙に入らまくすさるほどに亜弗勒が方にては斯くの如き凶報を日々に得るものから執鞭濮に居たりける馬沙の領主霸祿に征討の

任を命させたまひ二道より進來る枯樹嵐兄弟を防がせたまふに言甲斐なくも一戰にて物の美事に破られつ阿容々々として歸來しに亞弗勒も詮方なく畢竟覇謀が不覺を取りしも我兵數の尠くして彼大軍に當らんには頗る難きに因るものなりとて諄々とは責賜ハず扨此後は奈何せんと只管諸臣ともろともに評議を凝賜へども味方の兵は千に滿たず賊の兵は萬に超たり所詮勝つべき方法はあらずと言ふより外に言なければ亞弗勒は嗟嘆に堪ず且是のみにあらずして賊の頭人枯樹嵐は早行髮と合同して威塞の中の一國威土舍に入れりといふ評判隱れもなかりしかば愈愁賜ふのみ遂に漸何やらん御心を決めけん一日城中の諸臣は更なり兵卒さへ集賜ひて之に諭賜ふやう往る頃より此國には連年殃禍打續きて萬民手足を息むに暇なき折も折とて又更にかてゝ加へて今の樣は什麼またいかなる惡運ぞ因りて熟思見るに縱哉今の時にあたりて皆一心に禦ぐとも寡をもて衆に敵すは難かりさればとて手を束ねて阿容々々として撃れんも亦これ勇無き業にこそ迚もかくても身命は擲ちたると思做して爰に一旦の恥辱を忍び思ひ〳〵に身を潛めて機會を窺ひ起るに如かじと朕は心を決めたれば諄々として止むるも詮無し頓て國運を挽回して再會するも遠からねば皆一身を重じて仇に命な失ひぞと仰賜ひて急上る涙に御衣をぞ濕したまふ思設けぬ事なれば並居る諸臣は且呆れ且驚きて流石にも悲嘆の涙をとゞめたまず頭を低れて打泣くめりせめて供奉だに仕りて生死を主とゝもにせば儂は心も遣るべきにそも叶はねば是非も無しいかにしつべきはかるべきと猛き心も崩折て階前に打臥すばかりなり少焉して亞弗勒は思ひ決めて立上り花籬と呼做したる一人の近臣をのみ召倶して身を丸人の姿に窶し心強くも出賜へば諸臣は得堪ず御跡添ふを嚇しつ賺しつ慰めつ漸にして退かし住々馴れし九重の都を後に振捨て亞國の河を遡れば岸の枯蘆吹く風にも心の沖の石ならで

乾く間もなき袖のつゆ苦の雫に 幻の夢も破れし國の運繋留べき手綱だに斷果にたる唐舟に 忝くも萬乘の御身を忍ぶ旅の空徹墩よりして 上陸し浦浦 里を過行けばいとゞ行末定めなき浪渡渡の黄昏 近傍の寺に撞く鐘ハ無心の音せども憂身となれば尙更に無常とばかり聞ゆめり千里の外に漂流て一江の中に吟嘯すと誰やらんの詠みたりし詩とはことかはり身は薄情やなあぢきなき折に出逢ひ凡人の姿とまでに成行きつ或は野露に裳を濡し或は夜屋に雨を聽く哀をいかに拂ふべき愁に此世に生れきて國王にも位せずばかゝる折にもあひぬまじ思へば此身も恨めしやと一度は思召すもまた一度は國のため民のためをし思ふ身の斷るばかりの事どもに女々しくせんは後の世の聞えも影護かりと思賜ひて我と我御心を取直し西を指してご行かせたまふに急ぐといふにはあられども日數積れば今は早十二月頃の末階に鄙びし里に着賜ふ異人を麾きて此の唱呼を言問へば此處は 朗

亞熱尼とて沙馬塞の中よと申す都を距ること三十里四十里には足らざるべしさしも遠きにあらねども王化のいまだ及バねバや聞しに劣る鄙にしてさらに取るべき家もなく里の人等の家問へば圍ひし柴垣の奧にあたりて小屋結び國の難儀は知らずかほに詫しくあれど平安に月日を送る活業は牛と羊を飼ふのみなり此體裁に亞弗勒は 忽思附賜ひて花籬に仰するやう花籬汝は何とか見たる際ては猶も程遠き方に行かまく思ひしも此處傍の樣を見れば無下にいぶせき處なり人目を闇し忍ぶ身は斯る土地こそ却に後安くもあるべけれ見よや那處なる家は人手尠き故にやあらん夕暮ながら只僅に一人二人ばかりのものが急がはしげに働くなる那處に行きて恁々に言はゞ必許さるべしいざ試んと宣ひて前に立ちつゝ行賜ふに花籬は唯々とばかり御跡に附參らせて門口近く來にければ亞弗勒は花籬ともろともにそが門を剝啄と打敲き晴々主人に物申さん是は遠來の旅人輩にて宿取後れたるも

のなり難儀は人の上ならず慈悲は人のためならずと諺にも申さずや怪き者にも候はぬを一夜の宿を借賜へいかで〳〵と言入るれば内に一人の若者あり兄とも思しき一人の者と霎時何やらん囁きて此方に來つつ門推開くを亞弗勒主從は眸を凝して之を見るに年齡は二十ばかり鼻隆へて眼光鋭く色黒うして頰瘦たり身に纏ひたる粗織の衣は塵に塗れたれども自ら氣韻を備へ頭に置きたる帽子は所々に弊れたれども尙風彩を添るが如し素生ハ賤かりぬれども何となく人品高きは世に器量ある身ながら埋果てたるものなるかと思へば心懷く亞弗勒は會釋すれば那若者も熟々と亞弗勒等が體を見て怪からずと知りにけん禮も正しく言へるやう宣ふ趣最傷はし穢きを厭ひたまハずば兎も角もして參らせん母屋に入りて憩賜へといひつゝ二人を誘導けば亞弗勒も花籠も心やうやく落付きて引るゝまゝに進入り奧の一間に立入れば軈て主人夫婦の者出來りて慇懃に客人よくこそ來ましたれ己は此家の主人にて波綠舵と呼做す者又是なるは吾妻にて愛妥とは呼ばれたり又卿等を迎申しゝ那若者は參遜とて近き頃までさる方に仕へつゝ在しかど料らざりける殃禍にて主に離奉りしより詮方なく荊妻は彼が肉身の姉なればすなハち己等二人の者が往る月まで住ふたる抹墩の家に身を寄せて折を伺ひ候ひしに那處も賊の入來れば掠めらるゝの口惜さに此處へ移り候のみと言ひつゝみづから心附き吁我ながら鈍ましや益なき言を言出でゝ可惜興を醒したる今日は己が亡母の命日に候へば心ばかりの追善序いかで人の爲めもがなと思ふ折から卿等二人料らず宿り乞賜へばよき折なりと思ふよりかくは宿貸しまゐらすなりこや〳〵愛妥亡母に供奉りしものもあらん引きて今此客人達にまゐらせずやと促せば愛妥は心得厨の方に出行くほどに波綠舵も亞弗勒等に打對ひ己は用事の殘りたればそを終らんと思ふのみ霎時がほど待賜へと言訖りて衝と身を起し外方指して出行きたる跡には

殘る君臣二人思はず目と目を見合すばかり打駭かれつゝ亞弗勒は花籬に打對ひ曩に彼等が快く一夜の宿を許しゝより如何なる家かと思ひしに問はずかたりの今の一言聞けば這方も豫てより面こそ知らねそが名をば聞も知りたる參遜は主人主婦が弟にて曩に朕を遁へし折にも世に卑なるべき壯佼とみたるは僻目にあらざりき那は嘩門度が方にしも年久くは仕へぬれどいまだ朕を知らねばこそ心も得附かであるならめ然はさりながら他人の心の底は測られず兎も角も云拵へて此家に身を潜び那等三人が心の程を篤と探り究めつゝ愈怪からずもあらば朕名を明すも遲からじと聲を竊めて宣へば花籬とて異議もなく然るべく候と應へ奉りて稍霎時言葉なくてあるほどに主人波祿舵が妻愛妥は設けの膳の成しとて參遜ともろともに種々の物持出でつ食卓の上に押並べていざとばかりに勸むれバ那の波祿舵も早既に用事をば仕果けん是も食卓の那方にありて勸むること大方ならず屢急れて亞弗勒は花籬に目を注し故意と辭まず忝なしと喜びを述て食了れば軈て愛妥と參遜は皿小鉢を引きにけり既にして皆打集ひて四方山の話の中に亞弗勒は名を詐りて密亭李といひ花籬はまた佩樹と名乘りて未だ本名をば打出さず然りけれども波祿舵等は流石に眼高くして早くも密亭李等二人をば亞弗勒等主從と推察したりければいかにもなして隱匿てまゐらせばやと思ふにぞ軈て波祿舵はそれとなく亞弗勒等にいへるやう斯くいへば何とやらん無禮に聞えまゐらせんかそれ將推も測られねど先一通り聞ゆべし曩にも申したる如く己等は近きころ此里に移りしかば兎角に不便のいと多かりもし卿達急がせたまハず日を果ぬるを厭はずば霎時此家に止まりたまひ不便を扶けたまハずやといふ言葉もいまだ訖らず亞弗勒の密亭李は願ふところと坐をすゝめそは戯に候はずやもし然らずばその事こそ己等が望むところなれ斯ばかりいへば何とやらん聞取にくゝも候べし本己等ハ京のもの隙

りしことのありければ暫時は程よき處にて身を過さんと思ひつゝ偖こそかく旅路に出たれ只疑はで卿が家にしばらく養ひたまひなば此上なき幸に候べし佩樹は如何にぞやと那花羅に問賜へば佩樹も打笑みつ洵に主人の恵をもて然るべき事に成行きなばいとも便宜にこそ候へ予で恵を願ふのみといふを波線舵聞あへずそはまた餘に慇懃なり己が力にも不便のあらずば幾日まで養參らすとも恩となすべきものにもあらずいざさらば今日よりは御心惜かで住したまへ必ず懸念したまふなと事はや術よくなりしかば妻なる愛妥も參遥もいと愛たしと稱へつゝ其夜はやがて皆々は各々臥床に入りにけり畢竟亞弗勒の大王が此白屋に身を寄賜ひし後の物語甚麽にぞやそはまた卷を更めて第九回の初めに説かなん。

嘲戒小說天狗　第一回

聞ゆるは出鱈目の讀方で大膽にもテムペストを讀む聲‖ハイル　メーニーコロルド　メスセンゲル…ワイフウオーフー　ジユ…ジユ…ジユピテール　("Hail, Many Coloured Messenger……Wife of Tupiter,——)あゝどうも旨いて實にシエークスピーア翁の筆力は凄いものだ……感心の外は無い。此テムペストの戯曲などは三十餘種い中でも随分屈指といふ程有て……通篇何處とて可笑く無い所は無いテ、そろ〳〵こいつウ……飜譯でもして……ナア…一番世中の平凡くた共を吃驚させて遣らうか知らん…それでも些可愛さうだ。何しろシエー先生は豪氣な人だ‖と言ふ聲のする一室は熱海の宿屋鼻高屋の二階で此大風呂敷を擴げる先生は、湯治に來て居る自稱才子年はまだ三十に奈良漬の香の物號をば意外と茶漬の澤庵押が利いた風……鈴ではないがブラ〳〵と懶ける生れつき月夜に釜を糠味噌の那須月五郎と言て親父から貰受けた大事の名は氣が利かないと顧ず、生讀の甲斐無い小說から些とは和文の書方を覺えたもんでサア、新聞に投書を爲るは〳〵横町の熊の軒下で蜘蛛が巣を張たとか溝板が外れて溝の中が見えたとか詰らぬ事に手間隙潰して感有りとか麵包ありとかさりとは甘たるい物斗り書散し毎々二錢の御散財‖醉興な人も有ば有る物だ‖と笑ひ乍ら出してやれば當人は早最う有頂天に昇て逆に押立た樣な氣になり、其新聞を持て此所彼方を跳廻り終には新聞紙も餘りいぢくられるため下手の水仙活と來てクチヤ〳〵になる迄見せびらかすも道樂と思て勘辨すれば段々に跟上り三四度の投書を緣として押强くも記者の家へ出掛けどうかこうか賴込でざつとまあ校生方位な役目になるとサア。大變今度は有頂天で横に寢た了簡となり動きツこ

は無いとの大澄まし、落語家仕入か乃至は燒直の小說をエンヤラヤツと作て本屋をおだて込み漸くの事で出版した處が何ういふ風の吹廻か賣れぬ方でも無かつたので御本人の嬉さ涯り無く、毎日無駄な足を運んで東京中の本屋を驅回り其店に自分の作つた戀の辻占とか鮎の煮浸しとかいふが並べてあるを見てはニコリとし人が其書を買て居るを見てはニコリとし、至て廻船問屋の店前同樣荷梱盡しそれで些し儲けたとかで妻忍諸共此處へ湯治と洒落込んだが隨分儉の字の御客だとか。

溫泉宿に泊ツて居る内にも已が天狗を見せたく思ふ心あれば、何處で借りて來たかまだ能く解りもせぬにシエークスピーアの全集を御持參で、今已が部屋の前を人が通るを見掛けて前の如く大言を吐いたが元來英語は喰詰書生の私塾で漸く綴方位覺えた手際ゆえ此樣な下手な讀法を遣たのサ此人身體は大きくて惡るく言はゞ半鐘泥棒顏形は重箱で殆んど四角な出來ながら當人は額の雁金を自慢にする事と見えいやに髮を搔上げてカツキリと剃付け眼は倒に付けたかと思ふ程尻がさがり葉の尺八黃いろな聲を聞いたらば如何に爲るか知らん顏色は硝酸で焦した竹程では無けれどまつ白いとは行かぬ質されど其眉ばかりが判然と一の字を爲した故か何と無く人目に立つは好けれども持前の辯口で喋々と論を始める時には此眉が眼緣に並行して昇降し、鼻迄が電氣を傳へた筋肉同樣ピクノヽするは氣障の極度サ○妻君のお村は今年約二十一元が教育の無い婦人故其人品に褒めるべき點は更に無い唯正直が身の德で元泥水の中に在りながら手練手管の械借せの吳れのと言ふねだり言は母の胎內へ忘れて生娘恍惚子氣のあとけなさが終に意外の氣にィリ豆花の咲く新夫婦と鳴海絞の浴衣地一反も半分宛にして着る中よし顏の色は鉛毒に觸れて蒼白く額が拔上がつて瓜の核も何の糸瓜ちと長めいてボンヤリした容貌は○○面だと云つたふられ客もあつたか意外の眼から見れば又其處へ理窟が付く‖お村はまあ一寸譬て見れば玉山製の十軒店物に魂を入れたやう華族の姫君樣と申したとても過ぎはせ

ぬ是で己れとの釣合が月夜に茶飯に黒羽織毎日見ても飽きはせぬ。此間も己と談話の折不圖涎を垂らしたので恥かしさうに笑ツた體などどうも言はれぬ價値が有る――と涎までは欲目の量氣夫れも驥尾に跟いた庇蔭若し、此涎が老人の口から出たならば――エヽぢゝむさい――と云はれるに違ひ無い。嗚呼同じ涎でも驥尾に跟かねば惡く云はれ驥尾に跟けば善く云はれるとは……龍門では無いが……扨も……扨も……噫扨も……

斯て意外は前の如く大言を吐いて居ると其處を通掛つた一人の掃大盡、是も耳學問を好くと見え今此處で意外の獨語するを立聞きし感心した樣子で其儘何も言ず己が部屋の方へ行く體を簾越にとくと視て意外は切に打悅び

(意)――占めたぞ那奴は一番おれの圈套に落たわい。今にそれ……ナア……お村屹度扇子か短冊を持て來るか……デ……なければ小説の草稿でも……ネ……那奴が頻に來るに違ない――……

と言へとお村は不審晴れず

(村)――ですか……なぜでございます。

(意)――なぜでとは感がわるい。どうもおれのいふ言をきいてゐた風が別であつた――……

といつて首を少し傾け

(意)――まづこんな樣な首をしておれのいふ言をきゐて……そしてハヽアと溜息をついて是は誰でも感心した時には多くこの風をするもので……心理學から推究しても間違のない觀察サ小説家といふ者はナ……此樣な所をも抜目なく注意しないでは……あ…あ…あれ御覽、ソーラ這方を振歸り／＼…ネ――…

(村)――ヱー

(意)――行くだらう。

(村)――ヘヱ――

(意)――行つたらうそれだから占めたといふのサ――

と譯もわからず無上に悅べば、お村も俱に笑坪に入たが別に挨拶も出來ぬ故、只にや／＼として居る內段々に夜もふけて四邊は全く靜になり前の庭にある瀧の音がゴウ

ノ〳〵と響くより外には何も聞えず、シーンと淋しく成て來た……が意外は＝今に乾度髯大盡が何かを賴に來るに違無い……違無い＝と思つてゐるから馬鹿律氣にも樓上の尾生をきめてマジリ〳〵と待つてゐれど一向に音も沙汰もない。今はお村もぢれてくるので流石の意外もチト鬱いた樣な工合で

(意)＝ハテ變だな何でもあの時あの髯がおれのいふ言をきゝながらあゝ首を傾けた樣子が……どうもさうだと思ツたが＝……

と呟くをよくもきかずお村は僅ばかり齒を露はして笑ひながら

(村)＝でも……それでも……今だに何とも言つて來ないではありませんか。來るのならモツト早く來る筈でしやうに＝……

(意)＝そりやアさうサ然ういへばそんな物だが＝……

といひつゝ又も首を左右に傾けた霎刻考へ、

(意)＝いやどうもさうでない、慥に來るに違ないどうしても首をかう傾けた樣子が……かうやつて……ハヽア……かう溜息をついた樣子が……

聲をすこし大きく爲し

(意)＝實に感心したに違無い＝

と宛然體操の稽古でもするやうに首を掉て頻に呟いてゐる折から、俄かに南坐敷の方で誰かはしらねどあげた大聲。ヒエーイ…ど…ど…どろツとぬ…ぬ…ぬす坊…うぬウ＝

意外は是をきくよりも吃驚した事かしなかつた事か、我を忘れて飛上り廊下の方へ駈出すと出遭頭にバーツタリ一人の男に衝當る。衝當ツたで那方もびつくり這奴則ち盜賊ゆゑ捕へられては大變と手にもつ一個懷中時計を早速の礫にこの意外の額を望んで抛付た。狙は狂はず眉間の皮を破つた故に意外はたまらず＝噫いた＝……といつて倒れた體にお村も駭き＝アラ……マア＝…といつて夫を抱起し見ると無殘や額から血がだら〳〵とDECEMBER(十二月)十二ガツカリした姿、之にお村はなほ狼狽へ＝

大變ですよもし誰か……巡査さんエ‖と泣聲でわめく時しも丁度好く宿の主人と外三四人がはや盗賊を追かけながら此處にかけ來ると、意外が其處に倒れてゐるで……皆々も仰天し中に主人は尚驚き

(主人)‖御新造様旦那様はどうかなされましてすかオヤ疵を……盗賊に…あのぬすつとに…オヤ〳〵〳〵‖

お村は無念と云ふ體にて

(村)‖オヤ〳〵處ではありません。ご覧なさい。血…血…血からだら〳〵と…額が出て居ますョー‖

(主人)‖それはマア大變なシテ泥は逃げましたか‖

(村)‖逃げないなら此處に居ますワ、逃げたればこそ居ないのサ。そんな事はどうでも……早く醫師を呼んで來て‖……と腹立しさに頭ごなし嘗附く如く罵られて主人は青ゝ鳴子の小雀羽もきかぬ程に勢も脱けて來た。されど意外は素よりその疵とてあまり深いと云ふ程でも無く初心なれ練者と云ふ際で僅に皮が切れた位故ひどく元氣も衰へずお村に疵を縛らせてから徐に起上がつてすはツたを見て主人も少しは安心し、恰も頭蓋骨の中に鉛を封じ込めたかと思ふ許に頭をさげて意外に向ひ

(主人)‖エ、どうも……誠に早……飛んだご難儀をお掛申し實に申譯もございません。あり様はあちらの部屋にお出でなさる御客様が……何とか……餘程美事な懐中時計とかをお持なされましたが夫れを見込んで今晩鍵印が忍込み盗んで逃出します處を不圖見咎められまして慌てゝこちらへ逃げて参り、旦那様までに此の様な御迷惑を……室にお詫の申様もムりませぬ‖此時迄意外は顔を皺めて疵を押へ、わきの方を向きながら默然として聴いて居たが、今此言葉が了ると均しくたちまち主人の方を向きちとばかり笑掛けた。お村はまた最前よりして夫の顔をツクゝと見て居ると意外が今の有様に是も亦些しく胸を休め何と言ひ出すかと考へて居る様子で意外と主人との顔を等分に眺めて居る。

(意)‖否是も運が悪るかツたのサ、泥坊と聞いたから何が偖持前の侠氣が出て堪らない故賴まれもせぬ事ながら

一寸手を出して見た處大失策で閉口至極全體些しは柔術を爲た事も有ツたからナアニ一人や二人のかのすねなんざア何とも思はないのだが‖……時しも阿村は俄に襟元搔繕い四邊の人をジロリと見てツンと澄まし返つた體‖吾夫は柔術にも長けて居ます‖と言はぬ斗りの有樣それを見て可笑くてのか、但しは意外の言を聞いて可笑いのか主人は獨微笑して居る意外は猶も言語を繼ぎ

(意)‖出遇がしらといふので……不意を打たれたから仕方が無い。夫れを虛誕と思ふなら八犬傳をご覽じろねエ小文吾とも言はれる大豪傑が夥兵如きに……あの馬加の夥兵如きに何故さう安々と搦められるものですか、處を此處だて其處にそれ不意といふ惡魔が手傳つたから詮術とても那須月五郎意外に意外の珍事もあるなる‖と言へば阿村も知ツた態。

(村)‖さう〳〵あの邊は實に……讀んで居ても胸がどき〳〵する處ですね。去年の事でしたツけ朋輩衆が‖……と言掛けて飛んだ事を言出したと心附いたが紛らす手段に困ツて故意と後方を振向き何も有らぬ坐敷の隅を瞬きもせず眺めて居る。

夫婦揃ふた高慢齋、ことに婦人の差出口は極めて醜いをも思はず、さも讀んだと言ぬ許の光景は傍腹痛い事のかぎり、其もよけれど流石に女子の胸せまく‖朋輩衆‖といひ出して己が素生の招牌を出したなど品こそ違へ世の中に隨分多くある事ども、宿の主人はどういふ心かなほ頻にニコ〳〵して‖へゝイへゝイとばかりいつて居る心の內はいかなるものか其はこの次其はこの次。

前にも述べた如く意外は頗る吝嗇の客にて來客が有て菓子を出すに、いつも宿屋に吩咐て金米糖氷砂糖ばかりを出させる類ゆへ宿屋にもよく思れず隨ひて懷中が些薄刄の小刀金錢の切味が下さらぬとは如何なる新參の紙屑買が覩ても遲庭なく鑑定を附燒刄鉛刀（ナマクラ）ぬらくらと鰻登に疵の療治で日を費し、それで宿賃の停滯など爲されては迷惑と最初は主人も思つたなれど、投疵はそれ程でもなく、八犬傳を引いて辨護する勇氣の有るに一角は安心

し、可笑くもあり嬉しくもあれば、其處で前の樣に莞爾〳〵して居たとは隨分拔目が梨礫早速の礫に投付られた時計の事を思出して意外は礮と横手を拍ち

(意)＝夫は然うと……シテ見れば先刻かの跡白波が投付たは其時計に違ひない……が……それを其儘に再度捨て逃げる程の勇氣はよもや有るまいが……いづれ此邊に………ねェ皆さん小文吾が拾ッた剪刀(ハサミ)自物(ノモノ)落ちて居るかも知れぬから＝……と跡は腮で指示すに主人達も心得て一同に起ち上り段の下は更なり座敷の隅迄手を差入れ眼を睜りて索めたれど影も無い影も無い故稍少馬主人も首を傾げて

(主人)＝ハテナ其では譬喩にさへも盗人は何とやらで矢張り一度は旦那樣に地附て御眼を昡ませ置き拾つて逃げたでござりましよう＝と言ふ言葉を意外は打消し

(意)＝それは些受取憎いです考へても御覽なさい。追はれる虎は蹊傍に肉が有ても其を食はずまた逃げて行く鴉(カラス)は假令樹に纍々たる柿の實が有るにもせよそれを顧ることなどは無でしやう。近く書物で例を引くなら八犬傳の第六輯に……イヤサ何故笑ひたまふ笑ふ處の事ではない信乃現八莊助小文吾及び道節なんどの五犬士が荒布山の危難の時逃げた時は何う逃げました……洵然(イエス)……蹄を擇ばず逃げたでしよう。ナニ八犬傳をば讀んだ事はないと……それは不開化極るテ、以前は高價な書物で有つたが此頃東京の兎屋で一圓九十錢に賣る故にそれは〳〵東京では實に非常な評判サ。此處が實に妙な物で一圓九十錢はザット二圓の樣なもの、其處を一圓といふ聲で廉價といふ思想が腦中に浮かみ、跡の九十錢には眼が付かずドシ〳〵買ふから可笑いサ。もし之を二圓と言出したらば逡巡するものゝ多くなるは必然にて此處が是れ心理學(サイコロジー)でも面白く講ずる處で、サア心理學(サイコロジー)と一口に言つても凡俗には分解らない。之を解釋するにまづ自(イーゴー)と他(ノンイーゴー)との區別を言はなくては叶はぬ事で、例へば＝……

此心理學の講義が初まるや否や例の性質とて一文字の眉は頻りに上ツたり下ツたりし鼻はピク〳〵して來た處

悲や……無残や……慨はしや……根が飜譯書の拾讀で僅に覗いた學の事ゆへ自他(イーゴーノンイーゴー)の解義をば忘れてしまひいくら考へても按じが付かない。仕方無く紛らはすためエヘンと咳拂をするとゲロリと咽喉の痰が吹切れたを吐出せば好いに……アラ穢い……變な口付をしてグット飲込み、

(意)＝＝ホイ是は拙者の議論も路を擇ばず岐路に入つた其の路筋を擧げていへば、まづ虎と猫の譬喩が基で一轉して八犬傳の談義となり、それが楔子と爲つて兎屋が出て來り兎屋が楔子で心理學斯う變化が無くては面白く無い。Variety is Charming(ヴアライエ・イーイスチヤーミング)とは西人の格言至れるかな盡せる哉。オヤ／＼又もや拙者の講義は岐路に入つて奇楔となつた。其は兎もあれ角もあれかたれば吾儕は猶いまだ主人の言葉に從ひ難かり、異存あらば宣ひね……ア、口がくたびれた＝並べ立てた我楽多議論、うつにも駮たれぬ夢想に主人はほと／＼當惑し＝ですけれど……ですけれど＝……と唸るばかり手を附かねて居る所から、三四人の群の中より現れ出でたは向の程、意外の獨語を偷聞した拜大盡にて而も今宵時計を盗まれた人……

(未　完)

韻文集

明治韻文革新と美妙

——韻文解題——

小泉苳三

一　明治中期韻文概觀

山田美妙の明治韻文史上に於ける業績は從來屢閑却せられがちである。しかし、彼の韻文に於ける業績を省みずして、彼の企圖を理解することは困難であると同時に、また彼を無視して明治韻文の革新を語ることは不可能である。彼の韻文革新上の功績を明にするためには、先づ當時の韻文の狀勢を明にすることが必要である。明治十五年頃から二十年前後にかけて、文化の進展にともなひ、新時代には新時代の新しい詩形が創られるべきである、といふ考が一部の知識階級に持たれた。この考は初は可なり漠然としたものではあつたが、それだけにまた漸次人々の間に擴大して行つたのである。そのうへ御歌所派歌人を中心に多くの歌人が試みた「新題歌」の持つ内容形式の矛盾が、さらにその勢を助長した。この新時代の詩——これを當時國詩と稱してゐる——が生れねばならないといふことは、多少なりとも進歩的な思想を持つものである限り反對な筈はない。しかし、それなら、どういふ詩形が新時代を代表するに足る國詩たりうるかといふ點になると、非常に困難な問題となつてくる。「新體詩抄」（十五年）の運動は、その一つの答案であつた。新體詩とは、古い傳統をもつ和歌（短歌を一般にさすが、ここには長歌今樣をもふくめて）では到底新時代を表現することはできない、そこで、泰西の詩への知識にもとづいて、一つの試みとして提出した新體の詩と

いふ意味である。いはば、泰西の詩學にもとづく國詩革新論が、具體的には明治文學に新體詩を產んだといふ結果になつたのである。

しかし、新體詩は最初意圖せられた如き新時代の國詩としての役割を、完全に果し得てゐるとはいへない。何故なら、それは長歌及今樣を止揚せる新詩形と見ることはできても、別に短歌は短歌として發展する方向をとるにいたつてゐるのである。もちろん明治二十年三十年代を通じて、短歌を短詩と呼んでゐる人々があるし、さういふ人々は新派和歌をば「三十一文字の新體の詩」と見てゐるのであるが「明星」の發刊と同時に短歌は新體詩と明瞭な分離を示すにいたつてゐる。それ以後に於て、短歌を「短詩何章」と稱した例は見出せない。いま、かうした國詩革新論及び進んでは國詩創建論のあとをたどつてみると、その出發點にとりあげられてゐる問題は、多くは形式及用語のうへにかゝつてゐたことが知られる。それは、和歌が古い傳統を持つ藝術として、すつかり形式化し終つてゐるための必然の歸結であつたのである。

美妙の明治韻文史上に於ける業績も、また多分に技術的であつた。彼は明治元年に生れた。彼のうちには、未だ少からず前時代的なものの殘滓が認められる。新しい教育をうけ、學問を好み、且つ天才的な頭腦の持主であつたので二十年前後の彼の文學上の仕事は、一見著しく進步的の樣相を帶びてゐるけれども、今日より見れば、彼の全般の業績が技術的であつたことは否定できない。殊に主觀の強く滲む抒情詩にあつては特にそれが著しく眼につく。いへば彼の業績は、前時代的な精神と、泰西詩學への知識にもとづく韻文の技術的革新との調和といふ點にあつたのである。

彼は「新體詩抄」の作品を不可としてゐた。彼がみづから作るところの新體詩を「唱歌」と稱してゐるのも、その革新者たる意氣の現れであるとともに、一つはその作品を「新體詩抄」一派の作品と同一視せられることを喜ばぬた

めであつたのである。さうかというて、彼は池袋清風の「新體詩抄」を評した「新體詩評」（國民之友）の如く、風雅の世界に固定してゐたのでないことはいふまでもない。彼から見れば、「新體詩抄」の粗笨な作品はやや急進に過ぎて、形式の調和を缺いてゐたのである。

以上によつて明な如く、明治韻文が技術的革新を必要とする限に於て、彼は進歩的存在として重要な役割を負擔してゐた。そして、それは明治二十年頃から、二十四五年頃までの間であつた。それを過ぎるとともに、彼の明治韻文史上の業績は、時代から後退して行かざるを得なかつたのである。

かかる進歩的意義を持つ彼の韻文革新論としては、第一に「日本韻文論」がある。「日本韻文論」については、「評論隨筆解題」の項に於て解說せられてゐる筈であるから、ここには省略するとして、明治の新體詩はこの「日本韻文論」を持つことによつて、初めて新しい具體的な理論を得たのである。この一篇によつても、明治韻文革新上の美妙の功績は認められていい。もし、これが完成せられてゐたら、さらに後の新體詩に影響すること大なるものがあつたであらうとも思はれる。和歌（短歌）に於ける萩野由之の「國學和歌改良論」（二一四）は、これに比べると遙かに抽象的であつた。そこへ行くと、佐々木弘綱の「長歌改良論」（二一九）は、七五調について論じたものであつただけに、美妙の興味をひいたらしい。「長歌改良論を讀んで」なる一篇を、彼は讀賣新聞（二一一）に寄せてゐる。彼の韻文論としては、この外に「唱歌作る方初學」（いらつめ二七、二八號）がある。この二十二年の「唱歌作る方初學」は、その翌年の「日本韻文について學者が工夫すべき箇條」（いらつめ四〇號）及び「韻語の品格略說」（いらつめ四一號）、同年の「日本韻文に對する放任主義」（國民之友二三、九）等と共に、つづいて書かれた「日文韻文論」のうちに要約せられてゐる。その後の彼の韻文論は「七五、五七」（雲峰子へ）（いらつめ八一號）、美文作法（三二七）、新體詩歌作法（三五一〇）等によつて知ることができる。が、それは

すでに革新的意義を持つものではなかつた。

二　作品の解題

美妙の韻文革新論は、すでに觸れて來た如く技術的であつた。そのため、彼の所論は或點まで新體詩の創作及譯詩の上に實現の可能性を持つてゐる。事實彼は可なり忠實にそれを實行して來てゐる。これは、他の二三の抽象論に比して特に注意せられねばならない。と同時に、彼の韻文の作品の價値は、内容の新鮮よりもむしろ形式の新鮮のうへにかかつてゐるのである。

「新體詞華少年姿」（一九八）近世の文學、特に馬琴の影響の濃いことは、その書名からも容易に推しうるであらう。自序がこのことを明瞭に語つてゐる。

一に宗次、二に白菊、三に友世、四に梅若、若衆達が艶けき髪の亂れし處取繕ろひ、眺めて見れとばかりにて一時の興に任せつつ、硯水の薫だにも無き硯の海にまゆ墨磨り、毛筋棒ならぬ禿筆一本、その命毛を理めしから、腕鈍ければ心は後毛、ほつれかかるを漸に美軟石の力にて稍塗附けし新參髪結、才三は無けれど阿駒の色白、素人の塩梅を見置玉ふも亦學問と御爲ごかしに有平糖の甘き披露をカクの如く天保時代の作者が口眞似。ひのえいぬみ月はつか　美妙齋の蛙船しるす

抄出した第一平田三五郎宗次以下、第二白菊、第三上田俊一郎友世、第四梅若丸、第五鳥屋福壽丸、第六森蘭丸長貞、第七大川數馬上、第八大川數馬下。附言白菊の考、梅若の考の考證二篇より成り、最後に紅葉山人の跋がある。

抄出した部分によつて明な如く、中世史上の悲劇を拉し來たつて數篇の哀話を描き出してゐる。彼の得意とする歷史

小說の萠芽がすでにここに胚胎してゐる。この數篇に我々は早くも彼のすべての作品を貫いてゐる抒情的分子を見るであらう。歷史のうへの人物の悲運に寄せた彼の同情と共感とは、可なり新鮮に我々を打つて作中の人物に共鳴させる。そして、彼は回想風にさうした悲運なる物語を次々と展開してゆかうとしてゐる。形式の上よりいへば、‖：等を用ゐてゐる等の外には、未だ多分に前時代的である。上欄に屢々註解を施せる如きも、この種のものが專ら婦女子童幼を對象とした前時代からのひきつゞきであるといへよう。いふまでもなく、その裏に時代の啓蒙性が認められることは否定できないが。が、詩としての價値は、その歷史的意義を除いては、決して高いものとはいへない。

「新體詞選」（一九八）同年の刊行にかかるものであるが、「新體詩抄」と對立的な意識のもとに作られてゐるところに「少年姿」に比して一段の進步的な氣魄が感じられる。彼は自序に於ていふ。

爰に集めし新體詞はおのれの外に數名の友人諸氏の作にして、皆文法を謬らず。唯佳作と云べきは僅に二三篇ながら（傑作は一篇も無し。）五六年來我國に現れたる物の內にて、かの和讚か鞠唄か、さらずば西洋文章の直譯には非ずやと訝る迄に氣韵無く、而も文法謬りたる新體詞より優れる事、豈一等の比ならんやといへば看客諸彥の中には自負なりとして嘲り笑ひ、過言なりとして怒る人無きにしもあらざるべけれど、かくては諸彥も具眼にあらず。畢竟右の物どもをば何故に、氣韵無く文法誤りたるとするか、其詳細を擧げなんはいと〳〵容易き事ながら、流石にすこしく其作者の名譽に關する事なれば、敢て今は之を言はず。そも乞はれなば詮方なし。然はあれども、其作者とても巧拙を判定する力無きにあらざるべし。力無きにもあらずして鞠唄めきたる新體詞を世に出だししは只に是新體詞をして早く世に廣まらせんとの方便ならん。それにて滿足する如き卑屈の人に非ざるべければ、何を憎てかにかくと短處を深く穿たんや。されど俗曲改良の美事もやうやく初まるべき折からなるに、此頃世に新體詞の勢力

も稍熾になるものから、かのグリースのペリクルス類に歌典を奨勵して、もて國民に美術の識を得さしめ其如き結果を得べき方法の一端すこしく現れたる嘉瑞なりと思ふうれしさに早くまた鞠唄めきたる……和讃めきたる……直譯めきたる物ども全く跡を絶え、眞美眞佳の新體詞のあらはれなんを願ふの憎まれ口をたたくになん、希くは江湖の才子諸君の具眼なる、作者の諸氏の博識なる、おのれが評を俟たずとも、既に知らせたまふべし。唯小成に安んぜず、進取の氣象をはげまして、よしや傑作ならずとも、せめては和讃鞠唄めかず、又直譯めきたらぬを作り出ださせたまはん事を、なまじひに是非の差引無く西洋風を持込みて、日本固有の美妙の趣味を汚すなど云ことは厭ふべし嫌ふべし。ひのえいぬ葉月のはじめつかた　美妙齋にて讀書のいとま、椎耕蛙船しるす

彼が新體詩といふ名稱を用ゐなかつたことはすでに述べておいた。ここでは新體詞と稱してゐるのである。そこにも、「新體詩抄」への反撥が感じられる。序文中の「和讃か鞠唄」とは、當時の歌人等の作つた長歌今樣等を指し、「西洋文の直譯」とは「新體詩抄」一派の作品を意味する。舊歌人等の作品については問はず、「新體詩抄」の作品が持つ歷史的意義は彼には理解せられなかつたのである。都會に育ち都會の教養を持つ彼は、ただ彼等の形式的蕪雜さが厭はしかつたのであらう。一つのものが革新せられようとする時、粗笨蕪雜が却つて屢效果を將來する。その點に於て彼はつひに破壞の人ではなかつた。そこに彼の文學上の行動の不徹底さが殘されてゐるのである。新體詞選は、紅葉、丸岡九華の二人の作品を加へ三人の合著、即ち美妙齋主人編輯の形をとつてゐる。第一書生歌、綠山散史。第二士卒の夢、延春亭主人。第三明治十五年の四月隅田川原に花を觀て、美妙齋主人。第四佛國革命歌、梅廼家。第五行燈蛙船。第六戰景大和魂、椎耕。第七路易帝斷頭臺の場、延春亭。第八古戰場、梅のやかをる。第九大川友右衛門、美妙齋。第十リツプ、バン、ウンクル、かをる（譯詩）の十篇より成る。「少年姿」と同じく七五調である。自序に見る

意氣にかかはらず、「少年姿」を一歩も出てゐない。ただ「少年姿」がすべて史上の人物を內容としてゐるのに對してこれは現前事象を素材としてゐるところに、多少の進展が認められる。抄出した「戰景大和魂」は「敵は幾萬ありとても」から初まる。我々の少年時代にも廣く歌はれたものである。「大川友右衛門」は「少年姿」の作との比較に便するつもりで抄出しておいた。

「いらつめ」（自第一號至第八十四號）雜誌「いらつめ」には彼の韻文が多く掲げられてゐる。またその後半には一般讀者から募集した新體詩が掲載されてゐる。これは韻文普及の上に可なり大きな功績となつたのである「はるのあけぼの」（いらつめ七號）は、言文一致體の詩として、また表現法に種々工夫を施してゐる標本といふ意味で抄出した。この頃から、韻文を唱ふべきものとして作らねばならないといふ意識が、次第に強くなつていつてゐる。明治韻文の革新を、さういふ面から論んじたものに、さきに末松謙澄の「歌樂論」（十七年東京日日新聞）がある。彼の「日本韻文論」もまたさういふ意識が可なり濃く滲透してゐる。彼は「いらつめ」では屢それを實行してゐる。彼は、好んで韻文に音譜を附して掲げつひには新體詩をば「新體詞」からすすんで「唱歌」とよんでゐるのである。「夜の霰」（いらつめ二一號）は譯詩である。この詩は八（五三）六（三三）調である。形式の上から後の新體詩に影響を及ぼしたものとして注意すべき作といへよう。同じ譯詩ではあるが、「新體詩抄」に比すれば著しく洗練されてゐる。ただ彼は韻文を唱ふべきものとしてゐたために、音調の上にとらはれて、表現が淺くすべていつてゐる點は惜まれる。

「新編韻文青年唱歌集」第一編第二編（二四八）自作の新體詩集である。「唱歌」とは新體詩のことである。本書の解題はこの「まへおき」が最もよく語つてゐる。

題して青年唱歌集と云ふは從來願はくは成人となり、幸ひにして詩神の恵みの雨露に浴して何とぞして兒孫をもう

けたい所存、あはれ豫ねてから思ふ韵文の成長しろと望む計り……今は此道に盡す人士もやうやく多し、温雅な雲峰子、端麗の淺花子、一種飄逸の梅花道人、猶まだ隱れて現はれぬ蛟龍も必ず有ることとせめて隗になつたかと思へば、完成協力の詩聖を待つ念もいよいよ深く、而も自らなぐさめる處も有ります。この書の中には新作も有り舊作も甚しくは改竄せず、中で「夏の貧家」「つぼすみれ」等四五種は國民之友に出した物、「八州」は少年園、「夢」は女學雜誌に一度出た物、今發行所の寛大な許可を得て轉載する事を得た云云。明治二十四年八月上旬　美妙齋

抄出した「病後の吟」は「いらつめ」十九號に載つたもの。二十年秋の作。五五調である。原作には、第二句と第三句の間に「ゆめ　ふけて　はだ　さむき　よぎ、を　のみ　なつかしむ」の二句があるのが、本集では省かれてゐる等所々改作したあとがある。「夏の貧家」は「國民之友」二十四年九月號に載つたもの。七五調である。音調の優雅といふことにとらはれてゐるので、悲痛なるべき素材から少しも悲痛感が湧いて來ない。「落魄の旅」は「十津川鄕の人北海道に移住するを聞きて望む處あり」と題して、「いらつめ」第三十號に掲げられたもの。五七調である。例によつて題材にともなふべき痛切味の缺けてゐる作である。「夢」は「女學雜誌」の二十一年八月號に出たもの。五七五調である。いづれも、彼が詩形のうへに拂つた努力のあとをしのぶべく抄出したものである。

以上、彼の韻文を通じて知られるのは、彼が七五調から出發して、五七、八六、五五、五七、五七五等種々の試作を敢へてしてゐることである。

本集より以後の彼の韻文は、次第に進步的な意義を失つて、時代から後退してしまつた。なほ彼の和歌(短歌)についてもいふべきであるが、技術的革新家としての彼が、たとひ舊來の形式による和歌の作を多少殘してゐるとしてもその價値は敢へて論ずるまでもないであらう。いまは省略に從ふこととする。

少年姿（抄）

平田三五郎宗次

略傳、平田三五郎宗次ハ、薩摩國、島津家の執權職なる平田太郎左衛門尉增宗の嫡男なり。いまだ仂き齡ながら、文武二道に志厚く、其性剛毅なるものから同く島津家の家臣にて弱年ながら近國までも頗英名を轟かしたる吉田清家てふ壯士と同氣遂に相求めて、料らず兄弟の義を結び、生死を同にせんと盟ひしより、二人常に相離れず文を勵ミ、武を磨き、をさをさ他事も無かりしに、慶長四年の頃かとよ、伊集院源次郎といへる者故ありて君を怨ミ居城都城に楯籠り、十二の砦を築構へ、謀叛の色を現せしかバ、君よりも討手を向けて討伐あり。されバ、清家も宗次も、偕に軍に召されつゝ、十二砦の一なる財部の城に向ひしに、合戰頗烈くして賊味方の死傷數知れず。

彼の清家も今迄に、數度の軍を經來りて、事慣れたる者ながら、竟に叶はずや、果敢なくも戰死したるを見るからに、宗次の愁歎ハ言ふべくもあらず、其儘賊中に突入りて、是も亦戰歿しつ、生死を同にと盟ひたる其言の葉を全くせり。

時に宗次は十五歳、清家ハ廿六歳なりしとぞ。

○文中清家死せし後、宗次の愁歎ハ長々しくして、千軍萬馬往來する急忙の折にハ似合しからざるに似たれど、意ハ唯其心に思ひたる處のみにて、之を寫出だすに於てハ文おのづから長からざるを得ず。

例なき事にも非ざれど、よくも見ざらん人のために、蛇

足の辯を費すのみ。

賊も味方も入亂れ
おめず怯まず戰ひたる
處ハ大隅財城
おどろおどろと鳴響く
小銃の轟鯨波の聲
四方を包む煙硝の
雲もろ共に立迷ふ
馬蹄の塵の砂烟
空ハ曇れど曇なき
日影に晃く劍さへ
いとど鋭き丈夫が
進む前後に飛來る
彈丸の霰も流石に
後へハ退かぬ武士の道
碎けて消えんいざさらバ
君に報ふる一片の
心ハかくよ梓弓
折れても名をバ射留んと
先を爭ひ探立つる
亂軍危急の其中に
恐れも得爲で彳める
三五バかりの美少年
其名も平田の三五とて
流石に緣アリあけの
月恥かしき顏に
問ハでも夫とシロ妙や
卯花色に威したる
鎧を着つゝ頭にハ
故意と兜を被らずに
白練衣の鉢卷し

貝鞍置たる黄月毛の
六歳駒に打騎たる
天晴優き打扮よ
扱愛らしき武者態よと
賊も味方も見惚らすまでに
交情も吉田の義兄清家が
前にハ賊に圍まれし
其後如何になりけんと
心一に料叵ね
蹤跡を索望みたる
折から吉田の若黨なる
佐藤兵衛武任ハ
其處に平田が茫然と
佇まんとも知らなくに
何やら肩に引掛けて
陣屋を指して歸る途

此體裁を見るよりも
其儘傍に馳來り
＝平田樣か＝と問蒐けし
聲に顧る三五郎
＝這ハ武任か勇ましや
清家殿ハ何處に＝……と
言ひつゝ件の武任が
擔ぎし物をよく視れバ
紛ふ方無き清家なり
然も全身ハ寸斷々々に
斫りさいなまれし血汐の紅
見るに目も暮れ心も消え
堪らへず馬より飛下り
犇とばかりに抱附く
姿にいとゞ武任も
忍叵ねたる涙を拂ひ

＝申すも愁嘆の種ながら
料らず深入し給ひて
賊に全く取圍まれ
霎時ハ防給ひしかど
御運の盡にや程も無く
重傷を負はせたまひつゝ
其處にあへなき御最後＝と
告ぐる言葉を聞くからに
いとど愁嘆ハ增鏡
淚に曇る胸の月
＝修羅の街に臨むなる
世に武士の身にあれバ
嘆くハ女々しき事ながら
然りとてハ又情無や
年來日來兄上よ
吾弟よと睦まじく

血筋も及ばず契りしも
思へバ夢か幻か
有爲轉變ハ常なりと
豫て聞きしハ此處なりき
偕も兄上淸家大人
はかなき姿に爲給ひし
陣屋を出づる其砌
―唯世に俊れし功名を
爲給ひてよ爲給へ
必身をバ輕佻しく
名も無き端武者の手に罹けて
空く死になひぞ―と
迭代に手を取合ひ
誓ひし言も今ぞ知る
今生後生の暇乞
いふて甲斐無き事ながら

今日前淺ましく
血汐に染まる御姿を
見れバ身も世もあられぬまで
また昔さへ忍ばるゝ
他人ながらも最優き
御心根に料らずも
結ぶハ露か玉櫛笥
二人が中ハ膠漆
其陳雷も數ならじ
世に罕なりと人々に
言はるゝ迄に快く
年を經つるも束の間よ
牡鹿の角の秋を傷ミ
巴峽の猿の斷腸も
吾愁嘆にハ優らんや
兎ても角ても清家大人

―同年同月同日に
生れずとても同年
同月日に死なんづと
豫ハ盟候ひき
卿あへなく爲給ひて
何樂に阿容阿容と
憂に得堪へぬ空蟬の
命を長く繫ぐべき
やがて追付進らせん
いざ＝とバかりに涙を拂ひ
鼻打かんだる勇士の決心
死後にも人に笑はれじと
思ふものから姿繕ろひ
一鞭あつれバ奔馬の駿足
稻麻の如き賊中に
面も振らず衝入りて

縱横無礙に馳回る
心ハ矢竹氣ハ張弓
此處に戰死せんものと
一心籠めてハ却々に
姿に似合はぬ奮勇絶倫
身に立つ矢をバ拔きもせず
裏缺かれても衰へず
心の勵にかくありしも
暫時こそあれ身も疲れ
騎たる馬さへ疵を負ひ
矢庭に撞と伏轉べバ
主も得堪へず礑と落つ
隙間を得たりと前後の賊兵
嵩よりかゝつて打下す
幾十口の亂刀に
鎧ハあへなく斫碎かれ
さと迸る血烟の
夕榮殘る遠木立
山寺の鐘の音凄み
無常ハ誰と薄昏の
塒に歸る鳥自物
あはれ冥途に急行く
是や平田が身の終末
書きハ綴れどいとゞしく
筆も澁れバ書く文も
にじミがちなる墨の跡
見よや今宵の夕景色
只聞く無常の笛の聲
はた斷腸の媒妁と
僞ると知らずや月澄ミて
梢に寒き嵐吹く

（明治十八年十月中旬月影清く照れる時此文を書綴りぬ）

新體詞選（抄）

戰景大和魂

樵耕

などてたゆたふ事やある
亂砲亂發百雷の
音凄じく吹く風ハ
血の臭氣を運び來て
鼻にかぐだに腥き
思へバ死人多からん
敵に死人の多からバ
そハ好き機よ揉潰せ
味方に死人多からバ
そハ危かり疾く救へ
などて怖るゝ事やある
などてたゆたふ事やある

敵ハ幾萬ありとても
すべて烏合の勢なるぞ
烏合の勢にあらずとも
味方に正しき道理あり
邪ハそれ正に勝難く
直は曲にぞ勝栗の
堅き心の一徹は
石に箭の立つ例あり
石に立つ箭の例あり
などて怖るゝ事やある

風にひらめく聯隊旗
記紋は昇る旭よ
旗ハ飛來る彈丸に
やぶるゝ程こそ譽なれ
身ハ日本の兵士よ
旗にな恥ぢぞ進めよや
斃るゝまでも進めよや
裂かるゝまでも進めよや
旗にな恥ぢぞ恥ぢなせぞ
などて怖るゝ事やある
などてたゆたふ事やある

雪を含める朝風に
向つて嘶く馬の聲
凍ゆる手先取緊めて
吹きぞ合はする喇叭の音

是等の響聞く時ハ
鈍き心もまた勇む
さるを何ぞや武士が
鬪まぬ事の有るべきぞ
いざや敵をバ破らんづ
などて怖るゝ事やある
などてたゆたふ事やある

こハ敵中に圍まれぬ
猶豫して事を愆つな
こゝに圍まれたる者ハ
すべて一聯隊中の
苦樂を同にせし者ぞ
おなじ戰士の戰死ハ
願ふても無き幸なるよ
命を安く賣りなせぞ

なるべき程ハ高く賣れ
などて怖るゝ事やある
などてたゆたふ事やある

星影寒く夜ハ更けぬ
今宵ハ月も出でざれバ
夜攻あらんも料られじ
鞍を下すな馬々に
秣與へて夜を明かせ
すは聞け遠砲雷一聲
すは敵寄せなん用意しね
味方ハ小勢なりとても
すべて日本男兒なり
などて怖るゝ事やある
などてたゆたふ事やある

凍月高く冴亘り
平原十里風寒し
砦ハ元の儘ながら
それを守れる人もなし
さらば敵早逃げたるよ
味方ハ既に克ちたるよ
げに戰ハおもしろや
さらバ進みて巢窟を
衝崩さんづ崩さんづ
などて怖るゝ事やある
などてたゆたふ事やある

破れて逃ぐるハ國の恥
進みて死ぬるハ身の譽
瓦となりて殘るより
玉となりつゝ碎けよや

疊の上にて死ぬ事は
武士の爲べきミちならず
軀を馬蹄にかけられつ
身を野晒になしてこそ
世に武士の義と言はめ
など怖るゝ事やある
などてたゆたふ事やある

大川友右衛門

美妙齋

第一

ます／＼荒るゝ西風に
炎の勢いやまさり
吼ゆるが如く燃鳴りつ
渦巻立てゝ噴出だす
火の子の樣ハ亂星
火氣に逐れて遅々と
頽れながらに行迷ふ
車輪の烟濃げふり
その濃き君の御恵に
答奉らんためなれバ
やがて消えなん身の程と
かねて覺悟ハ磨墨の
曲らぬ筆の告別
此世の縁と諸共に
文の字色の薄かるハ
涙にじみし故なりと
見よとばかりに義弟なる
數馬にさへも人傳に
別をすでに告げたれバ

心を殘す事もなし
今ハ何とぞ恙無く
御朱印をしも救ハんと
思ふばかりに友右衛門
馬を飛バせて走來る

第二

對向を見れバこハいかに
はや御朱印の寶藏に
火も移りたる體裁
とく燒落ちぬ其間にと
思ふものから勢も
また一人に丈夫の
張りて撓まぬ心より
逆卷く烟を事とせず
尋る炎を物とせず
隠れし馬に聲をかけ
鞍に伏しつゝ驀地
辛くも件の寶藏に
やゝ近づきし其折しも
馬も流石に咽返り
撞と音して倒れたる
さもこう有めと預より
期したりければ友右衛門
其儘閃然と下立ちつ
藏の扉に双手掛け
引開かんとしたれども
更に動かぬ光景に
訝りながら倩視れば
其處にハ錠のおりてあり
其身ハ鍵を持ちて來ず

第三

こハ鈍ましや朽惜や

錠をバ思附かざりき
鍵にハ心注かざりき
こゝまで辛く來し者を
惡て阿容々々死にもせバ
殿への不忠身の恥辱
是に上越す事やある
さりとて開く道も無し
そも如何せバ好らん＝と
流石に猛き武士も
殆と當惑したるから
四方ハすべて猛火にて
身さへ燒けんづ許りなり
藏にハ炎這囘り
屋根も落ちんづバかり
＝屋根落ちもせバ望なし
身も燒かれなば詮無かり
今ぞ成否の境目よ
今ぞ浮沈の機なるよ
此圖をなどか拔べきぞ＝
とばかりにして腰刀
拔放ちたる勇ましさ
火に戰へる稻妻と
先に鋭き覺悟なり

第四

かゝりし程に友右衛門
やがて件の刄をば
鍵穴深く突込みつ
眉間に皺の寄る迄に
眼を強く閉塞ぎ
齒を嚙り息を止め
＝念力一度凝る時ハ
石をも透す例あり

況んや忠義の此刀尖
南蠻鐵の鍛なりとも
破れぬ事のあるべきか
碎けぬ事のあるべきか
曳也＝とバかり唸りつゝ
力に任せてこじるにぞ
刀ハやがて折れたれど
さしもの錠も堪ばこそ
びんと音して碎けたる
＝扠も嬉＝と勇立ち
扉引開けたる程に
折も折とて藏の屋根
忽ち頽れ落掛る
音ハさながら冥官が
撾つにも似たる攻鼓
烈火の呵責もかくやらん

第五

さしもの勇士も彼屋根が
落つる機會に噴出だす
けふりと灰と炎とに
面を撲たれて暫ハ
絶えも入るべう覺えしが
さてハ果じと氣を勵し
落ちたる上に飛乗れバ
下ハ宛然火の如く
足を燒くだに物とせず
這回ハ挿添引拔きて
心當の處なる
瓦を撥退けゝゝつ
辛くも見出す御朱印の
櫃に得たりと雀躍し
左手に楚と取揚げつ

火の無力に行かんづと
なしたるからに薄情くも
四邊の火勢強ければ
衣を浸し〻水氣さへ
今ハやうやく筑紫潟
不知火ならで前後より
燃移らんとする樣ハ
昔話の妖怪が
舌かと思ふバかりなり

第六

＝早御朱印ハ恙無く
出だしたれども 憖に
此身を免れなんとせば
千仞一簣の悔あらん
要こそあれ＝と獨語ち
襟に袂に移る火を
撲消すからに花吹雪
晃きながら散りて行く
數に漏れじの身の覺悟
挿添をもてあらがねの
土を穿ちつ返す手に
我と我腹つんざけバ
颯とばかりに迸る
血汐ハ赤き心根や
流石重傷に弱るから
萎ゆる腕を勵まして
かの御朱印を穴口に
用捨もあらず捻込みつ
倏忽前に伏柴の
霎時の際もあらバこそ
憎や猛火ハ炎々と
競嵬るに莞爾と
笑むを此世の名殘にて
あへなく息ハ絶えにけり

「いらつめ」より（抄）

はるのあけぼの（言文一致體）

美　妙　齋

一

つゆにぬれてかうぐひすの
　こゑもひとしほスミぞめの
むかしもそゞろシノブずり
　そのみちのくのおもかげに
ふるかこずゑのはなふゞき
　そのの戸ながらかよひくる
わがツマごとのひとふしは
　なさけコまちのゆめのあと。

二

そよふくかぜもまださむい。
　つゝみてこめるあさぎりに
もじばりまどはきえまよふ
　いまやゝめむぐたけのこの
ほそいてさきであたゝめて
　しのびねにふく笙さへも
かすむかきねのちござくら
　ほ乃めくかげのあいらしさ。

三

やまさくらとのあけぼ乃は
　いつよりはるがうつくしい。
はなのかげにハゆめごゝち
　ゆめごゝちにもはなのかげ

ミねでのぞめばそこゝハ
　こゝろにかゝるあとばかり
こゝのたにまもそのきしも
　ひじりのすみかべにのゆき。

四

ねむげにみえるかいだうの
　ほゝににそまるつゆのたま。
ひとにハとかぬくれなゐの
　えにしのいとかしたひもか
むすびみだしたしどけなさ。
　おぼろながらのかつらをに
わかれたのちハまぼろしの
　ゆめをちぎるかねたましい。

五

いけのかゞミにかぜのくし
　とかすやなぎ乃あさがみに
かざすハつゆのタマてばこ
　アケルまもなくしらみゆく
ねやのすきまもつれないに
　にくいつばめのさそひがほ
えだをかすめてとびくるふ
　はおとばかりがみゝにつく。

夜の霧

デイランド女史 近作
美妙齋主人 補譯

よもすがら　しろく　とざすさぎり
　つかれたる　世(よ)をし　かろくいだく。
ねむげなる　かはの　ほゝも　なめて
　かすかなる　やまも　かげに　やどる。
ひやゝかに　なづる　ゆびに　きしの

いしも　みづ　と　うたふ　ゆめの　こうた。
うすぎぬの　とばり　ぬめの　ころも
ひるの　ねも　たえぬ　ねむる　さとに。

さやかなる　あさげ　かぜも　しづか
いざや　日も　いでん　世をも　ゆづれ。
あかつきの　やみに　きゆる　ゆめぢ
たどりつゝ　されば　とりも　をなく。

書題　老梟月に叫ぶ圖

美妙齋主人

山ひくゝいこふつきかげ
あをざめて呼吸絶ゆげなり。
千丈の椋の老樹
みきくろく秋の色濃し。
かゞやくは宿鳥の魂か、
血をおびてまなこきらめく。
風啼いて枝さだまらず、
なみを打つうぶ毛たかひく。
かなこぶし岩をもくだけ、
なにぞそのねぐらの小鳥。
おくやまのゆめもしばらく。
生き死にはわが指にあり。

新調韻文 青年唱歌集（抄）

病後の吟

夜を送る寺のかね
いま吾も死なで聞く。
蚊帳越しの痩せ燈火
（なきがらにあハや月を
しバたゝくべかりしを）
けふハ閨もる風に
疲れたる呼吸も吹き
咽び鳴く露のむし
（われやがて草葉のかげに
語りあふべかりしを）
けふは葉をかたしきて
わがうさも分かつめり。
思ひやれきのふの夜
そのかねも無常にて、
その虫も、とも火も
仇とのみ見えにしを。
身一つの秋ならじ。
然るを猶有らずもの
哀れいまひとり呼ぶ。
はづかしやもの思ひ
雲とたち、潮と湧き、
主を閉ぢ、主を衝き、
鳥の水吸ふ間だに
ぬしの身の仇となる。

似る もの の なつかしさ、
似ぬ もの の 怨めしさ。
　訪ハれて ハ 歸りて も
おもかげ を なみだ とも
目 に うかめ。たまづさ も
くりかへし、ながむれば
つらかりし 日 も 戀ひつ
秋 しのぶ 雪 の 竹、
われ も それ。
　　　　つひ に 行く
世 の みち ひとつ なり。
われ も また あはや その
關 を こゆ べかり けり。
その 關 も 忌む 日 には
生 と 死 の 國ざかひ。
しかは あれ 生 も 死 も
たゞ 關 の みぎ ひだり
呼び なれし 稱呼 のみ。
うつせみ の 世 の 關 は
壯健 の 足 ぞ 越す。
この 關 は 萎えし 足
つかれ たる 身 のみ 越す。
その けぢめ それ バかり。
こす ひま は またゝく 間
石、は 石、金 は 金、
さだまりし 分 を 缺かずば
くるしみ も、心のこり も
など 有らん など 有らん。
越えて 見よ、蜜 も 無し、
針 も 無し、色 も 無し、
花 も 無し、何 も 無し、
空 の うち 空 を 滿たし、

その 空は みだされず。
あやまてば 名も 殘る。
骨は 土、肉は 水、
すゑ ながく 世を めぐり、
因と 果の くるまを や
たえま 無く まはす らむ
　あゝ美妙 ふみかけて
その 關を さて こえず。
これも 亦天の なさけ
それ までの 道は 見つ。
思ひ知る 石は いし、
願はくは 身の 分を
日 ひと日 缺きあへず。
いつの 日に 死ぬる とも
とく 心 澄 ましてむ。
澄ましてん、とく 心、
月 きよく 風 白く。

（明治卅一年の秋の作）

夏の貧家

乾蒸しの、　夏ハ 水無月
せうねつの、　世ハ 地獄 なり。
飽きやらで　轉ぶ 金丸
いつ 迄か　人を 惱ます？
雲の 山　猛火に 焦げて
射る 光り　影も するどし。
淺ましや　うらや住みの 身
小屋といふ　坩堝の 中に
眷屬の　いのちを 茹でゝ、
叫喚の　聲も 嗄れ たり、
風 うばふ　隣りの 猗頓、
棟 たかく　ひとり そばだつ。

垣ひとへ　こなたとなれバ
口すゝぐ　清水もあらず。
眺むべき　青葉もあらず。
糧盡きバ　たふるゝからだ、
軒ならび　人ハ住めども
身のまはり　沙漠なりけり。
沙漠なり　げに沙漠なり、
膏血を　ねぶる猛獸、
しゝむらを　啖ふ妖怪。
貧民の　もろきいのちハ
猛獸の　舌つゞみなり。
貧民の　漏らす叫びハ
妖怪の　聞く唱歌なり。
貧民の　汗のしづくハ
猛獸の　含嗽水なり。
貧民の　なみだの玉ハ
妖怪の　胸かざりなり。
形ばかり　物煮るかまど、
そを見るに、つけても思ふ
身ハさしも　鍋の中なる
草の葉と　ことならじとも。
世の鹽に　揉み切られけり。
世の鐵に　刻まれにけり。
板の間に　すわれるは妻
むしれたる　疊のうへに
狗じもの　打ちかさなりて
熟睡する　つみ無き子ども
湧く汗を　拭ひもえせぬ
妻の手ハ　夫のたすけ、
内職に　骨を枯らして
吐く息も　また火炎なり。
さりながら　思ひかへせバ

それ とても　猶 つらからず、
足を 焼く　熱沙 踏み〳〵
精血を　轍に そゝぎて
くるま挽く　夫の くるしみ
いか程と　思ひ やりてハ！
腕 ひとつ、　口ハ みつよつ、
三つ四つの　口の ため とて
恩愛に　苦痛を 殺し、
馳せ めぐる　思ひや いかに？
けふも 亦　星を 乗せ つゝ
星、しかも　世の 猛獣ハ
天上の　玉と ながめて
その いろに　天の 靈光
漏るゝ とハ　知らぬ ほしかげ、
その 影を　泥よけの 面に
曇らねば　うつし〳〵て

出で ゆきし　ゆくへや いづこ？
晝飯ハ　そも いづく にて？
過ちハ　そも 無かりし か？
馳せ ちがふ　ちまたの なかば、
雷 いかり、　電火 飛ぶ 中
生死 たゞ　寸分の さかひ
その 中を　妻の ため とて、
その 中を　子等の ため とて、
玉の 緒を　運に まかせて、
馳せ めぐる　人ハ、そも たれ？
あぶら汗　衣 血に じみて、
舌ハ 釣り、　目も くらみ なん、
からく 得て　一里 八錢、
猛獣ハ　それ すら 責めて
人の 身を　人と 思ハず。
坂みちに　空理を 説きて、

世の中の　なさけ てふ もの
空想の　夢にも 知らず。
怨めしさ　骨に とほる を
忍ぶ身の　いかに 切無き?
腕を 折り　脛を くだきて
片輪 なる　もの と なりて も
哀れがる　毛物 とて 無し。
長屋 なる　喪家 の 狗 の
をりをりに　痩せ尾を ふりて
尋ね来る　ばかり なり とハ!
思ひ知る　犬よりも 猶
劣りたる　世界 なり と ぞ。
夫の 身の　せつなさ、つらさ
斯く まで と　思ひ やりて ハ
何ごと ぞ。　家に 居る 身 の
暑さ など　物の 数 かハ!

口惜けし　一合徳利、
たのしみ を　やハか 缺く べき。
形 バかり　のこる 塗膳
情愛の　滋味ハ 滿々。
西日 やゝ　櫺子 を もりて、
夕河岸の　鰺 賣る こゑ
路次ぐちに　ひゞく 頃 しも
なつかしき　人や 歸らんと
いでや 待て、　ほど も しバらく。
蒸し、蒸せる　蚊帳 の 暑さ、
四時 よ 五時　ハや 永からず、
しバらく の　あひだ なり かし。
寢ぐるしさ、　優しき 夢 を
いぢらし や　おどろかし つゝ
おやごゝろ　知らぬ が 憐、
泣き いだす　子 を なぐさめて、

かれこれと　汗をひとりの
背に〆めて　ひしめく門に
人の聲　こハそも如何
立ちかへる　夫のすがた、
見る儘に　胸まづ安し、
常よりも　猶うれしげに、
手にハ持つ　菓子の小袋。
飛びかゝる　子をしバらくハ
右ひだり　釣りまぎらして、
聲高に　わらふ一聲
またゝく間　坩堝の中に
夏も無し、　吹くや涼風！
立ち寄りて　夫をあふぐ
妻が手に　持つやれ團扇
景物の　成れの果なり。

紙裂けて　骨こそ出づれ
恩愛の　風ハ盡きせず、
糸斷れて　塵に染まれど
秋扇の　かなしみも無し。
「いと早う　歸りたまひぬ。
此まゝに　家に居てすら
堪へがたき　暑さなりしを」
とバかりに　跡ハ得言ハず
おのづから　さしぐむ涙――
夫にハ　大旱の雨――
うなだれて　力無かりし
枯れ草も　たゞ一しづく
やさしかる　情の雨に
濡れてしも　起きかへりけり。
から／＼と　高くわらひ
「暑かりし。　されどあつさも

子供等の　みやげに變はる
汗なりと　思ひなしてハ
忌みきらふ　心も出でず。
聞けよ喃　今日ハ吉日
はからざる　利得有りけり。
あさくちに　美人をのせて
物はじめ　心うれしく、
引く車　また口ぐるま、
輕やかに　人を勸めて
晝の頃　得たる客有り。
ふたりづれ　めをとなるべし。
としごろも　まだいと若し。
とある家　立ち出で來り
辻待ちの　われを呼びつゝ、
いそげ！今　停車場まで。
ほねをりハ　乞ふが儘ぞと。

いざと載せ　千里一瞬
吾ながら　馳せも馳せたり。
行き着けば　かれも喜ぶ。
韋駄天の　うまれがはりか、
熱國の　駝鳥の親か、
いさましと　褒めたはむれて
やがてわが　手につかませし
其しろハ　圓のふたひら
三里にも　足らぬ道のり、
さりとてハ　過ぎし代ぞと
おしかへす　聲をも聞かず、
笛一つ　名殘のけふり、
石炭の　煤にのこして
其影ハ　見えずなりけり。
今日といふ　今日の立ち前
ふつか、三日　四日、五日ぶり

あまり なる　心 うれしさ。
ひとゝき も　せめて ハ 早く
妻 と 子に　よろこばせん と
その まゝ に　指し 來し 家路
殼ぐるま　身 ハ 挽き たれど
空財布　今日 空 ならず。
紺法被　身 を ば 蒸せども
いそ／＼と　胸 まづ 涼し。
何 と 聞く、　いか に 吾妹子
人界 に　獸 ばかり ハ
しかすが に　住まざりし なり。」
喜び ハ　人 の よろこび
見る ばかり　嬉しき ハ 無し。
外 ならぬ　夫 の 笑顏
汗 も 血 も　妻子 の ため に
忘れ ゆく　恩愛 の ほど

つく／＼ と　思ひ しみれば
茅 も　まさに 金殿、
この 宵 の　寢酒 の 銚子
口 缺けし　素燒き なれども
銀瓶 の　知らぬ 味 なり。
かはり たる　情 なれども
一こと の　やさし めぐみ ハ
千よろづ の　仇 より ふかく
心 に ハ　しみる もの とて。

思ひ 入れば　坩堝 の 中 に
金殿 の　知らぬ 事 有り。
青目鏡　いつ まで 掛けて
いたづらに　悲しみ まよひ、
いたづらに　たのしみ くるふ？

今はしも　夏さを避けて
夏は入る　函根の山家、
かつて經て　われハ思ひぬ、
瀧の音　溪の夜あらし、
涼しさを　今こそは知れ、
そのむかし　曾我のはらから
嘗膽の　思ひに焦がれ、
この山に　住ひける時
くるしみは　地獄なりけり。
蟬の羽の　透屋織る人
着る人の　心地ハ知らず、
太刀つるぎ　鍛ふる棘も
虫鳴けば　夏も秋なり。
世を見れば　いと／＼悲し、
これや此　天の命令？

わが愛づる　うるはしき花
ひとゝきの　雨をも待たず、
戀ひし人　たちまちに墓
紅顏ハ　石にのこらず。
かつて其　花をも手折り、
かつてその　唇にふれ、
移ろハぬ　色とながめつ、
脆からぬ　香と契りしも
夜一夜　それも夢なり。
義のために　殺されし人
くるしみて　死なざるハ無し。
世の中の　人のいのちハ
苦しみを　ハぐゝむ餌かも。
迷ひ入る　ゆくての霧に
十重二十重　つゝみ籠めけり。

夢ごゝち　心の駒に
空想の　手綱をつけて
飄然と　霧に騎りつゝ
果も無き　果にすゝめば
しかすがに　世ハ變はりけり。
うす眉を　ゑがく遠山
白雲に　いとゞ冴えたり。
山いよゝ　高きにつれて
谷いよゝ　深まさりせり。
常盤木に　まじはる櫻、
海原に　ねむれる鷗、
照りあひて　いろもすぐれぬ。
そもいかに　世の中の苦も
おほかたハ　樂ありてこそ、
樂なくば　苦をも得知らじ。
この道は　違はざりけり。
おぞましや　何をかいとふ？

天道の　慈悲いと深し、
いろどりを　人に與へて
苦樂たゞ　もとむるがまゝ。
「與ふれば　得るものも有り。」
苦を賣りて　樂をあがなふ
あゝたのし、たのし世の中。
世を仰げ、かほどに高し。
道を見よ　かほどに廣し。
何ものゝ　魔王ありてか
人間の　いのちを絞めて
「惱亂」の　口に食ません？
大道の　世界なりけり。
空高し、雲にて低し。
その雲も　雨の母なり、

生きもの を つゝむ 白布。
大慈悲 の 世界 なり けり。

落魄の旅

大和十津川ハ南朝の時にも忠義に名高かッた處そこへ明治二十二年の秋水が出て全縣殘らず押し流され、生き殘ッた人ハ空しく北海道へ移住する身と爲つたとい遉、聞いていさゝか感する處もあつて

影 うすき 日 血 を 流し、
つちふれる 風 闇 を 吹く。
いかで われ をこたり 得 べき!

* * *

わが 腕 の 血 に 辷れ、敵!
わが 塚 の 土 と なれ 賊!
延元 の むかし の 忠義!
あゝ 天地! 何 を いきどゝる?

峰 裂けて 家 くだく 山——
君 が ため 城 築きし 山、
渦 の 口 魂魄 を 呑む 水——
わが 君 に まゐらして 水。
花 咲かバ かたみ の 櫻
彫りし 名 の 香 も とめ よ。
三百里 いま 去る 墳墓。
秋 暮れぬ、北海の霧。
あゝ 定め 無? 無き 世 に 非ず。
慰め よ 天地 命 あり。
灰 と 飛ぶ 髑髏 の 雲 に
長城 を 胡馬 も 越えず。

（北海道は露國と相接する處、結句はそれ故に）。

夢

引き進らする愛情ハ限りなし。かきつゞる筆の鈍さも

かぎりなし。こゝろよく注げバそら呑む海も糸の流れをきらはず。跡をしたへバ月も名残をむらごの雲にとゞめむ。受けてよと願ふ流れの心、いろどりてかと乞ふ雲のぞみ、酌ませたまへ、叶へさせたまへ。

明治廿一年八月日　美妙齋

巖本善治の君

第一節

情思とハ覺めたるひまに結ぶ夢、
想像ものぞみもすべて迷ひやすき
外の物の手綱にくるふ駒にこそ。
手綱せですゝむハ夢よ、はなれ駒。
されバ、行く道悟られず、有りて無き、
春の夜の寢ざめにしのぶ鐘の痕。
うたがへバ音か、かをりか、まぼろしの
影かそも朧の梅に月うごく。

第二節

生めける青葉をはさむ美少年、
たちまちに波の花散る壇の浦。
輕氣なる莊子が蝶の春あそび、
たちまちに盧生が粟の夕げふり。
夏の夜によそへまほしき玉手箱、
さして行く笠置をうらむ松の露。
かはりゆくそをいのちとも知らざれバ
はかなさの似たりと世をもたとへけむ、
さばれ見よゆうべの西の茜いろ
ともに見て猶ものゝふハ血に比べ
さをとめハ緋の染いろにたとふらん。
かくこそと思ひよせなバ白も黒、
はかなしとこりなバ夢もはかなけれ、
たゞ眼あらためて知れいと奇しや
自由とハ夢の又の名。あだし世の

飛ぶ鳥も流るゝ水もなど如かむ。

第三節

春かぜにゆくて尋ぬる花の雨、
ほり水に身を荷はるゝうきぐさの
さだめ無きそれしも夢の奇しきにて
鶴の羽葺く苫屋も玉の樓も
ねふる間は田鶴と住むなり庭津鳥、
身にも着るゆふ顔棚のひぢまくら
そら炊きの薫りに包むまどろみも
いづれかは同じき道にあらざらん。
さめてこそこがねも光れ、さめざらバ、
世の中のけぢめはなみに袖ぬれて
水かつぐ海人もにしきの衣かつぎ
野馬を驅るわらべも玉の車驅る。
羽つバさ有れど甲斐無し籠の鳥、
たゞその戸開かバつバさまた開く。
奇し力もてどたよわし覺めし夢
たゞその身ねふらば外の面また眠る。
目は閉ぢぬ、浮きよの塵も聞こえず
耳は聾ふ、無常の鐘の音も無し、
たましひは世の綱手綱ときすてゝ
鏡なす春の海かも、秋の水、
垢も無き清らの面をさまよへば、
名に聞ける道仙の郷も見えそめつ、
斧の柄のしばしが長きそれならで、
長かりと思ひしそれぞしばしなる。
吾も亦ひじりの群と云ふ間無く
花はそもいづこぞかをり吹く風に
里はしも影とて七重、八重さくら、
さくらのみ霜置く中に温く笑む。
玉をつみ、こがねを葺ける宮はいつ、
(神の手か)識築きけむ前にあり。

おもひね と さとらぬ 胸 も たのもしく、
園 に 出て のぞめば 澄める 池水 に
綾 を 織る 浮寢 の 鳥 も 人知らず。
梭めきて 間 を かよふ つり舟 に
琴 の 糸 しめつゝ 妻 は 吾 を 待つ。
ぬれ そめて しぶき を 怨む 岩かども
白く なる 浦曲 の 朝 の 風 きよみ
玉子いろ の 沖 に ゆあみす 朝暾 や、
ほの聞ゆ 天 の 樂 の 音 ゆたか なり。
程 も なし、近づく 山 か 一むらの
雲 いでぬ、風 わきたちぬ、浪あれぬ、
ありなし の 颶風 よ、闇 は 世 を 閉づ と
思ふ ひま 又 も わが身 は いつしか に
天 さゞく 山 の 端 にてぞ 月 に 笑む。

第四節

いかに して かく迄 奇しく かはる かも。

夕霧 に 不斷 の 香 を たかせつゝ、
星かげ に 常住 の 日 を ともさする
山人 の あやしき わざ の なごり かな。
千里 行き、三千里 行きて つかれ なく、
水 呑まず、物 も たふべで 飢饉 知らず。
飛ぶ 鳥 の つバさ も あらで そら翔り、
うろくづ の 尾鰭 も あらで 水 くゞる。
南 無し、東も、北も、西 も 無し。
左 無し、右も、後 も、前 も 無し。
まろからで さて なめらか に 轉びつゝ、
角 たゝで 人手 も 借らず 佇めり。
那智 去りて 日の本 に 見る ないあがら。
武藏野 に 獅子 と 戰ふ 虎 の むれ
春 と 見し 山 の 梢 も 紅葉 にて、
草 と せし 野邊 の みどり も 人 なり き。
ふみ に 知る むかし の 人 も あながち に、

橘の袖のかをりに忍ばんや。
わが宿に今とひきつるそくらてす。
わがいへに車を寄する藤式部。
ゆかり無きゆかりを千代の末に呼び、
きえうせし聲音もかへし聞くべけれ。
天津日の光りも無くて目ハ見えつ、
傳へこす空氣もあらで耳ハ聞く。

第五節

あらたふと、神とハ夢の又の名か。
思ひきや、心に神の在さんとハ！
いとかろし、水素をはらむ水の泡、
いと清し、雲の衣縫ふ天乙女、
げにはやし、峰の角切るいな光り、
げに凄し、あらしに咽ぶ洋の月。
引力も此足のみハとゞめえず、
いかづちも此身をのみハ砕きえず。
靜けさを只懐かしき母として、
かぎろひを只いつくしき妻とせん。
あゝ夢か自由の主よ、くし力。
揮ふまゝ止むる物もあらずかし。
ばすちいゆ呼びつゝ血汐噴く太刀も
目を閉ぢて、ねふれば消えてわが望む
まことなる自由の郷に遊ぶなり。
はゝきゞのみかどの首級ありて無し。

稻舟集

稻舟集解題

鹽田良平

「鏡花錄」「五大堂」解題

文藝倶樂部第二閨秀小說(卅年一月)附錄に「忍ぶ草」として、前年他界した三人の閨秀作家の遺作を載せた。曉子の「ローレンス」一葉の「うつせみ」及び稻舟の「唯我獨尊」である。

今、此田澤稻舟の文學史的地位を決定する前に今まで全然考慮を拂はれてゐなかつた彼女の短い數奇な一生に就いて簡單に說明しておく。稻舟は山田美妙と離婚して當時の新聞のゴシツプ種をつくつた事で更に有名になつてゐるが此間の事情に就いても現在までかなり誤解の儘傳へられてゐる。これも併せて訂正しておきたい。

稻舟は明治七年十二月二十八日山形縣鶴岡五日町に生れた。父は田澤淸、醫師である。嘗て軍醫たりし事あり、稻舟の文學愛好熱を非常に嫌つてゐたといふ。母は繼母であつた。

十八歲前後に上京して一橋共立女子職業學校圖畫科に入學した。當時彼女と同窓で現に同校教授の工富周子氏談によれば、

とにかく變つた方で御座いました。感情家の方で、はしやぎ出すととめどなくはしやいで、快活になつた方で云々

とあり、又、彼女の死歿當時(九月廿三日)讀賣に出た嘯月生の追想記によれば、寧ろ非常に憂鬱で、例へば琴を彈いても歌を口には出さないといふ程、むすぼほれた心の持主、ともある。かと思ふと、

女史獨り詞華絢爛の才あるのみならず花唇鶯喉辯に巧みにして、最も演說を善くす。(二十九年一月一日、讀賣新聞女作者の天緣。)

と云つたやうな評もあるが、最後の記事は少し根據がない。當推量であらう。しかし、各種の評を綜合すると感情的で氣分にかなりむらがあつたのは事實らしい。女子職業は卒業しなかつた。在學期間は一年間であつた。此前後から文學で立たうと云ふ決心をつけたらしい。美妙と知己になつたのも此當時らしい。最近發見された美妙の二十四年秋の日記には彼女の名が見えてゐる。しかし目的なく東京に止まる事を實家では許さずして彼女はやがて山形へ歸つた。そして、まもなく處女作として「醫學修業」を「文藝俱樂部」(二十八年七月)に載せた。良家の令孃が母となさぬ仲の爲に厭々醫學校に通つてゐる中に、遂に墮落して義太夫語りに成下る、といふ世話小說である。文章が言文一致でないといふだけで、他はプロットも狙ひ所のきめ〳〵も美妙の人情小說そつくりである。たゞ、同じ女學生の墮落を描いても美妙の「敎師三昧」(新作十二番)がかなり無反省な描き方であるのに對して、是はヒロインの墮落の動機にかなり暖かい愛が注がれてゐる。難を云へば、處女作としては多少惡達者の所があるが、此作によつてとにかく稻舟の名は中央文壇に知れ渡つた。

美妙と結婚したのは、此翌年の初であつた。此の結婚はかなり評判になつたらしく當時の新聞にも載つたが、不幸にして稻舟は美妙の祖母と折合惡しく三月後には彼女は別居し、間もなく呼吸器病の爲に鄕里鶴岡の實家へ引取られた。此間に飛ばされたのが所謂稻舟事件を作り出した新聞の誇張記事である。例へば廿九年三月七日八日の中央新聞は「稻舟物語」と云ふ題目の下に、かなり惡意のある記事を揭げた。卽ち、美妙は田澤の資產を目當にわざ〳〵山形まで結婚申込みに行き稻舟を連れ歸り、小石川竹早町の我家へ妻として迎へ入れた、とあるが、その書き方は美妙の文

章の特徴を緑雨風にもぢつた不眞面目なものである。

すぐと合作小說は文藝俱樂部に依つて公にせられたが、扨も好事魔多しと小說家なら書くところ、天此良緣を惡くんだのか、平和なるホームの海も是れから波風が起り始めた、夫れは何でせう？　美妙の祖母です、是が中々八ケ間敷いのに、親を捨て世間を構はず、百年の身を愛といふ皮を被つた獸欲の犧牲にして省みぬ、稲舟と出逢つては誰かの善く言ふ舊思想と新思想との衝突は到底免れないです。(七月八日)

因みに云ふ。合作小說とは「峯の殘月」(一月)である。これは好評であつた。(筆者註)

此頃を境として、時事、國民、日々、朝日等の、三面記事に力を注がない新聞を除いて、各新聞が右中央の記事と大同小異のゴシップを掲げた。勿論彼等に對する同情的投書もあつたやうであるが、(稲舟女史の事を記せる新聞を讀みて、つまべに女、讀賣三・二二參照) 一般には自由戀愛のなれの果を見よと云はむ許りの調子があつた。

「鏡花錄」は、此當時に於ける、若き稲舟の心的苦悶を表した一種の自傳である。半紙十四枚を假綴にしたもので內容は自分等の結婚に對する世間の不當なる非難に答へ、自分が如何にして此新しい戀愛に向つて突進したかを敍し次に鄕里に於いて三位中將と呼ばれた櫻津といふ青年に戀せられた思出を描き、主としてそれが中心となつてゐる。此青年は餘程氣になつたと見えて、美妙と離婚後、讀賣(二十九年六月)に寄せた「月にうたふ懺悔の一ふし」によればこの青年の戀を退けたことから總べての破綻が生じ始めた、今度の離婚でも結局夫が惡いのではなくして自分が惡いのだ、と云つてゐる。とにかく、此「鏡花錄」を書いた頃の稲舟は恐らくあらゆる苦悶を味ひ盡してゐたであらう。文面でも判る如く、筆付が反抗的、冷嘲的であるかと思ふと非常に追想的感傷的になり、文章はかなり拙劣で、心的不安がまざ〳〵と現れてゐる。一面、美妙に對する熱烈な思慕の表白も見えるが、それに陶醉することを許さない苛烈

な外圍の諸條件に痛々しく屈服してゐる矛盾があり、文學的作品としては彼女のものの中では最下位にあるが、一個のヒユマン・ドキユメントとしては過渡期の稻舟を語るものとして唯一の好資料である。

これは未發表の儘で終つた。これを書いて間もなく、稻舟は鄕里へ歸つた。家庭的不和と世の非難と、そしてそれに堪へ得るだけの意志と健康とを持たなかつた爲に、美妙を愛しながら美妙の許を離れて行つた。

しかし乍ら、此間稻舟は「小町湯」(六月)、「忍び音」(七月)、「まぼろし」(九月)(後の二つは新體詩)、「五大堂」(十一月遺作として發表)を作つてゐる。前年末の「白薔薇」と共に「小町湯」は不評であつたが、さきに擧げた「峯の殘月」と共に「五大堂」は好評であつた。殊に

「五大堂」は美妙の影響から脫して彼女の抒情的な素質が奔り出てゐる。「抒情小說として面白味あり三四十歲まで存命せば目覺しき作も出てたらんものを」(早稻田文學・十二月)といふ評は、死者に對する單なる儀禮ではなかつた。地の文にこそ未だ彼女特有の懸詞、例へば「はれて妹脊となる日をばむなしくこゝに松島觀月樓」の如き草双紙調が見えるが、筆致が著しく輕妙になつた。小說家今宮がお露といふ女性を棄て、子爵令孃と松島へ旅行する。それを新聞に發かれて歸る路を失つた二人は遂に五大堂より投身する。といふ筋で、最初の意圖は、不良今宮某が如何に奸策を用ゐて女性を蹂躙して行くか、を美妙風な分析的な寫實主義で描寫する心算であつたらしい。それが半ばから今宮の戀を眞劍ならしめて、卑俗な世話の世界から純情の詩の世界へと飛躍せしめてゐる。これは彼女の舊作に比して明白に前進的であつた。この境地は創作心理から云へば、孤獨悲痛な境涯にゐる作者が、その爲に與へられる各種の反省によつて到達した處の、一心境であつたかも知れない。それだけ複雜な要素を持つてゐる。其點稻舟の作が「五大堂」一篇のみであるとしても、此作の存在によつて、稻舟は女流作家にありがちなモノトオンと感傷とをさけて細かい陰

影と淋しい情熱とを文學史上に殘したものとして、文學史家から抹殺されないであらう。又「文藝倶樂部」が一葉・賤子と共に彼女を列べたと云ふ事が、稻舟にまつはる傳說的興味をジヤアナリズムに利用しようとした意圖ではない事をも認められるであらう。

稻舟は、歸鄕後間もなく、九月十日肺炎で倒れた。遺骸は鶴岡市日和町般若寺へ葬つた。一部の新聞紙が傳へた自殺說は臆說で根據がない。歲二十三歲。十九歲說は誤。總て是等の誤傳は當時の莊內新報が本源で、それから東北日報、更に中央の諸新聞へと傳つたのである。

稻舟の死歿當時、その妹(現在死歿)は姉の爲に左の如き辯解的新詩を「文藝倶樂部」に載せてゐる。是も自殺說を反證する一例であらう。

花さく春のはじめより、心地つねならずとて、都をばかすみと共に立ちいでゝ、古里に歸り、父母の御もとにやしなひぬ。しかるより此方、そこはかとなくなやみわづらひて、月日をすごししに、八月五日のことなりき、俄に胸にせきあげて、たえ入るばかりくるしみぬ。世の人々は此事をしもきゝひがめて、かくいひのゝしる事の口さがなさよ。さらぬだに人の爲よき事はいはで、惡しき事のみいひ出る世の習はしなれば、ふかくもとがむべきならねどいかに浮世をおもひなげゝばとて、海人の刈る藻に住む虫の、われから恐しき藥などをもて、身をすつる事のあるべきやは。殘しおける言の葉にも、親のなげかん事をしぞおもふと、いひつゞけつるものを、親はらからのなげきを知りつゝ、などてさるあさましき事をおもひたつ事のあるべき。かゝれば名だゝる醫師三人をも請じて、手をつくしゝるしにや、いともはげしき苦みもとみにをさまりて、心地も日にまし常のごとくなりぬ。

尙、本書收載の「鏡花錄」「五大堂」は共に原稿からとつた。「鏡花錄」は前述の如く未發表のものであるが、「五大

堂」の方は「文藝倶樂部」所載のものである。但し「文藝倶樂部」所載の「五大堂」は原文に、大部加朱訂正が施されてゐる。從つて、本「五大堂」は原作を忠實に移す爲に、加朱の點を抹殺して、全く稲舟の意志通りの俤を存せしめることにした。兩者共に句讀點段落がない。止むなく「五大堂」だけは、「文藝倶樂部」通りの句讀を切つた。その他は、全部兩者共原文の儘である。

「峯の殘月」も稲舟が助力したと傳へられるが、主として美妙が書いたと認められるので美妙集の方に入れることにして、こゝからは省いた。

鏡花錄

いなぶね

夫と結婚してからこゝに兩三ケ月其間府下幾十の新聞雜誌さては地方の小新聞まで彼等が得意乃毒筆を振つて我々夫婦の結婚を口を極めて何のかのと嘲笑するが多くは皆事實無根なあに言ひたいなら勝手にいへかきたいなら勝手にかけかまふものかと思ふけれど流石にいま／＼しくもある　自分ながらわるい性質とは思ふがいツたんかうと思ひさだめた事はよしや其事正だらうが邪だらうが親が怒らうが教師がいさめやうが決して／＼我を折ツて頭をさげる事ができないといふわるい虫がある　でこれでよく失敗する事が多い　兩親或は朋友などそんな事をかゝれては不名譽だから取消を請求しろとすゝめたがやツぱり例の性質でかりにもこれ／＼だからどうか取消をなぞと頭をさげるのは大きらひだと折角心配して深切に言ツてくれたものを見事むざ／＼つきとばしたで親はいふまでもなく大怒り朋友とて無論同じ事毎日／＼くる手紙もくる手紙も皆言ひ合せたやうに取消請求の忠告文だ　けれど一身强情我慢でかたまりついて居る自分の身體もうどれ程の親切だらうが忠告だらうが一度かうと決心したが最後成程御親切は有難いがもとより例の主義ですからどうでも否だとはねかへしてそして自分ながら今更實はあんまりだと思ふがそれでお否ならば以後絶交なさツてもいゝとさへ言ひ切ツたこれには流石親兄弟朋友教師も驚いたのかあツけにとられてまごまごしてるのか其後何の便りもない意生地なく我を折るよりはいゝ氣持だが返辭のないのはあんまりいゝ氣持でない　ついくさ／＼して癇癪をおこして何ともなし座敷中を二三べんまはツてふと目には入ツた日ごろ寵愛の床の間の京人形を我ながら實に邪見に荒々しく抱き上げたといふよりはむ

しろ引ツつかまへたと言ツた方が適當な抱きやうをしてもはやよツぽど垢づいた少さい手を引ツぱツたりごみだらけな頭をなでたり着物をきせかへて見たりしてるうち少し心がおちついたやうだから今度はよく抱いて袖でかかへてどこをどう歩いた事か夢中で化粧部屋の姿見の前に行ツた身うごきもせず突ツ立て自分の姿をつく〴〵見て驚いた其疳癪をおこして怒りをおびた顏色の見ツともなさ其無邪氣なあいらしい人形とくらべていとどきはだツて見えるいま〴〵しさ又なさけなさ今日といふ今日實に始めて顏といふ事に氣がついて人がゐないのをいゝ事にして馬鹿〴〵しくも自分ひとりで笑ツて見たりすまして見たり上に向ひたり下に向ひたり横に向ひたり側に向ひたりもういろ〴〵なまねをして稍小一時間もながめたがどうもいくら自惚れて自分で自分にお世辭を言ひたいのは山々でもこれではとても義理にもいひかねる目鼻立ならはえぎはなら何一つ美術にかなツたところがない今更親をうらむでないがこんな姿をあり〴〵とうつして見せる此鏡ェヽお前に罪は微塵もないが見る度毎に腹が立から自分に增るこの人形の頭でなりとたゝきつけて打ちこはして仕舞はふか　しかし鏡はこればかりでないまだ〳〵いくつもあるものをそんな馬鹿げた事をしたツて實に仕樣がないこれは實に天命でかう生みつけられたのが自分の不幸とあきらめるより外仕方がない嗚呼人工ではどうする事もできない顏形否でも應でもあきらめなければならぬがそれにしても思ひだすこんな姿でも二三年前やれ惚れたの何のと言ツた人が隨分あツたけれど大分皆自分を馬鹿にして戯談半分に言ツたのかもしれぬそれにしても一度ならず否だ〳〵とはねかへされてもそれでもどうかといづれも言ツたして見ると其人達はてもまあお氣の毒な美術といふ心得は夢にも更になかツたのか屹度それにちがひない　自分は其ころおもふ事が皆くひちがツて實に不愉快でたまらない時であツたが家でごく懇意にしてる櫻津綱雄といふ人があツた其人はたしか去年のくれになくなられた當時有名なある書家の弟子で手はな

か〳〵うまく又漢學も餘程深く學だとかで話が一寸面白かツたのみならずまづは隨分好男子の方であツたけれど鼻立と猫脊は實に感心しなかツたが色が白いのでともかく其七難はかくしてゐた自分は男女とも友達はあんまり澤山もたない方だが此人ばかりは俗人とは餘程ちがツてかつ音樂のたしなみもありもともと良家の子息とて仕打が何となくしとやかで否味もなく佞姦らしい所もなかツたから自分は只いゝ友達だと思ツて櫻津のきた時はいつでも一所に話をした始のうちは一週間に一度位しか遊びにこなかツたがだん〳〵二度三度とくるやうになり其歸度中々急にはかへらぬ自分はもともと我まゝだからもう大がいにして歸ツてくれればいゝと思ふ事も度々あるやうになツたこんな風で二三ケ月をすごしてるうちある日古道具屋がにせかどうだか自分にはよくわからないが北齋筆の楊貴妃の幅を持ツて來た多分にせだらうとは思ふけれど圖どりが實によくできてゐて筆力もなか〳〵ある代價も相應であツたから父にねだツてとう〳〵買ツてもらひ自分の居間にかけるやうになツたがこれに對する額を見れば字は極めて拙いながらでも當時有名な何とかいふ人の雨奇晴好といふ金釘四字自分はもともと男のやうな荒ツぽい氣象だが室内の粧飾や衣服調度のたぐひはいづれも皆艶きはまるものを好む方だからこれではなか〳〵我慢ができず父が一二度かれこれ言ツたが遂とりかへる事にした扨てどんな風のものがいゝかと考へたが中々氣に入ツた句もない　ないといふ事はなからう多くの本の内には屹度あるにちがひないと思ツて氣長く書棚の前にこびりついて文選やら卓氏藻林やら白氏文集やらはては經卷のたぐひまで引ずり出して一枚おき二枚おき五枚おき二十枚おき大がい見つくしたがそう氣に入ツた句もない例のくせまた疳癪をおこして目の前に亂雜に取りちらした書物を手あたり次第引ツつかんで投りだしたあゝと言ツて失望の欠伸をもらして手近にあツた寫眞帖を枕にしてしだらなく寢ころんだが何を考へるともなし又蝸牛のやうに手をのばして今の今投りだした本を又引よ

せてよんで見たあゝ實にうれしいそれは卽ち自分の好な長恨歌だこのうちの句ならば皆いゝがそれにしてもそう澤山かく譯にもゆかずどの句がいゝかと二度三度くりかへしてよんで見たが其うちの夕殿螢飛思悄然といふ句が最氣に入ツたが扨誰にかいてもらへばいゝか一寸こまツたまあ誰がいゝだろうとしばらく考へたア燈臺もとくらしだ櫻津さんだ櫻津さんだそうだあの綱雄さんにかいてもらはうそれにしても今日あたりはきそうなもんだなと思てしきりと詩の事なんぞ考へてゐたすると忽ち襖があいてお孃樣殿樣が入つしやいましたよあの三位中將樣がアそう今すぐ行くよと言ツてかへした今下女がこんな事を言たのは櫻津の何となく生ぬるく花族の若樣然としてるのを誰れかとたはむれにヤア櫻津の御前樣だの殿樣だのと言ツたのを覺えていつか下女までがあだなのやうによびなれたのだ三位中將と言たのはいつかお正月かるた遊びをした時櫻津がまけて額にまゆずみをかゝれた時皆んながはやしたてゝほんとによくお似合遊した事三位中將と申上てもいゝようだなどゝ言ツた事があるそれからこれもあだなとなツて家ではだれも本名をよぶ者がない扨てきたといふから丁度いゝ都合だと思ツて今えらんだ句の揮毫をたのんだすると櫻津はよろこんでハヽアなかなか艶な意味のありそうないゝ句ですねと言て妙に自分の顏を見たけれども自分は何の氣なし無頓着にハイあはれなさびしい句ですが何だか私はかういふのが好ですからと言ツてまだ楊貴妃の幅の事を話さないうち父が歸ツて來て其日は其まゝ別の話に移ツて仕舞た櫻津はいつ物をたのんでもさつさとしてくれた事のない人だから何れ一ケ月位もすぎなければかいてくれまいと思ツて其後二三日は外の事に氣がとられて額の事は忘れるともなし忘れてゐたすると五日目に又櫻津がきた出て見るとても意外何たる早い事だらうもうはやかいて持ツてきてくれたそして何だかにこ〱うれしそうに笑ひながら實にふできですがどうか御不承を……それから何だかこんな珍本か見つかりましたから持つてまゐりました御らんずみか

もしれませんが御ゆツくり御らんなさいと何か和文の本を出したそれから自分はていねいに禮を言ツて又よもやまの話をしたがやがていとまを告げて歸ツたあとでかして行ツた本をよんで見たが別にそう面白いものでもない親切にかしてはくれたが何だこんなものつまらない珍本とはちとのさばりすぎた言ひ分と又少々疳癪にさはツて人の物だ事も忘れて又もやそこに投りだしたすると何やら落散ツたものがあるおや何だろうと思ツて取りあげて見ると手紙だてがみも手紙何だ馬鹿らしい艶書といふものであツたでハハアこいつあの句をかけと望まれて何か自分があの櫻津に心でもあるやうに思たのだなとさとツて見ると實におかしい世にはとんでもないまちがひもあればあるものだと思ふと實に〳〵たまらないほどおかしい自分は何の返事もしないのにこれからといふものは櫻津のくる事又非常だ始は一日おきこんどは毎日はては一日二度もくる事がある其都度いつもめかしこんでくる自分は實におかしくてたまらないがいつでも同じやうに親しく話したするといつか書生や下女までがどうも此頃はほんとに不思議だあの櫻津樣は用もないのにお百度まゐりをなさるしお嬢樣はいつもおうれしそうにお話をなさるか乾度あの方に惚れて入ツしやるのだろうと思ふと又そうでもなくお歸りになツたあとではやあ自惚男だののろまだのと仰るし何が何だかさツぱりわからないと言ツてゐたそうだこれは實にわからないも最だ自分は當時目的がいすかのはしとなツたむしやくしやまぎれ罪も報もない人を實に嬲ツてもてあそんだのだ今更思へば人の感情をもてあそぶといふのは極めて罪の深い事で決して正しい乙女のすべきわざではないと心から實に後悔するが其當時は別に何とも思なかツたいや思はなかツたのみならず男といふものは極めて〳〵淺はかな迷ひやすいかうもつまらぬものかとひとりつく〴〵笑てゐたが只これのみならばまだしも其後折あしく兩親が他出で氣にいりの女中ばかりを相手にして遊んでゐた時大變いくら手紙をよこしても一度も返事をしないもんだからもうよツぽど

氣ちがひじみてゐる例の中將がやツて來た始のうちは只あたりまへの世間話をしてゐたが丁度わるく用があツて女中が勝手に立ツて行たすると中將機失ふべからずといふ意氣組短兵急にせめかけた自分は實に薄氣味わるく何もいはずもじ〳〵してゐるうちにさあしやべツた〳〵息もつかずつらいつれない薄情無情つまり其名は變ても氷沙糖金米糖有平糖といふやうな質は同じな言葉ばかり稍一時間もならべたてたそしてどうかこれほど思ふ心を察して否でもあらふが色よい返事をと男のくせに見ツともない自分の前に頭をさげた自分は屹度形を正して櫻津樣あなたの仰る事はよくわかりました今お答をいたしますがしかし多分お氣には入るまいとおもひますけれど私は同じ事を二度とくりかへすのはきらひですからよくおきゝおとしのないやうに……するとまあお氣の毒な櫻津は只無言で涙ぐんだで自分も流石かあいそうなと思たが例の氣象だからかまはず言ツたあなた私みたやうなふつつかな者をそれ程までおぼしめして下さるのは實にありがたうございますがね私は幼少い時から何となく世の中のつまらないといふ事に氣がついてどうしても一生夫をもたずに獨立しようとかたく心に誓たんですよで御ぞんじの通り一度は醫者にならうかと思て失敗し一度は畵師にならうかと思てやツぱりいけずもと〳〵好きな道ですから文學でもとぞんじましたが世にいふ下手の横好で又格別立派な高等教育もうけませんからそれもできず實に自分ながら才のないのに氣をもんでもう始終むしやくしやしてるんでございますよで私はこの家をつぐんぢやなしどうしても何か一つ一生たべて行く丈のわざは覺えなければならないんですそれでこの頃は寫眞師にでもならうかと思てる所ですから思召は實に有がたいんですけれどとてもあなたの御滿足のできるお答をいたす事はできませんからどうぞあしからずおぼしめしていたゞきたいんですもとより自分が思てるでもなんでもないからむつかしくも何ともなくすら〳〵とのべたてたこれをきいてた櫻津は靑くなツたり赤くなツたりそれは〳〵實に氣の

毒であツた最後にかう言ツたなるほどそういふおぼしめしならば御否と仰るのも無理はありませんしかしあなた人間何が面白くないと言て孤獨の生活ほど不愉快なものはないといひますから猶よくお考へなさツて下さいもういく度仰てもそればかりはといはうと思ツたがそう〳〵つれなくもいはれないから大がいにして此の日は別れたこれまでは只友達としてつきあツたばかりで別に甚だしく否とも思はなかツたが此日を始として其後くる度毎に否になツて果は顏をみるのも聲をきくのも否になツたけれど櫻津執念深くも中々思ひ切る景色はなくやツぱり自身のうぬぼれ心か只乙女心で恥かしいからあんな事をいふのだろうほんとうは屹度自分を思てるのにちがひないとでも思ツたものかとうとう公然兩親に向ツて結婚の事をいひいれたで兩親は自分をよんでどうでもお前の心次第にしろと言た自分は無論否と頭を振ツたでこの事はこれでお仕舞となツたが猶櫻津は思ひ切た樣子もないすきまがあればうるさく何のかんのと言ふけれど自分は一向とりあはないかうして一二年もおくツたがいつのまにか自分の心は全く變ツて獨立主義もどうやらおぼろげに消えて仕舞今の夫に全く迷ツた櫻津に向て高言揚ツた言葉もあだ遂に兩親のゆるしを得て結婚したがこの結婚について世間では何のかのと口うるさく小言をいふ思へばまことよけいなお世話實に〳〵いま〳〵しいこれにつけても櫻津はさぞまあいゝ氣味だと思ふだらう嗚呼思へばしかしこのやうな何のうつくしい所もない我ながらあきれはてるこのまあ否な鏡のかげをあれほどまで熱心に思ツてくれた心根はまんざらにくゝもないやうなけれどどうしても否だ實の所只氣の毒であツたと思ふばかり今日というふ今日鏡に向ツてそゞろにしのぶ……すぎこしかた鏡花錄とはちとのさばりすぎた言ひ分とは思ふがそれは自分のとがでなく全く筆の罪である

五大堂

一

世にうれしき事はかずあれど、親が結びし義理ある緣にて、否でも否といひいでがたき結髪の夫にもあれ、妻にもあれ、まだ祝言のすまぬうち、死せしと聞きしにまさりたるはあらずかし。こゝに娘で名高き青柳子爵の一人姫糸子といへるも未來の夫とさだめし人の、心に染まぬそれ故に、うき年月をおくりしが、この頃おもき病にてうせしときゝしうれしさに、今まで青き顏色も、きのふにかはる美くしさ。しづみし心もうき立ちて、腰元どもを相手とし、遊びに餘念もあらぬ折から、兄の房雄は入りきたりて「オヤ糸子さん、造花ですか、ヤア照も初も大變上手になつたね」といはれて二人ははづかしさうに「どういたしまして私どもはとてもお姫様のやうにはできませんもの「いやさうぢやない、中々うまいよ」糸子はにこにこわらひながら「兄樣、あなたには花籠をこさへて上げませうか「アどうか……私には牡丹をこさへてちやうだい」糸子はさくらの葉に蠟を引ながら「牡丹は下手ですもの「下手でもいゝの「ぢやあしたまでね「アア……それから今私が一寸學校に行てくるが、留守にいつもの丁さんが來るかもしれないから其時は糸子さん、否でもすこしの間話相手になツてゐて下さいよ、ぢきかへるから……ね、外の人ぢやないからいゝでせう」なに故か糸子は顏をあかめながら「ハイ私には面白いお話なんぞできませんけれども、照も初もゐますから屹度お引とめ申しておきますよ」と腰元二人の方を見る、照はすこし笑ひながら「どうして、私どもなんぞお引とめ申たつて、なんのかひも御座いませんが、お姫様がお引とめ

遊すもんなら、どんなお忙しい時だつて、今宮様は屹度そりや、お歸りになる氣づかひはありませんよねお初さん」これもおなじく笑ひながら「ハアさうですとも、ね、若様、只今照が申通りで御座いますから、御心配なさらずと、早くお出遊ばせ。

…………………………………

噂をすればかげとやら、まもなくきたりし今宮は、優にやさしき姿ゆかしく、心ある人は其艶なるにまよはされて、我にもあらずたましひもありかさだめず、うかれいづべけれど、心なき人々はいかににやけし男とや見ん。衣服はれいの小紋の三枚かさねに、黒ちりの羽織なまめかしく、獻上博多帯のあたり、時々ちらつく金鎖に、收入にくらべて借金の程もしられ襟のほとりの香水も、安物ならぬしるしには、追風遠くかをる床しさ。お初お照も無言のまゝ、しばし見とれてぼんやりせしが稍ありて心づき茶菓もてこんとていでゆくを見おくりながら、今宮はきまりわるげの糸子にむかひ「ハヽアさうでしたか、しかしお留守のところへ上つて、お氣の毒でございますね」　姫はいとゞはづかしげに「どういたしまして兄はぢきかへりますから御退屈でせうがすこしお待ち遊ばせな「ハイありがたう……イヤどうか決しておかまひ下さらないやうに」糸子はかたへの寫眞帖をいだしながら「なんのちつともおかまひ申ませんで……今宮様、あなたこれをごらん遊したの」手にとりて「イヽエまだ拜見したしません……オヤこれはあなたですね、どうもお立派ですこと「アラおなぶり遊しては否でございますよ「勿體ない、なぶるなんてほんとうですといひつゝしばし見とれしが、氣をかへて、其次をあけて「これは花園女史ですね、あなた御懇意なんですか「ハイよく時々入つしやいますよ「隨分評判の方ですが、さうですか實際…「ハイしかし世間の人はとかくわるくいひますが、あの方があんなにおなりなさつたのも全く社會とかの罪でせうよ、……幼少い時からよくひどい目にばかりおあひなさつたさうですから「ハヽアさうですか……いや女の小説

家なんてへものは、ほんとに、かあいさうなものですよ少し自分の思ふ事を筆にまかせて書く時は、すぐおてんばだのなんのといはれますからね……それをおそれてかきたい事もかゝずにゐるのは、つまり女らしいのなんのとほめられたい慾心と、世人の評には屈しないといふ勇氣のないよりおこるんですが、この花園女史は決してそんな臆病ではないやうですね「さうで御座いますよ、ほんとにお話でもお遊びでも、あまり活潑すぎて、丸で男の方のやうで御座いますもの、そのかはりさつぱりして同じ事などぐづ／＼くりかへして、泣たりくどいたりなんぞは一度もなさつた事御座いませんの「ハヽアなる程さうですかね……ぢや私みたやうに、不活潑な女のやうな者をあなたは屹度おきらひでせうウフフフ」なに故か糸子はあはてゝ顏をあからめ「アラ私は花園女史をすきだとは申しませんよ」今宮はわらひながら「ナニお好だつてわるいとは申ません「イヽヱ好では御座いませんがあなたこそ私みたやうな陰氣なものは、おきらひで御座いませう「なんの私は女のあらつぽいのは好きませんから……「うそ仰り遊せ……しかし私は……私はあきらめてゐますから」不思議さうに糸子を見て「なにをおあきらめなさつたんです「なんでもようございますの」

二

腰元のお京と、御寵愛のポチをともにつれて、こんもり繁りし青葉の木蔭、運動がてら散歩せんとて、お庭にお出遊ばされし御前の、まだ五分間もたゝぬのに、早くもお居間におかへりありしのみならずあはたゞしくお召とはなにごとならんと、三太夫いそぎ御前にすゝみいでゝかしこまれば、いつになきふけうげなお顏色にて「これ杉田、よんだのは外でもないが、今はなれにきて房雄と話をしてゐるのは、少しも聞おぼえのないやうな聲だつたが、どなたかの」はてな妙なことをお聞き遊すと思ひながら「ハッ若殿樣、此頃から御懇意に遊す小說家、放蕩山人と申方で御座います」ときいて、御前は眉をひそめ

「ンヽ小說家か、寶塔山人とは佛くさい名ぢやが……「御意で御座います、歌舞の菩薩に緣のありさうな、結構な雅號で御座います」御前はフヽと苦笑して「イヤそんな事はともかく、房雄はどうして戯作者なんぞと懇意になつたか、お前はよく知つてるだらう、ここでくはしく話しなさい」作者と懇意なのがどうしたと、仰るんだらうといぶかりながら「ハツよくはぞんじませんで御座いますが、此春の試驗休みに、鎌倉から江の島の方へ御出遊した時、惠美壽やとかで御懇意におなり遊した御樣子で御座います「ンなる程、あの時は誰が供だつたかな「さやうで御座います、別にお供の者はまゐらず、只御學友の若樣方ばかりでお出遊しました「なる程、一人で行つたつけな……ンぢやお前の落度ではない」落度ときいて三太夫びつくりして御前を見る御前は猶も語をついで「イヤおれのやうな老人は今の小說家とかいふ者の才學はどんなものか、品行はどんなものか一向に知らないが、しかし昔い戯作者などいふものは、大抵普通のまじめな人間とはちがツての、いはゞこれといふきまつた職業もなく、しツかりした學問もなく、マアきゝかぢりの漢學か何かを、どうやらかうやらつかひこなして、俗人を驚かせたやうな質のもので、其上品行なども皆みだらなものばかりで、つまり共持つて生れた小才で、世の中を胡魔化して、一生貧しく賤しく送たものばかり多かつた、それで今の小說家も、やつぱりさうだらうといふではないが、房雄は只さへあゝいふ柔弱な質だから、なる丈軍人か何かを友人にして、さういふ風の人にはあまりつきあはせたくないとおもふが……何とか遠ざける工夫をしたいものだがの」落度の意味のわかりしに、三太夫やつと落つき「御意で御座います、只見うけましたところでは放蕩山人もいたつてよい方のやうで御座いまするが御前の思召をうかゞへば、また若殿樣の御身の上も案じられますから、猶あの方の善惡を聞きたゞして、もしもお爲にならないやうな事が御座いましたら、なるべくお腹立にならないやう、若殿樣に御意見を申上ませう「イヤ人

間のよしあしにかゝはらず、おれは小說家ときくと、實に身ぶるひがする程きらひだから、ぜひ遠ざけてもらひたい」折から殿の愛妾お露の方、しづかにこゝに入りきたりて横目でぢろり三太夫をにらみしが、電光石火首ふりむけ、殿を見る目はきはめてやさしく、したゞるやうな媚をふくみ、いひにくさうにくごもりながら「アノ……只今ちよいとお次で伺ひましたが……アノ……御前様」殿はわるいところへきたといふやうなおこゑで「露、何か用があるのか「ハイ」涙ごゑで三太夫の方にむき「アノ……何で御座いますが、私へは今日かぎりおいとまを下しおかれまするやうに、もし杉田さん、どうか御前様におねがひ下さいまし」御前は意外に吃驚して「露、何が氣に入らなくつてさ様の事を申のぢや」いはれて猶々涙ごゑで「何の勿體ない、氣にいらぬなど……決して〱さやうの事では「では何ぢや「ハイ……あの御前様のおいとひ遊す放蕩山人とは、私の兄、今宮丁の事で御座いますから、其妹の私もとてもながくは……」きいて御前は意氣地なくも「さやうか、露の兄とはしらなかつた」きまりわるげに三太夫の方にむき「これ杉田、そんならすこしもくるしうない、何ぞうまいものでも澤山御馳走してやるがいゝ」變幻自在にあきれはてゝ、思はずしらず三太夫「ハツ今度はさ様に遊しますか」

三

立聞されしもつゆしらず、はなれにきてゐる放蕩山人ホーレル水でも呑みしものか、日本人とは思はれぬほどつや〱する色白な裕恰のよい顏に、ぞつとするほど愛嬌のあるゑくぼをよせながら「イヤどうも驚きますね」と不意にいはれて房雄も驚き「エどうかしましたか「イエあなたの此書齋です「書齋がどうかしましたか「ハア始めて私が伺つた頃は、御本はいづれも書棚や本箱にちやんとかたづいておりましたつけが、此頃ぢやいつ上つても、新聞雜誌やなにやかや、大變亂雜におとりちらしで丸で私の書齋のやうですから、どうして俄にさう無性に

おなりなさつたかと、實に驚きますよ「ハ……何ですよ、私もあなたにお目にかゝつてからは、どうもあんな四角張つた理窟くさい、法律なんぞ否で〳〵仕方ありません し、又昔から好きな道ですから、何か一つ徒ら半分かいて見て、あなたに直していたゞかうと思ツて此頃から少しづゝつまらぬものを書き始めたもんですから、自然どうも取りちらしても、其まゝにばかりしておくですから」と若様決して人まねして、わざとかうしたのではないとの言ひ譯、何やらきまりわるさうなり。放蕩山人は鼻のさきにて聞きゐしが、何のこいつ人まねか、鵜のまねの烏瓜買ふてうまいとほめる人もあるまじきは、いかに花族いひまでこまるかしらないが、くだらぬ寢言をかきならべて、小説で候法律否のと、著作三昧かたはらいたしと、心のうちではあざ笑ひしが、色には更にいださずして、さも感心したるらしく「ハハアさうですか、そりや何より結構です、失禮ですがおできになつたところを少し拝見ねがひたいもんですが、といひつゝ、實に不作法にも青貝蒔繪の机の上に、何やらかきちらした草稿を會釋もなく引つたくれば、房雄はあはてゝ「アそれをみてはいけません、あなたまだそれはいけないのですから」といきなり山人の手からもぎとつて、無殘折角かきし物をめちや〳〵に抑丸めて、袂のなかにかくしたるを山人は笑つてあらそひもせず、無言でながめてゐたりしが稍ありて「いや、おできにならないものを拝見すると言たのは失れいでした、しかしマアどんな御趣向です」房雄は少し見られたかと、猜顔をあかめながら「趣向……ナニ大したものなんぞとてもできませんから、ほんのやき直しです、ごく古代めいた人情小説です「ハハア人情小説……イヤそれほどむづかしいものはありませんよ、失禮ですがあなたなんぞまだお年もお若いから、實驗なさつた事も少いでせうが、さういふものをおかきになるとは、實に敬服のいたりです」とあんに輕蔑の意をほのめかす。房雄は一向無頓着にて「イヤ其經驗のないのに實にこまるんです、丸つきり書生ですから、とても

ろくな物はできません」最だ、よした方がよからうと、心のうちでは思ひながら、口の前では反對に「イエさうぢやありませんよ、諺にも歌人はゐながら名所をしるといひますから、ましてあなたのやうな才子の方には決して經驗の有無にはよりません」頭をかきながら「あなたはさうかもしれませんが、私のやうなものが經驗のない事をかかうと思つても、とても想像ばかりぢやかゝれません、實にこれにはよはみです「フフフフそんな事はありますまい、世の中の事は大抵想像通りの物ですよ」何か急に思ひ出したやうに、時計を見ながら「ぢや何ですが、もしおさしつかへがないなら、これから大に人情研究に、適當の場所へおともいたしませうかウフ……」下地は好なり御意はよし、これまでとても滿更おぼえのなきにもあらねば、房雄も內心大によろこび「アハヽハさうですね、いゝでせう、お供しませうもう、何時です、「七時半ですから丁度いゝです」「ぢや一寸着かへてまゐりますから、失禮ですが」と目禮して、奥にいりぬ。あとに山人うまい〳〵とひとり笑しながら、膳の上を見まはせしが、肴はあらして殘骨いとゞなまぐさく、德利をふりこゝろみれば、音もなきに失望して、煙草ばかりくゆらせしが、若殿おめかしにひまどりて、中々急にいできたらず、あまりの長きに退屈して、つと立あがりて、庭下駄引かけほろ醉に櫻色となりし美顏を風になぶらせながら、築山のうしろ泉水のまはりなど、そゞろありきしつゝ、流石やさしき文人とて、折にあひたる古歌などひくゝ口すさみ、我にもあらで立すみし袂にさはりしものあるにぞ、何かとばかりおどろき見れば、いづこより投ぜしか、簪に結びし玉章一通足もとに落ちりてひろひあぐるを待ゐる風情、これ初戀の面影と、しるやしらずや月さへも、まよひの雲につゝまれて、ひかりもいとゞうすれゆく、艷にゆかしき夕なり。

四

藝者は一二度よびたる事もあれど、かゝるところは始め

てなれば、何やらきまりわるさうな房雄の様子に、放蕩山人さては氣に入らなくつてかうだのかと、内心すこしくしよげながら、しきりと機嫌をとる折から、此家のお神お茶道具を持きたりて、例のあいそよきにこ／＼顔にて「旦那今夜はどちらへ」といはれて山人頭をかき、房雄の顔を一寸見て「さ様さね……あなたどこにしませうね」房雄はいとゞきまりわるげに「どこつて、とこでもいゝです」お神はホヽと笑ひながら「ではあなたいつものところへお出なさいよ、此頃ちつとも入つしやらないもんだから、きのふもおいらんからおことづけが御座いましたよ、ほんとに今宮さんは薄情ですね」得意になりてすつはぬかれて、始めてのつもりの化の皮、血のでるまでにはぎとられ、山人大に閉口せしが、今更どうする事もならず、是めゝせにて、うつかり馴染の茶屋にきたりしを、心のうちに後悔しながら「フヽヽいゝ加減な事ばかり、何でおれに馴染の女なんぞあるものか……然しどこに仕様ね「オホヽヽお馴染かどうかはぞんじませんが、どこに仕様なんてそんな浮氣を仰らずに、いつもの尾彦になさいよ」「おやさうしやうかね……あなたいゝですか」房雄はなれぬあそび故あまりおもしろゝはおもはねど、すでに同行せし上は、今更否ともいはれねば仕方なしに「ハアどこでもいゝんです」ときいてお神は如才なく、消炭をよびて「あの――お松や、お前尾彦へ行つて、お座敷を見てきておくれ」女は手をついて「へヱかしこまりました」といひつゝ一寸頭をあげて、今宮を見「オヤどなたかとぞんじましたら、マア旦那で入つしやいますね、此頃は大變お見かぎりで御座いましたねヱ」お神はにこ／＼笑ひながら「お松や、旦那は他へいゝところがおできになつたんだよ、おいらんにいひつけておやりな「ホヽヽにくらしい事ね、さんざいひつけてまゐりませうといでゝゆく。あとには今宮酒肴を命じておもしろおかしくさゞめきながら、三人とやかくくだらぬ事を話すうち、まもなくお松はかへりきたりて、「アノ丁度よろしう御座いましたよ。

五

緞子の夜着をかきのけて「姫や、今日はどうだい、少しいゝ方ではないの」といふ母の情はありがたけれど、今しもうれしき夢を結びつゝ、ねぶり居し糸子はよびさまされしくやしさに、こたふる聲もはかぐ\しからず「ハイ……どうも」といひつゝ細き溜息をもらして枕の上に兩手をのせ、其上にひたと額をつけて、苦しげにうつむきゐる。母君は、心配さうに「やつぱりいけないのかへこまるねへ、どんな風に苦しいの」といひつゝやせほそりし脊中をなでさする。姫はいとゞ物うげに「どこつて……どこが苦しいかわかりませんが、只何となく氣がふさいでいけませんもの……「氣がふさぐつてお前、何か心配な事か、氣に入らない事でもあるのでないの、もしそんな事なら、私には遠慮しずと、話すがいゝよ「イイヱ決してそんな事は御座いませんけれど……「ぢややつぱり腦でもわるいのだらう、後に葉山先生も入つしやるから、猶よく見ていたゞくがいゝよ「ハイなに大した事でも御座いませんから、今によくなりませうよ「どうかはやく直ればいゝが……お前そんなにうつむいてゐると猶更ひどく頭痛がするよ」といひつゝ携へきたりし本をいだして「これ……これはね、此頃房雄が始めてかいた小說だとさ、一寸御らんな、あの放蕩山人が直したのだよ」といはれて糸子は顏ふりあげ、一寸表紙を見て「まよひの雲つてへ名ですか……オヤこの字は兄樣ぢや御座いませんね「アア今宮さんだよ、上代樣で中々お上手ね「おつ母樣はもう御らん遊したの「アアよんだの、一寸面白かつたよ……しかしねヱ、それはともかく、どうもこまるよ」いぶかしさうに「ヱ、」「あの今宮さんがお出になると、とかく露がそは／＼して……向はあゝいふ名高い方だから大丈夫だらうが、どうも外の女中どもが二人の事をかれこれいふから……さうかと言つてお父樣までが、此頃ぢや折々今宮さんとお話など遊すもんだから其都度お茶をだしたり何かする露を、かれこれいはれもせ

す、それにあの方はいゝ方には相違ないが、どうしたもんだか、房雄は、今宮さんとおちかづきになつてからはとかく外にばかり出たがるから、そんな事はなからうと思ふけれど、あの方はもし假面かぶりぢやないかと、時々考へるが、姫、お前は何とおもふの」もし我心を見ぬきてのお言葉かと糸子は思はず顔あかめしが、さあらぬ體に「ですがおツ母様、露なんぞはもと〳〵いやしい女ですから、ふだんでも俳優や何かの寫眞など持てますもの……あの方もあんまりお美しいから、自分ひとり例の浮氣で、そは〳〵してるので御座いませう、あの方に限つて假面かぶりなんてそんな事は御座いますまいよ……又兄様だつて文學上のお話が面白さに、つひおかへりもおそくおなり遊すのでせう」母はつく〴〵きゝをはりて「さうだらうとは思ふけれど」「さうで御座いますとも……ですがおツ母様、何なら露を下げて、外の女をおやとひになつたらよう御座いませう「さ様さね……それから此頃妙だと思つたのは、お父様は何とも仰らないが、お京とお照があのかう言つてたよ、今宮様はお露さんの兄さんだとさつて、妙ぢやないか、お父様はあゝいふ方だから、何か露がいゝかげんな事を申上げてるのぢやないかと思ふよ」糸子はいとゞいぶかる如く怒るがごとく目じりをすこしつけあげて「さうで御座いますね、だから早く露をお下げになつたらいゝでせう「アア今に何とかするが姫お前もあの方がお出でになつても、あんまり房雄の方にお出でないよ」おどろいて「なぜでございますの、私は別に……「なぜでも、今が嫁入前の大事の身體だから」「エヽ」「おどろく位物のわきまへがないのかへ」

六

人形片手に花子は、あはたゞしく兄のゐまに入りきたり愛らしきこゑにて「兄さん、こないだのいゝ姉さんがきたよ」丁は今しもよみかけし洋書を下におきながら、顔をしかめて「こちらへお出とお言ひ……それからおツ母さんはどこへいツたの「赤坂の叔父さんとこへ「さう、

ぢや、花ちやんは遊びにいツてもいゝよ「アア」とうれしげにいでゝゆく。やがてまもなく入りきたりし女をみれば、別人ならぬ青柳子爵の愛妾お露、いとなれ〳〵しげに丁の側に座をしめて「マアうれしい、今日はいゝ塩梅に皆さんお留守ですね」物うげに「アアだが母はぢツきかへるよ……お前マどうしてきたの、何か用でもあるのか」うらめしげにぢツと見て「ハアあなた此頃はなぜ御前の方へ入ツしやらないの」面倒くさそうに「だツてぢいさんのくだらない話が否で仕様がないからさ」涙聲に力をいれて「うそばツかり」顔をしかめて「またそんな邪推をいふよ」腹立しげに「邪推ぢやありませんよ…あなたはもう私に秋風が立たのでせう「馬鹿お言ひ、今日まで出入のできるのも、みんなお前のおかげだもの「それをお忘れなさらないの「忘れるもんか「だツてあなた「あなた〳〵ツてどうしたんだへ「どうもしませんが……あのね、お姫様はあなたにこがれてわづらツてるの「くだらない事を、此間行ツた時、あんなに丈夫でにこ〳〵してゐたぢやないか「さうですよ、今は、もう直ツたんですもの……だが、お姫様の病氣がよくなツたらあなたは御前の方へ入らツしやらないもの、どうしてもあやしいわ」と三ツ輪の頭をうなだれる。今宮さてはと心のうちにおどろきしが、色にも見せず腹立しげに「とんでもない、馬鹿な事を、おれだツて房雄さんといろ〳〵話があるから、そんなにぢいさんの方にばかりもゆかれないよ、さうお前のやうに、うるさく疑ぐられてはほんとに否になるよ」涙ぐみながら「どうせそれやアお否でせうよ、私しやお姫様のやうに美くしくはないから」いま〳〵しさうに「ぢや何だね、おれと糸子さんと、何か譯でもあるといふんだね」泣ながら「ハア……だから私しやどうしやうかとおもふの」うるさくて仕様なければ、どうにかしてかへさんと、きツと心に思案して「どうしなくともなんとかかとかこぢつけて、早くさがツておれと夫婦になツたらいゝぢやないか、それともおれのやうな素寒貧はいやかへ」とにツこり笑ふうつくしさ。

此一言にたらされて、今の怨もどこへやら、涙をはらひてうれしげに「あなた屹度、ほんとですか「うそなんぞいふもんか「そんならもう安心ですが」といひつゝ柱の時計を見て「オヤもう四時ツ、ほんとににくらしい時計ですね、仕方がない、今日はマアかへりませう、おそくなツてあらはれるといけないから「さ様さね、其方がよからう」丁の腹の中、どうか早くあらはれて、おれのきずにはならぬやう、こいつばかりさげられてくれ。

七

奥方きツとかたちを正して、面色たゞならぬ殿にむかひ「御前、さうお怒り遊してはこまりますよ、御前はまだ迷つて入ツしやるからさ、　様な事を仰いますが、何の兄なもので御座いますか、露と今宮はどうしてもおかしう御座いますよ」御前ひどく立腹したる様子にて「ンそれにはたしかな證據があるのか」とよもやあるまいといふ顔色、奥方は得意になつて「御座いますとも、何よりたしかな證據には、區役所に杉田をやツて、戸籍をしらべてもらひましたら、うそもうそも、まつかなうそで露には男の兄弟なんぞないとの事で御座います」こゝにいたツて御前も最早一句もなく、苦々しげに意氣地なくも「さうか、しかしともかく一應おれに相談してくれゝばよかツたのに」「オヤまだ御未練があるので御座いますか、ほんとに御前もう何で御座いますよ、お年がお年ですから大がいに遊した方がよう御座いませう……それはともかく、あの今宮のおかげで、實に大變で御座いますよ「イヤ今宮は最初ツからおれも好かない男だツたが、實にけしからん奴だ……最露も露だが、して大變とはどんな事か「外でもない、あの、房雄で御座いますがこまつた事には今宮にさそはれて、吉原通ばかり勉強したものと見え、學校は首尾よく落第したばかりか、昨日も今日も家へはかへツてまゐりませんから、どうした事かとさま〴〵たづねてもらひましたら、マアおきゝ遊せかねて馴染の尾彦の小太夫とかいふ女をつれて、熱海へ

行ッたとの事で御座います」これには御前もあきれはてゝ「エヽあの房雄が」奥方涙ぐみつゝ「ハイ房雄です此青柳家の家督となる房雄で御座います……これといふのも、もとは今宮のおかげながら、一つは御前のお身持がお身持故、房雄もそんな勝手なまねをいたすので御座いませう」面目なげに「イヤさうおれにばかり食つてかかられてはこまるが、何しろ其まゝにしてはおかれんから、杉田でも早速むかひにやるがいゝよ」「それや無論でございますとも」折からお京が入りきたり、あはたゞしげに手をつかへて「あの奥様、お姫様がどちらへお出なさいましたか、お見え遊しませんよ。

八

長火鉢の側に立膝して、片手には新聞を持、片手には烟管をもちて、しきりと煙草をくゆらせながら、今しも仕事に餘念なき母親の方をぢッと見て「おッ母さん、露はどこへ行ッたの」ひからびついたやうな聲にて「お湯へ行たよ「大變長いね「さ様さ「もう何だよ、そろ／＼いぢめて泣かせるがいゝよ「オヤ大變薄情な事をお言ひだね、自分が勝手に引ずりこんだくせに「わからないねエおッ母さん、最初子爵と懇意になつた時分、あの老公の氣にいらなくッて、あやふくお拂箱になるところを、あいつ老公の妾のくせに、私に心をよせて、自分の兄だといッたもんだから、ぢいさん忽ちのろくなッて、それなりけりになッたんだよ、其おかげであの馬鹿殿を胡廐化して、よッぽど借金のかたをつけたんだアね……だがあすこの奥方は中々悧口だよ、私と露との事を見あらはして、とう／＼二人ともおはらひ箱さ……で私も少し義理があるもんだから、仕方なしにこッそり家にいれたのよ、けれどもおかげで大事の名譽はめちや／＼になッたし……それにもう何もかも大抵とり上げたから、此上猶家におけば、只損になるばかりだよ、だからおッ母さん、お前氣をきかして、もうそろ／＼いぢめておやりよ」殘酷きはまる言の葉と、平氣の平左で花のやうな愛

らしい口から吐出すおそろしさ、母はつく〴〵きゝゐしが「なる程きけばそれもさうさね、だがお前、此頃のやうに仕事がなくツては、實にこまるね、東西新聞もふみ倒されてるし、露はお拂箱にきめたところで……大きな方はかたづいたが、まだはしたがねが殘つてゐて、うるさゝ催促されるもの、其あとはどうするへ「なに心配するにおよばないよ、私にはまたいろ〳〵の手があるから「さうかへ、ならいゝが」といひつゝ我子をぢツと見て「ほんとにお前の器量なら、女のさわぐのも無理はないよ「なんだねくだらない事を……それよりかきツとうまくいぢめなければいけないよ「あいよ承知だよ」折から格子をがら〳〵あけて、お露は今しもみがきたてゝかへりきたるを、見るより母は目に角たて、我子に一寸目くばせし、手なみを見よといひ顏に「大變長かツたね、此忙しいのに何をぐづ〳〵してるんだへ、每日〳〵化粧三昧に大事の時間を費して、女郎藝者ぢやあるまいし、見ツともない、着物をずる〳〵引ずつて……」いつもとても意地わるけれど、今日はあまりのするどさに、お露は殆ど縮みあがり、小さくなりておそる〳〵「おツ母さん、かんにんしててうだい、つひお向のみいちやんと御一所になツたもんですから」とがり聲にて「また俳優の噂にでも夢中になツてゐたんだろう、馬鹿々々しい……オヤ〳〵大變美くしくおつくりができましたね、丸で粉なやの盜のやうですよ、オホ……オヤこのこは泣くよ、何が悲しいんだへ、……しかし思へば最だよ、こんな働のないものを亭主に持て、ろくに物見遊山もできず、おまけに私のやうな、皺くちや老婆の世話までするかとおもツたらさぞなさけなるだろうよ、ねヱお前、露は泣く程こゝのうちが否なんだから、男らしく未練をいはずに、ひまをおやりよ」此時までもお露の方を見むきもせず、新聞よみゐし放蕩山人、やうやくこちらに頭をまげ無造作に「なに否ならいつでも出ておいでよ、お前の方では未練があツても、おれの方にはすこしもないから、ちツとも御遠慮には及ばないよ、ハィ女に不自由はしませんからと、

言ひつゝ一寸時計を見て「おッ母さん、今日人と約束した事があるから出てくるよ、着物を出しとくれな「アア」早くさ、おそくなるといけないから」いはれてやう／＼立ながら「なる丈早くかへるんだよ「早くはかへられないよ「オヤなぜ「なぜでも譯はあとで話すよ、いくらおそくとも又二三日かへらなくとも、案じずにゐておくれ、それから着物はあの縞縮緬にしとくれ「アア」といひつつ母親は奥に行。今まで泣伏してゐたお露はむくりとおきあがり、いきなり今宮にとりついて「あなた今のはほんとうッ」情なくもいきなり其手をふり拂つて「お氣の毒だがほんとだよ」

九

こゝは下谷の池の端、名もなまめかしき後朝といふ待合の奥二階、此あついのにしめ切つて、人目を忍ぶ男女の客、いはずとしれし戀の曲者、女は男の絽の羽織をぬがせて袖だゝみにしながら、何がうれしいかにッこり笑ふ。男も只譯もなしににつこりしながら「しかし今日はよく出られましたね」愛らしきこゑにて「そりやアあなた一生懸命ですもの」煙草をのみながら「隨分むづかしかッたでせう「ハイやッとの事でまゐりましたの「さうでせうね、しかし私も母にうたぐられてよわりましたよ「マアどうも何とかお怒り遊して「イヽエ別に怒りもしませんでしたが……ナニもうこゝまでくれば大丈夫です「そんならよう御座いますが、しかしどなたかあとをつけて入ッしやらないでせうか「なに御心配にはおよびません、たとひつけたにしろ、此商賣ですもの、うつかり二人のゐる事をあかす氣づかひはありませんよ「さうでせうかね「さうですとも……それはともかく、あなたほんとにお家はいゝんですか、それが一番心配ですね、何しろおッ母樣にはひどく私もいはれてますからね」かなしげにしほれて「どうして母はあんなに情ないでせうね……だがあなた御心配遊すな、今日のところは大丈夫ですからと、いひつゝふところからふくさ包をとりいだして

「ほらお金もね、二百圓程持てまゐりましたの」二百圓ときいてそゞろうれしく、「さうですか、そりやいゝ都合でした……しかし妙ですね、考へると此春お庭で始めてお手紙を下さツた時よりの事をおもふと、實に夢のやうですね、あなたとこんなにならふとは」といひつゝ爪紅艶なる其手をとツて引よせれば、女ははづかしさうによりそひながら、膝にもたれて、下より男の顏をそツと見あげ、小さなこゑにて「あなた、あの時はなぜあんなにつれなくなさツたの……」其脊中をなでながら「イヤ決してつれなくしたい心は少しもなかツたんですが、あの時分は春山の若殿が(糸子の結髪)おかくれになツて間もない折ではあり、又考へれば行末とてもとげがたい戀だと思ひましたから、あとで物思ひをするよりは、と思つてそれで私はあなたにもまさるくるしい戀を忍んでゐたのですよ「うそ仰り遊せ、春山なんてまアいやな……あなたは屹度私みたやうな野暮なものより露のやうな意氣な女がお好だからでしたらう「何の向はともかく私においてはあなたのお父様のお召使をかう言ては何ですが、あんなはしたない下品な女はきらひですよ」うれしさうに「でもどうだか「まだそんな事を、うそならどうします「かうします「おやいたい、ひどい指の力ですね、こんな細い白魚のやうな手々には合ひませんね「いやですよひやかして……「フ……怒たの……それはともかくあなたほんとに入ツしやるおつもり「アラ何でうそを……ぜひつれてツてうだいよ、どうせかうして家を出てきた上は、たとひどんなかんなんをしても、あなたのお側に居る事ができるなら、それでいゝと思ツてる位ですものを、まして今度は見た事もない所へつれてツて下さるのですもの、私はどんなにうれしいかしれませんよ「ほんと、ぢや今夜のうちに大宮まで行きませう」おどろいて「これからですか「ハアなに時間は大丈夫です……ね、さうすれば、むかうに行ツてからがゆツくりしていゝでせう、そして上野から汽車にのるにも、晝より人目がなくツて、どんなにいゝかしれませんよ「あなたと御一所な

ら私はどうでもよう御座いますが、しかしあなたのおツ母樣へはどう遊すの「なに母には向に行ツてから手紙をよこした方がいゝです……あなたと夫婦にしてくれるならかへる、でなければかへらないとね、いゝでせう「ほんと、まアうれしい事「ほんとですとも」とにツこり笑ツて、女の絹のやうな頬に、自分の櫻色の頬をくツつけて「決してお世辭でも何でもない、ほんとうの事をいふんですがね、私はこれまで眞に女を思た事はありませんが、あなたにはどうしてこんなに迷ツたか、實に自分ながら不思議ですよ」女はいとゞうれしげに「たとひうそでも其お言葉は忘れません「うそかまことか今に屹度しれますよ……お兄樣も今頃は熱海へおつきでせうが、うらやましいのね「これからやツぱり御一所にいきますもの、兄をうらやむには及びませんわ、それともあなたはまだ尾彥の花越とかを思ツて入ツしやるの「何の馬鹿な……そんなくだらない事はもういひツこなしさ、早く仕度をなさいよ。

十

はれて妹脊となる日をば、むなしくこゝに松島の觀月樓上、三階の端いと近く立いでゝ、糸子は四方をながめながら「ほんとにどうもいゝ景色ですね、これにまさるところは日本にはありますまいね」寢ころんで居た今宮もおきてきて、糸子の肩に手をかけて「いゝのなんのツて丸で繪のやうですね、あの向にみえるのは何といふ島ですか「あれですか、あれは雄島です「あの島は「大黑島「其側のは「布袋島「オホヽ……七福神の名みたやうですね……オヤ今日は大變船がみえますね「あれは皆漁夫の船ですよ「マア大變面白さうですね「なに家業となつたら別に面白くもないでせうよ、我々小說家なんぞの道樂商賣でさへ、隨分つらい事が多いんですもの「オヤあなたもつらい事があるの「ありますとも「どんな事「どんな事ツて、さうとりとめた事でもないんですが、はたから見たやうに氣樂なものではありませんよ「そりやア

やツぱりさうでせうね」何かしばし考へて「それはともかく、しかし今日の母の手紙の様子では、餘程ひどくおうちの方からおかけ合があツたものと見えますね」「さうですね」と心配な顔色、今宮は溜息をつきながら「それで母も妹と二人きりで、非常にこまるから、どうか歸ツてくれろツて、怒る所か頼むやうな手紙ですもの、私の母は無論ゆるしてくれませうが、只おぼつかないのはあなたの御兩親ですね」糸子はしほれながら「私は兩親がゆるしてくれないなら、それで、よう御座いますから人には何と言はれたつてかまひません、只あなたのお側にさへ居られるなら、どうでもいゝと思ひますよ、ですからおかへり遊すのがお否なら、いツその事あなたのおツ母様と、花子様とをこゝにおむかへなさツたらいゝぢやありませんか「それは何譯もないんですが、しかし私の家業は都でなくツてはできない事ですもの「なる程さうでしたツけね「それにくる時、日光や、飯坂なんぞであんまり遊んだもんですから、もうお金もそんなにありませんし、實にこまるんです「さうですか、どうしませうね」折から此家の女中きたりて、茶代の效能むなしからず、東京にては借家住居の今宮を、衣服の綺羅と顔立の上品なるに胡麻化されて、下へもおかぬ花族あつかひ、障子の外に手をついて「御前、只今新聞がまゐりましたから……それから何ぞ御用は御座いませんか」今宮は物うげに「アアマア何もないよ「さ様で御座いますか……今日はいゝ鹽梅に風が御座いませんでよろしう御座います、ちと瑞巖寺へでも入ツしやいませんか「先にも見たから……しかし中々立派だね「さ樣で御座いますツてね、私どもはまだ一度も見た事御座いませんものオホ……「オヤ姉さんはこゝぢやないの「へヱ王子なんで御座いますが、こんな所へまゐツて居りますので「さうかへそりやマアさぞ故郷が戀しいだらうね、晩にひまになツたら遊びにおいで「へヱありがたう御座います」と會釋して出てゆく。今宮又もねころびて、煙草盆を枕にしながら、今しも女がもてきたりし東京新聞をよみそめし

が、稍ありて顔色かへてむくりとばかりおき上り、何かしきりに考へゐる糸子にむかひ「糸子さん、もう駄目ですこ……これを御らんなさい」いはれて新聞手にとり上げ「どんな事が御座いますの「これ、こゝを御らんなさい」さゝれしところに目を下せば、あはれ悲しやみだしもつらき文學者の大墮落、はツとばかりにおどろきながら、胸とゞろかせてよみ終り、おもはず新聞とりおとしぬ。

……………………………………

才にまかせて世をも人をもあざむきつ、おもしろおかしく今日まではどうやらかうやら送りきしが、お露をつまとせし頃より、名譽はすでに地におちて、書肆には體よく遠ざけられ、朋友よりは絶交され、親族よりは義絶されて、社會の信用失ひし上、日々借金取にはたらるゝ苦しさ、糸子の戀慕を幸に、こゝに姿をかくせしも、うか〳〵するうちふところも大方さびしくなりしのみか、流石薄情残酷なる心にも、世にたぐひなき糸子の姿と、其赤心にほだされて、始は當座の花心、口さきのみでたらせしが、いつのまにやら今は心からいとしくなり、我と我身を疑ふまで、千代も八千代も末かけて、はなれともなき戀しさに、何とかなして表むき夫婦にならるゝすべもやと、いろ〳〵思ひをくだきしが、我こしかたをかへりみれば、糸子の兩親こゝろよく、承諾すべき譯もなしさりとていつまで此ところに、月日をおくりてゐられもせず、早此上は全く路用のつきぬうち、ともかくみやこにかへりし上、何とか工風をせんものと、稍決心せし折も折、またもや糸子との浮名を新紙にうたはれて、今はかへるにもかへられず、いかに面皮が厚しとて、ふたゝび人に顔見らるゝに忍びねば、いかゞはせんと思ひしが、思へば思ふ程世の中が否になり、善惡邪正無差別の、こんなつまらぬ娑婆世界、いつまでゐるもおなじ事、いツそ浮世をよそに見て、静けきさとにねふりなば、いかに心も安からんと、我にもあらずぬけいでて、足にまかせて歩みしが、松吹風の肌さむきに、ふと心づきてあた

りを見れば、岩根を洗ふさゞなみの音は女の泣如く、松の雫か夜露か雨か、おのが涙か長からぬ、袖もしめりて物がなしく、沖のいざり火影かすかに、月もおぼろにくもれるは、我身のはてをとふにやと、思へばいとゞはかなさに、かへらぬ事を思ひいで、おかしゝ罪をくゆる折、いづこともなくとめきの香り、こはいぶかしと思ふまもなく、我にすがりしものあるにぞ、たぞやとばかり驚けば、おもひもよらぬ糸子なり。よもしるまじと思ひしに、どうしてあとを慕ひしかと、しばし無言にながむるを、糸子は涙のこゑ細く「あなた……あなたはマア何といふ情ない方でせう、私をねかして夜夜中こんな所に入ツしやるとは……マアあなたこゝはどこだとお思ひなさいますの」いはれて今宮心づき、そもやいづこと見まはせば、今まで目には入らざりしが、いとものふりたる社のさま、月にすかしてながむれば、文字もかすかに五大堂、なる程おもへばあの氣味わるき、琴柱の橋を渡りし覺はあるやうなり。さりとては序あしゝと、心のうちにおもひながら「どこでもない五大堂です、あんまり月がおもしろかつたものですから、つひぬけ出してきたんです。決してあなたをおきざりにしたなんて譯ぢやないから、まうそんなにお泣なさるな、ね、もう泣かないでさ」いへばます〳〵むせび入りて「うそ……うそ仰り遊せ、あなたはこ……こんなにおかきおきまで殘しなさツて入らしつたのですもの、もうお心はしれてをりますよ……なる程あんなにかゝれては、しかも事實であツて見ればさう思召も御最です、だから私もおとめ申はいたしません……そ……其かはり私もどうか御一所に……ね、もしあなた御一所に死なせて下さいましツ」泣いて我手にすがられて、今宮殆ど當惑せしが、乾度思ひついて「イヤ其お心は忘れません、しかし糸子さん、あなた私のかきおき御らんなさツたの「拜見いたしましたとも「そんならよオく聞きわけて、私一人死なせて下さい」糸子は涙の聲ふるはせ「あなた今更そんな事を仰るのは、私をおいとひ遊すからでせう、考へても御覽遊せ、あんなにひどくか

かれては、たとひどうでも私も生きて兩親に顏向はできません……だからあなたがたつて一所に死ぬのは否だと仰るなら、私は一人で死にますから」と言ひつゝつと身をおこして、崖の方にはせいだすを、あはてて今宮引とめて、これまでなりと決心し「そんなら御一所に死ませう「ほんとうですか「ほんとですとも「オヽうれしいとよろこぶあはれさ、思へば夢にもおとりたる、痴情のはかなさを、うき世の人はそしるとも、迷ひにまよひし今宮は、いかにうれしとおもひしならん。おりからさツと潮風に、雲はらはれて月影も、ふたゝびくまなくてらすにぞ、手に手をとツて稍暫時、顏と顏とを見合せて、これが此世の名殘かと、言葉はなくてもろともに、涙にくるゝ四の袖、吹浦島の岸による、浪も二人の身のはてを、かなしむごとき風情なり。

…………………………

其翌々日仙臺東北新聞の第三ページには、てもめづらしき文學者の心中といへる、いと長々しき雜報を見るにいたれりとぞ。

著作年表

（但し、新刊批評其他雜文を除く）　○印は文語體散文

年月		所載紙
一八。三	○竪琴草紙	我樂多文庫
一八。六	○娯目奇語	我樂多文庫
一八・六	○白劣亭記	我樂多文庫
一八・九	○二幅對　美少年手姿（わかしゆすがた）	我樂多文庫
一八。九	○時文の弊　○三題噺　○改號披露	我樂多文庫
一九・八	新體詞選	香雲書屋
一九。一〇	新體詞華少年姿	
一九・一一	嘲戒小說天狗	我樂多文庫
一九・一一	演劇改良會	我樂多文庫
二〇。一	○質屋　庫開	我樂多文庫
二〇・六	○茶店開創の告條	我樂多文庫
（二〇・未詳	賈金闢石）	
二〇・自七至一〇	風琴調一節（未完）	以良都女
二〇。自七至八	迷の淵（韻）	以良都女
二〇・自九至一二	じよあん　だあく（韻）	以良都女
二〇・自一〇至二一・二	ふくさ包み	以良都女
二〇・自一〇至二一・二	○まあがれつと	以良都女
二〇。自一一至一二	武藏野	讀賣新聞
二〇。一二	花の茨茨の花	我樂多文庫
二一・一	仇を恩	以良都女
二一・一	初春の淵（韻）	以良都女
二一・一	はるのあけぼの（韻）	以良都女
二一・二	新年の唱歌（韻）	以良都女
二一・二	春の遠山（韻）	以良都女
二一・二	鼠おとし	以良都女
二一・自二至翌三	言文一致論概略	學海之指針
二一・自三至二二・一	空行く月	以良都女

二一・三　溝渠の歌(韻)　以良都女
二一・三　花廿五首(韻)　以良都女
二一・自五　情詩人(未完)　我樂多文庫
二一・五　若葉の月三曲(韻)　以良都女
二一・五　沈思(韻)　以良都女
二一・自五至八　正本はむれつと(未完)　以良都女
二一・五　花の雲(唱歌譜付)　以良都女
二一・六　さすがに雙紙　女學雜誌
二一・六　和歌數首及び第十回東京金蘭會唱歌(韻)　以良都女
二一・七　おなじこゝろを(韻)　以良都女
二一・七　蓮(韻)　以良都女
二一・七　こども(韻)　以良都女
二一・七　新作唱歌(譜付)　以良都女
二一・八　夏木立初篇　籠の俘囚、柿山伏、玉屋の壓、茨の花、仇を恩、武藏野を含む。
二一・八　はからず重き病にかゝりて打臥したるまゝ枕あがらず(韻)　以良都女
二一・八　歎の一枝　以良都女
二一・八　ともしらが(譜付)　以良都女
二一・八　夢(韻)　女學雜誌
二一・九　日本俗語文法論の内、形容詞及び副詞三段變化の諸定則　學海之指針
二一・九　花のかをり(韻)　以良都女
二一・一〇　病後の吟(韻)　以良都女
二一・自一〇　花車　都の花
二一・一一　長歌改良論を讀んで　讀賣新聞
二一・一二　ぬれごろも初篇
二一・一二　阿新丸　日本演藝矯風會雜誌
二二・一　花少女(韻)　以良都女
二二・一　金扣鈕一粒(未完)　都の花
二二・一　蝴蝶　國民之友
二二・一　國民之友三拾八號附錄の挿畫

	に就て	國民之友
二三・一	枕草子解釋	以良都女
二三・二	二月十一日憲法發布(韻)	國民之友及び以良都女
二三・二	蝴蝶及び蝴蝶の圖に就き學海先生と漣山山人の評	國民之友
二三・二	歐外漁史と三木竹二兩位	讀賣新聞
二三・二	國の花	都の花
二三・二	源氏物語桐壺の一部解釋	以良都女
二三・二	人おどかし	文藝倶樂部(京都)
二三・三	此の子(未完)	都の花
二三・三	明治唱歌第二集批評	國民之友
二三・三	幼稚の曲批評	國民之友
二三・三	夜の霧(韻)	以良都女
二三・三	つゝましさ(譜付)	以良都女
二三・三	又ぞうの大炊殿	讀賣新聞
二三・五	長久菖草	都の花
二三・五	あるのん物語	女學雜誌
二三・六	わいるどむ'あほゞる	都の花
二三・七	いちご姫(二十五年二月單行本にて出づ)	都の花
二三・七	しぐれ男	都新聞
二三・八	譯詩其他	以良都女
二三・自八至翌九	日本俗語文法論	國民之友
二三・九	鏡花影	國のもとゐ
二三・九	唱歌作法	以良都女
二三・九	しるれる作野邊おくりの歌解	以良都女
二三・一〇	智眠り愚覺む	國民之友
二三・自一〇至翌一一	まつのしたつゆ	以良都女
二三・一〇	素人洋食	讀賣新聞
二三・一一	古歌水月晩來批評	以良都女
二三・一一	世は無盡(韻)	以良都女
二三・一一	十津川人の移住を聞きて望む處あり(韻)	以良都女
二三・一一	猥褻と德川文學	以良都女

二二・一一	即興祝意(韻)	以良都女
二二・一一	那須與一(韻)	以良都女
二二・一一	紅葉(韻)	以良都女
二二・一一	老梟月に叫ぶ圖(韻)	以良都女
二二・自一二至二三・一	文と語調との關係	以良都女
二三・一	未見の友磊落子におくる唱歌(韻)	以良都女
二三・一	日本韻文に就て學者が工夫すべき箇條	以良都女
二三・自一至翌二	舊幕府の頃の監獄	以良都女
二三・一	石橋忍月君の示教に對して	柵草紙
二三・一	醉沈香(韻)	國民之友
二三・二	韻語の品格	以良都女
二三・二	君よりほかは(韻)	以良都女
二三・三	紅墻記	以良都女
二三・四	つぼすみれ(韻)	國民之友
二三・五	吾吾の言文一致體	柵草紙
二三・自五至七	炭ぐろ	以良都女
二三・五	韻文の目的	改進新聞
二三・六	言文一致體を學ぶ心得	以良都女
二三・七	賴朝の墓	以良都女
二三・自七至九	戸隱山紀行	以良都女
二三・八	高尾山紀行(佐々木信綱と合作)	以良都女
二三・自二至九	明治文壇叢話	改進新聞
二三・自二至九	人よし男	改進新聞
二三・九	日本韻文に對する放任主義	國民之友
二三・九	沖(韻)	以良都女
二三・九	貧(韻)	以良都女
二三・九	庭前の女郎花風にもまれて前後狼藉(韻)	以良都女
二三・一〇	大雨総に群馬埼玉の産を没す(韻)	以良都女
二三・自一〇至二四・一	日本韻文論	國民之友
二三・一〇	齋祝歌	女學雜誌
二三・一〇	嫁入仕度教師三昧	新作十二番

二三・一〇	葛の裏葉	改進新聞附錄文庫(單行本にて出づ)
二三・一〇	腕だめし	都の花
	(三十年博文館袖珍小說十一篇として發行)	
二三・一一	美天狗氏に	柵草紙
二三・一一	言文一致は昔からある	以良都女
二三・一一	桂川鵜飼の圖(韻)	以良都女
二四・一	さてもこの世の樂しさよ(韻)	國民之友
二四・一	元旦口號	以良都女
二四・自一至二	燈前小話	以良都女
二四・二	駒物語	以良都女
二四・二	其儘の花(韻)	以良都女
二四・二	譯韻文二種	以良都女
二四・三	五七と七五(雲峰氏へ)	以良都女
二四・自三至八	大恥辱(未完)	都の花
二四・三	やたら縞(誠に憂世、橫澤城、まつのしたつゆを含む)	聚芳十種
二四・四	猿面冠者	文學世界
二四・(七?)	雨の日くらし	少年文學第五篇
二四・自五至六	山の翁(韻)	國民之友
二四・五	ろうまにあ軍歌(韻)	以良都女
二四・六	韻文作法指針	以良都女
二四・七	夏の貧家(韻)	國民之友
二四・七	雪折竹	國民新聞
二四・七	盆の日記	國民新聞
二四・七	外山博士の「忘れがたみ」	國民新聞
二四・八	これが社會か、みみすばれ	國民新聞
二四・八	函根紀行通信	國民新聞
二四・八	青年唱歌集第一編第二編	
二四・九	思出草	國民新聞
二四・自九至一二	千里駿馬之助	國民新聞
二四・一〇	魔王來(沙翁集中の一節)(韻)	國民新聞
二四・一〇	親を懷ひて	國民新聞
二四・一〇	古今書林	國民新聞

二四・一〇	白玉蘭(別名壯士)	國民新聞
二四・一一	仰天子の都入	國民新聞
二四・一一	丸二ツ引新太平記	國民新聞
二四・自一一至翌九	兜菊	都の花
二四・一二	千里駿馬之助終局について讀者諸君へ	國民新聞
二四・一二	盜賊秘事	
二四・一二	園の二葉	嵩山堂
	葛のうら葉	嵩山堂
二四・？	酉の市	春陽堂
二五・自一至五	都門雜興	國民新聞
二五・二	韻文句讀法に就き歐外雲峰兩氏の説	國民新聞
二五・二	「藤の一本」と「落葉」	國民新聞
二五・二	水仙女(韻)	國民之友
二五・四	田舍聖者(韻)	國民新聞
二五・四	鎌倉小雛失明恨(韻)	國民新聞
二五・五	懺悔熊谷(韻)	國民新聞
二五・自六至翌七	日本辭書編纂法私見	國民新聞
二五・六	日本宮內粧飾法	
二五・七	日本大辭典(一〇)(翌年十二月まで)	
二五・一一	無名姫	都の花
二六・四	雛の歌	三籟
二六・六	初夏	筆戰場
二六・七	萬國人名辭書(二)	
二六・八	魔界天女(韻)	三籟
二六・一二	村上義光錦旗風(玉堂恨話美人禪、忠烈百錬鐵および達磨を含む)	
二六・一二	日本地名全辭書	
二七・一	みゝずばれ(雪折竹、田舍聖者、大龍王、鎌倉小雛失明恨、古切手、くされ緣、戸隱山紀行、鴉の道行、都門雜興等を含む)	
二七・自一至四	梨園の內秘	早稻田文學
二七・五	光源氏寢覺睦言	春夏秋冬

二八・四	阿千代	文藝倶樂部
二八・六	夜鶯曲（韻文調）	文藝倶樂部
二八・八	脚本夢幻日記	歌舞伎
二八・一一	鰻旦那	文藝倶樂部
二八・一一	猿樂師園源助	少年世界
二九・二	峯の殘月（稻舟合作）	文藝倶樂部
二九・二	俠醫（未發表）	
二九・三	若白髮	文藝倶樂部
二九・三	古根	太陽
二九・七	しつかり持て	文藝倶樂部
二九・八	後迺殘月	文藝倶樂部
二九・八	しゞみうり	太陽
二九・九	負傷兵	世界の日本
	（三一年明治小說集中ニ入ル）	
二九・一〇	里見元勝	文藝倶樂部
二九・一一	いのり首	文藝倶樂部
二九・一一	元老排斥	世界の日本

二九・一一	武者氣（零紅、僂丈夫をも含む）	
三〇・一	閻魔地藏	國民之友
三〇・一	魔界天女	やまと琴
三〇・二	たかせ川	文藝倶樂部
三〇・二	白日鬼	世界の日本
三〇・三	俠男兒（天野屋利兵衛小櫻鎧之助を含む）	
三〇・三	好義人	新小說
三〇・四	惡の善	文藝倶樂部
	（小說八家選）	
三〇・四	可憐狂	新小說
	（九月單行）	
三〇・四	孫右衛門	文藝倶樂部
三〇・四	馬丁仙吉	太陽
三〇・五	小杉直茂	新作文庫
三〇・六	嗚呼廣丙號	新小說
三〇・七	群虎	新作文庫
三〇・八	ばけぐすり	新小說

三〇・九	若葉の露	文藝俱樂部
三〇・九	絶絃琴	國民之友
三〇・九	日本淨瑠璃叢書（近松評註）	
三〇・一〇	夕紅葉	やまと新聞
三〇・一二	仁不仁	世界の日本
三一・四	迷耶悟乎	太陽
三一・五	できごころ	文藝俱樂部
三一・九	帝國伊呂波節用大全	
三一・九	磯千鳥	文藝俱樂部
三一・一二	妻琴	太陽
三二・自一至二	をさなき昔	中學新誌
三二・六	帝國海軍	太陽
三二・七	美文話法	
三二・八	美人詞體衣香扇影	
三二・九	すとらいき	國民新聞
三二・自九至一二	逆雨順風	國民新聞
三二・一二	毒筆新聞	伽羅文庫
三三・一	斷腸錄	
三三・一	恩が仇	太平洋
三三・一	三千號の配達夫	國民新聞
三三・一	御笑ひ艸（哄笑子編美妙補遺）	
三三・自一至三	第二逆雨順風	國民新聞
三三・二	義氣の義三	少年世界
三三・三	佛教格言集	
三三・四	決鬪	太陽
三三・五	臣民の情	國民新聞
三三・自五至六	三動物の特質	國民新聞
三三・七	陛下は神	國民新聞
三三・七	子だから	國民新聞
三三・七	泥中蓮	國民新聞
三三・七	刺客	國民新聞
三三・七	適茶	國民新聞
三三・八	無聊無賴的	國民新聞
三三・八	小夜がたり	國民新聞

三三・八	城内の公使	國民新聞
三三・八	排外熱	國民新聞
三三・九	仇が情	東洋戰爭實記
三三・九	小夜がたり（はきよせ）	國民新聞
三三・九	小夜がたり（孝行）	國民新聞
三三・九	小夜がたり（妙藥）	國民新聞
三三・一〇	主光南下	東洋戰爭實記
三三・一〇	小夜がたり（星）	國民新聞
三三・一一	瀧の川の紅葉と江戸時代風俗人形	國民新聞
三三・一二	死刑四の懺悔	太陽
三三・一二	小夜がたり（愉快なる物事）	國民新聞
三三・一二	小夜がたり（鞴、大慾は無慾、不可抗的、猫啼、以上四目次には署名なし）	國民新聞
三四・一	赤舊若	國民新聞
三四・自三至五	わが妻子	國民新聞
三四・自三至翌四	言文一致會修正の「悔みの文」	國民新聞
三四・自八至翌九	闇の岩むら（未完）	國民新聞
三四・九	蜘蛛の巣（寓言）	國民新聞
三四・自一〇至翌二	言文一致文例（四）	國民新聞
三四・一二	熟語大辭典	
三五・一	女装の探偵上下	
三五・二	言文一致文例（四）	
三五・五	言文一致作例	
三五・八	桃色絹	
三五・九	あぎなるど前後	
三五・一〇	人鬼	
三五・一〇	新體詩歌作法	
三五・一一	評釋博多小女郎浪枕	
三五・一二	漢語故諺熟語大辭林	
三五・一二	一刹那	文藝界
三五・一二	旗か命か、ゐねむり、竹の音、露人の夢	日出國新聞
三六・一	新年海（韻）	日出國新聞

三六・一	處世歌(懸賞)	萬朝報
三六・一	兎	日出國新聞
三六・一	貧の靈光	人民新聞
三六・一	無文の時代	日出國新聞
三六・一	ペストの鼠　附　韻文	人民新聞
三六・一	たから舟(韻)	日出國新聞
三六・一	首持參のアギナルド	人民新聞
三六・一	笊か力笛(韻)	日出國新聞
三六・一	國語調査委員會の方針	人民新聞
三六・一	手袋の流行	日出國新聞
三六・一	虎變豹變	人民新聞
三六・一	漁隊の遠征	
三六・一	潤野炭山の一慘事	人民新聞
三六・二	かきあつめ	人民新聞
三六・二	坪內文學博士校閲の銘有る拙劣文字	人民新聞
三六・自二至四	色か香かいづれの梅か	日出國新聞
三六・二	ポンチ繪の取締	日出國新聞
三六・二	讀書嫌ひ	日出國新聞
三六・二	冷談なる讀書	日出國新聞
三六・二	公使大使	日出國新聞
三六・三	戀ひの年	日出國新聞
三六・自三至五	阿修羅道	人民新聞
三六・三	讀書嫌ひの結果	日出國新聞
三六・三	ゐなかぶり二則	日出國新聞
三六・四	春雨(韻)	日出國新聞
三六・四	春夜(韻)	日出國新聞
三六・四	氣車の日日	日出國新聞
三六・四	御婦人殿下	
三六・五	鐵路の菫菜(韻)	日出國新聞
三六・五	西王母(韻文)	人民新聞
三六・五	唯同情	人民新聞
二六・五	當世何とか氣質	人民新聞
三六・五	時代物の掲載について	日出國新聞

三六・五	金忠輔解題	日出國新聞
三六・五	店頭の時計	日出國新聞
三六・自五至九	金忠輔	日出國新聞
	(三七年一月單行)	
三六・五	有害なる玩具	日出國新聞
三六・五	同情の缺乏	日出國新聞
三六・自六至七月二日	阿修羅道(後篇)	人民新聞
	(前後合せて吁工女吁薄命と題す)	
三六・六	家庭に於ける平等主義	日出國新聞
三六・自七至翌八	にせのちぎり	人民新聞
三六・七	草市の老女	人民新聞
三六・七	噫釣堀	人民新聞
三六・八	螢(韻)	日出國新聞
三六・七	活地藏	人民新聞
三六・八	吁後家吁不幸	人民新聞
三六・八	下駄の歯(韻)	日出國新聞
三六・八	夏の蟲	日出國新聞
三六・八	世な怨みそ(韻)	日出國新聞
三六・八	僞の罪(韻)	日出國新聞
三六・八	自然の慰安(韻)	日出國新聞
三六・八	車か水か(韻)	日出國新聞
三六・八	つくり花(韻)	日出國新聞
三六・八	團扇の風(韻)	日出國新聞
三六・八	いり豆(韻)	日出國新聞
三六・九	のびし朝顔	日出國新聞
三六・九	枯れし花	日出國新聞
三六・九	よその力	日出國新聞
三六・九	女の髯(韻)	日出國新聞
三六・九	人心の弱點(韻)	日出國新聞
三六・自九至一一	羽ぬけ鳥	日出國新聞
三六・一〇	血の涙	
三六・一〇	琵琶の遠音	日出國新聞
三六・自一一至一二	さびかたな(未完)	日出國新聞
三七・一	巖上松(和歌)	日出國新聞

三七・一	濱松城(韻)	日出國新聞	三七・八	新聞嶺の一刹那	やまと新聞
三七・一	義士復讐事件	日出國新聞	三七・一二	潜熱	やまと新聞
三七・一	性空上人	文藝倶樂部	三七・一二	猿と駝鳥	
	定期増刊號「ひと昔」		三八・二	勢至丸	文藝倶樂部
三七・自二至翌三	熊谷直實	日出國新聞		世界名數辭典	
三七・二	民のこゑ(韻)	日出國新聞	三八・一〇	六千號祝賀	やまと新聞
三七・二	金忠輔		三八・一一	破壞主義	文藝倶樂部
三七・四	人中の婦人	日出國新聞	三九・六	四郎高綱	文藝倶樂部
三七・四	一刻の瞥見	日出國新聞	四〇・六	姫百合	文藝倶樂部
三七・四	露の命	文藝會		「ふた昔」	
三七・五	犬博士	文藝倶樂部	四〇・一一	言文一致の犠牲	
三七・自七至八	劍彈餘響(血染の烟草)	やまと新聞	四一・六	開國五十年唱歌	文章世界
三七・七	劍彈餘響(旅順の士氣)	やまと新聞	四一・一〇	二郎經高	文藝倶樂部
三七・七	劍彈餘響(旅順の敵前、一中		四一・一〇	阪東武者	信濃毎日
	尉の快談)	やまと新聞	四二・一	三郎盛綱	信濃毎日
三七・七	劍彈餘響(又も中尉の快談)	やまと新聞	四二・二	實盛の一半面	百華
三七・八	イグナ、モグロフ	やまと新聞	四二・五	小宰相局	新小説

四二・八　六郎景澄　文藝倶樂部
四二・一〇　幽靈會　珍世界
四二・一一　滑稽妙な術
四三・二　妙なれ
四三・三　へそくり　文藝倶樂部
四三・四　一滴露(隨筆)　文藝倶樂部
四三・六　平重衡　文藝倶樂部
四三・六　二人女
四三・九　妙な夫婦
四三・一〇　妙な依頼
四三・一一　染小袖　文藝倶樂部
四三・一二　平清盛
四四・八　太郎定綱　美妙叢書中

尚美妙集(四三年一二月)美妙叢書(四四年八月)等の短篇集あれども内容は殆んど再錄なり。

四五・五　大辭典　上・下
昭和九年四月　祇王

昭和十年十月二十日印刷　美妙選集（全二卷）
昭和十年十月二十五日發行　（下卷）定價金五圓

限定版　發行部數　三百五十部

內第　　號



著作權者　嗣子　山田武彥

發行者　京都市上京區廣小路寺町東　立命館出版部
代表者　竹上孝太郎

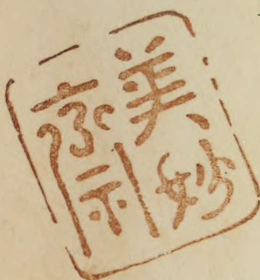
印刷者　京都市上京區廣小路寺町東　竹上孝太郎

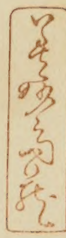
發行所　京都市上京區廣小路寺町東（振替大阪二六九四四番）
東京市京橋區銀座西二ノ一（振替東京七五三六二番）
立命館出版部

〔立命館出版部印刷〕



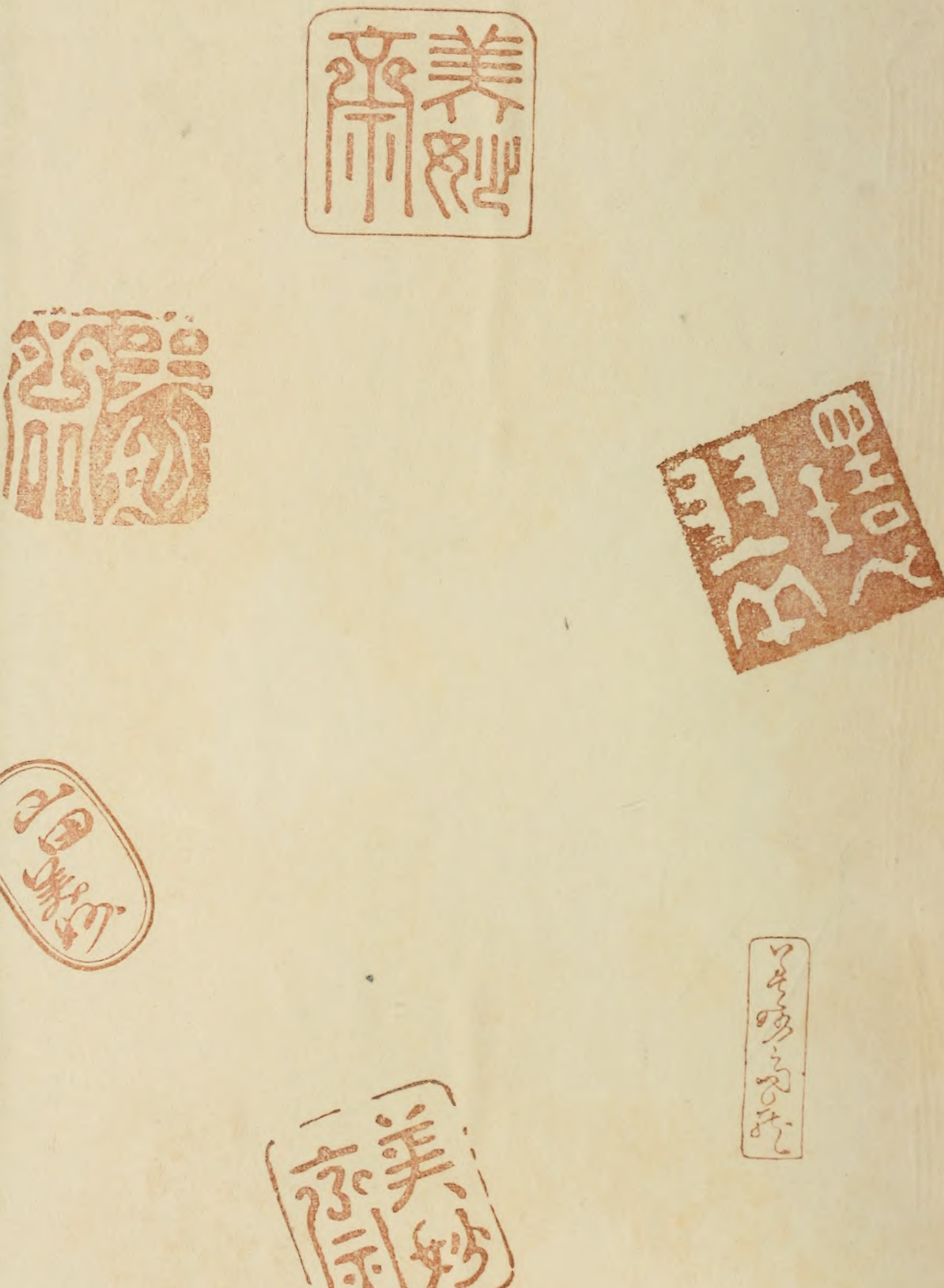











美妙斎